



DS      Akita sōsho  
895  
A6A64  
v.7

East  
Asiatic  
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

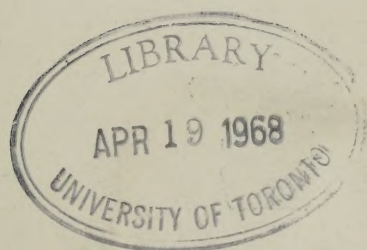
---



秋田叢書

第七卷





DS  
895  
A6A64  
V.7

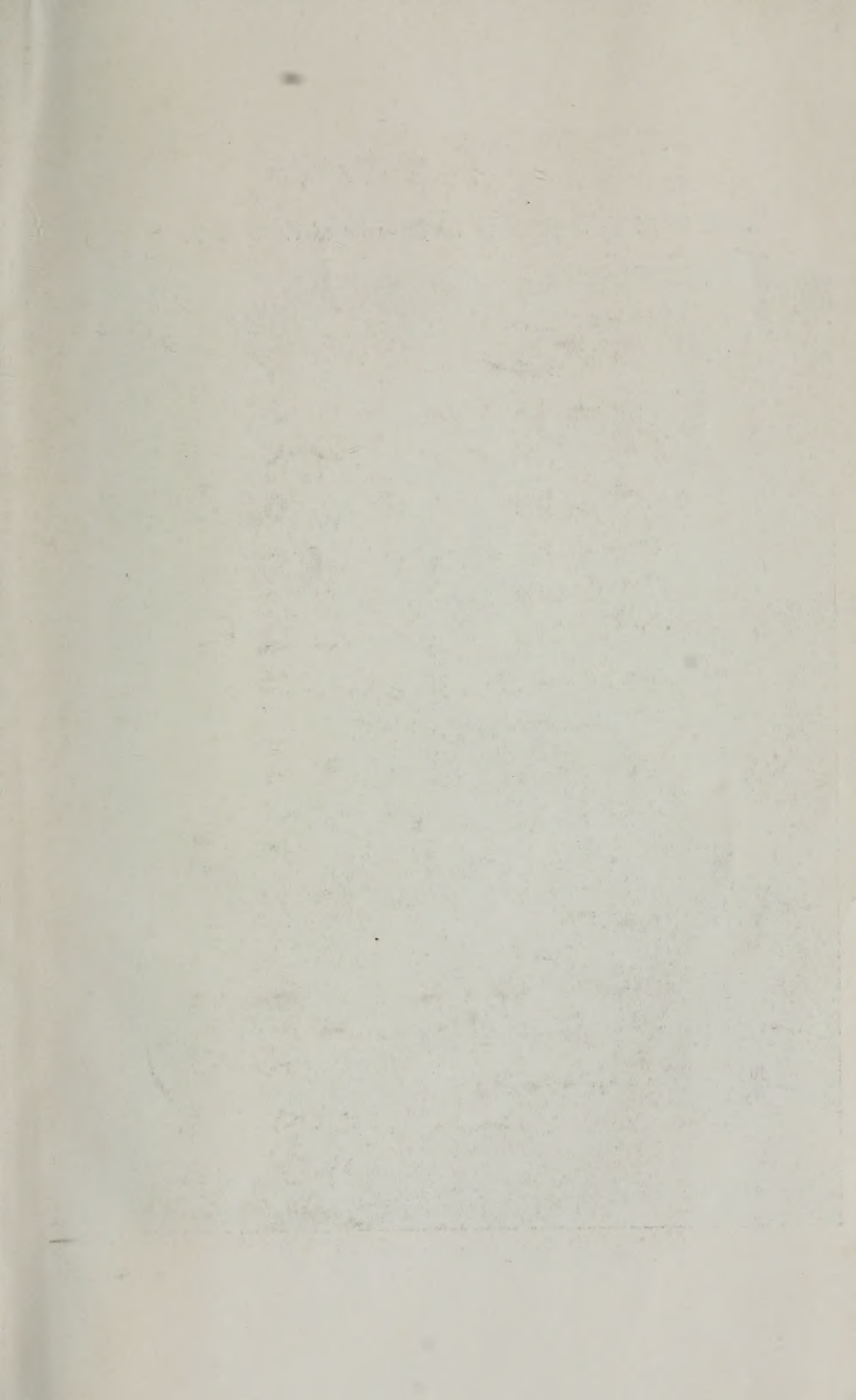


實曆事件當時の秋田藩主佐竹義明公繪像



(秋田外天德寺藏)







大友對馬吉言宛の菅江眞澄翁書

幸便に  
不勝  
何  
不勝  
幸便に  
長林  
隨  
生  
一  
眼  
油  
年  
眼  
東  
大友對馬  
吉言

(藏氏郎三武友大村木澤八郡鹿平)

幸便を以て奉一輪候。向暑之砌に御座候得共  
不勝之天氣つゝきにてももしろからぬ御事に  
御座候。其御地御館中様たれへさまも益御  
榮へ奉珍賀候。こなた小事はじめ高階氏長  
秋廣見みなく随分く相かわらぬ御事乍恐  
廣見よりも御傳聲申上候。

一此程御眼病いかゞ御入候や。もしまだ相  
かはらず候はゞあらひ藥仰下され度候。  
一此藥は手制の油藥にて大人小人口中に入り  
候てもよろしく候。眼のたゞれなど御ぬり可  
然候。  
來月御上府之砌ゆるく巨細可申述候。早々  
あなへかしこ。

四月十六日

菅江眞澄  
大友對馬様

# 秋田叢書第七卷 目次

## 解題

秋田治亂記——鷹の爪——長野先生夜話集——雪出羽路追加

## 秋田治亂記

## 鷹の爪

## 長野先生夜話集

## 雪出羽道平鹿郡(下)

## 卷十一

醍醐村	一五	馬鞍村	一八三
梨木羽場村	一六	新藤柳田村	一三八
石成村	一七	外目村	一九

金壁編 三五  
中安主典編 三五

塙守約編 八

菅江眞澄著 一五七

一五七



下樋口村	二五〇	客殿薊谷地村	二五九
深間内村	二五四	上樋口村	二六一
上吉田村	二五五		

卷十一 ..... 二六五

大屋寺内邑	二六六	上畱村	三〇三
大屋新町村	二六九	關根村	三二一
婦氣大堤邑	二八八	三原新田村	三二二
安田邑	二九一	明永野邑	三二三
赤坂邑	二九一	見入野新田邑	三三四
三本柳邑	二九四	杉澤邑	三二六
八幡邑	二九五	杉目村	三二九
靜町村	三〇〇	横手前郷邑	三三〇
上八丁邑	三〇〇	大澤邑	三三七

卷十二 ..... 三四九

横手郷	三四九	圓淨寺	四〇七
華嚴院	三九一	大乘院	四〇八
法泉寺	三九九	正平寺	四二二
西誓寺	四〇一		

春光寺	四三	正法寺	四三八
光專寺	四三五	淨光寺	四四三
西光院	四三八	無量壽院	四四四
光明寺	四三七	山崎念佛堂	四五一
桃雲寺	四三八		

## 卷十四 ..... 四五七

土淵邑	四五六	黑澤村	五〇八
平野澤郷	四七九	小松川邑	五〇九
筏村	四八六	大松川郷	五〇九
南郷邑	五〇二	丹波開邑	五二七
三又村	五〇五	山内脱漏	五六九

## 雪出羽路 平鹿郡(追加) ..... 五七七

## 口繪寫眞版

- ◇秋田藩主佐竹義明公繪像  
◇菅江眞澄翁書柬





解

題

# 秋田治亂記

一卷

校訂者 細谷 則理

一 この秋田治亂記は、佐竹家の奸臣等異圖ありしを、忠誠の義士等奮起して千辛萬苦の末、寶曆七年その奸徒を斥け、君家を泰山の安きに置いた顛末を記したものである。

一 この事件を記述せしもの數種あれども、或は故らに讀者の感興を惹くべく虚構の事を書き添へて小説化したり、或は奸徒を憎む餘りに人々の憎惡心を彌挑發すべく、彼等の邪惡なる言動を益々誇張して書きなしたり、或は奸徒を庇護し義士等を傷くべく書きひがめられたりなごして、冷靜に正確な事實を敘述したと思はれるものは殆んどない。唯この書は文章こそ稍暢達を缺けど、その筆不偏不黨にして公平を保ち、その記事最も正鵠を得たるものゝ如くである。之を諸家の記録に照し合せるに多く支梧を見ない。されば伊頭園茶話にも、「秋田治亂記といふは恭溫公の御うへの御事より書おめて、詞のかざりもなく誠に誠しげに見ゆ。」と評してある。故に本叢書に之を收録することゝした。

一 この書は久しく寫本にて世に行はれた事とて、各謄寫の際に書きたがひ／＼した爲であらうか、數本校檢するに往々彼此出入がある。故に今栗盛教育團の藏本を底本とし他の三四の本を對校して、その相違する所はよしと思はれるものを採つた。讀者之を諒せられよ。

## 鷹の爪 一卷

校訂者 深澤多市

本書は一名「秋田名家々譜」と稱し、古くから好事者に寫本を以て流傳したものである。編纂の所由は卷末に記してある。元來草體の寫本なるが故に魯魚焉馬の謬も多いやうである。而も編者の原本も得難いのは遺憾なことである。今横手町鈴木友彌氏所藏本を底本とし、これに秋田縣立圖書館本二種を參照校訂して本叢書に編輯したものであるが、尙誤謬は鮮くないと思ふ。後賢の訂正を希望する。

本書は文化十三年に記述したものであるから、その年代を最終として見るべきものである事は勿論である。此の頃は恰も藩の系圖が纏りかけた年代であるから、記述の時期がよかつたであらうと思はれる。

編者の一人金肇（原本肇とあるが誤字かと思はる）諱を道揚と謂ふ。藩の家老職にあつた人である。天保四年六月卒した。

同じ編者の一人たる中安主典諱を盛乗と謂ふ。同じく家老職にもなつた人で天保八年病氣の爲め退職した。

## 長野先生夜話集

一卷

校訂者 深澤 多市

昔久保田町の士坊長野町に小野寺道維といふ兵學者の老人があつた。克く古事を知り、好んで人々を談じた。其の弟子の塙守約といふ人古事の湮滅せんことを惜み、道維の語りしことを何くれとなく書き綴りて、題して長野先生夜話集といふもの此の書である。守約、文化四年の春の序文を録してある。故に本書は此の時代に成つたものであらう。守約は外に自分の記憶せる話題二十五項を繼ぎ足して都合百五十五項として居る。

本書は舊藩時代から好事者に珍重されたものであるが、誤字脱字も鮮くない。秋田縣立圖書館本と大館町栗盛教育團藏本とを對校して底本とした。

小野寺道維は主水と稱し又幼名玄翁ともいふ。舊横手城主の小野寺氏とは祖系を同じふする。道維、享保元年に生れ、長壽を保ちて文化二年八月九十を以て養老の宴に召さる。明和、安永の交藩の執政たりしことあり。



塙守約正吉と稱し塙守門の子である。仕へて大番組に入つた人である。

雪出羽路平鹿郡追加

一卷

校訂者 深澤 多市

國本 善治

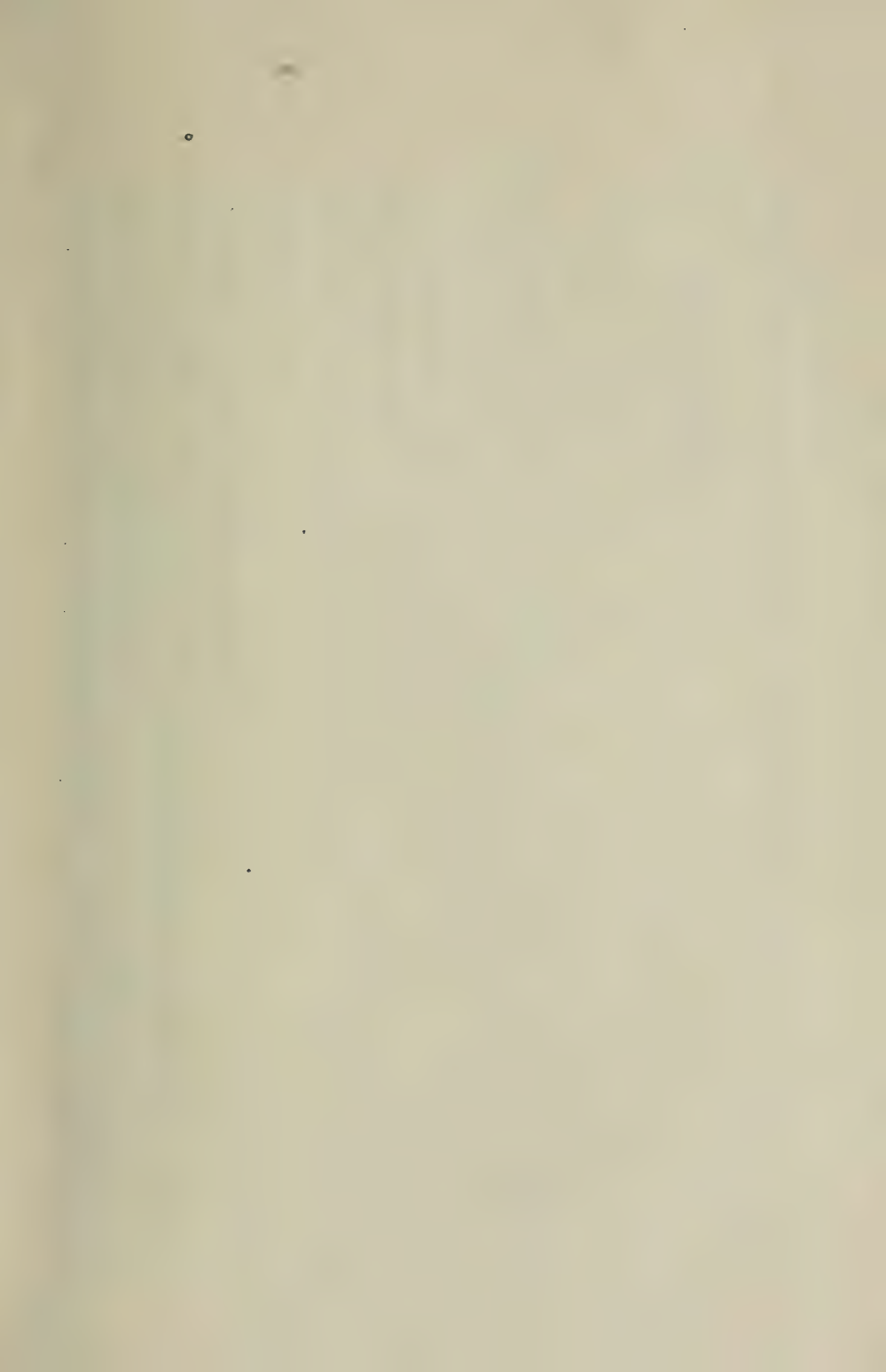
○雪出羽道平鹿郡十四卷に對しては本叢書第五卷に總括的に解説を附して置いた。然るに八澤木村保呂羽山の神職大友武三郎氏と談じて、偶々保呂羽山神社に關する記録、特に同神職守屋家の古記に據つた一卷が大友家に保存されて居ることが判つた。

○然るに又、本卷は紙數々十枚の一卷として製本されてあるが、何故か其の中から十三枚だけ除かれたことが判る。而もそれは製本後に除かれたものではなく、製本のときに既に除外されたものである事が明瞭である。

○さて、何が故に此の一卷から十數枚の記録を除かなければならなかつたか。又雪出羽道平鹿郡の中に此の一卷をも加へようとした最初の意圖を更へて、中途から此の一卷の發表を殊更に控へるに至つたのは何故であるか。今は全く不明である。

○云ふまでもなく此の追加篇一卷は守屋家古記録の輯録であるが、眞澄翁が是等の古記録系譜等に對

して處々の誤謬を擧げて論評し、或は各記録相互間の事實の符合しない相違點等を指摘してゐる。  
是等の點から、翁は此の一卷の發表を憚かつたのではなからうか。今は推察するにせざるめておく。  
○今大友氏の御好意により、全く豫想もせざりし一卷を雪出羽路平鹿郡の部に追加することを得たる  
は、本會々員と共に深く同氏に感謝する次第である。





秋  
田  
治  
亂  
記



# 秋田治亂記

## 秋田治亂記序

君は船、臣は水、水よく船を浮べ、水また船を覆す。只守べきは忠義の道、專おこのふべきは政道也、實に出羽國の太守佐竹右京大夫義局公と申は、往昔清和源氏八幡殿の御正統、元祖より今にいたるまで諸侯の位に居給ひて假にも列を失ひ給はず、當時十八大名の内にして、羽州半國を知行して肩をならべる人もなし。然るに先君義眞公早世し給ひて、分流、江戸御旗本大名同姓壹岐守殿御嫡子、求馬殿と申を後跡に立給ふ。官位四位の侍従に叙爵有りて、公方の繼目、入部の品、前代にかはらずして日出度くらさせ給ひける。御嫡子秀丸御曹子は右少將義峯公の御姫の御腹にて、幼なくましませどもおごなしく、仁義を備へましませば、上下よろこび居たりけり。さてこの御家筋と申は、昔常陸の國主にて武威隣國にならびなし。天正、永祿の頃關東大に亂れて、小身の城主、相州の北條、安房の里見、或は越後の上杉、

奥州の正宗に責られて大敵に勝かたく、連も叶はぬものならば、近代秀ての人に随んより、家筋と云ひ大祿といひ、佐竹の幕下にならんと縁を求め、思ひ／＼に常州へ使を立、旗本に屬しつゝ、皆本城に住居けり。慶長七年、大守は羽州へ取替ある。舊縁を捨す何れも相隨ひ秋田へ下り、客位に成りて居られける。御家代々の一門名字を穢さす、北、東、南、西とて、國の境に館をかまへ組下を手に付て、國の自然を相守る。一國の上下重く敬ひ申ける。扱、古への大名筋の面々を引渡し廻座と號し、連枝の一門、他家の輩十九人、廻座五十人、いづれも格儀別る有り。誠に無類の御家筋、中々いふにいとまなし。此時家老石塚孫太夫、岡本又太郎、此兩人は一門引渡也。并小瀬宇兵衛、大越甚右衛門、梅津外記、山方助八郎廻座役、右人々國の政事を勤むる也。近年諸國飢饉にて國の風俗衰へ、秋田も同じ風吹て國民困窮し、國主の御慈悲に漸々と命繋けるはかり也。前家老眞壁掃部助、小田野又八郎勤の内、國の逼迫詮方なく、奉行川又善左衛門、白土奥右衛門など語らひて、町人森本小兵衛他國を學び銀札を斟て、江戸表相叶ひ國中へ觸まはし、銀札一匁に正錢七十文に引替へし、收納、商賣ともに、札つかひ少しも違背のものあらば曲事ならんと、きびしさは中々云はんかたもなし。公政と申せとも紙札つかひの事なれば、誰引さぐるとはなけれども一日／＼と下直して、寶曆七年夏の頃銀札一匁に錢五歩に位下り、うりかふ直段はかはらねば、今指せまる國民の、銀札つかひて直さんたくみし知略、眞壁、小田野は首尾あしく、されとも出來した銀札のすべきやうなき、役人の工夫もたら／＼たらし込み、川又にくまぬ人もなし。今の如



くにあるならば、國の金銀幾程なく、錢は自然さうせ果ん。さやせんかくと評定衆、風に放れた沖津船、寄るかたわかぬ風情也。何となりなん此國と、上下民手をつかへ、大守の御下り待ばかりなり。

## 北、東、家老評議

銀札つかひ不用して、家中、百姓、町人、すべきやうなき世渡を聞く四家の御一門、角館佐竹圖書城下へ下り、東佐竹山城并石塚、岡本を始め、國にあり合ふ家老中へ内談ありけるは、近年田畠不熟して國民の極窮、隨て御家中も風俗衰へ、上も御物入續にて窮民の御救も思召様にも相成らず、御家中よりも永々の御借り高有りて困窮になり、上下の御益に成らんと斗意て銀札遣ひ被仰渡といへども、直段次第に下直になりて不通用。他國の風聞、其上江戸表へ相聞へ、銀札つかひ却て國のさはりと沙汰あらば、上の御爲以之外、戌の年より拵出來せる銀札の員數、町人、百姓にひきかへの正金錢を出させ正銀引替も不自由にて、商人船も秋田へ來らず、國の衰微なり。船の來ぬを幸に大坂へ役人をのぼせ、米引替に諸色を下し國中へも融通せず、銀札、正錢引かへの法を立るといへどもそれも城下ばかりにて、國中のたすけに成らぬと兩人聞およべり。悉皆御國の難澁にて、末々迎も無心元存する也。銀札本人川又善左衛門は御用あるとて江戸へ登り、それより大坂へ行となれば、跡は取知る人もなし。此上は役人を立、銀札の仕法を尋ねさせ、銀札、正錢の勘定を改め、國を救はんばかり事あらまほしきと申されける。家老

相談一決あり、平元茂助、太田内藏之丞兩人を、財用奉行銀札方兼役と申付らるゝ。兩人御請を申上、諸事に氣を付け心を賦り、御國をたすくる思ひ立、あつはれ國のたからやと、知るも知らぬもおしなめて、喰はぬ御めしに腹足りて、皆よろこばぬ人もなし。

### 野尻忠三郎反逆

此時に當りて希代の事は出来る。只一朝一夕の企にあらず、先君の御代にも思ひ立し事なれども、三徳を備へ給ふ賢君なれば、高威に恐れ時節をまつ。誠に世澆季に至り、君臣父子の道をうしのふ事、かなしみてもあまりあり。疎からぬ近習の者ども時々飲酒して打より、吾君の御尊、四家衆、當時家老役人の善惡を語り、是を肴に吞送る。高き賤しきおしなめて、世間の語る習ひ也。野尻忠三郎と申者、元來巧ありて智謀も人に優れれども、大番役して居たりけるが、何とか近習の人々を語ひ、家を發すの謀あらんと數年思案し居たりしが、或る時飲酒の列に加り人々の心を奪ひ申けるは、拙者儀は老物頭迄勤しに、不慮の難に逢て、今千人大番に成り勤るも身の不幸と存る也。各もいかなる身分に成り給ふも、明日も知れぬ奉公人。扱、御家中何れも御譜代にて水戸以來の御家筋、忠義を思ひ給はん人もあらし。御家は源家の嫡々、申も中々おろかなり。其御家中の我くも、御主の御家高かければ、江戸他所ごもにはゞひろし。爰に惣御家中の心にくきは、御四家一門座邊とぞ。先祖正しきを鼻にあげ、位たをれに

のさばつて、平士を何とも見ぬ顔し、慮外とかめを役に、東殿を飛打し生田目喜内、役を放され拙者並の大番役、拙者と大繩八郎右衛門は、小野岡市太夫殿え直狀付し咎連物頭役被召放、遠慮致候儀は各々にも御存知の筈。平士なれば迎、誰も晝夜の勤は座邊衆より莫大ならん。夜<sup>ル</sup>晝隙なくつとめても、平士極意は奉行、御用人、是さへ今のごとくにて鼻突く事は度々あり。大國近國に、か様の座持はなきと聞、勤功さへあれば小性よりも家老になる。彼<sup>レ</sup>を見是を聞時は、大番役して三日三夜、非番はあそぶ隙あきて能き事にては候へども、是は末々異亂の端ならん。家老、寺社方、番頭、器量に寄らぬ座邊役、何ぞ御思案有まいか、御同意ある成らば一工面して見申さん。いにしへ、いかなる公家殿上の流れ、大名筋の人々も、時に随ひ色々つとめても、右の通り事なれば、御用に立つものあるまじと、言葉をたくみに申ける。一座の面々、我<sup>レ</sup>も平士の果を案すれば貴公の説談其理あり、いか<sup>ハ</sup>はせんと申ける。野尻申けるは、先君の御代思ひ立かね候も折あらんと存するに、當君は御心よさにて家老役人に萬事をまかせ、御側の事は御用人、御膳番各々の、申され條にまかせらるゝと見得たり。いざ此時君に、北、東をはじめ一門座邊を讒を構へ御心を迷はせなば、君も御憤<sup>レ</sup>深くなり、北、東兩家は左右御一門頭、殊に當君の伯父達なれば、よもだまりはせまじ。それをとつくとのぼせつめ一門逆意と云ひならし、四家をはしめ、かしら立つ座持とも、種々の讒をつくし是等を亡すものならば、平士はどれも右の心底、此事後に顯はれば、殿をうしなひ若君を取立、一味の面々國を守り、秋田と江戸の拵様、忠左などへとつくご王面な

り申しおふせなば、願はすとも各々も御座持内邊の御家老、兩三人は御名字拜領若君の御後見、誰は何役加増何程、かれは何役相違有るまじと、手に取る様に私語さやげは各々うなづき、御前の事は我々拵申べし、貴公は江戸の忠左衛門へ被仰越、兩人此度の計略の大將に立給へと、密々合す胸の火の消る事もなき惡逆を、思ひ立つこそうたてけれ。根岸一郎右衛門、鈴木平藏申は、大國隣國に座持なきこそ理也、中頃の秀て大名、時の運によつて諸侯になりぬ、それは筋目の慥なる大名の流れはなきと知る。御國は公方様御次ての御家筋ゆへ、古大名衆も御幕下になられ、御當國にては御座持衆と稱しおかるゝ事も、しせんの時一方の大將にも立て給ふ人々ならん。われは元來御家中筋、いかなる御奉公つとむるも忠義に替る事はなし。重キ家筋の面々、家老、番頭勤めらるれば下々もおさまり申べし。御先君達の立おかれたる御作法を今時直す事かたし、其上國の亂のはし、とかく古法はよかるべし。大義を企て、しそんじては不忠の名を取り、子孫の果、いらぬものとぞ申ける。忠三郎始一座の面々以外に赤面し、忠三郎以前申通り、公家大名の流れも、落ればいやしき奉公もする。御先君達の御作法も、時のよろしきに隨ふこそ御喜悅あらん。御邊などの深思案に萬事道ゆく事ならず、人に隨はぬを狂人と云ふ。前度、忠三郎に座持の論を說せ尤も同意して、今更言はれぬ忠言、侍に似合ぬと皆一同に申ける。一味連判大越甚右衛門、梅津外記、山方助八郎、御用人小野崎源左衛門、大久保東市、小野崎造酒、大嶋左仲、鈴木平藏、御膳番信太彌右衛門、三枝仲、根岸市郎右衛門、軍法者野尻忠三郎、江戸の大將那珂忠左衛門、其外密



談の事なれば、與力のものは知れざりけり。此忠左衛門は大館より養子にゆき、圓明院義峯公の御時次第に召立られ御用人としてはばきゝにて、腰をかゝめぬ人もなし。先君義眞公は、人の好惡見さらせ給ふ君なれば、忠左衛門思召によからざるによりて外様財用奉行になし給ひ、大坂へ五年詰して下る筈なりしが、いかにしても國元の無首尾仕方なく、江戸へ下り、松平隠岐守の御臺様は圓明院公の御姫なれば、是へ色々の手を碎き御付人願上奥附になり、愛宕下、他の御屋鋪に有りながら、七間丁の御やしきへ御見舞御用あると唱させ日々來り、兩役へ件の大義を心にいれられ、うへ方の役人迄諛て、忠左衛門にてなければならぬほど手一はいに拵ける。諸藝口才人にすぐれしものゆへに、おごりにはこり、あらぬ巧をしたりける。神罰因果を知らざるは文盲にもおごりなん。

### 大守江戸御參府、附眞壁謀言事

大守寶曆五年亥の五月御入部有つて、翌年御參府の御用意あり。野尻忠三郎、山方助八郎へ行て、兼て謀計御國にても成難し。今年江戸へ御家老に、岡本又太郎殿御供の筈なれども病身の沙汰あり、是を幸に甚右衛門殿御登り候ひ、御側小野崎源左衛門、同造酒、信太彌右衛門、大久保東市、大嶋佐仲、三枝仲御供登り候ひ、御留主には貴公と外記殿、宇兵衛殿、石塚殿、岡本殿、御側鈴木平藏、根岸市郎右衛門殘さるべし。石塚、岡本兩人を上手を以てはびこらせ、殘御三人は、同意の樣にもてなし心中殘らす打あかさ

せ、あらぬ事を書くろひ江戸へも内奏し給ふべし。某か謀計にて圖に落し申べし。貴公へ多年軍學を傳へ師弟の事にて候へば、萬事御まかせ候へ、謀略を以て破り申さんと委細密談すれば、山方は淺智の人なれば野尻が辯説に魂をぬかれ、即て心中替りける。數代當家は御家老筋、座邊と云ひ祿共に人におさらぬ家筋の、か様の事に與するも天魔波旬の所爲か、此家亡ぶる先表と、後にぞおもひ知られる。大守、御參府以前家老、役人召れ、戊亥兩年の凶作にて國民及困窮に、飢人處々に相見へる段風聞第一苦勞に思ひ、銀札通用につき、士民共に豐饒に相成<sup>ル</sup>段かねて面々申上る、此節窮民の相救專要なり。上にも御公務之外萬端儉約になされ、道中ともに質素に相計意候様に役人共に申付へきこの御一言、誠に國主の御慈悲、難有思召也。眞壁掃部助申上るは、上意の如く、近來覺なき飢饉に御座候。御國中の穀物相改め、不足之分は他國より買入候て士民飢渴仕らざるやうに計意可申候。其上銀札通用あらんに、別て御指支にも相みへず候。か様之時御備之爲に取立候銀札に御座候故、おそれながら少しも御苦勞被爲成まじく候。同役共、并銀札方頭役川又善左衛門別て精細に取擔候事故、明年の御下國には御國中飢人も無之、目出度御歸城奉待候と事もなげに申ける。是はと亂立たる國の騷動、疊の上の辯説、上はさすがに御大名、さもあらんと思召、御國を發駕ましゝける。扨其後御城下町人の家藏に檢使足輕押込て、銀錢をあらため符印して預<sup>ッ</sup>置、銀札と追日引替させらるゝ。領内六郡、城下の外、給人、寺院、百姓まで米吟味と號し、仙北へ川又善左衛門、下筋へ高垣兵左衛門并檢使足輕引連れて、異儀もいはせず

家土藏點檢させしかば、やれ藏搜、闕所よと、上下萬民愁眉せしは前代未聞の事共也。扱、有米調一人に一日三合扶持と定め、餘米は直段をやすく取上<sup>ッ</sup>て國中へ配分あり、百姓扶助と申せども米は次第に高直し、三合扶持は事足らず、七月頃は白米一升正錢九十文、銀札にては不通用、飢人數を知らず、餓死するもの巷にみち、哀なりし事共也。是皆上のしらざる所にて、奸佞の家老、役人の所爲なりけり。此事江戸へ聞得けるにや御直目付の下り、餓死のものを聞て直に江戸へ歸りける。其年春、惣家中へ返し銀とて、高百石に銀札百日の割合にて下し給ふと眞壁は申渡せども、七月迄に沙汰もなし。いかなるものかしたりけん一首の狂歌に、

春すぎて夏にもなれと銀札をくるくくで秋風ぞ吹く。

眞壁は君を心のまゝにすかし奉る。されどもその年も大かたならぬ不作にて、國中の毛見にて高二萬石餘の捨高、隨て收納の銀札藏にみち、他國へ渡すは正金銀、次第に金銀不足になる。智恵才覺にもゆかぬものは金銀にて、三ヶの津も埒明すべき手段もあらざれば、國中の商米を直段をさため、残りなく御藏買上げと觸渡し、百姓には銀札を渡し、米來春大坂へ登せ正銀にて賣渡し、諸色のものは直下し、上より商賣なさるべし。町人、百姓難儀に及ぶとも時の首尾をあわせんと、一味の同役、奉行までこつくと是を吞込せ、米坐を立、直段をやすく買上んと決談す。此事江戸へ大目付より披露ある。米坐の事は宜からざる事なれ共、直段を高く買上げ諸民の愁なきやうにはからふべしと、赤石藤左衛門を下し給

ふ。一向取受す、何分財用相辨し、上の御勤にさへかゝわらねば、御綺いろりにてはなし。江戸にて御勝手の御計なさせ申せば、此方處存次第と上を欺き、傍若無人の仕方也。御家中數多しと申せども、大身は祿を重んじ云もせず、小身は聞ん事を恐れ、眞壁が存分にまかせける。誠に借上阿黨は國賊なりとは、かやうの事をや申すらん。江戸にて此事聞召、前代未聞の不届もの、急速に刑罰なくは亂國の基なるべしと、三枝仲、小野崎造酒を被指下、掃部助、本知の内二百石被召上生涯の塾居、小田野又八郎役義被召放遠慮、赤石藤左衛門、表裏の致方に付改易仰付らるゝ。はやくもめぐる天罰と、貴賤おしなめて、にくまぬものはなかりけり。

### 江戸秋田讒奏、并梅津外記返り忠之事

大守御參府ましゝて御作法の御勤首尾好、義真公の御臺清徳院殿始御一門方へ時々御見舞、名におふ江戸の繁榮に、月日の過るを忘らるゝ。那珂忠左衛門を始御側の面々、兼て巧し事なれば品々にとりもてなし、御金の入用あるやうに秋田へも風聞させける。御側の面々、上の御心よきを欺き、江戸勤には種々の奢り女色にふけり、御用金をつかひ込み仕方なきにより、云あはぬ御寶藏の金の茶釜を取出し拂ものになしけるが、一味のものにも配分し、此度大望の用意にせんと議しけるに、求め給ふ御大名より内々相知れ、いよゝ大義を思ひ立。寶曆七年の春の頃、國元にて北、東、國民救の評議壹岐守殿へ以



書翰、處存之趣家老役人平元茂助熟談の一通、飛脚を以指越候様に山方助八郎に相渡す。此時野尻、謀略の圖に當りぬと内談し、右の書札を開封し政事の訴書を打消し、大守の御身持宜しからざる段秋田へも風聞有之、依て御下着ならば四家、老中相談之上、御殿圍になさせ申外無之、御家中も上の御儀を取受不申と種々の惡事書載せ、壹岐守殿への直狀辻江戸へ登せける。梅津外記も同心なれども、いよゝゝ働を知らせんと思ひけん江戸大越甚右衛門へ、御國元にて趣向相催し候、密に言上あれかしと誠にやかに内奏を送りける。小瀬宇兵衛は此事を知らず、御留主居に江戸へのぼる。ゆめにも知らず北、東、役人、山方、梅津に心をおかず、御下國には銀札遣ひの仕様、諸士の御返し銀、國民救の手段、上の思召急度と、是のみ晝夜に工夫して、日々寄合せられける。野尻は案の内にしおふせたり。此上御家中へ沙汰させんと御側醫の細川元俊を語らひ、内町へ病用廻りには、此度御下國あらば屋形様を押込申、北、東、石塚、岡本など、政務を思ふまゝにせんと内談あるよし、慥なる人の咄を承及ぶ。扨々大變ならんと、諸人の耳に立ッやうに嘯し廻るぞうたてけれ。或時江戸大越より用狀到來し家老中列坐にて開封せしに、甚右衛門より外記一名の書狀也。石塚、岡本申す様は、同役の事故拙者共連名にて書狀來るべきに、御自分御一名にて御用狀に入り參り候儀無覺束存候。甚右衛門殿より之書札披見申べしと列坐にて披覽せしに、運のきわめにや、存も寄らぬ内奏の返札也。兩人、助八郎の病氣へ行向て對面し右のあらまし語りければ、山方、大儀のもるゝ事なれば知らぬ體にもてなし、外記處存以之外にて、此度外記への御斷御

同意に存候とて、石塚、岡本、山方三人、梅津がやしきへ立越て云けるは、甚右衛門書面にて御自分表裏の内奏相知候。向後同役之連名相除と斷て、北、東兩家へ訴ける。兩家より石川縫殿丞、小野崎忠助を以右之次第相斷られ、出勤延引あるべし、御下着の上御糺明申受べしとありければ、外記は病氣と申なし、逼塞して居たりける。山方は、兩家之運命いかほどもなし、御下國まで休足しましませと、外記に妹誼なれば心やすげに言送る。外記は大坂の高名梅津半右衛門が跡にて、數代家老を勤しものゝ流れなれ共、實に無道之處存のほど、先祖の名をぞ下しける。助八郎は、外記をば無是非同役をのぞきける。されどもはかりし大義をば、飛脚便の度毎に大越方へ言送る。江戸には、甚右衛門始忠左衛門、御側之兩役、助八郎が書札に色々の品を付、君の御むねのふさがるやうに押付、御下國あらば北、東をはじめ、石塚、岡本、其外坐持諸役人一決して、兼て助八郎申上る通り、御安危此事に奉存。先達て圖書、山城方より壹岐守様へ指上候書狀、外記、助八郎處より内意申越候て、甚右衛門開封仕上覽に入置候。右之次第に候得共、御國にては沙汰を決し奉待と存候。壹岐守様にても右書狀御覽有て、兩人共御一門の座上と言ひ、屋形様へは伯父共也。幾度も善惡共に御諫言を申上べき儀也。手前方へは上の御惡事を訴へ、國元にては隱密に計意の段逆意の至り、御下國御ゆだんなく、御賢慮はあるべきよしの思召に候と、さも誠しやかに申上る。倭人の言葉甘き事みつに似て、人を損する事双よりも利なりとは、ヶ様の事をや申らん。江戸と秋田の謀計に、罪なき人の身の上をいかゝあらんと、聞人むねをひやしける。大守は、

是までは取次もの言誤か、さほどの大儀におよぶべき事覺なき儀也と動じ玉はせざりしかども、御國より度々の訴人、壹岐守様の思食もふかきやうにさま／＼讒しければ、扱は兩家共に兄弟也。石塚、岡本も兄弟也。上の爲には伯父従弟ごもなれば、よも左様の不儀はあらじと思召さも、いかなる所存にて歟かゝる企あらん。下國の上糺明せんと、さも大やうにの給ひける。江戸より此事告ければ、御下國有ッて御糺明あるならば、日頃之謀計あらわれん、只御對顔なきやうに申上る謀事あらんと、山方處へ度々申送りける。

### 大守秋田え下向、道中讒奏兩家無實に逢事

大守江府御發駕ありけるに、時しもさみだれにて道すがら雨天つゞき、驛路處々洪水して須賀川、本宮兩宿にて八日之滯留ありける。大嶋左仲は江戸御立の時、右の企によりて那珂忠左衛門と談合有り、御用ある連残り、今程御着ありて兩家、石塚、岡本も片付ぬらんと思ひ立、跡より下りしに須賀川の御滯留に追付たり。表方は江戸上々様より御道中御機嫌御窺と云ひ、内事は、御着城以前に御國の面々御片付あるやうに、壹岐守様よりも御内意のよし、さま／＼偽り申上。大守御心をいたましめ、さなきだに旅泊は物うきものなるに、佞人共が語らひに御胸ふさがり、つや／＼まごろみ給ふ御事なし。下として上を掠る惡人共、自らせむる罪の果、後にぞ思ひしられなん。御國より飛脚到來して、君御着城の刻北、東、

家老列座して、御身持宜しからざる義申上げ、御得心なきに於ては御殿園可致と評定一決し、依て役人其外ともに一味して、相待申事紛れこれなく候。春より段々申上候通之趣向に是有り候。御着以前に、北、東、石塚、岡本を御退治あるべし、若御對顔に及び候はゞ右之企に候と、山方書面を以再三御道中迄申上る。三枝仲が實兄濱田郷右衛門、松浦肥前守殿御臺處御用ある連、大守御旅之内に出足登りける。是も野尻との云合せ、いかなる密奏ありしも知れざりける。大守五月十八日領内豊島村に御着有り、山方處より兼て申上候謀言實と思召、御着城以前右四人に堅く遠慮申付へし。此節御城中も心元なし、信太彌右衛門早速久城へ罷越助八郎に申渡し、右四人禁足いたさせ、足輕數百人御城中御門堅し可申と上意なれば、同日申刻早馬にて直々山方宅へ行向ひ、件の上意を申渡す。助八郎多年の計略仕課しなふせたりと大悦し、北、東、石塚、岡本へ上使を立、御尋被成る義あり堅く遠慮致へしと。又番頭、寺社奉行、物頭、諸役人残らず助八郎宅へ呼びて、右四人の指揮を受け間敷候と申渡し、御門固、御武頭八組申渡、稠敷守護させける。夜中御城中の騒動、當地へ御入國ありし此かた覺なき事ども也。横手の城主戸村十太夫、右儀に付御用有り急度御跡より追付申へき催促にて、取ものもとりあへず、夜を日に續て登り十九日御着城、御跡より、我屋敷山の手へ家中は着にけり。十太夫御前相詰諸事を相計ふ。扱又四人衆思ひよらざる遠慮にて、言上せんとすれども禁足なれば叶はず、されば聞及びし通り山方、大越、梅津并御側兩役共、無實の讒を申上ると覺へたり。かくあるべしと知るならば、四人の内一人御道中まで駈のぼり、眞



偽の實否御糺明に預るべきに、無念千萬、いかゞせんご後悔されど甲斐もなき。此度國守御暇の御禮使者東山城江戸登り、前廉被仰付しに右救民の御用筋言上いたさんため、當病と云て嫡子源六郎名代に仰付られ廿日に出立の支度しけるに、此一亂によりて登りをとめられ、今宮又三郎急に引かへ江戸へ登り、圖書角館組下、孫太夫檜山組下召放れ、上使兼て兩處へ指向ふ。何と申さんやうもなし、只天運に任する外の事はなしと、何れも静まりかへつて居られけり。惣家中の諸士是を聞き、かねて風説の如く倭人どもの謀計にて、御國の安危此時也。役方町限りにも一統し、四人無實の罪科御糺明あらるゝ様には是非申上んと、おもひ／＼の評議也。

## 大守 御城 着

大守、十九日城下へ入らせられ、御通りの道なれば山城屋鋪前御乗物に召れ、大勢前後を取巻御通り有り。野尻兼て之謀計にて、東門前に御乗物を立、暫く休息し給ふ體、いかなる事ぞと見物上下是をあやしむ。野尻計意として、夕部遠慮仰付られ、無實なれば定て門前へ立出ん、其時逆意紛れなしとて押とらんごの手立也。されども東屋鋪にては上意をおもんじ、門戸とさして音させず。大門前北屋鋪にも、右之通にて御着城まし／＼ける。北殿より十九日朝東殿へ申さるゝは、此度之儀一向不存寄無實之讒と存する間、押て罷出實否御糺明を蒙んと存じ、御心底いかゞと有りければ東殿の御返事には、好人の

申條によりて君一旦御腹立にて仰付らるゝといへども、拙者共儀は御糺明なくして罪科有るべき事共存せず。指扣へ仰付らるゝに是より推參致さんは、畢竟上を輕んずる越度ならん。君の御爲なれば、幾度も實否御尋に預るやうに申上る存寄に候と也。此節東殿若年と申せども、後に晴れたる惡雲にぞ、誠に進退當に當れることの知らるゝは、時にとりての名譽也。

### 五月十九日騷動

十九日御着城有ッて、暮時北殿へ松野茂右衛門、大塚九郎兵衛、御用人大久保東市を上使にて、梅津外記を役外に致、平元茂助諸役人に抽んて、兩家手に入相勤させ候儀上の思食を輕んずる條、此旨即刻答申上べしとさびしく被仰渡る。北殿上使に向て申さるゝは、御條目即答の儀畏り存候。扱、か様の節は必ず大目附を指添る儀古例也。東市御用人にて同役の儀、圖書得心不致候。願は大目附御同道有之様に致度との挨拶、兩人尤と取受御城へ右之趣申上、則大目附清水織部罷越、東市御城へ歸りける。扱北殿、此度の御向狀自筆に的書を認て上使へ渡され、上の思召存に寄ざる御事也。御呵の身分に候得ば強ひて登城も不罷成、御兩殿の御取持を以圖書を繩下になされ、御前へ召出され實否御尋はあるやうに、御芳志に預りたしと誠に餘儀なくの給ふに、上使の面々北殿の御心中を察し涙を流し、貴公よりの御的書直々上覽に入置可申。若老中、御側など取次指上んならば、御的書を指上ず貴公へ返進仕らんとあれ

ば、頼敷存じ候。御大儀千萬と、双方色代して上使は登城せられける。東殿へも右之通、上使梅津内藏丞、眞壁重兵衛、大目付代信太彌右衛門也。是も即的書相渡さるゝ。石塚、岡本へも澁江八五郎、正田久太夫、其外付添北束の如く御向條、今暮前に答書指上る様に、御急ぎあるこそ不思議なれ。

御菩提處天德寺、正洞院、闍信寺、鱗勝院、十九日夜四ツ時寺社奉行へ相詰られ、此度之儀、右四人中御尋之上仰付らるゝ様に奉願候。子細有之様に及承候へば、御安危御大切に奉存愚僧共達で申上候。卒爾の御事候ては、御國の大變此事に御坐候なりと申す。折節松野茂右衛門、梅津内藏丞、共に今夕の上使被仰付有合す。四人直々登城して御中口へ相詰らるゝ。御側の内より、寺務に障あらん。指のぞかれ然るべし扨と申輩もありけれども、四人の衆、若無實の死罪等ありては後悔すとも益なし。出家は風塵の身也。寺務を憚る事あらんやと、廿三日迄晝夜詰てぞおはしける。此事上へも達しけるにや、其上上使の面々申上るによりて、急に御沙汰もなかりけり。佐竹大和守大館より急に御出立、廿二日に城下へ着給ふ。湯澤佐竹三郎殿、若年故出府なし。斯て十九日晚、北殿の的書松野、大塚兩人持參致し、直々に指上んとす。甚右衛門申は、か様の書付等は拙者共御取次申格にて、右の答書拙者預り、御機嫌を見あはせ上覽にいれんと云。兩人いはく、よの儀ごちがひ今夕急段の御催促なれば、的書直々指上候ても何か苦しく候べきと。甚右衛門面色替て、直參之儀古來よりこれなし、手前共役筋に相障事故、是非請取申上んといふ。兩人心中におもふやう、扨は此春より江戸表へ兩家の謀書して、上様、壹岐守様の御心

持あしくなしたる事疑ひなし。北殿の答書甚右衛門へ渡さば、又取拵して上覽に入へき手段ならんと、余人共違ひ、北殿へ拙者共を以て御尋の答書に候得ば、是非拙者共指上んとせり合ける。兩家の運命天に叶ひけん、一ト間の御陰にて右の論を聞召、御側を以て、松野、大塚くるしからず。直ぐ罷出候へど御意あれば、持參して指上る。此時大越を始一味の面々、巧みあらはれぬるとむね冷す。兼て面々談合しけるは、御道中にて色々兩家を議することも御取うけなくて、御着の上の沙汰あらば謀計忽ちあらはれん。それならば御道中にて毒藥を指上御病死と云ひなさんと、江戸より兩役の面々毒藥を懷中す。御着城有て兩家其外家中より御糺明の訴認あらば、御城内并に中城には山方が居宅、其外内町處々より出火させ、御城下騒動するならば君も御出馬あるべし。その時、われ／＼御付添申體にて君を害し奉らん。夜中也、火消大勢打寄ん。其内に北、東兩家の紋付たる騎馬丁ちんをもたせ數十人出して、取々に丁ちん取落し、明れば兩家の丁ちんにて詮議せんは、兩家禁足なるに、御ゆるされもなきに、いかなる事あるとも家來を出<sup>ス</sup>事あるべからず。然るに大勢指出し不慮に御難の有る事は、必定兩家の業ならん。解しかたきは取落し丁ちんと、是を以江戸へ言上せば兩家の滅亡疑なし。此儀、野尻が兼て用意し計意けり。かゝる大義の企を容易に知る人なかりしに、一味の内にいまた名たゞぬ者多く、是等を餘處の沙汰にして後には廣く咄しけり、天に口なし人を以言はしむるさは、かやうの事にあらん。御着城ありて御沙汰相延、猶的書等御吟味あらば廿六日夜半と合圖を定たり。然るに同日晝時黨徒あらわれし事、



深淵に望んで薄氷を踏がこし、危かりしもいふはかりなし。誠に御家長久八幡宮の御加護こ、ありかたかりし次第也。先年由井の正雪が巧し謀略に似たり。廿七日戸村十太夫、小野岡源四郎兩人家老役になされ、萬事大和へ取合、此度の義可相勤也。是迄は年寄加談こ仰を受勤めたり。斯て廻座無役の面々、物頭、組頭、諸役人より大番頭へ御伺ひ、此度御着城以後御門堅、御要心之義相見得申候、いかなる御事に御坐候と。其外一町限會合して、兩家存亡上の御心中一致にあり。北、東、石塚、岡本無實の議にて没落せば、御家中一味して佞人共を討とらんと種々の評議あり。中には同意せぬ族もあり。五月廿一日座持、役人御目見得の時、太田内藏丞も奉行役故相詰る。内藏丞心中に思ふやう、北、東、石塚、岡本は押込られ、上は讒者に御傾き、是非を申上人一人もなし。今日引渡、廻座衆獨禮、次に諸役人も御目見得なり。某、腹を切らんと思ひ定て登城したりける。同役中も太田に同意し、申上んと、次の座に相詰たり。太田、脇指、扇子を次の間に置、御座の間の御疊一疊へ罷出、謹て申上る。私儀奉行役太田内藏丞に御座候。圖書、山城、孫太夫、又太郎前度申上候義は、乍恐御上の御爲御國家御安危と奉存候。御尋被成下度奉願候と言上す。君御覽有て、今日は獨禮御取込、重て可被爲聞、退坐せよこの上意也。内藏丞は、此坐をのがして沙汰きわまつては何を申上ることも叶ぬ事と思ひ、御國家の御安危御大切に奉存候と再應言上仕候。四人の所存是非御尋被成下候ひなば、難有奉存候と申上る。其時大越甚右衛門、長山久平御前を立て、内藏丞病氣と見へたり。それ下げませへ、さげませへと取圍て坐を立る。内藏丞は少し



も驚く氣色なく、いた病氣狂氣にもなし、此度の御儀御國の御安危と、拙者一命を捨て言上す。御取成をと申せども、側の者共、それ狂亂ならん、早々駕籠よ、當番物頭參れと、是非もいわせず大小おさへて引下ぐ。内藏丞次の間に下り同役共をにらみ付、各同意して言上申さんとは迄來り、某一人に申上させ狂氣など取なさせ、一言も云はざるは臆病神が付たか。平元茂助遠慮せずは、かからざらんものを、言に似合ざる人々かなと立腹し、駕籠へ打乗宿處へ歸り遠慮する。太田の心中無念といふも余り有り。天晴武士の手本やと、はめぬ人もなかりけり。

大守諸方の説と御側の者どもの申上るにて、奸佞を御心中に思召ありけれども、御道中にては御聞入なき時は御身も危く思召、とかく御深慮あつて御着城の上糺明あらんと思召けれ共、大越、山方を始、御側兩役共御着城の日より在宿せず、晝夜御側放れず相詰る。いかゞせんと思慮ある處に、或朝大山伊織罷出御月額遊すに、此度の儀、江戸箕作茂左衛門方よりも申來、右一味の面々一儀を企候と相見得候。大越、山方を始御用人、御膳番御側を放れず罷有候て、御前へ人よせぬやうに計意候も、是亦謀計の一物にて御坐候。乍恐御賢慮專要に奉存候と、御耳移に申上る。彼ものども、是をば知らで居たりける。松野茂右衛門、大塚九郎兵衛、北殿の的書を直々上覽に入れ、又伊織か密奏もあり、此間この者共要心之體に斷し晝夜御側を放れず、内藏丞が強て申上んと云しも要あらん、いか様尋問せんと思召。廿六日、六七人の兩役を兩人宛御陰の間へ召れ、江戸への書狀、御道中への山方が謀書、同意いたせし讒佞之次第

等御尋ありければ、主命に恐れけん、兼てたくみ置き、とや云はんかくや陳せんとおもひしも、何にを申もらりるれろ。其後七人そろへて召れ前の如く御尋あるに、山方助八郎、野尻忠三郎に一味仕、春中より種々の謀言謀書を申上げ、御心をなやまし奉る。誠に天命に背き冥罰勿蒙り申候。いかなる御科を仰付らるゝ共是非なき仕合に奉存候と、皆一同に申上る。君聞召、又々尋る儀あり、暫御用局に罷有れ、御側小性共見繼<sup>グ</sup>どの仰にて、いま迄外様になりし御刀番、御側小性中早速御前へ入替り、是を見、かれを聞に付て、變しやすきは浮世也。不義にして富み且貴きは、我に於いては、うかべる雲のごとしこの孔子の金言、今こそおもひしられたり。佐竹大和、戸村十太夫、小野岡源四郎を御前へ召され、右のもの共隠叛露顯せり、七人の者大和が宅にて堅く遠慮申付け、親類に預くべし。野尻忠三郎は御會處にて大小を押へ、親類一町へ預くべしとて、何れも大和が宅へ呼ばれ、足輕を付添へ宅々へ引渡し、親類付添番をさする。信太彌右衛門當番にて御城に詰けるを、遠慮被仰付歸宅す。山方は廿六日より御門堅く相止られ風並あしく成ぬれば、病氣といつわり引籠り野尻を招て放火の評議したりしに、廿六日晝時に一味の七人遠慮被仰付、野尻も重く身せまり、數年の謀略一時に顯はる。天罰のほごこそおそろしけれ。六月二日、松野茂右衛門御家老役に仰付られける。其後與八郎方へ親類召れ、堅く遠慮仕るべしと仰せられ、大塚九郎兵衛、土屋彌五右衛門、御刀番田代新右衛門上使にて段々の致方御尋ありければ、罪科一人に歸す。大越甚右衛門、梅津外記も同罪たるによつて、堅く遠慮仕べしと親類に被仰付ける。同日暮

書に、

山方が扇拍子て骨はなれ大越あけて語る外記なし。

### 平元茂助を闇討にせんと議する事

其頃山方、大越始一味の面々評議しけるは、四人の人をば上様へとつくと申上、御憤り深ければ、廿六日限りに亡ん事うたかひなし。平元茂助は其已前に切腹と申付ても、北、東取構置なれば、中／＼上意にても亡しかたし。今夜御用あるとて助八郎宅へ呼よせ、力者を隠し置闇討にせん、此節なれば詮議する人もなし。廿六日限りに落着するなれば幾程の沙汰もあらず、使を立て茂助を呼べと拵ける。北殿思慮深き人なれば、しせんと不慮の事もあるべしと平元を我宅へ呼置れる。暮時、山方より御用あるとて茂助を才足したりける。在處にては、北殿より御用とて参ると云ければ使北殿へ行て、茂助に今晚急御用有之、助八郎宅へ早々罷越さるべしと申ける。北殿にては、東殿へ行候ぞと申さるれば使東殿に尋行に、もはや私宅へ歸りぬるか是には居らぬとありければ、たくみし時刻も相違して、夜討の沙汰はやみにけり。夜半頃に北殿は太田内藏丞を呼たまひ、暮時より助八郎御用あるとて茂助才足する、是は子細あらんと思ふゆへ、兎角時節をたかはせたり。時刻も移りぬ。もし茂助宅へ討手にても向たるか、御邊見て参られよ。茂助は文武を以君の御用にも立ち、國務をも勤むべきもの也。是を、ゆへなく失ふ事

無念に思ふ也との給へば、内藏丞申けるは、御奉公之儀は身不肖に候得共、茂助に劣り申間敷候。去ながら、茂助を上下共にしたひ候事は仁徳に御坐候、ケ様の義は茂助に及び不申候。誠に無二の思召奉感候、茂助屋敷へ罷越、うかゞひ可申候。たこへいかなる事候とも御氣遣遊すなど、身ちかく丁ちんを下人にもたせ、主従二人下根小屋茂助宅へ行見るに、門戸こぢて音もなし。異様の事も見へされば、歸りて斯くと申ける。

### 叛逆面々被處死罪事

御家老六人の内五人は遠慮し、小瀬宇兵衛は江戸詰にて國政を勤る人なれば、此時戸村十太夫、小野岡源四郎兩人年寄役を仰付られける。六月二日北殿へ廻座小野彦三郎、東殿へ廻座戸村内藏丞を上使にて兩家の指扣を御免ありて、頓て登城ありければ、大守兩家に對顔有つて、佞人道に横つて面會の本意を達せず、暫く吳越と隔。明白の上は心に残す事なかれ。心置なく年寄共へ相談を致し、國靜謐ある様に口入あらるべし。家僕共の讒佞により禍墻内に起り、暫く家中を騒す事予か不徳なりと、御涙をうかべさせ餘儀なく見へさせ給ふにぞ、兩家も感涙を流し、御前に畏みてぞ居られける。太田内藏丞も遠慮御ゆるされにて、御前へ罷出御懇の上意あり。内藏丞も涙をながして退出す。松野茂右衛門召れ御家老役仰付られ、三日には石塚孫太夫、岡本又太郎、平元茂助遠慮御免、本役を檜山組下共に替らず仰付ら



る。北殿、東殿、大和殿、戸村、石塚、岡本、小野岡列座して、此度罪科の面々、上の思召を蒙り科の輕重を逐一吟味有つて、六月六日夜、山方助八郎方へ檢使物頭赤須九左衛門、森川權右衛門、大目附前澤主水、足輕六十人召連れ屋鋪へ入、御條目を以申渡候。

自分儀、當春以來用向諸事同役共、同意の趣に相計ひ候處、密に野尻忠三郎に用向遂内談、側兩役え密書を通、的證令明白候。偏に讒佞を以國家之騷動相謀候段重々不届之至に候。依て切腹被仰付者也。

介錯篠田八右衛門。知行高千石、子共石五郎十五才迄親類に被預<sup>ケ</sup>、舍弟右柳は三ヶ津下野御領を被指塞、川上治左衛門檢使にて仙北手倉越に成にける。

小野崎源左衛門。知行三百七十石、檢使平塚惣助、椎名永太郎、足輕二十人。介錯中川多七郎。

大久保東市。知行三百石、檢使大和田源兵衛、江尻軍兵衛、足輕同斷。介錯田中傳左衛門。

大嶋左仲。知行四百石、同寺崎彌太夫、鈴木彌生、足輕同斷。介錯大山平七。

信太彌右衛門。知行四百七十石、同根元庄右衛門、平澤源五右衛門、足輕同斷。介錯信太與市。

三枝仲。知行百石、同川井正右衛門、宇垣正太夫、足輕同斷。介錯埜治右衛門。

右五人之御條目曰

自分儀野尻忠三郎に與し品々謀計を以讒佞之致方其證令明白候。且自分不顧身上國家之騷動相招

候條不屈之至に候。依て切腹被仰付者也。

子共大嶋幾太郎、信太弟助改易、三枝仲か子共兵内、檢使富岡忠右衛門付添八森岩館を越れけり。

野尻忠三郎并に子共内藏。知行二百三十石、檢使岡清七、平澤藏人、御中間頭赤田彌七郎、足輕中間付添草生津にて首を被斬ける。

### 御條目曰

自分兼々以佞奸山方助八郎始側兩役へ謀計を示し、種々の讒奏を巧み國家之騷動相謀、數人は是か爲に犯重刑候儀偏に自分叛逆の企に依。仍て於草生津斬罪行者也。

六月六日夜、父子共に亡びけり。

梅津外記。知行五千四百石、同七日。

自分儀、當春中同役共同意之趣以用向及言上候處、大越甚右衛門へ致内奏、側兩役之者共へ令密談候條役柄不相應之至、上之御爲を存候はゞ幾重にも取計意模様も可有之處、内奏准候條祕謀之至甚不調法に候。依て役儀被召放、祿高之内三ヶ一被召上、生涯塾居被仰付者也。

嫡子龜松。

自分親外記、役柄不相應之儀有是御役儀被召放、祿高之内三ヶ一被召上塾居被仰付候。乍去先祖數代之勤功有之、御慈悲之思召を以、祖父小右衛門迹目自分に相續被仰付もの也。

(上使眞崎又左衛門、熊谷甚一郎。)

大越甚右衛門。知行千二百石、行歲六十一、七日に御會處へ召れ大小を袋に入、甚五郎同道にて相詰る。

御條目

自分儀、山方助八郎今度讒佞之計意有之處、無異儀同意致、不願上之御爲、國家騒動相謀候者へ一味致候條甚不届之至に候。依て生涯多賀谷龜太郎へ被預置者也。

武頭寺崎彌太夫、武藤豐太夫、足輕四十人付添駕籠に乗せ、直に配處へ趣きけり。嫡子甚五郎改易也。根岸市郎右衛門。知行六百六十石、武頭平塚惣助、足輕二十人付添、十二處茂木筑後え被預。

自分儀、同役共此度讒佞之計意有之處無異議同意致し、不願上之御爲、國家之騒動相謀候者へ一味致候條甚不届之至に候。依て十二所茂木筑後へ被預置者也。

子共與市御領内被指塞新屋越にて御追放。

鈴木平藏。知行三百石、角館本御家中へ被預置仙北流罪。

大越道行

水無月七日大越は配處極り、路次の奉行寺崎彌太夫、武藤豐太夫警固きひしく取巻て、すでに城下を立出る。我身の上のうさよりも、古郷にありし妻子共、行へもしらず迷ふらんと、心細くも思はるゝ。か

ゝるうき身は八橋の、きつつなれにし寺内の、山を駕籠より詠めつゝ、湊に着ば去年迄は、わけ野に通る時はまた、いつきかしづきせられしに、かゝる流人となりぬれば、きのふのにしきけふはまた、さむしろけにぞうとまるゝ。沉も果ぬ堀川や、さらす耻辱の中々に、中野の里をはや過て、よきとあしきを追わけや、聞に北野の原をゆく。南無や天満天神宮、往昔無實の讒により、心盡しに流され給ふ。われは引かへつみふかき、よこしまごこのあらはれて、かゝるうき身となる事も、人を恨んかたもなし。答は我身にあふしみづ、茶屋のなさけも今更に、浦山敷を思はるゝ。誰を待つことや新關の、湖水はるかにありながら、涙にくもり見得わかず。戀しき人に大久保も、足や限りと蛇川や、わか妹川の幾末流も、おぼつかなくも飯塚や、濱井の橋も打渡り、いつか歸りと大川の、渡しを過てかぞふるに、はや一日市もいそがるゝ。名もおもしろき夜叉袋、露もたまらぬ森岡の、かすみと友に高雄山、眞坂は我も腰おれを、詠みしむかしを慰まん。みくらか鼻に駕籠立て、入江を見るにさゝ浪や、志賀の浦邊の風景も、あらましものとおもへども、心盡しの森の内、ぬる夜もあらん天瀬川、なかんからすの鯉川や、むねにこめたる數々を、海とやいはん山屋なる、吹來る風のおとづれも、夢鹿渡おもふうつゝみの、せんかたなくもあらやしき、雨はふらねど森岡の、宿に暫く駕籠とめて、思ひつゞけてかくばかり。

仇の身をあだゝ浮世に迷ひつゝ、行すゑ何と人の豊岡。

きんやのきじの金光寺、妻子は我を志戸橋に、今そ始て後の世を、おちひ知らるゝ悲しさよ。三途の川



や三澤なる、罪の報を作坂、配處の村の朧月、檜山にこそは着かれけれ。所はもとより鄙のさと、殊に流罪の身なりせば、見るにいぶせき破二こや、廻りきびしく圍つゝ、事間かはすもの連は、諸鳥の啼音松風の、かきねにばんとおとづるは、琴のしらべかあやしきよ。さるにてもをかせる罪の消やらで、かゝる浮身となる事も、上きよくして下濁る、たとへ此身は埋木の、落花は枝にかへらざる、花なき春は朽ぬらん。されば浮世はあだし野の、草葉にもろき露の身の、なげかしものと思へども、切るにきられではたの糸、くりかへしても古郷の花のなつかしや。春はまづ咲梅がえの、香もむつましやせて實に、にはひこもつて吹風に、櫻は花にあらはれて、色に出るや山吹の、夏來にけりさからころも、過し浮身は八橋の、はるゝ都の花の種、移し種にしかきつばた、見る人もなくいたづらに、秋も來ぬると白菊の、萩の初風ひやゝかに、桔梗かるかや女郎花、紅葉の色もうつろひて、冬にもなれば雪見のえん、今はむかしどなにわ成る、ともにうつらふ玉柏、ゆめにも見ざるあたし野と、替る浮世ぞはかなけれ。

七月八日より國中銀札相止、正金引替年賦にて下さるゝ。是より御國も賑ひて、うかりし事は、むかし咄に成にけり。

### 殘黨成敗、附川又、白土死罪の事

野内左五右衛門。自分儀、本方奉行申付財用向爲取擔候處、其職分を取失ひ偏に鄙吝之事而已專一に

し、御舊家の風儀失、下々の利益を指塞却て財用の害甚鋪、土民爲及艱苦候條不屈之至に候。依て改易被仰付者也。子共隼人同前。

田所勘左衛門。自分儀、數年財用向取扱候者故本方奉行掃役申付候處、偏に鄙吝之事而已專一にし、自分の利口を以政事を妨げ下々の利益を指塞、土民爲及迷惑候條不屈之至に候。依て改易被仰付者也。子共平内同前。

吉田藤右衛門。自分儀、辯佞を以其職分に不取與儀を猥に相謀り、奸人に相親み、年寄共始同列を相欺候段勤方不屈之至に候。依て半祿被召上閉門被仰付者也。

那珂儀右衛門。自分儀本方奉行勤中、用向同役共一樣に取計意竊に奸人に相親み、年寄共を始同列を相欺候段勤方甚不屈之至に候。依て半祿被召上閉門被仰付者也。

岡平兵衛。自分儀實兄野尻忠三郎儀、讒佞之計意有是に付被處斬罪候。兄弟之儀にて、忠三郎行狀兼て相心得居候筈に候へば取計意之致方も可有之所に、右段々之御苦柄に爲至候條無調法之至に被思召候。仍て閉門被仰付者也。

小野崎造酒。江戸より被指下被仰渡候は、自分儀、同役野尻忠三郎に與し品々讒奏相巧候處、遠境に罷在其實否を不相辨、猥りに思召に相違之計意致候條不屈之至に候。依て可被處死罪候得共、其席に相除け相談等之儀も無之故、容其罪御領内并江戸、京、大坂、下野御領を被指塞、追放被仰付者也。檢使平澤

源五右衛門付添生保内越になる。子共改易。

川井七左衛門は那珂忠左衛門同道にて仙北湯澤迄下りしに、忠左衛門逐電し、七左衛門計赤須九左衛門召連れ久城へ着、遠慮し居たり。其後御條目を以、自分儀當春中銀札仕法改置候次第、并に財用指配り等之儀年寄役人共へ具に申合爲指登候處、上着之砌何れ共不及言上、剩此度御道中山方助八郎讒奏致候に付那珂忠左衛門、小野崎造酒に令同意、思召に相違之取計意致候條不調法之至に候。乍去、此度之一儀深く不遂相談候趣相聞得候故、御憐愍之思召を以役義を被召放、半祿被召上閉門被仰付もの也。

細川元俊。御側醫被召放。

川又善左衛門。大坂に有りしを早追を以召歸され、六月十四日、川又、白土と御詮議有り、太田内藏丞、丹惣十郎を以御尋十二ヶ條之御不審、第一大坂より御下し物渡し方御吟味有りしに申ひらき兼兩人遠慮せしに、同廿七日川又善左衛門に御檢使岡藏人、藤元左門にて、

自分儀本方奉行申付財用爲取扱候處、古來無之銀札仕法取立、新法不容易といへども、家中領民救の一助に相成段申聞候故全任置候處、品々利害之事而已取計意下々之利益を指塞、且他領之交易及難澁公邊御窺之處甚令相違、今に至士民一統及艱苦、財用之害及莫大、既に領民之浮沈此時に相至り候。畢竟私意之巧を以御本志を相欺き、國家之大難相招候條重々不屈之至に候。依て切腹被仰付者也。 子供大澤野口御追放、檢使松塚勇藏。

白土奥右衛門。御檢使井口長兵衛、小野崎彌市兵衛、御條目右に同じ。子共永吉岩館にて御追放、檢使大和田清兵衛。

大繩幸左衛門。銀札奉行にて遠慮中に病死にて、子共大力改易仰付られたり。

### 那珂忠左衛門没落

忠左衛門心中には、定て御着城あらば三家老、兩役、野尻忠三郎一味の謀計にて、兩家、石塚、岡本は亡びなん。されども秋田は心元なし、上様へ申上御機嫌窺御使者に下らんと、愛宕下御臺様へも申上御暇を取、川井七左衛門同道して下りける。仙北湯澤へ着て久保田沙汰を聞くに、大越、山方、梅津を始、御側兩役、野尻共に皆死罪、流罪に逢ふたり。是より城下へ下らんは死に、行くと同前也、是處より引返し江戸へのぼり、近付の御旗衆へ付込智略を廻らし、一人して今一度本望を遂げんとおもひ川井に語るやうは、院内大山十郎殿へ急に御窺ひ申御用あり、一寸罷出申なりとて早馬に打のり湯澤を立て、十郎殿へも寄らずして御關處え行き云ふやうは、昨日此方へ罷通候處に、急の御用申來早速江戸へ罷歸る。御關處御判番は、右之仕合故久保田より追々被指越候様に申遣候。忠左衛門など不時御用は今にはじめぬ事也と、さも横容に咄しけり。番人も、那珂事は御家老同前之はゞさうなれば、よも違ひはあらじとおもひ通しける。湯澤より川井、那珂着候よし久保田え注意ありければ、赤須九左衛門足輕召連早速追に



て行たりしが、忠左衛門は逐電す。他處への御用にあらざれば、無念ながらも七左衛門を召具して城下へ歸りける。さらば捕手を向んとて、究竟の足輕五人、十三日暮頃に早馬にて追かけしむ。宿々にて聞けるに、菊の紋の丁ちゃんを駕籠へ付、其名を改め、中川宮内と云うて、賃錢構ひなしに連飛ぶが如くに返りける。秋田追手には三十餘里先立つべしと云けり。忠左衛門は江戸へ逃登り、愛宕下御臺様へかけ込ける。秋田の追手一日一夜の違にて追付す。江戸へ着、小瀬宇兵衛、其外役人、愛宕下等へ右之大儀を申上、是非なく忠左衛門被渡て秋田へ下り、七月五日に着到。御會處にて御詮議あつて、翌六日忠左衛門を高手小手にいましめて馬にのせ、小旗を背負はせ前札を立たり。其詞に云く、

此者奸佞邪惡を以て密黨に與し、國家騒動之端を發し、叛逆を企て、剩關所を破る。重罪により庶人に下し行斬罪者也。

曝磔之式と云。

久保田外町三十六丁不殘曳さらし、草生津にて伐れけり。嫡孫幼少たるによつて親類に被預、實兄大館給人忍三郎左衛門は梅津藤十郎に、忠左衛門二男村野治右衛門は須田伯者に預らるゝ。

三枝仲が兄濱田郷右衛門江戸より下され追放になされける。

君徳のふかきにより忽ちに善惡明白し、賞罰有つて靜謐に歸し、夏山の惠の風も、秋田なる刈穂の庵の果までも、皆萬歳とたたひける。誠に一家仁なれば一國仁に興るの謂ならん、目出度かりける次第也。

其後惣御家中を御城へ召れ、此度の御祝儀として御酒を下さるれば、皆有りかたしと頂戴し、うたひつ舞ひつ悦んで、各私宅へ歸りける。扱北殿、東殿、大和殿へ知行五百石宛、戸村十太夫、石塚孫太夫、小野岡源四郎、岡本又太郎、太塚九郎兵衛へ知行三百石宛、平元茂助に百石、太田内藏丞、小野崎五兵衛に七十石宛御加増有り、信あれば徳ありと浦やまぬ者はなかりけり。

世も末になり濁亂の時なれども、この頃人の心のならはしこそかなしけれ。夫武士は藝能を專にして仁義を守り、上をおもんじ下を憐むは常なれども、侍は商をし、高利のものを下々へかして無題にせびり取り、百姓を憐む心少しもなく侍たらん道を失ふにより、此度の如きの不忠義をも、惡事とおもはずなす事なり。仁者必有勇、勇者不必仁とあれば、武士たるもの專要に仁に志すべきならんか。僧徒は諸經諸錄を廣く見たるばかりにて、一大事の因縁を心に悟らざる故に、旦家には無慾を能くすむれ共、寺にては耕作し、男女牛馬を取集り、悉皆農民のごとくに渡世する事無慚無愧にして、出家の百姓に成りし風情也。百姓は田畠を念頃に耕し御貢を第一に守り、妻子眷屬を扶助するは農家の道なるに、働すして憐を貪り、貧家の親類をば疎み、果は武士にも増る奢りして、忽非人同前になりくだる。定なき乾坤のうち豐饒變せらんや、凶年の貯も持たずして、後には國守の救助を待つのみ也。町人は、子に伏し寅に起てさへ渡世しかたきに、洒博女の三に耽り、公家ともつかず長袖の眞似をして、遊興を家職と覺えたり。祖父は子孫のため連衣食迄も節し、艱難して少しの本手を取廻し、世帯を人並に譲れどもほ

うづかひに困窮となり、住居も持たぬ様になる。時代の習はしとはいへども、其家々の作業を専らに守らせ度きもの也。善に進み惡を退くもの稀也。其國其處の風俗を見習、行儀を守り、善を行ひなば、なごか少しく道を學び得ざらんや。

昭和六年十月

細谷則理校訂  
國本善治校字

鷹

の

爪





# 鷹の爪

御當方御家中は何も御譜代にて、昌義公以來次第に御譜代餘多に成り、都て淨喜様、義宣公御時迄の御家中を大古御譜代と申、竹堂様以來月光様御時代迄被召出候面々は中古御譜代と申、源真様、圖信様、天英様御代被召出被召抱面々は關東御譜代と申候。然は大古、中古の御譜代は大方子孫も絶、其筋殘候も稀に有之候得共、只今の御家中は多分御國替以來、於御當國右三御譜代筋の二男三男被召出或は新規御抱被召立、彼是御先代迄に新御譜代相重り大勢の御家中に相成候。共に皆々御譜代一統の御家中に御座候故、何れを何れとも諸士に新古の差別無之候事。

一 關東に被成御座候節は引渡廻座と差定候御座格は無之、御一門の外、一方の大將をも被承候歷々の面々入組に着座被致、定り候座列無御座御國替以後も右之通に候所、天英様、御親類衆を一番、一番と御分ヶ左右に列座せしめ、各々御吸物にて御酒事上段にて御盃被下、其外宿老、御家子差立たる牢人衆、御

親類衆の二男三男迄下段次の間へ片並に廻座せしめ、下段の間にて御盃被下惣名大名衆と申候。元和年中より御親類衆、御引渡御膳にて御饗應有之故御引渡衆と申唱候。宿老以下の面々は座並も定りなく打込に着座被致候に付、寛永八年正月始て御座奉行被仰付、其節御家老小場源左衛門指南被致御座配相定り、是より引渡、廻座の席相定り候。其節御座奉行小田野刑部、佐藤源右衛門、向帶刀、澁江惣四郎也。爾より年々御座奉行へ御記録被渡置、御座配今以如舊例にて引渡衆、廻座衆と申候。夫より天山公、德雲院様御代段々御免許にて御座へ着られ、廻座衆只今は大勢に相成候事。

一 右引渡、廻座の部屋住衆、以前は右一番座、二番座の末へ着座、廻座も段々下へ御座配有之所に御引渡の席せまく候故、寛文四年正月より御引渡部屋住は三番に御座配被仰付、其後德雲院様御代、三番座の部屋住衆、廻座部屋住衆共に二日の召出に被改置候事。

一 元和五年正月元日、一番座蘆名主計様、小場式部殿、宇都宮帶刀様、石塚源一郎殿、大山治兵衛殿、戸村十太夫殿、今宮攝津守殿、小野右衛門殿、古内下野殿、岡本藏人殿、宇留野源兵衛殿。二番座小場六郎殿、多賀谷佐兵衛殿、茂木筑後殿、眞壁右衛門殿、伊達五郎殿、松野源五郎殿、鹽谷彌兵衛殿、矢田野安房殿、須田美濃殿と見得たり。廻座は小野崎源三郎、和田半四郎、小貫大藏、以下略之。

一 元和七年正月、一番座蘆名主計様、小場式部殿、石塚源一郎殿、大山治兵衛殿、戸村十太夫殿、小野右衛門殿、古内下野殿、岡本藏人殿、宇留野源兵衛殿。二番座南修理殿、宇都宮惠齋様、多賀谷佐兵衛様、小

場六郎殿、茂木筑後殿、眞壁右衛門殿、伊達左門殿、松野治郎左衛門殿、武茂源五郎殿、鹽谷伯耆殿、箭田野安房殿、好間兵部殿と見得たり。

一 寛永二年正月、一番座蘆名主計様、小場式部殿、石塚源一郎殿、大山治兵衛殿、戸村十太夫殿、今宮又三郎殿、小野右衛門殿。二番座南修理殿、宇都宮惠齋様、多賀谷佐兵衛様、小場六郎殿、眞壁右衛門殿、武茂源五郎殿、矢田野四郎左衛門殿、好間兵部太夫殿と見得たり。廻座小野崎源三郎、和田掃部助、小貫半四郎、以下略之。

一 寛永四年正月、一番座御左上段蘆名主計様、御右下段小場式部殿、石塚大膳殿、大山治兵衛殿、戸村十太夫殿、小野大和殿、今宮又三郎殿。二番座御左下段宇都宮惠齋様、多賀谷佐兵衛様、小場六郎殿、眞壁右衛門殿、武茂源五郎殿、箭田野四郎左衛門殿と見得たり。

一 寛永六年正月、一番座蘆名主計様、北又四郎殿、石塚大膳殿、大山治兵衛殿、戸村八郎殿、今宮又三郎殿、古内三七殿、小野右衛門殿。二番座岩城佐兵衛様、眞壁右衛門殿、宇都宮新治郎殿、茂木三郎殿、戸村十太夫殿、武茂源五郎殿、箭田野四郎左衛門殿、鹽谷彌六殿、眞壁又十郎殿、大山孫三郎殿と見得たり。

一 寛永八年正月、一番座の頭蘆名主計様、二番座の頭岩城佐兵衛様何も上段着座、兩座自他の御一門合て二十人、其外御宿老以下廻座衆御座配の御記録被差出。御座奉行小田野刑部、佐藤源右衛門、向帶刀、澁江惣四郎に御家老小場源左衛門指南すと見得たり。



一 寛永年中、義隆公御代始て引渡の着座の次第左に記。

河内 北 平 國 庫

岸 下 田 小 石 塚 源 一 郎

近右村戸山治兵衛

字 畫 攝 寫 今 圖 小 野 右 衛 門

門衛右茂內古圖本又太一郎

城山東路

南  
三  
郎

山  
鼎  
足  
鼎  
真  
壁  
右  
衛  
門

多賀名方兵衛

三入雲中隱武夷  
大

自 聖 三 王 上 皇 日 皇  
監 名 氏 音

右二十二家と見得たり。

回座

近 左 江 豐 小 野 崎 内 藏 頭

鷹

の  
爪

御ノ五種田中 田代集 人

右三十四家と見得たり。

(編者云、一本これと相違あり、今略す。又小田野又八郎二ヶ所に出づ、原本の儘とす。)

## 引渡一番座

佐竹主計

先祖北左衛門尉義信は、第十六世左馬頭義治公御三男にて右京兆義舜公同母弟也。其長子又治郎義住、於常州都垂軍功於宇留野戰死、故に次男又七郎義廉嗣と成る、左衛門大夫と稱す。其子右衛門尉義斯、其子義憲其子又七郎義廉也。連綿相續、慶長七年御國替之時秋田へ御供、同十九年十二月大坂歸陣の節於遠州熊川死す。無嗣に依て闌信公の御末子申若君を嗣とす。然るに元和七年の夏天英公の御養子にせられ北家暫く嗣絶ゆ。寛永五年、高倉大納言藤原永慶卿の次男おしけ殿を養せられ同年八月秋田へ下着、依之北家被令相續。又四郎義隣と號す。天英公、御一門隨一とせられ引渡一番座に被着。始久保田東中城に居住、後長野櫻小路今の屋敷へ移り、名河内に改む。然るに承應二年角館蘆名の家來を隊下とせられ、主計義隣に改む。天和元年今宮彈正隊下被召上被預之。其子左衛門義明の時、元祿年中式部少輔義郡君御家來廿餘人御暇の節義明の隊下とせられ、其子主計義命の時實永五年、御當家准次男、扇の紋幕、義の一字不可有相違天祥院殿御證文賜て、其子今の主計義富也。義富嗣子なく、東山城義本三男左膳を養て嗣とす、是

今の圖書也。寶曆七丑年河内と改、後主計と改む。嫡子河内。

佐 竹 大 和

先祖大炊介義躬は第十一世右馬頭義篤公の庶長子にて、伊豫守義宣公の御庶兄也。常州小場の庄に住す、故に小場を稱す。其五代の孫小場大炊介義忠、文龜三年於孫根討死す。其孫式部大夫義實天文九年於部垂生害。其子參河守義忠無嗣子、源真公御三男義宗（圖信公同御母弟也）養て嗣とし式部大輔と稱す。永祿十二年小田天庵入道氏治没落以來小田城主とせられ、其子式部義成、御國替の時數多の組下を携へ秋田へ御供、天英公命て大館の城に被差置、南部、津輕、蝦夷等の押とす。其子參河義易、長子式部義繼父に先達て早死、於茲無嗣、義易の弟小場勘解由隆房の長子六郎義房を養て爲嗣、後石見と稱す。萬治年中天山公佐竹稱號を賜り、自爾小場を佐竹と名乗。其子六郎義武元祿九年早死て無嗣、東中務義秀の五男亥之助を以爲嗣六郎義房と號す。寶永五年、御當家准二男、扇の紋幕、義の一字不可有相違旨天祥院殿御證文賜り、且大祖を、別當秀義公御庶子酒出六郎義茂の二男小場六郎三郎義久に命せられ、其曾孫源六郎義氏、弟源八重義皆無子、義躬を以繼とし系圖被授與て、同七年義房又早死無嗣に依て小場勘解由長子元千代を嗣とし、石見義暄と號す。是今の大和なり。（義暄後に義村と改、嫡子左膳。）

石 塚 孫 太 夫

先祖越後守宗義は第十一世右馬頭義篤公御三男にて、伊豫守義宣公同御母弟也。常州石塚の庄に住、故



に石塚氏と稱す。其六世の孫大膳亮義胤、永正十年於宇都宮<sup>(宇都宮)</sup>右塔原戰死す。其子彦治郎義衡天正五年關山にて討死、其子源一郎義慶、次男越後守義國皆無子にて死す。於茲小場義宗入道幽庵、義國の妻に後家入せられ源一郎義辰を生し、暫く石塚氏の名代を致さる。義辰、御國替御供秋田に至り名を大膳に改む。其子大膳義全の時無嗣子、南淡路義章三男義里を養て爲嗣市正と稱す。其子孫太夫義據元祿年中御家老と成る。又無嗣子、東中務義秀二男義敬を養て爲嗣主殿と號す。寶永五年、御當家准二男、扇紋幕不可有相違旨天祥院殿御證文賜り、其子今の孫太夫義幾、寛延元年今宮大學義透が檜山の組下<sup>(舊松野氏の組下也)</sup>被預候。<sup>(寶曆六年子三月御家老と成り、同七年丑十二月名を市正と改め又義陳に改む。其後御役被召放知行高被召上暫く戸村十太夫に御預成り、其後親子對面御免。其子源一郎。)</sup>

## 大山十郎

先祖左京亮義孝は第十一世右馬頭義篤公御四男にて、伊豫守義宣公御庶弟なり。常州西大山の庄に住す、大山氏を稱す。其子因幡守照岩入道、正長元年八月高久右馬入道、檜澤助治郎等を誅し鎌倉公方持氏公より感書を賜り、又翌年於小里抽戰功。其孫因幡守常全入道、伊豫守義俊公屬致忠節、中務少輔義宗、山入氏義逆亂の時義舜公御味方仕戰功拔群。其孫因幡守義景天正年中數度致忠節、岩瀬大平之役抽軍功天英公御感書を賜り、後剃髮永鐵入道と號す。其子治兵衛義則、御國替の節秋田へ御供角館に被差置、名因幡守に改む。其子治兵衛義休無嗣、茂木筑後治貞二男平八を爲養嗣因幡義武と稱す。延寶八年

三月、德雲院殿命て院内口の押（矢田野氏の代り）こせられ彼地に移る。其子因幡義次の時寶永五年、御當家准三男にて扇紋幕不可有相違旨天祥院殿御證文賜て、其子若狭義門、其子今の十郎義福。相續き院内口を押事如舊。

戸村十太夫

先祖常陸介義倭は第十四世右京亮義人公御三男にて、伊豫守義俊公御同母弟也。太田の城南の方大内氏か宅地に住す、南殿と稱す。後戸村の地に遷住て戸村氏と稱す。無嗣子、依て尊兄義俊公の五男八郎義易を養て爲嗣上野介と號す。其曾孫攝津守義廣、其子越前守義和共に武邊の譽を顯す。其子八郎義國、御國替の時幼稚にて秋田に下着、後十太夫に改む。慶長十九年於攝州大坂高名、台徳院殿御感狀及御腰物、御時服賜て、寛永五年天英公命て、其嫡子右近義宗に家督を給り引渡一番座に着せられ、義國は次男多賀谷彦太郎名代に命せられ引渡二番座に着せらる。然るに義國を御養君義隆公御後見とせられ給ふ、天山公の御家老と成る。是御當國御一門御家老の始なり。右近義宗父に先達て早死、其子内藏丞義連爲嗣後十太夫と稱す。寛文十二年七月德雲院殿命て横手城代（須田主膳盛次の代り）こせられ、彼地に移り須田氏が組下を預らる。其子十太夫義覺之時寶永五年、御當家准二男、扇紋幕不可有相違旨天祥院殿御證文賜て、且正徳三年御家老とせらる。其子十太夫義見、其子今十太夫迄相續き横手城代如舊。義敦公暫く御家老とせらる、安永二巳年なり。翌三年病氣に付御役御免横手へ歸る。

## 今宮又三郎

先祖涼松院永義法印は十七世右京兆義舜公御長子にて、月光義篤公の御庶兄也。曾て跼蹐に成る、依て淨屠と成り修驗道の法脈を發す。寺山の地に居を構へ今宮氏を稱す、白羽の別當を兼ね終に領内の山伏を掌握す。且諸國戰爭の時勢に依り闔信公組下を附せらる。其長子淨蓮院光義を以令寺方を西關東の物録と成る、爾より其法脈を子孫に傳ふ。御國替の時光義及其子攝津守道義秋田へ御供、暫く増田村に居住又角館へ遷る。其組下追々來る、猶從之。其子義堅、彼兩院の法脈を傳續て六郡の修驗社人を知行す。天英公引渡一番座に命せらるといへども、涼松院と成りたる以來は金の間於御書院獨禮す。然るに其子攝津守義教、天和元年德雲院殿命に違ひ被懸冠、依て本寺の席を被削大館へ謫流佐竹石見義房に被預。於茲永義の法脈令廢絶、組下の面々は鹽谷氏に被預て、元祿三年久保田へ被返といへども堅く蟄居す。其嫡子文四郎永教被召出廻座に列座せしめらる、天祥院殿大番頭とせられ寺社奉行を兼しむ。名外記に改め、正徳年中故ありて改易せられ終に不待恩免して死す。永教曾て無子、末弟敬之助を養とし又三郎光冬と稱す。故に、永教死後光冬を被召出再廻座に列席せしめらる。然るに享保六年圓明院殿義教を召して被令拜謁、光冬を御家老とせられ名大學に改む。同十年引渡一番座に被復置、且御一字を賜り義透と稱す。且つ松野氏が檜山の組下を被召上義透に被預置、雖然永義の法脈は終に被立す。寛延九年御家老役組下共に被召放閑居す。其子又三郎早死、無嗣故二男欽治嗣と成る、今の又三郎義榮

事也。義榮寶曆八年寅十一月御家老被仰付、同卯年名大學に改め、明和元年申十一月二十三日御役被召放、安永七年戌六月義敦公又候御家職被仰付。）

### 小野岡市太夫

先祖右衛門佐義森は第十四世右京兆義人公御四男にて、伊豫守義俊公御同母弟也。始小野の地に住、依て小野氏と稱す、後高倉の郷に住す。其曾孫大和守義繼御國替の時秋田へ御供、天英公引渡一番座に被着。其玄孫市太夫義伯の時、永祿十三年徳雲院殿命て小野岡氏と被稱、寶永五年御常家准三男、扇紋幕不可有相違旨天祥院殿御證文賜り、享保三年十一月圓明院殿御家老とせらる。其子今の市太夫義亮、寶曆四年正月當君御家老にせらる。（寶曆五年正月病死、其子源四郎義著寶曆七丑五月二十六日御家老と成り久太夫に成る、明和四年病死。其子四郎。）

### 古内藏人

先祖一溪齋は第十七世右京兆義舜公御末子にて、月光義篤公御庶弟也。初<sup>メ</sup>僧と成る、常州古内郡に住す、還俗して古内氏を稱す。後茨木郡藤井の地に食邑す。其子下野義貞及其子雅樂義通、御國替の時秋田へ御供大館へ被差置、天英公引渡一番座に着せらる。雅樂後儀右衛門と改む。其子義定の長子三七義定に先達て早死、故に二男傳九郎爲繼藏人義智と稱す。其子茂右衛門義陳無嗣子、戸村十太夫義連四男左惣治を養て爲嗣。寶永五年、御常家准四男扇紋幕不可有相違旨天祥院殿御證文賜て、後藏人に改め



是今の藏人也。

岡 本 又 太 郎

先祖梅江齋は常州西金砂別當曾端法印の子にて、其先野州小山氏一族岡本鞠負允親元の子孫と云ふ。右京兆義舜公金砂御籠城の節、曾端忠節拔群也。文龜二年山入氏義御退治の上其嬰子を被令近侍、寵遇日渥く長て藏人と號す。聰敏武勇衆を越終に松山の城主と成る、威風門族を推す。四代の君に奉仕忠節武功不可勝斗、故に於子孫も御一門同然たるべき旨御契約有り、天正四年七十七歳にて死す。其子江曾齋良務相續致忠節、慶長三年六十八歳にて死す。其子藏人宣綱御國替の時秋田へ御供、天英公引渡一番座に被着一門の列に稱せらる。其嫡子助太郎家督と成り藏人に改む、無子にて死す、故に其弟三四郎を嗣とし玄番元弘と稱す。其子又太郎元朝元祿十四年十月徳雲院殿御家老とせられ、寶永四年五月、梅津半右衛門忠昭が角間川組下を預かる。其嫡子掃部父に先達て早死、故に二男卯五郎幼稚にて爲繼、早死無嗣。於茲澁江十兵衛光重の男武吉を嗣とし又太郎元智と號す、又無嗣して死す。故に石塚主殿義敬二男嗣と成る、是今の又太郎元貴也。(寶曆六子年御家老と成り、明和四年十二月御役被召放生涯蟄居、嫡子傳之助に廻座を以被召出。安永三年義敦公又候御家老にせられ、即引渡本席に被復置。)

引 渡 二 番 座

先祖東左近大夫將監政義は第十六世左馬頭義治公御四男にて、右京兆義舜公御同母弟也。初僧と成り周悦と號す、還俗して南酒出の家を給り太田城東に住す、東殿と號す。其子左近大夫將監義堅の嫡子薩摩守義喬無嗣早死、故に其弟酒出源六郎義久嗣と成る。武勇衆に超、天正年中惣侍所を給り山城守に成る、御床机代とせられ忠戰不可勝斗。同十八年豐太閤、從五位下中務大輔に任せられ羽柴の姓、桐の紋を賜り、東照宮御劍を賜り、常州鹿島、茨木、新治、筑波等の於諸郡六萬石食邑す。慶長六年十一月於水戸死す。其子將監義堅、幼稚の時台徳院殿に謁し御劍を賜り、御國替の時秋田へ御供寛永元年十一月死す。其子源六郎義臣同四年十一月早世、無嗣子舍弟九郎三郎義永嗣と成る、又翌年早死無嗣。於茲義久の末子小野岡源三郎宣政の長子を以て嗣とし、源六郎義長と稱す。于時義長微弱に依て、天英公、宣政東家の代官を命せられ引渡二番座に被着。義長、寛永十七年八月於京都早死（于時十五歳）又無嗣。故に高倉大納言藤原永慶卿四男（北主計義隣の弟也）を嗣とし、同年冬秋田へ下着山城義寛と號す。天山公依舊例御床机代とせられ、於今代々御旗本に任爲遺職。義寛無嗣子に依て兄主計義隣の二男主殿義秀を養て嗣となし、後中務と稱す。寶永五年、御當家准三男、扇紋幕、義の一字不可有相違旨天祥院殿御證文賜り、其子山城義元の嫡子源六郎、享保元年、前の壹岐守義長君の御養子と成り同三年御家繼を受授せられ、從五位下壹岐守義道に任せられ、故に二男午千代嫡子に立。享保十一年十一月圓明院殿、如先例被加首服源六郎義珍と稱す。是今の主殿也、後山城と成る。嫡子源六郎父に先達て早死、二男宇都

宮の嗣となるを戻して爲嗣、將監後山城と改る。

佐竹新發意

先祖南治郎左衛門尉義里は第十七世右京兆義舜公御三男にて、月光義篤公御同母弟也。太田南城に住し南殿と稱す。無嗣に依て、源眞公御二男左衛門尉義尙(闔信公御同母弟なり)嗣と成る。其子三郎義種幼弱にて父におくれ、闔信公太田の城に迎て養育せらる、長して左衛門尉と稱す。御國替の時多數の組下を召連秋田へ御供、湯澤の館に留り最上庄内の押とせらる。其子淡路義章の時、天英公引渡二番座に命せらる。徳雲院殿御外祖父也。其子美作義著、其子淡路義敬、其子淡路義安相連綿し、寶永五年、御當家准二男、扇の紋幕、義の一字不可有相違旨天祥院殿御證文賜り、其嫡子三郎義利、其弟義貫父に先達て早死。三男竹壽嗣と成る、淡路義伯と稱す。又早死、其子新發意嬰弱たるに依て、義伯の弟壽六嗣と成る、淡路義持と稱す。又早死。故に今の新發意箕裘を受くる也、三郎義舒に成る、早死す。依て早川兵馬峰昌爲嗣。

眞壁掃部介

先祖安藝守氏轉は、常州眞壁の城主前の安藝守久轉入道道無の嫡男にて、其先高望王の嫡男常陸大掾平國香より出、其七世の玄孫多氣大掾眞轉の四男長轉、常州眞壁郡を領す、眞壁六郎と號す。是より久轉迄十六代眞壁の城主たり。然るに永祿年中より志を當家に通し、小田天庵を亡し終に氏轉兄弟御當家

に參る。其子左衛門佐房轉及其子掃部助重轉、御國替の時秋田、御供角館に被差置。天英公引渡二番座に着せられ名右衛門佐に改む、閑居の後岑庵と號す。其子又十郎後右衛門幸轉の時、天山公命て、箭田野氏に代り院内口を守らしめ彼組下を預らる、彼地へ遷居す。無嗣子、依て南淡路義章の五男長太郎方轉を養すといへども早死、故に眞崎五郎左衛門廣慶の嫡男を養て爲嗣、甚太夫光轉と稱す。寛文十二年十月、徳雲院殿再院内口を箭田野氏へ被復命の時光轉久保田へ被移、自爾世々東中城に住す。其子甚太夫、其子又十郎連綿する處、享保三年又十郎早死無嗣、故に甚太夫舍弟造酒嗣と成る、甚太夫寛轉と稱す。又無子に依て宇都宮帶刀典綱二男を養て爲嗣、是今の掃部介康轉也。(御家老と成る、寶曆六子十一月御役被召放、其子掃部助義敦公御家老とせられ、于時十八九歳。)

#### 宇 都 宮 四 郎

先祖惠齋入道は其先、野州宇都宮正統左衛門尉朝綱十九世の孫にて、從四位下侍從宇都宮下野守藤原國綱の舍弟也。初下總國結城晴朝の養子と成り結城七郎朝勝と稱す、故有て結城を避て宇都宮へ歸り、剃髮して惠齋と號す。慶長二年十月、兄國綱、太閤の蒙勘氣所領被沒收浪牢と成る。于時惠齋、關信公御甥成るを以て御當家へ寄食せられ、御國替の時秋田へ御供。天英公、客人の禮を以て御賞翫被成たる人也。無嗣に依て、命て眞壁岑庵重轉二男新治郎光綱を繼子とせられ、引渡二番座に着せられ後帶刀と號す。寛文二年三月天山公御家老とせられ、其子帶刀亮綱無嗣子にして死す。於茲、玉生八兵衛舜乘嫡男



を嗣とし帶刀典綱と號す。享保二年六月圓明院殿御家老とせられ、其子今の四郎也。(寶曆六年早死無嗣。東山城二男嗣と成る、同十二年本家相續に付立歸る。戸村十太夫二男玄番爲嗣。)

多賀谷將監

先祖左兵衛宣家は第二十世圓信公義重公御四男にて、天英公御同母弟也。慶長三年、總州下妻城主多賀谷修理大夫平重經の養子と成る、多賀谷氏を稱せらる。御國替の時其家臣等を携へ秋田に至り、仙北白岩の城に住す、後山本郡檜山の城に遷さる。抑多賀谷氏其先未詳、右大臣賴朝卿御時、多賀谷三郎と云ふ者結城七郎朝光に従屬す。爾より子孫結城氏の臣となり、多賀谷景政の時、總州下妻の城主修理入道長光の跡を没落し下妻城主と成る。猶多賀谷修理亮泰政、康治三年結城繁朝を輔佐し管領上杉憲忠を誅す、時鎌倉公方より金子の家を給りたりと言ふ。自爾勢ひ増長て結城に並、修理大夫重經に至る迄代々下妻城主にて關東無双の大名たりしが、重經漸く勢ひ迫り終に御當家に隨臣す。其子左京、父子不和にて浪牢す、故に宣家を養て嗣とし剃髮して道雨齋と號す。御國替の時江州佐和山に蟄居す、元和四年十一月彼地に死す。宣家は寛永五年八月岩城氏の嗣に台命せられ、從五位下岩城但馬守宣隆と改られ由利郡龜田二萬石の主と成る。於茲同年十一月、天英公命て戸村十太夫義國の二男彦太郎を多賀谷氏の嗣とせられ、幼弱に依て義國を多賀谷氏の代官に被命引渡二番座に着せられ、且つ先道具免許せられ子孫の規模とす。彦太郎早死、又舍弟一學を嗣とせられ成長の後佐兵衛隆家と號す。承應二年天山公

命て、蘆名氏の家來二十餘輩檜山へ被預隆家が組下とせらる。寛文五年七月御家老とせられ後隆長に改む。其子將監隆景相繼て檜山に住す。元祿十四年十二月、徳雲院殿命に違ひ久保田長野屋敷に被令隠居、知行八千石の内三千石被召上、殘五千石にて戸村西之助を嗣に命られ、正徳元年天祥院殿御下宇を賜り彦太郎格經と號す。無嗣子、依て戸村十太夫義見の二男彦太夫を養子すといへとも早死、故に其弟を養て爲嗣、今の將監是也。(將監早死、其子龜太郎後下總に改。)

#### 茂 木 筑 後

先祖茂木上總介治房は常州茂木の城主にて、其先右大將賴朝卿の寵臣八田右衛門尉源知家か三男茂木三郎知基十八代の孫也。治房及其子筑後守治良、次男越前守義成等御當家へ隨臣して數度致忠戰、御國替の時治良秋田へ御供仙北六郷へ住す。後久保田へ移さる。天英公引渡二番座に着せられ、其子掃部父に先達て死す、其子三郎治貞承祖して宮内と號す。又筑後に改め(法名休寛)其子將監治昌、其子儀右衛門知恒の時、天和三年六月徳雲院殿命て、十二所口押梅津五郎左衛門忠貞が代とせらる。十二所へ引移り彼組下を被預、自爾相續く。其子筑後知量、其子宮内知暢、其後三郎知昆と連綿す。知昆早死無嗣、故に其庶兄宇五郎を養子す、今の筑後知康也。(安永年中將監に改む。)

#### 伊 達 外 記

先祖參河守盛宗は伊達左京大夫晴宗四男にて、大膳大夫輝宗同母弟也。其先中納言山蔭の二男右京大

夫藤原仲正より出、其九代の孫朝宗、右大將頼朝卿より奥州伊達郡を給り始めて伊達氏を稱す。其子常陸介宗村入道倉西より十四代の嫡孫晴宗成と言。盛宗初奥州宮木の城主國分能登守平の盛氏の爲嗣、國分彦九郎義重と稱す。名取、黒川、宮城三郡を領す。然るに其甥中納言正宗と不和、終に天正十九年俄に奪掠せられ流落て御當家へ被參、本名に歸り伊達三河守盛宗と改む。天英公御叔父たるに依て重く扶持せられ、無嗣子、東中務大輔義久三男を養て嗣とし左門宣宗と稱す、引渡二番座に着せらる。代々御下字を賜り、其子外記隆宗、其子市十郎無嗣して死す。於茲東中務義秀三男九郎三郎を繼とし處宗と號す、外記と改め、閑居備前と改む。其子九郎三郎峯宗今の外記、又備前に改む。明和五年義敦公御家老とせられ、其子外記早死。二男

## 武 茂 三 郎

先祖武茂上總介堅綱は、其先<sup>キ</sup>宇都宮左衛門尉藤原朝綱十四世の正嫡左衛門尉正綱の長子、鎌綱踰跋たるに依て其子彌五郎周綱、其子吉綱、其子守綱、其子堅綱迄相續、及其子左馬介輝綱始て御當家へ隨臣數度致忠戰、天正十七年輝綱須賀川加勢の爲大將戰死すといへども、堅綱は二男女番を嗣とし剃髮蘆庵と號す。御國替の時蘆庵及玄番秋田へ御供天英公引渡座に被着、其子源五郎重綱後權太夫に改む。其子權太夫守綱、其子三郎無嗣、故に松尾靱負隆陳の二男竹之助を養て嗣とし、今三郎是也。其子源五郎早死。其子

## 箭田野四郎左衛門

先祖箭田野安房守義正は、其先<sup>\*</sup>奥州岩瀬郡須ヶ川二階堂の一族治部大輔藤原行義、箭田野の庄大里の城に住す。其子箭田野三郎と號す、是より以氏とす。其子四郎左衛門尉行久、其子義正也。然るに天正十七年十月、右二階堂遠江守盛義の後室須ヶ川籠城せられ、伊達中納言正宗に責られ落城の時、義正（于時東三郎）大里の城に楯籠り、正宗雖責終に不能陷事歸陣せらる。於茲義正御當家へ被參隨臣す。抑二階堂家は其先<sup>\*</sup>左大臣武智麻呂の四男參議乙麻呂十一世の孫、駿河守藤原維遠始て二階堂と稱す。其五代の孫菟山城守行政三男出羽守行義入道行宣の子孫、奥州の刺史と成り岩瀬郡須ヶ川城主たりと云ふ。義正安房守に成り御國替の時秋田へ御供、天英公組下を附與せらる。院内口を守らしめ引渡二番座に被着。其子四郎左衛門行正、其子四郎左衛門行貞迄相續院内口押たり。然るに行貞の代故有て避て久保田城下へ遷され眞壁氏代之、寛文十二年十月徳雲院殿眞壁を久保田へ被遷、再行貞の子四郎左衛門行光を院内口押とせらる。延寶八年三月行光又院内を避て久保田へ歸る。（此時組下共に大山氏に被命、自衛代々久保田へ住す。其子四郎左衛門、其子藤三郎、其子四郎左衛門。）

## 鹽谷美作

先祖鹽谷伯耆守は野州宇都宮一族にて、其先<sup>\*</sup>宇都宮左衛門尉藤原業綱入道蓮生（朝綱の嫡子）の末子、四郎兵衛尉朝業鹽谷郷を領す、鹽谷氏を稱す。伯耆守は彼子孫にて、慶長二年宇都宮侍從下野守國綱所



領沒收せられ浪牢の時、共に流落して御當家へ被參、御國替の時秋田へ御供、後年南部境十二所口押赤坂氏代りに被移彼組下共に被領、天英公引渡二番座に被着。寛永八年三月閑居す（于時七十三）。其子民部貞綱、其子民部重綱と相續十二所に住す。延寶七年七月、徳雲院殿故有て隊下共に被召上梅津五郎左衛門忠貞を代らしめ、重綱は角館へ被移。然るに天和元年、角館今宮攝津守義教故有て大館へ被預置候時彼の組下を重綱に被預て、自爾代々角館に住し組下を指揮す。其子民部方綱、正徳四年三月無嗣て死す、故に舍弟彌三郎を以て嗣とす。是今の美作也。其子彌太郎、明和五年御家老と成り名伯耆と改め、安永六年酉十二月御役被召放。

○右引渡は、天英公、一門名家の歷々を以一番と二番と被成、各々左右に令列座客人の禮を以御取扱有り。されは一に對するの二にして共に勝劣なく、對格の座席なり。故に東家、南家を二番座とせられたるは、後來異論有間敷爲の御思慮とぞ。然るに近來引渡繰上りと被仰出たる故に、四家は格別、其外二番座の面々は一番座の次座たる由異論出來、此儀上にも決談なく面々我勝の爭論止事なし。所謂繰上りと云ふは東は北に對し、南は西小場に對し、眞壁は石塚に對し、宇都宮は大山に對し、多賀谷は戸村に對して勝劣なく對々にして、二番座は一番座に劣の謂ふに非されは、南家、小場家の席論も隔年に被仰付たる也。然るに一對高下雖不可有之他家は御一門の上に謙退し、私慮を以て眞壁は石塚の次に着座し、宇都宮は大山の次に、多賀谷は戸村の次に着候事自己の思惟にして公格とは云ふへからす。戸村義

國、多賀谷の名代せられし時戸村右近の上に着きたる、是對々の故なりと知るへし。

一 四家殿上にて元服の事、關東にて南三郎義種を始め北又七郎義憲、東源六郎義堅殿上にて元服せられ、於御當國北又七郎義鄰殿上にて元服せられたる先例に依て、今以て四家殿上にて元服也。蓋古式北、東は義鄰の式の如く元服、南家は式少略せられ、小場家も夫に准する口傳有り。

一 御分流の面々初て出仕之節義の一字を下され、四家斗は御免許なしに義を名乗る事御當國にて御制法也。已前は御支流の面々も扇の紋幕、義の一字名乗りたる也。

一 宿家老と云ふは鎌倉右大將家よりの稱號にて、今の家老と云ふか如し。御當家にては別當秀義公の御時小野崎、小貫、那珂、平澤を四天宿老と稱せられしより子孫其職を相繼、淨喜公御時に至り那珂叛逆にて滅亡、平澤御家老立退、其後は小野崎、小貫、江戸、大塚を四天と稱せられ、義俊公以來中絶して其式もなく、關信公、天英公御時は小野崎、江戸、和田、小貫を四天と稱せられし處に、天正年中小野崎、江戸滅亡して和田、小貫兩宿老斗殘ければ四天の號は廢絶しぬ。然るに天英公、於御當國東中務大輔義久の末子源三郎を以て山能小野崎を再興せられ、山能、和田、小貫を三宿老と稱せられ、廻座の座上とせられたる也。去れば此三家御家臣の長たるに依て、一門客人の外如局住、歷々とても三家老の上に着座する事不叶古實にて、此三家の席に被令廻列故廻座とせられ、何も出仕家督の後初て御座へ參るは着座の願申上候事なれども、三家斗は着座願不致々々御座に着來候古實の處に、元祿年中より何も同然に着座

願申事に相成、古實廢絶申事。

## 回座

小野崎藤太郎

先祖、鎮守府將軍兼武藏守田原藤太藤原秀郷六世の孫、常陸國佐都郡の住人荒太夫通成の後裔也。其嫡孫小野崎太夫治郎通長、御先祖昌義公京都より御下り始て主從の契約仕領内佐竹の郷へ奉迎、自爾佐竹氏を稱せられ、依て通長を棟梁の臣とせられ多賀谷友部の庄山能の城に移住す。故世以山能小野崎と號呼す。爾後秀義公の御時小野崎、小貫、那珂、平澤を四天王宿老とせらるゝと云ふ。通長七世の孫通胤、其子通春等頗武功を顯し、其子山城守通郷、淨喜公御時惣侍所賜り且御床机代とせらる。爾より其子通綱、其子憲綱相續て惣侍所を賜り山城守と成る。其子山城守朝綱の時、義俊公御浪牢以來、杉室に取出を構へ實定の下知を拒み領内に自立す、是より彼遺職中絶す。其子山城守親通、義治公御父子御和睦の後出て從仕すといへども又山入か下知を拒み山能に引籠り、義舜公御開運の時、其子山城守通戴共に出て從仕。此時舊例に復せらるゝといへども、此に宿老の名のみにて四天の古式も勿りしなり。其子山城守成通無嗣子、故に源眞公の御末子中城三郎を以て繼とせられ昭通と號す。又義通に改む、山城守義昌と稱す。關信公舊例を以て御床机代とせらる。然るに天正十三年十月於奥州高倉、伊達正宗と對陣の砌、爲奴僕營中に被害。於茲山能家斷絶、其舊臣悉く御直參と成る。故に其聲佐竹源六郎義久に

彼職を賜り山城守に成る、御床机代と爲致、爾より於今東家代々の職と成る。後又義久の舍弟酒出彌市郎を以て山能小野崎氏を雖被爲再興、間もなく早死又斷絶す。御國替の後、佐竹古中務大輔義久の後室寶鏡尼は古小野崎山城守義政の娘なりければ、親の名跡被立下度旨御訖申に付義久の末子源三郎を以て山能小野崎を再興せられ、舍兄將監義堅より令分知、御下字被下小野崎源三郎宣政と稱す。宿老第一の席に附せらる。慶長九年御簾仕立の時十五歳にて墓日被仰付、寛文五年十二月佐竹の代官、實子源六郎義長幼少之内、三千石に被仰付御相番とせらる、後名内藏頭と改む。寛文十三年正月、天山公御簾仕立の時再墓日被仰付、無嗣子依て向豐前重政の二男辨藏を養て嗣とす、伊織と號す。天山公如舊例御下字を被下隆政と稱す、又隆通と改む、大番頭とせられける。又無嗣子故に、初梅津五郎左衛門忠貞の二男を養て源三郎隆頼と號すといへとも早死に依て、後小貫宇右衛門頼仲の二男善治を養子藤太郎處通と號す。嫡子伊織處政父に先達て早死、二男辨藏家督と成り伊織格通と號す。又無嗣子、東山城義本の四男秀之助を養て繼とす。是今の藤太郎峰通也。

#### 和田正五郎

先祖和田安房守昭爲は、其先<sup>キ</sup>鎌倉右大將の寵臣和田平太胤長建保二年春奥州岩瀬郡へ浪刑せられ、同年夏彼地に被誅。其の落種の子成長して二階堂家に從仕、和田太郎左衛門義次と號す。其子孫伊勢守爲長御當家へ參り、大隅守爲家に至るといへとも未詳。爲家無嗣子、依て石井六郎と云ふ者を替名代と



して和田大藏爲忠と號す、爲忠、昭爲を生て後本名を名乗り石井豐前守と改む。昭爲、源眞公に奉仕、御下字を被下掃部昭爲と稱す。後安房守に改、凡て御三代に奉仕數度の忠節武功不可勝計。關信公宿老とせられ、水戸御在城以來隨一の御家老たり。御國替の節御先きへ秋田へ可罷越旨伏見より御書被下といへとも別人を指越、其身常州に止り御城渡等諸事取收め御跡より秋田へ下り、後裏老を造て閑居、櫻小路屋敷に住す（今北家在府屋敷也）。其子掃部助重仲天正十六年玉里御陣の節討死、其子十二郎秋田へ御供仕東中城に住す（後人見宮内住す、今の今宮又三郎屋敷也）。然るに十二郎騷氣に成り、依て昭爲の末子半四郎爲宗を令勤仕。爲宗大坂兩度の役御供仕、元和五年御上洛の節其兄小貫大藏頼重於京都切腹被仰付たるに依て、翌年四月爲宗小貫氏の嗣に被仰付。依て古昭爲か娘方の孫なれば滑川兵部右衛門の嫡子を和田氏の嗣とし、掃部助重爲と號し、其身は小貫氏と成り權之助頼忠と改む。天英公、山能、和田、小貫を三宿老とせられ廻座上座に被仰付。寛永十年二月十三日夜、和田十二郎卒爾に小貫權之助か子半四郎殺害する時重爲改易せらるといへとも、古昭爲か忠功を思召に依て彼跡を被立置候旨に付間もなく被召出、爾より相續き其子掃部助光爲、其子掃部助以爲、其子掃部助爲重代に大番頭とせらる。其子十三郎爲純、其子今の正五郎爲修也、後甚太夫に改。

## 小 貫 彦 三 郎

先祖は、鎮守府將軍兼武藏守田原藤太藤原秀郷より五代の裔孫、常陸國岩瀬の庄主人岩瀬の太夫通近の

後胤也。其玄孫岩瀬太夫三郎、御先祖昌義公京都より御下向の時初めて主従の契約仕、爾より御家臣と成り代々岩瀬與市郎忠勤に依て御運を被爲開、彼功報として食地を久慈郡小貫に賜ふ。爾より子孫移住して小貫氏を稱す、故に世岩瀬小貫と稱呼す。別當秀義公四天と稱せられ、子孫相續て御當方の宿老たり。八世の孫小貫伊勢守無嗣子、小野崎下野守通春の三男彦三郎通伯を養て小貫氏の中興とす。其子伊勢守通勝に至る迄相續き四天王たるの處、義俊公御浪牢以來、其後筑後守通定部垂城に自立て實定の下知を拒み小野崎を名乗り、故に其職中絶す。五代の孫小貫兵庫助俊通、享保二年十月於部垂城滅亡す。其子彦三郎二歳にて逃れ、成長の後被召出太田に勤仕、再宿老に被復伊勢守頼俊と稱す。其子大藏大輔頼久數度の武功を顯し、水戸御在城の始より御家老と成る。高麗御陣の時御供暫く致渡海、御國替の時伏見より秋田へ御供仕、慶長八年三月於土崎湊死す。曾て無嗣子、故に和田安房守昭爲の五男を養子清三郎と號し頼久か家督を給り、大藏頼重と改む。天英公、山能、和田、小貫を三宿老と稱て廻座の座上に着うる。頼重大坂兩度の役に御供仕、亦元和五年御上洛御供、於京都故有て切腹被仰付。翌年四月其弟半五郎爲宗小貫の嗣とせられ權之助と成る、寛永十八年又切腹。其子宇右衛門頼仲改易せられ、同二十年七月被召出舊祿屋敷共無相違被返下、慶安二年天山公御下國御禮爲使者江戸へ罷登、始て將軍家へ御目見得仕(是御暇御禮使者御目見得始也)、徳雲院殿御局住御家老とせらる。其子剛右衛門頼忠、其子儀右衛門頼安相續て大番頭とせらる。頼安無嗣子、依て松野彌十郎綱利二男椿八を養子清三郎頼兼と

號す。賴兼大番とせられ早死す、其子與市微弱たるに依て實弟松野伊三郎を看抱とす。是今の彦三郎賴候也。嫡子與市賴保。

## 酒出金太夫

先祖八郎治郎定義は、第五世別當秀義公の御三男北酒出八郎季義の二男にて八郎治郎義資の弟也。義資の孫播摩守義教南朝に屬し、延元年中一族滅亡子孫斷絶す。定義は美濃國に住し佐竹氏を稱す。其曾孫和泉守義基足利幕府に屬し致忠戰、領を濃州山口、有知等數ヶ所を給り代々京都室町將軍に奉仕。義基より六世の孫新助基親の時濃州亂を避け常州へ來り、被列門客、馬場と云ふ處に住て馬場の新助篤親と改む。其子馬場和泉守政直慶長七年御國替の時、車丹波守斯忠に徒黨し竊に公儀を犯さんとする事露顯し被召捕、同年十月嫡子新助重親と共に被誅戮。其次男善五郎以下幼少にて逃れ母方祖父大山因幡入道永鐵の許に育せられ、長て大山氏を以て被召出孫三郎政忠と號す。始は引渡二番座に着せられ、寛永八年より廻座にせらる。後金太夫に改め、又無嗣子に依て南淡路義章の四男孫三郎を養て嗣とし、後相模寛政と改む。又無嗣、茂木筑後治貞の三男小傳治政盈を養て嗣とし後金太夫季親と改む。天山公寛政十一年酒出の本名に復せられ、徳雲院殿、延寶二年扇紋幕停止せられ二ツ頭丁子巴に改させ給ふ。季親又無嗣、向源左衛門盛政の二男孫三郎を養といへとも早死す。依て又茂木儀右衛門知恒の二男を養て嗣とし孫十郎季堅と號す。寶永五年天祥院殿、支流の御證文を賜り後内記に改め、正徳年中故

有て改易せらるゝといへども、恩免の後本座に復せらる。季堅又無嗣子、南淡路義安の四男第助を養て嗣とし、是今の金太夫也。

### 松野 茂 右衛門

先祖松野六郎左衛門尉業義は、宇都宮左衛門尉藤原朝綱の曾祖下野前司泰季の季子也。野州松野の郷に住て以て爲氏。其子松野五郎綱義より八世の孫越中守綱業、其子上總助資通の時より御當家へ隨臣して數度致忠戰、其子民部大輔、月光様御下字を賜り篤通と號す。於寺山戰死するに依て其子丹波守綱高祖父資通の家督を給はり、御國替の時御供仕、於久保田山本郡檜山に被差置、岩館口能代海手の押とせらる。其子源五郎綱廣（後に治郎左衛門）迄引渡二番座に着られ、寛永八年より改て廻座とせらる。治郎左衛門綱重迄檜山に在住、其子源五郎綱宗幼少に依て久保田に住したる以來、久保田に住て組下を指揮す。其子孫十郎綱利の時、享保年中再檜山へ在住雖被仰付病氣に依て避て、故に檜山の組下を被召上今宮大學義透に被預。爾より所司代の列を抜閑居。其子綱氏家督と成り、是今の茂右衛門也。（寶曆七丑六月御家老と成る、本檜山組下被返付、同十二年於江府病死。嫡子は彌五郎。）

### 早 川 兵 馬

先祖早川圖書宣直は、南佐竹左衛門尉義種の二男にて淡路義章の弟也。天英公御當國に於て被召出御下字及早川氏を給り、兄義章より分知、早川正治郎（或兵共あり）と號す。御支流たるに依て廻座とせら



れ、後名圖書に改む。其子求馬介隆直無嗣にして早死、故に舍弟惣四郎隆政を繼ぐすといへども又早死無嗣、其舍弟正九郎隆寛嗣と成る、治太夫と號す。德雲院殿大番頭とせられ、其子十右衛門處名、其子正九郎處久、其子今の兵馬峯昌也。(峰政、南三郎義舒早死實曆十二年爲嗣、峰昌舍弟喜太郎を以て家相續す。)

### 宇留野源太郎

先祖天鳳存虎は第十五世伊豫守義俊公御三男にて、左馬頭義治公の御庶弟也。宇留野將監と號し山入氏義逆亂の時死す。其子源兵衛尉義長箕裘を繼ぎ數度致忠勤、嫡子源五郎天文八年七月於部垂戰死す。其弟右近於小田原討死す、故に末子源十郎父の業を繼ぎ後にも源兵衛と號す。御國替の時御供仕横手に居住す。其子源兵衛勝忠迄引渡一番座に着せらる處に、勝忠寛永五年久保田へ遷され、同七年十一月御下國御供仕御道中にて御勘氣を蒙り改易せらる。恩免の後御支流にせられ廻座に被仰付、延寶二年德雲院殿、扇紋幕停止せられ三ッ頭丁子巴に改め給ふ。其子源兵衛勝明元祿年中御家老とせらる。其子源九郎無嗣、勝明の末子伊勢千代を嗣とし後源太郎と號す、又源兵衛に改む。其子今の源兵衛也。

### 眞崎兵庫

先祖眞崎治郎義連は、第六世常陸介義重公御庶子岡田四郎義隆の長子也。義連六世の孫左京亮義景建久二年七月於武州鶴見戰死、無嗣に依て暫く斷絶す。然るに、小場參河守義信の男出家に成り寺沼檀所

に住し俊譽と云ひけるを令還俗、眞崎氏の嗣とし兵庫助義永と號す。爾より相續六代の孫下總守義保、元龜元年於南摩討死す。其弟彦六重宗十六歳にて卽時に敵を打て其首を獻す、關信公大に感賞有り、於上段盃酒を賜り名雲井之助と被下。爾より子孫代々初日見得の時上段へ召して盃酒を給る事、御當方の異格たる也。重宗後兵庫助に改む。天英公御下字被下宣宗に改御政務諸事被令奉行、高麗御陣の時御供仕、小貫大藏と同船して朝鮮に渡海す。御國替の時秋田へ御供仕、御家の子隨一の人也。其子兵庫宣廣寛永八年より廻座と稱號を改らる。其子兵庫隆紀の時延寶二年、徳雲院殿扇紋幕停止せられ三ツ頭丁子巴に改しめ給ふ。隆紀御家老とせられ無嗣子、依て船尾清兵衛勝有の二男を養て嗣とし是も兵庫處純と號す。圓明院殿御家老とせられ、後閑居して參河と號す。其子兵庫、其子兵庫今の兵庫也。

#### 小田野 又八郎

先祖小田野尾張守自義は、第十世上總入道貞義公の六男山入刑部大輔師義の三男也。山入小田野の庄に住す、以て爲氏。其子山城守義廣、無嗣に依て一族袋田駿河守義愛の二男三郎義綱を嗣とし中務大輔と號す。其五世の孫刑部少輔義正、文龜二年宗家山入左京大夫氏義を戮殺して其首を獻す。義輝公其忠儀を感賞せられ御手自酌取て盃酒を賜り、義正返盃して御酌を仕る。爾より例と成り子孫代々初御日見得の時君臣有酌、於今如舊。其曾孫刑部少輔義定無嗣子、山方能登守重泰の嫡男を養て爲嗣大和守宣忠と號す。御國替の時秋田へ御供、是又御家の子の長たる故廻座と稱號せらる。其子刑部少輔宣行、

其子彦三郎宣歳父に先達て早死無嗣、於茲茂木筑後治貞の弟又八郎治朝を以て嗣とし、刑部正興と改む。延寶二年、徳雲院殿扇紋幕停止せられ三ツ頭丁子巴に改しめ給ふ。正興又無嗣子、中田彦太夫直澄（法名隨放）の嫡子を養て嗣とし是も刑部忠直と號す。其子刑部正純、正徳年中故有て改易せられ恩免の後本座に復せられ、圓明院殿御家老とせられ名を齋と改む。其子今の又八郎正武、當時御家老也。（寶曆六年子十一月御役被召放、嫡子龜松に家督給り後九郎と改む。）

### 小場源左衛門

先祖源左衛門宣忠は實は野州小山氏の族臣荒川筑後守秀景の二男にて、澁江古内膳政光實弟也。小場義宗入道幽庵養て、娘を以て妻の隱居跡とす。天英公御下字被下小傳治宣忠と號す。御國替の時秋田へ御供仕、家の子の席に被着廻座と稱呼せらる、且御家老となる。後名源左衛門と改め、無嗣子に依て兄政光の三男を養て嗣とし小傳治宣利と號す。宣利又無嗣にて死す、故に小場式部義成（幽庵の嫡子）の二男又治郎を以て嗣とし勘解由隆房（法名幽齋）と改む。其嫡子は本家相續して六郎義房と號す（後佐竹石見と改む）。故に二男喜平治を嗣とし勘解由義久と號す。其子源左衛門處房無嗣子て死す、故に二男善治（始分知にて勤仕）を以て嗣とし勘解由處員と號す。其嫡子元千代（石見義隆）本家相續に依て、戸村十太夫義覺の末弟善治を養て嗣とし勘解由峰房と號す。其嗣小傳治は處員の實子にて是今の源左衛門也。（寶曆十三年五月二十八日御家老と成り後隱居、其子小傳次勘解由と改む。）

戸村内藏丞

先祖戸村酒之丞處風は、實は多賀谷佐兵衛隆長の二男にて將監隆經の弟也。幼若より祖父戸村十太夫義國養育て隱居跡とす。徳雲院殿御下字を被下御支流たるに依て追て廻座に被仰付、後名一學と改む。是より先<sup>キ</sup>義國の四男一學隆朝を別に分知にて令勤仕、天山公御下字被下廻座とせらるこいへこも早死し、其弟七之助嗣と成り穴門屋敷(今小野岡氏の所なり)に住する處に、寛文十一年六月自害して跡斷絶す。處風は義國の隱居屋敷(今の住處)に住居、其嫡子酉之助家督の後多賀谷氏の嗣に被仰付彦太郎格經と號す。故に其弟萬千代戸村の嗣と成る、後大藏と號す。又多賀谷の嗣に被仰付後左兵衛峰經と改む。故に本家戸村十太夫義連の五男を嗣に被仰付一學と號す。無嗣にして死す、依て其弟を以て嗣とし是も一學と號す。其子酒之丞也。(寶曆七丑年大番頭と成る、一學と改む。安永七戌五月御家老と成る。)

小瀬宮内

先祖小瀬常陸介義春は第十世上總入道貞義公の御三男にて、淨喜公御同母弟也。其嫡子宮内大輔義益無嗣子、依て舍弟源四郎義長を嗣とし越中守と改む。其子伊義鎌倉公方永安寺殿より一字を給り、爾より八世の孫越中守義行天正十八年於奥州滑津戰功を抽。御國替の時御供仕横手に被差置、御家の子たる故廻座と改稱せらる。其子民部父に先達て早死、依て松野丹波守綱高の二男を養て嗣とし縫殿助伊當と號す。其子善三郎伊節後伊右衛門と號す、延寶二年、徳雲院殿扇紋幕停止せられ三ッ頭丁子巴に改



させ給ふ。其子正三郎早死、無嗣子に依て信太主水定光の二男を養て嗣とし縫殿助伊信と號す。圓明院殿享保年中久保田へ被移御家老とせらる。其子今の宮内伊通也。(當時御家老、名宇兵衛に改む。後嫡子又七郎後縫殿助。其子又七郎。)

### 小野崎大藏

先祖小野崎越前入道常丹は、山能小野崎中興下野守通春の弟也(甲斐守通胤二男與三郎と云ふ)。淨喜公御時數度武功を顯し宿老と稱せられ、代々武功を家名に傳へ、其曾孫越前三郎通繼、義治公會津白川と御合戰の時君の御姓名を賜り佐竹左馬頭義治と名乗り、深來と云ふ所にて討死仕に依て御利運を達せられ、故に其子通老幼若たりといへとも石神、河合兩度合て七百貫の加増給り、爾より石神に移住て石神小野崎と稱し山能、石神兩家と立並。其子大藏大輔通長、其子越前守通隆、其子大藏通信、其子三郎(法名良屋是三と號す)天正十六年奥州大平御陣の時討死。其子甚三郎通廣祖父通信の嗣を受、御國替の時秋田へ御供、後大藏と改む。數代家の子故廻座とせらる。其子大學、是も後大藏に成り無嗣に依て、一族小野崎十左衛門の嫡男吉十郎を嗣とし後權太夫通貞と號す。元祿年中德雲院殿御家老とせらる。其子大藏通鎮、其子今の大藏也。

### 今宮伊織

先祖今宮彈正義僚は、第十七世石京兆義舜公の男涼松院大納言坊永義法印の二男にて、淨蓮院光義の弟

也。天正十七年於奥州川野續戰功抽、伊豆守にせられ組下を附屬せらる。御國替の時、其子彈正組下を召連れ御供仕角館に被差置、支流たるに依て廻座とせらる。大坂兩度の役御供仕、其子織部後彈正に改む。其嫡子彈正早死て無嗣、舍弟伊織を以て嗣とし、延寶二年德雲院殿扇紋幕停止せられ三ッ頭了子巴に改させ給ふ。然るに天和元年宗家攝津守義教黜罰せらるゝ時、伊織組下も被召上て主計義隣に被預置、其子伊豆享保年中久保田へ被移爾より久保田に住す。其子今の伊織也。

右攝津守義教の舍弟勘解由隆利、天山公の御時父義堅より分知を以て被召出、追て廻座とせられ此次に着らるゝ處に、天和元年兄義教罪に依て多賀谷將監隆經に被預置、於檜山病死す。曾て無子、義教の三男九十郎を養て子とす。故に、義教の嫡子文四郎永教を被召出時に九十郎をも被召出大番に被令勤仕、後九右衛門に改む。無嗣子故同苗伊豆弟善九郎を養て嗣とす。享保十年宗家大學本座に復せらる時、善九郎廻座に被復伊豆次座に被着、同二十年善九郎無嗣子て死す。故に大學義透二男欽治を以て嗣とすといへとも、寶曆二年其兄今宮又三郎早死無嗣子に依て、欽治本家を繼故此家後なし。

#### 小野岡源七

親源右衛門は小野岡市太夫義伯の二男にて、今の市太夫義亮の弟也。享保年中父義伯分知にて令勤仕、圓明院殿追て廻座とせらる。爾より今の源七迄二代着座也。

先祖古内三郎兵衛貞勝は古内下野守義貞の二男にて、雅樂義通の舍弟也。於御當國分知にて令勤仕大館に住す、天山公御支流たるに依て追て廻座とせらる。爾より子孫相續今以て大館に住す、今の主典貞勝の曾祖也。

## 茂 木 監 物

先祖茂木監物治種は茂木筑後治良二男にて、於御當國別に被令勤仕其甥治貞幼稚の内代官とせられ、其後天英公廻座とせらる。爾より其子左太右衛門（始又八郎）知置、其子左太右衛門知據と相續、其嫡子山三郎知良早死故舍弟又三郎嗣と成る。是今の監物知志也。嫡子小四郎。

## 向 庄 九 郎

先祖向右近宣政は其先<sup>キ</sup>飛驒の國主にて、始名小鷹狩飛驒守政家と號す。代々飛驒に住すといへとも未詳。天正年中没落して常州へ來り姓名を改め御當家へ奉仕、天英公御下字を被下且先道具免許せらる。爾より於今御城下にて先道具爲持事異格たるなり。御國替の時御供仕、横手城に被差置組下を指揮せしめらる。慶長八年御家老とせられ、其子清兵衛政次横手に住て組下を指揮すといへとも早死す。其弟庄九郎久保田に勤仕廻座とせらる。元和中天英公、父右近宣政の遺跡被命横手の組下を被預、名帶刀重政と號す、又名豊前と改む。天山公御家老とせらる。爾より代々久保田に住す、横手組下を指揮する事如舊。其子源左衛門盛政、其子右近早死、舍弟を以て嗣とし源左衛門政元と號す。無嗣子故、東中

移義秀五男萬之助を養て嗣とし右近政員と號す。圓明院殿御家老とせられ後名飛驒と改む、無嗣子に依て小田野齋正純の二男を養ふて嗣とす。是今の庄九郎政方也。より明和六年義敦公御家老とせらる、安永（一）病死。其子

### 澁江敬之助

先祖澁江兵部大輔氏光入道竿齋は野州小山家の族臣にて、天正十三年小山氏滅亡の時流落て常州へ來り御當家へ奉仕。其頃荒川筑後守秀景も同落魄て、其嫡子彌五郎常州へ來り人見主膳正藤近か家へ寄食す。一日天英公へ拜謁、氏光か嗣とせられ食祿三千石賜て澁江内膳政光と改む、其器衆を出て寵遇日に渥し。御國替の時御供仕於秋田御家老とせられ、且ッ仙北郡刈和野村由利の押とせらる。爾より代々侍大將の御丹印を預り、今以て子孫刈和野村給人を指揮す。慶長十九年十一月二十六日、攝州大坂今福表先陣將として志貴野口にて戰死す。其子彌五郎宣光天英公御下字被下、御家の子に列せられ廻座と成る、後内膳と改む。無嗣して早死、故に末弟荒川惣四郎を嗣とせられ内膳光康と號す、刈和野給人如元被令指揮。天英公御時御家老とせられ光久と改む、是を中内膳と呼。光久無嗣子南湊路義章の二男左近を養て嗣とし、天山公御臺光聚院殿御舍弟たるを以て重く遇し、御下字被下宇右衛門降光と號す。爾より代々今以て御下字被下、延寶元年德雲院殿御家老とせられ、又無嗣子大山因幡義武の二男を養て嗣とし内膳處光と號す。同御時世元祿年中御家老とせらる、後宇右衛門に改む。又無嗣子、依て鹽谷民



部重綱の二男源藏を養て嗣とし宇右衛門格光と號す。圓明院殿御家老とせられ早死、其子内膳峰光、又圓明院殿御家老とせられ後宇右衛門に改む。其子今の敬之助也。敬之助寶曆六年秋早死、無嗣に依て一族八五郎を嗣とし内膳明光と改む。安永三年午正月義敦公御家老とせらる、同四年八月於江府病死。其嫡子六郎。

## 須田 内記

先祖須田美濃守盛秀は、其先<sup>★</sup>宇多源氏佐々木四郎高綱の子孫といへとも未詳。奥州岩瀬郡須賀川城主二階堂遠江守盛義の長臣にて、土岐、佐々木、兩天の家老と云ふは是也。在名に依て須田氏を稱す。天正十七年十月須ヶ川落城の後、居城和田に楯籠り伊達正宗を拒み終に正宗を追崩す。爾より後御當家へ來り御家臣に成り、組下を附與せられ盛秀一代引渡の座に附れ、東照神君にも御存せられたる老功の者也。其嫡子左京進早死、三男源助は正宗に被生捕誅戮せらる。二男大藏丞、父共に御國替に御供仕組下共に横手に被指置。然るに慶長十四年大藏丞故有て大塚權之助と討果、故に盛秀無嗣子、玉生八兵衛武宗を養子に被命嗣とし須田八兵衛盛久と改む。天英公廻座とせられ、且御家老と成り主膳に改む。天山公の御時相續て御家老にて美濃と改め、又伯耆に改む。其子主膳盛次迄横手に住し組下を預一方の大將たるの處に、盛次故有て寛文十二年避退て久保田に被遷、戸村十太夫義連是に代て横手に移り、組下義連に被預。其子内記より爾來久保田に在住す。其子内記無嗣子早死、故に舍弟政三郎を嗣とし

主膳盛勝と號す、又内記に改む。圓明院殿御家老とせられ、當時御家老也。寶曆六子七月病死、其子政三郎後美濃に改む、明和四亥年義敦公御家老とせられ當時勤中。

#### 田代隼人

先祖田代下總守政綱は其先<sup>キ</sup>三條源氏田代冠者信綱の子孫にて、其父下總守清綱迄世々關東公方家に奉仕す。爾後一族三喜齋養謙共に御當家へ參り御家臣と成る。政綱の子早人御國替御供仕秋田へ下向、天英公廻座とせられ、爾より子孫相續て今の隼人に至る。

#### 前小屋市右衛門

先祖前小屋右馬之助竹岩（法名なり）は小場參河守義實の二男にて、大炊之助義忠の弟也。曾孫上總介永祿十二年常州北郡戰功を抽、無嗣子に依て小野崎越前守通隆の三男を養て嗣とし右馬之助と號す。御國替の時嫡家小場式部義成共に秋田へ御供大館に被差置、御支流たるを以て天英公廻座に被着、其子四郎左衛門相續、又其子四郎左衛門の時延寶二年、徳雲院殿扇紋幕被停止三ツ頭丁子巴に改させ給ふ。爾より子孫相續今の市右衛門に至る。

#### 赤坂忠兵衛

先祖赤坂下總守朝光は奥州石河の一族にて赤坂宮内大輔政光の子なり。其先<sup>キ</sup>源滿仲公の二男大和守頼親の後裔石河冠者有光の子孫、世々奥州に住て石河、赤坂兩流に分ると云ふ。天正年中朝光御當家に

參り御家臣と成る。組下將として數度武功を抽、御國替の時組下共秋田へ御供仕、南部口押として十二所に被差置。天英公廻座に着らる。後故有て十二所組下を被召上横手へ被遷、鹽谷伯耆を代らしめ組下を伯耆に被預。爾より其子源兵衛光賢以來代々横手に住す。子孫相續今の忠兵衛に至る。

福原彦太夫

先祖福原彦太夫晴賢は野州佐久山の主福原淡路守の舍弟也。其先<sup>キ</sup>那須太郎資隆の四男福原四郎久隆（與市宗隆の弟也）初て佐久山を知行してより、代々相續て那須十二黨の一人也。晴賢鹽谷伯耆守の養子と成り御當家へ奉仕。然るに伯耆守實子民部貞綱出生するに依て天英公本家福原にて被令勤仕、御國替の時秋田へ御供仕廻座とせらる。其子彦太夫敬忠、其嫡子彦五郎父に先達て早死、無嗣子依て梅津東太敬忠の二男を養て嗣とし彦太夫と號す。其子今の彦太夫。其子

佐藤文七郎

先祖佐藤源右衛門光信（法名休巴）は奥州岩城領主岩城氏長臣佐藤大隅守貞信の子にて、其先<sup>キ</sup>佐藤庄司の子孫といへども未詳。貞信、光信父子共に忠治郎貞隆公に奉仕、慶長七年御浪牢以後碎身して忠を盡し且亦御當家へも勤仕。寛永三年天山公御養君以來天英公廻座に被爲着、御家老と成る。天山公御治世專御家老職たり、後閑居して休巴と號す。其子左門龜田へ參り、岩城氏御跡但馬頭宣隆君に奉仕す。故に光信無嗣子に依て、聲小貫權之助二男を養て嗣とし忠左衛門盛信と號し、其子忠左衛門爲信無嗣

子、梅津半右衛門忠宴二男忠藏を養て嗣とし左門と號す、又忠右衛門清信に改む。圓明院殿御時故有て梅津小左衛門忠英に被預、其子文七郎嵩信の時被召出本座に被爲復、是今の文七郎也。後左門に改む、又源右衛門に成る。

### 梅津外記

先祖梅津半右衛門憲忠は野州宇都宮牢人梅津道金入道次男にて、其先未詳。初常州にて北左衛門尉義憲に仕て書を能す、天英公御所望有て右筆に被召抱、其聰敏衆を出るに依て次第に昇進して御膳番とせらる。御國替の時秋田へ御供、慶長十九年十一月二十六日大坂御陣の時拔群の勦故、台徳院殿御感狀及御劍、時服等を被下、元和年中より御家老とせらる。且仙北先亡の降士角間川に被着置憲忠を其將とせられ、爾より代々組下として指揮す。其嫡子長三郎忠廉父に先達て早死、故に二男外記忠國嗣と成る。

寛永七年十一月家督御禮の時始て廻座に被仰付（翌年正月より着座也）、天英公御家老とせられ後半右衛門に改む。其嫡子主馬利忠病身にて御奉公不罷成に付二男半藏を嫡子に立嗣とし、是も半右衛門忠宴と號す。天山公御家老とせられ、徳雲院殿御時世御家老の隨一也。其子半右衛門忠昭、是も徳雲院殿御家老とせらる。然るに天祥院殿御幼稚の御時寶永三年御役被召放隱居被仰付、角間川組下は岡本又太郎元朝に被預置、其子小右衛門忠英の時正徳二年再角間川組下復預らる。爾より相續其子外記忠吉也、寶曆五年亥六月御家老と成る、同七年丑六月御役被召放生涯蛰居。嫡子小太郎、安永三年午正月御



家老と成り小左衛門に改む、後病氣にて御役御免。

玉生八兵衛

先祖玉生美濃守高宗は野州宇都宮侍從國綱の御家老にて、代々同國笠間城主たり。慶長二年十月國綱太閤の命に違ひ宇都宮沒收せられ御浪牢の時、高宗落魄して京都へ趣く砌老病差起り、翌三年正月於相州小田原旅宿に死す（行年七十餘）。其子五郎八常州へ來り嫡姪小貫大藏大輔頼久の家に寄食（于時十二歳）、御國替の時頼久の手廻に随ひ秋田へ下着。慶長八年三月、頼久末期の願に依て被召出天英公御近習に被令勤仕、玉生八兵衛武宗と稱す。後御膳番とせられ、大坂兩度の役御供仕勤功尤も多し。後須田美濃守盛秀の養子に成り須田八兵衛盛久と改む（後伯耆に成る）。故に高宗の舍弟越前の國に住て玉生權太夫と號す、其孫六郎兵衛を呼下し玉生氏を繼しめ廻座とせらる。御當家へ令勤仕といへとも早死、其後佐藤忠左衛門盛綱の二男五郎治淳綱を嫡子とする處父に先達て死す、依て須田主膳盛次の四男を養て嗣とし八兵衛弘宗と號す。其子五郎八嗣と成る、無子にして死す。故に其弟を嗣とす、是今の八兵衛也。

（一本、佐藤忠左衛門盛信の二男は盛久の娘の腹に出生したるを以て養子として八兵衛舜宗に改む。法名）常山是なり。其嫡子宇都宮亮綱の嗣と成る、帶刀典綱と號す。故に二男五郎治淳綱を嫡子とする。に作る。）

船尾 鞠 負

先祖船尾下野守隆通は奥州岩城領主左京大夫平ノ重隆の一族也。其父船尾六郎隆祐は岩城可山入道の庶子にて船尾の郷に住し、以て爲氏と云ふ。隆通及其子岩城守昭通父子、御當家へ奉仕て數度の忠戰を

致す。然るに關信公御次男喝食丸君白川御名代に御代り義廣公と申したる時、船尾父子を御後見せられ暫く白川に在城す。其の後會津へ御養子に付常州へ歸參す。昭通の子兵衛義綱、御國替の時於御途中關信公の御勘氣を蒙り、浪牢で終に最上の内にて死す。其弟林正兵衛、兄義綱の妻子を引連れ御跡より罷下り角館へ參り、蘆名義勝君白川舊好に依て正兵衛を扶持せられ、御下字を被下勝貞と號し角館に住す。故義綱嫡子三七隆廣、三男靱負勝光、伯父正兵衛に育せらる。大坂御陣の時三七、伯父正兵衛病氣故代りて名勝治と改め蘆名殿人數に加り、十一月二十六日戰死す。天英公、兵衛子成る由を被聞召其弟靱負勝光を久保田へ被召出食邑を賜り、廻座に着せらる。徳雲院殿御幼少の御傳と成る、寛永十九年五月於江戶死す。其子清兵衛勝有、其子源右衛門、其嫡子三七父に先達て早死、故に二男を嗣とし靱負隆陳と號す。其子今の靱負隆範也。

### 中 川 宮 内

先祖人見宮内、其先<sup>キ</sup>筑紫牢人中川因幡守の子孫といへども未詳。初、若名中川正七と號す、京都愛宕山別當の小姓なり。天英公御上洛の節、別當より御所望成され御近習に被召仕、御寵愛有て人見氏を被下人見宮内と改む。其子宮内（法名如貞）、天山公御時本名中川に復せられ追て廻座とせらる。其子宮内、其子儀右衛門、其子今の宮内也。（名主馬に改、舍弟文七郎嫡子とす。）

### 細 井 傳 右 衛 門

先祖細井金太夫盛弘は其先<sup>キ</sup>未詳。駿河大納言忠長卿(台徳院殿御二男なり)の近士にて、忠長卿御生害の時御當家へ御預人となる。天山公御所望被成置直に御拜領、御家臣と被成廻座に加へらる、後名傳右衛門に改む。無嗣子故早川治太夫隆寛の二男を養て嗣とし、是も傳右衛門と號す。其子金太夫無嗣子死し大塚九郎兵衛の三男を以て嗣とす、是今の傳右衛門也。其子長三郎大山十郎義福の弟也。後傳右衛門と改む。義敦公御家老とせらる、於江戸病死す。其子

小野寺 桂之助

先祖小野寺桂之助其先<sup>キ</sup>未詳、駿河大納言忠長卿の近侍にて忠長卿御生害の時御當家へ御預人となる。天山公御所望被成置御拜領、御家臣と被成廻座にせられ、爾より相續て今の桂之助道昆に至る。其子門彌後桂之助と成る、明和元年義敦公御家老とせらる、同四年十二月御役被召放閉門。其子

箭田 野内藏

養父箭田野治部は箭田野四郎左衛門行光の二男也。徳雲院殿御時分知にて勤仕せしめ追て廻座にせられ、無嗣子鹽谷民部重綱の四男を養て嗣とし、是今の内藏也。其子治郎、治部に改む。

鹽谷 九左衛門

先祖鹽谷九左衛門守綱は鹽谷伯耆守の二男にて民部定綱の舍弟也。天山公の御時分知にて別に令勤仕追て廻座とせらる、十二所に住す。其孫藏人の時久保田在住と成る、後九左衛門に改む。其子今の九左

衛門也。嫡子權七。

松野五郎兵衛

先祖松野五郎兵衛國道は松野丹波二男也。分知にて別に令勤仕檜山に住す。天山公追て廻座とせられ、爾より子孫相續今の五郎兵衛に至る。(松野彌七郎綱利三男也。)

武茂縫殿助

先祖武茂縫殿助久綱實は古内下野守義貞の末子也、武茂玄番養て別に令勤仕、然共父兄に隨て大館に住す。天山公追て廻座にせられ、子孫相續き大館に住し今の縫殿助に至る。

梅津東十郎

先祖梅津主馬政景は梅津道金の三男にて半右衛門憲忠の舍弟也。於關東御奉公に被召出、御國替の時御供仕、於秋田拔群の勤功を勵川井伊勢守忠遠を殺戮し、慶長十九年安孫子左門兄弟に死を勧め其首を討、都て内外の勤勞不可勝斗。天山公御家老とせられ寛永十年三月死す。曾て無嗣子故、兄憲忠三男藤十郎を嗣とし與左衛門忠雄と號す。天山公命て、德雲院殿御幼稚の御後見とせられ廻座に着せらる、終に御家老となり後閑居して仁叟と號す。其子茂右衛門忠直父に繼て御家老と成る、其子與左衛門忠經も德雲院殿御家老とせらる。其子主馬、多病にて無嗣子に依て一族梅津内藏丞を以て嗣とし茂右衛門忠支に改む。又無嗣子死す、依て嫡家梅津小右衛門忠英の二男を以て嗣とす、是今の藤十郎致忠也。其



子彌五八茂右衛門子也、養父に先達て病死。寶曆十三未正月御家老と成る、同年四月病死す。其子供藤十郎。

### 大越十郎兵衛

先祖大越甚右衛門秀國は其先<sup>キ</sup>岩城家譜代といへとも未詳。寛永三年天山公御當家へ御養君の時近習にて御供仕、於秋田次第に昇進、追て天山公廻座とせられ寛文二年御家老と成る。同十一年十一月閑居して夢人と號す。其子五郎左衛門則國德雲院殿御家老とせられ、是も甚右衛門に改む。無嗣子に依て舍弟を以て嗣とし十郎兵衛貞國と號す、圓明院殿御家老とせられ又甚右衛門に改む。其子隼人父に先達て早死す、故に二男川井圓八郎を以て嗣とし今の十郎兵衛也。(當時御家老、甚右衛門に改む。無子舍弟甚五郎を子とす、寶曆七年丑六月多賀谷龜太郎へ被預置甚五郎改易せられ、同十二年十郎兵衛御役御免。同十三未年九月甚五郎十五人扶持にて大番に被召出、明和二年酉九月本座廻座に被成置。其子源十郎。)

### 小野寺伊右衛門

先祖小野寺主水(初名十一郎)法名遊存は同姓桂之助舍弟にて、駿河大納言忠長卿の近侍也。忠長卿御生害の時兄と共に御當家へ御預人と成る、天山公御所望にて直に御拜領、爾より御家臣と成る、追て廻座に加られ此席に着。無嗣子、依て眞崎五郎左衛門廣慶の四男傳内を以て嗣とし長太夫と號す。又無

嗣子、故に信太内藏助舍弟を以て養て嗣とし伊右衛門道行と號す。圓明院殿御家老とせられ是當時御家老也。(寶曆五年亥二月御役被召放隱居。其子主水明和年中御家老と成る、後御役被召放。)

鹽谷勘解由

先祖鹽谷彌十郎は鹽谷故民部貞綱の二男にて中民部重綱舍弟也。分知にて別に勤仕天山公追て廻座にせられ、延寶七年十二所より角館へ被移、爾より代々角館に住す。無子に依て矢野平右衛門重康の五男嗣とし彌藏と號す、是其子今の勘解由也。

梅津百助

先祖梅津圖書初名頼母忠貞は、大坂半右衛門憲忠の三男にて半右衛門忠國、與左衛門忠雄の弟也。分知にて別に勤仕、天山公追て廻座にせられ名五郎右衛門に改む。徳雲院殿の御時、民部重綱に代て延寶七年より天和三年迄十二所口の押とせられ、後閑居して來端と號す。其子頼母嗣と成る、喜太夫に改む。其子孫六、其子五郎左衛門、其子今の百助也。

山方助八郎

先祖山方能登守盛利は、鎌倉上杉管領憲定の一族にて武州久良岐の庄に住す。然るに竹堂様御當家へ御養君の後御家中區々にて不隨從に付、管領より御後見に被差越常州へ下りて悉和順をなさしめ、爾より御家中上下に不依出仕等の節取次山方披露致事古例にて、七代の孫能登守重泰迄如舊式。御國替

の節御供仕、於秋田引渡、廻座の列格を被定たる後も、八木、山方は格別にて正月元朝於御座の間御盃被下、都て諸士出仕等の御取次仕たる。其子能登政慶（一本豊）に至り無嗣子、眞壁岑庵入道重轄の三男主殿を養て嗣とし、後民部泰朗と號す。此代寛文中天山公廻座の定席に着せられ、是より以來諸士出仕等の御取次當番の御番頭披露致事に相成る。古格相改といへども、四家始目見得の節は今以て山方同道にて致披露事古實の儀也。泰朗又無嗣子、眞壁五郎左衛門庵慶の五男眞壁造酒（初名傳五）を以て嗣とし太郎左衛門泰護と號す。天祥院殿御家老とせられ、又無嗣子小田野刑部直正の二男養て嗣とし内匠泰該と號す。圓明院殿御家老とせられ御當代迄勤仕、其子今の助八郎なり。（寶曆六年子十一月御家老と成り、同七丑年六月六日切腹被仰付斷絶。嫡子石五郎明和三酉年九月十五人扶持にて本席被召立、後舊知御返付能登に改め無子にて死す。舍弟嗣となる、又無子にて早死す。）

## 荒川 筑後

先祖荒川筑後守秀景は、野州小山氏の族臣にて澁江内膳政光か實兄也、天正十三年小山氏滅亡の時流落て後に澁江氏の家に死す。政光父の名跡を立んと欲して三男彌六定利を荒川氏とす、然れ共政光の弟小場源左衛門宣忠無嗣子に依て小場氏の嗣と成る。其弟惣四郎光康を荒川氏とすといへども、其兄内膳宣光の嗣と成故荒川氏暫く中絶す。然るに寛文中澁江宇右衛門隆光、其弟石塚市正義里の二男を養て荒川氏の嗣とし分知して令勤仕、荒川惣十郎秀友と號す。天山公追て廻座にせらる（此家月夜鳥を

小旗石塚氏より□與す。秀友無嗣、依て早川治太夫隆寛の三男を嗣とし市五郎秀邦と號す。又無嗣に依て箭田野四郎左衛門行光の三男を贅養子とし久太郎と號す。其子彦十郎無子にて早死、故に小野崎大藏二男官太を以て嗣とし彌六と號す、是今の筑後也。嫡子彌六。

梅 津 東 馬

先祖梅津藤太敬忠は梅津半右衛門忠國（法名梅岩）の三男にて、淨運半右衛門忠宴の弟也。分知にて別に勤仕、徳雲院殿追て廻座にせられ、川井七右衛門一儀に付改易せらるゝ、こいへこも間もなく恩免本席に復し被置、閑居藤明と號す。其子藤太夫全忠天祥院殿御家老とせらる。無嗣子、依て舍弟久四郎を養て嗣とす、是今の東馬忠康也。（其子桃之助後東太に改む、寶曆十三末年五月御家老と成り明和三年病死す。其子文四郎無子にて早死す、故に梅津五郎三郎本家へ歸り嗣と成る、名東馬と改む。）

澁 江 八 五 郎

先祖澁江五郎左衛門光俊は（始名善太郎）大坂内膳政光の二男にて内膳宣光の弟也、分知にて別に勤仕。寛永四年兄宣光死去に付、知行三千五百石の内二千二百石にて跡式荒川惣十郎に被下、千石善太郎に分被下。其子十兵衛の時延寶元年十二月徳雲院殿追て廻座にせられ、無嗣子依て梅津茂右衛門忠直の二男を養て嗣とし十兵衛光重と號す。其子善太郎後五郎左衛門と改む、無嗣子依て始弟を子とすこいへこも早死す、故に嫡家澁江宇右衛門格光の二男小源治を以て嗣とし善太郎と號す。無子にて死、養子五郎



左衛門幼若の子有るを以て嗣とて是今の八五郎也。寶曆六子年宗家敬之助嗣と成る。同七丑年梅津藤十郎二男松五郎を以て嗣に命せられ左膳と改む、後十兵衛と改む。

大塚九郎兵衛

先祖大塚彈正資臺は野州那須家の一族にて、其子彈正資綱より御當家へ奉仕。其子九郎兵衛資郷御國替の時御供仕、慶長十九年十一月二十六日大坂於今福表粉骨の働仕台德院殿(將軍秀忠公)御感狀被下、其子九郎兵衛、其子九郎兵衛資相の時、延寶元年德雲院殿追て廻座とせられ、爾より子孫相續今の九郎兵衛資武に至る。寶曆七丑年御家老と成り明和五子年閑居(十二月首尾好勤る)。其子今の孫三郎、後九郎兵衛と改む。

信太内藏介

先祖信太内藏助久勝は、其先<sup>キ</sup>常州筑波郡小田城主讃岐守氏治入道天庵の家臣也。天庵滅亡の後流落て終に一族兵部少輔、伊豆守等共に御當家へ奉仕、御國替の御供にて秋田へ来る。慶長十九年十一月二十六日大坂於今福表粉骨勵仕台德院殿(將軍秀忠公)御感狀被下、其子内藏助(法名休心)、延寶元年十二月德雲院殿追て廻座とせられ、爾より相續今の内藏助に至る。舍弟勘九郎を嗣とて後内藏に改む。

黑澤宇一郎

先祖黑澤甚兵衛道宗は、其先<sup>キ</sup>仙北平鹿郡横手先方の城主小野寺遠江守藤原昌道の家來也。小野寺家滅

亡の後浪牢にて仙北に残る。然るに御國替の砌、先方の者共一揆を致仙北御手に入兼候に付、澁江内膳政光、梅津半右衛門憲忠計意に依て甚兵衛御頼み御取鎮させ、仙北無恙御手に入れ、爾より御家臣に被召抱ければ御暇申上西國へ趣古主の生涯を見届、再御當家へ立歸り奉仕す。慶長十九年十一月二十六日大坂於今福表粉骨の働仕台徳院殿(將軍秀忠公)御感狀被下、其子角右衛門道廣の時故有て改易せらるといへとも間もなく恩免、本地、本屋敷共無相違返し給る。其子甚兵衛道重の時延寶元年十二月徳雲院殿追て廻座とせられ、其子嘉兵衛道明後角左衛門に改む、父に先達て死す。故に其子八太郎祖父道重の嗣と成り伊兵衛道富と號す、閑居して小内藏と改む。其子十右衛門道矩相續、後甚兵衛に改む。無嗣故に舍弟連太を養て嗣とす、是今の宇一郎道安也、後伊兵衛と成る。嫡子宇一郎は道矩の子也。

梅津内藏丞

先祖梅津内藏丞忠廣は仁叟與左衛門忠雄の二男にて、茂右衛門忠直の弟也。分知にて別に勤仕、徳雲院殿御近習出頭、且能書たるに依て記録方を預らる。延寶五年十二月廻座にせられ、其子内藏丞忠亮也。嫡子内藏丞と成る。

正田久太夫

先祖正田齋宮定盛は、其先<sup>キ</sup>御茶屋奉公相勤たる正田市兵衛か子なりといへとも未詳。徳雲院殿御日掛り出頭他に異なり、延寶五年十二月追て廻座にせられ、元祿三年十月終に御家老とせらる。無嗣子故梅

津喜太夫二男を養て嗣とす、善太夫と號す。其子久馬、其子今の久太夫也。寶曆十二年四月御家老と成る、明和元年御免。其子齋。

## 岡 谷 伊 織

先祖岡谷長兵衛は其先<sup>キ</sup>多賀谷氏の家臣たりと雖も未詳、光聚院殿へ附らる。其子伊織若年より徳雲院殿御相手御側に被召出、次第に御取立出頭と成る。延寶五年十二月追て廻座にせられ、無嗣子故に大山因幡義武三男平八を養て嗣とす、是も伊織に改む。其子今の伊織也。嫡子多膳、後伊織と改む。

## 白 川 七 郎 兵 衛

先祖結城上總介祐廣は、其先<sup>キ</sup>野州小山下野大掾藤原政光の三男結城七郎朝光、其子上野介朝廣の二男也。初て奥州白川郡を領す、爾より子孫白川結城と稱す。其子上總入道宗廣、其子參河、前司九郎左衛門尉親光兄弟、後醍醐天皇に被頼奉數度の忠戰不可勝斗。爾より上總入道參河守、大藏大輔、修理大夫、彈正少弼、參河守、佐兵衛大夫義綱、彈正少弼治綱迄八代連綿て白川城主たり。然るに治綱末期に臨み其子七若微若たるに依て、一門小峰佐兵衛亮義親に後見を頼み終に卒せらる。於茲義親野心を生して七若を殺して白川を押掠んとす、故に郷土佐守密かに七若を盗出し危難を逃れ身を隱す。依て義親白川を領して結城を稱す。天正二年和田安房守昭爲か謀略にて御當家の爲に滅亡し降人と成り、剃髮し不治齋と號す。後伊達正宗に従屬て子孫仙臺に住す。七若は流落の内に成長て治部大輔と號す。其頃

天下一統私軍停止せられ、本領又立歸る事ならず、古譜代の者共にはくこまれ浪牢にて世を終る。竹千代も右之通にて治部左衛門と號す、生涯牢人にて終る。其子久右衛門秋田へ下り、仙北角館住和知氏へ入贅と成り和知久右衛門と改む。其子喜右衛門の時和知を避て小峰を名乗り、小峰七郎兵衛と改む。爾より後白川の古譜代共御當地へ罷越頻に御訴訟申上、且つ松平大和守様より、白川正統に無紛候間被召立被下度旨御頼に付、徳雲院殿久保田へ被召出白川七郎兵衛と稱せられ追て廻座にせられ、其子七郎兵衛朝信也。閑居隨遊と號す。嫡子七郎朝伯寶曆八寅年家督、七郎兵衛に成る。其子孫七郎義敦公大番頭とせらる。

#### 土屋彌五左衛門

祖父土屋伊織は其先未詳、將軍家御簀本土屋忠兵衛殿舍弟分也。忠兵衛殿御當家へ御出入にて徳雲院殿御入魂被成、諸事御用御頼被成ければ其弟被召仕被下度旨御頼、且相模守様（御家老中なり）よりも御頼に付被召抱、彌五左衛門と改め廻座格合にて江戸定居にて勤仕。其子富之丞代に秋田勝手に被仰付久保田へ下着、天祥院殿廻座とせられ此席に着らる、後名藏人に改む。無嗣子に依て後藤利左衛門三男を養て嗣とし、是今の彌五左衛門也。明和年中義敦公御家老とせられ後被召放、其子源藏大番頭とせらる。

#### 八木作助



先祖但馬國宿禰氏の人といへども其名數代未詳（其家に可尋）、御先祖昌義公故有て京都を御開<sup>キ</sup>常州へ御下向（古實口傳有り）の時、御供侍の内隨一の老功也。鎌倉より御船にて上總沖御渡海の節、鯖魚御船の底を刺し透し潮込、御船既に危ふき處に入木生蛇を以て其穴を塞きければ、貝脩に吸付潮込入事止み、御船無恙上總湊へ着す。是龍神御加護可被成しと上意にて彼蛇を八木に賜り、氏神に祭しめ給ふ。爾より八木氏、伏蛇を以て紋とすといへり。去れは於常州日夜御側を放れず、朝夕迄の供御迄試て勸<sup>メ</sup>奉り守護したる御腹心の者なりければ、代々御年男とせられ、都て年中の御儀式、萬事御膳の上等代々八木司り御近習の惣一老たり。故に關東古來八木一人御膳番役致し、年頭にて元朝屋形様御夫婦御盃事の御席にて、八木備前守、其子作助にも御二方様より御盃被下たるなり。其後江戸御證人以來御國本に御臺様不被成御坐故其式相止み、御座の間にて八木御盃頂戴仕也。爾より御年男と申唱へ諸御規式を司る古來より御近習一老職にて、外様と格別の御扱故御座には不被着所に、今の作助祖父治助代元祿十年丑十二月德雲院殿始て一代廻座に被仰付、翌正月より末席に着せられ御廣間にて御盃被下、子供部屋住の間は御小姓勤仕せしめらる。其子作助も右之通に候處圓明院殿永代廻座にせられ、爾より定席と成り、其子今の作助、元祖より養子と云ふ事なく代々血脈連綿して相續するなり。寶曆十二年作助病死。嫡子清治後清三郎と改む。其子

先祖大澤備前守は御一家長倉の分流と雖も未詳、天英公御時伏見御屋敷御番等相勤、御國替の時其子彌五兵衛共に秋田へ御供。御支流筋たりと雖も嫡家長倉御家立退他家へ奉公仕に付御取立もなく、御近習に斗被召仕たる也。其孫彌五兵衛徳雲院殿御心易被召仕、天祥院殿御幼稚より御側勤仕數年功勞致に付一代廻座にせられ、其子七十郎清重父に先達て死す。故に其子五郎祖父の嗣と成り彌五兵衛清重と號す。圓明院殿永代廻座にせられ定席と成る。是今の彌五兵衛清光也。嫡子五郎は小瀬宇兵衛二男也。

### 眞壁十兵衛

先祖眞壁安藝氏轉の舍弟式部義轉の末なりといへり。義轉の子右衛門房轉、氏轉の子と成る、其弟又十郎重轉兄房轉の子と成り宗家を相續す。然るに義轉妾服の子有り始め蘆名家へ奉仕、後蘆名家斷絶に依て古式部少輔義貞君に奉仕、十兵衛と號す。爾より式部義郡君、豊前守義堅君迄昵近者也。義堅君御本家へ御養君の時其孫十兵衛御供仕久保田へ勤仕、嗣子なく横手給人上遠野小左衛門二男を養て嗣とし、是今の十兵衛也。寶曆五年亥夏、恭溫院殿永々廻座被仰付。右は養父十兵衛勤功に依て大澤氏の次に着せられ、子正月元日始て着座。

### 平元茂助

明和四年亥閏九月二十七日義敦公、能代奉行より一代廻座に被着御家老とせらる。同十二月六日永々

廻座に被爲着、安永年中御役被召放。其子典膳早死、其子今の隼人。安永七年大番とせらる。

以　上

右古老の申傳に據て撰之もの也。

追て右引渡十九人、廻座五十六人也。

金　　肇

中安主典

文化十三歲丙子卯月奥於御殿書之。

昭和七年三月

深澤多市校訂  
國本善治校字

長野先生夜話集





# 長野先生夜話集目次

一	義重公諸士の刀を検す……………	九一
二	備前三郎の刀の由來……………	九二
三	和田安房守讒せらる……………	九三
四	東義久の顔に盃を投ぐ……………	九四
五	東義久國替御免を願ふ……………	九五
六	梶原美濃の事……………	九六
七	死を期して義重公を慰む……………	九七
八	義重公一生木枕……………	九八
九	義宣公鞍間の事……………	九九
一〇	強盜一本槍の甚十郎……………	一〇〇
一一	久保田城と横手城……………	一〇一
一二	義重公父子の戦術問答……………	一〇二
一三	義宣公自慢の防戦……………	一〇三
一四	大番振舞の濫觴……………	一〇四
一五	感狀にて頭を打ち返す……………	一〇五
一六	信太内藏助の奇智……………	一〇六

一七	玉生八兵衛見出さる……………	一〇七
一八	八兵衛須田家養子の事……………	一〇八
一九	浪人軍評定に出づ……………	一〇九
二〇	新庄百姓伊右衛門……………	一一〇
二一	義宣公自ら金藏へ……………	一一一
二二	義宣公の葬儀……………	一一二
二三	須田美濃の事ども……………	一一三
二四	小野寺刑部の輝く武勳……………	一一四
二五	小田部五郎右衛門の念願……………	一一五
二六	「討死致度候」……………	一一六
二七	淺原兄弟討たる……………	一一七
二八	大坂陣の我が軍備……………	一一八
二九	義隆公脇指の儘書寝……………	一一九
三〇	義重以下四公の氣質……………	一二〇
三一	小田野西庵大將道を説く……………	一二一

三二	義隆公述懷……………	一二二
三三	梅津梅岩の節約……………	一二三
三四	義隆公著りる戒む……………	一二四
三五	梅津梅岩或時……………	一二五
三六	戸村十太夫失敗……………	一二六
三七	首討落して遠慮三十日……………	一二七
三八	佐竹中務先例を重ねず……………	一二八
三九	宇垣典膳の事ども……………	一二九
四〇	大久保民部草履取某……………	一三〇
四一	鯨一疋焼の威光……………	一三一
四二	須田伯耆の衷情……………	一三二
四三	眞裸にてさゝらすり……………	一三三
四四	義隆公快く雁を譲る……………	一三四
四五	論語朗詠庭訓式目……………	一三五
四六	伯耆小姓の言を戒む……………	一三六
四七	玉生八兵衛の幼時……………	一三七
四八	唄を聞いて隨行に遅る……………	一三八

四九	小唄の名手聲出です……………	二二
五〇	宇都宮より日夜歸著……………	二二
五一	盃事して江戸登り……………	二二
五二	佐藤休也轉引の頭を打つ……………	二二
五三	小川九右衛門の事ども……………	二三
五四	指小旗は祖先武勳の印……………	二三
五五	涙の切腹者を哀れむ……………	二四
五六	歩行士某の切腹……………	二四
五七	義隆公實父をたしなむ……………	二四
五八	祕藏鍋の管理を斷る……………	二五
五九	大力者信太亦兵衛……………	二五
六〇	大越夢忍の事……………	二六
六一	大越稻葉と其妻……………	二七
六二	梅津利忠の幼時……………	二七
六三	利忠軍法を學ばず……………	二七
六四	利忠生き菩薩と拜さる……………	二七
六五	利忠僧を囚ます事……………	二八

六六	梅津敬忠自らの怪我……………	二八
六七	須田伯耆登城には……………	二八
六八	佐竹山城の諧謔……………	二八
六九	遠慮の者外出を禁止さる……………	二八
七〇	義隆公私意を避く……………	二九
七一	大越稻葉と梅津梅岩……………	二九
七二	小性共叱言をきかぬ……………	二九
七三	義隆公小鳥を愛す……………	二九
七四	仙臺騷動の真相を探る附 矢目行光の由來……………	二九
七五	瀬尾五郎兵衛御目見得……………	二九
七六	梅津與左衛門の妙計……………	二九
七七	同役に仲違者を推す……………	二九
七八	清水嘉兵衛の事……………	二九
七九	佐竹玄蕃討死の鎧を望む……………	二九
八〇	義處公婚姻に落涙……………	二四

八一	梅岩乞食に施すを喜ばず……………	二四
八二	佐竹山城の羽織をはぐ……………	二四
八三	指南付を廢し番頭を置く……………	二五
八四	會所を設く附梅津半右衛門 用人信賴の事……………	二五
八五	高垣川井の果し合ひ……………	二六
八六	兵學の極意金五十兩……………	二七
八七	泣いて義處公を諫む……………	二七
八八	軍書讀み瀧田遊節……………	二六
八九	義處公上野受取の苦戰……………	二六
九〇	批評と實戰は又違ふ……………	二六
九一	幽山遊節の圖上戰術附遊 節の人と爲り……………	二六
九二	義處公粟穗に驚く……………	二六
九三	五十年生きて百年分……………	二六
九四	幼時太平記を讀す……………	二六

九五	非常時に枕とする城……………	三三
九六	小野崎舎人の事ども……………	三三
九七	平元小助の事ども……………	三三
九八	川井叢端と平元小助……………	三三
九九	梅津茂右衛門の大力……………	三三
一〇〇	今村不僧の書……………	三三
一〇一	中川宮内の熱心に絆さる……………	三三
一〇二	福原資英の吊歌……………	三四
一〇三	「半右衛門又叱る」……………	三四
一〇四	今村幽山再び物頭……………	三四
一〇五	抱へ力士碓、山の内……………	三五
一〇六	澁江宇右衛門快朗……………	三六
一〇七	義格公代の簡略……………	三六
一〇八	義格公代江戸登りの手當……………	三六
一〇九	弓の名手豊間伊兵衛……………	三七
一一〇	狸、善助の亡妻と化す……………	三七

一一一	山方泰護の箴言……………	三七
一二二	大繩東之進怒る……………	三七
一二三	狂言師彌五郎の拜借頼……………	三七
一二四	山方金之丞の事……………	三六
一二五	財用奉行を免ぜられて……………	三六
一二六	梅津敬忠仁政を解せず……………	三六
一二七	岡本元朝の妙案……………	四〇
一二八	岡本元朝の寛量附中田彦太夫の事……………	四〇
一二九	印籠を削りては如何……………	四二
一二〇	岡本又太郎最期の願ひ……………	四二
一二一	義峯公山城を困らす……………	四二
一二二	弓の名手赤坂治部之助……………	四二

一二三	那珂勲助鰐を追ふ……………	四二
一二四	金蛇天に登る……………	四二
一二五	今村治太夫の憂嘆……………	四二
一二六	留守居行の事……………	四二
一二七	龍飛び去る……………	四二
一二八	鍵の名手土遠野監物……………	四二
一二九	妙戒尼の事ども……………	四二
一三〇	長野先生の尙武言……………	四二



## 附 錄

一	宇屋志内の地勢	一四六
二	長沼と山崎の沼	一四六
三	秋田城之介御座の間	一四六
四	子を抱いて當番	一四六
五	不敵の下男を切る	一四七
六	須田美濃の不禮を責む	一四七
七	金澤文兵衛の事	一四七
八	梅津梅岩腹立聲	一四八
九	須田伯耆と其妻	一四八
一〇	制札が制札ならず	一四八
一一	前例故實	一四八
一二	内藤南省加増二十石	一四九
一三	眞劍勝負と酒と	一五〇
一四	幽山籠水の刀の由來	一五一
一五	益戸滄州の氣慨	一五一
一六	梅津柏葉十日家老	一五二

一七	吉成小藤治と筆者	一五二
一八	安永七年城火事の兆	一五二
一九	梅津柏葉の逸宿	一五三
二〇	柏葉食物を選ばず	一五三
二一	中川柳軒禮義を説く	一五三
二二	梅津柏葉の恬淡	一五三
二三	梅津柏葉の磊落	一五三
二四、二五	柏葉箴言二條	一五三

以上

時代り星移りて、人の事跡の湮滅するをいたむへし。爰に、予か兵學の師小野寺主水道維先生ことし九十二歳になられしか、古代にくはしく能世の物語を讀し玉ふ。予先生に隨ふて古代の物語を聞毎に家に歸りて録しけるか、忽百三十の話頭となりし。かくなん積れるを捨置んもおしむへく、亦ほるなし。ゆゑに今書つゝりて一冊となしぬ。先生は長野に居玉ふをもて世に長野先生と稱す。此書、即先生の夜話を記せるをもて長野先生夜話集と表するもの也。

于時文化四年丁卯春

塙 守 約 書 之



## 長野先生夜話集

【一】義重公は折々御番所なごる出させ玉ひて諸士の佩刀を御覽せられ玉ひ、寢刃なごを引けるやうなごさあれば、柄糸などやうのものを賜りて稱し玉ふご也。

【二】備前三郎の御刀は謙信公より義重公へ進せられたる也。其節の御口上には、三好三人の衆へ慮外申し又老の杖とは存しぬれごも、我等の武勇を御繼ぎあるべきは、足下たらは無之覺侍る故此刀を進じ申ご也。其後義宣公へ御譲りありけるに、寸長しごてすり上げ玉ふ。後に義重公此方へ入り玉ふ折から、備前三郎を久しく見ぬゆる御覽有るへきご也。義宣公いなみ玉ひけれごも、強て御意有るにつき是非なく出され玉ひければ御覽ありて、刀の魂ぬけさりぬご、御不興の御色ありしご也。

【三】和田安房守昭爲の許へ蘆名より御和談の使者來りけるに、昭爲心にや叶はざりけん、其使を即返されぬ。車丹波讒訴をかまへ、此事蘆名へ内通の由を申上る。はやり玉ふ義重公なりければ、早く安房



守を可討取と即丹波に令し玉ふ。昭爲是を聞き伯父なる川井某の許へ行きて、いかゝ計らふべきと申ければ、逆心となれば事急也。先づ早く國を去り、難を免るゝにありと云ける故直に走りける。跡をしたふて丹波、飛が如に追かけ來る事急なるゆゑ、身を山林へ隠されければ其麓迄來り、安房守を討もらすことは是にて三度なるぞ、遺恨也と、高聲に罵詈のしりて引かへす。

和田氏家傳に、昭爲去るときに當て、父爲忠か亭に詣てこれを告ぐ。爲忠曉して云、先を見て後を見ることなかれ、上を見て下を見ることなかれ。昭爲か云、野内大膳昭爲妹婿を頼まんと欲す、如何。爲忠云、不可也。是尋常のことにあらず。汝君に叛するの名あり、親族と云とも豈能頼まれんや、速に他邦に去れと。昭爲諾して奥州に趣く。道どう山を過く、此山きはめて嶮岨にして九折あり、辛苦して山上に至る。丹波斯忠從兵三十騎斗りにして追來り、麓に至て云、口惜哉、和田を討洩すこと既に三度に及と。此言山上に聞ゆ。爰に於て、初て斯忠か讒することを知る。

爰に昭爲の男子三人在り、何心なくありけるを、御北へ呼寄せ玉ひて不殘討せ玉ふ。三男善九郎此時十五歳なりけるか、厠へ行きける跡にて太刀音しきりなるを聞、和田のつるまちと云名劍を振りて厠より飛出ける處へ、宇留野源兵衛鷹野に出て其事を聞、十文字の鎗を以たゝちに突かゝる。善九郎大音上げ、老功にも似合ぬ、刀に鎗を以向ふとは怯しと云言下より、餓鬼め／＼と云てしきりに突掛けけるとき、刀以十文字の横手を切落し、終に源兵衛が手下に果しそ、あわれなることども也。然るに昭爲は、蘆

名第一の士大將佐世源兵衛か許へゆき案内せられけるに、佐世攻馬して居けるかを聞きて、安房守は聞及ひたる者也、下<sub>タ</sub>手に置ては使はれまじ、上<sub>ウ</sub>手にしては蘆名歴々服すまじと云を聞て、是にては事なるまじと引返して白川へ行き、旅宿して居侍りぬ。白川義親是を聞玉ひ、時々招き玉ひて軍の意見を開ふに、昭爲が工夫神の如く、いつも勝利を得られたる故頻りに用んと思ふ容子を伺ひ、御家に恨みあることを述、義親の力を借りて全く討亡すの計を告ぐ。義親聞之、大に悦ひ其計に随ひぬ。爰に於て昭爲、密書を以東義久の許へつかはし、此度如此の計を以白川を御手に入侍らんに、本の如く被召歸玉ふべきやと也。即義重公の玉ひけるは、三人の男子を殺しけれども忠節如此なる上は、なんの異思あるべき。白川御手に入りたるに於ては、元の如被召歸べくと也。即義久、昭爲と調し合せ義親を御家へ向はせ、左右より挟み討て終に白川御手に入、依て昭爲召歸され、元の如御家老仰付られけると也。

【四】 常州南摩山にて御合戰の砌り眞崎義保討死しけり。敵其首を揚んとしけるを義保の弟馳付き、兄の敵を討ける勢其働き比類なきにより、義重公御感あらせ、名を雲井に上ると云御心にて雲井の助と名を賜ひぬ。亦雲井之助義久の許へ行れたるとき、海老の大盃を被出酒を強ひて進めければ、其盃を義久の良へ打付け大に怒て云けるは、我等を酒に酔伏せ、謀反を起し玉ふ御分別かと申されければ義久更に不動して、をもむろにの玉ひけるは、我等が良へ盃を打付る者、御家中には其元ならてはあるまじ。たのもしき人哉と稱せられけるとなり。

【五】 天下家康公に歸しけるとき、義久殿常州を無殘指上られ可然と申されし折から、家康公義久を召され、其方へ宇都宮十五萬石を賜ふへき故、義宣國替のこ可承濟と仰出されけり。義久申し上げるは、我等へ十五萬石拜領は御訴訟奉申上候也。ねかはくは我等一代、義宣國替の義は御免可被下置となり。家康公、其儀に可任と御承知あり。此節同道の和田安房守大に怒り、足下一代國替の儀御免あられ候へとは如何なる次第ぞやと申ければ、義久笑て、我等は家康公より年若し。家康公だに世を去り玉は、恐るゝことなきを以なりと申されしか、即家康公より義久へ、御料理頂戴あるへしと被仰出ぬ。此時義久和田へ向て、事既に急也。此上は貴殿國へ歸り、國替の始末被致候へと申し罷出て御料理頂戴せしか、果して程なく義久殿死去せられ、秋田へ國替被仰付玉ふとなり。

【六】 眞壁道無鹽鰯の焼物にて膳中、婿の梶原美濃方より使者來りぬ、即其鰯を膳の下へ隠して對面をなせり。使者歸りて後、何故に焼物を隠し玉ふやと問ければ、美濃は尋常の者にあらざる故使者歸らは委く聞んに、焼物は鹽鰯一疋也といは、我か過ちを顯すなり。なせ一疋の鰯を三ツにも切て菜とし、費をはふきて、矢の片羽の助けにもせぬと思はれなは心憂かるへし、爰を思ひて隠し侍ることなり。古代の質素なること是を以知るへし。此時代天下に三美濃とて、馬場美濃、須田美濃、梶原美濃也。後に梶原美濃、金澤の城に居住の願不叶して、院内をすかし大澤口より出國をなし、越前少將忠直卿に行て武者奉行となれりとなん。

【七】 義重公、六郷より出御ありて馬口勞町に宿らせ玉ふ。桐澤久右衛門御機嫌御伺に罷出ければ、義宣は白の鷹を持けるよし。吾常州にて百萬石に近き祿を保ちしかと、白の鷹は夢にも見侍らず、果報なる人哉との玉ひし故、左あらは明日御覽に入奉らんと申上げ、翌朝未明に、桐澤、御鷹屋より白の鷹をすゑ出し義重公の御覽に奉入。つく／＼御覽ありて、聞にまさりぬこの玉ひ、拳へ上げて不苦やと有りける故、何かくるしかるべきやとて御拳へ指上ければ、しみ／＼御覽ありて御涙流させ玉ふ。桐澤是を見、左程に思召玉はば御持參遊はし玉ふべしと申上ければ、即御自身据へ玉ひ、御城へも入玉はす直々六郷へ歸らせ玉ふ。其日義宣公白の鷹ごあれば、久右衛門今朝こく据出候ひて、今に歸り候はずと申すを聞せ玉ひ、久右衛門を召されけり。久右衛門、召に應じて出るに御怒りの色あるを見、覺悟のことなれば常よりも席を進み、御手討被成よき様に首さし延てぞ居りける。義宣公此容體をつく／＼と御覽ありて、何の御意もなく入らせ玉ふ。久右衛門も無其儀下りけるか、三日すぎ御勘定奉行被仰付しと也。

【八】 義重公御晩年に至らせ玉ひ御寒くあらせ玉はんとて、羽二重の御夜着蒲團を義宣公より進せられ玉ひければ、志なればとて只一夜召玉ひて、亦召されず。鍵を以御木枕をたゝみへ掛け、木綿の御夜着蒲團を御一生召され玉ふと也。

【九】 義宣公、夜の御寝に紙帳を二ツも三ツも張らせ玉ひて、何れに御寝あることの知れぬ様になされ玉ふ。御寝の間は内より掛け金にてしめ玉ひ、出火などありて外より申上れば、御長月の切先にて御



掛金をはつし玉ひ戸を開かせ、容子を聞召玉ひしごなり。

【一〇】御國替の當座一揆起り、六郷の御所へ切り入らんごす。義重公少しも驚き玉はず、御坐の間に常の如く居らせ玉ひ有合者を召されて下知し玉ふ内、横手より梶原美濃を始め、上遠野隠岐等追々馳付一揆を追拂ぬ。又御國替當座は戰國の餘敵猶ありて、諸浪人等處々に徒黨をなし一揆を起す。わけても雄勝の二條堂、赤袴の強盜とも、白討と號して大勢込み入に、先つ討と思ふ家へ前日札を立て、何日の何時白討にいたすゆゑ用心あるべしと廣く人に示す。其期に至りぬれば、強盜るものゝを提げ、眞先きに炬火持左右に炬火と鎗を二本兩脇にからみ持、其鎗の竹刀の尻を持つ者後ろに居て、向ふを幸に突たふす。是を討込みの始めとして物を取るを跡にして、人を殺すを手柄ごす。此頃一本鎗の甚十郎と云者、左側先驅の炬火持にして大強力の者なり。此男鎗一本持ち、それへ炬火を持そへ眞先きに切入に一人も當る者なく、勇力衆に秀たるを以一本鎗の甚十郎とは號す。後段々御政事正く嚴密の御成敗あらせ玉ふに隨ひ、多くの強盜等皆退治せられけるに、此甚十郎斗りは行方を不知。其故を以其母をこらへて獄につなぎ玉ひければ、甚十郎南部より馳來り、梅津半右衛門殿へ出申けるは、私事一本鎗の甚十郎ご申者也。私の長惡により、咎なき母を捕へ玉ふよし、去りごもなけかしき次第也。私の母に於ては毛厘の咎なき者にて候間、御捨免を蒙りたく、於私には、如何成る御咎に相なりごも不苦候。此義を申上んご存し、南部よりわざ／＼罷出候ご云。半右衛門殿御對面ありて、去りごはけなけ成る者也、先つ

体足すへしとて長屋へ指置れ、番人も付玉はす。後しか／＼のこ言上ありて、一命を御助ありしなり。

【二一】 御當城築せ玉はぬ以前義重公の玉ひしは、横手を本城に致然るへく、久保田は湊近き故、末には家中困窮すへしとの玉ひける。義宣公、横手は分内狭く、本城にはなりかたからんと御答あるを義重公、居しめぬれば廣くなるものと、の玉ひしとなり。

【二二】 御當城御築きの後義重公の玉ひけるは、此城にて籠城至さるゝや否やと問はせられければ、義宣公の答させ玉ふには、私に於ては、何も出張り致し一戦を心掛候と也。義重公、尤也と御意有りける也。

【二三】 梅津小右衛門殿、上の御坂の御繩張りは義宣公御自慢にて、十文字鎗一本にて防かるゝと折々御意ありしとなり。

【二四】 大坂にて御先手突立られたるを見て、御旗本に居たる者手に合んと喜び、又此時大番申しけるは、御側の者は雁汁斗り食へとも、ケ様の節は逃げ候はんと云。義宣公聞し召され、御歸陣後大番振舞を始め玉ふ也。天祥院様御代迄、町々より罷出頂戴せしとなり。

【二五】 大塚九郎兵衛或時郷田七右衛門に頭を打れけるか、耻を忍びて大坂御陣にて高名せり。即、茶臼山に於て拜領せる御威狀を持て七右衛門が許に至り、前度其元を頭をにられけること、上を奉存て死

せず、只今此御感狀を拜領せし也。あやかり可被申こて、御感狀を以七右衛門が頭をしたゝか打ちぬ。七右衛門、頭をたれてあやまりけると也。此七右衛門と云人強勢にて、澁坂にて辻切をし、弱き者をこなすこと鬼の如くなるを以、世に鬼七右衛門と稱せり。大坂にて、必此人こそ高名すべしと沙汰せしが案に違ひ、常の強勢とは雲泥の違にてありしと也。

【二六】 大坂にて中田六左衛門中田彦太夫家來實は義腹之子也大崩しの時旗を持て逃るを、信太内藏助追かけて其旗を取戻し、柵へかけて立ければ勢能く見へけるとなん。

【二七】 玉生八兵衛浪人の時、小貫大内藏に縁ありて客居せり。義宣公、小貫へ入り玉ふ砌何者也と尋れけるに、御家を心掛罷越したる由申すに付、即被召出大番に被入置。三年大番を勤め、大内藏殿へ來りて御暇拜領仕度と申す。大内藏殿、宸初召出さるゝとき、御家を心掛罷越したる旨申すに付其旨申上ける故、すなをには御暇下されまじ。其れにても不苦やと申されければ、尤不苦と云に付是非なく其旨申上られし處に、義宣公、あの男の心は合點也。側廻りにて召使ふべく、夫にても暇願ふや尋可申御意あるにより、即其旨尋られければ、御側廻りにて召使ひ玉は、何と御暇を可申上や。御小身にても、側廻りの奉公を勤たくゆるに御暇を願ひける也と申。其後御側廻りにて召使はれ御膳番となり、大坂御陣の節は御使番にて茶臼山へ首持參の時、本多上野守様、八兵衛とと兩度被仰けるに不答、玉生八兵

衛と申されける時答て出けるごなり。

【一八】義宣公江戸より下り玉ふ。玉生八兵衛、御膳番にて御先きに下られけるとき須田美濃殿申されけるは、何も珍らしき物なく只鯉一尺あり、是を可指上やと申されければ八兵衛申には、時節甚早く候。御大人へ不時物はいかに候故、御延引あるべしと也。美濃殿、尤也、左あらは鶉有之故是を指上へきやと也。八兵衛申には、定て御拜領之品に候はん。夫を指上られては御拜領の御趣意薄く相成べく、是又御延引有て可然と也。是より美濃殿心にや叶けん、美濃殿嫡子を大塚權之助亂心して殺害に及ひし後、八兵衛を養子に願はければ義宣公御不興にて、美濃にも似合ぬ願よう哉、御意に入たる八兵衛を養子にするごならは、得心有まじと也。美濃殿是を聞れ、御家中には、八兵衛より外養子にすへき者なし。左様ならは家を潰し可申と云に付御得心ありて、八兵衛に、養子に可罷越と被仰出ければ八兵衛申には、玉生の名字斷絶仕る故御免有るべしと也。依之玉生の名字は、忤有之は立下さるへきと被仰出須田の養子と成る。其後義宣公逝去し玉ひけれども、嫡孫を以分知にて玉生の名字を立られ、又後に八兵衛と號し隱居して常山と云へり。今の玉生氏は也。

【一九】梶原美濃沒落して小田天庵が許に來り、軍評定の席へ出て彼是ご意見を申ければ小田氏譜代の人々、浪人之分として不入意見の申事と申し、美濃が意見を不用。美濃は眞壁道無が婿なるに依て道無を以此方へ御引付ありて、後に小田氏退治あられしごなり。



【二〇】 小場源右衛門殿最上の城受取に被參候節、新庄の百姓伊右衛門と云者、三掄の大旗を一人して持し力量すぐれたる男也。亦、城之助様に召しつかはれし老婆より釜もらうこと有しか、中頃失ひ、後に堀り出して近來迄處持せりと也。今にも其跡伊右衛門と云て有之といへり。

【二一】 須田伯耆殿咄されけるは、御金の納り多く有ける故御手傳あるへしとて御金藏へ参りけるに、義宣公御自身御藏へ出させられ、金箱を御自身御積遊ばし、御金多くさへて横にならせられ御往來ありぬ。二階は階子なしに金箱を積み往來あり、又、御二階の上も定て金にてあるへしと思ふと被申けるとなり。

【二二】 義宣公御落命のきはに被仰置けるは、我等身上の宜きことは近國にも其きこへ有りぬ、葬式は随分結構に致べく、輕き者こもの濡にもなるべき也。遺骨は政景に納むへしと也。扱御遺骸下らせ玉ひて、於天德寺御艸焼終り政景御葬場へ出けるが、其頃痼病にて大病なりければ、石を取寄せ其へ腰を掛け、つくばいて御骨を納む。其ときの石を政景石と名付て、徳雲院様御代の頃迄か有しと、梅津半右衛門忠興殿咄されしと也。其節の御葬式美を盡しぬ、内御ゑがきは金だみ、中は銀だみ、外は朱ぬり、御火屋の水引は金らんにて有しと也。是より御例となりて、御葬式甚た美を盡せると也。

【二三】 横手近在へ切支丹入込み、百姓に法を教へ人數を集め候事上へ達し御吟味有るに付、切支丹等一揆を起して騒立ける。其時瀬尾五郎兵衛只一人、蛇の先きの橋の上へ二間餘りの角材木を提げ目を

怒らし立ければ、寄り付く者一人もなし。其内に横手の人數にて取鎮めしか、徒頭の大岩と云者自殺せしとなん。此時生捕の者残りなく、須田美濃殿御伺なしにはりつけ、打首にして、後義宣公へ申上られぬ。或時此事を仙臺正宗公に御咄しなされしかは正宗公、美濃は痒い處へ手の届く男に候と申されしと也。亦五郎兵衛或時曲馬くまに乗りけるに、元來馬を不知故、力にて無理に攻けれども不聞、終に馬さらひ走り美濃殿の門へ入らんとす。此とき五郎兵衛、門のかぶきへ兩手を掛兩足にて馬をはさみ引上げれば、馬の足地より離れ、沖にさがりけると也。

【二四】 道維先生六代の祖小野寺刑部と云けるは、武田勝頼公に屬し常善の城を素肌にて一番乗をし、感狀を得られ今に傳りぬ。此人一番鎗を入ること七度、首を取ることに十六度、感狀五枚在。後に脇の下の邊へ腫物出て、破れし口より鐵のくさり出、亦其後に鐵炮の玉出る。是は數度の手負の折から、肉中に入りしを不知に居りしもの也。くさは、鐵炮の玉の入る節に押込しものと見ゆるとなり。

【二五】 小田部五郎右衛門、水戸宇留野合戰のとき手負て、青木葉疵口へ十八枚はりし剛の者也。慶長十九年の正月元日に、鹽鰯の焼物を箸にてこれは鰯の首落けり。是を見て、我既に六十に余り、虚く床の上にて死んことを悔みしが今日此吉兆有り。今年は積年の願念を果すの年なりとて大に悦びしか、果して其年の霜月、大坂御陣にて討死せり。

【二六】 平野作左衛門、大坂御陣處より在處の嫡子伊勢福處へ書狀の内に、飢死ぬか凍へ死に申すべく

候間、夫よりは討死致度と云をこせり。

【二七】 淺原甚之丞

御茶の者

屋敷は、穴門瀬谷小太郎本屋敷也。當番の時、同役緞子せんすの半ゑりを掛けて着た

るを見、其元御停止の物を掛候と云へは、何ぞ新し物にもなく有合にて掛たりと云。夫より互に口論になり、御城下り小右衛門殿上にて喧嘩に及其同役を切殺し、己が宅に引籠りける。此由義宣公聞し召、物頭大山與一左衛門を討手につかはされ、内膳殿上の御矢倉へ出玉ひて御覽あるに、與一左衛門は甚之丞兄弟に切立られ、數ヶ處疵を負へり。此時半右衛門殿は内膳殿へ行かれ、馬の爪髪を致し居られけるを召し、早々參りて討止め候へとありければ、在處に歸られ長刀を取て向はれけるに、與一左衛門はあけになつて、穴門の堀にて血を洗ひ刀を洗ひ居りけると也。半右衛門殿臺所より入らんこせられければ、弟大戸を閉つ。此時、半右衛門殿家來高村有仲と云者跡より來り、下水屋の下をくゝり入らんこするを甚之丞か弟、其背中をさし通して殺す。其間に半右衛門殿長刀を以甚之丞と仕合けるに、長刀の目釘ぬけこみ踊り出るを、後の柱へ石つきをつきて中子をつき込、甚之丞が胸板を突通す。突れなからたくり寄りしを掬ひ上げ、馬屋のきね掛へ押掛、長刀を引取る。此時後より弟刀を振り上げ飛かゝらんとするを、半右衛門殿大に怒り聲を上げみて、餓鬼めと、をぐす勢にへきゑきしてちゝみたるを同く討止め、首二ツ持て歸られしに、仁叟與左衛門殿二ツの年、乳母に負はれ門に出て居らる。半右衛門殿、思きれ候故湯一ツ持來れと云へは、乳母あはてゝ水を持來るを、ケ様に息切れ候時水を呑めは背肉せじ落ること

有者故、湯を持来るへしと云て湯を呑み、夫より首一ツ御覽に入奉りしとなり。

【二八】 大坂御陣の節、澁江内膳殿五十騎を領して先手に備、二の手は伊達三河殿五十騎を領し、三の手は義宣公御旗本五十騎にて備へ玉ひ、都合百五十騎也。澁江の備討立られし時伊達の備見崩せしに付、義宣公大にせかせ玉ひしと也。此節の一騎三百石に被成玉ふ。遠國はれの軍ゆへ左もありぬへし。

【二九】 鑑照院様、晝御寝なり玉ふには皮の御枕を被遊、必御脇指をさへせ玉ひけるとなり。

【三〇】 同し御代の人々、御前はおそろしく入らせ玉ふと申せは其頃の老人とも、只今の殿は前の殿より見候へは、猫のやうなと申ける由。天英様義宣公の尊號の御顔、しみ／＼と奉見者は多く無之由。關信様義重の尊號

は猶おそろしく、關東にては鬼義重と號しける由。鑑照院様御意被遊けるは、右京はゆるく有故人いたみ可申となり。其御緩ゆるきと有つる徳雲院様、甚御腹立の節は莞爾にこ／＼御笑被遊けるに、御髪の毛ひんぴんとはねける由。夫故に其頃の御側の者、御笑が出ける故油斷するなど申合けるとなり。

正田齋定綱殿付札に

知足院様義重公の尊號

御事、軍陣に御出被遊候ては鬼神の如く、敵も味方もおそ

れ奉候。御平生は殊の外物柔かなる殿様にて、常々御きようさん斗り御意被遊御機嫌克殿様故、御下々心易く御奉公仕候由、古人物語と云冊子に見ゆ。

【三一】 鑑照院様の玉ひけるは、我身局仕の節小田野西庵が元へ折々夜話に参りしか、夜食には、西庵か妻焼き飯を拵へて呉れぬ。又西庵申し侍る、大將の心掛に二ツあり、御家老とも誰某は能き者と申侍



ることも卒爾に用ひ玉はて、先づ御近習の者どもへより尋玉ひ、得と善惡を知召れ用ひ玉ふ時は、多く御人違もあるまじ。亦御家老ども、誰某は不宜者と申上ることも是又卒爾に捨玉はて、御近習の者どもへ御心を付られ、得と明らかに知召れて後に捨玉ふべしと申しぬ。只今ヶ様の事を申す者なしと、御機嫌あしき折から御意ありしと也。

【三二】鑑照院様或時御意ありけるは、身が分別上りたると思はるゝ也。梅岩半右衛門息災の節は我等申すことを能きと申たることなく、半右衛門申事は皆尤にてありぬ。當時自分ども、我申事を皆尤々と申すを以見れば、我分別の上りたるにてあらんと、其頃の年寄衆へ御意ありしとなり。

【三三】光壽院様鑑照院様御臺所也より秋田へ被仰遣、金子三十兩鑑照院様より御登せありしか、其時梅岩半右衛

門殿在江にて其事聞れ、其金子此方へ遣し候へと申て手元へ引取りぬ。光壽院様被爲聞、半右衛門はにがしき者也とて御落涙ありぬ。此事奥付きのもの半右衛門殿へ申ければ、御留主居に居る半右衛門、女倅が泣ばとて何と思ふ者ぞとて、終に其金を不指上して、下り前になりて金五十兩光壽院様へ持参し、是は在番中の御扶持の餘金にて候。御留主中は御慰みもあるまじきゆゑ、是にて御慰みに御つかひ有べしとて指上げぬ。前の三十兩は御國元へ持参なりて、御前へ返上有ける也。

【三四】御國より極月御登せ金有ける節、奥の御廊下へ積せ玉ひ、光壽院様へ、秋田より御金登りける間御覽有べしと仰進せらる。光壽院様御出御覽ありて、是は夥しきこと也と御意ありければ鑑照院様、

是は上の御用にて遣ひ候金にて候。其許奢りを致され候へは、中々ケ様のここには無之候と御意遊されけるとなり。

【三五】 梅岩半右衛門殿或時、御饗應に付鑑照院様へ、御慰にならせ玉はゞ、御白洲前より私の番所迄、掄一尺に小判を敷き御入可有と申上られしことありとなり。

【三六】 年始の御臺半右衛門殿拜領開にて、佐竹石見殿、戸村十太夫殿坏振舞ありしに、右御臺出るときこととて、十太夫殿手より其盃をもきこり石見殿前へ御臺を持ち參られ、石見殿に始めさせ玉ひこなり。

【三七】 深谷某、違つて盗人と見て母を刀を以突き殺す。法事するとき顔色あしきを見て尋問て其事を聞き、母を殺したる者は生してはおきかたしとて、即首討落す。乗運半右衛門殿、此事を聞かれ尋られければ有のまゝを申上る。三十日の遠慮にて相濟けること也。

【三八】 乗運半右衛門殿死去の節佐竹中務殿登城ありて、御膳番を呼出され、御機嫌伺に登城致しぬ、年寄とも病死して登城之例はなきことに候へとも、梅岩半右衛門死去の節親山城御機嫌伺に登城致、其節、出しへ不被爲出こと三日、御城回りの艸を刈らせられさること三日と親申事也。此旨可申上とて、中務殿下られけるとなり。

【三九】 宇垣典膳十六歳にて御小性御番下りの節、大塚九郎兵衛殿門前を通りけるに女の叫んで走り出るを見て、何こと、問へは、歩行者奥方を切殺し候と云。九郎兵衛殿内にかと問へは、當番と云。卽脇指の小刀を抜き皮袴の緒を切尻をからけ、其者何處いづと問へは材木の間に居たる由を云。其處へ望めは下より切り掛たるに、柳生流の雷電の太刀を習たてにて、受流して首を切る。扱家に歸り養父伊賀に其事を語れば、自分、人の名字をつぎ、譲りの刀へ疵付たり、家に置がたしとて追出す。家本に歸り兄の片岡讃岐へ此事を語れば、伊賀殿申さるゝは尤也、我家にも置ことならぬと云。伊賀是を聞き、さすか讃岐なれ、なんそ、にくうて云たることでなし。始め打物をしたる太刀くせは、始終ぬけ難き者ゆゑ斯は叱り侍る也。早く歸るべしとて家に入りけるか、其後果して、江戸にて御歩行亂心して家の上へに居たるを、澁江十兵衛殿討止んと打あはれけれども、其頃痢病にて天水桶へ片手を掛、長刀を以片手にてあしらはれけるを典膳行會で、十兵衛殿御助け申すと聲を掛打てかゝりしに、同く受け流して討止めたり。此事鑑照院様御耳に達し御尋ありければ、重兵衛殿は典膳打止め候と云、典膳は重兵衛討止め候と申上る。仍之爲御褒美、兩人へ同銘の御刀を被下ける。讃岐常に、典膳は弟なれとも仕合なる者也、我は兄なれとも手にもあはずと、浦やみけるとなり。讃岐常に門を出る時天を見て、何卒今日、難に逢申度と度毎申しけると也。

【四〇】 大久保民部隱居名は睡也と云へり。鑑照院様御代裏判奉行にて江府にありしか、艸履取病死

して其代りの者登りしが、片目ぬけ出たる男也。此男を見て、汝はつら魂のよき男なれども、をしきことは片目抜出たりと云へは、其男、然らば抜出たる目を入候得は能候やと云。民部、其れなれは猶よしと云を聞き、即ち脇指の小刀を抜き其目へつき込み、手を以押入りぬ。是より民部、甚た其男を愛しけり。或時戸村十太夫義國殿の許へ民部參けるに、戸村の飼犬民部へ喰付んとす。即彼の艸履取、手を犬の口へ入り深く腹中を探るに付、其犬忽ち死せり。此犬兼て人へ喰付人皆難儀に及しかども、義國殿の勢ひ盛ん成るに恐れて、誰あつて殺す者もなかりける。扨、民部家に歸て後十太夫殿より、其元艸履取、我等の飼犬を殺しける段不届のよし、斷りの使者來りぬ。民部もせん方なく、をしき人には侍れども追放にも致さばやと思ひながら、餘り殘念故、伴の艸履取を召出し斯と語りければ彼申には、犬御主人へ喰付候故、御身代りに私の腕を犬に喰はせ申す處、犬、食傷を仕けるにや相果候。民部是を聞、其趣を以戸村へ申遣しければ、十太夫殿も、尤なりと得心あられけるとなり。

【四一】 或人戸村十太夫殿へ見舞けるに、青鹿のゑだの、爪のきはに毛の残りたるを、十太夫殿日金をあて、毛拔を以、自身に其毛を抜き居られたり。或人、いかんの譯にて毛を抜き玉ふやと尋ければ、今日大久保民部方へ振舞に參るに付、進物にこさんと思ふに、爪際に毛残り侍る故取て遣す處也とありぬ。其日民部方の料理は青鹿の汁、海老なます、かごの焼物也。十太夫殿、半右衛門殿へは、かご一ツ儘の焼物にて、相伴の役人へは、かご半分に切たる焼物也。其時十太夫殿半右衛門殿え向ひ、御威光にて候。



今時のかごを、一ツまゝ喰候はならぬことと申されけること也。

【四二】 戸村十太夫殿、多賀谷左兵衛殿、須田伯耆殿登城あり。此時寒さ甚しきに付左兵衛殿御茶道を呼、今日の寒氣、老人とも迷惑なる間御火鉢をこ被申ければ、御茶道即御火鉢を出しける處鑑照院様御出座ありて、誰が指圖て火鉢を出したるぞ、早々引候へこの玉ひ、障子をあげ候へこ有て御障子を皆聞かせ、伯耆殿へ斗り御咄被成、今日は殊の外寒く候間、御小夜着を伯耆へ可掛この玉ひ後ろより掛けられは、手をつき居られたる故、御小夜着は後ろへ越へけることなん。此日伯耆殿退出有て、家に入り殊の外不興成る故奥方、何故に御機嫌不宜やと尋られければ、今日は斯々のことありぬ。左兵衛殿心を酌み候へは、せつなき事と申されぬ。爰に山方茂兵衛先祖物かけより是を承り、殿様は御無理／＼、此寒風に、老人を火にもあてず御使ひなさるゝとは。伯耆殿是を聞れ、是え可參、殿様の御無理はなし。十太夫も伯耆も火にあたらす、左兵衛殿の、火にあたらすに勤ることならずば、御奉公の御暇可申上こと也。殿様の御無理は無之也。其元以來出入無用と歸されぬ。亦翌日十太夫殿へ水野了徳參、昨日は御迷惑なされ候半と云ければ十太夫殿、老人も、此はり合にて勤めたるものとなん申されし。

【四三】 樗尾與惣右衛門大御番處にて、御夜詰すぎ赤體になり、さゝらの眞似をして戯れぬ。鑑照院様是を聞召れ御尋有ければ與惣右衛門進出、私にて候と云。即御座の間へ被召出、何の譯けにてさゝらの眞似を致けるにやと尋させ玉へは、昨夜の御夜詰して思の外早く引け候ひて、蚊に喰れ不申休み候故喜

ひ、さゝらをすりけるこ申上る。然らば此處にて其さゝらをすり、御目に掛へしと被仰出たり。與惣石衛門卽九疊の間へ引込赤體になり、御座の間の口へ口拍子にてすり出し、御座の間狭しとさゝらをする眞似をし、御敷居の外にて御禮を申して引取ぬ。其節年寄衆、御相手衆、何れも面を上げて見簞しと也。

【四四】鑑照院様添川の方へ御鐵炮野に出させ玉ふ。此日は御手柄一向無之、御休み處の邊にて、雁一ツ手負になり飛行くを御仲間追かけしか、中嶋の士屋鋪え落たりと見て其屋敷の内へかけ入るに、屋敷の主人も是を見て御仲間と一處に至り、主人先づ其雁を取て家に入りぬ。爰に於て御仲間申けるは、今日は御手柄更らになく、只此雁一ツの御手柄に候故被指上玉へと云。主人、いや、さは有べけれど、我等領分連は只此屋敷の内より外はなきに、適々斯なる手柄の物を指上らるべきや。殿様は是程廣き御領分、なんの御不足の有へきとて不出故、御仲間も、せん方なく其次第を申上ければ、其は樫尾與惣右衛門にてあるべし、よし／＼この玉ひて、更に御腹立もなく御歸りあらせ玉ひしと也。

【四五】須田伯耆殿、京學に登りて歸りける醫者に見へられ、其方學問に登り候由論語を讀ける哉と申されければ、醫者、讀候と云。亦朗詠を讀候やと申されければ、讀み不申と云。亦式條を讀候やと被申ければ、讀不申と云。其なれば、學問をしたと云者にてなしと被申しと云。此時代は論語、朗詠、庭訓、式條とて、是を讀めば、學問の一流すみ候様に人々申けること也。

定田定綱殿付札に

三宅道伯京都にて勤學被仰付、罷り下り候節登城仕候得は須田伯耆殿申候

は、遙々京都に居候間四書杯は讀可申と被申候故、なる程讀候と答候。其内式目杯は別して讀候哉と申候由。其頃迄は歷々の者迄、論語、朗詠、庭訓、式目を四書と覺候由、昔物語に見へたり。

【四六】 須田伯耆殿へ誰某は能き者にて候と申せは、其人は死けるやと尋らる。死不申と云へは、人は死なぬ内は知れ不申者と申されし。亦或時、柿をまゐられ核を小性に植させられしに、其小性陰にて、あの御年寄が、いつまで生て此柿の實のるを見玉ふへしやと嘲りぬ。其後此柿生長して實のりければ、右の小性を呼出し、汝、此柿の核を植しとき斯々の嘲りをなしぬ。我も又汝が言如く、今迄なからふへしとは思はさりしに、終今日此柿の熟すを見る。扱は、人は卒爾に物を云ものにあらすと、始めて示し玉ひしとなり。

【四七】 玉生八兵衛殿閑居して常山と號、是は佐藤夢休翁の末の子、伯耆殿孫也。五六歳の時伯耆殿大病の節、枕元にきつとして居られけるを見られ、自分はきつとして居るは自分の心より出たるか、又誰にか教られけるかと問はれければ、乳母申は、祖父様の御煩ゆゑ、御枕元に御座候へと申候故居候と被申ければ、自分は生涯、御奉公全く勤べきと申されしとなり。

【四八】 鑑照院様湊へ御鷹野に出玉ふ、御跡より伯耆殿、佐藤源右衛門殿、半右衛門など行かれしか、遅參也とて御中間を被遣、漸くにして至れり。何故に遅かりしと尋させ玉ひければ、藤棚の茶屋へ腰を掛休み居候處、小比丘尼の參て唄うたを能ようたうか面白さに、其を承りて斯は遅く相成候と申上られけると

也。

【四九】 黒澤角右衛門小唄を能うたひ、世に上手の名有るを鑑照院様知召れ、御目見に出ける時小唄を聞せられたきと仰出らるに、角右衛門も、一ツ唄はんこ色々せしかとも聲更に不出、ついに唄ふことなからず下られしか、御前にて唄ふことならぬ者なれば、生涯唄は止べしとて、其後は唄を止めしなり。

【五〇】 澁江宇右衛門降光殿江戸へ御使者に登られけるに、鑑照院様、なせ宇右衛門下りは遅きぞと再三其親類に御意有に付、親類中より其趣を飛脚を以申越しぬ。宇右衛門殿下り、宇都宮にて此飛脚に逢ひ、夫より晝夜いそきて着あられければ、何方より着ありやと尋させ玉ふに、宇都宮よりと申上る。其は心得ぬこと、とうして宇都宮より來りしと尋玉ふ。宇右衛門殿被申しは、宇都宮にて親類どもの書翰を見しより、晝夜をわかつ罷下候故宇都宮よりとは申上しと也。

【五一】 鑑照院様御代、江戸へ登候者は前日に親類を呼盃事をなし、翌日早天に出足せしとぞ。江戸登の者の門前へ御歩行目附を付置れ、出足の時刻を御聞ありしとぞ。

【五二】 佐藤源右衛門殿隠居して休也と號。此人、上に能事有れは在處へ歸て機嫌能、上にあしい事あれば機嫌あしかりしか、或時御城より下りの節不興にて、途中にて轉引の頭を打しと有。澁江宇右衛門殿此事を語られ、役儀を勤る者は斯ありたき者と被申しか、此宇右衛門殿も、上に能事あれば番所よ



り入らるゝに、右手を以左手の甲を打ながら、にこ／＼笑て座敷へ通られしことなり。

【五三】鑑照院様御代蝦夷蜂起の節、松前へ小川九右衛門遣され蝦夷の様子を聞届け、直くに南部をかつり江府へ出、公儀御老中方御直に聞せられけるに、九右衛門委く聞届け蝦夷辭迄そらんじ申上げれば、御老中方、南部、津輕よりも忠進有しかと、秋田よりの忠進程委きはなしと御褒美有るに付、徳雲院様其節は江府にあらせられ御悦有玉ひて、其事秋田へ仰越さる。つゝいて九右衛門罷下り、蝦夷の模様を委く申上んと少し其端を申上るや、否大義也、休め／＼と有て一向不被聞召。九右衛門思ふに違ひて下りしか、其後、出羽守殿より御もらひ被成し御茶碗何方に有之哉、九右衛門は物覺能きと申故彼に承り候へと被仰出に付、其次第九右衛門に尋しかは不存旨申上る。左様ならば信太九郎右衛門に尋べしとの玉ふ故同人へ尋ければ、在處を直に申上る。其時、九右衛門は覺能と云へとも、知らぬ事も有るやなど御意有しとなん。

正田定綱殿付札

鑑照院様、小川九右衛門を被仰付松前へ罷越、事鎮り候様子具さに見届、直々

江戸へ罷登言上可仕由被仰付、早速松前へ渡り申候。九右衛門は日頃心たらぬ男にて、同番中にても阿房／＼となふられ罷有候者故、其頃の人々、是は殿様の大きな御目がん達、あの阿房めか参り候てなへの役に立可申と笑ひ申候處、九右衛門松前へ渡海、双方對陣の場處、和睦の容子委細に承り直々江戸へ罷登、徹頭徹尾御老中方へ直々申上、大に感心被成候由。鑑照院様甚御機嫌能、

即御物頭役被仰付、名を刑部右衛門に改め申候。此節に至て宸前笑申候面々舌を卷、御目かゝを奉感候由承及候。

井口亘付札に云　此九右衛門と承り申候は、予か高祖父經時織部同役にて、鑑照院様御代より御

境御論地徳雲院様御代御利運、數度兩人とも江戸へ被指登、御裁斷所へも數度罷出右御用申上候節、次席の織部斗り口演仕候。或時御不審には、次席の織部斗り演說申上候儀、如何に被思召候と有けること九右衛門申上候は、私儀上席に候故、假令申上落たる事有りとも織部思慮可申、織部申上落有之候へは、私申上候には思慮無之候。依て織部にのみ爲申上候と申上候由、太田伊太夫物語承り侍候。

又曰　此九右衛門屋敷は、長土手下にて折回したる大いなる屋敷、銅とよなど掛けて立派なる構にて、知行も七百石取申候。或時梅津半右衛門殿手回り衆、萬雄寺より歸の節急雨有り、人を走らせ、小川へ下駄傘の無心被申けるに、即右人數の事足る程用立し。大家の女中供廻り多からんに、心掛ありし人と見へたり。

此九右衛門組御足輕の明間一人、心に叶たる者なく暫不抱置を御咎め、御役御免、祿も被召上候と小野寺先生の御物語承申候。祿被召上候と申事は耽と覺不審候、重て御尋申上の事に候。

【五四】　蝦夷蜂起に付、御加勢の御人數割金光主水に仰付られ、士大將石塚市正殿、戸村十太夫殿、湯武

者宇留野源兵衛殿、山方主殿殿仰付らる。其時主水申上るは、一備く、指據旗一色になし玉は、然るへしと申ければ、尤なることなから、御家中の指據旗は、何ぞ只今の者が拵たるにてもなし、先祖代々武勇を致來りける印故、是を止め候は、何れも本意に有まじ。我等耽とは知らぬことなから、袖印とやら笠印とやら云者が有様に聞、其にて一體に致然るへし。亦主水兵糧積りを申上ければ、人數をやり跡より兵糧をやり、萬一着船なきときはせん方あるまじと思召、先日能代より松前へ被遣ぬ。今頃は大方着あるべき故、兵糧つもりには及ぬとの玉へり。

【五五】 切腹に處されける者兩人有しか、御檢使申けるは、一人は死場平生の如く、一人は泪を流し、死場甚た見苦しかりしと云。半右衛門殿、其涙を流しける者は不便也、御用にも可立者をご申されし。

【五六】 御歩行某、博奕の爲め人を殺し、櫃に入櫓山川へ沈む、其後死體出其事顯れぬ。即切腹を被仰付けるに、表の垣をはなし大肌ぬきになりて横に腹を切、亦豎に切らんとて、鳩尾の下へ刀を立切下けしに、先きに切りたる腹皮たゆみて切れ兼ねるを、ゑんやくと聲を掛、臍下迄ついに切下けしとなり。

【五七】 鑑照院様御代迄は、大御番所に竹刀、木刀、卷藁を被指置、卷わら矢は御兵具より取寄せしと也。或時岩城月峯様御出の折、御番人とも鎧をつかうと見へ候故、誰也相手に被仰付玉はんやと申せば鑑照院様、入らぬこと止み玉へとの玉ひしかとも聞入玉はす、當番の者出候へとあるに付、即御番處より竹刀を持出る。月峯様御立會なさるゝや否や御顔をひしと突、竹刀を指置き陰へ引取。月峯様、今一

度立てと御好み被成玉ひしかとも不出、彼御番の者、眞劍の勝負は一度の者に候、二度は御免有へしと言てたゑて不出しかは、月峯様大にせかせ玉ひしか、鑑照院様是を御覽し玉ひ、左な有へしと存候故、よしにし玉へと申しぬ。よしなきことを被成候と被仰し。

【五八】 松平出羽守様より、御目の前にて御用ひ遊はさる御料理鍋進せられ、御祕藏有て、番の者に預け置よと御意有し故、大小性へ御預りになりて次き番へ渡しけるか、芳賀傳左衛門、鍋釜は臺處に置、厨屋膳夫の取扱ふ者にて、士の取扱物にあらざる故受取ことならぬと云。御意にて預りぬと云へとも、たゑて不聞入。此事御陰にて聞かせられ、其鍋御臺處へ下させ玉ひぬ。

【五九】 信太半藏先祖亦兵衛と申けるは大力士にて有しか、其頃御城中の行燈は木にて有しか、火落て焼け、御板敷へ燃え付きける。是をも不知亦兵衛は熟睡して有しか、枕元にて狐の叫ふに驚き目をさまして見は、枕元の火勢盛ん也。即御臺所より水桶を持ち來り、只一桶にて消しぬ。亦兵衛姉は大越夢忍翁の奥方なりしが、稻荷のかげにて難を通れし故、氏神に祭り然るへしと只管に申さるゝにより、小社を立、祭の日赤飯をたき、今日は狐に小豆飯を振舞候とて、氏神とはたゑて不云。亦或時、家來に用心熊手を拵候へと申付出來せしか、是は丈夫にあらずと云ければ家來、是程丈夫に候者をと云に亦兵衛、是は、さくによいゆへ用に立ぬと云。家來、扱はさいて見玉ふへしと云ければ亦兵衛、なんの苦もなく引きさきぬ。其のさき候熊手今に有を見るに、鐵かねの太さ指二本程有ぬ。亦或時、庭普請の手傳に本家より中



間違しけるか、働きあしゝて叱りければ、其男引込み脇指をさし、今日御借り人故参候に、件の御叱り難心得候と申て、手向ひすへき勢見ゆ。亦兵衛手討にせんと思ひしかども、脇指は堂上に有て即今手に取へき様なければ、堀上置たる樹木をこり、其男を討潰しける。亦或時、馬と馬喰會ふて井の内にいらんとするを見て、二間餘の材木を持て左右へ分けしと也。兄の信太内藏助殿も劣らぬ大力にて、咄をする間に火箸をより合せ折々置くゝを、亦兵衛其をほこし、又親方の徒らかて曲を指にて直し、元の如になしけると也。鑑照院様、折から切金をまき玉ひて大小性へ拾はせ玉ひしに、亦兵衛當番の節は、左右の手をひろけ外の者を寄せ付けず、金を疊の内へ、指を以ひしゝと押込み、跡より靜に一ツつゝ、はかし取りたると也。夫より亦兵衛には別に被下、拾ふ節は出されさりしとぞ。亦或時、小判を釘抜にてはさみ玉ひ御ふすまの内より指出され、亦兵衛に取候へと御意有しか、其小判の先をつまみ引けるにて、小判中より切れしとなん。

【六〇】大越夢忍翁は幼年より鑑照院様に御奉公せし人也。鑑照院様淺艸に被爲入候時、上野へ被爲出小鳥網を張り玉ふこと有。此時出家出て、殺生禁制の地不届也とて鑑照院様を打ち奉らんこせしを、夢忍其の坊主の良へ飛付其間に逃し奉りしか、御跡より血くるみになりて歸りしこと有り。亦御晝寝の節は物陰にきつとして居り、幼年より能御奉公せしに付後御家老となりしか、甚た若き装束を好まれし故何ゆへと問ければ、御前は我等より御年増にて被爲入、我等か年老たるを御覽せられなは御氣も舊

くならせ玉はんかと思ふて、若拵はするらめと申されし。

【六一】 大越稻葉と申は鑑照院様の御守にて、淺艸に被爲入ける節は甚た御難義遊はしけるに、稻葉か妻嶋はたを織りて御つゞけを致せしことあり。淺艸嶋と世に申せしことなり。

【六二】 梅津利忠殿八歳の時、親半右衛門殿へ十太夫殿、伯耆殿、源右衛門殿杯越され茶の給仕なされしか、十太夫殿の伯耆殿に被向、昔は鬼のありたるに今は鬼はなく候と云はれければ、伯耆殿、今は山林も切開き人家も多くなりたる故、鬼はなさそうなど申されぬ。利忠殿是を聞れ勝手へ行き、伯耆殿ををゝじやくな人哉、鬼のなきは知れたことなるに、云ても不云ともよいことと思はれ左は申されずらんこと云はれしとなり。

【六三】 利忠殿十六歳の時、井上某と云者より道鬼流の軍法を聞かれて、是は道鬼か傳にあらすこと止められたり。其後金光主水より楠流の軍法をきかれ、是も軍はならぬとて、自ら工夫をなして武事要覽と云書を編述せられたり。其後今村不僧先生より信玄流の軍法をきかれ、嚴敷不審を云はれしに付、不僧先生も、三度死たきことありしと後に語られしと也。

【六四】 利忠殿有馬へ湯治せられけるとき、賢長老と云知識も湯治せり。互に玄談に及、賢長老、圓相の内へ何か文字を書示して云、是は一生かゝりて悟了するも有り、二世三世にて悟了するもあるゆゑ是を悟り玉へ。利忠殿是を得て歿悟了底のことを示す。長老即座を立て三拜し、貴方は肉身の菩薩也と

いへり。

【六五】 亦應供寺に參られけるこき僧あり、問て曰、佛法に口ありや。利忠殿即答曰、口に佛法ありや亦なしや。僧疑著す。

【六六】 梅津藤明敬忠殿悴の時、獅舞の臺所へ来るに付脇にある脇さしを取て立けるか、過て兄の脇指をされり。利忠殿、其は我等か脇指也とて、一概に柄を取立なから打けるに、中身抜けて、藤明殿の腕をつき血流る。是を見て、自己か自ら怪我をしたと云て人に示す。

【六七】 伯耆殿登城の節は、いつも歩行の者を下馬前へ出し、十太夫殿登城せらるゝを聞て跡より出られたる也。十太夫殿は、鑑照院様御母儀様より御見繼を御頼み被成たる人にて、鑑照院様より被仰付たる御家老にてはなきを以の故なり。

正田定綱殿付札に云 御引渡の御家老被仰付候は義國十太夫殿より始る。

【六八】 佐竹山城殿折々一人登城あり、十太夫殿是を、いかなることにて折々一人出られ候哉と尋られければ、我等の登城は、各方の宜からぬを申上る爲と申されし。實は、鼓を御傳授に登城致されしとならん。

【六九】 鑑照院様御代、御小性明け出番の者は明け以前に一の御門に扣へ居り、御門明候と眞先に出候者一番座に着、其より段々出次第座着ける。三度一番座に不着は誰某と名を呼玉はす、呼々と斗りの玉

ひしこ也。高垣兵右衛門先祖明け出の節、穴門の御橋にて明鐘を聞遠慮三十日被仰付ぬ。其頃は、遠慮の者は深あみ笠をかむり親類へ参りし故、遠慮の者を笠かむりと申せし也。此兵右衛門遠慮の節より、外出指止められしとなり。

【七〇】菅谷隼人は御氣に入らぬ者なれども、功あるゆゑ御加増は被下し鑑照院様の御意ありしとなん。

正田定綱殿云　鑑照院様御代藤井勘之丞と申者大小性相勤候所、兼て御不合にて、勘之丞を一度御使被成候事も無之、勘之丞も御前にて被爲出候へは、脇つら向き候て罷有候程に候へと、御奉公無懈怠相勤候に付、或時、御用有之候間御茶屋へ罷出候へと御才足にて罷出候由。其節御座敷へ被召出御年寄へ御意被成置候は、あれぢや、あの者ぢや。何に一ツ悪きことも不致候へとも如何成惡縁か、あれがつらを見ると憎<sup>にく</sup>なる。彼も又御前をきらひ候様にて、數年御前にも御きらひの者に候へとも、御奉公能仕候者御賞し不被成候ては御政務御私に候間、彼れに御加増被下置候。猶以御奉公隨分相勤候へと、始て御意にかゝり申候。御年寄衆始何れも奉感心、ハツと畏候迄にて一言御取成申人も無之由。勘之丞御疊へ額を付、感涙をぐろにて天窓を上げ兼候由。漸々正氣付候様に罷成、御禮申上退出仕候由。此時知行百石へ五十石被下百五十石に罷成候由、古人物語と云冊子にあり。似よりたることなれば爰に記す。



【七一】大越稻葉は鑑照院様の御守りにて、御供にて此方へ参りし人也。江戸詰の節、同様に勤めし者不宜ことありて、稻葉も同様に居りては迷惑に及に付半途に江戸より被下ければ、稻葉はそれとも不知、勤め形のよき者を下し、あしき者指をかるゝは有間敷こと也と怒りて、道中の鍋掛の川にて脇指を抜き腹へ突立、既に川へ入らんこせしを下人とも取押へて國へ下り、養生して漸く平癒せしと也。其孫靱負、忤御小性の節御意ありしは、我等岩城にありし時雀鵠を才覺せしに、足皮になすへき物なく、母上の紫皮の足袋をもらひて付けしことあり。其れから見れば、自分ともは仕合なものなりこの玉へり。

井口亘付札に

或時半右衛門殿梅岩御前へ御諫言にても被申上げるか何事か不知、萬雄寺へ被参

既に生害せられんと座を組みたる處へ、菅谷小隼人一騎かけにて参り、むさと半右衛門殿御相手に成可申と云。何か爲に其元相手にすへきやと被申たる時に小隼人申候は、只に御生害被成候は、御前の御不足有りて生害したると皆人可申。我等と指違へたらは、意趣遺憾ありて指違へたると可申と云て諫ければ、御前はいかゝすへしと被云たる時、御前之儀は我等能き様に御執成可申と止めて、即登城如何申上たるにや、即半右衛門殿被召出、常の通りの御顔色にて御咄有之候。其時又御咄の内御諫被申上げれば、出るゝ其儘諫言を申上ると御意有之候由、羽城昔物語に見得候。

【七二】或時御小性とも、御前より見るぬ處にて奴の眞似をし殊の外騒くに付、佐藤源右衛門殿へ叱り候へと被仰出ぬ。源右衛門殿、忤ともを金の間の御廊下へ呼び、其方ともへ被仰出有之皆々是へ可参と

申されければ、忤共、源右衛門殿のあたりをくろりこ取巻ぬ。其時源右衛門殿被仰出申は、其方こそ除り騒ぎ候故、此末さわがぬ様に申含め候へこの御意に候故、此末さわぐまじこ申されければ、中の地藏こは、なせに勢がひくいこ云にそ、源右衛門殿も笑ひながら立たれ、叱り候へとも聞不申こ申上られければ、鑑照院様も御笑ひ被遊けるごなり。

【七三】 鑑照院様、鶉、雲雀を數十羽飼はせ玉ひ大小性へ預け置かれ、山吹きの薄緑りのご云色々の名を付玉ひ、折々大小性を召て其鳴聲毎に、あれは何ご問はせ玉ひ、答るごこ不詳者は何日も小鳥の側に附け置かれ、己が預りの鳥の聲を知らぬは、大成る愚か也ご常にの玉へり。亦小鳥の落るご有れば委く尋玉ふ故、御鷹野に出玉ふごきに、一羽をち候ご申上ければよし／＼この玉意ありしか、其後又其如くにせし者有りければ、其は合點の行ぬごこ也、歸迄扣へ候へご按に相違の被仰出にて、夜中迄不下に居り難義せしごこ有。皆此様なごこにて試み玉ひしごなん。

【七四】 鑑照院様御代、仙臺騒動の節御歩行目附なご遣はされけれども、御家中の始末更らに聞兼ねるに付、御日きにて或る御歩行を問者に被仰付けければ、其者即鬢を落し座當の眞似をなし、三味線を引仙臺の御家中へ入込み、委く騒動の始末、御家中の模様を聞き、密に深更に書付にして言上しぬ。夫より片倉小十郎の處へ御直書を以、拙者乍不肖後見致すべく間、所存一盃に取扱れよご仰達されぬ。其後鑑照院様御孫乾徳院様御出初めの節、御頼みも無之に仙臺様御残り、何角の御世話なされ玉ふ。其御禮

之使者德雲院様より被仰進ければ、故修理大夫殿への寸志迄の御禮にて候と、被仰遣玉ひけるとなん。

井口亘付札に 乾徳院様御前様紀伊様より御縁組ありし時、紀州様殊の外御歡び、日本一の簀を

取たるとあつて、御簀引手に御自身矢目行光の御合口被爲進候。右御合口は、御同人様御守刀に御

側へ不絶被指置候由。御同家にて軍場御出馬の節流れ矢來るを、自ら抜け出て矢を留たる奇代の

御合口の由。矢の根を受たる跡あるによつて矢目の字付きたり、今に御家に有り。昔話に見えた

り。

【七五】 鑑照院様へ須田伯耆殿申上けるは、組下に瀬尾五郎兵衛と申大力士有之、御用にも可相立者に候間、御目見被仰付度と被申上けれども一向御挨拶なかりしか、翌年又其通被申上時、力量有る者を御用に可相立とて召出しなは、力の弱き者は御用に立ぬと云者故去年中より挨拶をせぬ也。併五郎兵衛は勢<sup>イ</sup>高きと御聞被及候故、其男振りを御覽有るへきとて召出され五郎兵衛に御意被成けるは、なる程大男也。扱<sup>イ</sup>汝少分限の由、定て衣類には難義可致、此末は臺所より被卸置可申と有て、それより年々白木綿を被下けるとなり。

【七六】 鑑照院様途中にて白馬寺を切り玉ふ、慮外の故也。其弟子本寺へ至りて訴るに付、公邊大に六ヶ敷なりぬ。此時梅津與左衛門殿<sup>仁更</sup>御前に於て、御決心あらせられ玉は、罷登可相片付と申上る。鑑照院様心決せりとこの玉ふ故即江府へ登り、國法を破り候故切りたると云、内聞に右京大夫決心形り、隨



て一家中決心致候趣を述べれば公邊は相濟、それより本寺へ行き同く右の趣を述べれば、本寺の計意として其弟子を以白馬寺の跡を繼かせ、事なく相濟けるごなり。

【七七】鑑照院様御代後藤七右衛門能代奉行を勤め、沒期に及、後役は誰か可然と尋玉ひけるに山方兵庫之助可然と御答申上るに付、沒後兵庫之助被仰付たり。又兵庫之助に、同役を誰に申付可然と尋玉へは、兼て中の惡き黒澤多左衛門を申上り即同役に被仰付たり。其時多左衛門落涙し、扱兵庫之助に及ぬ也、兼て中の惡き我等を同役に申上るごは中々ならぬご也。亦兵庫之助、多左衛門に向ひ、今日より同役故御用談は可致、御用の外は是迄の通り中惡き故、自分の物語は致問敷ご也。扱多左衛門へ此節鑑照院様より御墨付には、能代表の儀は自分所存に任せ置者也と被成、月日の下へ御青印被成被相渡。此御書今に黒澤氏に所持すごいへり。

【七八】鑑照院様御代清水嘉兵衛宇垣の身上仕守して、宇垣の家の具足を質入にせしご世間へ知れ、其時の御家老多賀谷殿より御咎めになりければ、嘉兵衛、寺入して申譯け漸く相濟しご也。

【七九】徳雲院様の御舍弟玄蕃様ご申は、御病身にて江戸へも登らせ玉はて、此方當時の梅津頼母殿屋敷に御座ありしか、鑑照院様え御具足の御拵を願玉ふ。是を被爲聞、病身にて、去りごは奇得なるご也。なんぞ好みもなしやご尋させ玉ひければ、病身にて手痛き働はならぬごに候へは、只討死の心掛にて候と申上玉ひぬ。左様ならは花やかに仕立可遣とて、即左近士筑前に被仰付、にほひ肩白と云ふ鎧



をかたごり玉ひて、拵指上られたり。慈雲院様駿河御番に御出の節、能き御召料無之とて此玄蕃様御鑑を進せられ、慈雲院様の御召料とはなりぬ。今即御兵具藏にあり。

【八〇】鑑照院様の御前様は湯澤より被爲入たり。徳雲院様の御前様は松平出羽守様より被爲入けるとき、伯耆殿落涙被成ける故、皆人、何故にかゝる時御落涙被成候やと申ければ、伯耆殿被申候は、恐悦なれども、他家より被爲入候ては品々御物入も可相増、又此末皆御他家より可被爲入。扱は末々のこと彼是思ひ合せ、思はず落涙に及びしと被申しとなり。

【八一】徳雲院様御入部の年矢橋の方へ御鷹野に被爲出玉ひしに、油田の坂の下に、よしありける乞食の居りけるを尋させ玉ひければ、津輕より譯有て出たるものにて候か、又津輕へ立歸り申度は迄參りけれども、路金盡はて如此の身の上に相成候と申上ければ、夫は不便なこと也とて金子二步下され、國へ早く歸り候へと御意有ぬ。此事を梅津五郎右衛門殿隱居して本端と云御供歸りに半右衛門忠國殿へゆかれ咄されければ、梅岩被申けるは、難有思召也。去りなから、左様の乞食御領内に幾人有へきも知れず、其者にも金子を下さるゝと云ことはならぬこと、亦思召一ツにて、御領内の乞食、非人の助ることの有へき。其方など御側に居者故、能く心を付て勤められよと被申しとなり。

【八二】佐竹山城殿、御紋の羽織へ御紋の小袖を着て登城被成けるを半右衛門殿見咎められければ、山城殿、拜領にて候故着せしと申されければ、御前より外はならぬことにて候とて、羽織をはきとられけ

るごなり。

【八三】 徳雲院様御代始延寶四年迄は、指南付にて十二人の士大將を御定めあられ、其人々は角館、湯澤、大館、御東、石塚、今宮、多賀谷、茂木、向、澁江、梅津、佐藤也。これへ御家中を御割渡し、年々士大將前度の通と有て、召つれ候人數、歩銀、路銀、御書付を以被渡けるか、仙臺にて寄子附きのことにて出入有て、公儀より御内意を以相止られるに付、寄子附は指南付と同じ者故此方にてても御斟酌あらせられ、此時より指南付を相止られ御番頭を立置れぬ。

【八四】 徳雲院様御代始迄は、年寄衆の宅毎に御用所と申座敷ありて其にて御用を達し、穿儀者などは宅にて聞れしに依て、古來御家老の門には左右にくゝりを付、一方のくゝりは常には不聞、繩掛者の通用の節開きし也。其後御會所を立置るゝ御評議御座の間にて有しとき、場所は何方か宜しからんとありしに、寺崎彌左衛門、二の丸にて可然と申上ければ、繩掛物はいかゝと有て、穴門には立玉ふと也。御會所被建置候以來は、年寄衆の御宅にて聞るゝこと止みぬ。

井口亘付札に

此節は誰殿御用人と唱し

今の御  
副役也

半右衛門殿、御用判を袋へ入勝手の柱へ掛け

て被置、御用有る時は右御用人女中を呼出し、取て御用辨し來りしに、或時弟梅津主馬政景殿、半右衛門殿奥方へ被申けるは、兄上の御用判を輕々敷御用人に御任せ被成候は、いかゞ候。私申たるごとく、御手前様御心付被成候事に被成被仰上、以來は左様なき様に致度と被申けるを實に尤と奥

方被思左被申ければ、半右衛門殿被聞、其は其元の心より出たることにあらず、主馬か申たることなるへし。幸を得我等如く、高祿を戴き御役を勤め、人の上に立居候得とも皆朋輩也。忠を盡すになんそ半右衛門に負くと思ふ者有るまじ。扱萬一御判を御用人とも穢しなは、半右衛門切腹迄のこと也と被仰けるを、陰にて御用人とも聞て感涙し尙御奉公を勵み、此人の爲に命をもと存せしこそ、昔物語に見へたり。

【八五】 高垣新兵衛、川井某隱居名  
キヨ庵大小性同番中、もの云して、新兵衛宅へ可參と川井申ければ心得候とて立分れ、夫より川井行く道すから、誰ぞ知る人にあひ、何方へ行くと問はれそふな者と思ひながら、新兵衛宅の石橋へ足を掛けければ其心さつはりとなり、案内しければ新兵衛立出る。川井、今朝の意趣にて參り候と申せば、是へ通り候へと云容子平生に少も變なく、番處の掛金をべ、勝手の戸へ切張をして、夫より互に抜合せ打合けるに、川井か草履取太刀音を聞、番處の戸を踏みはなし川井を抱き止め、新兵衛押かゝり切らんとするを、押へたるを切らるゝは鄙怯ひきやに候と云ければ、新兵衛も尤也とて止みぬ。夫より表へ抱き出し、雪の上へ合羽を敷川井を其上へ置き、信太内藏介殿へ走り行斯と告ければ、即轉をやりて引取るに、氣絶せんとするを見て内藏介、夫斗の疵にて氣絶するやうにて、打果しに行きたるかど聲をはけまし、伽羅を燒きて鼻へあてられて氣か付ける由。陰にて新兵衛殿の疵も、此方の手疵に變ることなしと云を聞て、其なれば先つよいと安堵する處て、氣か絶んごせしと後に咄けると也。

【八六】 高垣新兵衛は金光主水より楠流の兵學一流傳授せり。極祕傳は残りとも主水申に付、御傳授なる間敷やと新兵衛願ければ、金子五十兩なければ傳授ならぬと主水申を聞、一二年目に五十兩の金を持って参りければ主水是を見て、是は手前金に候哉、又他借せしやと問。儉約をして、此内半分は手前金に候へとも、外半金は他借して参りぬと云。主水、それなれば傳授ならす、手前金斗りを持参るへしと也。それより又一二年儉約して、漸く手前金斗りを五十兩持て來りぬ。主水是を見て即其金子へ封印をし、是は軍法之極意也。此金かなければ何程兵學をしても、何事有時打立ことならぬ故、是を祕傳とは申せしなりとて、其金を新兵衛に渡しけるとなり。

【八七】 梅津與左衛門殿へ御封印の御書被相渡、宇右衛門、半右衛門へ相渡、院内より歸りの上御評議有へしとの御意也。大きなことか御座候とて、院内山津波の跡見分に行れしと也。歸りの上、出しにて右三人を被召出、石塚孫太夫、疋田齋不届に思召す故、御條目を以急度可被仰付と也。宇右衛門殿申上らるゝは、御尤には候へとも、孫太夫事は重き御一門、齋事は中々同意仕者に無之候へとも、昨今の御役故と覺候間、一統御なためあられ玉へと申上ければ、御腹立彌々強く御得心なかりしに、宇右衛門殿御膝の根へすり寄られ、孫太夫儀は右申上候通りの御家柄、齋は幼年より御側にて被召使、人となり知り召され候害也。にかゝ敷こと也とて聲を上て泣ければ、徳雲院様も御感涙を落させられ、自分左程に思はゝ一統なためよと有に付、御内意を以兩人ともに退役被仰付しと也。



## 【八八】

瀧田遊節、軍書讀となり始めて御國へ來り、福原彦太夫資英殿の許へ參りけるごき、梅津藤明

先生も參られ始めて遊節と對面せられぬ。先づ藤明先生、楠の湊川を聞度と被申ければ、湊川は祕戰故後にならては申難し。天王寺出張りを可申とて讀みけるに、辯舌流るゝか如く既に尋常の者になき故に、藤明先生の曰、其方兵學は何流にて候と問はければ伊洛一騎傳也と申ゆへ、夫へ隨身被成毎日毎日聞ければ、遊節も行つまり、伊洛一騎傳と申せしは欺作にて、實は統傳孔明流を存候と云。夫より統傳を學はれるに、本書一枚もなく皆諳誦して、圖をくはしし文を書くこと凡一櫃に滿てり。終に其奥儀を得られて、後京都の儒者淺見十次郎の元へ圖説を被遣て見せられければ、是は日本にては難得書也。併し諳にて書たる者と見へて、助字に落字ありとて書き入れ下されしとなり。

## 【八九】

德雲院様上野御受取の節、三御屋敷不殘御焼失、上野も甚た危く見えけるに、德雲院様中堂に

居らせ玉ひ、若し御手に餘り候はゞ、御生害被成れんと思召するられし。此時澁江宇右衛門殿を被召けるに、思ふこと有て夫々の手筈をなし徐に參られければ、もはや御手に餘るご見へ候この御意有。宇右衛門殿申上られけるは、何れも宵より歸宅不仕、定て艸臥候はんに先づ支度を申付て候とて、薄縁とわら蒔を一面に敷渡し、士は薄へりの上に置き焚出しをあたへければ、何れも是に力を得、一人十人にあたるの勢ひをなし防きければ、何んの苦もなく防きあふせしと也。此時大糟毛と云やき五分有馬に召れ、上野の鹿垣を越させ玉ふ時、御歩行の帽子をこらせ夫を召れ候となん。今に其御歩行の家寶となり

て、其帽子ありとなり。此節、三御屋敷御焼失に付上野元光院へ入らせられ候處へ、上使を以御稱しあり、其年少將に御轉任ありぬ。

正田定綱殿云

元祿十二寅九月六日、江戸大火事にて三御屋敷御類焼、此節上野御受取にて御出

馬、勅額等を御させ被置拔群の御働き被成候由。雨降候て、御供廻りも殊の外飢疲候故、元光院へ被仰付粥を被爲煮、諸士の面々、たんこ桶にて、刀の下緒を結び付荷ひ棒に致取運び、惣御人數へ被下、公儀の火消衆へも御振舞、何れも快く相働き候由。火鎮り、其夜は直々元光院へ御一宿候由。御夜の者も無之、御挾箱に入置候御袷慰斗目御下着を重ね被爲召、御火事羽織、少々しめり候へども御裾へ御かけさせ、御近習衆の帽子を二ツ三ツ御まくり御枕に被成、暫く御寝被遊候由。爰元にも御一宿の段御聞及、相馬様より結構なる御夜具蒲團御枕も二通り、御長持に入被爲進候。是に我等着るに不及、兩御姫様へ可被進こて早速被遣候由。翌朝、御屋敷へ上使御出之由沙汰有之に付御髮月代被遊候に、へらの様なる古髪そり元光院より借り候て御月代指上、忤に小性ども所持の代物取集め、櫛、元ひい、髪付求候て御くし上げ候由。御上屋敷は惣體幕圍ひに被成、薄べりの上にて上使被爲受候。御使番上使にて候由承及候。

又曰　田崎日記に、九月六日江戸大火上野坊中焼失、屋形様上野火の御番に付御出馬、御防ぎ方宜く中堂無別儀、御屋敷所々無殘焼失。依之同十日、上使於元光院被爲請あり。従ふべきに似

り。

【九〇】 藤明先生へ遊節初會の頃申せしは、謙信も信玄も兵を知らぬ人なり。いかんとなれば、謙信甲州を并吞せんとて、さい上山に登られたり、即兵をしらぬ也。亦信玄此時高坂にあしらはせ、自身越國に討て入らば勝へきに、さい上山へ向ひたるは即兵を知らぬ處也と云。藤明先生、其方は後の評判はよけれども、軍はそうはならぬものと答られし。

【九一】 今村幽山先生、遊節と座上に圖を畫き、爰は山、かしこは川と土地を定め、石を以軍をせられたること有。此時先づ遊節、備を列開し手數を以向ふ、幽山先生も備を取敷時、傍らに残したる備有。それより段々軍を持て備をつむる時遊節云けるは、さあそこへ來れば地雷を仕かけしゆゑ、其備微塵になるべしと云。幽山少も不動、予が残せし備、今此山をめぐりて汝の旗本を討と云。爰に於て遊節の負けに此軍はなれりと也。此遊節と云人生國を不云、極めて放逸にして天地の間を家とする氣象なればとて、美女をあたへて繋ぎ置り。此人居處を不定、爰に家し彼處に住し、又人の窮せるを見ては、己が衣裳を脱てあどふ。亦人の家に逗留しては二便を爐内に通じ、上へ灰を掛けて置きぬ。藤明先生是を知り、亦先生の跡有、可去とて小性に申さるゝを聞き、遊節、更らに知らぬ人の體にありしとなん。

【九二】 徳雲院様淺舞へ御渡野の節粟の畑を御覽せられ、粟一粒が此穗一ツになるかどありし故、左様に候と申上れば、夥しくふゑるものとの玉ふ時、御側の内其穗を取て口へ入るゝ眞似をなすを御覽し

て、成程夫れしやこの御意ありぬ。是は、喰へばたまらぬと云ことかごなん。

【九三】 梅津利忠殿甥の外記殿へ、其元坏は何時に臥し何時に起らるゝと申されしに、夜は九ツ頃にふし朝は五ツ頃に起き候と云はれければ、夫は悪き心掛也。八ツに寢て明に起き候へば、五十年生きて百年のことがなると申さる。亦外記殿、朔日の禮に參られたるとき御檢地役參り、先頃被仰付る稻の植間の義、御百姓ごもへ申含れれども合點不仕と申ければ梅叟殿、合點せずば能候、外記坏は年若にて候、人の智が開くる程稻の植間が近くなり申さんと或人の云しか、氣が付て見るに此頃は、年行ぬ時より甚だ近くなり候と申されぬ。

【九四】 平元小一郎幼年の時、年始の御引を集めて艸子そうじを求め、人に讀ませて是を讀よみ、後に平家物語を自らよみ、夫より太平記を残なく讀しけるに、何れを問ても其答明白なりければ諸方被招れて太平記を咄されしが、佐藤源右衛門殿へ參りけるとき梅叟主馬殿、乘運半右衛門殿も來り、其咄を聞れて大に感ぜられしに、御太夫の某も此席にありて、ケ様の忤を私共取立なば宜しからんと云しを、梅叟殿、此忤は汝等が子どもにすべき類にあらず。ケ様の者あるも、御國には能き儒者なき故秀ることもなるまじとて、津久田養軒と云儒者を百石に御抱成下されしと也。

【九五】 徳雲院様御代、仙臺より御使者の來りたるとき乘運半右衛門殿對面せられしに、彼れ、御當城は陰の御城と相見得候と云。半右衛門殿、陰陽の義は心得不申、何事も有之時は、いつも此城を枕に致



す心得にて義宣は取立られ候と答られぬ。

【九六】 平元小助、小野崎舍人が許へ行き閑語の折から舍人が家來出て、今晚焚き候薪なしと申す。舍人一向挨拶をせず。亦家來致方なしと云、舍人同く挨拶せぬとき、小助、己が脇指をぬき其家來に渡し、是にて薪を調へ候へ、とて遣す。舍人は是を見て忝と禮も不云、亦指おかれ候へと色たひもせず。

井口亘云 此舍人、後壹岐守様より御家老に被成度御無心にて被進、能勤めし人也と。小野崎主馬先祖にて、嫡子は直々御當家御奉公致候と、小野寺翁御咄承り覺候。舍人子孫今に鳥越様に被召使、近來の舍人も御家老勤候人にて心得罷有候。

【九七】 小助、長崎へ行きし時山伏と酒宴をなし、興に入りて、けんをして負て大兜鉢にて二ツ呑み、山伏は三ツ呑、酔たをれてありしと話されし。

井口云 此小助、北尾保安の弟子にて、ぼくけんと申て北尾に止宿して隨身中、或時紀州公御大病にて保安の療治被爲得たる時、北尾申上、私弟子にはくけんと申者有之候。御伺被仰付被下なば相談仕御療治指上度と申上けるに御承知有て、御容子をほくけん伺ふ事數度、後に、ほくけん一人の御療治指上御快氣被遊しと。右御禮として、願により長崎迄被遣候由。其節、始めてけん云もの長さきへ傳へ來りて覺しと、予が祖父經英へ被咄たりと承候。後東涯先生へ隨身年久敷寄宿せり。兄小一郎大病の告來りし時、夕飯を食べかけ箸を捨て置東涯へ暇乞ふて、旅の用意の形もなく其儘

立て道をいそぎ、荊和野にて鴨一羽求め、手へさけ着きたる由。小一郎病死後は甥の才藏幼少ゆへ、彼れを取立遠方へ不參ごなり。

【九八】 川井叢端、角頭巾を常に冠り水字巾と名付、羽織は毛織をこくさ色にし、黒しゆすの半ふり掛、平ら袖にし緋かひきの裏を付け、或とき小助、井口長兵衛宅に居られたる處へ彼の叢端出來り、水字巾を冠て坐する振舞甚だ不禮也。小助、其頭巾を煙管にて打落し甚不禮也と叱るに、叢端變る色なかりしごなり。

【九九】 梅津茂右衛門殿、福原彦太夫殿同時の大力にて兩人ともに大男なりしが、茂右衛門殿、番所前に有る天水桶に水一盃あるを兩手にかゝへ、六七十軒の長屋の柱を算へ、柱毎に桶を柱にあてゝ本の處に置かるゝに、水少しもこほれず。彦太夫殿も又其通にせらるゝに、仕舞に置時桶の水こほれしご也。茂右衛門殿の具足は五枚胴十匁を以二ツ三ツためし、胸板一枚の重さ、常の具足一料の重さ程有しご也。亦面頬の大きさ、常の人あてれば、拳を左右へ一ツづゝ入りしごなん。亦他處より柔取來り御抱になり度と云を、茂右衛門殿呼れ、我等を投けて見よと被申。柔取、すら／＼と來る處を兩手を取、ゑんの下へ投げ落す。

【一〇〇】 今村不僧より吉成一風貰ふ書あり。其書に、胴は胴骨也、勇士の勇義鍵を持て大敵に向ふ時の機也。此機を以大事のおん敵退治すへき者也。亦太刀鐔一枚貰ふ、其鐔の象眼に、浮世は白鳥の賜人

は骨鯨。

【一〇一】 不僧先生禮法の弟子中川宮内殿、不僧先生へ軍法を云入れ、三年願はれけれども免るされさ  
りしを、藤明先生杯の取入にて聞濟れ軍法を教られしに、行く度毎に座敷へ不出しを、先生の子供へ菓  
子をあたへ親父様をつれて來れ云に、先生も、子ともにせわられて座敷へ出る。其出情限りなきに付、  
軍法の奥儀極めしかとも曾て免されさりしを、其頃の先生達の取入にて無據免許せしか、果して、黒澤  
角右衛門と知行處の出入ありて改易せられしとなり。

【一〇二】 藤明先生、昏庵先生も被果し時福原資英殿なけかれて、

今更らにしたふもくやし問もうき聞へき事の有し昔しを。

【一〇三】 徳雲院様或時、某殿は道中芝居を見らるゝ由、有間じき事也と御意有ければ乗運半右衛門殿  
即被仰上しは、芝居の内には人情有之候故、夫にて御政事の爲に相成候得は随分能き事に候と云に、半  
右衛門は又叱り候との御意なりしと也。

【一〇四】 今村幽山、御物頭より御本方奉行被仰付たるとき、家へ歸り玄關より入るとき、身か身上た  
に埒明ぬに、ごふして上の御身上を可知やと云て大に不興にして、直に病氣を以辭す。徳雲院様江戸に  
て子ごも某に、其方親本方奉行を辭す、又物頭を可勤や。某云、私の御答にも申上兼候段申上ければ、左  
様ならば國元へ申遣へしと有りし故其趣申遣ければ、幽山、夫は難有こと也。尤可相勤と申上るに付、

又物頭被仰付し也。

【二〇五】 乾徳院様御抱の角力取、碓り百當左衛門と云。強力にて、能代にて、八人持の碓を指上げ濱邊を走りけるに付碓と號せり。其頃、伊呂波と云日本一の角力取有けるか、亦此方御抱へに峰の松と云角力取あり。是は碓よりは強きゆる御抱へ中の關取にて、碓りは大脇にてありしか、此兩人を遣はされて伊呂波と勝負をなさしめ玉ふに、先づ碓立合ひ、團扇を切るや否、そくひをつゝけ打に三ツ打ければ、さしもの伊呂波、場中へ高はひせしと也。夫より峰の松は不立會に歸る。此伊呂波と云者、四十八手自在なるを以伊呂波とは號せしか、碓りに負てより後角力下りけると也。長野先生の祖父、刀の目釘竹を鋸にて割るへしと家來に云付られしを、碓り、是をつかわされ候とて、其儘一拳に打たく。此時代御抱の内山の内と云角力ありけるか、猥りに荒き者にて、意地に任せて負ぬ角力なり。或時松浦公と乾徳院様御參會の節、双方より角力を出されし時に、つま取藤右衛門と云者松浦方より出る。此角力早業にて、足の大指を取て勝こと妙也。此角力士俵へ出たる時乾徳院様、山の内を出すへきと御意也。其時此方の大關峰の松申には、山の内はつま取か相手にあらず、私か碓り罷出べしと云。山の内是を聞て拳を張て云けるは、我も不肖ながら屋形様の御抱へに相違なきに、ケ様の節取らぬ者に候へは、御用に立ぬ者と申もの也と云ゆる、無據立會せけるに、山の内、つま取か前へ足を出す、出す處をならんとするを、直くさまに其足を上げて爪取かあこを蹴あけ、ハツと應ずる處を、あふのけに真中へ打付る。此時松



浦方云には、角力の手にはなく、取手のあて也云て大にもめける故、乾徳院様も山の内を御叱りなされ其場を退けられけるか、御意に叶ひける故、其夜山の内へ御酒御肴被下けり。此時山の内云けるは、此御酒御肴は己か手柄故、親方へやることはならぬと申けるごなり。

【一〇六】天祥院様御入部の日、澁江宇右衛門殿御城下り宅へは不被歸、直くに半右衛門殿へ參られ、御同前に相勤候節は、今日のことを願申たる故罷越し候。今晚は、快く帶を解き休み申さんごて歸られぬ。

【一〇七】吟味役那珂惣助、當時御身上宜き様に候へとも向々見届なきことを申上る。其節は、大坂元有之銀四ツ寶にて五千貫目、此方御金藏に御當用の外に三千貫目餘、御城内御入りの御金藏に吹金銀、阿仁銅代等御嗜好なされけれども、畢竟御出物へ御幕方御對應なきゆへの考と見へし。此時より、天祥院様二度目の御下國より、始て御儉略と申事始りぬ。夫迄は御召物は一日に二度つゝ召替玉ひ、毎夜召人へは御汁、御焼物、御煮物、御切焼等にて御夜食被下、御菓子も御前と同様に御小性迄に被下しか、是よりは御召替は一度になり、御夜食の御焼物は止み、御菓子も御前と違候事になりしごなり。

【一〇八】天祥院様御代、江戸へ登る者は半知なき故、只歩銀、路銀斗り受取りぬ。御小性なごは紋處を書出して裕一ツ、綿入一ツ、裏付上下一具被下しごなり。

【一〇九】小貫單心の弓の弟子に、豊間伊兵衛と云中り弓の者有。或時的場にて申すは、楊弓の的のき

りも射るによしと云へり。時に杉浦瀬兵衛と云者、いかんぞ、きりへ中るへき、若あたらは首を遣すへしと云。それよりかけになりて楊弓の的を掛伊兵衛射けるに、兄矢にて、なんの子細もなくきりへ中りぬ。弟矢も同く、兄矢の脇よりきりへ射込みければ、是より首かけの論出大に六ヶ敷なり、取はまりにて漸く和談せしとなり。

【一一〇】 半右衛門殿馬醫善助と云者、在方へ参り狸の子を貰ひて家に育けるに、餘ほと大きくなりて行方<sup>さしう</sup>を失ひけり。其後善助妻果て葬禮を出したる晩より、亡妻暮過より來りて、存生の時居りし處に居り、夫より立て佛堂へ行き、備へ物喰ふて歸ること毎夜也。善助後には顔色も衰へたる故、朋輩とも尋けれども初は申ささりしか、強ての尋によりて其事を語る。何れも僞也と申ければ、左あらは今宵來て陰に居て見るへしと云に行き見るに、善助申に不違しか、塵塚の上に狸の寢て有しを、半右衛門殿の飼犬喰殺してより後、其亡妻参らさりし。即、善助か子飼の狸にてありしと見へたるなり。

【一一一】 山方多郎左衛門泰護殿の申さるゝは、物を習ふには、明日死ぬると心得習ふへし。身上を取扱うには、百迄生ると思ふへしと也。亦、勤ると云字は何れも力のそはぬはなし、勤は精力を入なければならぬものと見え、亦稻と云艸は實の入る程こゝむ、我等か如きは實の入る程そる。扱は稻は貴艸也と云はれしと、我等か親申されぬ。

【一二二】 天祥院様御代、川口御關所番當番の者を、大繩束之進御副役にて催促をして御用申渡けれ

は、東之進か顔をつくくゝと見て、當番の者を御催促故御陣にても有ことかと思ひ急ぎ罷出しに、斯く體のことならば非番の同役へ被仰渡へきこと、昨日今日迄青鼻をたらし、穴一打て居たる故餘義ないこと、御會所にて申ければ東之進大に怒り、其通りになりかたしと一片に申ければ平山小一郎申には、御腹立は尤に候へとも、あれは昔風にてのこと、亦同役のあるに、當番の者を催促なさるゝは其許の御心得違にて候間、了簡被致候へと申に付、其通りに相濟みけること也。

【一二三】 同御代、狂言師大倉彌五郎内々難義にて拜借の願口上書に、私義困窮仕何の面白き事無御坐候。仍之拜借願申上候と認めけり。御會所にて、是にては取次かたきと申ければ小一郎申には、是は彌五郎たけにて、朝夕狂言に工夫を致し居る故に餘念なく認め候もの也。扱は此儘にて申上てもよからんと云しに、何れも同意せしこと也。此彌五郎辭世に、

如來釋迦達磨大師の先き立て末の松山ざゝんざゝんざ。

【一二四】 山方金之丞願書、漢文にて指出しけるを小一郎見て、唐にては此通にてよかるへけれども、日本にては此通りにては披露なりかたしとて返す。被頼の者其趣を金之丞に申ければ、誰か左様に申と云し故小一郎指圖也と答ければ、小一郎指圖ならば書直也可申とて書直しぬ。亦天祥院様添川御休みへ御出ありし時、金之丞其近邊へ參りて唄ふ。其頌雅に、東太夫に權太夫、五々二十權太夫、寺の彌左子にもふけさせた。此聲御前へ聞へける由。其時東太夫殿在方の者、御前の御出を不存唄をうたひ候

と相聞得候、御中間を遣し追拂はせ候へど、御膳番へ被申しと也。亦其後金之丞病氣にて罷有、往還致こと相聞へ御番頭より尋有之ければ、病氣には候へども、薬取に遣人無之故自身參候と答るに付六ヶ敷なり、其時の御番頭の内酒出内記殿、今宮文四郎殿、小田野刑部殿金之丞書物の弟子にて、強ひて金之丞を引き同意不致、終に御披露に相成ければ、右三人の御番頭は改易になり金之丞は切腹になりぬ。

【一二五】 寺崎彌左衛門御財用奉行御免になりけるとき、或者見舞ければ彌左衛門申には、我等、屋形様より御脇指御拵のこと被仰出しとき、積り二十兩に相成りける故、御延引有て可然と申上被止置たること有。是は大に恐れ入りたることにて、我等不了簡を以御損に相成しこと、中々百兩や二百兩のことにてなし。夫に僅廿兩のことにて、思召立玉ひしことを止めさせ玉ひし御罰不當に、ごふなるへきとて涙を流しければ、參りたる者も涙を落しぬ。

【一二六】 梅津與左衛門殿心痛にて急に果られし時、梅津東太夫殿、野尻徳兵衛、大繩東之進參りて、御役御訴訟、跡目願書の艸稿を認め居ける處へ藤明先生參られ、最早事され候とは殘念なれと是非もなきこと。扱跡目のことは如何と尋られける故、右之次第東太夫殿答られしに、藤明先生色を起して申さるゝは、死後に至て御役の御訴訟を申上、跡目の願を申上るは、上に對し偽りを申す也。夫よりは有體に、急死致、何の申置も無之と可申上こと也と云はるゝに、徳兵衛、東之進も默して有し處へ平元小一郎參りぬ。即藤明先生、此儀いかゝと申されければ小一郎申には、徳兵衛、東之進申處尤にて、御手前様の御



申得心致兼候。御當國に於て、御仁政くご御家中申唱候は何故の儀に候や、亂心の者を鬱滞ご申上、自殺の者を吐血ご申上家跡無御相違被下置候こと、御手前様御一己の御潔白を御立、上の御仁政を御破り被成候ご申もの也ご申に、藤明先生、即上座に居られるか下座に下り、小一郎に被對兩手をつかれ、其元の被申る條至極尤に候。我等了簡違に候故、初の相談の通に申上へしご申されける。

【一一七】 天祥院様御代利根川御普請被仰蒙ける節、岡本又太郎元朝殿其日は何の一言も不被申、翌日異父兄弟澁江十兵衛殿へ被申しは、大坂御陣の節、政光の夜中思案せられ、翌日御手配の儀矢吹きに於て被仰上しご聞しか、なる程寢て居ての思案は能もの也。此度の御普請は既に出來致しぬごありし故、十兵衛殿、夫れはいかゝと問ければ、一國を潰して御普請をあそはさるへきごのことにては有間敷、それなれば金の届き次第ご云もの也。是にて安堵したると申されしごなり。

【一一八】 右御普請の節、下奉行御物頭中田彦太夫指圖方不宜ご又太郎殿被申ければ、彦太夫刀へそり打て、ヶ様の義は、御手前様なごの御いろへ被成ごに無之ご申す。即又太郎殿、なる程手前心得違也ご、從容として申譯られける。公儀の御役人是を見られ、人中にて下役に申譯るとは器量のある人なり、畢竟、事なく公務を濟さんと思ふてのことなるへしご譽められしごなり。

井口亘云

此彦太夫に有へし、徳雲院様の御刀番勤中、御陰の間にて若き者揃ひ咄ありけるに彦太夫申けるは、若殿様の様なる御人の御刀番なら勤度ものご云るを、徳雲院様被爲間障子を御聞き

被成、夫はこ行き度は行けこ御意有りけるに、色をも不變難有こ御答申上、即義菫様御局へ行き、只今此方様御附御刀番被仰付しこ申上、直に勤め居候由、祖父長七郎經英物語承候。

【二一九】 澁江十兵衛殿より又太郎殿へ、急病ありて人參の無心せられければ、其元去年中、江戸にて高直なる印籠を求めらるゝこ承る、我等の人參は一家の爲に貯へ置候。其印籠を削り病人へ用ひ不宜や。去りながら指掛り候事故、人參は遣し候てやられしこなり。

【二二〇】 元朝又太郎殿親又太郎殿、梅津茂右衛門殿こ入魂なりしか、又太郎殿大病に及茂右衛門殿へ申さるゝは、是迄日頃御懇意を致御心底をも心得居候。拙者も明日知れぬ身に相成一つの願有之候、叶はせ玉ふへきやこ云。茂右衛門殿、身に叶ふここに候はゝ何成こも可承しこ也。其時又太郎殿、一人の子とも見繼く者無之候、我等相果候はゝ妻を其元様へ進せ置申度こ申さる。茂右衛門殿色々申されしか得心せられず、止こなく其頼みを聞入れられければ、即奥方を呼出し盃事を可致こて、又太郎殿床の上にて取持致され、茂右衛門殿こ盃事を極められ、落命の後茂右衛門殿へ再縁せらる。其腹に梅津與左衛門忠經殿、澁江十兵衛光重殿出生せられしなり。

【二二一】 山城殿正月二日の登城の節、一の御門あん敷の上を、艸履をはき通られしゆゑ、中間、召物罷成り不申こ強て申けれども不用、終にはき通され、山城殿年寄衆へ、御中間こも慮外致候故拜領致度こ申さる。年寄衆も色々取扱れしに山城殿一圓得心不被成、無據被申上ければ圓明院様御意ありけるは、

願ならは中間は可遣、併我等不徳にて、御先代の御法を山城に破らるゝこと、此段は物頭を以、山城へ急度御聞届可有この御意也。山城殿當惑被成、夫より指入られ天徳寺觀月和尙を頼まれぬ。觀月和尙登城して少し其端を申上るや否、政事には出家の取入へきことにあらすこ御意有るに付、二言こ可申上様なく下られしか、其後、御姫様方の御訴訟にて漸々相濟みしごなん。

【二二二】 圓明院様御代、赤坂治部之助云御歩行中り弓なりしか、山城殿御覽ありけるとき、的は不珍、兎耳へあて、御覽に可入とて射しか、其言の如く、三束つゝけて中しとなり。

【二二三】 那珂惣助下筋へ行き、宮野伊兵衛が許に一宿せり。伊兵衛も山鹿流の兵學をなし、惣助も雄鑑傳の兵學をなせし故互に軍法の咄になり、昔伊兵衛か近在の小城に、後に小川をかゝへたる城ありけるに、其城後ろの方より攻されは攻かたく、舟にて寄すれば其舟くる／＼ごまかれて寄することかたく、攻あくみけるか、寄手の大將川上へ行き、鐵くつを川中に夥しく打入れ又舟にて押寄しに、なんなく押渡りて其城を攻落しぬ。是は鰐の所爲なりしか、鰐は鐵氣を忌故に、川上の鐵氣に恐れて其處を去し者と伊兵衛咄を聞き、惣助、其翌朝未明に出立て久保田へ歸り、鍛冶町の鐵くつを皆買上げ、本庄、龜田へも人をやりて鐵くつを集め、大野の出しの下へ入れて川除け成就せり。此以前は、鰐にほられて一夜に崩されしに、此後は其事なかりしと也。

【二二四】 梅津半右衛門其雫殿の許へ、敬雨云俳諧師來り俳諧の折から、大手洗石の割れたる様なる

處より金蛇の様なもの出て、石のふちに眞すくに立と見へしか、快晴なりしに何方よりか來りけん、雲一片忽然として石上に來る。即其蛇其雲に入り飛上る勢にて、手洗石の水を皆座敷へ打上けしこそ。

【二二五】圓明院様御代根本治太夫御金役にて、三谷より御拂金百四五十兩受取歸りしを、兼て心安き御歩行の參り居此金の有處を見て歸りしか、夜中治太夫が寢間の二階へ忍ひ來る。其足音ふるひしか、即治太夫が脇指を抜いて喉へさす。さゝれて、手ごらへにせんこ掴みかゝり、白刃を取り指先きを落し或は突れ、凡十二三ヶ處の疵を得しかとも、終に組み合ひて二階より下へ落る。此時、御歩行は引はつして逃去たり。夫より治太夫は喉かはき、水屋に至りて水を呑みしに、疵口より水出て喉に不入、醫者を招きしに、疵の大きいなるを見てわな／＼ふるふて見へし故、夫にては拙者の療治はなるまじくて、別醫を招き疵口をぬひけれとも、喉より食物出て既に死なんこ見得たるとき、御留主居の小川茂左衛門二階を上りながら、夫斗の疵にて其方は死ぬのか、扱々意地のない奴こ惡口しければ治太夫腹を立、此疵を其元へ得させて見たしと云。茂左衛門、中々其様な小疵にては死ぬ男にあらずと嘲り笑ふに、治太夫大に腹を立、其元は其通りにならぬ人なれども、斯く手負ぬればせん方なしと申ければ、茂左衛門亦嘲笑ひながら、快氣をしての上に、我等こ討果し候へと云て歸る。夫より治太夫は、喉の疵口を手を以押へ飲食をなし、遂に快氣に及ひぬ。其節子供痘瘡にて九死一生なりしか、假令父子相果候とも、跡目は御相違有間しと被仰出し。此治太夫は高久流弓術を傳へて、指先落ちし後も生涯不止して、あつはれの



射手也しと、今村幽靜も譽たり。

【一二六】 圓明院様御代迄は、御家中の江戸へ登り又は遠方へ參り、女斗り家を守り居れば、留主居行きやうとて、一町や親類の女房ごも、米ありや茶の子なごを拵へ、打たゑす間尋し也。今は御城下は其沙汰なけれども、横手には、今も留主居行はあるごなり。

【一二七】 四十年斗り以前三月始めのことなりしか、小場源左衛門殿、屋敷の内にて攻め馬せられんとて、庭の木の葉の土になりたるを出させ、水のたまりたる處へ其土をはこひけるに、土の内より煙の如きもの眞直に立登る。是は不思議と見し内に、忽ち大風起り臺處の屋根を吹きはね、屋敷に干し置たる洗たく物を吹さらひ、東南の方へ飛去りたり。是龍ならんといへり。

【一二八】 長野先生鑑の師、上遠野監物は極て上手なりしか、或時、鑑は一人に勝んより十人に勝様に御心掛あるへしと云へり。此監物は何事も皆、鑑の心にて一生身を治たり。一藝に長すれば何業にても、夫れを以て一身を治るになるものと先生の玉へり。

【一二九】 安永二年、長野先生御家老にて江府へ登り玉ふ節のこと也。小田嶋元良先祖、大石家の家筋なる故あるにて、泉岳寺門前に居りし尼妙戒か許へ尋行き、先年内藏介か次第四十七人のことを問ひければ、尼答けるは、四十七人の者は、皆内匠守様の御意に叶ぬ者ごもにて有し也。其方は長袖なれごも佐竹様の御前通も勤らるゝ由、能々氣を付られよと云て、其外は何にも不答しと也。此尼は堀部彌兵衛

か嫁にて、本淺野の奥方につかへ堀部に給はりしに、今日は堀部父子出仕有筈也、汝すき見をするに於ては目を潰すへしと仰られし。其後不慮に付婚禮はせず。大石等敵を討ける時、奥方此尼に被仰付しは、此度大石等か敵を討候事に付諸國の神々を祈り候也。我身は不自由にて返り申すこともならず、汝を頼みて願果しをせんと思ふ也。汝我頼みを聞きて諸國を廻り給ふへしやと有ければ、此女此時十九歳なりしか、即髪そり落し尼となり名を妙戒と改め、夫より國々を巡り、残りなく願はたしを申て此門前に身を終しとなり。

【一三〇】 上淺野監物、横手より若い者を召連れ指南に來りしとき、長野先生、其者をも被招鑑切合を見られし時、監物申には、此間向帶刀殿へ罷り越鑑をつかひ候に、帶刀殿息を御切らし被成候と話しければ先生、帶刀殿若さにて、二タ立や三立にて息をきらさるゝとはにかゝしきこと也。我等今年八十九になり侍れども、息の切るゝ程のことも有まじとて、即二三立つかはれ監物に申さるゝは、横手の老人どもも會所へ參候哉。監物、老人に會處へ參る者は無御座候と申ければ、夫は合點の參らぬこと也、人に切掛られ候に、老人也とて只に切られては濟み申まじ。扱は老人程、常に心掛けて居るべきこと也と被申しなり。

右百三十段の話は長野先生より聞まゝを録し、全く自他の意を不加。和田氏、疋田氏、井口氏考の爲に記せるもの、一段下けて書之。本條と紛れん事を恐れてなり。

是より以下は予か見聞する處を録して卷末に附す。

【二】瀧川遊節、御當城は太平山の根城にて、城勢格別能見ゆといへり。御當城へ籠らんに、即太平山へ御人數をこめられ、首尾相應せんと云こと也。是等の故にや、予岩見山内の奥宇屋志内と云處に參りしに、此處の里人、鑑照院様時々此處へ至らせられ玉ふといへり、里人其古跡を語る。此處四方皆山にて摺鉢の内を見る如く、人家四五十軒其中に在。東の澤に入り、谷川を傳ひて一條の小路有り、即阿仁へ出る道也。亦其枝道有て、角館の奥檜木内へ出る也。故に此處は仙北、下筋へ相應するの要地、尤御當城の救應をなすへき處也とをほゆ。此所絶景の石壁多し。

【二】長沼は太平への通路を圍ひ、亦御當城は、太平山と長沼とのつり合より御繩張被成玉ふものなるに、近來皆田地となる。亦山崎燐硝藏の西の堤も長く、泉山の根を固め仁別への通路を圍めり、是亦要處也。同皆田地となる。

【三】慶長以來は諸記も傳りて皆其事跡も著、慶長以前のことは、茫漠として跡かたのあることなし。只秋田城之介様の御座の間を轉運して、今の湊御休み處となす。今見るに障子の骨の太く、諸事細工もこまて悠なる處、更らに今時のものにあらず。

【四】義重公六郷の御居館へ當番の内、小貫三之助と云者二三歳の女子を懷き御番處に居れり。此事

被聞召、何故當番に小兒をいたき居れりやと尋玉ひければ、妻近來病死仕、家内誰も見繼ぎ候者無之。

然らは病氣に仕るも恐入、又家へ指置き候へは死し候半と存、無據いたき候て當番相勤候と御答申上ければ、義重公、尤のここと也と御意有て、品々被下物等ありしと土肥藤右衛門（姓名）江物語にて承りぬ。

【五】 矢田野民部、病後屋敷の畑へ出て下人を使ひ、なにか物いひせしか、下人怒りを起して、鎌を以民部を打んとす。隣家の石井正左衛門是を見て、垣を飛越て、脇指を以て只一討に切殺し、即垣を飛越て我屋敷に歸る。民部一禮して、扨々病後手に餘り候折から、御助太刀千萬忝と云。正左衛門答て、拙者は御助け不申、能見事に御切被成候と云へりと、土肥藤右衛門物語也。

【六】 江尻三十郎途中にて須田美濃殿に逢ひしに、美濃殿輦の内に居り、頭巾をかむりて辭宜す。三十郎即輦の内へ飛入、御不禮也と云。時に美濃殿供の者ども群り來るを見て、脇指を抜て云、汝等動くことなかれ、動かは主人を刺殺さん。此時平澤軍之助歩み來り、三十郎殿何を被成候やと問ける故其譯を云ければ、軍之助聞之、下人等は拙者受合可申間、御苦勞被成間敷と云。此體を見られてや美濃殿過り候、以來は慎み可申と被申ぬ。三十郎、左あらは了簡可致あいた、以來は御慎み被成候へと申て去れり。此話も土肥より聞。

【七】 慶安の頃横手に、金澤文兵衛親羽と申せしは予か高祖父也。十三歳の時馬口勞と伴ひ南部の方へ参りしか、山中にて其者異心を挟みける容子見ゆる故油斷をせずに行きしに、路のかたへなる谷川



へ下りて其者水を呑を見れば、水を呑むにはあらて、己か脇指の皮柄へ水を掛けて居れり。是を見ていよ／＼異心あるを見定、聲を掛けて後より眞二ツに切り下げ、川中へ押入れて通りぬ。亦壯年の頃、山のへくり路にて人突牛に行逢たり。牛使其後より聲あけ、突牛にて候間逃げ玉へと云。然るに、片へは山岸をひへて取付へき様もなく、片へは谷川深ふしてさくへき處なし。爰に於て突掛け来る牛の兩角を取り、聲をあけてねち付ければ、牛谷底へ落て微塵となる。此頃鬼文兵衛と申て人皆おそれけるは、力量衆に勝れたるを以なり。

【八】 或時鑑照院様御意被遊けるは、忠信、次信か如き家臣を持たらは頼母しからんと有ければ、梅岩半右衛門殿、其節の如き大將あらは幾人も可有之と、腹立聲にて被申上げる。

【九】 須田伯耆御家老被仰付たるとき、妻に相談仕御請可申上と被仰上退出。歸宅の上、斯申上て歸宅候と被申ければ奥方被申しは、婦人の私へ御相談に可及哉、忽々御請可被遊と云はれければ、御役なご勤候へは、其元杯を頼み内證より申も有之者也。都て、我等身分のことへ聊も頓着被致間敷は御請可申と被申ければ、何か爲め御頓着可仕、御氣支あられ玉ふなど申されたれば、左あらは登城御請申さんご被出るゝ節、袴をねちり被出しを奥方、御袴ねちれたりご心付玉へは居直り、今申す通に候、はや頓着被申候故御請はなりかたしと改めて被申、悉くわひ被申、漸々登城御請被申上しと也。

【一〇】 伯耆殿江戸より被下候節院内に御制札有、見玉ふに、隠し道通り候者有之候は、曲事に被仰付

候との御文言有り。其御制札を爲取持參被成御前へ被申上けるは、隠し道を、上より御教へ被成候様なるものに御座候。萬一隠し道通候者有之候は、御斷なしとも御咎被仰付不苦事に候。仍て御伺も不仕候へども、御札持參仕候と被仰上候。

右三段は、羽城昔物語にありと井口亘云へり。

【一二】 疋田定綱殿云、みの白の幕は、上様と御當家より外には用ひ候事不相成、手繩の白きは御家の御印にて、御家中の用ひ候は心得違たる事也と長野先生被申し也。此みの白の御幕、先年本清院様、神田祭禮御覽候節爲御打被置候處公儀之役人咎め候故、前々より用ひ來候と申上候へは、公儀にも御存有之事か、其後なんの御沙汰も無之由。亦御挾箱を後と先に立候は、公方様と御門主様と御家との外成不申由。御遷封以來御謙遜にて、金御紋御先箱、其外色々御損滅被成候以來、其古實も無之候。今以御行列帳には、御挾箱、御挾箱と認め候也。亦獵犬は、公方様の外容易には御使ひ難被成もの、其御家多くは不承候。御當家にては前度御犬ありしと也。亦往古は御供鍵(カギ)一本に候處、遷封以來段々御減少、圓明院様御世に五本に被成候事、義透日記にも見得候。當時は御並方様多くは二本に相成候也。

【一二】 又云、内藤南省、圓明院様御脱肛の御療治指上御全快に付、十二月のことかこよ、爲御賞御加増二十石被下置候由。今宮大學義透殿年禮に被相越候節、南省え喜び被申候處南省挨拶には、德雲院様御代、攀噲と申候御祕藏の御鷹足折候節、神保海月藥にて愈へ候に付御加増五十石被下置候。私は御國守

之御痔疾御療治仕候て、只二十石被下候故難有は不奉存候と申候にて、大學殿大に立腹被致、御用始に宇都宮帶刀典綱殿へ其趣被申けるに、帶刀殿挨拶に、御腹立は御尤に候へとも、なん程攀噲足折候節海月療治にて愈候に付、五十石被下候旨徳雲院様御直に御書付被遊候て海月に被下候處、療治未熟にて御加増拜領恐入候段辭退申上候へは、不入はおこせと御立腹の御意にて、御引上被成候義拙者も心得罷有候。南省も此義覺候て申候事故、無理も無之候。拙者へも其通申聞候故、無餘儀事なれとも御時節か違候故、其時の百石と存拜領可仕挨拶候由帶刀殿被申にて、大學殿も怒りはれ候由。攀噲怪我致候節十太夫義國殿態々登城被致候由、長野先生物語にて承る。南省へ二十石の御加増被下候事は、大學日記にも見得候なり。

【二三】赤尾關織部横手へ公用にて参りける時、二代目の吉成文右衛門一風の子處へ手紙を遣し宿へ招き、貴様は當時鍵切合の師範なされ候由、拙者も御同流なるか、貴様は師となるへき藝も不聞得候と申。文右衛門大に腹を立、是は存の外の被仰聞にて迷惑致候と云。織部、左あらは眞劍の勝負を致試み申可候間、拙者も鍵を持參致候故、貴様も鍵を御持參可被致と也。文右衛門、即家に歸り鍵を提けて出て来る。織部左あらぬ體にて、今に勝負可致間、先づ御居り可被成と云て盃を出す。文右衛門、下戸に候故御酒は延引に候と云。織部申は、眞劍の勝負は今生の名残りに候。士の仕合仕るに盃事不致は、臆病又は、せき候と人も申へけれどて、大盃を以滿飲し文右衛門へさす。文右衛門、止む事を不得一盃を飲み



盡す。織部又満飲して、盃に一ツ飲むべき様なしとて指す。織部は上戸、文右衛門は下戸なれば、彼是の間に終に酔倒れたり。目醒れは翌となる。織部も起て相對し、昨日よりのことは全く如此、貴様に御酒を指上度爲也、何と同流相討の次第あるべきや。又貴様の御藝術兼て承る處、感し入る處なりと云へり。此話は土肥藤右衛門より聞けり。

【二四】元祿の頃迄は戰國の餘風ありて、缺落なとする下人のれば、尋出して手討にせされは世間へも立ぬことにてありしと也。今村幽山先生十三歳の時、下人、御番つつらを脊負て缺落せしか、探り出して草生津へ引出し自身其首を切られしに、首更らに落す。此節召つれし家來小山田某と云者はを見て、今一度切らせ候へと云に付、幽山先生、又刀を振り上げるに首自ら地に落けり。此刀極て細身にて無名なりしか、是より籠水と銘をゑり付られたり、籠の水は、水も溜らぬと云心にて有しと也。此刀相傳へ、子友茅根喜六郎へ傳りし、彼は幽山先生の子孫なれば也。喜六郎十四歳の時此刀を持って、御成敗者の有時草生津へ參りしか、皆人に止められて試さぬと、喜六郎物語にて承りぬ。

【二五】益戸助四郎澹州先生と號御膳番被勤し時、御四家と張り合て理窟を申に付、門人坂本九郎左衛門尋行きければ、御城下りより某の許へ參られたりと云る故其處へ尋行ければ、洒客多く座に滿るゆへ何を云べき様もなく、漸く夜更て諸客皆歸りけれとも、助四郎安眠して不起るを九郎左衛門漸く起して家へ伴ひ歸り、扱しかゝのこことあり、先生知り玉はすやと云ければ笑て申候は、我是を不知にはあらず。勢



ひに屈して道を曲るは丈夫のせざる處也とて、即懷中より一首を出す。それを見れば、

一年始有二年春　　百歲曾無百歲人

假爲明珠受斧鉞　　豈同瓦礫委灰燼。

先生云、大丈夫は正に倒るへく、豈死を恐れて反覆すべきやと云。九郎左衛門も辭なく歸りぬ。果して是か爲に御役を退けられたり。其年の秋、老母の行燈をはるこて即飯糊（さくい）ををしなから、

秋立やあわれ今年も穀潰し。

【一六】 梅津柏葉忠致先生御家老被仰付し時、殊の外御受難しければ、源通院様、藤馬處存は九年の蓄のことなるへし、何になりとも其方の申ことを執り用ゆへき間、御受を申せご被仰出しに付御受は被申しが、御同役間六ヶ敷して、十日に不滿して御役を辭玉へり。長野先生も、此柏葉先生より武田家の軍法を傳受せられたり。柏葉先生或時予に、名爲獨斷而不免主威移下欲致治而反不免致亂と云語を書付て給はり、役人ともすることは、皆屋形様の御威名にかゝることなるに、猥りに己から丁簡を以て埒もなきことをするは、去りとも恐多きこと也と被仰し。此節の書、今に予か處に藏す。

【一七】 來光寺へ武者修行参りたりと云ことを聞き、吉成小藤治壯年のはやり氣にて、左様の者を御城下へ置は宜からぬこと故、尋逢ふて勝負を決せんと云へり。予も其頃十八九の頃なりし故大に同意して、割竹を打込みし太き棒の如き韜（しなへ）を下人に持せて、來光寺へ参り按内して尋ければ、左様の者は此方

に居り不申。先達で、立花杯を致す者寺へ参り暫く逗留致せしが、疾く罷歸候と云にて空く歸りぬ。此節柏葉先生予に申されけるは、寺の戸口へ誰か先に入候やと尋玉ふ故、小藤治先に入候と申ければ、夫なれば其元は檢使にて候と被申し也。なる程寺の戸口へ参りつめての心持に、會處に居りし時の心持にてはなかりしなり。

【一八】 安永七年に御城御焼失以前、出にて毎夜大勢騒く音四方へ聞るけるに付、源通院様も是を聞召れ御側へ被仰出にて、騒く者どもは大小性共に有へき故、罷越して吟咏可致と有し故即参りて見るに、更らに一人も見當らず。如斯こと毎夜なりし故、後には大に奇怪也と皆人思ひしか、夜中出火して御城残りなく焼失せり。此時、柏葉先生火事羽織を入りし長持の鍵見へず、即斧を以其蓋を打制取出して着玉ひ出られければ、二の丸にて源通院様に御目にかゝり、鹽谷伯耆殿も落あはれければ、即其方とも兩人の内一人は兵具へ、一人は八幡へ可参と被仰出、直々御東へ御立退遊はされぬ。夫より伯耆殿へ、何ッ方へ其元様は御向ひ被成候哉と被申ければ、八幡へ参るべくと也。定て燐燐藏の有る爲ならんと、可笑かりしと先生被申し也。

【一九】 梅津弟太郎翁上中城より歸りに、手に持し籠提燈の籠地に落てころゝ轉ひ行く故、夫を取らんと追行くこと二丁斗り、漸く取り得て己か手に持し柄を見るに、柄も臺も、返り釘等悉く本の如く有て、更に籠の脱すへき様なし。亦二丁斗り風のなきに轉ひ行しも、何物のしわざなるや合點のなきこと

にて有しと、翁の物語を聞く。亦柏葉先生、五郎三郎と被申しときは至極困窮被成玉へり。此時弟太郎翁の取斗意にて、梅津小右衛門殿より新らしき夏袴をもらひ柏葉先生の處へ持參し、是を召れ候へと云ければ、先生させる一禮もなく、古袴を去りてそれを召れ座し玉ふ。折から悴も席書を持來り點を玉はれと云に付、短き墨を自身すり玉ひければ指頭に墨付てありしを、即今の袴へぬくい付られたり。是を見て弟太郎翁腹を立、去りとはつまらぬ人也。着たての袴へ手を拭ふことや有と怒られければ先生、から／＼と笑て何も不被申候と、弟太郎翁の物語を聞く。

【二〇】 柏葉先生常に被申しは、朝夕の食物は屋形様より拜領の品にて、直々御臺處より御仕送被下候に違なきこと也。夫れに何として、風味の好い悪いを申さるへきやと折々御申有し也。夫故、こはい物を御數奇やら柔らかな物御好やら、甘きがよいやら、からきか御好やら、御勝手の者誰も知りたるものなかりしなり。

【二一】 中川柳軒先生土橋にて佐竹山城殿に被逢けるに、山城殿駕籠よりをりんと被成し時柳軒先生、被召候へと云。山城殿是を聞、駕籠へ乗られなから時宜し通らんとするを柳軒先生其駕籠を押へ留め、召し候と申は此方の禮と申ものに候、又召せと申ても、御下乗被成候は其方様の御禮と申者也。さあさあ御下乗あつて御辭宜被成候へと申に付、山城殿無據下乗被成、時宜なされ候となり。

【二二】 柏葉先生五郎三郎と被申し時、百石の分知にて御奉公被成しゆる至極困窮被成候也。其頃御

材木役被仰付けるに即御副役へ、拙者は一向算用を不存候、算用を不存候ては難相勤御役に存候故別人被仰付、私儀御免ある様に仕度と被申ければ、御勤被成兼候は、御病氣被仰立御訴訟被成候か御例に候間、左様可被成と申に付それより被指入ける時に同役來り、此度の御役は七八十貫斗り有之御役にて皆人願候を、何故辭され候やと申けるとなり。

【二三】 柏葉先生病氣にて床に臥されける折、枕元へ書物の弟子沼井典膳來り、私事今日御本方奉行被仰付難有奉存候と申ければ、先生笑て默然として、鼓うち兵刃既に交る時、甲を捨て兵を引て走るであらふと被申、大に被笑ける。

【二四】 あしき者にいけんをする程ならば、籠へ入るゝか腹切らするか、二ツ一ツの時ならてはせぬ者なり。なまじいにいけんをしたるとて惡者はきかぬものと、柏葉先生被申けるなり。

【二五】 士の、茶の湯を能し、晝を能かきなとして自滿をするは不心得なることなり。士か、茶道、晝師になりては本志にはあるまじ、下手なれはよきことなり。都て技藝に長するは丈夫の耻へきことにて、知らずにいかゝとならば、少し知りてよきことなりと柏葉先生被申けるなり。



昭和六年十月

深澤多市校訂  
國本善治校字

雪出羽道

平鹿郡(下)



雪出羽道(平鹿郡十二)  
土巻

とこのふる跡

醍醐邑

おひら  
本郷

たかはら清水

下樋ノ口邑

中のまし水

梨本幅邑

いたこのもり

深間内邑

里のおほはし

石成邑

筆つばな

上吉田邑

なつのみやしろ

馬鞍邑

松のした水

客殿薊谷地邑

さゝの崎

新藤柳田邑

萩の芽

上樋ノ口邑

さくら澤

外ノ目邑



とこのふるあと

## ○醍醐村 本郷

里長 周 助

○醍醐はもと、山城ノ國なる醍醐を慕もて名づけたる地ともはら云ひ、また醍醐ノ帝の御代に草創しゆゑよしある處なごもいへれど、諾られぬ事也。經典に乳味、酪味、生蘇味、熟蘇味、醍醐味と云ひて、牛の乳汁を制煎て甘露と成る、それも醍醐といへる名あり。また石持といふ小草あり、其草のから名をも醍醐菜とかいふごもいへり。また世に車櫃、車長持てふ器を、秋田ノ邊にてそれをも、だいごといふ。それは臺庫の義にや。此陀伊基に屬する號もさまざまの品類の有ける也。考ふに倭名鈔に、平鹿ノ郡山川、大井、邑知、山本ノ郡塔甲、御船、鎰刀、餘戸とあり。また此平鹿ノ郡の内に山本とあり、そは山本ノ郡なるべけれど今印本には郡ノ字を脱して山本塔甲とあれば、塔甲はまさしく山本郡に在べけれど其條みだれて書混たれば、醍醐は塔甲を、れいのしたごみ訛りもてだいごと云ひつらむ。そを今の字に作し醍醐とはいへるか、たいごの言語入聲に近く、さながらたふがふと方言が如し。歷朝詔詞解三卷第十八詔に、出羽は和名抄に以天波とあり、其外も昔の物には皆然あるを、いを省きてではといふは鄙言也。小勝、印本に小ノ字を脱し勝ノ字を膝に誤り、一本にも小勝と有、今は又の一本に依れり。和名抄に雄勝郡は平加知、謂之答合と見え、雄勝ノ郷も有、答合は誤字なるべし。といへり。○醍醐の東は馬鞍、西は十五野、南は梨木羽場、北は上樋口也。○醍醐より淺舞へ廿八丁、湯澤へ三里、横手へ二里、増田へ一里半也。

○村の西に佐渡川此さざざいふ名處々に在り、さて小流あり、此源は梨木幅の中の御寒泉おしづ、また同村に在る亦

右衛門清水さて此兩流の落合也。又この醍醐に○大沼あり小沼あり、大沼の水は小沼に入る、左戸川の

末を小沼といへり。昔は小沼にてそれに狹門川さきの落入しならん、小沼も全狹戸川もはらといふ。また此左戸

川ノ流の末は此醍醐はいふもさらなり、淺舞の道川、客殿薊谷地、中吉田、上吉田、深間内、上樋口うら、しか七

邑の千町田にかゝるといへり。○享保郡邑記ニ云、醍醐村家員五拾軒也今七十三戸、支郷○野中村家員十

文四辰年ニ籠田村同十一軒、多賀谷左兵衛殿ノ高上○佐馬村同四軒○形部村同四軒、寛文○石成村同拾六軒云々

と見えたり。今は享保のむかしとはここにして○野中村に家六戸○籠田村○中籠田村兩村合十一戸○

佐馬村、この一村いづことも知れず。御公地ごぎちといへる廢村あり、此邑を左馬村といひしならんといへり。

此御公地といふ枝邑上吉田にもありて廢邑たり、ごぐちは郷口といへる事にや。若また、おほちを説て

こぐちと云へるを今の字に摹て御公地と書るものか。おほちは邑知にして古名也、すでに前まへにも此事

云ひつるなり。醍醐は塔甲の誤り、御公地をも邑知の謬まちがひとせば、なほいにしへの跡たゞるに近からむか

し。○形部村家四軒、此邑今云ふ下タ村也。家六戸、醍醐本郷の西北に在り。其むかし野中形部といふ

人の創はじめし處といふ、その末葉伊右衛門とてなほある也。野中村もその由來もあるか。○上醍醐村家七

戸、醍醐、石成、家居入會まじりたり。此邑享保日記に見えず。○古城跡あり、此城主シは馬鞍、城主の一門に

や、むかしは馬倉と同村たれば、いづれとわいだめなければ、馬倉能登守、同右兵衛尉、同宗介、同縫殿丞

なご云へる馬倉統多し。○馬倉の戦ひの物語は馬鞍のくだりに委細に誌すべし。

○神社

○神明宮 羽場野の内に鎮坐<sup>まかせ</sup>り、社地いどくひろく、松、杉、こも木も生ひ交てとしふりたり。祭日

六月廿一日、末社の御神あり。別當増田、金剛院。○金毗羅神○秋葉神 祭日共に四月十日、別當並

同上。○此八月の廿餘日は遷宮なりとて、木工等斫ぐる音、墨繩うちわたり、良材もてはこぶなご人さ

はに入りみち、うや群れて饒<sup>にぎは</sup>へり。此、神前の岨の坂下に石井<sup>いし</sup>あり、みたらしの清水とていど清淨<sup>きよ</sup>し。

○野中、稻荷明神 野中村に座<sup>まかせ</sup>り、別當増田、金剛院。

○櫻町、稻荷明神 上、醍醐村に座<sup>まかせ</sup>り、別當並同シ。

○字地

○古館、下<sup>タ</sup>町 ○さくら町 <sup>むかし櫻多くありし地にや</sup> ○追散<sup>シ</sup> <sup>古戦場にして、うべもさる名の残りけるものならん</sup>

○塚の下<sup>タ</sup>、いかなる人の塚にや、人しらす。

○長泉寺

○廣藏山長泉寺、本山は増田の満福寺、則本山の閑居地なりしを一佛刹として平僧寺と成しつ。開祖は満福寺の四世在天繼富大和尚也。○二世通用話達○三世天室傳青○四世白菴梵龍○五世寶山白隨○六世雄山白英○七世骨岩萬髓○八世大然旭聖○九世象麟百貞○十世隣岩固岩○十一世徹心大喬○十二世

當時現住素剛鳳淳也。累世歷代さだかにそれと傳らず。○五世の寶山白髓和尚の代に本堂再興あり、さりければ此五和尚を中祖師とも云ひてんかし。

○本郷醍醐邑家員七十三戸    ○人數四百三拾八人    ○馬五拾七疋。

なかのましみつ

### ○梨木羽場村 (一)

里長 三 右 衛 門

○正徳、享保の世までは幅といふ字に書けるを、今はしか羽場の二字に作れり。さて、梨を地の名に稱ぶ事處々に聞えたり、磐梨ノ郡あり、また甲斐ノ國に月見里あり、山梨邑あり、また、此國の仙北ノ郡に高梨あり、高梨氏もいと多し。雄勝ノ郡に三梨あり、そは一花三子の雪液菜也、そをみづなしと濁音村名也。また秋田ノ郡の阿仁に三梨子ありて風張今いふ邑の吉田也の枝郷たり、是も古は一花三帯のなしにて、品字梅、やつぶさの如に英一に三菓産しが、今は枯て水無、あるは水梨子など呼びぬ。幅てふ事はこころゝ考しかば此處には省ぬ。此處を一の羽場といふ、此邑の愛宕の杜下より十文字の辻あたりまでを二の羽場といへる也。此村湯澤、横手の中にして往復せり、東は馬鞍邑、西は十五野邑、南は二の羽場十文字村、北は醍醐村に中り。



○枝郷○下村家二軒、延寶六<sup>戊午</sup>年醍醐邑<sup>ヨリ</sup>分<sup>ル</sup>。と享保日記に見えたれど、元文、寛保の年ならむか廢村<sup>たてま</sup>て、今は柳原となりて二の羽場の西に其古跡あり。○淺舞へ一里三丁○増田へ一里○湯澤へ二里半○横手へ二里半ありといへり。

○御憩所<sup>おやすみ</sup>

乾に中<sup>レ</sup>り。村に大杉一ト本生ひ立り、此もとに道祖神の祠あり。此杉は己巳待塚のしるしにうゝるといへど、今は御休息<sup>おやすみ</sup>小路<sup>みち</sup>のしるべとなれり。御憩所<sup>おやすみ</sup>にはとしふる杉<sup>杉</sup>も生ひたり。寒泉<sup>せみづ</sup>あり、中<sup>ノ</sup>御清水といふ。そは酢川の寒泉を上の清水と云ひ、塚堀の般若寺の清水を下の清水といひ、この御休、そが中なればしかいへり。うべも此上<sup>ミ</sup>中<sup>カ</sup>下<sup>モ</sup>いづれをいづれともわいだめがたき靈水<sup>ましづ</sup>也。御鷹野、また江戸上下の御旅<sup>な</sup>ごの御成のとき、此境内の掃除は此梨木羽場の人、また醍醐、石成の人も出て助ぬ。さるよしをもて醍醐、石成の兩村には、五斗米<sup>五斗米</sup>内一斗御免<sup>御免</sup>ありて四斗<sup>四斗</sup>貢<sup>貢</sup>せり。五斗米<sup>五斗米</sup>は十斛<sup>十斛</sup>に付て五斗<sup>五斗</sup>つゝ也。こはもろこの土を五斗折腰<sup>五斗折腰</sup>ノ人といへるこゝろに似たり。公、寒泉のおほむ成りあれば、龜田村よりさしつけ蒔<sup>蒔</sup>菅<sup>菅</sup>のあら、薪<sup>薪</sup>也。これを貢<sup>貢</sup>る、また明澤村よりは御馬<sup>御馬</sup>の咋料<sup>はま</sup>を奉る。野陣<sup>野陣</sup>なごの古例にや、今し世には珍らしきためしにぞありける。

○亦右衛門寒泉<sup>しむづ</sup>

村の乾方に在り最上清水<sup>いじよき</sup>也。又右衛門といふ土民堀りたる清水にや、そこに家居せしにや、由來知れる人なし。

○樹藝者あり、本<sup>ト</sup>今宿に在りし由利孫右衛門といふ翁也。今宿の良介、杉の嫩苗<sup>なへ</sup>うゑ生の事郡御奉行

今泉三右衛門殿に願を立てうけひき諾たまへば、寛政十二年庚申の夏より此梨木羽場村に移うつ來て、あら野良、藪原を草創くさくわうぬ。孫右衛門は由利良介が養父なり。かくて御高に入いし地は七千二百廿九坪、其間數東西六拾六間、南北百二十九間也。○御高札、面豎百七十五間、横上六十間ニ下百七十二間也凡二萬百二十五坪也。是を文政五年戊午八月、此地の御高カ残り無く御郡方へさし上あるこいふ、なほ、うゑたての杉苗四萬本に及べりこか。うべもとし／＼うゑさうゑる杉に、さは廣野をふたぎぬ。

○産業に紙漉し家あり。その創め享和はじめならむ、最上の新庄より五右衛門こいふもの來て、楮、木うゑる事を此里の人々にをしへぬ、もこも此わざはじめしは由利ぞはじめなる。また永吉こいふもの文化元年の春、みちのくの東山の竹生津村万吉が家にて、半紙、大方な漉ならひ、三とせを経て販り來て今は四十餘歲になれば、紙に某たににまれ漉き得て、今はもはら土毛こはなりぬこいへり。

## ○ 神 社

○愛宕護山大權現

祭日六月廿四日、八月廿四日

此日は遷宮ノ日な祭る也

別當増田／金剛院

○稻荷社、末社、御神

也。そも／＼此於多岐たぎの杜かりは古いにしへトは虚空藏の杜かり也。その由來ゆゑよしは天正、文祿の世ならむ皆瀬川こゝ

を流て、そのみなせ川にて三浦和多左衛門爲宗こいふ武士うち死せり。此三浦爲宗の念持佛なればこゝに堂を建つくりて、そがよしみの人こら福一滿の祠ほくらといたゞきまつりしかど、今泉曾右衛門こいふ人此地の水田創ひら壱いのこき、田島守護の御神、また、こころの本居うゑすまの御神しづめと鎮奉らしめて此杜かりに祭れば、虚空は

さちには地主社にこそあらめ。さりけれどそのぼさちは今はいづこに座、こゝにおはしまさぬ也。あるものに記したるは、常村之鎮守愛宕山地藏大權現之尊像者、久保田住人今泉氏奉<sub>ニ</sub>造建之、中頃失却而新彫<sub>ニ</sub>刻聖體、再仰欲興起忽乞<sub>ニ</sub>予點眼、即向<sub>ニ</sub>神前<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>祈施主靈檀越武運長久當處領司同氏家門安全至祝不盡、某作偈云 金錫橫飛遊六道、妙音普振度生均、打開無盡藏中去、手裏寶珠幾與人 現長泉大噉稿と記して年號なし。いづれの世の僧にや。

○寒泉<sub>しづづ</sub> 愛宕社より往還道の西に在<sub>リ</sub>、おたぎの神のみたらしといふ。

○大池あり、皆瀬川の古川を人あまた促して、いな田のために作れりといへり。

○古木の梨子樹<sub>なしのき</sub> むかしこゝを河流れしとき、河岸の梨木に船繫しといふ、その木はかの池の中になりて今は跡なし。こゝを梨木と村名にいふも此舟繫<sub>ぎ</sub>の梨子有<sub>ん</sub>もていへることなむ。

○伊藤殿の松 伊藤甚左衛門が門に在<sub>リ</sub>。伊藤某<sub>たれ</sub>といふ事、時代木に萱<sub>こぎよ</sub>こうつりかはりて家録もあらねど、伊藤どの、庭松たりしとて、歳の始には注連引はえ神酒そなへ、神燈奉りて尊めば、よしある事になむ。

○みなせ川にうち死せし三浦太左衛門爲宗は、金澤陣のとき二陣は三浦平太爲次、三陣は鎌倉權太夫景道、四陣に三浦平太夫爲道云々と見えたり。爲宗も此三浦統の末胤ならむかし。

# ○古名字地

増田十文字邑

外ヶ原のり

集末下

一むら

寛政五年

大新

い

い

い

い

い

い

い

雪出羽道(平鹿郡 十一)





梨木羽場邑

南

甲 梨木幅村  
地乙 池と古川跡  
丙 梨木として大樹あり  
其木を池底に已て朽て  
池底を三十五石の田なり  
りしと云ふ

東



意  
 高社あり一村の本居の  
 中より右の山に  
 水あり其の神の  
 田舎をなす











田舎岩清水の水  
 二流し  
 乙亦古衙門清水  
 中の水はよく  
 末を初より



雪出羽道(平鹿郡 十一)

御甜寒泉

梨木幅邑に在りて古木ありて

酢川の清水せよと般若堂をたも

地清水を

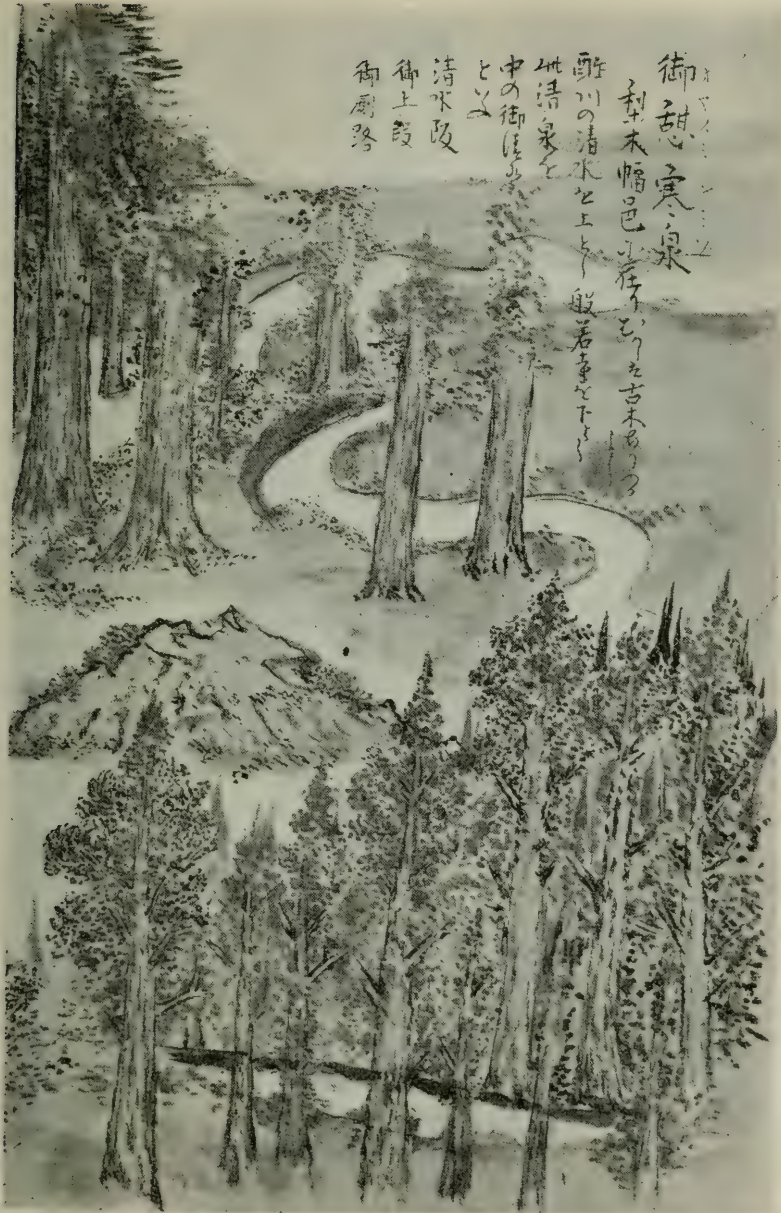
中の御住み

と云

清水段

御上段

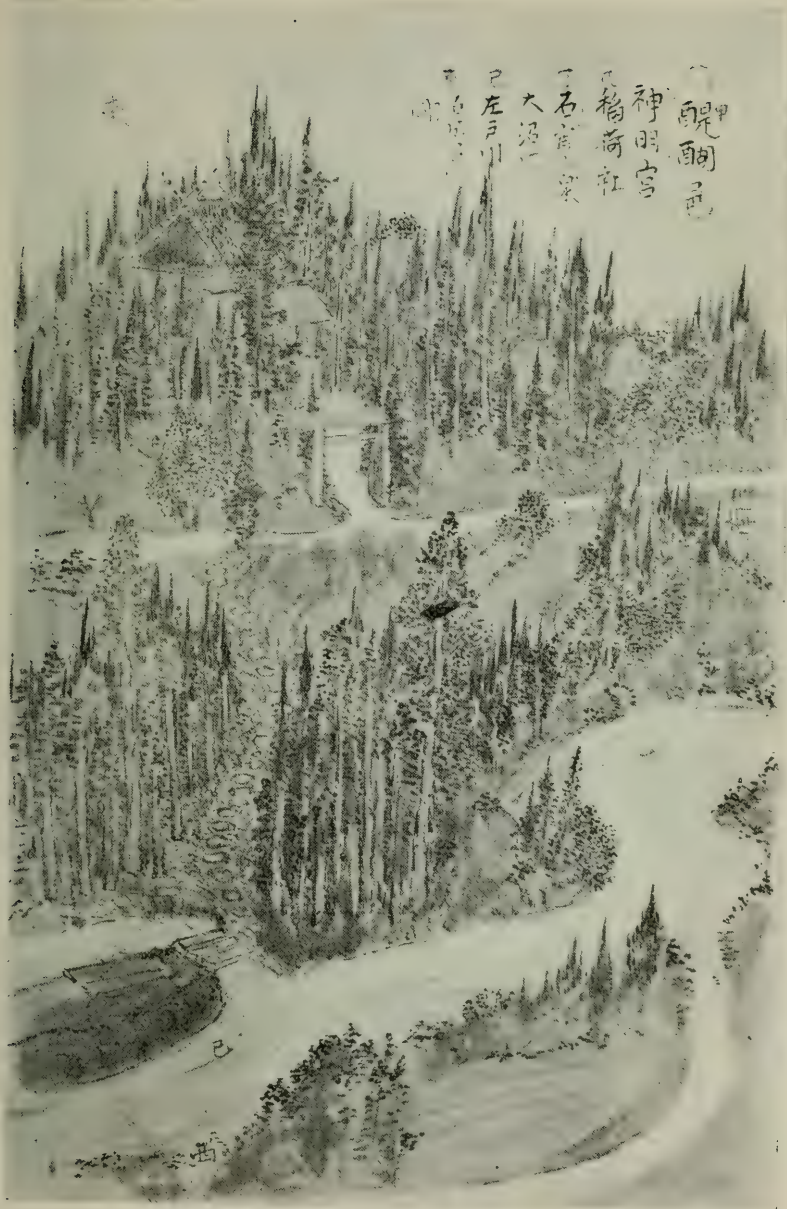
御廟路











醍醐寺

神明宮

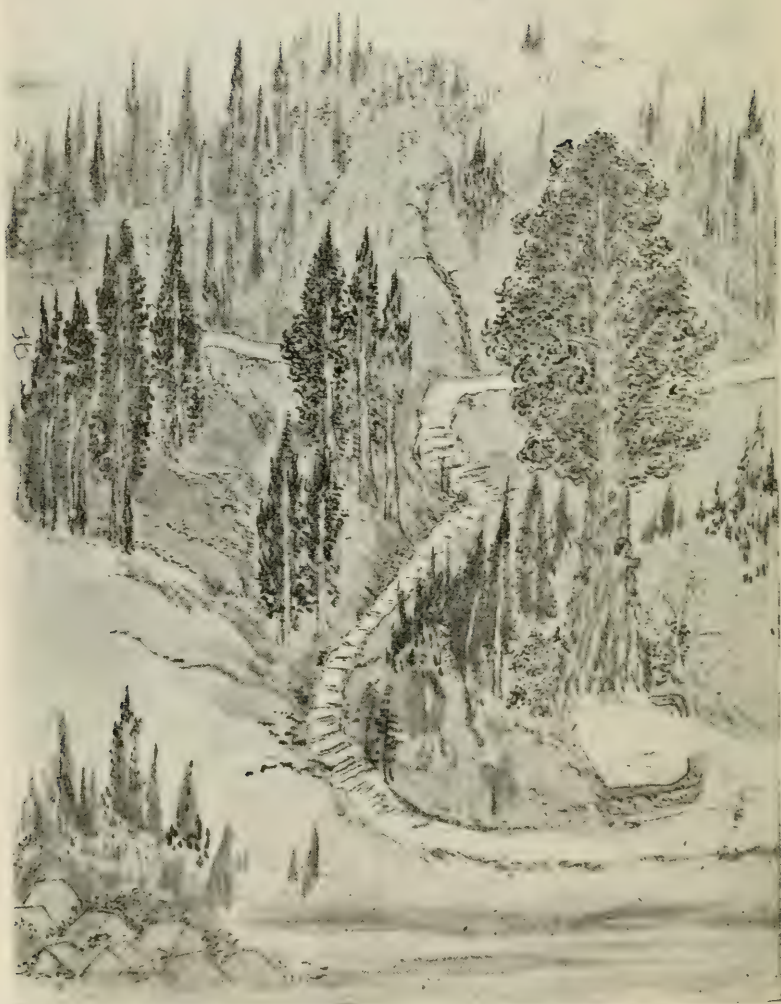
稻荷社

石宮

大沼

己左戸川

白川



醍醐の幅比神前宮  
 前大沼佐戸川  
 臨丁東島島嶼地西  
 岸の敷已湯降の町筑  
 幸彦関龍の刻る  
 見をれつりか







石成邑甲 驤乙 神石成邑  
去並木丙 石成邑  
利丁 石成邑

丁神明柱

已而想實泉

實  
亦宜  
清水

孝  
御  
不  
地  
記  
所

○沖の野 ○坊主畑 ○中嶋 ○中野 ○狐澤見、是を澤見さみといふ。いくばく年や經ぬらむ、左美の喜藏きざうとて牡狐有りて、村に幸なる事あれば、數もしらす千々の狐火を燭ももしぬ。これをきつね松明たえまつと云ひて、さながら雄勝郡の松岡の、五月四日の藏王山の齋夜いみやのごとし。

○家員二十五戸 ○人員二百二人 ○馬十疋。

里のおほはし

## ○石成村 (二)

里長 吉 郎 兵 衛

○郡邑記、石成村家員二十軒今世世九戸也。此村正保四年馬鞍村ヨリ分ル。其節澤山と申ス山を御付ケ置れしよし。馬鞍村醍醐邑入組の處也。」と見え、枝郷」關合村家員二十軒今十戸○明澤村同四軒○大橋村同三軒、街道に大橋有ル故ニ名とす。」と見えたり。明澤、大橋、此二村今廢邑たえたり。

湯澤より横手、久保田へ往復街道なる村は同ジ石成ながら首郷醍醐村おもやうに屬なづへ、此邑より直に東南の方に入る小路あり、是ぞ石成の本村なる。さりけれど醍醐石成の家並にも、本石成の家三四戸は入り交まじてぞ栖すける。

○石成に酒造肆さかやあり、忠助といふ。そが親なる者は下境村の新處あらたといふ地に家栖すし高橋武左衛門が舍

弟也。武左衛門は出世久保田に至りて、今は其家ごのひとたり。その忠介が家に記録あり。石成村は正保<sub>亥</sub>年に馬鞍村より御高七百石餘の水田もて分村たる邑也。其世の村の家員五十軒あまり人馬も御高に相應の村なりしが、延享のころより米の價至て下直萬民これに困窮、かくて天明三<sub>癸卯</sub>年世間並て饑饉成てなか／＼のさわぎに、田畠みながら廢て葦萱おほひ茂りて野山の如く、村の家居も五六戸斗に残りて往來の御役もたちがたきよしをうたへまをして、下境邑武左衛門さる仰をかゝふりて、南部、津輕より來ける退散人を數十人めし抱へおいて、かれらに廢田墾しむる時、此武左衛門に名代て、そが舍弟忠助此石成に引移り、あはてしあら野良を草創耕佃りて廢家門を興て、土民多く來集りて、前後四年のほごにやゝもごのごとに成就て、寛政二<sub>戊戌</sub>年國司公江戸御上りのとしより御小息所の仰をかゝふりて、文化七<sub>庚午</sub>年に至るまで廿三ヶ年しかありて、公御上下のおほむ成りの時は、おほむずんざあまた上中下まで、むしいひ、濁る酒をもて進めまゐらせたりしが、家いつとなうひんぐうにせまりなにくれと乏しければ、此御中宿の御免たうばりて今はほていゆる、さる事ははいにもあらぬ恐まりなり、といへり。また太神宮をうつし奉り、また古社稻荷御神に正一位をすゝめ奉りし事ごもなご、つばらかに見えた

## ○神明宮

新墾、事ゆるなく成就たるごとき此神殿を作りて齋奉り、祭日四月十六日。齋主高橋忠助、

別當馬鞍邑ノ行正院。

○正一位石隆稻荷大明神

此御社古喜藏明神こまをし奉りて地主の御神たりしを、文化ノ年中しか御

位を奉りていよゝいたゞき祭れり、此願主忠助。祭日七月二十日、別當修驗馬倉村行正院。

○船戸神さへのがら

往復の道の傍にませり。

○八幡宮

一郷の本居つづなと稱奉れり。此神社は馬鞍邑に鎮坐まちすわて、馬鞍、醍醐、石成三村は此八幡宮を生

砂すなノ神とみやび奉りぬ。

## ○字 地

○二ツ股

桶清水

○千代子ちよこ

○あぶら川

○寺やしき

○四ツ屋

○大橋

○きつね淵

○小關

合也。

○枝郷關合村

むかしは家員廿軒  
今は七戸あり。

郡邑記に明澤とありしは○明澤境村なるべし。○くらの跡と人唱

ふ地、村より東に中りてあり。馬鞍の八幡の縁起に石成は米を貯へし處といへり、うべも其米庫なごの

跡にや。

## ○石 成 本 郷

○總家員三十九戸

○人員二百十八人

○馬十九疋。



水

石成呂鎮守

神明宮 石隆楠神

會殿 山承前

まうり

地とどろきとどろき

孤備やま古阿の

跡とどろき東北二丁斗

小古寺の跡なり且寺

醍醐邑より北に

今一釋林長泉寺是に

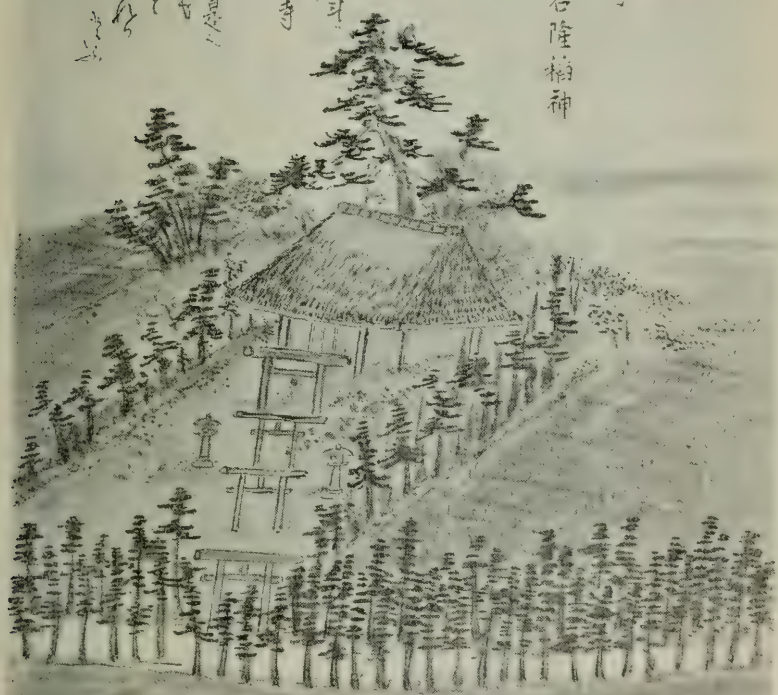
むしを保長やまの

なりしかを田白と

水

り

り



なゝしみつ

## ○馬鞍村 (三)

里長 與 治 兵 衛

○此馬鞍はいとく舊き邑にして、石成、醍醐も古この馬倉村より分邑たりし村といへり。享保郡邑記ニ云ク、馬鞍村、家員四十二軒。三嶋ト云處ニ正八幡ノ社アリ、眞體鞍ノ由、其故ヲ象、馬鞍村ト云。支郷○阿彌陀田村同三軒、先年ヨリ阿彌陀堂有リテ其唱象ル。○澤山村。馬鞍村一郷水上土地山有リ、運上銀三拾目指上同村薪山新野目山相濟。○二ツ家村。才ノ神山ト云山御札山也。山守家二軒右山ノ邊に引越、夫今ハ四軒ノ家員ト成ル。○三島村家十一軒。正八幡社有リ、醍醐村、石成村ノ産神ノ由也。○道中村同五十四軒。○金屋村同廿四軒。○白山田村同四軒。白山權現ノ社有リ、白山田ト唱也、云々と見えたり。某田某田とて神田七田とありける、その七田に水任七清水もある也。千谷ノ莊みしまの里とは、此まぐらのあたりをさしていふといへり。

○杵山嶺ノ嵐坤ノ卷に、馬鞍ノ故城は小野寺ノ臣馬鞍能登守、同右兵衛が邑食す。湯澤の住楯岡満茂は小埜寺義道に戰勝、處々支城河熊、植田、今泉、鍋倉、荒田日ノ五城を攻拔、滿茂三千の兵を率し岩崎、増田、古内の間に陣を取る。四月十九日馬鞍に推寄ル。此城大山にして後ハ山々深山に續き誠に絶城也、馬倉も防戰の支度をして扣へたり。寄手堀裏に付一同に乗り入むとす、とき城中より玉矢を飛し敵多くは討

れける。此鹽合城兵憤戦す、寄手大に敗れ岩崎まで崩れける。さて原田大膳明日一番に戦むと宵より拔掛しける。馬倉、城主は、敵は遠引にす、幸いに横手、城につぼみ一<sup>ト</sup>所に成て戦むと、女童を先へ落し十六騎殿して行けるに、拔掛の湯澤勢に出合大に戦ふ。馬倉兵十二騎討れ四騎引退くを追ひ来る。馬倉の士民弟太郎、長柄二三尺身ありけるを以て敵を三人まで突落す。山崎藤重郎、弟太郎を組打し首を捕る、大將右兵衛も小栗宮内に討取らる。滿茂兵を率て來れども、落城により伊良子將監を籠め置きけり。翌年植田、河熊、新田、目、鍋倉並八柏、城を攻拔、義道一族馬鞍、城を攻返むと大森、西馬音内等を始め諸將兵卒を率て攻めけるに、湯澤滿茂は敵に八方を遮られて出事あはすして城主伊良子氏大敗、近習十二人從へ岩崎の方へ走りける。半途にて田子内の臣礒野五右衛門、菅、孫八郎に討れける、先、城主關口馬鞍氏と能登守、再び居城と成る云々。正八幡、社あり云々。そも、當社の由來を尋るに、人皇五十一代平城天皇、御宇に當りて、出羽國雄勝郡切畑山に阿黑王といへる惡鬼栖て人民を惱ましけるとき、武將坂上田村將軍云々、小野良實案内して巡見し給ふ。仙谷莊、中に誠に無雙の靈地あり、將軍こゝに自一<sup>ツ</sup>一塊の土を封して壇を築て幣帛を捧て、伊豆、國、三嶋大明神を勸請ありて祈誓をなし給へば、神靈納受ありけむ惡鬼阿黑王を速に退治あり、是に依て神領として七田を寄附あり。かくて仙谷莊を三嶋、郷と唱ふ。其後治暦三年丁未四月十五日鄉民集りて此地に八幡宮の一社を建立す。それより二十餘年を経て寛治三己年清原武衡、家衡を追罰のため將軍義家朝臣當國へ下向あり、將軍處々の神社へ願文奉幣あり

て武衛、家衛を終に討亡し、同<sup>キ</sup>六年義家卿凱陣のとき當社八幡宮へ御馬の鞍を奉納あり、これに依てまた馬鞍村と名く。社中に大なる槻木あり、辨慶此<sup>レ</sup>に文字を書<sup>キ</sup>しといへども慥に知る人なし。其のち後醍醐天皇の御宇に當りて、五畿七道に勅命ありて諸社を一所にすべきよし、此事國々に至來せり。そのとき、當領主關口能登守信忠勅命にしたがひて神社を一處にす、即<sup>チ</sup>三嶋大明神、八幡大菩薩、廣田大明神是也。達兼庄を改めて醍醐と名附<sup>ク</sup>、また米穀を貯へ置く處を石成と名付く。是よりして馬鞍、醍醐、石成の三村志を合せて、三神を尊敬し祭祀する事怠りなしとかや。されば湯澤豊前守、鮭登典膳、柳田城を攻め拔き、大森城強<sup>ク</sup>して飽みぬ。其間に馬倉城を攻むと鮭登大將として、伊良子式部、同新藏を副て慶長五年十月二十三日に向ひける。城主關口能登守再住の城なれば衆<sup>ク</sup>一味して城を持、互に玉箭を飛し攻合也。伊良子春熊、同新藏、先に兄和州此城にて討る、誠敵也。今宵城の後へ廻<sup>リ</sup>て火を掛むと忍むで乾堀<sup>からほり</sup>に居<sup>リ</sup>ける。城方關口九助、卒を連て要心に廻<sup>リ</sup>けるが是を見て鐵炮を打也、鎗合なし、遂に春熊、新藏も討れける。城主城の後に火の手を上<sup>ク</sup>るを、寄手は伊良子氏火の手の功ならむと備を亂して乗り入らむとす、城兵巧みし事なれば三方より玉箭を打かけ、山の腰を廻<sup>リ</sup>して敵の後を遮り戦ひしかば、最上勢大に敗れて増田、岩崎まで引取る也。云々と見えたり。此いくさ物語は凡永慶軍記を募たるものにこそあらめ。關口氏は本姓<sup>もじ</sup>佐々木の統ながら、それとつばらかにはえ知らざるものか。馬倉能登守、同右衛門尉、同宗助、同縫殿なごいふ名ごもは永慶軍記に見えたり。また増田村の廣田<sup>ノ</sup>社の神



官高階氏の家系譜に、八代目なる高階左京介宣喬のりたかが二女摩倉兼春ノ室也、宣喬文明二年庚寅五月廿日卒とあり。馬倉統は代々能登守と云ひつるが、後醍醐帝の御代に、勅のまに／＼諸社を一地に遷集あつめまつりしは能登守信忠といへり。そは元亨、正中、嘉暦なごなどの世の人なるか、馬倉九郎兼春は文正、應仁たふしなどの世にして馬倉信忠の孫なごにも當れるか。其後胤ならむか、今、角間川村に關口統あるよしをいへり。また此馬鞍の麓邑に石田坂氏あり、永慶軍記卅三卷に鮭登典膳が郎徒高橋第五郎、同弟三郎一陣に乗り出す云々、城中に石田坂右衛門二郎とて鐵炮の上手ありしが、物の隙より魁くわいび寄り堀越に動と打ッ。無慙や弟五郎が胸板をうち貫れ馬より下に落にけり。弟三郎馬より飛下リ、兄を引立肩に掛けて飯らむとする處を、石田坂又鐵包にて打ければ、今度は兄弟ともにうち貫れ遂に其處にて死にけり云々と見ゆ。石田坂は麓村の北なる山陰松原山の内にして、龜井澤、兎澤うさなどいへる處大谷路おほやちにて、むかしは家居もありて石田坂右衛門二郎も住たり。又石田坂に勘兵衛、和右衛門とて聞えし者ありしが、その和右衛門といへるが後すゑはなし。勘兵衛が末葉は與右衛門といひて榎村に今住り。右衛門治郎が後は絶なすにや、與右衛門は右衛門二郎が末にはあらざななるよしをいへり。又榎村に丹に四郎左衛門といふ家あり、むかし最上ノ軍將子吉内藏之助深田に馬を乗入れて行なやむ處を、桶清水をけしづノ丹に今右衛門とて勇力英雄の男あり、子吉内藏之助を討たり。かくて丹今右衛門皂莢村さいいから今ハ關合村いへりにうつりすみぬ、其後ハ麓邑の丹四郎左衛門也けるよしをいへり。内藏之助が亡靈残りて、雨降りくらき夜は、桶清水のあたりに鬼火青々

と烘もるといへり。

### 〇三嶋村

○此村に三嶋ノ神を齋奉ればしか村の名におへり。世に三島といふ處多し、津ノ國、伊豆、伊豫などは名高し。伊豫ノ國ノ三嶋の、日本摠鎮守三嶋大明神の額は藤原佐理卿ノ筆也。三嶋ノ神は書紀に、伊弉諾斬ミ軻遇突智ニ爲三段、其一爲ニ大山祇神ニ云々と見え、また延喜式ニ、伊豆國賀茂ノ郡三嶋ノ社、攝津國嶋下ノ郡三嶋鴨ノ社、伊豫國越智郡大山積社此三社皆大山祇神也と見えたり。三嶋、八幡、廣田ノ御神、御會殿ニ三柱坐り。

○三嶋大明神 大同、弘仁のころ、大將軍從三位坂上大宿禰田村麿の、伊豆ノ三嶋をうつしまつれるみやしろにて、地主のおほみ神也。

○八幡宮 陸奥守兼鎮守府將軍源義家朝臣山城ノ國男山の御神をうつしまつりて、凱陣のとき、君が志津鞍を神殿に奉納給ふより、三島の郷を馬鞍とはいふと名もいへる。

○廣田太神宮 攝津國廣田俗號西宮祭ニ天照太神ニ也。日本紀、天照太神誨ニ神功皇后ニ曰、我之荒魂あらみたまレ可レ近ニ皇后、當居御心廣田國、卽以ニ山背根子之女葉山媛ニ令レ祭レ之云々と見ゆ。しか此三柱の御神を馬鞍、醍醐、石成三村の鎮守と尊まつれり。此三嶋の杜の東の隅なる處に古槻木三本生り、一本は義家朝臣の箭止の槻として御飯陣のおほむ復祭のとき、征矢やあまた射立て神に手祭給ふといひ、また一本の太空

樹槐つばき周圍十六尋あり、人此空坑うつほに雨宿りし、あるは圓居まきしてばくやうなごせしかど、安永二年癸巳十一月九日の夜、風なく自然この木僵たふれふしたり。其音雷鳴のごとなりつるよし、古老の物語にせり。其槐の枝もて造れる三斗搗もくめ米臼あり、雲文玉をなしてめづらし。

○七社、七田、七清水

○薬師佛なりふ社 舊田といふ二萬蒨の稻田也、清水は社の坤の方に在り。神社はさゝやかにして、千町ちよろの中路の傍に細木の雞栖立り。

○無量壽あみだにらみ如來にらみ社 あみだ田しんといふ八千蒨の稻田也。あみだ田しんの村中に清水あり、長太郎といふ家の傍に湧きづる泉なり。

○多門天たもん社 五千刈の稻田を佃つくり、毘沙門田也、たもの木あるをもてたもむでむといふと誤まちり。清水は社の巽の方に在り。

○地藏ぢざう社 道中だうちゆうカ村に在り、道中田だうちゆうでといふ五千刈の稻田也。此處の清水は村中カの泉といふ也。

○八股やまた大蛇おほへび社 八十九將田しんといふ四千刈斗の稻田あり。石の神室ほぐらあり、此南に清水あり。此泉むかしはいとく深くて大蛇すめれば、このあたりはさらに往來人ゆきかうなく、見る人は病かしこして恐おそみければ神にいのり、そが靈みたまを八面大荒神と鎮しづめ齋まつりけるみやところといへり。

○白山姫しらかべ社 しら山田しんといふ、此田二千刈斗を佃つくりといふ。むかしは家戸の村也し、其村跡小山の

中に清水いさゝか涌出る也。そのいにしへ源義家將軍金澤の柵凱陣のとき、かね澤より大鳥山今いふの八幡のあたり、大谷の山路を経て此菊理媛杜かりにかゝり、三嶋の三槻杜の御陣所に着給ふたるよしをいへり。されば、そこは其世の古道にして寒泉しみづもありける也。

○阿摩釋迦ノ社 あまのさくめなごのよしものらむかとおもへば、澤山ノ峯に藏王ノ社あり。神田をあまさか田ふとて千四百刈あり。清水は此山の麓に在り、よし野を募たるにや金峯山といふ。古今皇代圖説ニ云、宣化天皇三年和州金峯明神出現、世稱安閑天皇之靈也、延喜年中沙門日藏入此峯見藏王菩薩ぼんご見えたり。さりけるよしをもて、藏王宮ある山はいづこにまれみな金峯山とは稱ふ也。

○大山祇ノ社いと多しやまのかみ

○澤山やまの山ノ神

齋主 仁 介

○房山ふさの山ノ神

齋主 三郎左衛門其左衛門

○道祖神山まへのみねの山ノ神

齋主 傳右衛門

○同さへの神山の山ノ神

齋主 仁左衛門

○城廻りの山ノ神

齋主 仁兵衛

○松原山の山ノ神

齋主 喜惣右衛門

○兎澤うさの山ノ神

齋主 與右衛門山守一戸

○兎澤うさの山ノ神

齋主 作右衛門

○兎澤の中道の山ノ神

齋主 四郎左衛門

○平林山の山ノ神

齋主 市郎兵衛。

○稻荷明神社

○長者森正一位稻荷大明神ノ社

齋主 森田氏元朔



○除第のきやしき 稻荷正一位大明神

齋主 柿崎氏與治兵衛

その外にも大山祇社また稻荷ノ社多かれど、聞つるのみを擧て記し奉る也。また三嶋の神の縁起にて一、まきの書ありて、卷末に參議正三位濟繼とあり、此卿の御作にや。その意凡杵山みねの嵐にや、似て、坂上田村將軍と藤原俊仁將軍とを御一人の如に書なして、そのすぢ／＼のたがふこゝろもいさ／＼多かれば、そは省て此處に記すのせ。三島の杜に齋奉る三柱の外に稻荷の小祠あり、また三社の御神こゝにいまそかりける杜ながら、人並八幡宮とのみ稱へ奉るは、いにしへ此杜に八幡太郎義家將軍の御陣營の有りつるゆゑをもて、しか今し世かけて、さはまをしけるにこそあらめ。此神事は三社の御神を並て六月十五日、八月十五日に祭奉る也。別當行正院也。

○三嶋村家員享保のむかしは十一軒、今は十五戸ぞありける。

○道 中 村

○此邑家員古五十四軒、今廿戸あり。東は三島、西は醍醐村に中り。この村なる道中清水の事は、前に七清水の件くだりに委曲に録したる也。

○麓 村

○此村號はごころ／＼に多し、家員四十二軒、今五十戸あり。いにしへ城廓こころのありつる時世は、此邊りは外廓ぐわくなごやありけむかし。山陰やまかげは横手山内の武道村ぶどう、西は三嶋、道中、南は阿彌陀田あみた、大谷村也。此

邑の舊家の事どもは處々に云ひし也。今此邑をさして馬鞍このみこどもはらいひける、伊勢人の山田をさしてのみいせといひ、甲斐のくにうご鶴郡を郡といひ郡内を云、甲府を甲州といへるごとく、專要とする處を全といふ也。

### ○澤　山　村

○澤山と唱ふ、家七軒あり。郡邑記に馬鞍一郷の水上山云々とあり。往古は家員卅戸ありし處、今は古城山の下になる村也。亂し世に最上の寄手弟五郎弟三郎兄弟兩人を、石田坂右衛門次郎鐵包もて堀越にうちたりしといふ、その外堀も今は田となれり。古老の物語に、黃金坡、烏帽子長峯、十王澤などいふ處あり、十王堂などもありしにや。家三十五戸ありしときは彌兵衛、仁介などはいと古者にて、また彌重郎とてあやしき男あり。親なる者の代まで一二代は阿彌陀田に正保のころまでありし、今も彌十郎境内とてあみだでむに残りぬ。この彌重郎に万とて一女ありしが、亂心となりて二十斗にしてくるひありしかば、彌十郎まんとて人見あざみたり、いまだ三十にならで死たり。彌重郎が妻は武道の山里のあたりより來る婦にて、ある夜更て女房の母大病して、今は死ぬべう身なれば娘に一目會ひて、それをあの世のおもひ出にせんと申すといへばむかひに來つる也とて、門うちたゞけは女房うちおどろき、さるものも取りあへず出行んといへば彌十郎、夜明て行べし、われもともに送りいなむといへど、女房はしきりに心あはたしく、むねうちわきて出行ぬ。彌重郎も、明ればこく起て、ものもくは

で妻が親の家に至れど、母は露病ありげも見えず、なに事ありてかく朝さくは來られしぞといふ。しかくのよしといへば母を始め、有る人驚きて妻が行方をもとむれども、誰知れりといふ人もなく目を經ほごに、その女の黒髪金山といふ處の本草に纏ひてありつるよし。そは、なにのしわざといふことをしらすといへり。またある夜に人來りて、彌十郎居たるか、女房が有栖に連れ去む、いざといへば彌重郎、かねてかねよき利鎌を磨たてかくし持て、にくき奴かなと飛びければその男は、かきけちてうせぬといふ。彌重郎は闇霤を隨意雨を落る妙術あり、いつも己前なる瀧に登りて神詠を唱へ行へば、雨零らざる事なし。彌重郎恒に人に話て云、己つかふ蛸龍は無尾水龍也といへり。ある人、もの蒔たる畑の枯うせなむ、一口雨降らせたとはいへば蛸龍着て蘭笠かゝふり、瀧にかい登りてものうちとなへ、空にむかひに龍よ〜と叫べば空かきくもりて、其たのみこしつる人の田畠のみ雨ふれり。ある年の夏大に旱天して人うれへけるとき、谷地八ヶ村の人舉りて澤山の彌十郎が家に來て、酒さかなもて彌重郎に雨乞してたうびてとせちに頼めば、さらばとて蓑笠によそひたち御嶽に登れば、山伏あまた螺吹たて獨鈷花皿をそなへ、雨頭巾に篠掛の袖をまくり、手にいらたかをおしもみて香をくゆらせ雨乞いのりせりけるに、彌十郎も蹲りけるを山伏うち見て、彌重郎はなににのぼり來るぞ、彌十郎、われは谷地八ヶ村の人々にたのまれ雨乞に來さふらふ也といへば、山伏、雨はいつ〜ふらするぞ、そなたはいつ〜零せけるぞ、山伏、此夕ぐれは降らむといふ。能く祈り給へ、われは唯今降らせんといへば、

まさしき事かと嘲弄<sup>あざわ</sup>ふ。さらば彌十郎は雨ふらせんと、もの唱へおこなひして、空にむかひて龍よ／＼と叫ぶとき山伏一度に、はこ手をうちて笑ふ事がぎりなし。實にやあらむ、しばしのほごに空かきくも雷鳴<sup>なり</sup>ひらめきて雨零<sup>ふ</sup>らんとすれば、あなたへきれよ、こなたにはあらじ龍よ／＼とよばふほごに晴わたりて、かの谷地の八邑には、車軸を流して雨一日二日まりふりにふりて晴ぬといへり。かくて彌重郎谷地八ヶ村に行て、いかにふりしぞといへば、きのふけふの今までふりて、水は田<sup>からめ</sup>面にみち／＼たり。いかに御謝申とも飽<sup>き</sup>たらねど、先<sup>ッ</sup>是うけ給へど、錢一貫文に紺布<sup>からめ</sup>一反をくれたり。是もて飯り行道に女の門に立て、彌重郎翁<sup>おぢ</sup>はよき紺布を持行ける、前垂によけむごうらやむを、ほしくはごらすべしとて投やり、一貫の錢のみ持て十錢廿錢つゝ道々まきちらして童にひろはせ、家には手を空<sup>く</sup>して飯り來て湯を鍋にかへらかして、そのたぎり湯に粟穂こき入て、それを喰ひける外にはものもくはず、あやしき翁なりしといひつたふ。彌重郎が祖は越後國の浮浪人也。此山賤彌重郎、享保二十年乙卯冬十月死、そのとし八十餘歳にてありつるよし、黃龍寺に葬る、法名西雲一水禪定門といふ。彌重郎女子万子早世して後なしといへり。

○御嶽と稱へて藏王宮あり、關口能登守信忠建立。祭日四月八日、別當行正院。

### ○阿彌陀田村

○此村、東に山方村、西に石成村、南に關台<sup>堰合にして古村あり</sup>あり。家員本、三戸今十二戸あり、阿彌陀如來



堂あり、さるゆるをもて村名とせり。あみだ清水は、長太郎といふ家の砌に涌て南に流る泉をいふ。掃部林といふ山、長者といふ岡などの麓なる村也。森田掃部はむかしは弟太郎か栖し螺吹館かみふたてのあなた、谷一隔ひきつて空堀の邊に隣ちかく住しといふ。その乾堀かみほりには伊良子兄弟など忍び込て居たりけるを、關口九介がうちとりたる處也。掃部が末森田善右衛門とて此邑に在り、此事、鎌鋒弓の圖ある處にもしか記したり。里長柿崎與治兵衛此村に栖家也。柿崎氏は本、信濃ノ國の浮浪人にして清和源氏の流也、廿二代景家柿崎和泉守、天正五年十一月七日越後國にて、謙信の討手を受けてうち死せり。其二男景範、隼人といふ。越後國四日市場に於て簀上して、同國下山田といふ處にて慶長五年討死す。法名阿彌陀田居士、其子囚獄信州八代に住居す。○上祖景作、柿崎伊豆といふ。慶長五年出羽ノ國平鹿ノ郡馬鞍村に來ル、身ノ尺六尺、勇力人に勝まさたり、寛永十二年乙亥正月十六日故、法名越出羽住信士。○二代景昌さの、彌兵衛と云ひ藤右衛門といふ。元祿十三年庚辰十月朔日故、法名道安禪定門。一男景七、藤兵衛といふ、龜田村ニ分家。二女采女室也。○三代景中、勘太郎といひ與治兵衛といふ、林左衛門三男也。女子メ與治兵衛室也。享保廿年乙卯三月十八日故。○四代景三、長吉といひ與次兵衛といふ、實采女ノ長子也。寶曆五年乙亥八月十七日故、梅天法隨信士。○五代景吉、長之助と云ひ與治兵衛といふ。安永九年庚子十二月十六日故、主岳了峯信士。男子與市、寶曆六年丙子秋分家、女子二井田村市助室。○六代景屋いへ、萬太郎といひ與次兵衛といふ。文化八年末のとしより文政二年卯ノ五月まで村肝煎役つとむ。長女利右衛門室、二男五兵

衛といひ與左衛門といふ、天明元年丑ノ五月分家。○七代景塘、長助といひ與治右衛門といふ、肝煎役。文政二年卯五月家督たり。次男長兵衛、善八養子となる、三女八左衛門室、四男藏松。○八代景堤、勘兵衛といふ、景塘ノ長男也。次男を仁兵衛といへり。柿崎景塘新墾、池を作りて、一村新々に出て山方村といふ。實に保長功にこそあらめ。

○阿彌陀佛ノ社　村の西の方に在り、祭日九月十五日。此あみだぶちはいにしへよりありて村をあみだでむといへるがゆゑに、柿崎氏の上祖景作、信濃ノ國芋井ノ郷の善光寺のあみだほとけを、こゝに摹し齋けむか、定かならず。いつも除夜、柿崎氏此殿に籠りて炬火せしかど、今は其家の長男除夜まゐりして、雪の上に庭燎灼のみといへり。

### ○金屋村

○金屋、此東は往來驛路にて西は上樋ノ口村。享保日記に家員廿四軒、今廿五戸ありて上醍醐を隣村とせり。

○皂莢子稻荷明神　齋主清重郎。

○三寶荒神社　祭日四月十七日。上醍醐邑にも三寶荒神の社ありて、正月十五日夕ぐれ行ころ、わかきは十六歳を初めとし老人は六十二をかざりとして、そが手ごとに松明をうちふりて金屋ノ村の人は醍醐村の荒神ノ社の前に群れ行て、醍醐焼れノと異口同音に叫び續松をふりぬ。醍醐邑よりもおなじさ

まに松明<sup>ついまう</sup>ふりて金屋の荒神の前に來て、金屋やけれ／＼と聲のかぎり叫<sup>な</sup>び、はて／＼は打合組合あらがひせしかど、今しとなりては老も出<sup>いで</sup>まじろはず、わらはべのむれ行<sup>き</sup>て醍醐<sup>だいご</sup>やけれ、かなや焼<sup>やけ</sup>れて村々入違ひて、荒神のひろ前に火を高う焚て、たがひに云ひのゝしるのみ也。是に云ひ負けたる方は稻田<sup>よからず</sup>不佃と云ひて年の吉例にぞしける。さること云はねど、其さま三河の瀧の藥師の鬼祭にや、似たり。

### ○山 方 村

○山方村はいと／＼近き世に出來つる村にて九戸あれど、なほとし／＼に家ども作添<sup>たて</sup>ふこなもいへる。こは里長柿崎與治兵衛景塘<sup>かげき</sup>、人あまたを足<sup>うかが</sup>して湖水<sup>つゝみ</sup>をところ／＼に披き、水田の新墾して百斛餘ぞ耕<sup>つくり</sup>ける。そのころの縣令を山方喜兵衛と聞えたりしかば、此主の勳功を行末の世までも人も知れり、忘れぬ料きて山方村とは名付たりしといへり。此柿崎氏かひらきたりし大池は道祖神<sup>さへのかみやま</sup>山の下にある也。此麓に承應二年の頃にや柿崎九郎左衛門、三浦惣右衛門とてあり、そは山守をかねて住たりし。これを二ツ屋村と云ひしが、後には甚助、九右衛門とてまた兩人うつり住て、二ツ屋も四ツ屋と成りて、しばしはそこに在りて、享保のころならむ、そはみな阿彌陀田村に引移り住めれば二ツ屋村は廢<sup>くた</sup>て、其跡は今大池となれば二ツ屋池<sup>つゝみ</sup>となれり。佐太郎といふもの此池にて水虎<sup>みづとら</sup>に捕れて死たる事あり、その靈魂を祭りて岐<sup>ちまた</sup>に石碑を建たり。其石ノ面に○祀祭と彫<sup>う</sup>て、その下に九右衛門、惣左衛門、九郎左衛門、亥三郎と刻て、また向<sup>むか</sup>右の方に増田、田子内道、左<sup>ひだり</sup>武道、平澤道、北<sup>きた</sup>方に新堤取立與治兵衛、庄左衛門、門兵衛、勘

助、喜七と彫り、また人足以五千餘人築立しるし、文化十一年十月六日とぞ刻たる。此池、むかしはいと淺くて七八間斗四方、草生ひ澤地の如なりしをひらき築て、今は水いと／＼廣く水心深くて、鯽鮒なども大やかなるがすみりといふ。此亘七十間四方ばかりに堤築しといへり。

### ○字 處 古 名

○藤蔓町 とうづからまち ○谷地小屋 やちのこむら ○内野日 うちのひ ○町後 まちご 是麓村の西に在りいづれも城ありしむかしの名なるべし。○貝館山 かいがん は陣螺吹たる處にて、澤山の奥にて弟太郎が住みし處也。○鳥籠山 とりかご は、あみだでむのひむがしの方に在り、そは鯨波山にて、むかし寄手の関上し處といへり。さりとともりこは、こさのこゑを云ひ謬傳ふこなもいへる。

### ○馬鞍の軍ものがたり

○永慶軍記廿七ノ卷山北馬倉落城といふくだりに、「小野寺遠江守義道、湯澤の城を反り攻めにすといへども豊前守滿茂に戦ひ負て人數悉く討れ、其後は討て出むこもせず一向横手の本城にのみ楯籠る。剩、一門郎黨共彌勝に乗り、ひたすら小野寺か郎等どもの要害を攻落し事隙もなし。湯澤近邊には川熊、植田、今泉、荒田ノ日、鍋倉の五城滿茂に落れたり。此次に馬倉城を攻んと、三千餘人を率し岩崎、古内、増田の間に陣を取て、翌日四月十九日馬倉にぞ寄にける。扱も此城、後は深山に維き大木透間も無く生ひ茂て一片の白雲に峰を埋み、左右の谷深くして萬仞の青岩路を遮る。攀折なる坂を揚る事一里餘、本丸



より下三方に數百軒の役所を作り並べ處々に櫓を上<sup>ッ</sup>、麓に大堀を掘り矢羅井、虎落丈夫にして大勢籠るごうち見えて、色々の旗、のぼり、吹貫數十本、木々の梢に翻て翩反たる形勢雲か花かご疑る。寄手は爰彼より馳加て五千餘人、三方を取圍みて関を作り弓、鐵包を放かくれども、城中謐りかへりて音もせず。寄手、勝に乗て三方の堀際まで我もくご攻め寄せたり。馬倉能登守、同右兵衛尉些ごも擬議せず、其事柄勇銳たる兵にて一戰に手次の程を見せむと諸卒に下知し、櫓の上、堀の狭間より弓、鐵包を散々に打出せば寄手或は討れ或は手負、怵へ兼て半町斗り引退く。城中の兵時分よしごや思ひけむ、大手の城戸押開き三百人まつしくらに蒐出る。寄手も兼て期したる事なれば、態陣を二ツに分テ引包み討取らむとしたりしが、城の勢兵究竟の驅武者にて、是を事ごもせず眞一文字に駈破る、穆公の八疋も是には爭増るべき。中にも馬倉惣介、同縫殿丞杯云兵共日來聞えし剛の者にて、身命を塵芥よりも輕<sup>シ</sup>じ弓鐵炮を不恐、敵に向て勇むこと忿<sup>シ</sup>獅子もかくやらん。馬は名譽の一物也、縦横無礙に衝て廻る。日來は鬼神ご聞えし最上勢防ぎ兼て見えければ、寄手の大將豊前守、伊良子大和守、足輕大將熊澤隼人、同山家因幡、須藤、笹森馬を立直し、續け者ごも、みな引な、止まれご下知しけれごも、一陣破れて殘黨不全、大勢引立られ遂に返し不合、岩崎まで引退く。暫時の軍に究竟の與力三十餘騎討れ、其外足輕、歩者等數々追打にせられけり。原田大膳大將の前に出て、抑今日の軍に味方敗軍仕る事、敵僅の城に小勢籠るご見侮て是程まで追ちられ候。小敵を欺くべからずごは、人毎に口に唱へて心に知らざる故に候、幾度

攻候共今日如くに存候もの、味方の勝事思ひよらず候ござ申ける。満茂聞て、御邊が云如く、諸勢下知に背ちやにやも敵を侮りし故也、むかし楠千ちよやにや劔破城に楯こもりし時、寄手の大勢あぐみて數日を送りし事、小勢なればとて侮ルべからず。今迎楠ほどの武勇にあるまじきこともおもはれず、此上は早ハヤ事有へからずと遙々評定ぞせられける。原田大膳我陣に飯り郎等共を近づけ、昨日馬倉に追散されし事口惜く思ひければ、宵より密に打出抜かけをせんと思ふぞ、其用意せよと下知すれば、相心得候と忍びて出立兵三十餘騎、靜に岩崎を出にけり。其外最上勢の中にも、今度の敗軍我一分の恥辱このみ思ふ者共さし集て内談しけるは、明日は味方の大勢、先度の耻を雪んと命を捨て攻るならば、打込の軍にて誰が手柄ともなく落城すべし、倡や宵より馬倉に相詰め、ぬけがけの先陣をばげまむといふ儘に、最上旗本の兵に里見作次郎、小栗宮内、山崎藤重郎、鮭登、與力に高橋武太、助、同外記、同郎黨に川田三右衛門尉を先として陣を竊に出て馬倉の方に趣ツは、先に馬の足音聞えけり。高橋外記先陣に打けるが大音にて、それに大勢の足音聞え候は岩崎にてなきかと問ふ。大膳馬を止て、何れもは一ノ谷にて熊谷、平山が先陣せし事を羨敷思ひ玉ふかと云へば、御邊の心底こそ左は有べけれと云ひつゝ、それより打列て馬を早めけり。扱も馬倉は、昨日の軍不慮に勝利して敵を拂ふといへども、俄に近邊の土民まで大勢こもりたれば兵糧も乏しく、敵は大勢也、遂に攻めおこされんは必定也。是にて討死せんよりは一先横手の本城につばみて此城を敵に渡し、重て持返さんと思案して、宵より女童を大谷の方へぞ落しける。幸敵遠引して北一方

の道開けば、雜兵下部も我先にご落行けり。尻狩は大將馬倉右兵衛尉、同宗介、熊谷左衛門、工藤金助、佐原九郎彼是十六騎、靜に馬を歩せ行。拔がけの者ども是を見て、すはや敵こそ落れ遁さじと、六十餘騎追かけたり。十六騎の者ども先へ落し者共を一足も延さんご引殿し事なれば、敵を支むため一度に馬を引返し轡を並て駈向ふ。然も今宵四月廿日、短夜も更て月隈なく、武の具の色もあざやかに見えたり。互に入亂れ相戰ふ。深手負て倒るもあり、當座に討れ死もあり。されども多勢に少勢にて、十六騎の者ども十二騎は討れて、大將共に四騎北をさして落行を、猶討ごめむとて追かけたり。爰に馬倉の百性に弟太郎だいたろといふ者あり、黒皮の具足を着て、三尺餘りの長柄に刀みも三尺有けるを打振て大將の馬の脇に立しが、取て返し、追來る敵を三人まで切て落す。里見作二郎、惡ひ奴と云儘に鎧取りのべ突てかゝる、弟太郎心得たりと飛入て打けるに里見弓手の肘を打落さる。山崎藤十郎透さず打てかゝる、弟太郎、長柄中よりほきと折ければ飛入て、むす組む、山崎たまらず下に成る。されども早業すぐれければ下より刀をぬいて弟太郎が脇の下を指し通し、はね返し、其儘首を搔きにける。馬倉四騎の兵も數ヶ處の手負ぬれば、小栗宮内討取けり。漸夜も明けければ豊前守滿茂、味方の軍兵拔がけし事を聞き、三千餘人を率し馬倉へぞ寄にける。されども落城の後なれば、其甲斐もなく城中へ乗うつり、伊良子將監をこめ置きけり。拔がけの者共討取たる首實檢し、勝時を作り湯澤へ飯陣して、軍の次第飛脚を以て最上殿へ注進せられけり。」と見え、また「山崎藤十郎、小栗宮内高名公事ノ事」といふ條りに、「今度馬倉落に付



諸勢最上に歸陣の後、山形、旗本小栗宮内と、同山崎藤十郎高名公事に及びし事あり。其子細は、山崎藤重郎は弟太郎といふ百姓の首を取る、小栗宮内は馬倉、城主右兵衛尉が首を捕、其外高名せしものあまたあり。義光、委細目付の者の披露を聞玉ひて感狀、褒美さりとに賜、中にも感狀の表勝れしは小栗宮内と山崎藤重郎也、何れも甲乙なくぞ見えにける。小栗は大將の首捕し故最也、山崎は土民の首取りしに、何事にか感狀の面、小栗に劣らずといふ事有や、是主君の御誤りたるべしと小栗最負の者ども評判す。山崎方のものごもは、小栗、大將の首を取といへども數ヶ處、手負、疲れたるを討たり、又弟太郎は大力の曲者にて味方を四人まで打取、其上も味方に討てかゝるを組討にしたるは山崎こそ増りたれと云つゝ、遂に公事にぞ成りにける。義光、兩方の口上を聞たまひて小栗、山崎に對決をせさせんと召出さる。因、玆山形の一門某、最上に名を得し武功の者ども、武者大將、足輕大將等の諸役人、爰を晴とこの座に出、左右に列す云々。御邊と我云合せし通り、心にかけて大將討捕たまふ事さもあるべし。さりながら敢て御邊一人の高名とは不存、馬倉に鎧を合せし者は高橋武太助、川田三右衛門、某等也。中にも某は馬倉が左の腕を鎧付たり、武太介は馬を突、川田は手負候。如此十六騎にて味方五十騎をわり立、駆破戦ひ候へば皆々手負はぬ者もなく、其上大將は五ヶ處手負、馬も五ヶ所疵有て倒し處を、御邊組で首を取候事諸士存じたる事也。同我討處の弟太郎と申百姓は、三尺餘の太刀に柄も三尺餘りなるを持て味方の中へ切入事數度也、きやつに向ひし者鎧を打落され疵を蒙る者十二人、討れしものは岩崎が足



輕二人、川田が若黨一人、次に里見作次郎討死す。彼<sub>レ</sub>を其儘置ては味方そこばくうたるべし、且は里見が敵なればと思ふが故、大將にはあらざれども組み討にせし也。是御邊が高名に爭劣り候はむやと云。未對決終に義光兩方をおし静め小栗宮内に對して、汝大將を討むと心がけし武功は神妙なれども、手柄は山崎に劣れり。汝大將の首と土民の首と同事たるべからずと云ふこそ不届なれ、斯るためをおもふが故、兼て目付の者に誓紙を書せ、其上隱密の目附を以て具<sub>サ</sub>に聞<sub>キ</sub>届<sub>ケ</sub>たり。たとひ大將の首たりとも、味方の者に戦ひ手負倒れたるを討取るは手柄薄し、又百姓の首たりとも諸人に勝れたる曲者を討取るは手柄厚し。武功は敵の貴賤にもよるべし、但し敵の剛臆にもよるべし。昔田原藤太は百足を射殺<sub>ス</sub>といへり、頼政は鶴と云化鳥を射る、新田四郎忠綱は猪鹿<sub>みしか</sub>を乗殺<sub>ス</sub>す、是みな畜類なるべし。されども人倫を討たるに劣るべからず、貴人をうち取る斗り高名といふにあらず、猛く勇るを討事、百姓に不<sub>レ</sub>限、畜類といふとも大なる手柄也。山崎が組討にせし弟太郎畜類にもせよかし、人の手に餘りたる曲者を討取る事拔群の高名也。汝が討處の大將は、數ヶ處手負つかれし上へなれば武功遂に薄し、然<sub>レ</sub>ども大將の首なるが故に褒美山崎同前に得させたり。然るに汝山崎が手柄に似べからずといふ事、偏に義光を旨に齊<sub>ツ</sub>あなごる處也、則首を刎<sub>レ</sub>べき者なれども度々の軍に忠功ありしものなれば、死罪は免して所領を召放べしとぞ宣<sub>ス</sub>ける。義光諸役人に對して、今度馬倉合戦に若山崎敵の目利して、弟太郎は土民也強敵也、彼に駈合討死すとも土民に討る事不覺也、能敵に逢てこそ死後までの高名也とて思案に及ば、弟太郎を討

漏すべし。敵に一人剛の者あれば味方百千の備へ破られ、味方に強者のあれば敵を破る、敗軍の時は一人弱兵につれて千万の強兵むなく成事、御邊等存の前也。穀梁傳に、善陣者に不戰善戰者は不死といへり、山崎敵の目利をせず身を捨て土民弟太郎と組し故、下になるこいへども首を取る事抜群の手柄也。

準之思ふに、里見作二郎が討死高名山崎同前たりと宣ひけり。されば最上家の掟に、改て敵の貴賤剛臆に隨て高名の品々を書加へられし也。毋も小栗無全高名公事に牢人となり、前非を悔山形の光明寺に入て訴詔に及しかば、本領を返し賜りけり。と見えたり。永慶軍記冊三卷、「於馬倉最上勢敗北事」といふくたりに、湯澤豊前守、鯉登典膳今日柳田城事故なく攻落すといへども、大森城強して、味方大勢是を攻飽對陣す。其勢を配分して吉田を攻むとするに、境の軍に打負ぬれば小城一箇所を攻むにも容易ならず、明日は深堀を攻落むと思へども、西馬音内、山田、松岡の者ども後攻せば殆難儀たるべし。若又遠所へ働かば其隙を近所の敵ども伺ふべしと僉議評定して、豊前守は湯澤に在りて、鯉登典膳、伊良子式部少輔、同新藏三百餘騎を以て、十月廿三日馬倉にぞ向ひける。増田にも昨夜飛脚を以て牒合せければ、長瀬内膳進光陰八十騎にて馳加る。惣勢五千餘人馬倉表に打臨み、三方より城を卷て関を作り攻め近く。城主關口能登守、先年此城を落され右兵衛尉討死せし事を口惜く思ひ、漸々にして攻返し再び安堵せし事なれば、今此城を敵に渡しては末代までの家の疵なるべし、敵強くは一人も残らず討死せよ、生ては誰に面を合ふべしと諸卒を勇むれば、一門關口備中、同九助、同左京、其外嶋森左馬介、同山、日

圖書、同伊豆、一昨日横手より加勢として來り籠城しけるが、此由を聞よりも、最もかくこそ有べけれど我々が持口堅固にぞ防<sub>キ</sub>ける。最上勢一旦に攻入むと命も惜<sub>マ</sub>ず見えれども、元來地の利全<sub>キ</sub>城にて柵鹿垣密く結び、堀峪石巖の切所也。僅に通路容易<sub>キ</sub>處あれば、路を堀切穿を構へて橋を迦し、溝を深し櫓をしげくかき並べ、鐵包上手、弓の精兵を勝りて遠き敵を射て落せば、寄手は手負討るれども、城方は堅固にして攻め入るべきやうもなし。爰に蛙登典膳が郎黨高橋弟五郎、同弟三郎兄弟一陣に乘出、彼等が鐵包大なる玉にはあらず、弓は彌以我々が武具のうらかくべしとも思はれず、近々と打寄て惡口せしに、氣短なる奴原突て出<sub>ズ</sub>と云ふ事有べからず。其時突逃して敵を帶き出し、味方に心地よく軍せさせさふらはむと云儘に、堀涯近く押<sub>シ</sub>つめ大音上て、城内の者共は弓鐵包の腰ぬけ業にて日を暮<sub>ス</sub>すは、兼て最上の者の手並を見て臆病神の離れざるにや。迺も此城今日限ならむに、柵の外によろばひ出よ、誰には我々兄弟が手にかけて一々首を打落し、此世の隙をあけて取らせむとさまぐ惡口しけれども、日來に替て討て出むともせず、問答する者もなし。其上城中に石田坂右衛門二郎とて鐵包の上手ありしが、物の隙より颯び寄て堀越に動<sub>ツ</sub>と打<sub>ツ</sub>。無慙やな第五郎胸板を打貫れ、馬より下に落にけり。弟三郎馬より飛下り兄を引立肩に掛<sub>ケ</sub>飯らむとする處を、石田坂又鐵包にて打ければ、今度は兄弟共に打貫れ遂にそこにて死にけり。かくのごとく、弓鐵包の軍のみにて其日の軍は果にけり。されども伊良子式部少輔春熊、同新藏春親、手の者を近付け、去々年兄和州此城にて云ふ甲斐なく討れぬれば、此城主こそ敵な



れ。それに就て此城の案内我々より外に味方に知者有るべからず、倡や忍び入て火をかけむ、其時味方一同に攻め入らば今宵落城疑ひなしといへば郎等ども、最に候と打諾く。さらば急ぎ忍び路に廻らむと味方に牒合せ、究竟の若者十一人を勝つて遙の山路に經めぐれば、いまだ時は申の下刻也。其路松柏透間なく枝をたれて、蔦かづら、小笹交りの中を七八町分行て、乾堀の有りける柵際に打臨みけり。爰にして時をうつし宵の程に火をかけむと私語きて、藥研のやうなる乾堀の底にぞ忍び居ける處に、城の大將能登守が諸父兄弟に、關口九助といふ物に馴たる兵あり。今日の寄手の中に伊良子兄弟こそ此城の案内能知りつる者なれ、もし後の山より忍び入る事もやあらむと兼て番の者をば置たれども、難所を頼、要心怠る事有るべし。其まで諸木間なければ一二反を隔ては見付る事有べからずと思ひつゝ、用心のためには足輕廿餘人に鐵包を持せ敵の忍び入べきと思ふ處に心を付て打廻りしが、此由を屹と見澄し足輕共に目加せすれば、打諾き鐵包の錆先<sup>キ</sup>汰へて打にける。敵の中にも大將春熊目早<sup>キ</sup>男にて、鐵包にて打るゝな、犬死すなと太刀ぬき側め乾堀よりかけ上らむとしけれども、只中三ヶ處まで打貫れ其儘かしこにて倒れけり。されども春親を始め玉に逃れし者ども三人かけ上て、一所に太刀を抜側め獅奮迅の勢ひ唯一筋に切てかゝる。中にも新藏をば、關口九助持たる鎧にて丁と突、郎等二人鎧脇すれば新藏そこにて討れにけり。残る二人の者どもも足輕共に取籠られ、同場にて討れにけり。九助は討取首數こり持せ城中に入れば、能登守喜ぶ事限りなし。此上は敵を謀て還て勝利を得む事尤安しと、俄に人數五手



に分々、幸に大手西の堀涯に柴を積置しに火をかけ、遁すな餘すな、何くぞ彼ぞと鬨を作り騒ぎ敢り。寄手是を見て、伊良子こそ仕あふせたれ、城中に火の手上るぞ、攻入と云ふ儘に五千餘人の備へ散亂して、我一番乗をせむと駆近つく。馬倉勢元來たくみし事なれば三方より鐵包をうちかけ、左右の山の腰を廻りて敵の後を遮むと鬨を作り押寄れば、最上勢按に相違して、横手より後攻來ると覺えたり、後を遮るな、退て戦むと崩れ立て逃る者過半ありと見えしかば、關口能登守、同備中、同左京五百餘人の猛卒、志を同して關を開き瞳と出れば、寄手の先陣たばかられしぞ者ごも、忽ち東西辟易して追崩さる。されば長瀨内膳も佐々木典膳も日來鬼神のやうに云れしが、今日の合戦大に爲損じ増田、岩崎までぞ引にける。是長瀨、蛙登が不覺なりと、諸卒嘲らすと云ふ事なし。云々見えたり。眞澄考るに、關口能登守某再び本城に居住して慶長五年より六年まで在りしが、七年御遷邦のとき處々に身を寄せ、今角間川に關口氏あり。そは馬鞍家、後胤と云ひ、また雄勝、郡馬場邑椿臺村の山郷に入りて、關口統また其家ノ士あまた田を佃り畑を墾耕して、其後ごもなほあり。正月式にはさまざまの吉例ありて、寄るといふ事を禁て寄せ豆腐てふものすら食ざるならはしといへり。

### ○修驗者行正院歷世

○貴峯山行正院ノ鼻祖形藏院明快ハ俗姓神原形部某といひて、陸奥國ノ糠ノ部郡水澤の人也。永祿三庚申年出羽ノ國平鹿ノ郡馬鞍ノ郷に來て、小野寺遠江守義道公の家關口能登守殿藏王權現の社建立ありしとき、

道中寒泉

道中村ノ北地藏堂の前  
 在ノ小川ノ巨木蔭下  
 七科新井ト仰ルト云  
 清水を湧出スル泉也  
 うみみし其一泉也

世に永セメ社と初田  
 八雲龍宮と云

上ノ下ノ水  
 五ノ澤



三嶋神社

三嶋邑に在り

地元の神として

八咫太神宮と云田示

地三柱の神七會焉

馬場石成

三村の鎮守の

神

義家將軍の止

櫓に在りてあり

松の甘大徳の倒りて

くもの影を土割りと云

近きところのありてあり

今に傳へあることあり

そのゆゑに六月五日の花見を

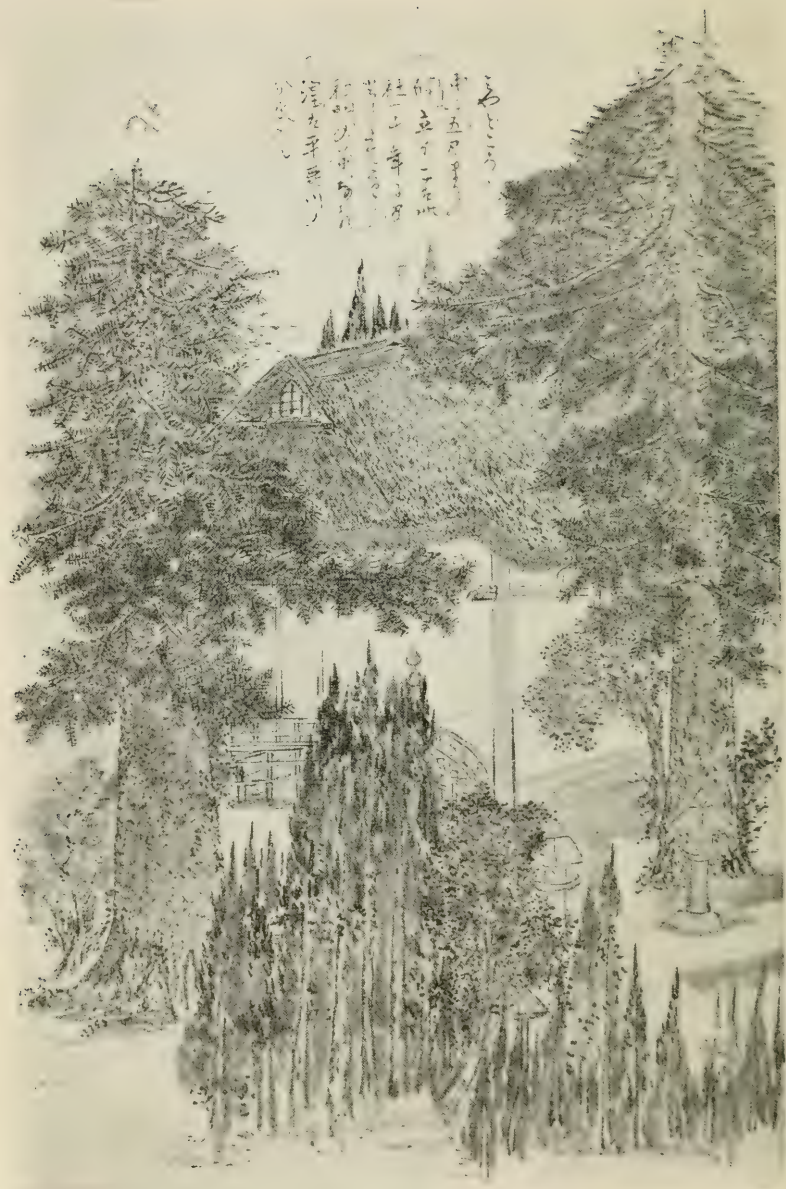
を擧げざるに在りてあり

ふたつ桐の十道よりあり





雪出羽道  
 平鹿郡  
 十一  
 雪出羽道  
 平鹿郡  
 十一  
 雪出羽道  
 平鹿郡  
 十一





秋田

安美陀社

河原田村

長者木林の稲荷社

麻生主木林 時良

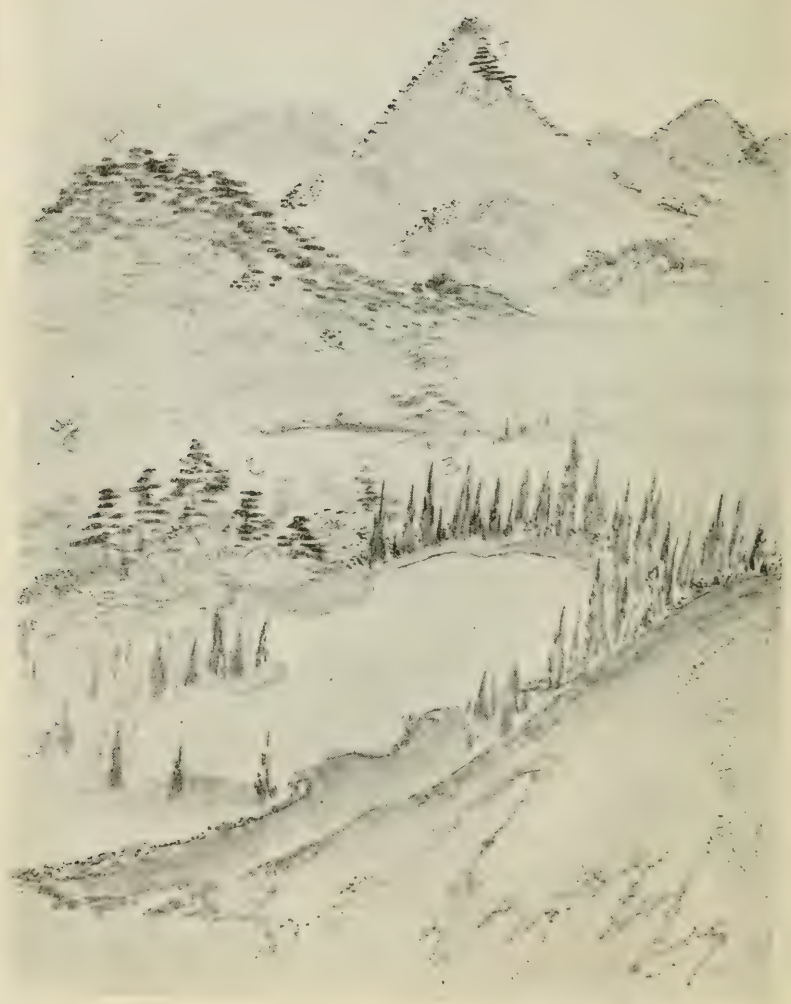


雪出羽道(平鹿郡十一)





雪出羽道(平鹿郡 十一)





甲 舊田華頭社七社の内  
 乙 坊山の神明宮並き  
 丙 政のころ 慶長元年甲子  
 丙 林虎島丁 諸山集の真龍寺  
 戊 名田坂むろを 名居所  
 己のしふをわ 石田坂を 北に  
 壬て 鉄包の 名入あり  
 最上の家々 第五郎  
 第五三郎と云ふ 乙子に  
 永慶軍記 尺三と

北





西

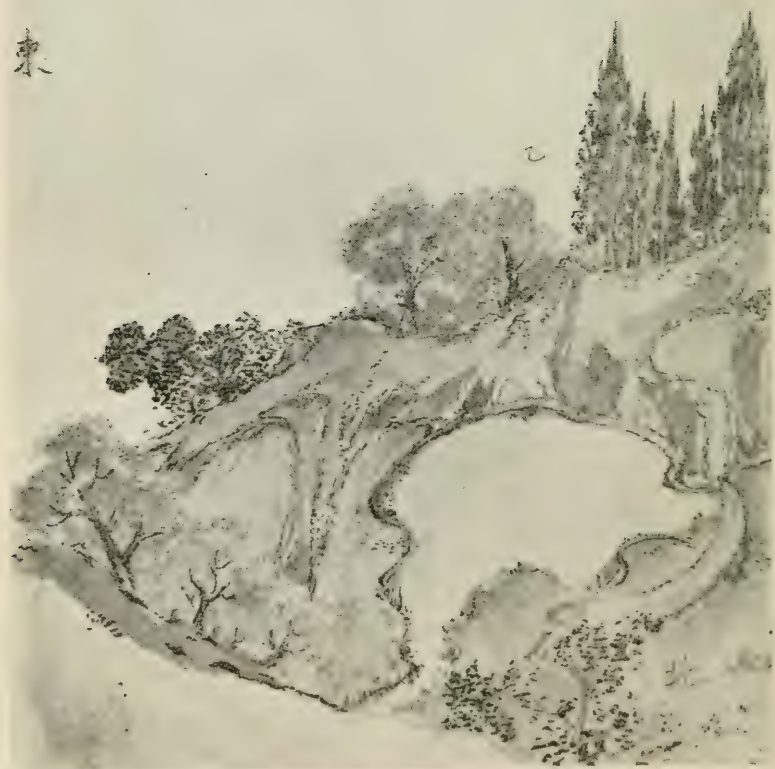
第一太郎明神  
第二太郎  
第三太郎  
第四太郎  
第五太郎  
第六太郎  
第七太郎  
第八太郎  
第九太郎  
第十太郎

其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元  
其之元

南  
此山  
此山  
此山  
此山  
此山  
此山  
此山  
此山  
此山



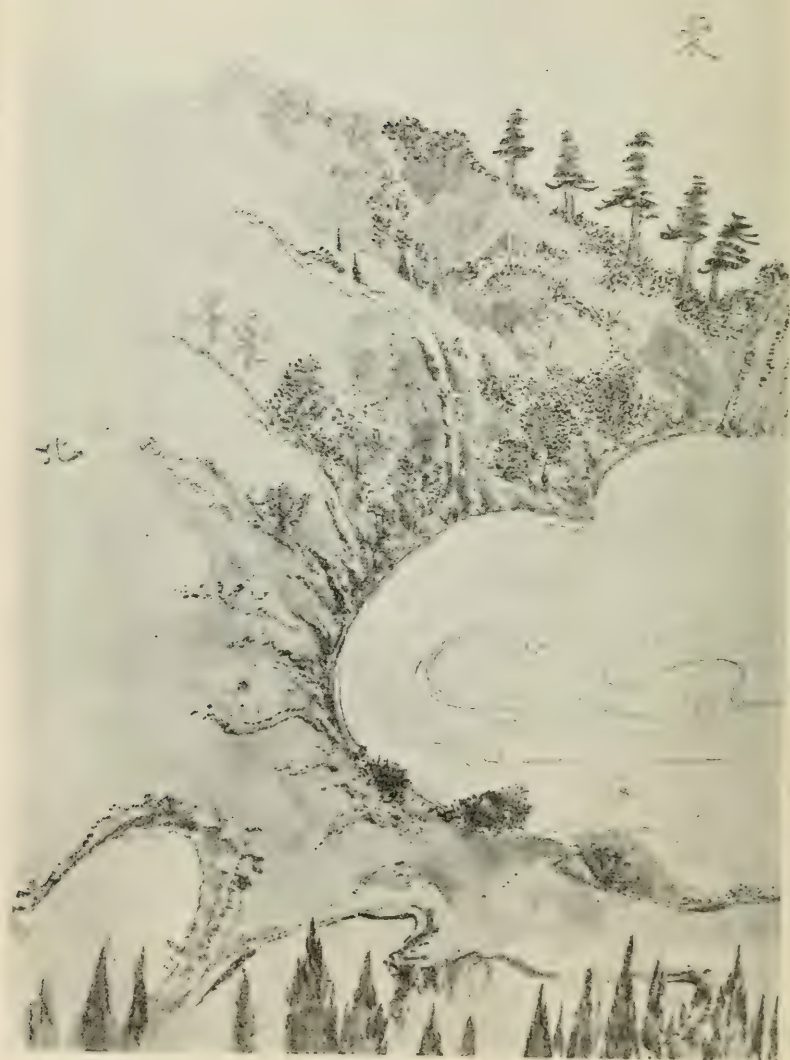
東





新沼馬場  
 古墳甲  
 佐々木家墓  
 信忠内膳の  
 居候跡  
 此山標は空堀  
 伊豆マリア  
 園口九郎  
 墓





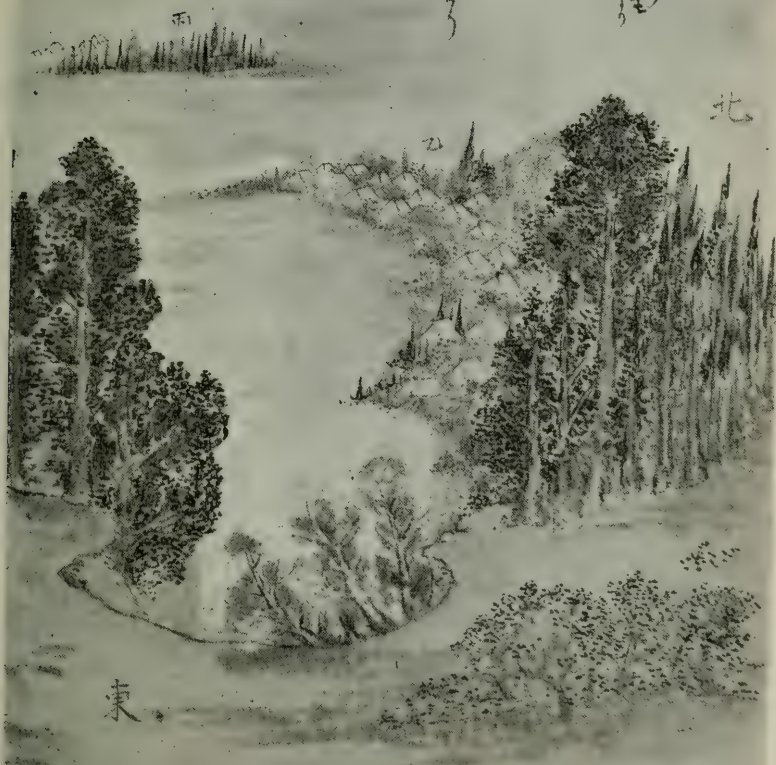
甲馬倉 古城本磨金  
栗生 北畠  
乙藤 邑  
丙三嶋杜 三島村  
此古城より見亘

小野寺系圖 小野寺  
宮内太輔孫八郎時道  
偏男馬倉能登守  
道常 次道樋口為五郎  
道守 といふなり

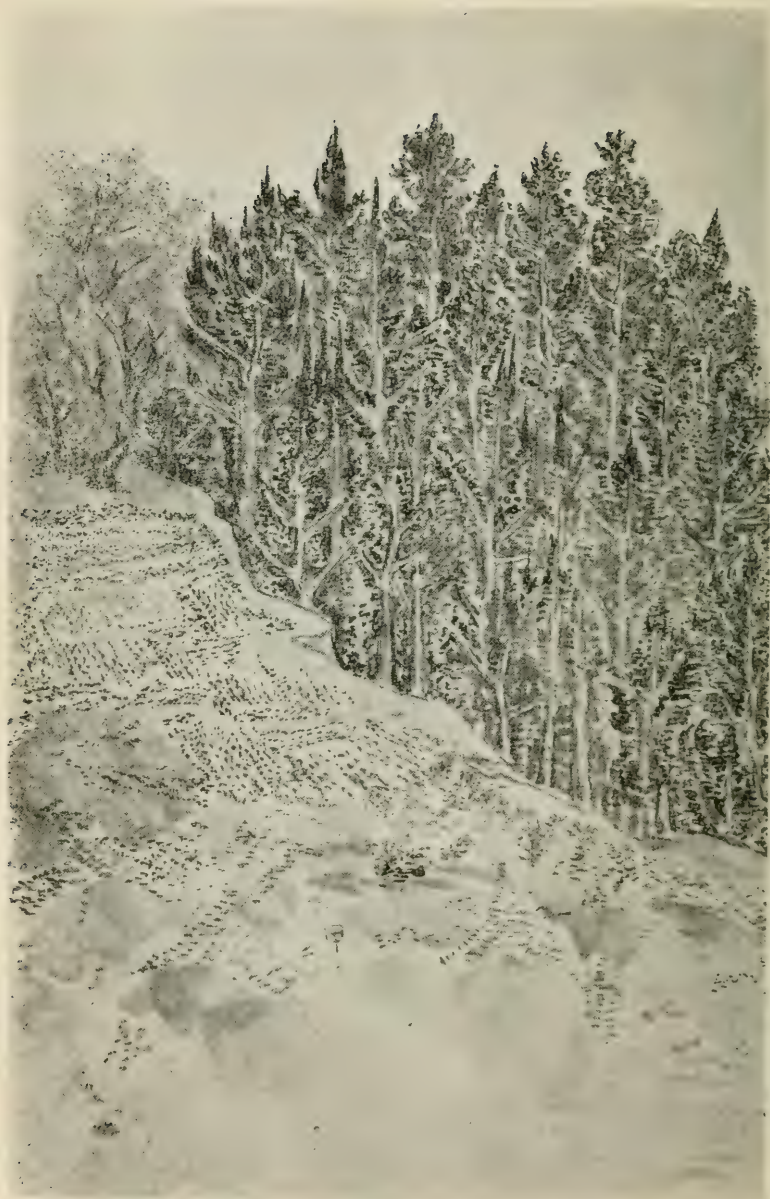
西

北

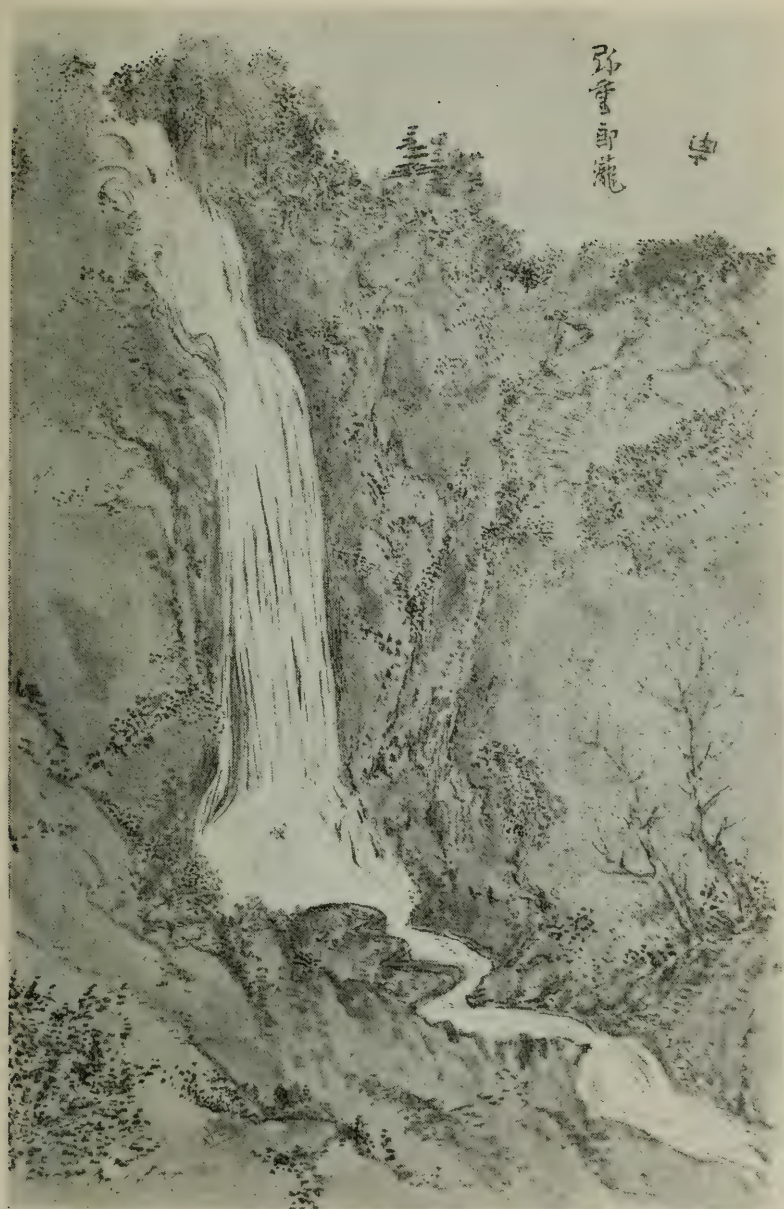
東



雪出羽道(平鹿郡十一)







此瀧を山田村の奥にあり弘重部之事その山田の  
今よりふたつほどあると云ふ所のより  
雨もどしどし下り弘重部上目曾世老の藤と瑞りて  
野を覆ひぬるなりとてこの世のうらなりうれしむ  
三日お毎ふと云りあり事言のあやめ  
あやめいそ人となりと云ひしなり  
此あやめの説は瑞を尊とそあやめといふこと  
そもそこの弘重部は百子と狂人のうらむ一節  
物語よりなりと云ふなり

馬鞍邑古城

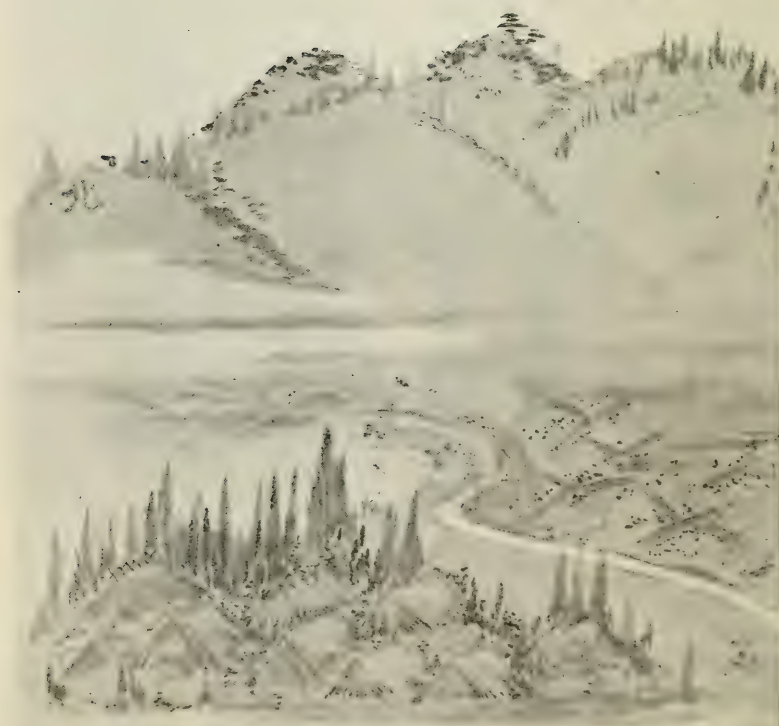
甲 今金山<sup>イマキン</sup>山の麓<sup>ノ</sup>王宮<sup>オウキウ</sup> 關<sup>ツル</sup>古跡<sup>コセキ</sup>今も  
 痕跡<sup>イシ</sup>を認めたりし本<sup>ホ</sup>廟<sup>ミヤ</sup> 丙<sup>ノ</sup>方<sup>ハタチ</sup>城主<sup>シマノリ</sup>の  
 栖居<sup>イリ</sup>の跡<sup>アト</sup>今も澤<sup>タラ</sup>山<sup>ヤマ</sup>村<sup>ムラ</sup>といふ  
 丁<sup>チ</sup>外<sup>ソト</sup>堀<sup>ホリ</sup>の跡<sup>アト</sup>も 衛<sup>ヱ</sup>田<sup>デン</sup>取<sup>トル</sup>りて  
 林<sup>ハヤシ</sup>麓<sup>ノ</sup>邑<sup>ノ</sup>むす 肆<sup>シ</sup>度<sup>タ</sup>く  
 鉢<sup>ハチ</sup>森<sup>ノ</sup>山<sup>ヤマ</sup>といふ

南

東



北山の中ノ鬼也。凡そ







神原形部山伏となり、すなはち別當職に仰をかゝふりて田畑廿石餘り當院に屬し。明快、天正十九年辛卯正月遷化。○二世行藏院宥永、元和二年丙辰二月十日化。○三世行藏院快巖、當村、鎮守三嶋、八幡宮、別當となる。寛文七年丁未九月廿九日化。○四世觀行院快元、正徳元年辛卯六月廿四日化。○五世行正院快行、寛保三年癸亥十二月廿九日化。○六世觀行院快山、寶曆十一年辛巳二月廿六日化。○七世行正院快見、文化二年乙丑閏八月廿九日化。○八世大寶坊快宥、寛政九年丁巳四月四日化。○九世現住行正院快榮也の内の一山也。

### ○黃 龍 寺

○鷲峯山黃龍寺、増田、滿福寺、末院にして、滿福寺、七世食堂天悅和尚を開祖とせり。此寺、山北五龍寺の内の一山也。

○開祖天悅和尚、元和五年己未二月二日遷化	○二世超岸梵越和尚、年號不知正月二日化
○三世骨山良髓和尚、寶永元年甲申三月四日化	○四世風山點淳和尚、寶永七年戊子五月四日化
○五世山翁大秀和尚、享保十年乙巳正月二十日化	○六世哲周道光和尚、元文三年戊午八月廿八日化
○七世悟山太愚和尚、延享二年乙丑二月二日化	○八世愚光即癡和尚、寛延二年己巳十月九日化
○九世果林印成和尚、寶曆九年己卯二月朔日化	○十世寶山白隨和尚、明和二年乙酉十二月五日化
○十一世龍睡了穩和尚、寶曆十三年癸未十月十日化	○十二世大拙東海和尚、安永五年丙申五月十一日化
○十三世玄法祖關和尚、天明四年甲辰七月十五日化	○十四世德翁密隣和尚、文化十五年戊寅正月晦日化

○十五世鐵翁鶴枝和尚、寛政七年乙卯八月十五日化○十六世石腰確翁和尚、文化元年甲子正月廿日化  
○十七世秀雲白峯和尚、文化六年八月田子内村永傳寺ニ移轉○十八世實宗祖孝和尚、文化八年辛未五月  
廿八日化○十九世秦州善豐和尚、文政三年五月川連村龍泉寺ニ移轉○二十世印趾麟步、現住也。

○家員百三十戸 ○人員六百四人 ○馬七十二疋。

さゝのさき

○新藤柳田村 (四)

しむごつやなきた

里長假役

六 左 衛 門  
松 之 助

○本<sup>ト</sup>新藤田、柳田なるべけれど、二村一郷に言語あまれば田ノ字ノ中に省かりていへり。秋田ノ郡に新藤田あり、また柳田も多かる名也。此邑の東は大谷ノ寺<sup>ウ</sup>内、西は下樋ノ口、南は外ノ目、北はふけ大堤に中れり。一村のみな上は大屋澤の若神子<sup>わかみこ</sup>の澤水の流もて本田佃<sup>い</sup>り、また新田<sup>あらた</sup>などは、小清水<sup>こしみづ</sup>とて村なる泉の流をひきれて作りぬ。

○神 社

○五大尊ノ社 新藤村に座り、祭日四月十七日、齋主保長。

○白山姫ノ社 柳田村に座り、祭日四月十六日、齋主長吉。

○稻荷社 祭日八月十日、齋主小作。

○田地字

○笹の崎 ○穴田 ○松の木 ○石田 ○猿田小屋 ○もち田 ○うしろやち ○八郎小屋

○禮塚 むかしは村なり。

○享保郡邑記云、新藤柳田村家員四十三軒今四、先年支郷、耕田村名を唱ふべき也。○禮塚、寶永七年本郷に引移ル、此邑廢たえて今は字に残れり。○柳田、此邑も絶て字のみ残れり。○新藤村、家員古、八軒今七戸あり。

○總家數四十八戸 ○人數百八十七人 ○馬十一疋。

さくらざは

○外、目村 (五)

里長 作 兵 衛

○此邑の東は檜澤此村大屋ノ寺内村に在リ、西は客殿薊谷地、南は馬倉の金谷邑、北は新藤柳田村也。

○享保郡邑記に○外野日村野ノ字除カル家員三十軒今十、○櫻澤村同十七軒今十、○五百百荊村同四軒今十あり、此邑今廢村たえたり。○金屋村といふあり、こは金屋ノ五郎兵衛といふもの開發の地にして、今は馬鞍村なまくらに屬せり、



云々と見えたり。外ノ目、中ノ目、某ノ目某日、いご多き名也。

○ 神 社

○ 正觀世音 村端<sup>シ</sup>の楯山の松杉の杜<sup>リ</sup>に座り、こを村の本居と齋奉る。祭日九月十八日、別當大屋新町村、鬼嵐、修驗兩學寺。

○ 辨財天女社 楯山の麓に座り、をりとして祭あり。齋主作兵衛。

○ 神明宮 松杉生る村中<sup>カ</sup>の岡に座り、祭日六月十六日。別當おにあらし村の兩學寺。

○ 熊野社 小山の中<sup>チ</sup>に西に向<sup>テ</sup>在り、祭日<sup>（マ）</sup> 別當並同<sup>シ</sup>。

○ 田地山野字

○ 山崎 ○ 五百刈<sup>リ</sup> ○ 御庵澤<sup>ごあなざは</sup> ○ さくら澤 ○ 猿田<sup>さるだ</sup> ○ 塚の腰 ○ 細腰 ○ 膳棚 ○ 三州びらき

○ 大谷地 ○ 蒜<sup>がつぎ</sup>やち。

○ 家數三十戸 ○ 人員二百人 ○ 馬二十疋。

竹原しみづ

○ 樋口村（六）

里長 佐藤理右衛門

○此村東は中山を隔て大屋村、西は客殿、薊谷地村、南は外ノ目村、北は上吉田村也。享保郡邑記、○下樋口村家員廿四軒令五十六戸あり。○内野目村同三軒、古館有故村名象。此内野目、今は村なし。○新所村同廿軒令廿二戸あり。先には辨才天堂有之故辨財天村ト云フ、下樋口村肝煎彌惣野御扶持忠進開仕候。付新處村と改ト云。

○本堂村同十軒令八戸。三嶽權現堂有故本堂村と云。○宿田村同六軒、廢邑也。上吉田村、内此村元和元、元和二兩年、下樋口村肝煎右馬之丞忠進開いたし候。附札、馬之丞開村、上吉田、地形之内也、家三軒。上吉田村支郷分。云々と見えたり。今又○善福寺村あり。

○山ノ字、廢あれた島の名四百卅六ヶ處斗あり。○内野目○やしきが澤○桐の木澤○はちが澤○かぢやしき○岩の澤○明キ通りあらそこより本堂への通路也。○竹ノ原○車長根○柳原也。

### ○ 神 社

○神明宮 新處村と善福寺村の間に坐り、此御社の祭日四月十一日、六月二十一日兩度也。

○辨財天女社 あらここ村にませり、祭日三月十七日、別當不動院。

此邑の西南に大沼ありて、百五十石の水田の水上也。

○三嶽權現 本堂邑に座り、齋主仁兵衛。

### ○ 里長佐藤氏系譜

○上祖は佐藤庄司信衡第十三代佐藤兵衛尉行信ノ長男、佐藤隼人正藤原義信、薙髮して一飯齋と號ス。

先祖代々奥羽の間に住居する處、父行信の代に至り羽州由利、郡居館せしとき奥羽の英雄蜂の如く起りて、百有餘年兩國亂れて兵器休ムにいとまなく、就中由理は辟地にして刺史定る事なく、或は山北に屬し或は最上の爲に却され、累年塗炭に苦しむ。因應仁元年丁由利の民相州鎌倉に到て、將軍足利義政公の相山内氏、藩令太田持資に憑て郡吏の無事を告訴す。將軍許諾ありて十二員の吏を任す。大膳大夫大江義久由利郡矢嶋に居城、小笠原大和守重譽仁賀保に住、則二將をして由利に部將たらしむ。所謂赤尾津、子吉、芹田、打越、石澤、岩屋、瀧保、鮎川、下村、玉米等也、已上是を由利十二黨と云。時に義信、部將大江義久に屬して矢嶋巖舟館に住して、矢島と猗角の勢を張る。

○二代信昌 伊賀守。女子、矢島兵衛尉滿愛室となる。

○三代信巨 式部大輔。死年月闕、法名寂西。

○四代信景 和泉守、幽閑齋。天正四年丙子四月廿八日の夜、仁賀保、城主小笠原朋重矢嶋城を却す。城主大江五郎滿安の下知に因て小助川攝津守、豐嶋右馬介、金子尾張、小番河内、同喜兵衛尉、柴田三左衛門尉、牧野修理亮、金丸帶刀、大瓦普賢坊等と共に仁賀保勢と血戰して、敵將朋重を討て信景其の首級を得たり。其功を賞せられて直根百八氣庄、吏に任せらる。天正十八年庚寅十二月二日没、謚英哲禪定門。○其男滿信筑前守、瀧澤、沓澤等謀叛の時若干の功あり、所領加恩せらる。○其次安信越前守、後に山北に來り平鹿郡植田村に住す。

○五代道信

少貳、因幡守、元<sup>ト</sup>信通と號。天正十八年庚寅羽柴秀吉殿下の命に因て、國主山形出羽守

義光檄して部將大江五郎滿安を招るの時、矢嶋留主として滿安一門與兵衛尉滿祐滿安舎弟、矢嶋攝津守、根井

右兵衛尉三將をして封疆を守らしむ。且佐藤越前守、小番喜兵衛尉、同掃部、相場市右衛門尉、杉山加賀

等を副て鑑たらしむ。嘗<sup>テ</sup>信通、父信景と共に城主滿安に扈從して最上山形に入<sup>ル</sup>。然るに、留主與兵衛

尉滿祐密に計りて矢島を押領せむとす。佐藤安信此密計を察して滿安の舅小野寺肥前守茂道山北西馬音内城主

書を走す、茂道諾して羽書を最上に飛して滿安に告ぐ。滿安辭するに内亂ある事を以てして、即最上を

發して領内笹根子に趣き猿倉平七が館に入り、矢島、城を返り攻にす。時に隨遂の武士小番河内、金子

尼張、矢嶋三右衛門尉、佐藤對馬、同藤太、木村與四郎、豐島右馬丞、伊藤五郎兵衛、金子案部、柴田修理、

眞坂下總、岳田二郎太郎、池田左京、大瓦普賢坊、猿倉平七、信景、信道等へ笹根子、杉本の勢加り、一千三

百人を以て矢嶋城を圍む。佐藤安信、城中に在りて内應して味方を引入に因て、十二月十八日終に矢嶋

城陥り、叛將與兵衛尉を誅して、矢島を恢復して咸く軍中を勞ふ。佐藤一家の勳功を賞して笹根子、莊を

恩賜せらる。後年故有て山北に入り、平鹿<sup>横手</sup>郡樋ノ口彌五郎道周の客として渠が館ノ二<sup>城主</sup>廓に住して、領主

小野寺遠江守義道横手城主の麾下となる。天正中馬倉城反攻の時宏に最上勢を敗り、馬倉孫兵衛尉をして彼

の城に復しむ。慶長三年戊戌ノ十一月四日沒、法名嵩山道基。男友信、出雲、子孫伊達家に仕<sup>ヲ</sup>。

○六代昭信

彌惣、隱居因幡。慶長五<sup>庚子</sup>年小野寺氏罪有て石州へ放流領地悉く沒收せらるに因て、宇



行田に居住して平鹿吉田莊副吏となりて彼民戸を司る。同七年<sup>壬寅</sup>御遷封の後今の野御扶持方御本國より下向、樋口住居して上遠野<sup>かこらの</sup>隱岐守秀宗に乞て、本の如く奉仕せむ事を告訴すと云へども許容なし。秀宗の吹舉に因て、元和元年乙卯九月十五日其首人助兵衛、與惣兵衛、及彌惣等へ御執政向右近太夫宣政の御指紙を以て、樋口、吉田開墾の地を賜ふ。其言曰、開次第告訴すべく、加恩に宛べき上意の旨を述、後年連々開墾して百六十石餘に及べり。是を配當して昭信采地七石餘、嘗て小野寺家滅亡の後一旦武業を廢と云共、先祖よりの由緒及び新田開墾の功に仍て下樋口村に屋敷を賜り、苗字帶刀居下除地永思免せらる。向家に憑て其恩を奉謝し宣政酒盞を賜ふ。妻柿崎但馬某女<sup>萬治元年戊戌九月八日没、法名妙德、導師報恩山善福禪寺。</sup>正保二年乙酉三月十三日没、道號革窓、法名道珊、導師報恩山善福禪寺也。

○七代信辰<sup>こき</sup> 利右衛門、和泉。父昭信隱居の後向家に至り、見參盞を賜ひ繼襲の恩を奉謝す。父一箕裘を嗣て永く民戸の吏たり。○妻姓氏闕<sup>萬治二年己亥十一月六日死、法名妙宿、導師報恩山師。</sup>○信辰、寛文十三年癸丑九月十三日死、謚秋傳、導師善福禪舍。○某、太左衛門、分地別家す。

○八代信明 利右衛門。父隱居、後向家に到り、見參の盃を賜ひ嗣襲の恩を奉謝す。妻姓氏闕<sup>萬治三年庚子正月六日死、法名妙雪、導師善福寺。</sup>慶安二年己丑十二月十一日父<sup>ニ</sup>先而死、法名道國、導師善福寺。

○九代信安<sup>にん</sup> 利右衛門。妻姓氏闕<sup>天和三年癸亥十二月死、法名貞室、導師善福寺。</sup>延寶八年庚申五月七日死、法名道林、導師善福禪寺。

○十代宗信

利右衛門。妻姓氏闕。享保七年壬寅五月朔日死  
法名妙雲、導師善福禪寺。

實永五年戊子九月十四日死、道號一和、法名道

圓、導師善福寺。女子早世年號月欠、法名謂春、導師並同。

○十一代信行

利右衛門。妻姓氏欠。

元文五年庚申九月朔日死、道  
號獨怒、法名永緣、導師如前。

享保二十年乙卯二月十二日死、道號西屋、

法名遊現、寺如前。

○十二代信恭

利右衛門。妻姓氏欠。

延享四年丁卯七月三日死  
法名岩屋妙全、寺如前。

元文五年庚申七月三日死、法名玄安了超、寺

如前。男信秋○彌太郎、享保十八年癸丑五月廿五日父祖ニ先而死、法號天外透晴、寺師如前。○某、享保廿

年乙卯九月八日天、法號露秋、導師善福禪寺。

○十三代信純

利右衛門。實、平鹿郡猪岡村、住某。

姓氏欠。

男、信恭養、家嗣とす。○妻信恭女。

明和六年己丑死、法名萬

山懸照、  
寺如前。

女子信純妻、明和七年庚寅十二月十八日死、法名安室妙穩、寺如前。

○十四代信光

利右衛門。實、東石塚村、住財兵衛第二子、信純養、嗣とす。○妻信純女、寛政六年甲

寅五月六日死、法名學林道悟、導寺如前。○女子信光妻、寛政八年死。○女子明和元年天。○女子明和

八年天。

○十五代信寛

利右衛門。妻平鹿郡馬倉村、住柿崎與治兵衛某、女、文政三年庚辰十月廿三日死、法名

安想妙心大姊、寺同上。文化十四年丁丑二月二十日死、諡福海正聚居士、導師如前。○信氏太兵衛、分地

配當別家。當時佐藤利兵衛、系別ニ在り。

○十六代信豐

左太郎、利右衛門。

實、平鹿郡客殿薊谷地村、住分流佐藤仁右衛門廣信ノ男、信寬養家

嗣とす。實家上遠野監物  
尾鋪地頭なり。

○文化七年庚午三月、父信寬隱居、後向家ニ到リ見參蓋を賜ふ、繼襲の恩奉謝す

先祖昭信  
ヨリ代々

勘方相  
續ス。

文政三年庚辰羽黑御支配替りに因テ見參、儀告訴するの處、同五年壬午四月五日於横手御執政小瀬

又七郎殿ニ見參

執奏羽黑組頭  
伊藤助右衛門。

同年郡方より、苗字帶刀居下思免の儀疑しき仍り、著しき事蹟上截すべきの

旨命せらる。茲に因て上遠野監物秀積に憑て其槩を記載、及懇情の投因て命可し。同六年癸未二月郡

御奉行黑澤監物傳達して、舊來の儀もあり苗字帶刀永く思免たるべき旨新に御書を賜フ。且郡方吟味

役喜兵衛執達の書に、居屋敷除地恩免等の儀共に末孫紛亂あるべからざる趣を命す。同年三月久府に

到り、同月六日於御政務所月番御執政梅津與左衛門殿へ目

見、恩を奉謝す。時に執政列席

執奏副役小  
貫九兵衛

同月九日向右近殿

へ見參。○且ッ舊例の如ク表門を建。○妻同氏太兵衛廣信、

女。○女子名波留、文化三年丙寅生○信睦、文化七年生○

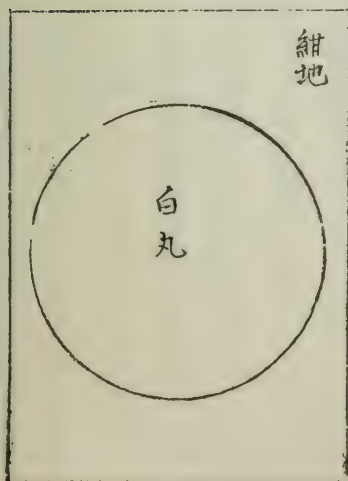
某三助、文化十二年生○女子名美武、文政四年生。

○家紋地車。

○旗印

替紋○三頭左巴。

右



佐藤理右衛門藤原信豐家藏書。

判紙のうり

佐藤利衛門家藏

樋口村吉田村より因を新築  
おんけを中回しさうふ  
所よりおんけを中回し  
御意に任る様

元和元年九月

白右近

御意に任る様

日 助喜信

日 与為義

肝葉 勝三

○佐藤理右衛門信豊聞書に、上祖佐藤彌惣の代は大肝煎さて、小野寺遠江守義道の時世より吉田、樋



口の保長<sup>な</sup>たり。御遷封の後元和二<sup>丙辰</sup>年三吉田、上下樋ノ口と五村に分れつれど、五ヶ村ノ此里長役をかゝふりたり。むかし、常陸ノ國羽黒町といふ處に九十人の足輕組ありしが、慶長七年御遷封の時御供して十三人此秋田に來る。しかして後おなじとし十年といふに、また七十九人の足輕、おほむ跡を慕ひ奉りて此國に來れど、それと御奉公のよるべもあらで、すべなう横手山内に入りて樵夫、炭燒の業をして日を送りぬ。かくて、おなじとし十九年には大坂御陣ぶれありて世の中ゆすりみちて、此とき君の御供して八人は大坂の御陣へ出たちぬ。かくて後、此御陣の御供せし八人と常陸より御供せし十三人と合せて廿一人は功<sup>いさな</sup>ものとして、寛永年中家士にめしたてられたり。残りつる人ごらは佐藤彌惣を憑みて新田の開墾にかゝりて、上下樋ノ口、三吉田にて三百石の水田ひらきつれど、貸<sup>たか</sup>乏<sup>ち</sup>しければ是をそれ<sup>うり</sup>に售<sup>う</sup>なして、残れる地の田百六十石ありし新田に正保四年のころ檢地御竿入りわたりて、野御扶持<sup>のごふち</sup>方とて知行たまはりぬ。かゝる野御扶持の者三十人、此下樋口村のこゝかしこに家居して住たりしが、横手根岸町の御米庫の番仰付られて、そが中より二人づゝ三十日交代してつとめけれど、道のほども隔りわづらはしければ延寶三年に願<sup>な</sup>を達<sup>たて</sup>てやを<sup>うけひき</sup>諾<sup>な</sup>たまへば、おなじとし五年より八年に及びてみな横手に引<sup>ひ</sup>きうつり、經<sup>へ</sup>緯<sup>り</sup>といふ地に栖<sup>す</sup>居<sup>め</sup>り。さうければ今そこを野御扶持町といふといへり。其野御扶持人卅人が住し跡は新處<sup>あらそこ</sup>の人ごころ<sup>へ</sup>に住み、また旗幅<sup>はた</sup>山の麓邊今は田となりてあなり。しか其卅人の野御扶持等に文化三年に鐵包わたりて、野御扶持御足輕と呼びぬ。卅人の外廿一人家士となれるは御免町に家居

し、残る卅九人は世に住みわび、土民あるは町人となりて、なにくれにくれのわざせり。また此あら  
とこ村も、むかしは辨財天村といひていこ／＼古<sup>キ</sup>辨天の靈像ありしが、みな朽にうちて殘れり。また  
らしの池もいごあせ、御堂もいたくこぼれてありしを野御扶持方再興あり、又佐藤與三が功あれば村の  
名も新處に改められたり。辨財天の神形はよしありし人の御作なごにて、いくばくのごし經てかくた  
ちたりけむかし。又一寸八分の紫銅の盧遮那佛あり、こは辨天の別當不動院の上祖、二世福王院梅榮の  
親なるもの常陸國より持來りし佛也。其開祖はよしある人ながら、身をあらぬわざになして死たりけ  
れば、その名、その遷化のごし月すらつはらかに知らずといへり。また信豐が四代目の信景が住し  
いへる宇行田といへるは、いかなる名にてや、右京田なごを訛り傳ふるものか。此信景、樋口彌五郎道  
周の客となりて二<sup>にの</sup>廊<sup>まろ</sup>に在りし事なご、佐藤氏の家系譜につはらか也。

### ○不動院修驗者

○不動院鼻祖は、慶長十年のころ常陸國、水戸より此出羽國平鹿郡に來<sup>ル</sup>。實名、遷化の年月不知。○  
二世福王院梅榮<sup>寛文七年己未  
六月三日遷化</sup>○三世不動院儀永<sup>寶永六年己巳  
三月二日遷化</sup>○四世福王院法壽<sup>遷化年  
不知</sup>○五世不動院儀光<sup>寶曆六  
年丙子</sup>  
正月十五<sup>日遷化</sup>○六世神照坊法妙<sup>安永元年壬辰  
七月十一日化</sup>神照坊遷化、後二十餘年歷代中絶せり。○七世當時現住不動院永  
諦也。

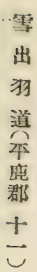
横手野御扶持方、齋神辨財天、別當にして、三月十七日、祭祀料として替御扶持高の内、二石、寄附あり。

延寶五年、御檢地ノ時より六畝廿八歩ノ處御除地ト成る云々と、此院の記錄に見えたり。

### ○明 泉 寺

○熊王山明泉寺は東本願寺ノ直末寺也。此寺開基は俗姓皇都の人にして高島助郎藤原重行とて北面ノ武士たりしが、ゆゑありて浮浪の身となり高祖親鸞聖人の御眞筆の阿彌陀佛の画像を笈の内に安置し、專修念佛すぎやうして祖師の御舊跡を順拜のため關東に下向し、陸奥ノ國南部ノ和賀ノ郡笹間村の高橋某が家にちなみして、氏を高橋と改めてしばしこの笹間ノ村に住ぬ。やがて發心出家して誓超坊と號し、其後天文の年こゝろ此出羽ノ國に來て平鹿ノ郡横手の山崎といふ地に佛刹一字を造立し、此山崎にて天文十二年癸卯四月十五日示寂せり。○二世淨西坊、元龜三年壬申三月七日遷化。其世は小野寺家横手に在城のころにて、役人、囚人をひいて門前を通りければ淨西坊是を見て、此罪人を救ひ得させまく佛衣ころもの袖をどらはれの頭に覆ひかけなしど、さままくくにわびつゝ、道を遮りて妨しければ、役人はらぐるに罵のの言しりて、それを答こたへて山崎を追ひ拂はらへれ寺もこぼおちて、大谷寺内村のおくなる熊野澤といふ處に引退きんたいきて住ぬ。○三世淨玄坊、文祿三年甲午正月十一日化。○四世超信坊、元和六年庚申十月二日化。○五世專通坊、寛永十一年甲戌五月三日化。此五世專通坊の時代、寛永元甲子年、大谷寺内の熊澤邑より樋口村ひぐちの本道といふ處に寺を移して住ぬ、今の明泉寺これなり。寛永二乙丑年、西本願寺第十三世ノ御門主良如上人リョウジョウノ彌陀の画像の大幅おほびらの一軸を賜リ、即良如上人の御裡書御眞筆也、是、明泉寺の重寶也。寛永七庚午年霜月八日、良如

村入口  
草二王  
比山





美

樋口古城

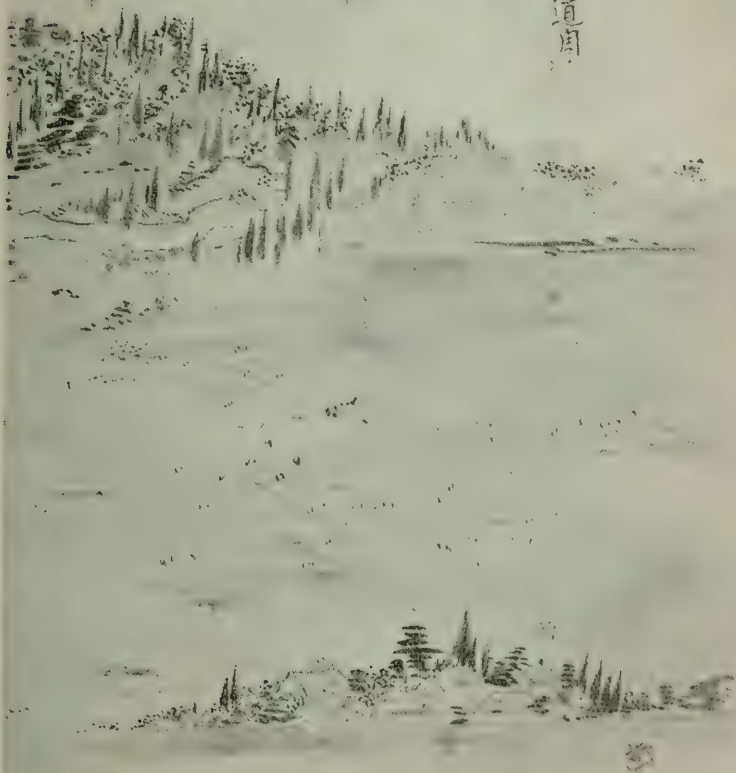
樋口彌五郎道周  
居坂

本郷 二郷

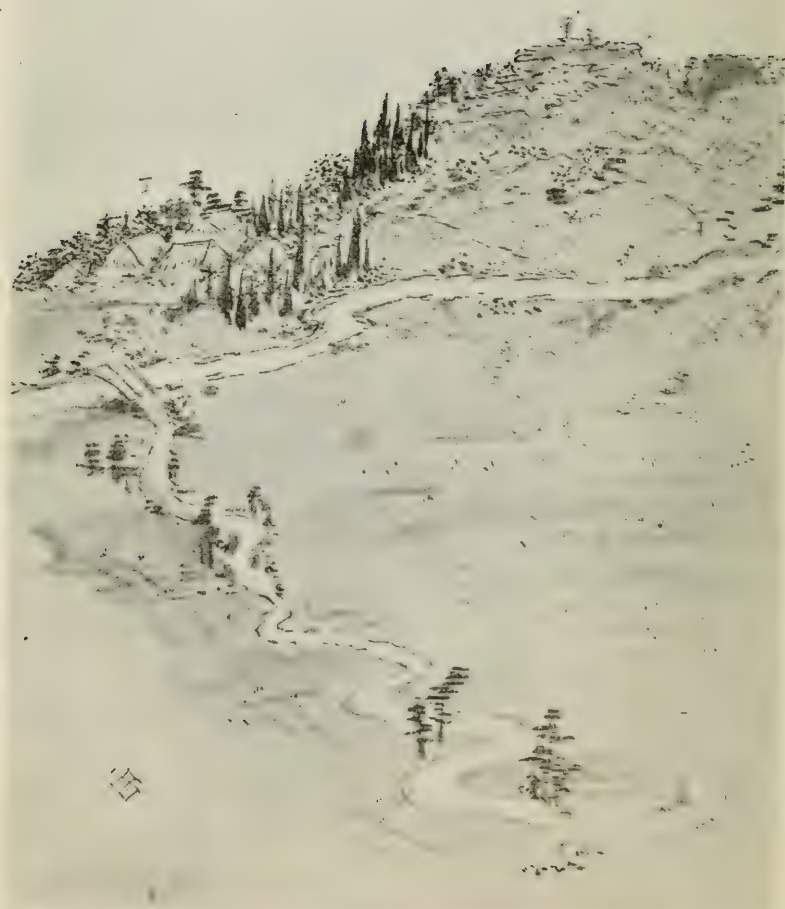
樋口邑

下樋口  
町

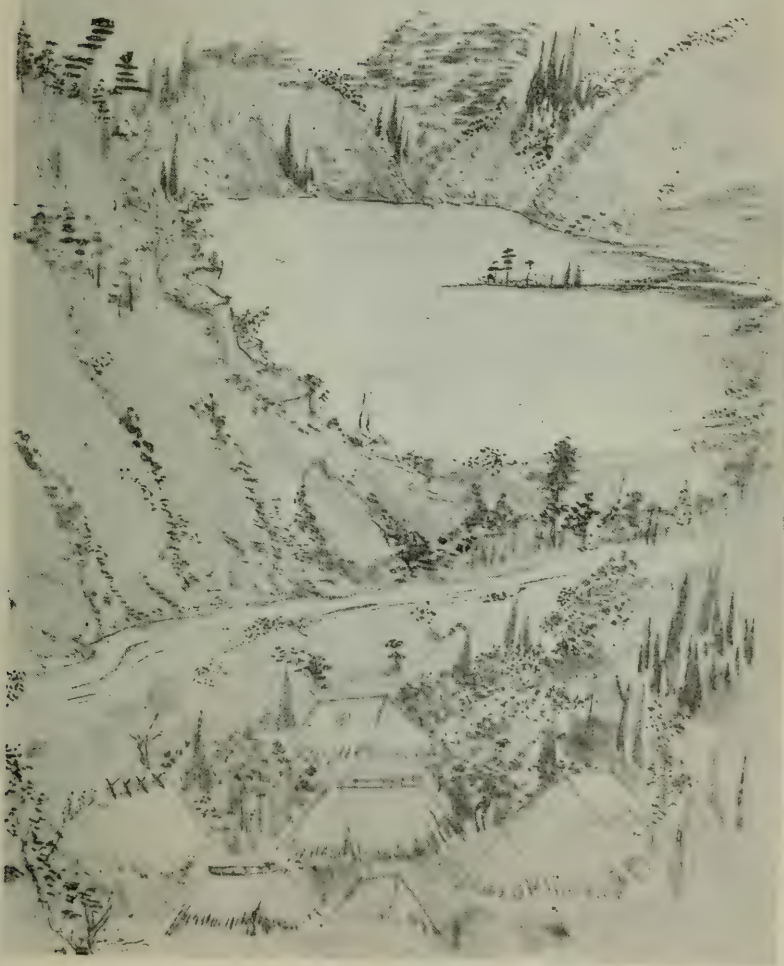
小野寺十次系譜  
弥五郎道守と云  
地守る馬倉ハ  
古樋口ニ在リ  
云々



雪出羽道(平鹿郡十一)



下桶口村  
あらしこ  
新天  
西大屋  
弁天  
中島  
宿田



雪出羽道(平鹿郡 十一)

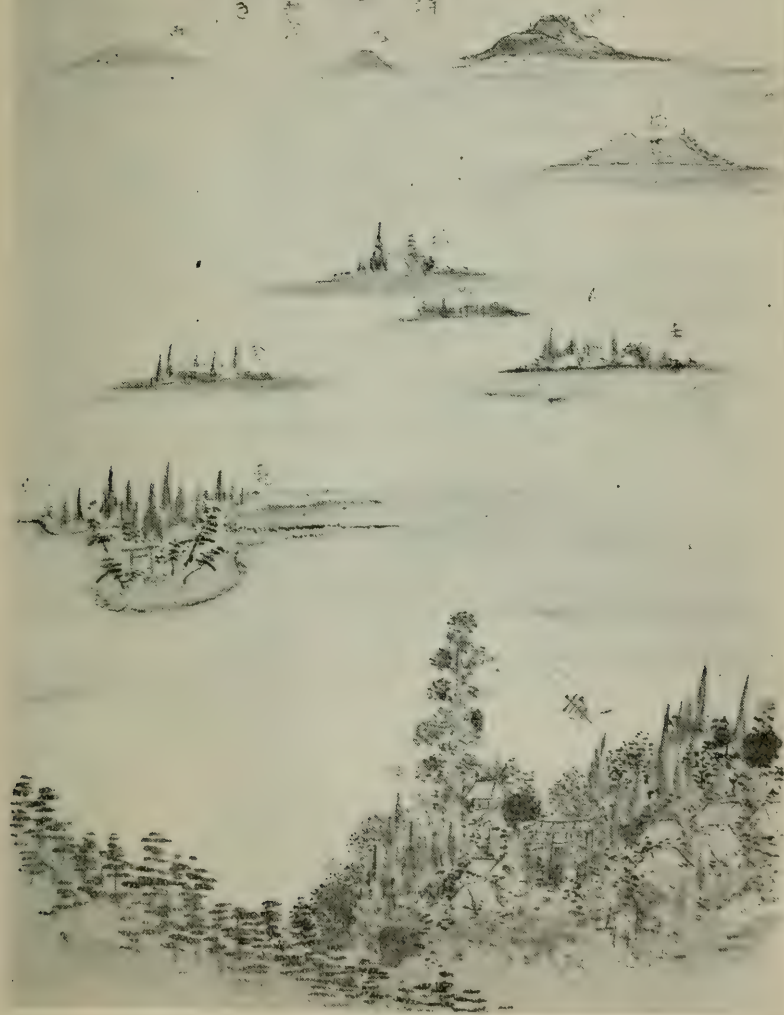


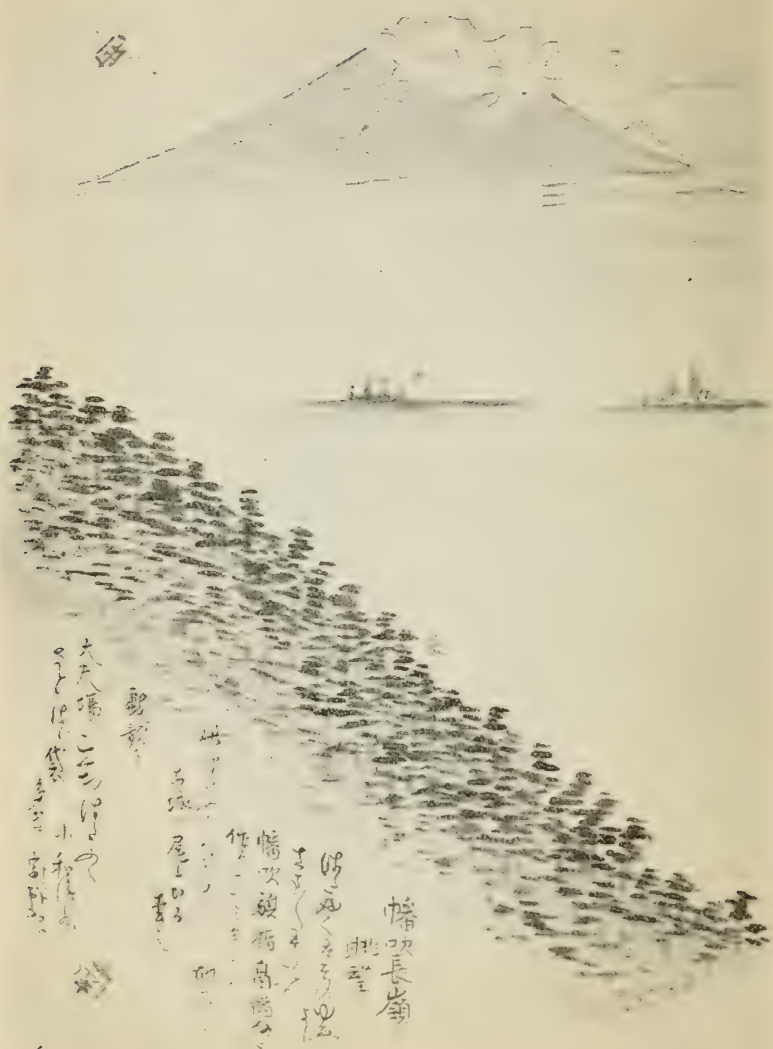




[illegible]

甲 會島北山  
 乙 由利高嶺  
 丙 日根嶺  
 丁 西角流  
 戊 御押  
 己 中田  
 庚 下柳  
 旗 吹長根





雪吹長嶺

此

雪吹長嶺

雪吹長嶺

雪吹長嶺

雪吹長嶺

雪吹長嶺



福口古城山眺望

無

甲三山嶽神山寅正申

乙南部釜野嶽丑寅中間

丙水道村御嶽山子丑向

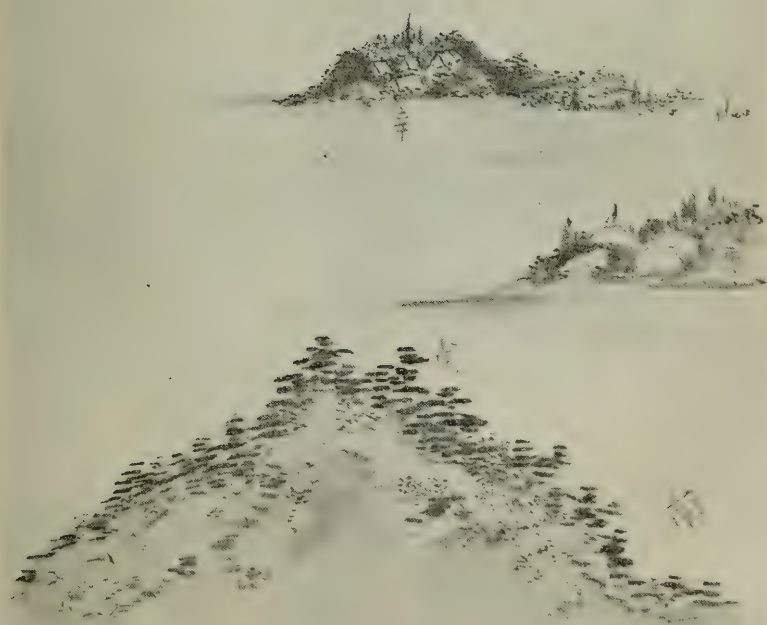
丁見越山嶽子城山子丑向

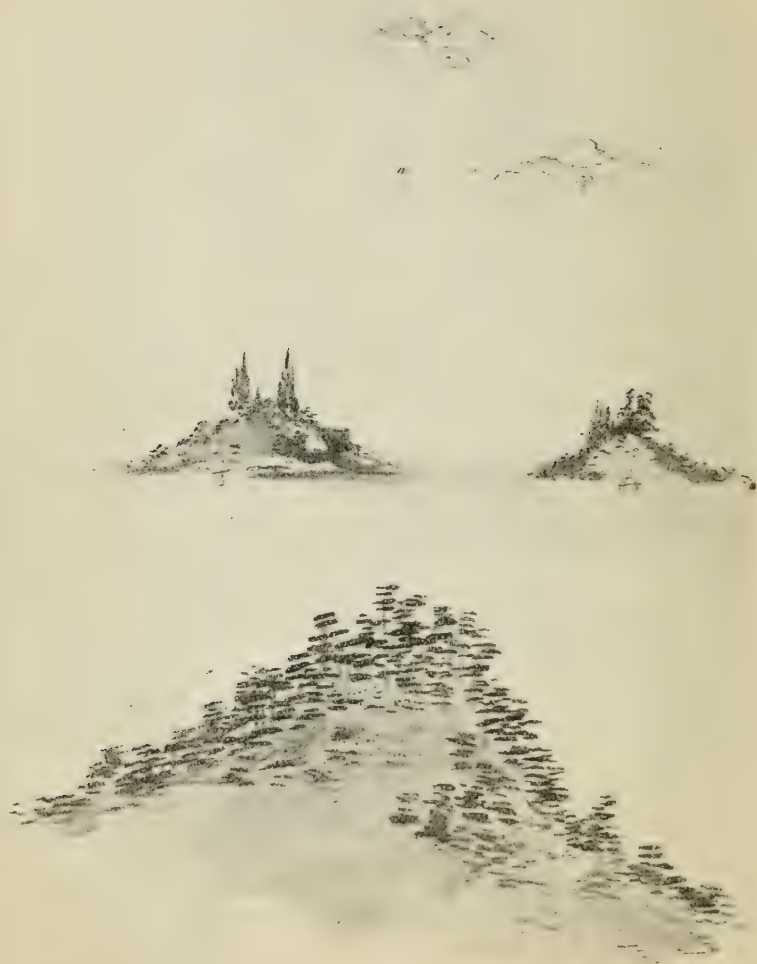
古城本廓

古城二廓

大層

大層





あともこのしるし

下系泉の泉は、雄大の北の山麓にあり

小清水く、岩の隙に湧き出る清水

幡吹の西にあり、御前清水ともいふ

る、この山口の杉むら、中の小清水く

其外本道付あり、大石清水も、うが嶽の

南の方大石澤とて、砂を流す

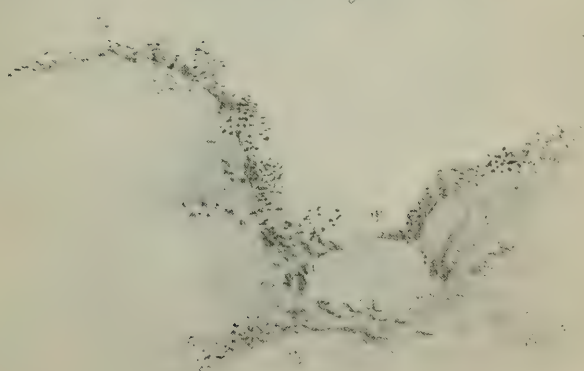
外、同様のさうし、うが嶽の麓、谷地邑の

観音清水とて、七間小三間あり、大泉あり

上極あり、秋、芽ば水、上吉田の、中河清水

す、新藤柳田、湯田内なる、近村あり

る、このしるし、



上人より寺號を明泉寺と付々賜る、その證據今なほあり。○六世經念、延寶八年庚申六月十日化。○七世淨專、正德三年丙戌八月十五日化。延寶四年丙辰三月東本願寺に歸參、皈參神妙に思しめされ、その御褒美として木像の本尊あみた佛々を賜りぬ。延寶四年丙辰五月蓮如上人、御影御免あり、御裏書は常如上人、御眞跡、唯今安置せり。延寶五年丁巳二月十五日本佛本尊頂戴せり、御裡は常如上人御眞書並御添簡共に家藏せり。此本尊は本山の御寶藏に收り在りし行基僧正の作佛なるよし、今本堂に安置し奉る也。○八世淨心、享保二年丁酉六月六日化。此代に、享保元年丙申十月聖德太子、御影並三國七祖、御影御免あり、此裡書は眞如上人、御眞筆、並御宗司中御添簡共に家藏せり。○九世教信、安永七年九月廿七日化。○十世教圓、寛延三年十一月三日化。○十一世知傳、安永六年七月廿八日化。○十二世現住教惠代也。

○ 善 福 寺 曹洞宗

○報恩山善福寺は相模國小田原ノ海藏寺を本山とし、海藏寺ノ二世○天室正運和尚を善福寺の鼻祖とす。長享三年己酉七月二十日遷化。○二世節島圓符和尚、三月七日化○三世張山宗陽和尚、三月九日化○四世和悅宗闇和尚、三月廿五日化○五世徧界禪周和尚、八月十六日化○六世證契祖印和尚、九月廿一日化○七世盛翁榮茂和尚、三月晦日化○八世樹下禪林和尚。二世ヨリ八世マデ遷化ノ年號不知といへり。○九世嶺室慶長十六年三月廿六日化○十世盛岩元和三年三月廿八日化○十一世玉翁元祿四年二月九日化○十二世國翁寛文五年六月廿八日化○十三世揚山



元祿九年二月廿七日化 ○十四世大圓元祿十三年三月四日化 ○十五世大岫寶永二年三月六日化 ○十六世鳳山寶永三年四月三日化 ○十七世雪峯寶曆二年七月三日化 ○十八世兒林寬保三年六月三日化 ○十九世雄山安永四年九月十二日化 ○二十世常山寬政七年正月十五日化 ○廿一世閑居無染、存生 ○廿二世當住東庵也。

○下 樋 口 村

○家員五十六戸 ○人二百三十人 ○馬廿四疋。

いたこのもり

○深 間 内 村 (七)

里 長 治 右 衛 門

○他國に福釜邑ふかま、福釜打邑ふかまうちなど聞えたり。郡邑記に、深間内家員十四軒今十七戸ありふ。 ○枝郷高口村古ト七軒今六戸ありふ。

○ 神 社

○神明宮 板子といふ處に座り、祭日四月十一日、別當中吉田郷藤根ノ吉祥寺。

○正一位稻荷大明神 同處に坐り、祭日八月九日、別當同修驗者也。

○ 字 所

○羽根澤 ○日影館。

○家員廿三戸 ○人員百四人 ○馬員四疋。

○ある記録ニ云、黒澤甚兵衛道家八柏家よりの養子たり、是より九代也、慶長年中當佐竹家に仕ふ。今東根小屋町人みな上(うは)根子屋町ともはいへりに在る黒澤伊兵衛道興は其後胤也。本ト仙北郡の仙矢村にて三百石、上境村にて三升五合、深間内村にて七升五合と見えたり。此深間内の事にや。

ふてつばな

## ○上吉田村 (八)

里長 庄 右 衛 門

○此平鹿ノ郡に吉田といふ處上中下と三箇村あり、中下の吉田は淺舞村よれに屬り、上吉田は此醍醐おやを首郷とせり。○郡邑記ニ云ク、上吉田村、惣名唱也○野田家數廿一軒、上吉田ト可唱也と見えたり、家今は十六戸あるなり。○野田村十六戸○三ツ屋村家十軒今二○田野上今十同十軒今十○新城村にむじやウ同二軒ニンジヤウ○御公地村ごくち、此邑下境の屬村清水町今十入合ノ地也○福田村同二軒、中吉田入合ノ地也○四ツ屋村同十軒○間角村まかく四軒○朴田村同十七軒今十○高野村たかの同七軒今五○福嶋村同七軒、今五戸也○竹原村家六戸、此邑郡邑記に泄あれたり。○野中家三軒○茅つばなやしつばな家二軒○五拾田つばな同三軒○田中村同四軒と郡邑記に見えたれど、享保の末つかたにや此四村廢邑たり。

○神 社

○熊野宮 朴ノ田といふ地に座り、祭日三月十七日、花のときは花をもて祭れるためしにや。齋主里長、奉幣藤根邑ノ吉祥寺。

○神明宮 祭日四月十六日、齋主奉幣並ニ同シ。

○字 地

○中谷地 ○角掛つのケ ○鬼頭おにがしら ○田中 ○野中 ○五十田シ ○つばなやしと。

○古城跡、西法寺の邊リ、田野上へといふ處に在れば、村民西法寺館たてといふ、天正、文祿の頃は吉田孫市郎陳道居城處也。永慶軍記卅三卷に慶長五年大森合戰事といふくだりに、清水大藏義之十月十三日に酒田をうちたち、同十六日大澤にぞ着にける。此事、由利の人々早打を以て秋田に告ツしかば、城ノ介實季の陣代として湊二郎五郎、同久五郎、同典膳百餘騎を率し、加勢として大澤に馳着けり。由利黨に仁加保兵庫頭嫡子藏人、瀧澤形部少輔、同又五郎云々。大森勢十餘人討れて既に町構に亂入ル、康道此由を見るよりも安からず云々。城中には思ひの外無勢にて、今日町構をおし破られて、籠鳥の雲を戀ひ涸魚の水を求めるやうなる折からに、舍弟吉田孫一郎陳道が、郎等百餘人を引率し、大森の北なる河の瀬を渡リて劔が鼻を歷廻り城中に入り來れば、同舍兄義道が郎等に岩崎伊豆、前郷内記、落合左馬介、大築地又二郎、

庄司勝三郎、日野小左衛門三百餘人にて大森に忍び入れば、城中是に力を得て持口に人數を増し、翌日の合戦を待にける云々と見え、また山北吉田合戦といふくだりに、同廿一日清水大藏大輔義之、由利、秋田の人々に合戦の異見を伺はる。其評定區々にしてさだまらず。爰に六郷兵庫ノ少輔が郎等大曲越中行屋、門ノ目五郎等、主の六郷は關ヶ原に參陣して留守居として六郷に止りけるが、最上殿より山北攻メの人數打入ると聞て、領内の土民まで相催して千五百人加勢と稱し馳せ着しが、清水殿の臣木戸周防を以て申宣べけるは、此城は地の利全き山城に候へば、如何に寄手大勢なりとも一日二日に落城仕べきとも存候はず。其上に横手、吉田より加勢打入り候。西馬音内よりも、武士頭二人に長柄、鐵包足輕、夜叉鬼山の方より城中に入り候と風聞候得ば、此城をば今の御人の内一万を以て卷きたまひて、殘る人數を以て吉田を攻られ候はゞ、是は平城の事にてはあり一日の中に落城仕るべしと申ける。清水是を聞て、げにや六郷の者どもは此邊近き事なれば案内知らむ、さらば是等を先手に加へ、吉田を攻落さんご大森の城を攻を閣、延澤遠江守光信を大將として、秋田、由利、六郷の勢を相交へ三千餘人、五段に備へ押寄る。されども吉田孫市郎陳道所々に目附を置いて敵陣を伺へば、早此事を知て舍兄横手へ早打を以てこれを告げ、黒川城にも告知らせ、我身は般若寺ノ六郎次、佐藤主水、境喜介、八幡ノ三郎、河崎主税を始め、七百餘人寄來て敵の道を遮り、境に出て陣を備ふ。次に西ノ野ノ孫三郎此由聞と、其まゝ取物も取あへず黒川を立て五百人にて馳着ける。同時に横手の旗本遠田信濃、久米作内、澁谷助五郎、原田新右衛門、



石山右馬丞、佐藤□助、荒田隼人、彼是三十七騎に雜人五六百人境にぞ馳せ着ける。先手里見越後守五百人に向て一番に軍を始め、遭つ啓つ諍合しに、最上ノ二見新關因幡守五百人横を入れんと深田を歩む處に、山北方黒川勢皆跳立に成て突てかゝる。後兩陣亂合て五六度まで相挑む、討死、手負雙方同じ。斯る所に横手旗本戸波平右衛門と六郷瀬兵衛鏑を合せしが、戸波鏑を抛てかいくぐり引組み、六郷を取て押へ首を取て退けば、豐卷勝右衛門遁さじと追かくる。吉田郎等般若寺六郎次、横さまにむす組む、豐卷事どもせず般若寺を片手に取て押臥せ、二刀刺徹し首搔落し立上る。吉田が郎等境喜助大長刀にてつゞけ打に打ければ、豐卷太刀を打落され深手負て倒れたり。喜助、首を取んとおもへども豐卷が下人七八人刀を以て防ぎし故、首をば取らず引にけり。喜助が下人も随分戰ひて、打落したる豐卷が太刀をば取りにけり。其外、最上方にて名ある者ども六七騎まで打死す。豐卷も歸陣して其日の中にぞ死にける。横手旗本には宮原左衛門四郎は、もき付の首二ツまで討捕ば、同宇佐見源助は敵七人に手負せたり。最上勢三千餘と山北勢千五百と二時計り戰ひしが、雙方戰ひ疲れて相引にぞしたりける。山北勢は吉田、横手、黒川の三處へぞ皈りける。」と見えたり。

### ○西 法 寺

○吉祥山西法寺禪林、本<sup>シ</sup>山<sup>ン</sup>は雄勝郡三梨村、寶福山桂蘭寺也。此寺むかし仙北郡飯詰邑に在りしが今はた陳道が城蹟に遷り、飯詰邑に西法寺森とて古城跡の如<sup>キ</sup>處あり、そこに在りし寺也。その寺跡の上

には千部塚あり、人あやまりて登ればこゝらの蛇の出来くればは、人かしこみてのぼらずといへり。西法寺開祖は○前總持本寺三世當寺開山たり。仁室梵龍和尚、應永二年乙子七月廿九日遷化也。○二世昌室本龍和尚、晋山移轉並遷化年月を知らず、三日示寂と定む。○三世無轉衣龍室周泉和尚、遷化年月不知七日示寂と定む。○四世晋室永觀和尚、承應元年壬辰十二月十日化○五世唯心泰圓和尚、元祿十二年己卯十二月廿一日化○六世安山楚宅和尚、享保十年乙巳正月廿九日化○七世曦山宅陽和尚、遷化年月不知十五日示寂と定む。○八世寶山白瑞和尚、明和二年乙酉十二月廿五日化○九世桂龍吞丈和尚、天明四年甲辰五月廿二日化○十世仙巖石叟和尚、天明七年丁未六月二日化○十一世千丈石門和尚、文化十二年乙亥八月八日化○十二世泰山玉秀和尚、文政五年壬午閏正月十八日化○十三世末無轉表現住崇岳宗鳳代也。文政五年壬午四月二十二日當寺晋山也。

○當寺檀越、家員二百五十戸也。

○熊野社 吉祥山西法寺鎮守主御神也。こはいにしへ、城主孫市郎陳道の齋奉れる御神の、今は寺の鎮守となりけるものか。

松のした水

○客殿、薊谷地村（九）

里長 九郎左衛門

○此客殿はいかなる名にや、むかし寺院なごありしゆゑもて名附たらんか。薊谷地は薊多かる地より云ひ始し名ならむ、中古のころまで薊谷地あざみに作しり。是二村一郷に唱ふ村名也。享保日記に家員六軒と見ゆ、今は二十戸と家榮えぬ。おなじ村ながら○客殿○薊谷地○河登郡邑記に此村を川光りと誤れりと、此三村を一郷とせり。田井の水上ミは、上樋口の松館清水の流の末以て佃つりぬ。村の東は下モ樋ノ口、西は中吉田、南は上樋ノ口、北は上吉田村也。郡邑記ニ河登リ村家員五軒と見ゆ、今は四戸とありける。

○神 社

○藥師如來社 河登村に座り、祭日四月八日、齋主佐藤仁左衛門。此地は登光山藥王寺とて坂上大宿禰田村鷹の草創にして、大銅二年の棟札有りしよしを云ひ傳へ、今元祿二年九月八日と記したる棟札にも此事記シたり。○藥師は靈佛にして良工の佛師ノ作にや、廻祿せしとき右手の折たるを、今し世の佛師いくたび作りても此御手の附て全くそなはらず、あやしき事といへり。さりければ片手やくしにてぞおはしける。佛形長二尺三四寸斗也。○獅子塚、梨木、周圍五尺餘りの空木也、むかし獅子頭埋し塚といへり。むかしは鬪獅子したかひの事ありて、負たる獅子にや勝たる獅子にや地に埋みて塚として處々に在り。其村へは獅子舞の入り來ぬためしといへり。

○稻荷明神社 客殿村に座り、齋主彦右衛門。

○觀世音菩薩社 薊谷地村に座り、祭日九月十七日、齋主久三郎。

○字處正保四年のころにや○備前開

○柳下

○百日木下さうめき  
ごうめきさいふ處  
國々處々に多し。

○村の家員二十戸 ○人員百人 ○馬員十疋。

萩の芽

○上樋口村（十止）

ある  
ひの  
くち

里長假保 亦 太 郎吉

○此邑ノ東は外ノ目村、西は淺舞村、南は醍醐村、北は客殿村に中あたれり。古城跡あり樋ノ口ノ館といふ、そは  
小野寺高道ノ三男藤原道守の居城也しが、後に佐藤忠經是なれに居り。二ノ棚を松館といふ。ある物語に、そ  
こなむ越後ノ國柿崎ノ城主左馬ノ介光郷といふ武士、此出羽ノ國平鹿ノ郡に來て小野寺家に屬しなれり、かくて此  
處に棚居すわりといへり。いとく近き世まで松館とて村名に呼しが、正保四年のころよりは其村も廢なくなり  
て今は田畠の字となれり。享保郡邑記に、上樋口村家員十三軒、支郷○田野尻村同六軒○沖田村同廿一  
軒○石塔村同十四軒今家  
六戸淺舞街道に石塔といふ處ある故に名とす○藤嶋村同五軒今二  
戸○萩ノ目村十三戸  
あり此村郡邑  
記になし云々と見えたり。樋ノ口は上下モ並て、古き處なるよしをもはら云ひ傳ふ也。

○神社

○神明宮 萩野目といふ地に鎮座、祭日四月十六日、別當中吉田村藤根ノ吉祥寺。



○松館稻荷大明神 古館の跡に座り、祭七月二十日、別當藤根修驗並同シ。

○石塔稻荷大明神 むかし石塔ありし野に在り、祭日四月九日、別當並同。

○上宮太子ノ社 萩の目に齋奉る、祭日八月十七日、齋主かきざき茂右衛門。

○此柿崎が齋る厩戸皇子の神形在る由來を、いとながやかに記したる一巻あり、そが中に諸がたき行々もあれど、そのあらましはうべうべしくぞ見えたる。舒明天皇の御代ならむか、役優婆塞、黄金峯に莊嚴院といふを開闢創て行ひ給ひしといへり。しかして後の世に、陸奥出羽ノ按察使陸奥守勳二等坂上大宿禰田村麿再興ありて、上宮太子ノ靈像を安置給ひたる事になもありける。かくていくそばくの世を歴て、蝦夷賊おこりて黄金峯も兵火やかれて、莊嚴院の山主をはじめこゝらの僧侶幽谷に身を潜し、門主はからうじて檜木内といふ山里に退ぬ。さりければ聖徳の太子の神形は、黒烟に染て斑に焦れて麓に飛行ましつるよし、かくて其神像筆島といふ地にませり。後俗そこをさして檜木目と云ひしが、今は萩ノ目とぞいふなる。黄金峯は今いふ明澤が嶽にや、莊嚴院の末胤といふは、横手の本山派の金城山自性院金剛寺是なり。其後左馬亮光鄰この上宮太子の神像を尊崇、城中に宮殿を造て恐み齋りける處といへり。

# ○ 柿 崎 氏 家

○柿崎氏姓者滋野井也、故越後ノ國柿崎ノ城主、長祿三己卯年ゆゑありて出羽ノ國山乏に來り、領主小野寺中

務ノ太輔泰道<sup>つすみち</sup>平鹿ノ郡横<sup>よこ</sup>に屬して南部ノ三清光と戦ひ、國見、駒泣<sup>こまなひ</sup>等に於て軍功あり。柿崎左馬亮光鄰<sup>あかり</sup>或ハ應仁<sup>えいに</sup>年小野寺ノ家客佐藤式部太輔忠繼<sup>つぎ</sup>反<sup>はん</sup>間<sup>かん</sup>を投じて南部を計<sup>はかり</sup>、其功を賞して一門道<sup>いちもんみち</sup>一の居館樋口<sup>ひぐち</sup>館を佐藤に恩賜あり。于時柿崎光親に二の柵を分與して是を守らしむ。光鄰の子孫石見ノ光廣、天正十五年<sup>てんしご</sup>最上義光の家藩<sup>さけのべ</sup>鮭登<sup>さけのぼ</sup>典膳光次と有屋山に血戦して拔群の功あり。都べて世々忠戦、小野寺家歴代の功臣ノ名家也。小野寺古譜及舊記に著し。見えたり。

上樋口一村

○家員四十五戸 ○人員二百五十七人 ○馬員卅九疋。





○なごみのもり 大屋寺内一

○たくぼのみくさ 婦氣大堤三

○なゝつづか 赤阪五

○たてしふるまち 八幡七

○沼の水越し 上八町九

○わか葉の眞山 關根十一

○めをのたきなみ 明永十三

○くらしやま 杉澤十五

○たまぐらの池 大屋新町二

○春の日わたし 安田四

○みもこのやなぎ 三本柳六

○ふごやきたごや 静町八

○あまべうづき 上堺十

○みはらのまぐさ 三原十二

○いちのふるみち 見入野新田十四

○野中のみどり 杉目十六



○しらげづか 横手前郷 十七

○なゝのかみ杉 大

澤 十八止

なごみのもり

### ○大屋寺内邑 (一)

里長 堀江 平藏

○大屋は本<sup>ト</sup>大谷也、其いにしへは<sup>ヤ</sup>大宅のゆゑよしありしともいへり。此里正堀江はいと舊き家にて、大屋<sup>寺内</sup>新町兩村に家七戸ありし時よりの家にして草創<sup>くさにはげ</sup>なりといへり。もごも新町は此方より別れたる邑となもいへる。

### ○寺 裡 村

家今十五戸あり

○享保日記に寺内民家十三軒といへり。寺内は多かる名也、いづれも寺ありしを以て村名とす。此地にも祝融山正傳寺あり、此寺今は新町に遷<sup>うつせ</sup>り。

○初瀬<sup>はせの</sup>觀音祠

祭日四月十七日、齋主勘重郎。本<sup>ト</sup>國谷氏より五石の寄附ありし處にて、もごも國谷

の知行處也。

○辨財天女祠

祭日七月二十日、齋主庄兵衛。

### ○後

村

家今七戸

○享保郡邑記民家六軒とあり、今七戸也。此後<sup>コノノチ</sup>村を内郷とよぶ也。

○寺 村 家今  
五戸

○享保日記には家員六軒と見えたり、こゝにも寺ありしよしの名也。

○長 畑 村 家今  
八戸

○此長畑邑は享保の世にも民家八軒、今もまた八戸あるなり。

○堀 野 内 村 家今  
九戸

○此邑むかしは十軒とあり。堀ノ内、また寺中堀ノ内なごいと多し、古館、古棚の有<sup>も</sup>りし地に此村名あり。さりければ近きに日野備中ノ館ありしといふ。

○諏訪明神社 祭日七月十七日、齋主堀江平藏。祭日本<sup>ト</sup>御射山の如く廿七日たりしが、ゆゑありて十七日を祭る。古<sup>キ</sup>社なるよし。

○熊 野 澤 邑 家今  
九戸

○熊野澤村、むかしは民家七軒とあり、今は八戸、村上<sup>ニ</sup>に在る邑也。いにしへは此處に熊野ノ社ありてしかいへるか、知れる人なし。今は大山咋ノ神をいつきまつれり。

○日吉社 山王  
宮也 祭日四月十七日、齋主長兵衛。

○檜 澤 村 家今  
七戸

○享保日記には五軒と見ゆ。此澤は檜木多かりしよりいふか、村よりはいそ／＼遠く隔たりし處にて

馬鞍村を隣村せりといふ。

○

○神明宮

和談森といふ處に座り、祭日六月朔日、齋主大屋寺内、大屋新町、新藤柳田。なかむかしの事ならむか、大谷寺内、大谷新町、新藤柳田、此三ヶ村の人とら爭論して村々騒ぎたしが、やがて人々の心うち和むつひあひてしかば、そこを和談の森と名づけて、なほおほみ神をいつきまつれりといへり。

○大屋沼

周回三十六町。此地は大屋寺内の地にして村の南の方に在り、是餅田村新藤柳田村の古名をいふの人あまた足して、元和年中山間に水を湛て築たてたり。水は新藤柳田の田地六百石にかゝるといふ。平鹿郡の大沼也。

○田畠、字處

○十日市諏訪の森の下々あたりをいふ、むかしは市肆たちし地なるよし

○天狗が森山はたの名也、今は人もはら天下森と詛れり

○風比良かざひら 風井(かざあな)あるよりいへる、もろこしふみに蜀有風井

○珍らしげにいへれど、秋田郡男鹿の本山にも、其外にもさころくに風穴は有るなり。

○

○鎗刀一戈

上祖より傳ふといふ 堀江平藏家藏。

○古器兜

同 家藏。

○接骨藥水虎相傳

此河童相傳てふ霜藥くろみきころ／＼に在り、みな飲くすりとし、傳つたくすりとせり。また其正骨師を亦市と通號に呼んで能代をはじめ、わきて秋田に多し。また横手うらまち給人町本町新町須田源六郎家法に正骨、制藥あり、また仙北郡河口村の鷹背たかのし太右衛門が制飛龍散寄方也。もごも正骨、接骨、醫術あり、尾張の淺井家の如し。此水虎相傳と、いづこにも云ひて此藥多し。是をおもふに、此主藥といふは杠板飯也、此杠板歸を河童の尻拭しりぬぐひといふ處あり、また河童草さつといふ處あり、こは河童草傳をしかあやまり、あやしくも水虎にならひ、かつば相傳といへるもいかゞあらん。

たまぐらの池

○大屋新町村 (二)

里長 六 右 衛 門

○大屋新町は驛路往復の二三町東ノ方に在り。大谷寺裡の條にも云ひしが如に、大屋は總名にして新町、鬼嵐、中里、杉野下なごの枝郷あり。また寺々三箇寺ありき。

○新 町 村

今家四十  
戸あり

○享保郡邑記ニ民家廿六軒と見えたり。小野寺ノ時世には町肆ありて賑ひし處ならむ、大屋寺内にも十



日市の字地あり。

○ 杉 野 下 村 家今  
二戸

○此邑、新町の東南に在り、むかしは家三戸と見ゆ。此杉野下にさしふる○大山祇神社あり、をりさして神酒する齋る。齋主佐次右衛門。

○ 中 里 村 家今廿  
五戸

○中里、享保日記ニ民家廿二軒と見ゆ。此村に新田山光徳寺といふ東本願寺ノ宗派あり、ゆるよし、その寺のくだりに記す。

○ 鬼 嵐 村 今家  
八戸

○鬼嵐おにがらしはいかなる義にやと古老にさへば、そのむかし日野備中殿おは在しける時、城に通ふに嵐烈しければ、此暴風のりを罵言のり惡みて鬼嵐おにがらしとはいひつるが今もしかいへりといらふ。おにがらしは詛そるやうなれど五十日嵐いがらしの轉りなるべし。むかしは紅葉おもしろき處ゆる城主めて給ひしといふ。時の間に嵐ぞさそふ日數へて時雨も露も染し木の葉を、と、頓阿彌陀佛の詠める歌の意にやゝ似たり。日野備中某は小野寺ノ家士といへれど定さだかにえしらず、なほ後に考へ記すべし。

○山王神社 日吉山大圓寺、祭日九月十九日、別當兩學寺。

○聖徳太子社 此上宮太子はもともふりにし神像にして、新藤柳田の村北往復西方に鎮座よせり。いに

しへより法龍山祝融寺といふ。舊りにし地ゆる縁起、神寶等も傳らず、たゞ一郷の鎮守として此鬼嵐にいつきまつる也。としごとく四月八日祭あり、別當兩學寺。

○藥師如來ノ社 瑠璃山醫王寺、祭日太子ノ社ニ同。別當並同。

### ○名どころ

○手枕沼 此沼は斧、鎚、また鑿刀なごのせめの鐵輪を蔓といひ、また卷鐵、はちまきといへる處あり、また手纏といふ。此あたりにてもみな手枕といふ、蚯蚓にもしか名あり。此沼に中嶋ありて其めぐりに水を湛て、その形たまくらに似たれば名におへる也。

○あら沼 西南の山陰に在り。荒沼てふ事にや、また新沼てふ事によれるかとおもへばある人の云、此沼水にすむ雜魚は骨のあら／＼しき也といへり。

○鵲鳩ノ清水 往復ノ西、道の傍に在り。よき寒泉なれば、水無月の照りはたゞくころ往來人の渴をさぞめ、喉をうるほへるよき清水なり。さりけれど此魚鷹の名のいかにしてあるか、さる鳥の巢る處にもあらず、また汝が鮮造る岩なごもあらず。此あたりの田地の名さへ、みながら鵲鳩の字ぞありける。

○江津が庭梅 おなじ鬼嵐の江津彦右衛門が庭に在り。まことに大樹にして出羽、陸奥はいふもさならなり、かゝる梅の木は世に類かたやはある。花は一重のうす紅にて、里民は浪速梅といへり。

○阿倍氏 舊家也、安部平右衛門とていど／＼ふるき家にして、家に古き鎗を藏り。ゆるよしなほ後

にいふべし。

○ 田どころの名

○千刈田 ○貝窪 ○石揚 ○さかひ田 ○中里前 ○三百がり ○七百刈 ○佛が澤 ○竹ばな  
○大木下<sup>タ</sup> ○大橋 ○竹原 ○小中野 ○狐森 ○太子堂前 ○小松原。

○ 修驗兩學寺來由

○吉祥山兩學寺ノ鼻祖は陸奥國膽澤ノ郡水澤の士、俗姓酒水左近某とて英雄の武士たりしが、浮浪の身となり出家して難髪染衣に姿をやつし、諸國修業の心がけて永祿三年庚申ノ春國を退ぬ。其國にて寺久保の兵衛一流を極め、其傳法の一巻今に在り。かくて出羽ノ國平鹿ノ郡大谷ノ郷に來りしころ、小野寺ノ臣城主日野ノ備中某殿の皈依によて此處に居住<sup>とまり</sup>て、山王宮に宮林寄附ありて、すなはち此別當職に命せられて累世連綿として住ぬ。名を快永といふ。小野寺家落城しつれば日野家も亡落し、その跡を山館とまをして當寺にて今に守護しぬ。當寺の門の欄額<sup>かどがき</sup>は古欄の門の株貫<sup>かぶき</sup>にて緋桂にもて作り、丸の内に橘の家紋ありしを、近き世の木匠<sup>たくり</sup>が、なにのころもなう削り落したりといへり。

○開祖快永法印○二世永榮○三世永易○四世永養○五世永勇○六世永山○七世永順○八世永峯<sup>當代天明年中御公</sup>  
儀より御本田高十石拜領いたし御朱印頂戴す○九世永林○十世永鑲<sup>當代寛政年中新田高五十石拜領御朱印頂戴。當寺先年苑齋執行せし寺なが</sup>○十

一世現住永隆代也。

○兩學寺家藏如左

○法華經壽量品一卷

卷末に「開應八<sup>半</sup>己三月廿日

平半右衛門尉重俊持行之」と見え、また此經の裡ノ方

に別人の手して、「武藏國住人平半右衛門重俊、右小野寺上野守先祖、本國記に見えたり。」と見えたり。

○三尊の釋无尼佛十六ノ阿羅漢三幅對

滅齋の時の掛物のよしをいへり、古画也。繪佛師誰人といふ

事をしらず、まことに妙絶なる事目をおごろかしぬ。明兆の画にやこいへれど、金泥をちりばめし處

あれば、吉山の画にさる事はあらさなるといへり。此画裏に筆者……とあれど、磨滅して得よみこき

がたし、さりけれど草書ニ<sup>げん</sup>玄と書しやうなれば玄澤ならむかこ。玄澤は大和ノ國菩提山の僧、明應のこ

ろの人ならむといへり。

○一遍上人熊野權現ノ緣起<sup>一卷</sup>

時代、紙のふるび、さもあらむかとおもはれたり。是は横手ノ華嚴院に

同一卷あり、それやこれぞ原本ならんか。

此寺の寶物のあらまししかり。

○堀江治兵衛家譜

○清和源氏の末流にして堀江ノ義光第五代○下野守義胤○大炊助義定ノ金吾義則<sup>其男</sup>母深艸出也○義氏

續○義純<sup>法橋</sup>景光○足利判官義昌<sup>成義</sup>景光○岩次郎義範○帶刀先祖義賢○堀江堪四郎<sup>源實乃</sup>中將也

應永元年甲子正月吉日

義

景





此治兵衛が家に、先祖の遺物として年久しくひめもたるか、此とし正月ひらき見しかばし／＼のよしありといへり。

### ○正傳寺世代

○祝融山正傳寺は曹洞派也。そも／＼此寺の寺號山號は、いにしへ鎮守聖徳太子を神と齋き奉りたりし、天台、眞言などの僧侶住つる寺の號ならむかし。そを今し世となりて、役氏の別當にて山の號もかはり、寺號も法龍山祝融寺とまをすにこそあらめ。また此寺も平僧のみ住し頃は、大谷ノ寺内に在りて觀音寺とは號つるよし。明暦、萬治のころならんか回祿て、いにしへの寶物舊記も傳らず、たゞ元祿の年こなたの記録のみぞ傳れり。慶安元年の御檢地にも東西百六間、南北四十二間四尺御除地となりぬ。また骨外秀存和尚の代に法外の事あり、追院の罪をかゝふりしゆゑ骨外秀存は世代を省きぬ。廢寺と成りしを再興して祝融山正傳寺とは申也。

○當寺開山は海藏寺ノ三世に當る大州梵守和尚を勸請也大永五年乙酉八月廿四日遷化 ○二世通庵英徹和尚享祿五年己丑八月二十一日遷化

此三世の間骨外和尚の事にや、さたかならざる也 ○三世清山本雪和尚天和二年十一月六日遷化 ○四世別山本徹和尚享祿三年十二月廿二日化

○五世湖山用吞和尚元祿二年十一月十六日化 ○六世機安高全和尚寶永四年八月朔日化 ○七世日峯大映和尚享保四年十一月六日化 ○八

世大巖龍泉和尚寶曆元年十月廿九日化 ○九世日舜義光和尚寬延三年八月廿三日化 ○十世興一箭智舜和尚寬政八年六月三日化 ○十一世天岩逆

長和尚寬政九年九月廿六日化 ○十二世德翁蜜鄰和尚文化十四年十二月廿九日化 ○十三世大雄萬固和尚文化十三年四月七日化 ○十四世大達亮禪和

尙文化九年十一月八日化

○十五世禪榮玄高和尙

荒川村長泉寺へ移轉也

○十六世現住禪教機徹和尙代也。

右

十六世正傳寺。

○光 德 寺 一向宗

○大谷村新田光德寺は東本願寺御直末也、新田光德寺といへるは新田山といへるが如し。開創は釋、圓祐也。圓祐、俗姓は新田次郎右衛門尉興德と號ふ。新田義貞、三男義宗、二男新田二郎右衛門義齊、始めて陸奥、國和賀郡黑澤尻村に住居ぬ。すみ義齊、嫡男元齊俗名の代に相模國にうつり住て、元齊の嫡男新田源三郎正興同處に居住し、正興の次男新田次郎右衛門尉興德、則此圓祐也。しかるに文正、應仁の世は五畿七道大に亂しかば、一族のやから、かゝらば足利家のために滅亡ほろびなむと鑑宗かみむねて、嫡子藤左衛門尉と共に薙髮染衣の發心ありて、本山八世蓮如上人の御弟子となりて興德が法號を圓祐と給はり、また藤左衛門正乘は實名最淨土眞宗の法意に適ふ名也とて、正乘まさなりが諱を以て正乘しやうじやうとと呼ばせ給はり也。かくて本山九世の實如上人に仕へ奉りぬ。圓祐ふたゝびみちのくにくだり、弘法のためにふるき因縁をもめて黑澤尻に至り、先祖の傳來の名號を本尊として一字を草創くさくわうて、自が諱の二字を附て寺號を興德寺といふ。文龜三年癸亥二月十七日、壽九十歳にして其地にて遷化。法號實如上人の眞筆也。

「法名

釋

圓

祐

文龜三年二月十七日

釋

實

如

御花押

雪出羽道(平鹿郡十二)

〔天註〕——武家評林諸系圖云、佐々木三郎盛綱七代孫高德云々、義貞討死以後大和國多武峯ニ引登入道シテ義清法師（ト云、又志純法師と云。前後宮方ニテ度々勳功文武兩道ノ士也と見えたり。高德寺系譜にはいさゝか齟齬せり。）

○二祖正乘圓祐ノ嫡男、俗名藤左衛門、大永六年丙戌三月十六日化

當代、實如上人より大幅の一軸阿彌陀佛画像を拜領て黒澤尻（いさはり）に下

向、寺務相續せり。画像の御裡書は則實如上人五十八歳、眞翰也。その御裏左のごとし。

大谷本願寺 釋 實 如 御花押

方便法身尊像 永正十二乙亥七月廿八日書之

奥州和賀郡  
久留澤尻

新田 光德寺

願主 釋 正 乘

此画像は只今所持するところ也。圓祐（はじめ）創の寺名乘興德の二字をもて寺號とせしかど、實如上人、興字を

光字にかい改て給りたる也。かくて永正十六（己卯）年ふちのく飢饉して黒澤尻を出て、出羽ノ國此平鹿ノ郡

馬倉邑の上ノ臺といふ處にうつり住て、大永六年丙戌三月十九日馬倉の上ノ臺にて遷化也。正乘、嫡男次

郎右衛門後に徳兵衛と改め、また布右衛門といふ。此家今斷絶。

○三世淨專正乗ノ二男也、文祿元年壬辰八月三日化

當代、本山十世證如上人より小品、阿彌陀の画像頂戴、御裡書は則證如

上人の眞翰也。内佛に今安置し奉る也。大谷ノ城主小野寺家の家臣日野備中守某の皈依に依て、永祿、

年中馬倉村より大谷邑に遷りぬ、今の光德寺是也。日野備中守ノ後胤、今同郡角間川ノ給士日野治右衛門

某、同苗小左衛門某、高山孫左衛門某等、則當寺檀越の家也。尤鎮守ノ社、廟處等も當寺に在る也。

○四世淨慶淨事ノ二男宮内卿と號す  
慶長六年三月二十日化

永祿の後小野寺家と最上勢と對戰のとき出陣世俗の淨説に  
も傳ふなり勳功により

て、小野寺氏より刀一腰、田當村ノ内  
千刈田也畑當村ノ内  
本願屋敷山當村ノ内  
佛ヶ澤等寄附ありし處に、當村ノ大隅雅樂之介先祖。大  
谷七ヶ村ノ總肝煎此田

畠山に至るまで押領せしかば、雅樂之介數度の火災にあひぬ。是わが祖、由緒ある地を押領したる罪な

らむと恐て、寛永年中佛ヶ澤の内一ヶ處證據  
澤を當寺に寄附す。

○五世眞擔淨慶ノ嫡男也、承  
應元年正月三日化

本山第十二世、御門主敎如上人東西分流のとき、仙北三郡最初の飯參。

○六世淨德淨慶ノ三男、眞擔ノ實弟也  
寛永二年十一月九日化

○七世永玄淨慶ノ四男、眞擔ノ實弟  
也寛永九年十月十日化

○八世乘顯眞擔ノ二男也、貞享二年  
乙丑六月二十二日化此代本山十

三世、御門主宣如上人より達如上人の眞影を免さる。この画像の御裡書は則御門主宣如上人の御染筆也。

本願寺 釋 宣 如 御花押

達如上人眞影 寛永十五戌寅暮初秋廿三日書之

出羽平鹿郡横手大屋村新田光德寺常住物也

願主 釋 乘 顯

○九世淨玄乘顯ノ嫡男、寛文五年  
乙巳四月十六日化

本山十四世琢如上人より木佛尊像を免さる、御門主眞筆の證あり。

釋 琢 如 御花押

羽州平鹿郡仙北

木佛尊像 万治三年庚子賜氷節

横手大屋村新田

光 德 寺 願主 釋淨玄



○十世祐心乘顯二男、淨玄ノ實弟、寶永元年甲申十二月十三日化

本山十五世常如上人より開山聖人の眞影を免さる、裡書は御門主、

眞翰也。

大谷本願寺 釋 常如 御花押

親鸞聖人御影 延寶四季丙辰夏五月中旬書之

羽州大谷村 新田光徳寺

願主 釋 祐 心

○十一世了空祐心嫡男、延享四丁卯八月十三日化

本山十六世一如上人より元祿七年甲戌、太子七高僧、御影免さる、御裡

書は則一如上人の眞筆。寶永元年飛檐出仕免さる、其外一宗の定式、佛像、繪讃、洪鐘等悉周備す。正徳

六年五月廿日參内、權律師勅許繪旨頂戴せり。

○十二世義琳了空ノ嫡男、天明四年甲辰四月十五日化

元文五申年佐竹淡路殿より五十石寄附、高あり、此高後に御祿高ニ減

少節御割合を以引上ニ成ぬ、右殘高明和五年中又候御借上高ニ相成、其節御屋敷へ無殘返上。右高五石、

永代寄附ニ付置れ唯今の所務高五石也。此代○延享四年丁卯八月權律師勅許宣旨頂戴、長橋參内、禁中

仙洞御所、女院御所直獻上、攝關傳奏、上卿辨官職事、何直獻上。○寛延元年辰六月、從如御門主思召を以

て御取立余間御一家昇進輪袈裟免さる、並眞如上人、眞影を給ふ、此御裡書は則從如上人、眞筆。同二年

已八月本山御殿失火にて同上京、御内證之獻上一枚、則於白書院御對顔、平座御褥御着座御言有之。奏者

時御用人苗村民部。○寶曆十二年歲御門主乘如上人内陣出仕免さる、並銀子廿枚拜領。右は寛延年中改派寺之儀兼、蒙仰落着之爲御褒美御取、御事。同年春改派寺、儀付御内々蒙仰上京、木山表御順宜相濟候爲御褒美同年十二月、高廿石拜領、三ヶ寺爲扶助料玄米三十石被下置祿寺、被召立、未八月御朱印頂戴。同年十二月爲御國用御領内東一派觸頭被仰付候御事。明和二年御君様御入府、六月廿五日御目見被仰付於御城金、間御盃頂戴、獻上十帖一本。○當寺は仙北三郡東一派寺號建立之始也。

○十三世宗荃六郷長明寺淨智ノ二男也、文化二年乙丑十二月十六日化

安永五年申十一月三ヶ寺古御繪替、御領主様御懇望にて從本山

右御繪替御進達被爲有之候、類年來御取扱、御双方様御順宜、被相濟候爲御賞美金子十兩拜領被仰付候事。安永七戌年十月、三ヶ寺地面拜借被仰付候事。寶曆年中頂戴、御朱印御引上、寛政七年卯十一月、御黒印頂戴。此御判紙寫。

○二十石 六ッ成

光 德 寺

内十三石 平鹿郡大屋新町村之内

同 七石 同 郡外之目村之内

寛政七卯年十一月十五日 (御黒印)

○十四世現住義亮宗荃嫡男、母、義琳ノ嫡女也

○此代寛政十二申年本堂再興造作悉皆周備す。○文化十二年亥七月

九日入院御届相濟。○本山二十世乘如上人、眞影免さる、御裏書則御門主、眞筆也。○文政二卯歲庫裡

造營悉皆備。○第二世正乘之三男淨祐を以て、當寺の別院越中、國新川郡新町光德寺開基す。淨祐後ニ淨圓と更名す、今以連綿本末、式無滯。

○傳來、寶物

○十一面觀世音一軀、行基僧正御作俗姓守本尊也。○色紙詩歌七枚尊應親王御眞翰。○備前長則片刀一腰。かたな○今上皇

帝御宸翰一幅。○大佛宮御眞筆一軸此一軸は伯父儀祐錦織寺御門主常慈上人より拜領ノ品也、當寺に寄附す。○善導大師半金色、御影一軸、圓光大

師御眞筆。○琴高仙人、山田道安、筆。○百人一首上下二冊、堂上方御筆、御名不詳。○天樹院君御

筆一行書。寛政十年戊午、春小野寺主水を以て御取次として、傳來の人麿の木像を獻上のごとき君より拜

領の書といへり。此人麿、神像は頓阿彌陀佛の自作といふ。考ルに頓阿法師神に祈願して、三輪山の神杉

を乞ひもこめて百體の人麿の神形をみづから作り、一軀に和歌一首づゝ、月雪花の詠歌百首よめりとい

へり。其百體の人丸のみかた世みちくたりといへり、其一柱にや。○無々、額、天樹院君、御眞翰。町

田大之進御取次を以額安養界、三字横物拜領、文化十年酉、秋此三字額御引上、同十一年戊正月無々、二

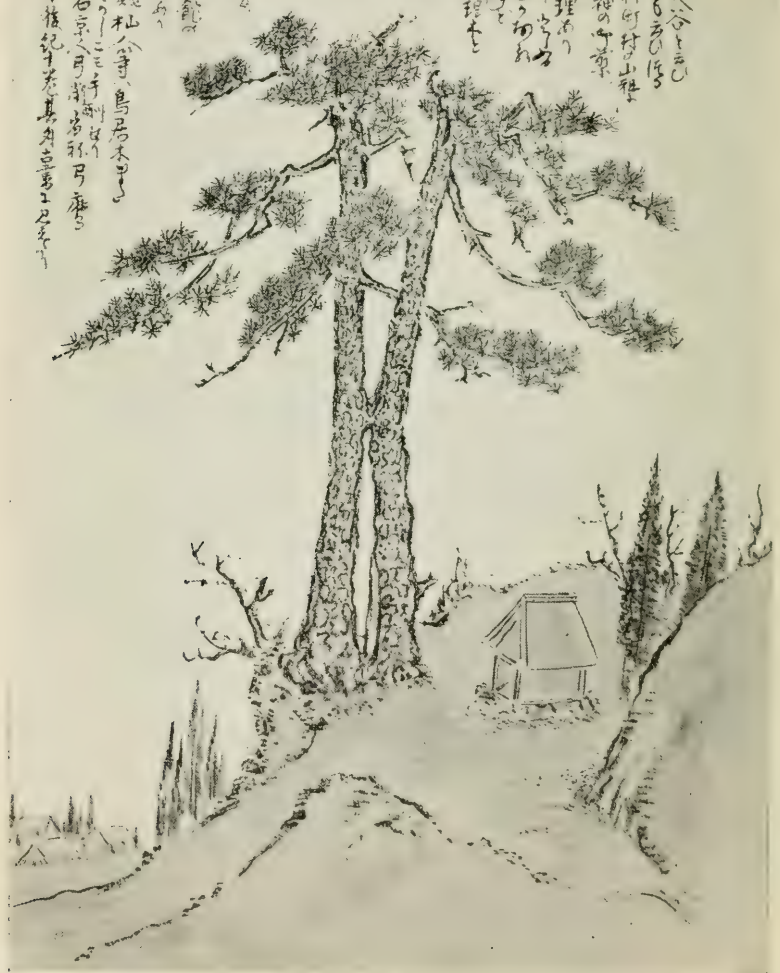
字御書替拜領。黄金色の文字に彫刻て地は紺青を彩て、今本堂に懸奉也。○經藏の額、鳳譚の筆也。

○

口宣案

上卿中山中納言

大原号 中六六合と云  
 いり大原とも云ひ  
 り州大原新町村山社  
 太山神社あり地神の山草  
 者一本建理あり  
 相傳ふまやうなる  
 亦相傳ふまやうなる  
 不建理なりと  
 一建理本と  
 地正龍廟なり  
 召へる本建理  
 土田利と都  
 福地と  
 梨乃名建理  
 一の沐と  
 梨生大明神  
 と云ふて舟船なる  
 相傳ふ  
 同郡増田村古龍  
 向心杉の建理あり  
 此木建理と山賊杉  
 山神の書居とて  
 弘仁じつと石京へ  
 張本建理と日本  
 張本建理と日本





大屋郷大梅樹

他郷大梅樹

甲子年五月、庚辰在り

本高三丈四尺

東西十二間南北

十四間枝をろり

周圍一丈一尺

花はくちを紅きて

満開の時、かく

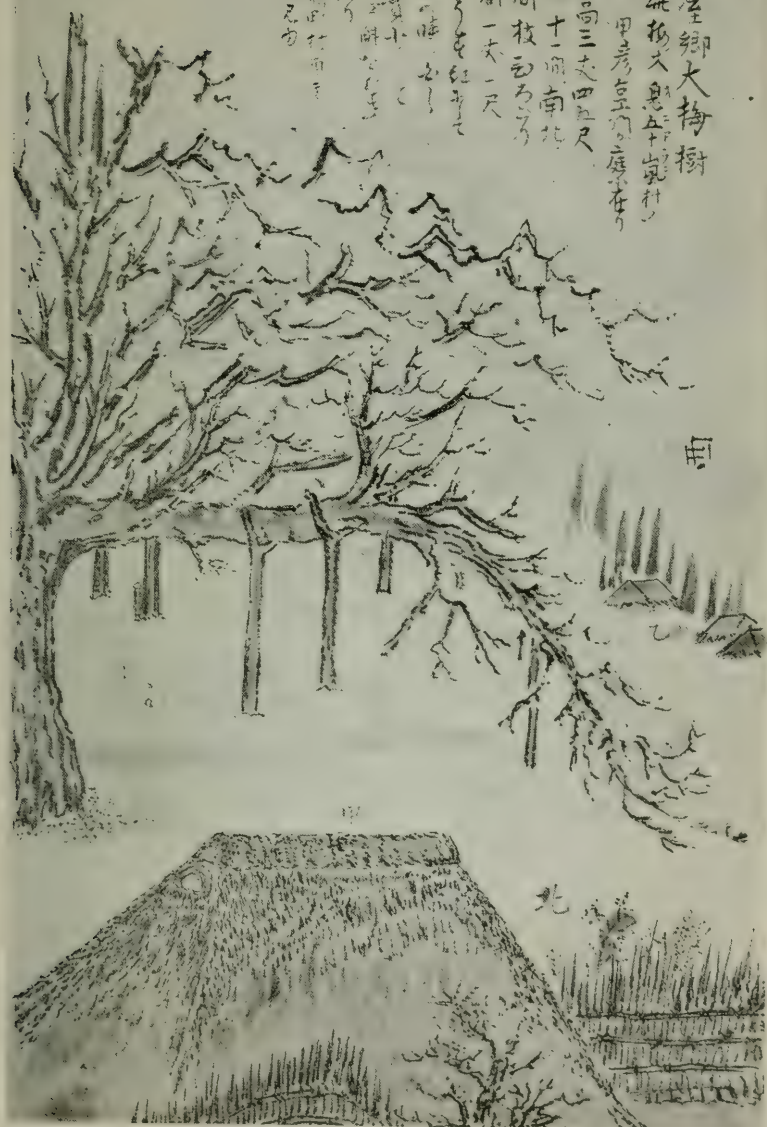
其香臭小

し三ノ餅をいそ

とんり

乙新田村面き

よる方

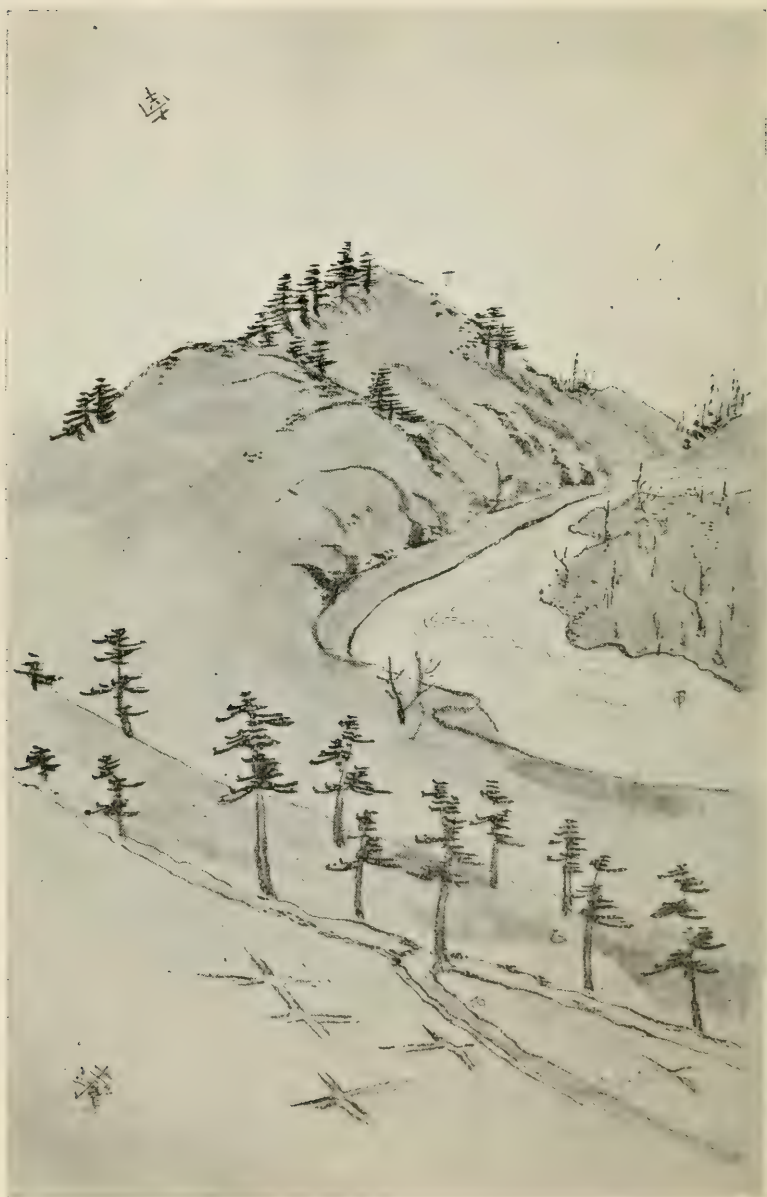




手枕の池

手枕沼ともいふ池沼を甲  
 往復の街路 大屋村路  
 いと近く丁太子山北  
 龍旗山次第第ふ中て  
 あつても池とを世あつて  
 斧鉞をうづつて  
 鉞鉞を斧鉞と  
 三ひきその形を  
 大なる地明を  
 も池とつて  
 池水のさへ  
 それをうづつて  
 三ひきいす  
 地事本行ゆ  
 三ひきいす  
 三ひきいす







賜旭寒泉

往還の道の傍 白毛角を越すに  
一里堆入南に石垣蔵蓋葺の近  
有りむく奥 舊の地味は揃り  
魚満しるを以て 賜旭清水  
名ありとも みるごとく  
丁女が 銘を祇しより 人をも  
むらびく 美佐子はあ  
るあつり といひ 井丁に 夫の  
女も あり こと 西のう人 又 賜  
此らむを ひさぎ 人め  
いふ こと 足知りとも いくも  
せしむ こと あり  
を あり こと あり

歌



正德六年五月廿日

宣旨

了 空 宣任權律師

藏人權右中辨兼左衛門權佐藤敬孝 奉

了 空 ○

權右中辨藤原朝臣敬孝傳宣  
權中納言藤原朝臣兼親宣奉  
勅件人宣任權律師者

正德六年五月廿日

修禪大寺大佛官殿藏左大史小槻



奉

口 宣 案

上卿左兵衛督

延享四年八月十二日

宣旨

義 琳

雪出羽道(平鹿郡 十二)

宜任權律師

藏人左中辨藤資興奉

義琳

左中辨藤原朝臣資興傳宣

權中納言藤原朝臣顯道宣奉

勅件人宜任權律師者

延享四年八月十二日

修理大寺大佛官殿願左大史等博士小槻禰

 奉

たぐほぬみくさ

○婦氣大堤邑 (三)

里長 小右衛門

○此邑は婦氣と大堤と二郷一合にせし村名也、此たぐひいと多し。沼三箇處に在り、その沼渚みづといふ

は○田窪沼其周囲十八丁○大沼たぐほぬみより劣たり○小沼大沼よりなほ劣れり此沼水を以て八十斛の稻田を佃つくるこいへり。また婦氣

は埴田ぬまたをもふけと云ふ、また泓ふけは深池の約りにや、ふる池の約りにや。鐵包にふけ箇といふは火口の古

なれるをいへば、湫ふけは古池なんごをいふが本ほんならんか。尾張ノ國に御筆陶おひづみとて天目、すゑ皿焼やぐによき土あり、池の底に在りて、みだりに人の探らん事を制禁いさひて恒には水を湛たり、そこを御湯おゆといふ。此處にも田窪ノ沼あるをもて泓とや云はむ。また池をさして堤ふけとはいづこにてももはらいへど、わきて北國の人凡池を堤ふけといへり。此大沼を大堤として泓大池ふけおほづみの名は有ける也。

○野中村 今家 一戸

此村寶永元甲申年創りて、民家三軒ありしよし郡邑記に見えたり。

○稻荷明神社 祭日八月十八日、別當新町大谷兩學寺。

○田ところの名

○牛が頸戸山本郡朴木瀬枝村に同名牛野首頭村あり ○郷士館。

○ハッ口兵助が事

○八口兵助は、そのむかし前郷村のハッ口三枚橋といふ處に在りし家也。國守義宣公の御代には墨黒といふ名馬を獻り、また新墾の功ありし事、公よりの證文にも見えたり。今は大堤ノ兵助とて其後なほあり。

○

○惣民家三十二戸 ○人員百七十八人 ○馬二十五疋。



臨書

大堤邑無助家藏

思、石、高、基、延、上、而、日、神、妙、不、新、能  
有、以、近、出、一、以、事、方、小、仍、以、地、之、因  
在、在、處、其、以、乃、以、有、地、之、祿、永、代、之、福  
陳、以、有、其、免、不、以、其、以

元和八年

戊午月

楊守書

八、二、江

無印

春の日わたし

# ○安田邑(四)

里長 利兵衛

○此村横手の西南、また驛路往復の西<sub>レ</sub>方に在り。享保郡邑記に家員七軒、日渡村家數三軒と見ゆ。此口渡邑、天明三四年卯辰<sub>ノ</sub>兩歲、飢饉<sub>ニ</sub>しに廢村たりといへり。

○馬頭觀世音舍<sub>也</sub>古佛也

祭日八月十九日、別當大谷新町修驗兩覺寺。

## ○田地字

○日亘<sub>ひわたし</sub>聞えたる名也

○八王子<sub>いさどか</sub>子なる名也

○向<sub>む</sub>田

○鉤栗澤<sub>かき</sub>

○大代<sub>おほたい</sub>多き名也

○柳塘

○館平<sub>たて</sub>

○馬場。

此館はいかなる人の居館<sub>すあり</sub>とも傳へあらねど、按<sub>ル</sub>に、關根村の伊藤與五右衛門が十代先<sub>き</sub>には安田邑に居住<sub>なる</sub>よしをいへり。與五右衛門が上祖、瀧口、次官藤原、季武にして、後三年の戰の時は將軍義家朝臣に大豆を貢にせし家なるよし、その館<sub>い</sub>なごに住たらんものか。馬場の跡もありき。

○惣民家十二戸

○人員五十六人

○馬七疋。

なつづか

# ○赤坂邑(五)

里長 勘

介

○此村横手の西三十町にあり、家員享保ノむかしは四十軒、今三十六戸あり。枝郷じやう城野岡、森崎、柴崎、伏シ山といへり。

○七ツ塚といふあり。そは藤原塚、鎌田塚、高橋塚、高山塚、佐藤塚、菅原塚、池田塚、しか七、塚也。いに

源氏

平家

しへぐるむじの浮浪にや、ふえくるのおちうごにやこゝに身を潜みて土民となれば、上祖よりの姓氏も

つりぶくろ

なにゝかはせんとて、系圖袋に名苗氏添ておのもゝみな埋みて塚せしといへり。其末葉なほあり。

○佐藤勘介○高橋茂左衛門○藤原三郎兵衛○菅原六兵衛○池田五兵衛○鎌田喜三郎○高山兵右衛門、此七人リの人とら也。

○正一位稻荷大明神ノ社　大杉生たり、祭日八月廿九日○齋主郷中。

○本郷赤坂邑民家三十戸。

○城野岡村  
じやうの　をか

○城埜岡は赤坂より西ノ方也、民家十戸あり。

○大山祇社あり、をりとして神酒祭るといふ。

○森崎村

本村の西北にあたりて民家三戸あり。

○柴崎村

○おなし方にあたりて、此柴崎に五助、九兵衛が二戸あり。

○伏 山 村

○伏山は北にあたり、民家四軒あり。

○愛宕社二間  
四面

西南に向つ、祭日六月廿八日、別當本明院。

墓田碑

横平赤坂之間田高道低當朔風  
捲雪之時寒水没胫十尋之間涼  
死者九人里止為之遠官丁丑年  
築道以便往還庚辰歲是以吊既

世話人

赤坂村

佐藤勘助

前御村

嶋森和三郎



○白山社一間  
四面

南向キ、祭日四月十六日、齋主伏山郷中。

○田地字

○下三枚橋

○郷士館

○荷坂下タ

○土井下タ

○狐森

○橋本

○柳下タ。

○大沼、村ノ南に在り、亘リ三百間許。

○横手より赤坂邑に入ルに碑あり、小栗忠藏某ノ書ケりといふ。其石、高七尺許、横三尺斗也。

○民家三十六戸 ○人員三百四人 ○馬二十疋。

みもとのやなぎ

○二本柳邑(六)

里長 市 重 郎

○としふる三もこの柳なシごのありしよりもていへる名にや、みちのくにもさる名ありとおほえたり。  
享保日記に家十八軒、今廿八戸あり。

○助太郎小屋村

今家  
四戸

○助太郎小屋村、享保日記ニ五軒と見ゆ。これ某小屋な、某小屋くれとて、いにしへありしといふ四十八小屋の

内の残りつる名也。

○六郎小屋村 家今三戸

○享保日記には六郎小屋村民家六軒と見ゆ、みづか前まへにいふ四十八小屋の餘波也と見えたり。

○八幡宮 祭日八月十五日。そも、此社は須田内記某ノ齋神なるよし。

○神明宮 祭日同月同日。齋主里正なりといへり。

○田ノ字

○繩手そひ ○樋こまがゝり。

○惣家員卅八戸 ○人員百六十人 ○馬八十疋。

達石古壁

○八幡邑 夜波多 (七)

里長 新太郎

○郡邑記云ク、往古正八幡宮有、神領前郷村御物成ノ内五石宛神主高瀬安藝高受取成神祭。民家十軒。云々と見えたり。

○八幡宮 祭日二月初卯ノ日、八月十五日也。祠官高瀬寛重則高橋友之進。いにしへの社地を今本宮とて杉二本

生<sup>なま</sup>り、もご、そこにおましましてふりにしみやしろながら、ゆるよしさだかに傳らず。唯、そは小野寺家より代々に修理を加へられつるよし。亂れし世に燒亡<sup>やう</sup>てもものも傳らねど、石燈の柱の其長四尺斗<sup>と</sup>なるに「正八幡宮文祿四年義道」とありたるを見て、二百餘年のむかしをしのぶにたれり。

○稻荷明神 齋主新太郎。

枝郷一ヶ村あり○石町村<sup>家今在十二戸</sup>享保日記ニ民家九軒とあり。○此邑の東北の方に石あり、高サ一丈斗幅四尺四方、要石の如<sup>ごと</sup>其深<sup>サ</sup>はかりもしらずともほらいへば、人こら集りて掘りにほりしかば、五六尺も掘れどなほその底知れされば止ぬといへり。此石あるをもて石町とて、小野寺の時代は肆家<sup>あきびと</sup>の住家たらむか、また荒町、長者町の名田畠に残りてあり。○八澤木ノ郷保呂羽山下居ノ宮別當上祖遠藤九郎次郎勝親朝臣より十八代遠藤對馬、正保、明應年中油利ノ忠八ト横手ノ小野寺ト合戰ノ時小野寺に屬シ度々高名アリ。○永正六年七月十八日横手ノ石町<sup>チ</sup>一木治部ト同行<sup>シテ</sup>、御嶽山鹽湯彦ノ神社<sup>ヲ</sup>奉<sup>レ</sup>始仙北秋田六郡順見<sup>ス</sup>。天文二年癸巳七月十日行年九十一歳<sup>ニ</sup>死<sup>ス</sup>。ト家系譜に見ゆ。また此事、古本秋田六郡順禮記にも見えたり。

○村上源系圖

八幡村 新太郎 家藏

○上祖守重 村上衛士形部また八郎右衛門といふ。母ハ河村市右衛門ノ女也。御當家義隆公ニ奉<sup>レ</sup>隨小勝郡小野村、平鹿郡八柏村、吉田村に於て百五十石を領地とし、横手ノ内前郷に居住<sup>シ</sup>、後御賞に依て久保

田<sup>ム</sup>移<sup>リ</sup>朝日四郎兵衛娘<sup>ヲ</sup>を娶り、無<sup>ニ</sup>男子一<sup>ニ</sup>女あり、故大越因幡ノ二男を智養子とせり。承應二年三月廿日行年六十八歲<sup>ニシテ</sup>於<sup>ニ</sup>久保田<sup>ニ</sup>死去<sup>メ</sup>、法名頂山龍門居士、寺は元來横手ノ大儀山正平寺也。同三年三月二十日故守重<sup>頂山龍門</sup>爲<sup>ニ</sup>回向、横手菩提處正平寺高五十石を寄附し五倫塔を建立す。妻寛文元年七月四日行年七十歲<sup>ニシテ</sup>横手於<sup>ニ</sup>正平寺<sup>ニ</sup>死去<sup>ス</sup>、法名正法院心了大禪定尼。

○守忠 村上掃部、新右衛門といふ。母は朝日四郎兵衛女也、實大越因幡ノ二男、智養子也。明暦元年故有<sup>テ</sup>豪<sup>ニ</sup>御勘氣<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>身ノ立處無<sup>レ</sup>之、元來柳生流ノ劍術ノ達人<sup>ニテ</sup>諸國武者修業<sup>シ</sup>南部ノ内川尻にて強盜七人<sup>ニ</sup>出會<sup>ヒ</sup>一人を打留<sup>メ</sup>二人を切付<sup>ケ</sup>、殘<sup>ル</sup>四人を追ひ散らし、此<sup>ノ</sup>勳<sup>キ</sup>に顯<sup>キ</sup>名譽驚怖。寛文七年五月、南部信濃守利直公所望<sup>ニ</sup>依て南部森岡<sup>ニ</sup>住居<sup>ス</sup>、二十年貞享三年五月、御暇ヲ申請<sup>テ</sup>南部より再<sup>ヒ</sup>横手に住す。元祿元年正月二日行年六十三歲<sup>ニシテ</sup>死去<sup>マ</sup>、法名頂冠院譽明居士。妻寛文元年三月廿一日行年三十歲<sup>ニシテ</sup>横手於<sup>ニ</sup>正平寺<sup>ニ</sup>死去<sup>ス</sup>、法名春光院妙了大姉。

○守隆 村上民部、八郎右衛門と云ふ。母家ノ女<sup>ニシテ</sup>八郎右衛門守重ノ娘也。馬乘ノ名人にて戸村公、御抱<sup>トナリ</sup>て上野臺<sup>ニ</sup>住<sup>マ</sup>、元祿三年二月無禮有て、祿を召<sup>シ</sup>上<sup>ラ</sup>れ御暇<sup>マ</sup>たまはり横手ノ鍛冶町に住居し、柳生流兵法家傳し弟子五十人斗<sup>リ</sup>指南し安樂に住し、元文元年辰四月十七日行年五十歲死去。法名德照院心譽養安善居士。元來禪宗にして大儀山正平寺<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>し處、天和二年ノ二月寺論有<sup>リ</sup>しに依て改宗<sup>シテ</sup>横手山九品院西光寺を菩提寺とす。妻寛延三年午四月十七日行年七十九歲<sup>ニシテ</sup>死去、法名光了院駕譽妙藏。



清大姊。」

○守清

村上貞治、八郎右衛門、また新右衛門といふ。母は松ヶ崎家中佐藤七兵衛信宗ノ女。横手鍛冶

町ニ居住。

年廿歳ニシテ享寶五年六月八幡村ノ肝煎役頼れ相勤メ、後に八幡村に移リ、延享丑年、水懸リ御高三

千石餘の小刀ナ堰ニ申は横手町中へ通リし堰にて、此堰大ニ狭リ水行キ不レ通して年々欠ケ損ジ人々心痛の處、

此堰幅古來の通りに相改め水通し、三千餘石ノ御田地へ自在に水引取り、寛延元辰年草飼、薪伐山東山に於

て、仙北郡六ヶ村より平鹿郡十三ヶ村へ沙汰申懸られ爭論に相及び、御檢使役御再應ノ御吟味ノ節山境仕

分ケ、平鹿郡十三ヶ村の御高七千六百餘石、御田地爲ニ助成ニ右東山利運にいたし、爲ニ末代ニ忠進。當村

貧郷にして一村の相續なりがたきに依て御公儀へ願段々申上テ、明和四亥年御改正御竿申請々村方相續

仕リ云々。安永十丑年四月三日行年八十三歳死去、法名成就院最譽勝壽居士。妻、寛政二年戊八月朔日

行年七十九歳ニシテ、法名無量院祐譽妙如清大姊。」

○守秀

村上新三郎、また四郎兵衛といふ、母、久保田の家士助川彌兵衛信忠ノ娘也。實、新藤柳田村

照井彌左衛門一男ヲ養子ヌといへども、元來岩城伊豫守秀隆公御嫡子次郎公御早世に依て、松平陸奥守吉

村公ノ御舍弟御養子也。其時岩城家騒動す。依之我父瓜生要人自害メ、故ニ龜田より浪人せり。照井彌左

衛門は元より縁者たるに依て彌左衛門か二男ニ成り村上ノ聲ニ成る、實、岩城右京亮隆泰公ノ浪人とい

ふ。此妻、家の一女也、共に父の心になはざるに依て別家となる。然る所照井彌左衛門家内へ引取リ

度願ひに付右別家残りなく彌左衛門方へ引越し、九品寺西光院より寺暇を申請<sup>ク</sup>、彌左衛門菩提寺大谷村光徳寺檀家と成る。依て彌左衛門方より又別家と成りて十年斗新藤柳田村に住せり。しかる處また同村にも住居いたしかね、亦候村上新右衛門守清方へめしかへくれ候やうにご願ひに付<sup>キ</sup>、家内残りなく引取、新右衛門方より又別家といたし置たり。依て四郎兵衛寺は大谷村ノ光徳寺也。寛政元年酉十二月十一日六十七歳<sup>ニシテ</sup>死去、法名釋榮現。」

○守家 村上良助、また新右衛門といふ、母ハ久保田助川彌兵衛信忠ノ女也。實ハ南部大膳太夫利視公ノ家士ノ浪人にて播磨嘉右衛門、羽州大曲村に住<sup>ス</sup>、本苗ハ赤松氏也。先祖赤松次郎入道播磨國<sup>ニ</sup>住<sup>シテ</sup>故柴某ト云<sup>フ</sup>、依<sup>テ</sup>赤松、村上兩家一族たるに依て嘉右衛門ノ二男を智養子とす。則八幡村ノ肝煎役を相勤め、寛政三年亥九月八日五十九歳<sup>ニシテ</sup>死去、法名正覺院台譽天善居士。」

○守諸 村上石五郎、八郎右衛門、また新右衛門といふ、母ハ家ノ二女なり。十六歳より八幡村ノ肝煎役を勤む。男子女子あり、依て檜山多賀谷ノ家士佐藤兵助ノ二男を智養子とす。享和元年酉十月杉目村ノ内野中ト申處は村々入會の場所論地に成り、御檢地關勘左衛門殿、阿部清左衛門殿、遠山長七郎殿三人御出、御再應御吟味ノ節地境仕分<sup>ツ</sup>組合村々十三ヶ村利運となり、末代までの忠進也といへり。

○守廣 村上新太郎、母塚元七右衛門女。此七右衛門祖父塚元因幡と云て松平陸奥守綱村公に仕<sup>ル</sup>、寶永元年三月發向に依て、人の嫉を請て故に御暇を申上、不叶間逐電す。横手住<sup>ス</sup>、依て七右衛門とて三

代なり。實は醍醐村佐藤兵部ノ二男を髡養子とす。云々と見えたり。

○惣民家十八戸 ○人員八十九人 ○馬十四疋。

ふこやきたごや

○靜町村(八)

里長 權 兵 衛

○靜町は閑寂なる地にてしか名附たる處かと思へば、さるよしならず。按ルに、小野寺時世の町にてここに清水やありしならむ、此あたりに清水をもはら寒泉しづと方言いふ、そを以て清水あるてふ肆よちなれば清水が町といへる事を靜町しづかの字に作るなるべし。享保郡邑記に、民家十軒、枝郷○春小屋はるこむら民家七軒此邑今は廢たえたり、○北小屋家四戸。某小屋某小屋とてむかし四十八小屋ありつるよし。

○神明宮 一萬度ノ御祓串を納めていつきまつれり。祭日八月廿一日、齋主郷中諸家。

○村中家員十四戸 ○人員七十五人 ○馬十疋。

沼の水越し

○上八丁邑(九)

里長 八 右 衛 門

○上八町、下八町と別村たれど、むかしはたゞ八丁とて一村なりしといへり。享保郡邑記ニ、上八丁、總名ニ唱ッ○谷地中村家員八軒、此村を上八丁村ト可唱也○天神町村同一軒今三戸○上小屋村、古ト三軒今五戸○明永村、古二軒今三戸○水越村、古二軒今二戸○森崎村、古二軒今一戸○赤川村、古一軒今一戸云々と見えたり。此内に谷地中邑は廢村人家なし、慶安の始までは佐々木右馬之丞某とて舊家もありし處也。其右馬之丈が後胤はさゝ木八右衛門といふ、今の里正是也といへり。

### ○谷地小屋村

○谷地小屋は、某小屋某小屋とて、そのむかし四十八小屋ありし事古記録に見ゆ。

○稻荷明神社 祭日九月九日、齋主六右衛門。

### ○天神町村

○菅神社 祭日三月廿五日、齋主市兵衛。むかしは八月廿五日の神事たりしが中ごろ託宣ありて、今はしか春祭とはなれりといふ。此神形は紫磨金くがねを以て鑄奉たる一寸八分の神像なりけるよし。そのくがねの菅大臣ノ神形は、小野寺氏の祖藤原義寛朝臣に鳥羽院より賜ふところの神像ながら、武運長久祈りの爲に小野寺時道の一社建立ありといへり。其紫磨金くがねの神影は、横手の土坊本町どまのまちといふ處の須田忠右衛門某の家に在り、そは其家の知行地なればかく此家に祕藏おきて、春祭やよひのそれの日は、かならず天神町村の神殿にうつしまつり奉るといへり。みやごころには梅松櫻に小杉も生ひ交りて神さ



びたり、小野寺の時代には此あたりは町にして賑ひし處といへり、さるよしをもて天神町の名はある也。其世の天神の祠官は松林多門藤原善明といひしが、小野寺家落城の後世をうきものに思ひなして、天神ノ神像も御社も神田の事も、おの家あとノ事まで里正に憑たのみ難髪染衣の身となり、寛文のころ西誓寺の九世祐西ノ弟子となり法名祐頓とて行ひすましぬ。今在る善明寺の祖也。天神宮の由來は善明寺の本坊西誓寺に残りけるよし。また天神の社地堅七十八間横四十五間東也、松林善明寺舊地十五間二十間也。今有る草庵のあたりは松林多門藤原善明が舊宅の跡にして、小野寺家より五百刈の水田を神供料に寄附ありし事なごは、かの寺の古記録に委曲なるよしをいへり。

○上 小屋 村

○此村東は天神町、西は下八丁、南は赤川、北は上境、邑に中れり。是もかの四十八小屋の一ツなりといへり。

○明 永 村

○此明永邑は上八丁、中なる村也。下八丁にもまた明永あり、こは古一村ちごなればしか同名もありけるものか。

○水 越 村

○むかし大沼のありし地也、今伊四郎といふ人の家の西なる軒の下あたりに、古沼の路とてあり。その

湫ありしをもて水越なごの名やありけむかし。

○大日如來堂 祭日八月八日、齋主長作が内神也といふ。

○森崎村

○此森崎邑のひんがしの方に古沼ある也。

○赤河村

○赤川は村の名にも川の名にもいふ多し。此邑に長作がいじつや一戸あり。

○惣民家廿九戸 ○人員百六十六人 ○馬二十三疋。

阿麻耜能宇都宜

○上盼村(十)

里長 久 太 郎

○上境は下境におし並ていふ村名也。境は坂合の義にて近江、山城の堺に追分あり、是西卅三箇國、東卅三ヶ國の堺也といへり。なほ境てふ事は、下界の處にも、また仙北ノ郡境村のくだりにも委曲に記したる也。此上境は横手寄郷十八邑の始也。郡邑記、支郷甘邊村、北東ノ方川向ニ上境村田地有、仙北金澤西根新田村ノ内同郡飯泉村ノ山道ニテ境也。人居三軒有リ、右支郷分リ申候不知。右下川原川手前南ノ方廿

邊村田地ノ内へ金澤西根新田地形入組境也。昔ヨリ人居ナシ。と見えたり。今ノ枝郷

○上村加美 牟良

○上村家員もちこ古十戸、今ハ十三戸あり。東は杉日村、西は館村、南は大藏小屋、北は甘邊村に中レリ。

○白幡稻荷大明神ノ社 祭日四月十日、齋主三右衛門也。

○馬頭觀世音ノ社 祭日四月十七日、齋主同家也。むかし種子ノ梵形ノ彫碑を此地に堀り出て觀音と齋るといへり、社二間四面向南杉群の中に座り、村民になう尊敬たごめり。

○館村

○いにしへの城跡とて在りしをもて館邑たてとはいへれど、其城主の某と知れる人なしといへり。家員古ト廿一軒、今卅一戸あり。本ト太田ノ上ノ村といふ處ありて家五戸ありしが、その餘波なごりなく退轉しんくわんて今其後此村に在り。東は河原田村、西は間明田村みやうだ、南は大藏小屋村おほくら、北は家無ッ川原也。

○神明宮 社五尺四面、向南祭日六月十五日、齋主市右衛門也。

○八幡宮 社五尺四面、向南祭日八月十五日、齋主長右衛門也。

○大寬堂

○此大寬堂、本尊大日如來、古作の十王の像あり、圓仁大師の作也といへる人あり。出羽、陸奥にあまり、慈覺大師の御作といふ佛多、ある人の書る日記に、世に圓仁の作の佛とあるは多ッは偽作、または慈

覺大德の弟子の作佛多しといへり。圓仁の弟子に叡山の鷄頭院の安然とて、童子教を作<sub>る</sub>る知行そなはれる法師ありし、その安然な<sub>ど</sub>の作にこそあらめ。大寛は開山な<sub>ど</sub>にやあらんか。

### ○專光寺

○忠榮山專光寺は一向宗也。此寺いにしへは眞言社僧にして、かの御嶽山の別當たりしよしを云ひ傳ふ。專光寺の傳へに、當寺開基は某人<sub>な</sub>といふ事をしらず、依て本尊拜頂の願主を開祖とせり。應仁元丁亥四月七日釋玄智とあり。○二世智藏、永正三年丙寅九月十五日遷化○三世玄無、永祿八年乙丑八月廿五日化○四世玄惠、文祿二年癸巳十二月九日化○五世正智、元和元年乙卯正月七日化○六世龍智、寛永五年戊辰五月十六日化○七世玄了、萬治三年庚子七月十五日化○八世實玄、延寶二年甲寅正月廿四日化○九世來智、元祿八年乙亥四月七日化○十世方玄、正徳二年壬辰九月十日化○十一世智顯、寶曆二年壬申十二月十二日化○十二世智周、寶曆四年甲戌九月廿五日化○十三世智傳、文化十二年乙亥十二月十三日化○十四世智乘、文政六年癸未十一月十七日化○十五世現住、西本願寺末派專光寺覺音也といへり。

### ○間明田村

○此邑古<sub>ト</sub>十軒、今十一戸あり。東は館村、西は堰合<sub>下</sub>南は大藏小屋、北は川原代也。いにしへ此地に間明山西專寺といふ眞言宗派の寺あり、そは本<sub>ト</sub>上八丁に在<sub>ま</sub>す菅大臣御社につかへまつりし社僧なりしともいへり。其寺を横手にうつして東本願寺の末流にて、間明山西專寺とてなは有る也。○保長小原



久太郎家あり、御渡野の時其むかしの事になむ、通霄院殿義眞公、源通院殿義敦公、天壽院義和公、此御三代の君いづらも、まみやうだの小原が家におほむ中宿ありしとなもいへる。此宿に御筆ごもありける中に、いつのころならむ鑑照院公大江戸におましましけるとき、徳雲院公よりの文章あり。その書に「横手之馬ごもは當年別而數すくなく御座可有候と被存候何ごそあつまり申候へかしと申事に御座候秋田仙北之駒ごも當年は毎年ふすくなく御座候」云々。一御鷹ごも御書付之通」云々。津輕ご申御鷹はきつめ、御座候由主税ニ委細承可申候」云々。一松平信濃殿々之弟鷹は鳥屋が出し御覽被遊候而御意に入不申候は、此方に可被下候」云々と見えたり。

○間箇沼村

○郡邑記ニ、家員古二軒、今四戸、東は間明田、西は板杭、南は堰合、北はあら田、下境也。まかぬまは眞香沼なご云ひし沼水ありし地にやあらむかし。

○大藏小屋村

○此村家員古五軒、今六戸あり。東は杉ノ目、西は堰合、南は谷地小屋、北は間明田に中たり、おほくらごやは下境村に云ひし如に、某小屋某小屋さて其小屋の數四十八小屋ありて、そのゆゑよしは横手ノ郷の役氏華嚴院の家譜、また同郷正平寺の古記録に見えたれごも、兩家兩説ありてまち／＼也。いづれよしある事ならむ。

○富士權現社

向南、社地東西十間南北十四間也

内祠四尺別當丁村ノ境正寺、祭日四月八日。そも、此御神は、駿河ノ國甘

二座富士ノ郡三座内富知ノ神社、式の御神にして、木花之佐久夜毘賣コノハサノヨサヤメの御神にてぞいまそかりける。な  
にのゆゑよしありて誰がいつの世に、しか齋奉りたる事ならむか知れる人なし、いこゝふるきみやこ  
ころになむ。

○杉目境村

○民家古ト一軒、今二戸あり。東は三原、西は大藏小屋、南は畚ふぢ小屋、北は甘邊に中り。杉目といふむら  
の堺に在れば村名とし呼ぶと見えたり。

○河原田村

○享保日記ニ家員三軒、今もまた三戸あり。此村東は杉目の野中カ、西は館村、南は畚小屋、北は甘邊にあ  
たれり。

○甘邊村

○此安麻あま閉村への事は前にも記したり、古ト民家三軒、今一戸あり。東は野中、西は館村、南は畚小屋、北は  
仙北郡安本村也。考へおもふに、後三年の戦ひのとき伏兵ありしは此甜邊あまべのあたりならむか、今もあの  
邊りにていと廣く、その世は木々ふかく生ひ立四方くらく、今の大鳥居山の邊に官軍のぼりて見給ひけ  
むかし、前太平記卅七卷雲上の鴈の事といへるくだりにつばらかに見えたり。また奥州後三年記繪卷

物詞書<sup>キ</sup>に、將軍のいくさすでに金澤の柵にいたりつきぬ、雲霞のごとくにして野山をかくせり。一行の旅雁の雲の上をわたるあり、雁陣たちまちにやぶれて四方に散りて飛ぶ。將軍はるかに是を見てあやしみ驚て、兵をして野邊をふましむ。あんのごとく叢<sup>ノ</sup>中より三千騎の兵を尋ね得たり、これ武衛がかくしおける也。將軍のつわものこれを射るに、かすをつくして得られぬ。義家の朝臣先年宇治殿へまゐりて貞任をせめし事など申けるを、江ノ帥匡房卿たち聞て、器量<sup>ノ</sup>武士の合戦の道をしらぬよと獨ごち給ひけるを義家の郎等聞て、わが主ほどの兵を、けやけきことをいふ翁かなと思ひつゝ、義家にこのよしを語る。義家これを聞て、さる事もあらんと江帥の出られる處によりてことさらに會尺しつゝ、其後彼卿にあひてふみをよみけり。義家あはれ文の道をうかどはずは、こゝにて武衛がためにやぶられなましとぞいひける。兵ノ野にふすときは雁つらをやぶるといふ事侍るとかや。云々と見えたり、此辭いかなるぬしとさたかにしらず。また前太平記の世<sup>オ</sup>に行る刻本<sup>まうすり</sup>とは大同小異せり、此画工は飛彈守惟久ノ筆なりといへり、云々と見ゆ。此甘邊こそ、いにしへのそのところならめ。

○ 田 地 字

- くうげむ ○どうつらまち ○ほうりやう ○中小屋 ○石田 ○菅生田<sup>むかしは村なり</sup> ○太田<sup>むかしは村なり</sup>  
 ○十王田<sup>シ</sup>、此田より中古十王の木像を掘り出たりし物語あり、太田の内也といへり。

○ 上 境 邑 脱 漏 古 城 圖 並 來 由

○此古圖は横手ノ梧鳳山西誓寺一向東派に所藏古圖古記也。其凡を記す。

柵に眞壁對馬某ノ居城也、城は南向キにて、大手の堀跡は今在、專光寺一向西派の方に在る苗代田是也。○城の

内に井あり、是を構への井といふ。その跡は吉兵衛といふ家の庭也。○本廓まがらの西の方は二ノ丸也。本丸

の東北の隅に高櫓ノ跡高々築きて臺をなしてありしが、元祿の頃臺をこぼち堀りたひらげて其地に大神

宮を齋奉れり。その神ミコ社の左ひだりの方に大松あり、小野寺時世松なりといふ。城の外堀は桐ノ木屋敷を廻

り、西の方は苗代と成りたる也。桐ノ木屋敷にむかし西誓寺のありし跡也、さるよしをもて梧鳳山の號

はあるなり。○本丸二ノ丸の間に堀あり、そこに八幡宮やしろ座り、小野寺ノ氏神也といへり。大杉生たてり。

○二ノ丸の内に間右衛門ひだりといふもの住居す、もと小野寺家の武士也。其先祖は間越中ひだりとて今の惣右衛

門といふ家の本家也。○西北ノ角に櫓の跡あり、今は其處田地御年貢地のよし也となる也。○城内ノ西南二ノ丸の前

西南に堀あり、城の堀と續たり。其堀西北廿七間、五十四間、但シ南堀並より西北廿二間、四十四間、此あ

たり今は人家となり垣にて境せり。○大神宮は與右衛門が所務也。○八幡宮は南右衛門が所務也。

○知行所、萬明田七十石ノ内首切田といふあり、むかし田うゝる少女が幼兒ななの哭をすかしつゝなほうゝ

るに、その兒哭止とたるを見ればその子の首はものに捕られたるよし、そをもて此田の名はありといふ。

此田は古は一枚にて五百刈、其田は今十四枚となりて往還の際に在る也。○今草庵のある處は古城の

口也。○桐木第やしきの内並に大學屋敷あり、東南ノ角也、構の井も大學第の内に在り。○萬明田に清水あり、





○惣家數八十四戸 ○人員三百四十一人 ○馬數四十五疋也。

わか葉の眞弓

○關根村(十二)

里長 松 四 郎

○關根は假字にして正字は堰根、堰埭事にて、せきね、いと多き名也。清濁は方言にてしかいへる事あり。郡邑記關根村民家二軒、今一戸あり。○久保野目村同十四軒、今廿四戸○明永野村、同書延寶七末年横手給士菅生莊之介忠進開、民家四軒と見ゆ、今家二戸あり。○大鳥居山村民家三軒、昔御嶽山、鳥居有之舊跡傳也と同書にあり。今は大鳥井邑なし。○明永野、同書に、聞古來横手給人百三十人餘手作畑起立御判紙結、先年追回見入野、下川原忠進開仕混亂仕、當時有高難相分訴云々と見えたり。今は此村の枝郷は○久保野目村○明永野村也。明永は人名にや、いと多く聞えたり。

○久保目村

○熊野社

二間 向 南、祭日九月九日

齋主久太郎。

○白山姫社

二尺 向 南、祭日八月十六日

齋主市太郎。

○狐崎大明神社

一尺 向 南、祭日九月十日

齋主長兵衛。

○御歳神社

五尺 向 南、祭日六月六日

齋主源四郎。

○明永野村

○稻荷森ノ大明神社

一尺向、祭日八月十日、齋主郷中。  
四面

○大鳥居山 今は家なし

○小吉山大明神社

二尺、祭日九月十日、齋主郷中。  
四面

○物家員廿七戸

○人數百九人

○馬員七疋。

○一村田ノ字處

○千手澤 横手の御城ノ東  
田島あるなり

○明永澤

○關根

○平城 ひらじやう

○眞山

○大鳥居山、上下

○吉澤

○川端

○小中嶋。

みはらのまぐさ

○三原新田村 (十二)

里長 長 左衛門

○三原新田、また三原とのみもいへり。東は杉澤、西は杉目、南は堰根、北上境村也。郡邑記ニ、三原村民家十一軒、延寶元丑年關根村、杉目村、上境ノ土地横手給人吉澤宗四郎開出。○西ハ仙北郡金澤西根村ト野形柳村入合、三原村川端ニ野ニ境。」と見えたり。○中川原村家員四軒○平城村民家一軒、此村退轉家ナ

ナス

し。○堰根村六戸。

○七面明神 祭日六月十九日、齋主與市也。

○惣家員廿二戸 ○人數百十二人 ○馬員十二疋。

めせのたきなみ

### ○明永野邑 (十三)

里長 六 左衛門

○明永野邑は横手ノ一里北に在り。また上八丁に明永邑あり家三戸、また下八丁に明永邑あり家十戸。明永邑と明永埜邑との地もいと遠く隔たり、同名なれど大に異なり、ゆゑよしあることならむかし。

享保郡邑記ニ、開地古來、横手ノ給士百卅人餘手作ノ地畑起立御判紙ニ結ビ、先年迄追回シ見入野、下河原忠進開ニ仕混亂仕リ、有高難相分ノ訴。云々と見えたり。また關根村に明永野邑あり、同郡邑記に「延寶七未年横手給士營生庄之助忠進開、民家四軒。今二戸ありと見ゆ。此明永の名三四ヶ處にぞ見えたる。

○大瀧、小瀧 明永野より三里板屋平ひだりといふ處に在り。袖山外山村おなじの邑近くにも板屋比良あり、同名にしてこと處也。此大瀧小瀧、岩山にして見るべき處也。

○片方林 かたがた 足駄鳥屋といふあり、そこに鷹網小屋たいていありて郷よりいと近シあれば、木屐ふみてそこに



往來の義の字也といへり。

○長峰ながみねといふあり、左右は田に墾くわたり。いづこにても長峰を長根といへるを、此處にかぎりてながみねとよめるはよしありげ也。

○横手の明永野村家廿三戸あり、外に御林守七右衛門が家一戸あり。

○鐵銃てつぱの射塚しづかを踰こえて鳴見澤、熊野ノ社に行山道跡あり。

○一の坂　御嶽へ登る坂口也。

○熊野社いさくさなる神祠也

平澤良介某の齋たる氏神也といへり、とどころ廢寺たりし眞言宗松壽院を此處に興し建んとて、その地をもとむといふ。

いちのふるみち

### ○見入野新田邑（十四）

里長　市　郎　兵　衛

○郡邑記ミ、「延寶七年横手ノ給士安十孫兵衛、滑川又市忠進開地、民家三軒。」と見ゆ。見入てふ地名は田嶋の字にところ／＼に聞えたり、こはとも、田のの實入良地みいりやうちを祝言はざて云ひ初し名ならんか。三河、尾張、遠江なごの田地の字にも、良田をさして實取場みかりばといへるがいと多し。また三河ノ國なる名所に翠野ノ池といふありて古歌多し、是も本トは實採田みかりばなご、そを水元として田佃たつくりたりし名ならん。好事の雅名をなし

て實取を縁に作てみどりの、池ごやいはんか、外山、外浦を袖山、袖浦に作るが如し。緑野の池は大池にして、八郎湖の赤鮎あかぢふなの形せし大鮒ふなすめり、その池を俗岩堀よこの池といふ。古柵の跡あり、岩堀の城主某の後胤は出羽の秋田に在り、久保田家士岩堀宗六某は其家也と云ひ傳ふ。

○ 狼 澤 村 家今十  
六戸

○此狼澤おひぬは同延寶七己未年より創る、享保日記に民家三軒とあり。狼をおほいぬごもはらいへるを省もていへる名也。

○ 七 日 市 村。

○延寶九辛酉年此村創はじめぬ、寅卯ノ不作ニテ立除ク。しと享保郡邑記に見えたり。そのいにしへ、いご／＼大キやかなる郷にて七日／＼に市立いちだし肆の跡あり、此事華嚴院の成綱澤なるみの記に見えたり。○また此新田といふはさまれかくまれ、見入野といふ村は延寶九年のころまで杉澤に在り、民家七軒ありし事享保日記にも見えたり。

○惣家員十六戸 ○人員百二人 ○馬二十一疋。

くらしやま

○杉澤 邑 (十五)

里長 儀 右衛門

○此村郡邑記に平鹿ノ郡の創<sup>はじめ</sup>に出て、「御黒印百十箇村ノ内七十二ヶ村高辻帳出。」と見ゆ、同記ニ杉澤村惣名唱焉と見ゆ。枝郷彌勒村、上臺村、館泉村、谷地中村、中杉澤村、中嶋村、吉澤村七ヶ村也。

○彌 勒 村

家今  
九戸

○いにしへ藏石山彌勒寺といふ天台の寺ありつるよしを傳ふ。郡邑記に云々、「彌勒堂あり、北は仙北金澤前郷村ト山境、民家十六軒。」と見えたり。

○彌勒尊ノ社 祭日九月十九日、齋主作右衛門。

○上 臺 村

家今  
九戸

○藏石山と云有リ、先年開地發ル時水本ト仙北ノ郡金澤中野村ヨリ取ル處ノ代ニ錢三貫文ト藏石山ヲ遣ケル、故仙北ノ山ニ猶令サル焉。右堰は上臺村ノ北ノ方ニ在リテ三貫堰ト云。北ハ仙北郡金澤中野村ト山境倉石ヶ澤限ル、西ハ同郡金澤中野村ノ内法華塚古街道限ル也。民家八軒。」と見ゆ。増田の眞人山<sup>まんど</sup>に近き鍋澤の古道に三貫櫻あり、ゆるよし其處精也。

○館 泉 村

家今  
一戸

○むかし館ありて泉某といふ城主の居館とも、またよき眞清水のありしともゆるよしさだかならねど、

泉氏はところ／＼に在り。中古は家八戸ありといふ。

○谷地中村

今家五戸

○此邑名いづこにも多し。郡邑記ニ、西ハ仙北郡往還街道限リ、民家十軒。

○御所野村

○同名河ノ邊ノ郡に在り。此平鹿郡杉澤の御所野、ゆゑよしありげなる處ながら今に仙北郡に入る也。

郡邑記に、「東北ハ仙北郡金澤中野村往還街道限、西ハ同郡安本村ノ田ニテ境ヲ。地形ハ同郡安本村也。處ニ寛文四年茂木彌三郎横手ノ給士上遠野鹽物、小貫次右衛門畑野共ニ開高處杉澤村水屈ニ次第、依而當村ノ土民七軒引移リ田地府人トナル。右高當村ノ御黒印入ル也。附札、仙北郡安本村ノ土地ニテ開、邑境吟味、上安本邑ニ可入。」云々と見えたり。此御所野村、仙北ノ郡安本村の枝郷と成たり、享保日記に民家五戸とぞ見えたる。

○中杉澤村

今家十五戸

○杉澤の中なるゆるゑの名也、中村といふがごとし、享保日記に民家十一軒とあり。此邑の東に釋迦堂あり。

○誕生ノ釋迦如來

祭日四月八日誕生會也、齋主小田島與市。此釋迦堂の地に大杉一本あり、古來杉澤

は此杉なごより村名起るか。



○中嶋村 今家十  
三戸

○むかしは水湛たる地に在りしより此名ありけるとか、享保のむかしは民家十四軒ありつるよし見えたり。

○吉澤村 今家  
五戸

○吉澤は本<sup>ト</sup>葦のみ生ひ茂りたりし地にて葭澤なるべけれども、葭てふ字は筆むづかしければ、書<sup>キ</sup>安からむもじもて書<sup>キ</sup>ぬ。吉はよき字なれば也。

○二番實入塾十一面觀音 祭四月十七日、齋主彌十郎。いにしへ地福長者、西國卅三所の内紀三井寺の觀世音を大佛師定長に作らせ、六郡に安置のよし處々いへり。教圓あざりの歌に、

杉澤の清き流や實入野にさしうつ波か松風の音。

杉澤河正淵<sup>まさぶち</sup>ノ觀音とむかしは唱へて、大なる淵ありつるよしをいふ。

○辨財天は竹生嶋を摹して水邊におましましかと、兵火燒亡のときひんがしの岳に飛さり給ふ、其跡は長者か館跡の東の岳<sup>なか</sup>に在り。水戸門、實入野、古<sup>ル</sup>谷、池の下在り。」と古記に見えたり。

○見入野。邑。

○郡邑記ニ、見入野村民家七軒、延寶九年酉年開出と見ゆ、此村今は別村となりて見入野新田といふ。津輕の老良瀨<sup>おいら</sup>邑の觀音も見入山といへり、また、こと處にも同名ありとおぼえたり。

## ○山の名どころ

○一の澤 ○立<sub>テ</sub>森 ○ぬかり澤 ○塘が澤 ○やけどまり。

○

○惣家員五十戸 ○人員三百廿二人 ○馬三十一疋。

野中のみとり

## ○杉目村(十六)

里長 三 之 丞

○郡邑記、杉目村民家十軒○荒屋敷村四軒、今ハ八戸あり○エボ小屋村二軒、今<sub>モ</sub>二戸あり○野中村十六軒、今ハ九戸あり。野中村北ハ仙北ノ郡安本村道ニナ境。と見えたり。

杉目氏もあり、義經蝦夷軍談上編九卷常陸坊海存遇ニ義經といふくだりに、係て義經は本營に皈り給ひ泉三郎が陣に使を立て召給ふ云々。常陸坊海存も日本より渡海し此處へ着のよしを申す。義經、忠衡大に悦び、名馬兵糧を得るのみならずいまだ存命にて此地に至る事、我運命聞くべき端也と悦び急ぎ對面あるよし云々。海存、義經忠衡に向ひて申けるは、某過にし文治五年閏四月、君高館を落給ひし後館に残り留りて杉目ノ行信、増尾ノ兼房など同じく寄手を防ぎ戦ひしが、終に行信、兼房各自害しければ介錯し、館に火を懸<sub>ケ</sub>烟のまぎれに忍び出、津輕の方へ志し君に追付奉らむと思ひ、駒形が嶽を通りしとき老

翁に行逢ひたり云々、と見えたり。その杉目行信がゆるよしある處にや。高館落城時の人はみな忍びのがれたり、其自害せしと聞えし増尾兼房も仙翁となり三ッ峰の麓に在りし事、下境村にすてに云ひし也。○野中村、野中も多き名也。古<sup>ル</sup>き名所にも播磨國稻見野といふ處に清水あり、野中の寒泉<sup>しづみ</sup>といふ。いにしへの野中の清水ぬるけれどもその心をたづねてそくむ。此ものがたりくさくさのいはれあり、能因歌枕にもいへり。よしなきもの語ながら、野中の名によりておもひ出しまゝしるしぬ。此杉目邑に古<sup>キ</sup>社ともあり、ゆるよしはつばらかならねど尊<sup>ミ</sup>き御社也とか。

○神明宮 祭日八月廿一日、齋主一郷ノ保長也。

○大日如來ノ社 本<sup>ト</sup>野中ノ郷に座しを此處にうつしまつるといふ。祭日九月廿九日、齋主與次兵衛。

○此邑惣家員廿四戸 ○人員凡百人 ○馬數八疋。

しらけづか

# ○横手前郷邑 (十七)

里長 和 三 郎

○此邑、横手の鍛冶町より東南ノ方へ町在郷差別もなく軒を並て、人家ひし／＼と立續きたる村也。邑の東に○本郷<sup>ほんがう</sup>○松原とて枝郷有り。むかしは八ッ口<sup>くち</sup>村といふもありて支郷三村たりしが今はしからず、

享保のさしのなからまでもそこに民家二戸ありしといふ、其跡は田畠の字のみに残れり。むかし此處に八ッ口野兵助といふ福者住みし、その後胤は泓大堤といふ村に今なほあり。村の名の長ければ略もて堤ノ兵介と呼ぶ。渠が家よりむかし研墨すみのくろなる五調一疋獻りし事なご、婦氣大堤村のくだりに委曲に錄したり。仙臺の府の入口に苦竹口、某口某口とて八方八ッ口といふところあり、それにおなじ名也。○横山とて高からぬ山南の方に在り、是多かる名ながら此山によしあり。續紀天平實字三年といふくだりに横川あり、此事は横手の處にも具記したれごまた此地にも云む。此横山の麓を櫻川あさくら川と流たるに坡つみを築構てそれを横土手と云ひ、省はぶもて横手とはいへらんかし、今もその古川の流の跡いちじろし。中頃横山將監某此處に居館といへり。

○丸山といふあり、此處に前郷太郎左衛門尉某の墓誌石ありしが土に埋れしにや見えねば、いづれの世の人ともその年號を知らじとなむ。

○しらみ塚といふあり、そは城見塚てふ事をしかいへりといへご、村の草創帳くさそうちやうといふものにはしらげ塚とぞ書たる。そのいにしへ兵亂のとき、精米しやうまいなごの多く焼たるをさり東堆つみたらむ處ならんともいへれご、そのよしさだかならず。これを考かんつに書紀に、精兵をしらげつはものごよあり、倭調琴に物をしらげるといふに米より出たる也、新撰字鏡に鰐をしらぐごよめり、治米と注せり云々と見えたり。強言ならむか、精兵しやうへいも籠城りやうじやうたらんかとおもはれたり。



○此前郷に及川、嶋森氏あり、いづれもよしある家にて、そのむかしはみちのく和賀ノ郡の人になもありける。永慶軍記卅五卷に録<sup>のき</sup>たりけるは、天正のころ烏屋崎の城を攻落し再び和賀を押領すといへども、翌年九戸御誅戮の時二子ノ城も攻落され、父薩摩守義忠、澤内に退く折から討死せり。これに因て又次郎、又四郎二人の子山北へ立越えて、去年牢浪して在りし舊好の者及川、嶋森等を頼みて月日をぞ送りける。明れば文祿元年太閤秀吉公三漢を攻給はんと諸國の軍勢を召れ給ふ、これに依て奥羽の大小名黨も高家も残りなく召に應じて上らる。此時和賀又次郎、舍弟又四郎山北ノ小松川の奥に忍びけるが、此よしを聞て能折からと思ひければ云々なごぞ見えたる。其及川、嶋森統の末及川<sup>土町</sup>嶋崎十郎右衛門、前郷に嶋森六左衛門<sup>五代の里正にて此島森は母方の姓也</sup>なごみな舊家なるよし。

○神明宮 南ノ岡に鎮座り、祭日七月廿一日、祠官高橋筑後正。

○上宮太子ノ社 貞享二年乙丑四月四日、ゆるよしありて此神明御社の傍、おなじ杜の内に齋ひ奉る也。祭日四月六日大祭也、神官高橋筑後正也。此祭禮の事は横手の處に委曲にしるしたれば、こゝにはつばらかならず。

○愛宕護<sup>あたらご</sup>ノ社 東の岡のべに座り。此社はむかし横手の守護神にして朝倉山のひむがしに在<sup>いま</sup>して、本トは横手佐渡守齋ひ奉れる御社ながら、今は前郷にみやごころをうつし奉りたり。さるよしをもて横手には愛宕の山の名のみぞ残りける。おたぎ祭はとしごとに四月廿四日、別當大寶院也。

○庚申ノ社　正徳年中の社御改のこきも古き社なるよしにて、今の社記にもしかしるしたり。祭日四月十六日、別當山崎の常明院。

○天神ノ社　文化元年庚申ノ末社に齋る、祭日六月廿五日、別當並同。

○大明神社　なかむかし稻荷ノ社とあやまりて稻荷大明神の棟札を書納めまつりし事あり。此社は春日四社の大明神にして武雷命、齋主ノ命、天津兒屋根命、姫大神也。此處の春日祭九月十八日、齋主最上家ノ浪人伊藤某。その後伊藤勘右衛門とて家系譜等もありしが火災にうせしといふ。

○白旗明神　日本武尊を齋るこも八幡ノ御神を祭るこも、また田村將軍を祭るこも、それは其こころこゝろに祭る神靈こゝろにして眞體さだかならず。備前ノ國に白旗の城あり、是も白幡ノ神鎮座か、素旆、素幡（なごも）とも書たり。倭訓栞に、兼實公の記にも藏人行綱が云く、當家先祖より白綾無文の旗を用來れり（なごも）と見えたり。新編纂圖には、其家の祖貞純親王に大將軍の宣旨ありて、月花門混白（みだしろ）の幡を賜りしより事起れり云々と見えたり。また白幡は鼻祖を尊て齋るよしも見えたり、さもあるべき事か。齋主は猿橋彌左衛門也、猿橋の上祖は小野寺家の物頭ノ家たり。永慶軍記に、和賀山北藤倉合戦のくだりに猿橋彌八と出たり、そは此さる橋彌左衛門が祖也、上祖より齋奉る御神也と知られたり。

### ○三井寺　黃檗派

○旭岡山三井寺、本山は山城國宇治黃檗山萬福寺、中本寺は尾張ノ國乾山ノ先聖寺也。寺ノ古記錄不詳。

よしをいへり。

○開山潮音和尚、元祿年中尾張の中本寺より勸請せり。○二祖石門潮音ノ弟子也享保年中遷化○三世密傳石門ノ弟子也享保年中化○

四世東洲密傳ノ弟子也元文年中化○五世慧命密傳ノ弟子也延享年中化○六世北宗東洲ノ弟子也寛延年中化○七世大器東洲ノ弟子也寶曆年中化○八世瑞文大器ノ弟子也

明和七年より文化十三年まで住職也○九世現住正眼。當住九世正眼は瑞文ノ弟子也、文化十四年三月入院せり。

# ○松原村

○松原は世にいと多かる名也、家三戸あり。あるは社家、あるは民家、また一戸は遠離て乞付かたがの家あり。

○社家は前郷の神明宮、上宮太子の祠官職にして、十三代の家といへどゆるよしさらに傳らず、文政九年に當りて十三代ノ孫、高橋筑後正藤原吉茂。

○佐々木善兵衛とてよしある屋戸あり。此善兵衛に子あり、そが太郎を善吉といひ次郎を善藏といふ。

善藏画にこゝろざしふかくして大江戸にのぼりて、其頃世に鳴名松林山人ななを師とたのみ花鳥をかきな

らひて、画名を分水といふ。分水、ぼうたむを画て人知れり。分水、原善と画名する事あり、そは故郷の

松原善藏といへる事なるべし。分水長崎に至りて虎を画く、清人これを見て、此虎は鼠を捕むと欲眼ほす

色也とて手を拍てみなうらわらふを恥て、原本てほんを清人にもらひ朝夕これをまねびて、ある日人々と共に

清人の官舎に至りて席画せし猛虎、墨画ながら生るが如也。こたびは人々手を叩て、になう譽めたりと

いへり。其画は今横手ノ四日町の柏屋善吉分水舎見也七十三歳家藏也。

○墨画虎

画眉ニ

甲寅季冬日於崎陽  
唐館席画原善

清人ノ讚あり、左のごと也。

畫虎難肖虎千里

威風起其肖者誰

乎秋藩分水子

王春波

○福壽如意圖

枝打桃菓二ツ 蝙蝠一翅 靈芝一朶

江府画工乙巳冬十月寫

松林山人

〔分水か師。〕

柏屋善吉藏。

○横行左讀ノ書一軸

是は紅毛人、分水が父善兵衛が高壽を祝めでてかきくられたるよしをいへり。

共柏屋藏。

かゝる松原の一戸より出て、分水か虎に名高き其名は千里の外までもはしりぬ。をしき事は四十歳の

ころふたゞび上京にのほらむとて、甲州街鴻ノ巢といふ處にて死みづかりといへり。

○安田ノ荒藏

いにしへはよしあるものにて佐竹ノ候のおほむ履くつさ奚にめし給ひしが、癩人となりてえ

近づきつかへまつる事恐み奉れど、おほむあそをしたひ奉りて、今その末葉くわ終はて乞索いた兒となりて此松原

に住居すめるは、大和國に在る般若坂のむかしものかたりにひとしかりき。

### ○本郷村

○世にいと多かき名、是を考るに、いにしへ榮えし處ながら名のみ傳ふ處あり、また後より創りてもそ



の本郷の前にありて、すべなう前郷な<sup>し</sup>といへる處ありけるは、太平記と書名<sup>なづ</sup>たれば、そがあとより書いても前太平記と云ひ、また前々太平記といふ、それにひとし。まことならば太平記、後太平記とも、續太平記、續々太平記とも書べかりしものを、此村名も此いくさふみのつぎにひこしかりき。

○常 徳 寺 西派一向宗

○大永山常徳寺、西本願寺、末流、中本寺は仙北郡六郷の吉水山善證寺也。○開基祐正、寛永年中の草創といへど遷化の其月を不知、正月五日を忌日として齋之。○二世常正○三世祐玄○四世常祐○五世祐保○六世祐智○七世祐岸○八世祐了○九世祐丹○十世祐文○十一世祐海天明六年五月九日化○十二世祐勸文化元年三月廿三日○十三世現住職了淳代也。

○寶物

○了如上人御判の阿彌陀 一軸。

○古佛のあみだほとけの画 一幅、繪佛師誰れといふ事を知らず。

○專 性 寺 西派一向宗

○古館山專性寺、西本願寺、末流、中本寺は六郷、善證寺也。此寺天正年の草創といへども回祿して寺の古記録傳らざれば、しるすによしなし。○開祖眞教○二世了圓○三世了西○四世了正○五世善完○六世順完○七世完玄○八世教隨○九世義空○十世了伯○十一世義圓○十二世義正寶曆十四年四月廿二日化○十三世教

海安永二年十〇十四世決應寛政二年二月二十日化〇十五世現住教禪天明八年入院す。

なまのかみ杉

## ○大澤 邑(十八)

家員古二十軒  
今十二戸

里長 三 右 衛 門

○大澤、小澤の地名いと多し、蝦夷には大澤、小澤といふ。此大澤は横手の東、山内の北に在り。枝郷あり、沼山、羽根山、長泥、矢櫃、廻館まわだん、庭當田てうだうだなど並て大澤村といへり。郡邑記に「往古ハ岩瀬御前いわせごぜん、化粧田けいざうでん由傳」云々と見ゆ。倭訓栞に、「けはひでも、漢書にいふ湯沐とうもく、邑也。俗に、けはひでもは田の音也、厩田とも見えたり。」といへり、岩瀬いわせ前の事はなほ奥に云はむ。郡邑記に、「旭岡山大明神社領五石、正保四年しほ神主越前守に給テ神祭ナス。」と見えたり。

○猫 石 村の東に在り、むかし猫の形せし石のありつるよしをいへり。今は其石もうせて、猫石坂とて河ノ邊に在る坂の名に残れるのみなり。

## ○沼 山 邑

家員古十軒  
今七戸

○大澤の東に在る村也、郡邑記に「天和三年忠進開」と見えたり。こゝに沼野平ぬまのへといふ地に、雌沼雄沼とて二ツの沼あるをもて沼山の名はあるなり。雄沼は大沼にてさし亘はり二十尋ばかり、その深斗ふかもしらす。此沼に綿の如なるものうきありく、そをもて綿沼とはいへり、いさ／＼あやしの品なり。此處にい

たりて雨乞すといふ。女沼は四五間四方にしてさゝやかの沼ながら、寒中凍る事なきは清水あらむといへり。(天誥——此沼山邑川鹿(かしか)ゆきのためしといふ事あり。寒中に小川に雪をうち入して底の鰻(かしか)をさり、串にさしてこれをあぶれば口を開く事あり。また口を開る事あり。口をひらくことは日照り、口を開ることは雨ふるさ來ん春一させの占もありける。)

○羽根山 家員古十三軒  
今六戸

○沼山の西に在り、羽山、羽根川なごいど多し。また羽禰といふ名三河、尾張にも信濃にも、其外の國にも在り。土佐日記に、「まことにて名にきく處はねならばごぶがごこくに都へもかな。」と見えたり。

○長者寒水、村の南の川邊に在る清水也。○姫が墓、長者清水の東に在り、長者女たるよしをいへり。

○布曝ぬの  
ぎょうし 長者清水の下に在り、むかし羽根山長者の人とら布曝したる處にて川中に在り。秋田郡

新城保戸野の奥にもものゝさらし、うそ市なごいふ處あり、平鹿郡布晒しの里は永慶軍記に見えたり。

此羽山邑に長者あり、そは金山長者をしか謬かりごなふといへる人あり。うべならむか三河ノ國にも金高、

眞福、眞高まふく  
まいたかにて三戸の長者あり、金高長者の娘淨瑠璃姫丑若鷹をしたひて、乙川の淵に投なつた事、ものに

見えなければ世に能く知れり。此黃金山長者の舊跡地に、はかなき事から新穂にひほの下跡、鍋したの跡なごいふ

處あり。また山内の奥にも地福長者、萬福長者、福萬長者なごの舊跡をはじめ、なに長者、くれ長者と

て長者の名ごもいどく多し、なほゆるよしある地ならむ、たづぬべし。

○長泥 邑また長湍  
さても書り 家員十一戸

○羽根山の南に在り、此邑享保郡邑記には見えざる也、近きに新墾<sup>つひけ</sup>たる地ならむかし。外にことなる事もなき川の邊の一村也。

○矢 櫃 邑 家員三戸

○長泥の東、山内ノ皿木村の北なる河向の邑也。此村も郡邑記にはもれたり、新墾の村なるべし。山本ノ郡平山<sup>だいらやま</sup>にも同名あり、また松前及部の奥に、百間<sup>やびつ</sup>矢匱といふ地に飛泉<sup>たき</sup>落山川あり。此大澤の矢匱に古柵のあれど、いつの世に誰が城主とも人みなえしらざる也、古柵のあるをもて案<sup>あん</sup>の如に村號を説<sup>せつ</sup>るは強言也。やびつはヤムベツの轉言<sup>うつり</sup>たる蝦夷語なるべし。

○廻 館 邑 家員古十五軒  
今廿一戸

○旭岡の東麓にして小森山に權宮あり、いにしへはこなたより登山<sup>つぼり</sup>し處にて、小森山に籠殿ありて七月十七日に神事あり、十二月十七日に齋夜<sup>いっや</sup>の夜籠あり。いにしへは此峰に旭岡ノ神社東に向て建り、さうければ朝日岳<sup>あさひ</sup>の名ぞありける。むかし此地に旭岡山明壽院といふ妻帯の眞言寺<sup>でん</sup>ありし、其跡は今旭岡の神田<sup>じん</sup>ごなりぬ。廻館も古柵の跡にや、此あたりの人は館<sup>たち</sup>をもはら館<sup>だて</sup>といへど、こゝにのみ館<sup>たち</sup>ぞといへる。○女淵<sup>めぶち</sup>○男淵<sup>おとぶち</sup>○鱒淵<sup>なまこ</sup>なごいへる名ともあり。○箴橋あり、長泥邑より通ふ。

○庭 當 田 邑 家員古五軒  
今モ五戸

○庭當田はいかなるよしの名にや、雄勝ノ郡杉ノ宮に元當田<sup>もとあた</sup>も作り、元道田<sup>もとみち</sup>とノ社あり、庭當田<sup>でさだ</sup>は庭當田<sup>でさだ</sup>といへる事



をしかに書くか、出端いちはしを出戸でこといふ處いこゝ多し。郡邑記に延寶八年營生庄之助忠進開と見えたり、其營生田は神山の二王門の東の方に在りしが、萱澤、堂が澤落合の大池、二王門の西池崩ひさみで水上あらざれば、營生田も廢あれて今は畠はたに化れり。此あたりはみな旭岡の北麓にて、神主鈴木栄女介の家あり。

○旭岡ノ社 庭當田より二王門まで二丁餘り、仁王ノ古佛は圓仁大師の作也、もとも古物ふるものたれば修理を

加へたり。旭岡に七本杉とて靈木あり、そは○軀杉うご○御蔭齋杉みかげし○天狗杉てんぐし○尉杉じい○御解除杉おはらひ○箒杉はき○燈

蓋杉也。○姨杉うい周回三丈餘尋、神阪の西の下したに生ひたり。○御蔭齋杉、人みな神木といふ、回二丈六七

尺、神前神壇みさかの南の方に生たり。○天狗杉は枝葉うち垂りて逆杉のごとし、回二丈斗りにて本社の下

の凹地に生たり。木のれ平なれば天狗こゝに息りやすらへと云ひ、またその杉の形生三兩翼りやうよく飛遊空中とびうが如な

れば、そをもて天狗杉あまのきつねともいへらむかし。○尉杉、舊社地に生り、其回二丈斗也。○御祓杉は尉杉の

生たる近きに在り回一丈七八尺斗、古祓串をゆひ束ね納るをもてしか名におへり。○帚杉は木末こえい

と廣く枝葉細密こまやかにして、さながら箒はきの形せし木なればしか名によべり。その原や伏屋に生ふる帚木はきぎも

さるものかありけむ。回二丈斗にて祓杉の近きに在り。○燈蓋杉は周回二丈八尺、一丈七八尺上にて

三岐みまたにわかれ燈蓋の蜘蛛くもての如して、そが中心に小櫓やぐらの寄生あり。こゝにいふ石櫓、水櫓、小櫓なの品

あり、小櫓は柞はなこをいへり。此燈蓋杉に龍燈りゆうとうくだるといふなり。東は峯にして古宮地の跡あり、西は萱澤

流ノ堺、南は堂ゲ澤、北は畠也。○本社八尺四面向西。旭岳あさか大明神は參議從三位征夷大將軍坂上大宿禰田村磨

の草創也。また清原真人武則朝臣此峯に登りて天忍穗耳尊を齋奉て、くさ／＼の神寶を寄附神田を奉り給ひたるよしを云ひ傳ふ。出羽國六郡觀音順禮記舊本云、「〇十二番、平鹿郡旭同觀音堂、正觀音立像、尺一大佛師定朝作。此處ハ傳教、智證、弘法、慈覺大師等、開基佛生、靈地也。〇下居天照大神宮、清將軍の御像あり。神寶白木ノ弓一張、矢一手、田村將軍納之。弓箭、藤原秀衡朝臣納之。太刀二腰長四尺三寸八分、佐藤勝信納之。此御堂は清將軍武則公御建立、其後小野寺氏代々造營修覆し給ふといへり。〇古館、天狗館とも云ふ。〇名水あり〇酒泉あり。〇二王門、仁王像ハ慈覺大師ノ御作。

### 〇教圓阿闍梨巡禮歌

朝日さす峯のはとけの誓にはまゐる心を御手にもらさじ。」

云々と見えたり。その堂舎神殿も、亂世にあるは廢こぼれあるは兵火やられて、さる神の、みたからもうせぬ。其世のみやごころは眞館またら今いまへるの山の峯いたきに鎮座也まかせし、神社も東に向むきて、まゝここに旭岡あさおかとほうべも云ひしものか。今のみやしろは、山ふごころにして山のなからに座りまかせ。〇本社祭日四月十八日、七月十八日、また十二月は除夜より正月二日までの齋食いらいし、御當家御武運長久の祈禱あり。末社〇大山祇社、二王門ノ上神段みさかの右脇みせに鎮座り、祭日四月十二日。〇藥師如來ノ社、神段ノ左脇に座り、祭日四月八日、雲慶うんけいが作也。〇四天王像、祭日、作並なみ同。〇龍堂觀音、行基僧正作也、定朝作ノ佛像は燒亡やけどせり。祭日七月十七日、十二月十七日。〇旭岡大明神御緣起 夫尋ノ物來由ノ務つとめ本寫ほんしやうノ續つづ者其道之靈神也天神而能達此道豈夫然

乎嘗祭以言作社立者曾人之庭訓也良有召哉爰有磐石之高山一愚之斯山一吁嗟曰吾儕等祭神性聾拜社心盲吾靈神毀矣豈得達斯道乎彼之實神主爲祭天照之爲社八幡之尊一威神記一雜筆爲往來也至若高山曰旭岡神本曰觀音者靈新神清寔非聾盲之所可記焉況彼之神以拜體一以立管一于天一蠡于海者乎請其祭之而爲子之千金贈言一愚拜之曰夫山號與旭岡本地名與觀音勿患性之愚魯唯思行而不拜爾旦祭一拜昏連一步縱雖爲謀計眼前利潤終不蒙日月之憐功只在勉旃而已乃造神以祭之曰旭岡大明神也旭岡者昔大同二年田村丸俊宗公之蒼創也夫下繞萬里極雲天豈不在斯神乎故旭岡者則上下象天地兩儀則緣日四月十八日取九天九地之二九矣寔該括四方交羅四隅神風所及王化所播聞而錄焉具而誌焉或問敷嶋之道往人祀和國之靈神或入異域之事迹門執古詩之話一擲一彼花實開落羽毛飛走塵不採据而祈焉然而斯書也或神各而體同或本地均緣日異至彼鷲峰亦无不質而改之是爾之燕石可謹祭之宮守敬而退矣他日又來驪然曰自吾得神知天之爲天譜土之爲地一和國祭神漢土念佛者於言端水波同一體而知歸受筆授得神矣加旃南去雁札北來鯉緘酬答富辭挨拶得便實如濁驥奔泉似蟄龍向陽今也神以可謹社以可立貫道之靈神成矣千金之贈獲矣利生加焉哉愚曰誠哉子之神以囊之弊不招其金以書之拙不廢其義神體新而上達者神體其斯之謂與神主歛社拱手而出矣縑素往來之貴賤信此社司而消二世之諸苦而已豈弘仁八稔闕逢因敦閑朱明林鐘下潛云々と見えたり。此一巻は、むかしありたりしは、なからは虫のはみもてそれと知りがたし



を、武藏坊が紺紙に金泥もて草書にかき納めたりといへり。其辨慶ノ眞翰も文政四年辛巳三月十日火災亡ぬ。また○韓織の曼茶羅一卷○吉廣かうちたる劔一ふり、共に焼亡たり。此神社に清原武則朝臣をはじめ義家將軍、秀衡朝臣、義經公、世々の將軍みなまうでかしこみ給ひて、神寶も多く寄附給ひたりしもみな灰燼なりぬ。また横手ノ城主小野寺代々、この旭岡の神社にねきこしてさちうるまに、神田、みたからもこゝら寄附給ひたる云ひ傳ふのみ。佐竹の御代となりては、源義隆朝臣（龜岡院公の御事を申奉る）正保丁四年に御社参ありて御社領（常高五石）を寄附賜ふ。また源義敦朝臣（源通院公を申奉る）明和六年己丑三月二十日御社参ありて、御齋料として金百疋御社納あり、なほまた神主鈴木周防正重莫に御坏を給ひしよしを傳ふ。

### ○旭岡ノ神主鈴木采女介重俊家譜

○其むかし鈴木三郎重家平泉にて打死の後、重家が末弟わが兄の行方を見むとてたづね來れど、來しかひもあらで、むなしう都に歸り去んとせしとき平鹿ノ郡山川ノ莊に至り、旭岡山明壽院にて古妻帯の眞言宗あり。此寺女子のみにて寺の後廢うせなむとせしときなれば、此重家が舍弟をせちに進めて聳とせり。しかして後、年ふるに鈴木おもふは、われ此神の御國に生ながら僧侶となりて經典おこなはむや、ねたくくちをしき事ならずやと朝夕神にいのり身のたつべき事をこひねくに、舞鶴城主（積座ノ城主也）小野寺某旭岡に神主あらざる事をなげき給ふを聞けり。さちなる事かなと、此君の仰のまに、旭岡大明神の神主となれり。かくて、うみの子のいやつき、家榮えたりしが、承應のとし家屋焼亡て、あまたの神



財古記録、系圖等も餘波なく灰燼となりて六七代の間委曲ならず。さりければすべなう、今八代に當ル  
○鈴木山城守重信を上祖せり。○二代惣太夫重一○三代越前守重政○四代市之正重吉○五代宮太夫  
重道○六代宮四郎重清○七代越前守重次○八代周防守重英○九代大和正重直○十代大藏重兼○十一代  
當神官鈴木采女介重俊○男政枝重治也。

## ○旭岡ものがたり

○酒の泉ありしは天狗館の麓あたりにこそあらめ、其天狗館てふ處は今いふ廻館まわりだてといふ邑にて、今は背  
山ながら旭岡の舊社地の峯也。みちのくの平泉にも泉酒いづみざけといふ地あり、酒泉の跡也。其あたりにて正  
月の行事に家回やまぐわいすりといふ事あり、その辭に、泉酒が涌わくやら、去年酒の香かがすると唄ひ、こゝ處にては此  
年酒としが涌わくやらとうたふ。また伊勢國桑名近在九足八鳥くくみあたりに、竹の根より酒のわきづるこて人群  
れいたりて、これをもこめこし事あり。また雄勝郡雄醜おしはね骨山こたけの麓の杉の根より、文化年中に酒涌  
出し事ありしが、東島海別當あがちのみや、世に奇怪流布なむ事をはばかりていたくひめしかば、近隣の人もしらざ  
りしといへり。南部のだむひる長者、また養老の瀧のものがたりにひとしかりけり。○寶永のころなら  
むか、横手、御免町の給士拳法和術の達人旭岡に丑刻まゐりしけるに、しきりになく子を負ひすかして  
御坂をおりくる女あり。さと身毛いよだちすゞろ寒く、あやしとおもふほごに、いと近づけば女にむか  
ひ、こはへむぐゑのものならむ、一うちにしてむとあらかにいへれば女のいふやう、わは、さるものに

てもさふらはず、あやまち給ふなゆめ／＼。黒川村の某が女房にてさふらふが、わが男つまなるもの百日ま  
り瘡わらにやうにふしおごろへ、ものもすゝまで命もあやうかりしが、此御神に祈てやゝ止とどてさふらふ。そのか  
へりまをして、しか七夜の丑の時まゐりして、こよひにをへさふらふを、しか誰人にや、こもにかくうし  
のときまうではし給ふ、さぞあやしこも／＼おぼしつらむとて別れきこなむ。○貞享、元祿の世ならむ  
角間川の給士金子與兵衛といへる人、こしごろ子のなきをうれへて此廻岡にいたりて、男子ひこゝろ  
まうけぬ。あやしき事は、その子産うまれながらにして左の拳をにぎりてひらかず。いかなるかたはものな  
らむかとおもふほど、此子七歳にもなれば復祭かへりまつしにいざなひまうでむさかねて誓ひし事にしあれば、かく  
て妻をもぐして三人此御社にまゐるこて御手洗の寒水しみづに手あらひ口そゝぎ、身もきよまはりなむとて、  
此男童が手を此水にひててあらふほどに、かの握り閉たりし左の掌たちまちひらいて、そが掌内に錢幣ぜに  
形あり。その錢形を見れば開元通寶の文字あり。あなうれしこもうれし、まことに神の子寶を吾に授あた  
たまはりて、わが末胤の榮行ゆかむしるし也とよろこばひて、家に傳る吉國がうちし劔刀を廻岡の社に手祭てまつ  
奉りしが、今焼ながら残りたり。なにくれとまをして、此神にこひねぐにいちじろし。○廻岡山の額は  
北城文省といへる人の書る、此山にもまうで登たりし人也。○名杉七本の外にも年經る櫻、こしふる山  
梨の木あり。その梨の木はうつほ木にて、是は山神の梨とて、正月、十二日、きよはらひせし祓串はきなとこ  
と納るをもてしか名におへり。櫻は一重のうす花さくらにて、その高壽木也たけことき。○此廻岡の神事は古

十七日なりしが、ゆるありて今は十八日を祭るといへり。なほくさくさのもの語りはあれど、こゝにもらしつ。

○十一面ノ社　大澤邑に座り、いとく古きみやごころなり、旭岡明壽院ノ末院にして久林山大澤寺と云ひしは此十一面ノ社の創也。（にじゆ）天文十七年戊申、秋小野寺前侍從藤原景道朝臣再建ありて、貴賤うち群れ歩をはこびし事、天文十七年九月十一日十一面ノ社の別當鈴木重武が誌（か）る社記に見えたり。古社舊刹の地とのみ傳へ語れど其蒼創をしらずといへり、なほ考へしるさましき事にこそ。祭日四月十一日、祠官部重昌。

○五郎宮　（五ノ宮を誤るか、いかなる此舊社にや、ゆゑをしらす）いふ處あり、いとく古き地也。なかむかしに寺などありつる處にや、さだかならず。岩瀬ノ前此地に柄家（おかし）て、十一面觀音ノ社にはしげくにようで給ひたりしよしを老人のものがたりにせり。

○岩瀬御前ノ事　ある輯録ニ云く、岩瀬御前の御實母は葦名盛重公ノ御臺の御妹也。須賀川岩瀬ノ城主二階堂盛義公の御後室ノ嫡子行親逝去の後、盛隆公の御次女を申請て御養女と成され、此御姫君に御増をなされ二階堂の御家御相續と思召れ候よし。○天正十七年十月廿六日、須賀川の城伊達政宗の爲に没落の節後室母子ともに岩城へ御引移り、其後佐竹へまゐられ常陸に御座なされ候ところに、慶長七年秋田へ御國替へのみぎり御兩人ともに秋田へ御越（し）のとき、後室道にて御病氣故須賀川に御逗留なされ、廣福

山長録寺にて御死去。御娘は天英公の御臺ご成され秋田に御座なされ候。其後御不縁に依て横手の御城へ遣はされ、御女房達もあまた付添へられ須田美濃守に預け置れ、御知行は横手ノ大澤村にて二百石を附け置れ、御名を昌壽院様と申奉り候。大澤村の十一面觀音御信仰淺からずをり、御參詣あり、またおなし大澤の内布曝と申處へをり、出させられ御慰みあり。天英様御對面は遊ばされす候得ども江戸御上下のときは御使者あり、また御金、御小袖は度々進せられ候ひよし。また鑑照院様の御代までも梅津半右衛門殿など御使者にて、御金、御小袖等進せられしよし。横手給人の内須賀川よりまゐり候二階堂譜代の者ども、晝夜御見舞奉公仕候。○寛永十六年己卯ノ八月八日、岩瀬御前御年五十五にて御逝去、御法名は昌壽院殿光圓正瑞大姉。御遺骸は天仙寺にて須田美濃守横手惣給人晝夜御番仕り、御葬式は御公儀より遊ばされ、御焼香には主計殿御越のよし。また葦名義勝公よりも御代官遣はされ、故梅津半右衛門殿、須田伯耆殿、其外役人あまた遣はされて天仙寺河原にて葬奉りたるよし。また須賀川御後室は寶珠院様の御妹にして、會津盛隆公の御後室には御姉君也。○盛隆公の御嫡女葦名盛重公、御臺御國替の後角館へ御越し、小杉山と申處に御座なされ候。云々と見えたり。よしある事にこそ。○五郎宮の舊地岩瀬ノ前の古館に阿彌陀佛堂あり、そは岩瀬の御方ノ菩提に安置られしにや。近きころまで、なまみだぶを唱ふ法師守りたりといへり。○沼山櫻沼山村に在り、年經たる鹽竈櫻なりしが古木は朽て、今はその葉にて春ごと咲ぬ。鹽竈櫻は葉まで見事なるよしをもて、濱で見る意になすらへいへる也。



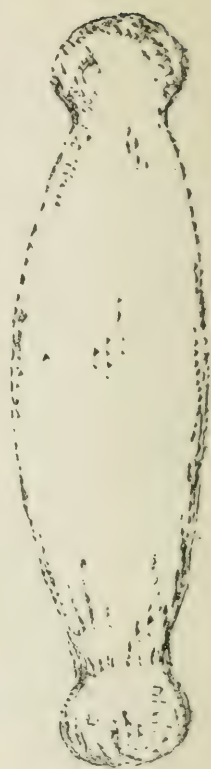
わきてよき櫻也。さて岩瀬の御方、雪消ぬれば此花咲を待わびて日毎に花の御使あり、花咲ば、あしたよりくるゝを惜み、永き春日を花の下に送り給ふほごに、大澤嵐、眞人山おろしとて此平鹿郡に名におふ風のあららかに吹々は、餘波なう散り行をゝしみ、葉櫻の青葉うつるまでめでくらし給ひし櫻也といふ。後水尾院も此鹽竈さくらを、になう好せ給ひて、浦の名ときこえは遠きみちのくの花は軒端にちかのしほがま、といふ御製あり。此沼山櫻の嫩なごこと處へうつしうゝれど枯れ行き、折つぎ、ごり木にすれどもゆめゝ生ひつく事なし。こは岩瀬御前の惜の櫻と村民の云ひあへり。

○十一面ノ社ノ神官鈴木氏家譜

○此祠官鈴木氏は古は旭岡ノ神主ノ家分流たるよし。○上祖天文年間ノ人也は鈴木總太夫重武○二代徳之進重實○三代總太夫重昌○四代徳之進重恒○五代當職祠官鈴木菰重勝也。

○十一面ノ社を猫石ノ社といへる人あり、祠官、大澤の猫石の邊に栖ばしかいへり。

○大澤邑十一面ノ神寶雷杵石ノ重サ二百四十泉零、其石ノ長凡二尺餘り。此石いにしへ山中に降りたり、其とき雷鳴の音したりといへり。石の隕るは隕星也、もろこしのふみごもに石の隕る事を記たり。また朝鮮ノ史記に、高麗王文宗の時に黃州に隕る石あり、聲雷の如し、云々と見えたり。また筆談に雷斧、雷禊の事なご見えたり。按に、石弩、雷斧、雷禊、雷杖などは上古ノ寶具、今ノ世に金銀錢幣を通ふがごとく用たる重寶にこそありつらめ。また文殊菩薩の金剛杵も此雷杵の事ならむか、猶たづぬべし。



○只野<sup>かひつ</sup>弦山<sup>つるやま</sup>稻荷大明神

祭日六月朔日、齋主<sup>横手給士</sup>富岡傳右衛門。

此只野弦はいかなる山の名ならむ、

螺<sup>かひ</sup>石なごありけるか、また山の峽<sup>かひ</sup>てふ事にて峽<sup>かひ</sup>の連峯<sup>つるね</sup>をいへるか、さだかにそれご知れる人なし。こ

ゝによしなき事から、富士の鶴芝<sup>つるし</sup>山を、駿河ならじ甲斐の鶴ご云ひあらがひ、おなじ甲斐國ながら甲府の人郡<sup>ぐむ</sup>内<sup>うち</sup>に行<sup>い</sup>く、あるは郡<sup>ぐむ</sup>へ行<sup>い</sup>くと云ひ、また郡内<sup>ぐむうち</sup>の人は甲州へ行<sup>い</sup>くといふ。他郷の人うち戯れて甲

斐の鶴へ行<sup>い</sup>なごも、甲斐の内ながら、郡内<sup>ぐむうち</sup>は鶴郡なればしかいへり、似たるかひのつる也。近きごしならむか此只野弦の稻荷<sup>いなり</sup>社<sup>かふ</sup>方<sup>かた</sup>二<sup>ふた</sup>の萱葺<sup>かふ</sup>替<sup>かへ</sup>ごき、天井の板の上へに狐ご小蛇の骨あり、鬪<sup>たたか</sup>死たる形にて、

狐の頭ご蛇の頭ご打並て死たり。あやしき事ご俚人のかたりぬ。

○羽根山ノ神明宮 羽根山邑に座り、祭日七月二十日、齋主莊三郎。

○沼山ノ山ノ神社 沼山邑に座り、祭日<sup>(ア)</sup> 齋主小重郎。

○總家員百六戸 ○人數三百五十八人 ○馬三十八疋。

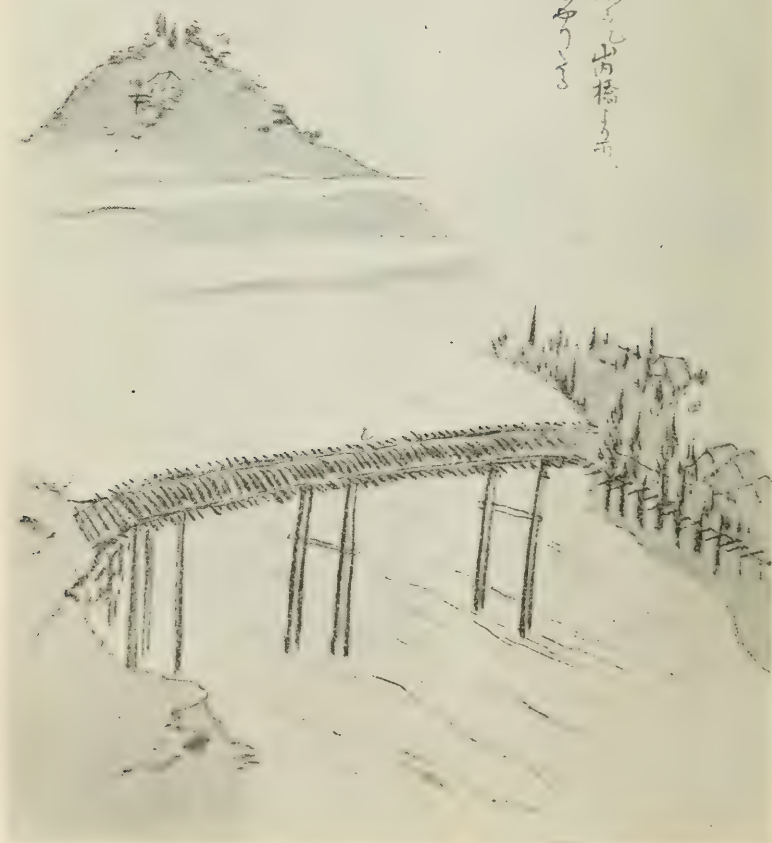
雪吹をやみなければ

眞

澄

梢よりちるは花かもしら雪を大澤嵐名に立てふく。

前郷邑を流るし出橋より  
旭置山と名なりき





旭岡社の一鳥居甲西坂小集

丁三井寺跡の上より  
雨井木坂の遠りの眺望

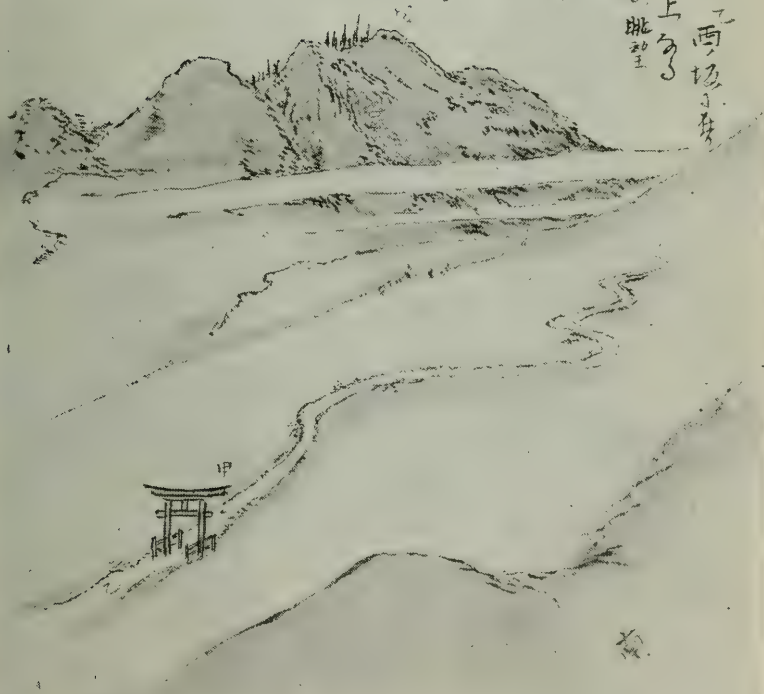
北土面觀音山

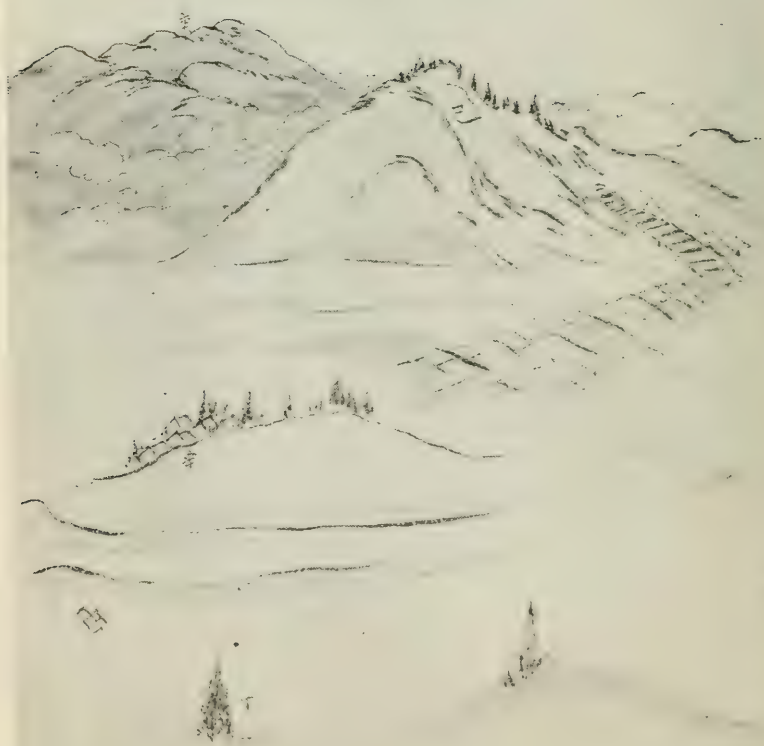
已見、夢山、鎮、松村山

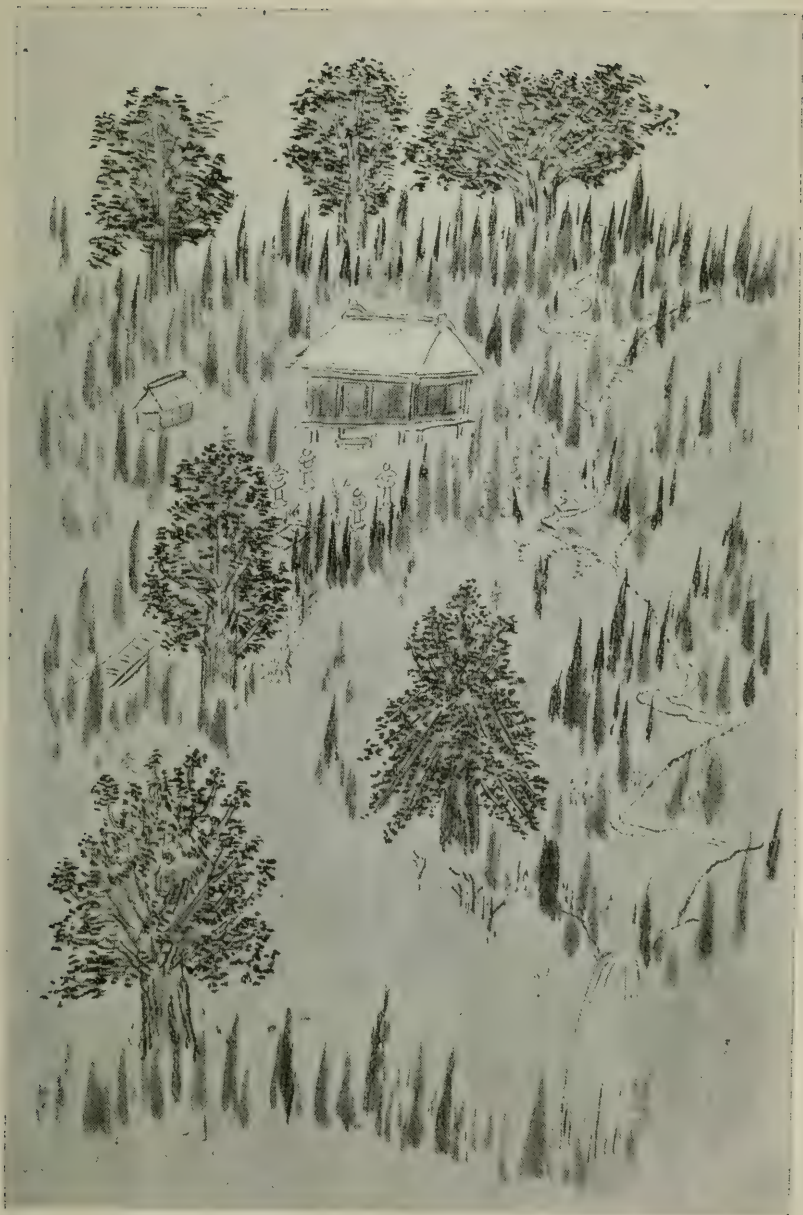
遠くを黒木林の山嶽

いと遠く一本御幸の山

そと見ゆ













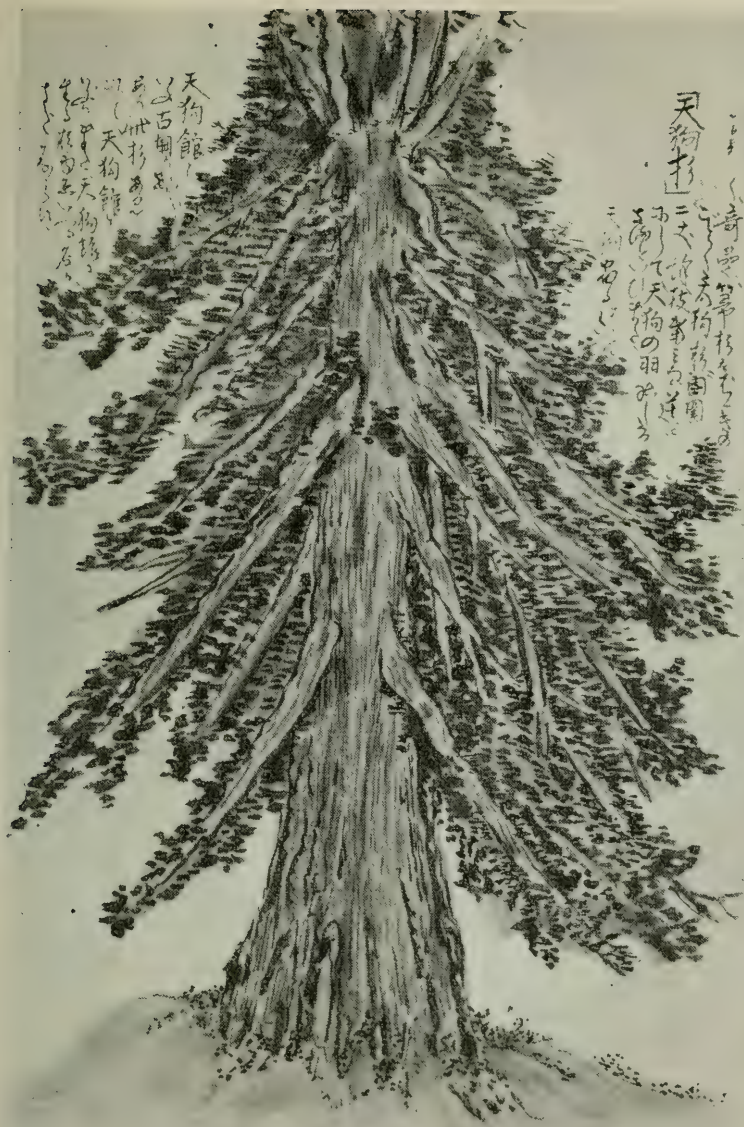


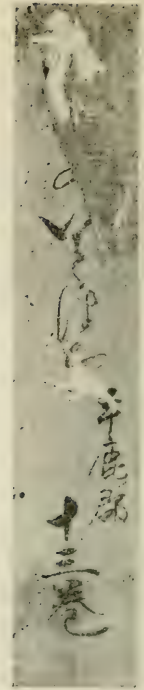
旭園の七本杉の内、最も大なる天狗杉

天狗杉

奇異な形をもち、  
 天狗の羽を  
 二、三枚、  
 天狗の羽を  
 二、三枚、

天狗館  
 天狗館  
 天狗館  
 天狗館  
 天狗館





## ○横手郷

莊屋 加賀屋與三郎  
河村市五郎

○横手は横土堤よこぢいと云いむ約つづまりにや、その義は續紀天平寶字三年のくだりに、己丑勅造陸奥國桃生城出羽國雄勝城云々、置出羽國雄勝、平鹿二郡、玉野、避翼、横川、雄勝、助河などは出羽のくぬちならむかし。其横河に塘や築たらむ、そをもて横堤よこぢいとも云はと云ひてむものか、なほたづぬべし。横手ノ柵しほを朝倉ノ城ロ、亦鎗ノ城ノともいへるごか、此城はもと小野寺景道作て沼館より遷すまり住すまりし城也。小野寺統むねの祖は紀の國古河の城主たり、そは後冷泉院の御宇の人なりといへり、康平のはじめならむ、小野寺ノ前司太郎道綱を創めといへり。小野寺ノ四郎重道の代に此いではの國に來けり。後鳥羽院の院宣、また右大將賴朝朝臣とよ



りたまはりし<sup>みぎやう書</sup>なごもごり傳へもたる家にて、遠江守義道朝臣<sup>てゐのち</sup>まですでに四百年を経たり。しかるに義道、關箇原の軍には男なる孫太郎光道<sup>てゐのち</sup>を山形まで出たせ、いかゞ思ひけむ最上へもまゐらず平鹿の城にのみ籠<sup>り</sup>居しが、やがて石田光成に與して最上義光をうたむごためらひけるほごに、義光、將軍の御前にまゐりて、小野寺義道は秋田城介實季が關个原出陣の留主をうかゞひければ、實季さるものにて、此よしを知りて、湊傳内をおのが名代にさしつかはしたるにこそさふらへ。またそのみに侍らず、戸澤盛安を討んごはかり事ごもを具にそれと相のおれば、將軍大に憤<sup>つ</sup>給ひて、其積罪<sup>つみ</sup>すくなからじとて義道父子兄弟五人石見國へ配流<sup>なぐされ</sup>て、その國なる坂崎出羽守小野寺のやからを預り、また龜井能登守にもあづけられたり。此委曲は永慶軍記にもつばらかに見えたり。しかして後此淺倉城を松野上總介、和田安房守、桐澤久右衛門尉、河井伊勢守、白土大隅守等をうけ取りて、伊達三河守、河井伊勢守、須田美濃守、此三人に守護<sup>まもらせ</sup>られたりし事ごも古記に見えたり。小野寺の後胤、今も戸澤家に在りといへり。

○人見日記云々、小野寺遠江守横手没落の後、二男某遁<sup>に</sup>して戸澤家に隠れ、其子孫五百石にて戸澤家の子分として重き家柄と稱せり、正月元旦の式なご就中格別也。黒澤甚兵衛、澁谷善左衛門むかし小野寺家の哺客なれば、其因縁とぞ、某一年兩家を訪ひたりし事あり。又小野寺興廢記に見えたりし本堂源六郎は江戸へ出て奉公に有つき、御旗本になれりとなむ云々と見ゆ。また此あたりは、慶長のはじめまで

は戦ひの巷にて、諸民安からざりし處也。いくさぶみに雄勝ノ郡たゝかひのくだりに、岩崎の城主原田大膳落城云々、小野寺遠江守ノ臣河内守大に戦ふ云々、死たる女三十餘人、男ノ首二百級、岩崎伊豆數々所手負して、足輕十三人を牽して横手へ皈る云々なごぞ見えたる。横手は本ト關根郷と云ひし地也。關根は假字にて堰根なり、大河より朶流して田に任入す處に、湊小河に械柵いむしづらみなごのあるをいふ也。墨澤古名横川、今いふ櫻川また淺倉川、なめていふ山内川也いにしへとはごころ／＼に流れ變り、むかし横手と云ひし地は、今いふ七軒町の蛭子ノ神社のあたりぞ創めなると郷ノ古老の話也。そを考へば、横手は横土堤つづまの約りの名なる事いぢろし。その横川は横山の麓河を云ひし也、中古は城内坊うちまちを流れ龍昌院の傍の澤地やちニ入り、また大鳥山むか家の大鳥山ノ太郎柳遠か栖し地也の北に流れたりといへり。士家町うちまちなる大森九郎左衛門といふ家に井を掘りし時に、さかごな鮮ノ魚ノ子らんぐひまた亂杙らんぐひの朽たるなご出しといへり。さりければ、いよゝ古川の跡とぞ知られたる。

○享保郡邑記ニ云ク、横手支城山城ニシテ升形規矩馬出九折坂牙城殿門有本丸數十丈也、二ノ丸ニハ諸司代職ノ居處也。慶長年中羽林公ノ遷封ノ先ニハ小野寺遠江守景道ノ居城也云々、伊達三河守盛重シム諸司代職ニ命テ居手ノ諸司代職ニ命ラル、寛文十二年壬子七月十九日戸村十太夫義連横手ノ城代須田主膳盛次シム代居カシム云々。○横手驛ヨリ湯澤へ四里卅二町卅五間、金澤へ一里卅二丁卅二間、増田へ三里廿三丁四拾九間、淺舞へ二里廿二丁四拾四間、角間河へ三里拾七町也。○表町二百四十間餘 同町二百十間餘 川端町百四十間 小路四十間 御厩町

六十 倍臣十間 下根岸六十間 内同田町七十間 御免町百十五間 新町二百四十間 北ノ方足輕田町八十間 同町九十間 云々。

○下根岸町大手下馬、百六十八間餘 上根岸町百二十間餘 羽黒町二百五十間餘 嶋崎町百十三間餘 羽黒新町六十間餘 川端町九十二間餘 足輕

町八十八間半 同町七十間 同町八十間 同町九十間 野扶持町百七間餘 ○屋敷百八拾九軒十村十太夫組下、外物頭兩人

同組、百六拾五軒程組邑地月俸給士、六軒月俸大工、類、九拾軒足輕三與一與十太夫二與山縣高尾 十一軒使番頭、升取等

也。 ○屋敷百五拾四軒向右近與下慶長年中ヨリ久保田向清兵衛居、羽黒町給人ヲ預ラル。 元和五年己未四月向正九郎シテ命云、二千石家

督、時清兵衛指揮横手羽黒、士及足輕等、其身ハ窪田ニ在テ指南也。 内八十四軒給士祿月俸輩、内十軒

大工鍛冶、輩、内六十軒足輕二與。

○横手町 驛馬、前郷村、關根村、八幡村加驛馬也、無高ノ處ニ右三个村高被附置御黒印給ル。 ○市日三日、

五日、八日、十日、十三日、十五日、十八日、廿日、廿三日、廿五日、廿八日、三十日也。

大工町家員百廿一軒二百七十間 四日町家員百十八軒二百六十七間 二日町五日町同七十八軒百四十三間 柳町同二十七軒九十二間 裏町同五十軒五軒 後町同二軒、寺九十六

川原町同十軒百一十一間 田中町同十六軒五十三間 馬口勞町八十間 正平寺町四十軒 鍛冶町百七十八間 云々と見えたり。

○朝倉城の南に中りて上野臺といへるは本田正統さそらへの地、その館跡也といへり。 黒甜瑣語云ク、

横城の上野臺臺は堀の字に近しは、寛永中藩人ニ託幽せられし本田上野介正純野州字都宮にて十八萬石を領ス殿居たる處」と見えたり。

此君つひに横手にて逝去給ふ。 正平寺に葬りぬ、また上野臺にはふり奉りたりともいへり。

○或古録に、十村家の珍藏に二丈坊の持る假月刀あり。 二丈坊雄玄は常陸國金砂山東清寺ノ二祖二條



坊雄玄法印とて、其身、長六尺七寸にして、勇猛法師也。御遷封時、御兵具五拾駄の前に立て、神寶の猿像を負ひ、長刀を突て此國に入來けり。其眉尖刀は柄も打延べにして、いゝ重き薙刀也。いにしへそれのとし、ちやうへへ鳥ひとつ、東清寺に翔入しかば、こは幸なる事とて、れいの長刀ごりのべ打おとし、焔として君のまさな事に進りしとなくむ。鳥馬の焙物吉例は其式○小梅乾○枝山椒切、昆布など、云々と見えたり。眞澄按に、長馬は本、鶴といふ鳥也、此鳥をせちぶの夜、あるは元旦の膳菜に備ふは、繼身の義也。常陸方言にて、長間といへりとか。そも、此鳥のから名を馬鳥といふ、馬鳥は魔鳥に聞かゞれてふさはしからねば、しか逆にて稱て鳥馬といへらむを、長間とは作るならむかし。また猿鷹まはしの松岡、西田など、この事は此寺にゆゑよしあれば、その寺の條に委曲也。いさゝか此處に云ひしもよしなれど、長刀のゆかりもてしるしたる也。また久保田の古河町に高根久左衛門といふ家あり、是二條坊、黨類なしにや、高根の家藏に二條房法印雄玄の畫像ありといへり。

○戸村の城中に黒袴ノ神といふ社のありとし聞しが、其社ありやなしや。永慶軍記追加云、佐竹攝津守義廣討三變化といふくだりに、常陸ノ國戸村の城主攝津守義廣は、清和天皇十九代、後胤佐竹左馬ノ介義仁に四代孫、武勇に名を得し兵ノ也。かの義廣、秋の夜の徒然に、寢られぬまゝに、端居して唯一人隠にし月に吟有しところに、いづくより來ることもなく、其としのは、十二三ばかりの小坊主忽然とあらはれたり。義廣不思議におもひながら見ぬ體にて居けるが、何とほしらふ後より熊の如くなる手を



さし延べて、義廣が髻こむぎりを掴つかんで引揚ひきあげとす。義廣、心得たりと太刀をひんぬいて彼の腕を切り落す、化物は空に光て忽たちち失せたり。切り落したる腕を取とり、落たる處を見るにそれもなし。あら口をしや、むかし渡邊が鬼の手を取て後七日が間封じ置おきしところ語り傳へたれ、われ渡邊が勇に劣るべきにもあらず、當座取り返されし事の無念さよと牙を嚙かんで怒りけり。化生を切りたる太刀は大原眞守が作りし重代にて、二尺九寸ぞ有りける。さてもかの化物は、傳へ聞し天狗といふものにてや有らむとぞ思ひける。其夜より戸村の領内なりし大山、白山と云處にて、しはかれたる大音を上あげて、攝津守に腕切うでし返報に、三日が内に戸村中黒土になさんと叫びけるを、聞者毎に身の毛よだちて、かの兩山へ行通ふものもなかりしとかや。はたして三日に當れる日、義廣が居城八方より火の手上あて燃立ぬ。是を消んと大勢の者防ぐといへども、消したる跡より燃たち、なか／＼人間の手柄には及べくも見えざりけり。斯る所に白衣の老翁一人いづくもなく來りて、火消の人數に相交り飛が如く四維八極に走せ廻りけるとおもへば、一天俄にかき曇り雨車軸を流し降りて、出火たちまち鎮しずりにけり。されども雨は三日みで晴れず夥く降りにけり。義廣奇異の思ひをなし、是ひとへに鎮守八幡宮の應護にやと信心肝に銘じけり。又俄に雨の降る事も雷神の守護ならむと氏神と祝し奉りて、八幡宮に並て一社造立し今に信仰怠らず。又戸村の祈願所の法印一七日護摩を修し、其後も化生障礙も有る事なりとて外に一社を建立し、切り落したる形になぞらへて黒羽我魔くろばかまの宮とあがめられたり。義廣が男攝津守義和身の長六尺五寸、髭逆ひげさかに生へて鍾

趙のあれたるごとく、勇力勝れて名を得し剛の者なりしが、朝鮮の軍のごき佐竹の武者大將として西國に下り、船中にして病死す。其子戸村十太夫義國器量父に劣らず、先年大坂御一戰に軍功を勵す。佐竹義隆幼君なるに依て公方秀忠公より後見に命せられて、佐竹の分國の政務を執行ひ羽州秋田の旗本に住す。云々と見えたり。またある古録に、「出羽の秋田に黒袴宮といふあり、何神にておはしけるか。また其いますかる地もしらず。」と見えたり。また北比内、莊大館の城中に黒袴神社とてあり、そは、こゝと神靈をなごしめ齋奉るといへり、同神號也。

○横手によこたふ黒澤川の流に上、中カ下と三渡の橋あり、上なるを淨光寺橋とて其寺一向宗派の堺内にかゝり、山内、往來、大町に出る土橋をしかいへり。中、橋はたゞちに追手に渡る橋也。此中の橋のひんがしわたりの橋端、岩屋譽庵といふくすしが栖むあたりにて、八柏大和守道爲、最上義光の計略におちて義道公よりとみのめしあれば、とるものも取りもあへすいそぎ大手口に入らむとする處を、隠れ待たる檜内淡路、黒澤甚兵衛つと出で、御邊が逆心すでに露顯す。急ぎ首を刎よと君の仰を蒙り待受たりと云ひもはてず、八柏が頸を水もたまらず打落す。と永慶軍記に書きたりしは此處也。智謀深く無二の忠信大剛の勇士を、愚昧の大將と、其世の人々小野寺義道をうとみたりしと云ひあへり。下、橋を蛇ヶ崎の橋といふ。いにしへ此淵に水蛇みづへびのすみたりしよしもてしかいふごも、また後三年の戦ひのごき、柴橋を綱もてとこころく釣りて、義家將軍の渡給はゞ、其綱きりはなちて義家朝臣を此河に沈め奉らむと、かねて

武衡、家衡はかりごちて其綱一度に切りはなれたりしかば、義家あそみ、ゆくりなう此はかり事におちてあやうかりしが、岸の蛇籠じやかごに止りてことなうおまし／＼き。さうければ、蛇籠が崎とむかしは云ひしかど、今はもはら蛇じつが崎と省語にいふ也と、俚人のかたりぬ。朝倉河も櫻川と云ふ、みな黒澤川の流なれど、横山のあたりにては横川、朝倉、城近くは朝倉朝櫻川の約マリあさくらならん河といふにこそあらめ。此朝倉河のいづくもあれど、わきて此蛇野崎のあたりに水蟬みづせみを聞けば、其聲鈴鳴き、玉鳴、亂鳴など、井手、芳野川にもをさ／＼劣るものかは。おのれいと／＼わかかりしとき此横手に來て、鈴木丹下とて能書人ものかくの宿に二三夜泊りて、ひねもす、さよすがら此水蛙みづかを聞つゝ樂しと思ふあまりに、あるじの鈴木翁に話かたれば、翁はたゞ虫なごの鳴くならむ云ひ消てさらに耳にもきゝれざりしが、また津輕路なごにても是レを河鹿かじか、鰻うなぎなごの啼なくといへる人あり。河鹿も水蛙もみな石の上へに頭をさし出して鳴な也、歌には水隠みかくれのこゑなごよめれど、水底に鳴きては聞えず。大和、山城なごの蛙は春深く、さくら、山吹咲ころより夏かけて鳴き、北國なごは田うゝるころより時鳥聞終るまで、その集すくこゑ盛も也。蛙のこゑはすたくもの也、石ふし、かじかは一魚ひとつ／＼鳴也。石斑魚かじかはころ／＼と鳴こよめるも謬まちがひにや、其聲さや／＼と聞ゆる也。また水田にすむ蝦蟇かはづと早川の清水に居る河津かはづとは、其形、足も頭も喙くちばしも甚異也。鳴音も鳥の轉るやうなれば、駿河ノ國にて是を鳥の鳴なといひつる里あれば、丹下翁の、老のひが耳に聞きうごまれしのみにもあらざるなり。此井手の坐魚かはずの事は、長明の無名抄に委曲にごき聞えたり。

○往古、往來は牛沼うしのぬまの南の方に在りの上へあたりをかゝり、今の九折つゝら、片岨かは、帶曲おびくまなどいふあたりにもく  
だり、また山内、南郷の奥よりも嶺通ねつとをし、中古は元正坂もとただ邊に在り明永野の邊に在りを蹠ふみて往復いふくし事あり。小湫二通せふたつあり、そ  
を一ノ堰二ノ堰と呼ぶ。一の堰は前郷村あたりに流れ、二ノ堰は給人町に流る。此二の堰を小刀湫せうといふ、  
此堰作るとき小刀を堀得ることありてしかいふとも、また母川おやが河あさくらを早川たちといひ、そを太刀川の意に  
取なし、此二堰もみな此朝倉川より引任水ひきまづなれば、此湫太刀川にくらぶれば小刀なりといふ滑稽いひより語  
創ましが、今はもはら其名に流る也ともいへり。此流清淨きんじやうれば飲水いんすいともせり。

○朝倉ノ城は小野寺景道の築きて湯澤よりうつれり。また横手ノ城とむかし云ひしは平城ひらじやうの事なり、平  
城は横手佐渡守某居城たりし、其古跡今火葬ノ地烏邊山のたぐひと化なり。小野寺記といふいくさものが  
たりの其私記しき云々、山北明永熊野山は一遍上人の開基にて、紀州熊野山に准へ、荊和野の白瀧を大峯と  
號し、往昔亂世にて都鄙の通路安からざる故に、東國の修驗峰の瀧にて行をなし、當山に於て僧位に叙  
す也。觀應元年秋田城介泰長公權現を尊崇し、飯詰、八幡、吉田ノ三ヶ郷を神領とて寄附あり、別當遍正  
院三十六坊の修驗有りて晝夜勤行怠らず、貴賤渴仰して繁昌の社なりしに、熊野の衆徒秋田に心を寄せ  
小野寺家を拒けければ、軍兵を遣して僧徒を誅戮し社壇僧坊を燒拂ふ。此時に至て一山永く退轉に及び  
たり云々。然れどもそのたしかなる事は知れる人なし。愚按るに、小野寺輝道の代に數郡を押領し奢しや  
の餘り非道の行ひ多かりしかば、熊野の衆徒己が心に順はざれば、怒りをなして堂社僧坊みな破却せし



ならんか。永慶軍記に、金澤の役氏金乗坊といふ者輝道を恨みて、横手佐渡守と共に謀計をなせり。必定金乗坊は遍正院の法眷にて、我山破滅の鬱憤を散せんがため逆心を企たり。故に、且彼等に與する者多して事整しなるべし。」云々こ見えたり。また佐渡守は中宮ノ介輝道を思ひのまゝにうちこり遠近に威をふるひしかご、小野寺四郎麿景道羽黒山に身を潛みたりしが、父の怨をうちてむものご羽黒山の衆徒、其外由理勢を催し、終に横手佐渡守金乗坊にうち勝て、八柏孫七が忠を貴て湯澤の城主ごなし、その身は横手の新城にうつり住めりごか。本トは平城を本城ごし、今の朝櫻城をば砦の如く築し小城なりしよし。新城の餘材を以て山内の皿木の小田嶋が館を作りしといふ、山内ノ役所是也。そは天正のころにて、今の世に在る眞鉋まがななどは無くてみな鎗鋸也。其遺鉋にて朝倉ノ城も、皿木の官舎古トは小田嶋かも作れりといへり。

○大水戸町 此町は文政六癸未年に草創し也、古は大水戸といふ田字也しを、今町を作りて角間河街道に五十八戸軒を並べて人栖り。此町の家作りなんと土かいならせしとき墓誌石一ツ掘り出たり、其石に梵形有りて正中ノ年の號仄に見えたり、正中三年ならむといへる人あり。こを考るに小野寺系圖に、小野寺遠江守信道、實道有舍弟也、兄道有無二子一故繼其家也。正中三年二月十九日卒四十九歳、法名道鐵と見ゆ。また兄の道有ハ小野寺彈正少弼孫太郎にして、雄勝、平鹿、山北三郡の莊主たり。徳治二年六月二日卒、法名見星院。といへりご見えたり。その正中三年は嘉暦元年にして、文政九年のこと

しまで凡四百九十年におよべり。

### ○横手の五泉

○梅野寒水

此清水はそのいにしへはもとも名高う聞えたりしが、年舊く埋れて誰し知れる人もあら

ざりしかど、國谷金馬老人

七十餘歳からうじて

此好井を尋ね得られたり。田中といふ處の田ノ字に梅の木と

いふ地あり、むかしはこゝらの梅有りし處ゆゑしかいふこなむ。小野小町いこゝ、稚きこき此處に來

宿り、花かぐはしき梅の下水をくませて化粧の水とし、朝鏡ごりむかひよそひたてりといへり。かくて

清水の梅も散り行ころは、小野にかへりいにきこなむ語り傳ふ。

(天註) 小町清水は山本郡土岩川村に在り。戸田一慈編集諸系集抄に小野小町ハ出羽ニ出生

奥州玉造ニテ成長、十余歳ニテ上落ス。實大和守良家之女、祖父良實養女トス。仁明天皇ノ御宇承和之時ノ人也(と見ゆ)

近き世の事から、元祿のむかし徳雲院殿(佐竹義處公の御事を申奉る)

御憩館おほむねりどころありしこきこゝにいでまし給ひて、この梅清水を朝夕に召し給ひたるよし里人の物語にせり。

○蒲廬妙美井

其泉の形なりひさこゐに似たり。

天正のころまでは此處に小野寺家の鷹匠の町にて、その寒泉

は鷹棚やたなの軒近く涌出ぬ。夏月は此清水の上に夏鷹舎さやを作りて、此寒泉に鷹の餌を入て養ふ也、是を氷

室山と號なづて鷹匠の家故實也。「ひむろ山下行、水の涼しきに鷹に飼ふ餌をひたしてぞおく。」といふ古

き歌あり。そのひさご好井しみづは、今寺町となりて西誓寺東派一向の境裡うちに在り。

○柳清水は柳町にあり。小野寺の時代は、傍には柳のみひし／＼とうゑたる町なれば柳町とは

云ひしこなむ、そこに好井しみづありてければ柳清水とはいへる也。此水を御息所おやすみへもめし給ひたるよし。

此清水は法泉寺東派のあたりにやありけむ、法泉寺を柳亭なども書り。

○獨鈷清水　此寒泉は撰集抄に在る仲算大徳の由來にこそならず、獨鈷もて行者のうがちたりし水

也といふ。山奥山川ノ莊大井、邑知が澤なごいへるは倭名抄に見えたる舊跡なり、そはみな山内のくだりにのせたれば、その事こゝにはつばらかならざるなり。

○岩間清水　鳴見澤の内に在り、さゝやかなる泉ながらいつともみち／＼て涌づる。こは「ごくごく」と落る岩間の莓清水汲ほすほごもなき住居すまひかな。と圓位上人のよめる、芳野山の眞清水のさまに似たり。

またその外にその名聞ゆるは、大屋邑の○鵬鳩清水みさぎは往復の道のへに在り。○一盃清水いっはいは沼山といふ村の山陰に在り、○たかうな清水は福萬福萬清水と並ていふ村の笋澤たけのこの坂下、道の傍岨かたそはよりしたゞり落る也。此水は皇都の芹根の清水、また大津の練貫ねりぬきにもをさ／＼劣らざりけるものか。また増田の○鍋子清水は清將軍の古城の下あたりに在り、○七清水は馬倉の村中に在り、○藤根清水○犬子清水○清水町なご、みな其どころ／＼に委曲つづらか也。

○

○此横手に齋奉る神社、あるは佛舎みな祭日あり、遠近合て十九座也。

○阿彌陀佛ノ堂　鐵工町かぢに在り、祭日四月十五日、別當喜寶院。

○蛭子社 裡町に座り、祭日五月二十日、祠宮高木多膳。

○稻荷社 いにしへ常陸國よ 御息館おやすみノ古跡に座り、祭日七月十九日、同華嚴院。

○大阿彌陀堂 縣ノ尺ケ六尺五六寸 佛は御息所おやすみの土を束ねて堆つかを成なてその上に安置坐まつる、此佛は増田の満福寺

の隱居、院内の彌陀を摹うつしつくれ自作り。祭日八月廿三日、龍昌院齋主たり。

○牛頭天皇 寺町に在り、祭日六月十五日、別當大乘院。

○蛇簡崎ノ藥師如來堂 祭日四月八日、同東覺院。

○聖天ノ社 内町ノ前郷馬場丁に在り、祭日六月十八日、同實相院。

○大鳥山 今大鳥居山といふ、是は大鳥山ノ太郎頼遠か古跡也 石佛勢至櫻川の淵より出現也 祭日四月廿二日、同日光院。

○千手觀音 澤の寺に安置、祭日四月十七日、同無量壽院。

○愛染明王堂 同澤に安置、祭日四月廿六日、同自性院。

○大町ノ稻荷社 祭日四月十七日、齋主大町諸家。

また此外の神社、みほとけの含もいごゝ多かれど、みな其どころ／＼に記し奉りて此處に省略奉る也。

○横手ノ大祭は四月六日とし毎に在り

○上宮太子ノ祭也、此神社は前郷村の松原山に在り。その由來は、中古のころ横手に野尻莊兵衛といふ番



匠あり、ある日本伐らんご林に入り、煙のためにて枯葉などかい集て、長沼にて名ある處にいたれば土の内より光氣立のぼりぬ。野尻あやしみ近づきて見れば聖徳太子の木像あり。こは、いかゞして此處にはおまします事か、誰が捨奉るものかといそぎ土を拂ひ萱笠の内にするまつりて、己家おのがに飯りてふしたる夜の夢に、我を祭らば吾レ守リ幸なさむと正まさく見え給へば、あな尊まさきて明る旦神酒する奉りて、かゝる汚穢なる處に安置まつらむ事の恐かしこければ、前郷邑の神明宮のかたはらにまづ頓宮を營もて、みやごころの内にかりにいつきまつり、神事を行ひ奉らまく思ふほごに、其頃横手の大町の下か隅ぐみに富岡道榮隠居なり居なりて福者ありて、此富岡道榮上宮太子の神輿を寄附奉りて、貞享元年甲子、夏四月六日祭禮の式創りぬ。かくて後權宮を改めて造營をなして、貞享二年乙丑、四月十四日官に願奉りて、開花山觀音寺の僧侶弘都法印を導師として遷宮の矩式成りぬ。しかして後此祭禮としゝにいやまし、としゝに募りて終に大祭と成れり。四月五日には山崎といふ處の行宮に在りて齋夜いみ神事の式ありて、夜一夜を人群しり。同六日は鍛冶町より御遷幸ありて、四日町、大町をわたり奉りて後、また始の鐵工町かぢより前郷に還幸。加興丁、けいご、練小童わらこどもおもひゝに花をかざり、彩館車なぐさなど、おのもゝこゝを晴はれきぬよそひ立、近郡の人さらもさはにうち群れ賑はふ事またたぐひなし。仙北にてかゝる大祭は外にはあらじかし、久保田の大祭は及べうもあらねど、能代祭にもをさゝ劣るまじきか。富岡氏が寄附の神輿もとしふりこばれしかば、なほ善つくし美つくしてみがきたてて皇都より來ければ、神もうれしとみそなはずら

ん、いにしへより此郷繁榮地とはなれりといふ。祠官高橋筑後正が仕へ奉る也。

### ○ 孟 蘭 盆 會

○七月十六日は横手の送り盆にて、その賑ひいふべうもあらぬ事になむ。あさくら川に渡る蛇ヶ崎の下に、藁もて作りたるこゝらの舟どもを浮けならべ、艫、舳、舟答、篷座など蠟燭の火をひし／＼と燈したて、さま／＼の形われ劣らざと傍立て、またところ／＼に花火をうちあげな／＼の見ものなりけり。是を見んとて、さばに入みたる人は蛇が崎の橋の上にかしらをならべて、大江戸の兩國橋に花火見る画のさまして、橋もし／＼とふみどろかして、そのにぎは／＼しき事筆にえやは語るべき。

### ○ 村 木 氏 が 由 來

○横手正平寺町古名田中町といふに村木伊右衛門といふ家あり、村木は本土木村たりしが、世をはゞかりて村木と逆には唱へし也。村木伊右衛門は木村長門守重成が舍弟にて、浪速落の後世に潜み浮浪の身となり、此秋田路に來て田中町に在りしといふ。此村木が家に豊臣太閤の賜物とて小倉／＼色紙三枚、五三／＼桐紋有る御夜着の表など、品々ものみな拜領といへり。また本願寺十一世顯如上人より、木村常陸之介に賜ふ添文ある木像のあみだほとけ一體、此證文を見て、村木伊右衛門は木村常陸／＼介某なる事を知れり。  
(天註) 永慶軍記廿卷に奥羽御政道ノ事といふくだりに、内徒残りなく退治すれば靜謐にそ成にける。依之出羽ノ國最上庄内へは上杉中納言を下りける。山北へは大谷形部少輔、秋田比内へは木村常陸介、津輕へは加賀大納言、大野修理亮、片桐市正、三戸へは淺野彈正少弼下しける云々を見ゆ。さりければそのむかし常陸介比内に在りて、此あたりのあないよくしれ／＼ば、さりける事もあらんかし。) 小倉／＼色紙三枚、大江戸に持至りしかば五百兩に

買むといふ。色紙の價かろし、千兩ならば貨うりもしてむとて、其孫なるもの寶曆十一年のころふたゞ横手に來て、明和八年辛卯六月十六日前郷の火災にあひて、御夜着の表衣も其色紙形もみなうせたり。また顯如上人よりたまはりし木像は仙北、郡六郷の某寺に残りけるよし。村木伊右衛門は木村常陸介、後胤にこそあらめ。また同郡薄井邑の九嶋金吾が家藏に、顯如上人より拜領たまはりたる一寸八分の香木の阿彌陀佛あり、是は顯如上人戰ひのとき、兜の内に納め給ひしみほとけといふ。また顯如上人の兜は皇都の鎗藥師に在り、其よしは光佐上人顯如上人の兜を太閤秀吉公に讓給ふ、秀吉朝臣また東照神君にゆづり奉らる。神君其兜を三河、國山中の二村山法藏寺古名出生寺、西行の詠歌ありに御寄附ありて歷代法藏寺の什物たりしが、明和の末安永の始ならむか、法藏寺の本山鎗藥師の圓福寺に納る也。其故は、住僧かの寺へ轉院の時守護ありたる也といへり。(天註——顯如上人、諱光佐、信樂院殿直叙法眼法印權僧正、文祿元年壬辰十一月廿四日遷化、行年五十歲。)

○横手外町チノ部

かぢ町 柏

屋森氏也

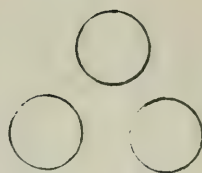
○二日町に柏屋九右衛門とて輩肆しよものみせあり。此家に奇事あり、血類正統、人はいづれも二月病死スといへり、婿娶よめなど他系の人はしからず、ことなる事也。血類はみな長壽たりとか。津輕の黒石に近く二莊瀬村にては二日に人の死事なし、二日、産神伏見權現に神酒する奉り一村の人祝ふに精進しんじんなどいふ事なく、いつも酒さかなもて肆宴さいえんして樂しむ也。さりければ一村に二日は佛事なし、さりければ他邦よりうつりすみ、また一向宗門の家はしからず、二日にもほとけ事ありといふ。ことなる事ながら奇事は似たる







○定將 内藏介、實曰井邑矢野玄喜、四男、後半兵衛と改<sub>ム</sub>。○定則 幼名市松、後九右衛門と改<sub>メ</sub>、云々と見えたり。屋號を今柏屋といふ、八柏村に所縁あるをもていへるならむかし。



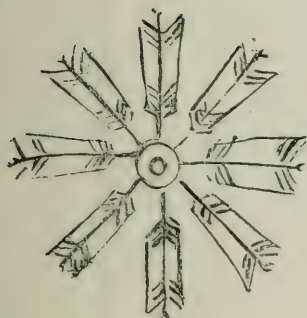
盛綱ノ時  
家紋也



正綱於豫州新田少  
將義宗朝臣ヨリ賜  
ル家紋也



定盛ヨリ是  
ヲ替紋トス、  
三星ノ略也



定政病中ニ紺屋ニ六本筋車  
ノ衣裳ヲ申遣ス、染師誤テ  
八本矢車ヲ附ル、此衣服  
着シテヨリ病氣平愈セリ、  
依テ是ヲ替紋ト改<sub>ム</sub>

○ 六歳女むっごの力あるものがたり

○此柏屋九右衛門が孫なり、次郎なる忠藏が女おのへ、文政四辛巳年まね出生てこの春は六歳になれり。此娘三歳のとし、錢一貫を束ね繩にゆひて、ゆびに掛かけありく。あやしとおもふほどに、去年よりことしはわきて力いやまさりて、去年の秋のころより、ことさらに七貫の幣ぜにを、繩もてからげもてありきぬといへり。また大人おとなの雪車の後しりおしなごぞせりける。その六なるおのへがあし手の骨はいと／＼太く、その身堅く、肌は玉のごとく、つら／＼椿のつら／＼として、をのこ子ならば相撲のほでこも成りて、世にその名も高く知られなむものをと人々いひあへり。

○

○同家の重寶、此うらのひらにしるしおきぬ。

本阿彌德友齋大塵菴光悅筆摹書 拍屋九右衛門家藏

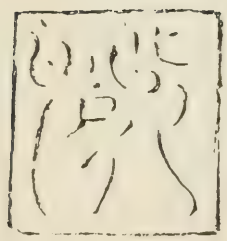
室  
ハ  
リ  
ノ  
ミ  
ヤ  
ト  
シ

中  
ノ  
ミ  
ヤ  
ト  
シ

雪出羽道(平鹿郡十三)

雪出羽道(平鹿郡十三)

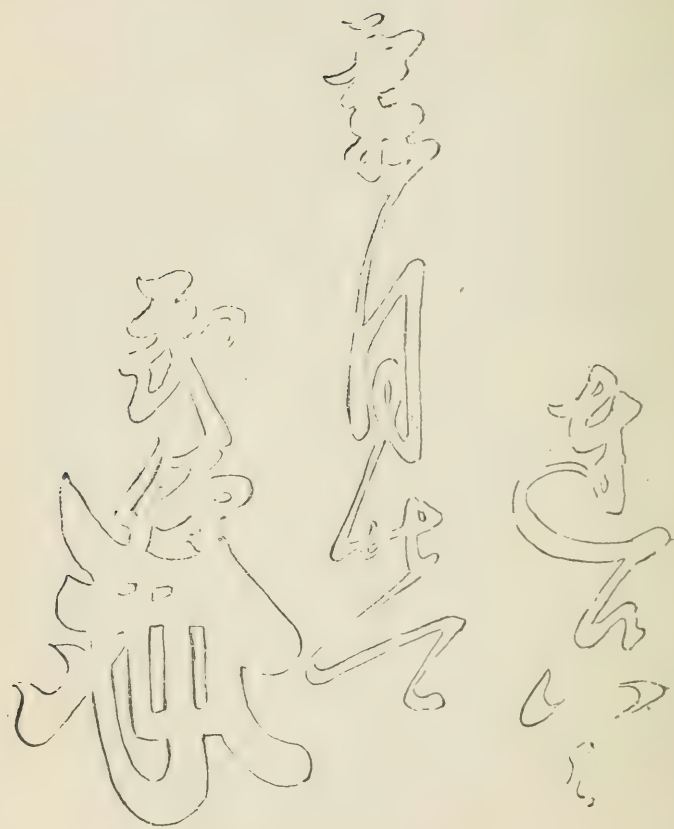
月





今福  
為我  
可年

拍屋九右衛門家藏

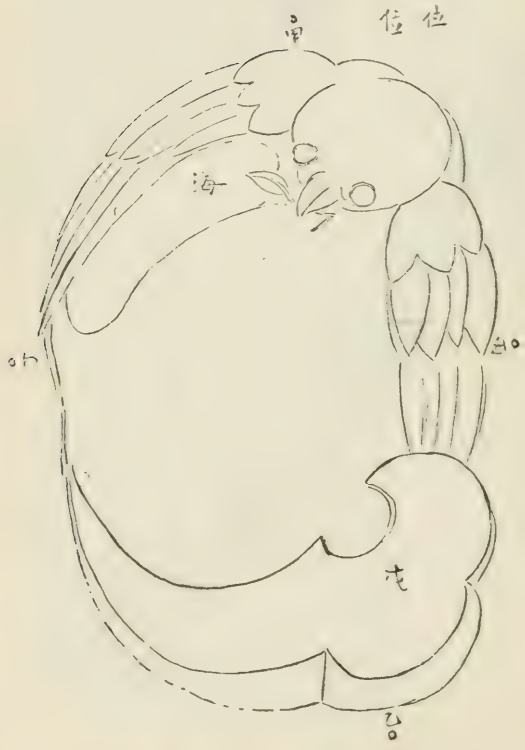




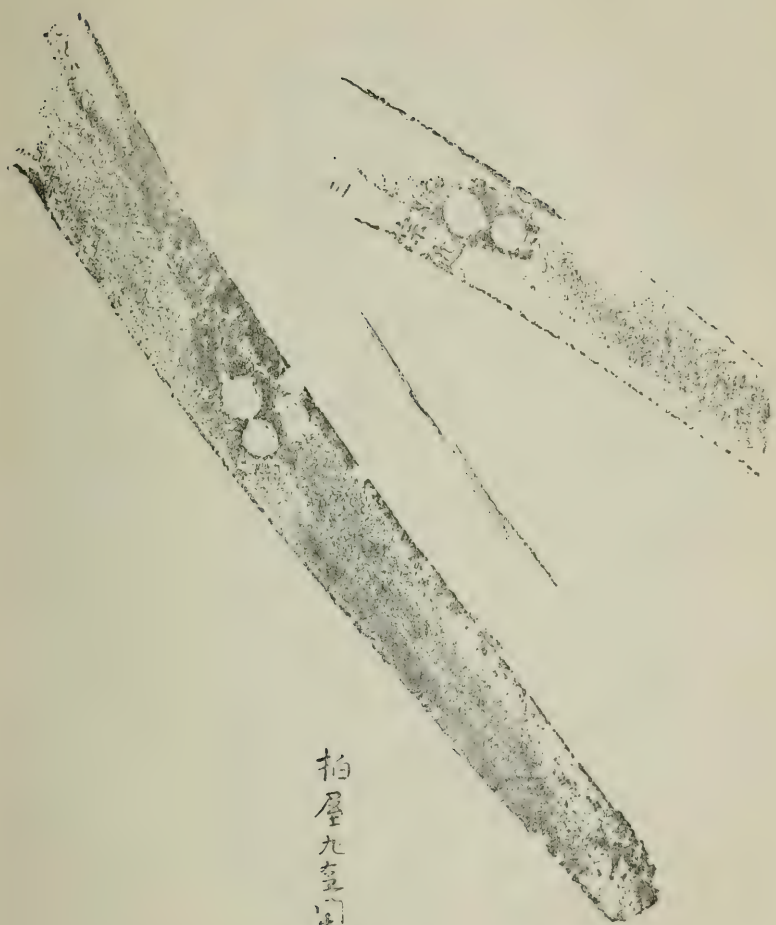
鳥形硯  
舶来馬汗石  
堅島像し

柏屋九右衛門藏

甲乙、四寸五分位  
丙丁、二寸七分位  
厚、五分斗  
研也、二寸斗  
石色、微黒色  
片、墨土、其至







拍屋九重「家藏」

二尺三寸九分

○畑、氏來由

○同鍛冶町の染物師畑ノ喜平治といふ家あり、本、加藤式部少輔殿ノ家士にて畑ノ五兵衛某と云ひしが、會津御遷邦のとき二本松ノ丹羽公を屬<sup>たのみ</sup>て本宮<sup>すのみ</sup>に住居しが、舍弟彦左衛門出羽の横手に住つるよしを聞きて此處に尋ね來る。その往來ノ關手今に持<sup>もち</sup>り。また其ころ突せ來るといふ鎗あり、無銘也、こは嶋田ノ吉祐ならむといへる人あり。此畑氏の上祖といふは、新田義貞朝臣の四天王の一人畑六郎左衛門某なり、家系譜、武器等はみな横手にて焼亡せりといへり。新田家の武士など出羽にそころノノに聞へ、また由理郡本庄の荒屋敷村に新田九兵衛といふ民家あり。此家はもと新田左中將義貞朝臣の後胤<sup>しんぎ</sup>なごにてや、家に黄金の銜<sup>くつわ</sup>を祕藏<sup>ひめ</sup>もたりと、その郡の人つばらかに語れり。

同家藏關手形、鎗ノ圖、此左ノに在り。

此爲式部水部交部等部細而急之仁

知氏家藏

臥部補文

[illegible]

此乃上之妙也

謝永清

上  
便  
う  
り  
る  
あ  
ま  
の  
あ  
は  
れ  
希  
々  
子  
息

美人自名爲人  
以王人爲新  
其如

道より通るよりわきめをわきま

あめり

素意を云

七月

あめりきより

安田あつた

日中

あめり

あめり

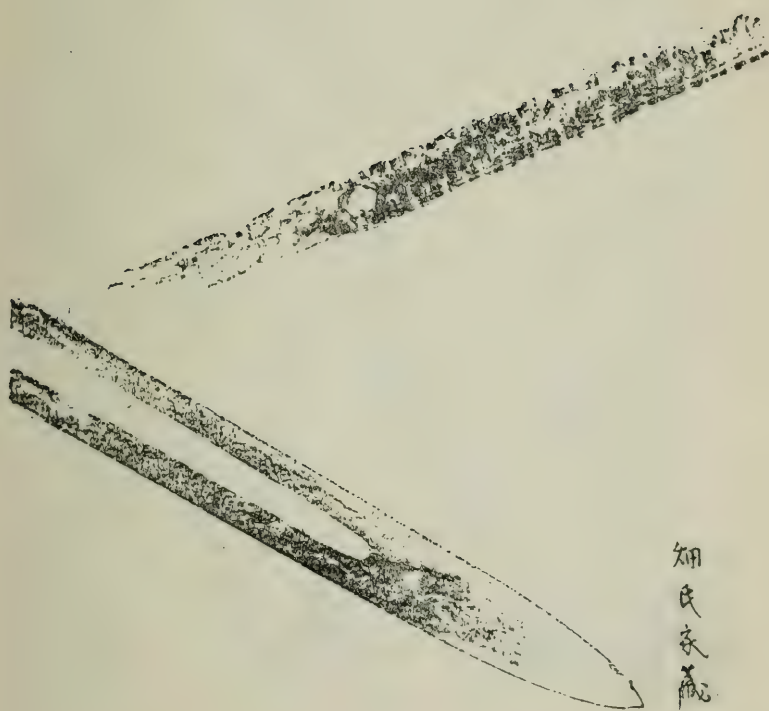
あめり

あめり

あめり

あめり





細民家藏

雪出羽道(平鹿郡 十三)



涼方直筆色紙形一枚臨書

鍛冶町柏屋忠兵衛家藏

うま  
人乃

あ

え

い  
え  
の

う  
ら

あ  
う  
り

な  
う  
あ

そ  
と

は

田  
い

## ○朝倉、城戸

○此城の西坊を○本町三丁といふ<sup>本町、狸町、新町</sup>也、城の南の坊を○根岸町といふ、上下二町也、南に○嶋崎町あり。此七町は戸村家の御組下也、みなおしなめて内町といり。

○羽黒町、此坊○中新町○御免町也。是は向家の組下也、みなおしなめて内町といへる也。

○此城を朝倉といへれど、そのいにしへは朝草刈の云ひしが創めにて、あさくさのならむといへる古老あり。是をおもふに、吠戸羅寺の前なる小橋を朝草の橋といふ、是も其由來にや。此小川の源は丸山、鳴見澤、瀧の澤なごの三ツの瀬此溪川に落て、朝草刈が言葉もて障微のむかし云ひつるを、朝倉も朝櫻も訛傳へたるが、今は本城の名となれるにこそあらめといふ翁語あり。

○牛沼 朝倉の城の南の方に在り。むかし良材負たる牛の此沼に沈みて、うしぬまといふことも、また棟木、内梁やうの大材を竿といふ、其竿のしづみしが水牛さくゑして、今もをりとして背をもたぐる事ありといへり。此うし沼の牛は竿<sup>うし通雅擇屋使不</sup>也と云ひ、また湫に牛を築籠たるが今も靈あるこもいひて、ゆゑよしさだかならず。此沼水天神林治左衛門の家の庭に落て、其近隣の湯口莊治といへる家の庭より御要割の堀に流れ入るこぞ。

○瑠璃山龍昌院といへる曹洞宗あり、戸村公の菩提寺也。此寺に石狐ノ社といふあり。此寺の住僧狐の頭につゆこならぬ石を拾ひて、木にて軀を作りて置けるにあやしき事のみ多かれは、寺の隅なる處に



祠を作りて、これを納めて鎮守ノ神と齋れりといへり。

○横手町内羽黒町

上か遠さ野の氏

○上遠野かさはのは上津かつの栲今いふ鹿角也も。こいふが如也。此上遠野織部の家はそも／＼俵藤太秀郷朝臣の後胤なり。大坂御陣のときは上遠野隱岐とて英雄の士ありし、頸許多捕りては投捨たり。首帳のとき首高名はこいへば、隱岐が捕たる首には笹の葉さして、こころ／＼投置たりといらへしこなもいひつるよしを、今し世までも語り傳へたり。

○同羽黒町に赤坂氏あり。喜門といふ人勇士にて、落合喜物太といへる浮浪人勇力なるつみんごを捕り得て、二十斛を賜りぬと語り傳ふ。此後に赤坂登とてくまたか鵬つかふに名譽の壯士ありし、角鷹くまたかは兄弟のけぢめなうつかふならはしといへど、小形がわざよしといへり。鵬は兎のみを捕ををわざここそしつらめど、登は雉子をもはら捕らせたりといへり。登つねに語けるは、御制禁ならずば鵬をた手訓して雁をも捕らせなんと人にいへりこなむ。いつも放養はなちがひとしておのが心のまに／＼翦それやり遊ばせて、夕つかた家に飯れば、鵬は後より追ひ來て登が肘に居すぬこなむ。はや其人も今は世になき人也、をしき事になもありける。此鵬の捕りたる兎のまさなごに兎の逃料にげづくりといふ事あり、こは兎の庖丁第一の羹也、そは能をろえたるし／＼ごにあらざれば料事つくろかたし。これをつくるに先念珠袋すずてふものあり、そを取り捨て木葉この咋はみを能を内を拂ひ、是を吸物うまとしまた凍烹さめたうを喰ふに、其甜うまいふべからずといへり。考おもふに逃にげ

は膽をいへるか。蝦夷の詞に膽をニンゲといひ熊膽をもニンゲといへば、蝦夷辭の残りたるにこそあらめ。熊鷹の兄を角鷹くまたがと書弟を鷗くまと書は、兜の前立鷹角は雄熊鷹の頭に準ふといへり、うべも角鷹の文字形もしられたり。しひ事ならむか、なほたづぬべし。

○横手内本町

妹尾氏

○妹尾氏

世のを、姓に妹尾と書ケリ、盛衰記に見ゆ、備中ノ國郷名のよし。妹尾は吾妻鑑より見ゆれど妹は妹の謬也、また妹は女夫二合の字也といへり。また妹は延喜式にも見えたるもじなり。妹尾五郎兵衛尉某

さて大力の勇士あり、御遷邦の時常陸ノ國より御供して來けり。其五郎兵衛が帶劔はかねよく國次がうちたり、其長三尺一寸許、刀廣三寸餘り、常人のもろ手わざにも持る事やすからぬ重さといへり。近きころまで五郎兵衛が履器ふみものなりとてありしが出火焼亡たり、木履なごは小俎のごとなりし。それ見て大男なりし事はおしはかりしられたりといへり。

○小田部氏 同本町に小田部兵右衛門某あり。此家に雲慶が作りし阿彌陀尊藏もた、みぐしより蓮臺まで

其高サ五尺許、上祖の水戸より負ひ來る佛といへり。

○同本町新丁に小田部三郎兵衛家藏に、恵心僧都眞筆の阿彌陀佛ノ三尊あり、其甚妙いふべからずといへり。

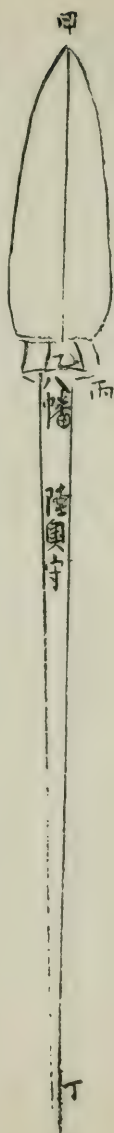
○横手内本町上根岸町

山縣氏

○山縣清右衛門某、代々物頭役にて久保田に其累流多し。此家は源三位賴政ノ後胤正統のよし、また津

輕の黒石ノ郷ノ圓覺寺東本願寺宗門も頼政ノ末胤なるよし、また東本願寺ノ家老下妻氏も源三位頼政朝臣の末流にして、頼政の眞翰もとてりごも家藏もてりといふ。また阿仁の産にて今久保田に住居すめる杉野氏の家に、頼政の眞筆なる念佛得失議一冊を傳ふ也。

○同上根岸町上遠野喜太郎秀英家藏。



(甲)此亘一寸二分(乙)

(丙)此亘三寸二分(丁)

八幡太郎義家將軍つとむノ御鑑 平安城光永ノ作ならむといへり。此鍛かぢは、義家朝臣軍中にいざなひたまひし、うちたくみ也といふ。

○同上根岸町の前澤氏は前澤筑後守ノ後也、今前澤鞠負きまりといふ。此家の門前に化ケ石いしといふあり、其根の深フサはかりがたしといへり、をりとしてへむぐゑのもの出くる事は此石ならむといふ。

内町  
○横手下根岸町

淺利氏

○淺利五郎作あり、淺利長兵衛某の家也。長兵衛足利尊氏朝臣に仕へまた織田信長朝臣に仕へ、後淺利家に仕へて軍功に依て淺利を賜りぬ。上祖より代々鷹養たかがひの家にて、いにしへ兆曼梨が故竹女に傳へた

りし祕書、又興世、根津神平が故實<sup>こじつ</sup>どもの書ありて鷹の古術は此家に残りしと、ある輯録に見えたりしが今ありやなしや。長兵衛隱居名を及蘭<sup>あきらわ</sup>といへり。ぎふらむは紫蘭<sup>むらさきらん</sup>てふ草よりや思ひよりけむ、俗に紫蘭<sup>むらさきらん</sup>といへる草の漢名を白及<sup>はくしつ</sup>といへるをもて菰蘭<sup>こらん</sup>な<sup>ん</sup>どいふ人あり。また花肆<sup>はなや</sup>、うゑ木屋にてもしかいへるか。此淺利氏の家藏に信長公の拜領<sup>たよもの</sup>とて鷹<sup>たか</sup>、餅匣<sup>もちびと</sup>とてあり、外は金梨子地に金粉画<sup>まき</sup>にて五三、桐、藁あり、内は朱塗にて古代の器也。いづれの帝ならむか織田家にたまはりし品ならんと云ひ傳へり。淺利家の分限帳を見れば及蘭は大祿にて、ことに淺利の四天王と云はれたる其内の一人<sup>り</sup>也。鷹つかふ事は名譽の人也、揚鷹<sup>やうたか</sup>、招餅<sup>さうびん</sup>、泊<sup>とまり</sup>山、また、餅俗に兎の頭鳥の頸さかなにせしはむかしなり<sup>り</sup>といふ、古歌の故實もきはめたりし人のよしを傳ふ。義宣朝臣の御世に綱懸<sup>あがけ</sup>一羽得給ひて、鷹はいと小<sup>せう</sup>ければ兄鷹<sup>せう</sup>ならむかといへり。かくて其けぢめ見分べうもあらねば淺利及蘭と平野丹波をめて此兩人に見せ給へば、平野は今も御鷹の役にて鷹の故實もわきまへ知れ<sup>り</sup>ば、平野は此鷹兄<sup>せう</sup>ならむとまをすに、淺利は弟<sup>だいに</sup>ならむ。小形<sup>こがた</sup>ながら逸物なるべしといふに、こを聞て平野やすからず、某<sup>なに</sup>をしるしに弟とはいはるゝぞ。淺利、そこは何をしるしに兄とはいはるゝぞとけしきだち、すでにこしかたなに手をかけなんぞせしかば、義宣公、われまた見べき名處あり、まづ足革解<sup>あしかわ</sup>とて、とかせ給ひて、つと、たばなして翦<sup>み</sup>しやり給ひて、かゝる鷹ひとつに、あたらし武士二人を換ふべきものはこのたまひしかば、平野、淺利はいふもさら也、並居てこれを聞つる人さらみな感涙を催したりといへり。良將の、臣下を惜み給ふ事をするべ



し。もとも其鷹は弟にして、及蘭名所ことく、に脷分<sup>ふれけ</sup>して、其画一卷、今にひめ傳ふといへり。兄弟<sup>せうだい</sup>をあらがひしその鷹は鴟鳩<sup>みさこ</sup>母の鷹なごにや。魚鷹<sup>みさこ</sup>の産、鷹は弟にてもいご、小鳥<sup>ちひさく</sup>して、かならず逸物あるものと云ひ傳ふ。あはれその世に斐地替檢校豊平もあらば、其けぢめも知るべきものか。

○同下根岸町の箭田野新右衛門といふ士家は、その世にその主本多上野介殿に附置れし役にて、本多正純朝臣逝去ありし後かの君の居館をたまはりしかば、こぼちもて此士坊に移し造しかば、館はむかしのさまにて磨き作られし事いふべうもあらず。さりけれど配流の君の居館なればその古例を正し造作<sup>つくろ</sup>し屋戸にて、こと人の家とはいご、ことなりしかど、今は其家餘波<sup>なごり</sup>なう新に作り代て箭田野氏<sup>すめ</sup>住居り。

### ○同下根岸町

### 國谷氏

○國谷金馬翁實名綱以、ばせを流はいかに名あり、其男才右衛門也。上祖は村岡小太郎忠道の後胤也、宇津宮公綱臣となりて、忠道公綱の一字を給りて村岡下總守綱忠といふ。宇津宮沒落の後陸奥に來て國谷邑に寓居し、常陸國にいたりて佐竹ノ家に仕へ但馬守綱忠といふ。家紋も宇津宮のたまものにて三頭の左巴なりしが、今はゆるゑありて違ひ釘貫を家紋とす。かくて御遷邦の後は久保田に在りしが、横手の城附を仰をかゝふりて横手に住ぬ。常陸國の菩提寺この國谷氏を慕ひ來て、其寺横手に移して國谷山正光院と云ひしが、後義繼公のゆるよしありて千體佛を納めて、今いふ義繼山國谷寺正光院是也。國谷氏の家藏に名弓<sup>六</sup>あり、伏竹、傍木よのつねのものならず、こは、國谷源五兵衛忠正とて弓の名人あ

りて、師役せしごき、國守義苗公の給りしよしを傳ふ。

○梅 清 水

○此寒泉はいご／＼舊きものから、とし久しく埋れて知れる人もあらざりけるを、國谷金馬翁三とせ四とせたづねて、やゝ其實地<sup>じこち</sup>を得られき。そは梅ノ木といふ田地の字あり、こゝをもてうめしみづとは知れりとなむ。



雪出羽道(平鹿郡 十三)







## ○華嚴院

修驗

柳町

### ○熊野三社並鳴見澤由來

○平鹿郡山河莊なかつみ鳴見澤の熊埜三所權現は、そも／＼神武天皇四十代、帝天武天皇御世、白鳳元年壬申、七月七日役小角千年遠忌敎ありて神變大菩薩と申ス開基也。本宮は伊弉諾尊、本地佛彌陀如來、彌勒菩薩也、新宮は伊弉冊尊、本地佛樂師如來、愛染明王也。那智山は早玉姬命、本地佛如意觀音大士、並熊野九十九社、神鎮座あり。是みな神變大菩薩、若創紀伊國、三熊野を遷し奉りし舊地也。また別當明江山般若寺遍照院秀俊上人は三論を宗むねとせり。云々といへり。○按、神社考詳節云、熊野、日本紀伊弉冊尊生、火神被灼而神退去、葬於紀伊國熊埜之有馬村、土俗祭之時花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗ふえはた歌舞而祭。今案舊事紀、古事記云、伊弉冊神葬于出雲與伯耆之境、所有比婆山、又社家者流以爲、熊野神自天竺飛來、皆與日本紀不同、然今据日本紀以伊弉冊爲熊野社。日本紀、伊弉諾到伊弉冊所、將遠時所唾之神號曰速玉男、次掃之神曰泉津事解男、凡二神矣。延喜式、紀伊國牟婁郡熊埜早玉神社由是以速玉男、事解男、伊弉冊三神爲熊埜三處權現。古今皇代圖說云、崇神帝六十五年始建熊野本宮、景行帝五十八年建熊野新宮。云々と見えたり。○九十代帝後宇多院、御宇弘安九丙戌年遊行上人始て巡國のとき、役行者の仙跡をたづねて此三熊野社を再建あり、また秋田姓成綱朝臣、代本社七間四面、拜殿十二間、建立ありて、號

明江山神宮寺遍照院いふ。三十六院坊司あり、東三十三個國修驗入峰修行はみな此處にて勉たりし事は、遊行一遍上人、自筆の緣起にも見えたり。社地の堺内四百餘丈、前に大河あり、東に七百餘丈の林あり。また雄勝ノ郡に吉野山往昔此あたりも平鹿郡ならむありてすなはち藏王權現の鎮座あるなり。此嶺連續金峯山藏王鎮座の地をみないふの麓に、藏王權現南郷が嶽より飛行のごき神馬じまの鞍を落し給ふ地を馬鞍いふなり。(天註馬鞍邑八金峯山といふ)幡宮緣起には、義家朝臣の鞍を奉納ありしかは村(村)大鳥居山は熊野ノ宮の一ノ鳥居建し處をいふ。(天註鳥居山は御嶽の二の鳥居の在りし處)また七日市いふ地あり、此處はいにしへの肆場いちばにて、月に三七日みなしかの市立て賑はひしありしよしをいへり。往古修行の道路は今いふ杉澤の谷地中なる彌勒佛堂にかゝり、駒留こまどめ、鉤栗坂かきり、太子長嶺ながね、大鉢森、小鉢森此地にむかし住職あり、手這坂、杉長嶺、ぬかり澤、丸山此所臨内濬りの穴あり、御代參のとき御假屋をこゝにうたせらる、鳴見澤すなはちち本社也。行者小角尊師一山開闢の時、産兒の泣聲せしかば泣子澤ななくこといへるを、今は鳴見澤といへるなり、此處を御澤おさはといふ。このお澤に役行者の御足跡ある岩あり、大和の大峯の御龜石に準へて、寄よな障さやな杖突つな、よけて通れよ新客の者こ、しか唱へたりしとか。鐘澤、峯ノ内也、日像月像ひがたつきがたとて岩に穴あり、むかしの神門かみかどの柱趾はしらともいへり。此穴に水ありてその水涸る事なく、半天河水の如き淳水あまみづなり。雪のごき此淳水たまを紙にひいてて涸ほせば、かならず雨ふるといへり。櫛が峯、行者屋鋪おうちがが峯、此處に「獨鈷清水あまみづ」記に「つばらかに記したり」湯ノ峯、白瀧觀音、此瀧の觀世音を熊野の那智山に擬なぞらへたり。瀧山の麓に護摩檀石とて大石あり、柴燈行事の跡ならむ。瀧壺の内に湯泉あり、かるがゆるに御神ノ神號を鹽湯彦、命こと

は申奉也。また此白瀧の觀世音は定朝が作也。

按に、大相國藤原道長公寛仁三年薨逝云々、治安二年創設法成寺云々、本尊佛工定朝造之、道長公大悦擢、綱位、佛工綱位定朝爲し始さいへり

塔の教園阿闍梨開眼ありて、出羽六郡に卅三番ノ札處順禮の靈場を定めたり。是萬德長者保昌薙髮して

はうしやうぼう

保昌房と名のり此寺巡りの事を創めて、先此白瀧を一番こせり。また、此あたりはもと御嶽の神の奥の

院といへり、御嶽ノ社は萬福長者の産神也といへり。御嶽山の下別當萬願寺専光坊は御嶽春峯はるぶの神の奥の

行の古跡也、今此寺の號のみ移して上境邑の一向宗是也。秋峯は仙北郡本堂本は本に村の大坂山村あり、真

弘、嶽今眞書岳に熊野十二社鎮座ノ峯也、それより山々嶽々を巡り廻る難行荒行、藥師ヶ嶽、田澤の黒尊佛

など順拜して、此行ひ道中日數十三日にして峯の白瀧にかゝる。下別當玉泉院、大覺院也。また神宮寺

嶽の峯續キ姫今岳には副河權現の鎮座あり今の山本ノ郡高岳山のいた八澤本の金峯山こんぶにて行法秋峯あきぶの終りに

して、それより四十八小屋に飯りぬ按に、杉野目村に惠保小屋あり、靜町邑に北小屋、菰小屋、三本柳村に助太郎小屋、六郎小

衛小屋の残り、凡田畠さなれり。かくて峯中修行事ゆるゑたく勤め終れば、當山に於て院號、官位、補任等出させしよし。○九

十六代の帝光嚴院、御宇正慶二年癸酉五月七日、將軍足利尊氏朝臣入洛、時一紙の願文を捧て丹誠之處

速令成就、因茲爲國家鎮護、于時觀應元庚寅八月十五日秋田城介泰長公以御朱印、御書判御證文、吉田、飯

詰、八幡三个莊御寄附也、知行三千石。雄勝、平鹿、山本今云ふの三郡は、熊野ノ牛王舞獅子はすみは、震處今、いふの御

證文三十六坊拜領なり。熊野三社ノ祭禮は五月五日を始として六月五日まで、其時登山の行列には警

固小湊源兵衛御足輕三十人弓十五張、鐵包並同御神輿、加輿丁五人、神樂男八人、八少丁石町久保ノ後押秋田五郎左衛



門秋田氏家來古來祭禮の時人足出シは本ト町郷、羽黒郷、沼田郷也。今また當郷に四月六日太子祭あり、往昔より神山の内に末社にして上宮太子の社ありて、そこを太子長根といふ。此上宮太子社再興の願主は御大工野尻庄兵衛の先祖也、神輿は富岡道榮の寄附也。當山にいにしへは三十六坊ありし也、其卅六坊の内金澤ノ金乗坊とて荒法師あり。此僧小野寺統に意趣ふくみて、横手佐渡守と一味して合戦を催し小野寺家うち亡ス。かくて其後、小野寺四郎麿庄内勢をかたらひ横手佐渡守と大に戦ひ、佐渡守、金乗坊もろともにうち死せり。此ごきの兵火にて神社僧坊もみな灰燼やけうせたり。委々あやあやは小野寺記、また家々の記録にも見えたり。

○當寺開祖遍照院秀俊阿闍梨、白鳳十年辛巳三月朔日遷化。○二世遍照院幽慶阿闍梨、養老六年壬戌八月十一日遷化。○三世遍照院玄養阿闍梨、天長九年壬子十月二日遷化。○四世遍照院明定阿闍梨、仁壽三年癸酉二月十五日化。廿三世マデ遍照院亦阿闍梨官也。○五世源廣仁和三年丁未四月十一日化。○六世秀則延長六年戊子二月四日化。○七世秀貞天德元年丁巳五月五日化。○八世秀房永觀二年甲申八月二日化。○九世秀恒寛弘七年庚戌二月六日化。○十世秀安寛德二年乙酉二月六日化。○十一世秀國永保三年癸亥九月三日化。○十二世秀吉天永二年辛卯三月十四日化。○十三世秀家保延三年丁巳正月廿九日化。○十四世秀長仁安二年丁亥二月二日化。○十五世秀行元久二年乙丑十一月一日化。○十六世秀成天元二年癸巳九月十日化。○十七世秀延寛元元年癸卯七月二十日化。○十八世秀光文永十一年甲戌十二月二日化。○十九世秀高弘安十年丁亥二月十日化。○二十世秀幽嘉元二年甲辰十月十日化。○廿一世秀玄正和元年壬子四月二日化。○廿二世秀定元德二年庚午八月二十日化。○廿三世秀廣正慶元年壬申八月二日化。○廿四世般若院秀源法印、中興ノ開祖也永仁四年戊午七月二日化。○廿五世阿合院秀明法印應永廿二年乙未二月十八日化。○廿六世法道院秀安法印永享十二年庚申二月十八日化。

○廿七世華嚴院秀養法印

寛正五年甲申二月二十日化

○廿八世華嚴院秀重法印

文明十六年甲辰五月十日化

○廿九世阿舍院秀信法印

大永三年癸未

十二月六日化

○三十世大應院秀慶法印

天文七年戊戌四月十日化

○卅一世華嚴院秀久法印

弘治三年丁巳六月五日化

○卅二世三十四世マハ華嚴院法印同名たり

正卯正月十日化

○卅三世秀常

慶長七年戊戌八月十五日化

○卅四世秀利

元和四年戊午三月廿五日化

○御憇稻荷大明神社

慶長七年御遷邦のとき、常陸、國稻荷明神當君を守護し奉りて此地に至り給ふ

よし。そのとき權宮を作り其頓宮へうつし奉り、しかして後に南北五丈五寸、東西十八間、社地に宮殿

二間三間に御建立ありて、華嚴院秀利法印代元和元年乙卯七月十九日御遷宮あり。大檀那當國城主源

義隆公、施主須田美濃守、伊達三河守、茂木筑後、向清兵衛、小瀬縫殿之助、赤坂源太郎、宇留野源兵衛、大

塚權之助、真崎兵庫。○御紋附の御燈籠、その外御寄附の御神器も多かりしが、元祿年中上京のとき稻

荷の御神影、御紋附の御神燈、並に御寄附の神器品々當郷の大乗院に憑み上りたる留主、回祿にて残り

なく焼失。大乗院恐れ入て物語り候、天災とは申ながら前非を悔て語り傳へ候也。さりながら七月十

九日御祭禮は怠らず、今に相つこめ申候也。

○卅五世華嚴院秀圓法印

正保二年乙酉十一月一日化

○卅六世同院秀永

延寶六年戊午五月十二日化

○卅七世同院秀孝

享保十五年庚戌二月十四日化

此秀孝

法印つねにおもへらく、御嶽權現、副河權現の御社此兩社年久しく破壊奉りたるを嘆きて、萬治、寛文の

ころより心がけ元祿の年都に上り、をりをうかゝひ天奏に及び飯國しける道にて、大に病起りて奥州に

至り、黒石郷正法寺の住僧は秀孝の舍弟なれば此寺に在りて、藥用保養して日數を経る程に御偷旨く

だりぬ。御上より秀孝御召のころ秀孝いまだ飯國これ無きよし相述べば、百日の間御いとまたまはりて後住の僧を以てさがしもとむれども、秀孝行末さらに知れず。それゆゑに御公儀より御嶽、副川兩社御建立あり。かくて後秀孝快氣して飯國に及びし處、秀孝關所破りの罪を蒙り家古證文等めし揚られ、別當職もめしはなされ雄勝、郡小野邑の覺嚴院に假り別當職を仰付られ、後住教樂院秀孝甥也相續せし處に、赤坂跡目了元秀照代御城の常圓公、御代、當郷の觀音を始本町の人人々願書奉りしかば、御上の御慈愛を以て本の如く別當職仰付られ相續せり。さりながら兩社の御再建なし奉れば秀孝が心願成就せり。唯うらむらくは社家の別當職に相成りしのみ也。秀孝死ヌとも靈魂此世に止まりて、寶祚長久天下泰平大檀越國守御武運萬々歳と祈り守護し奉らむと、自筆の一翰を遺して秀孝老人積壽九十一歳にして、享保十五年庚戌二月十四日に遷化也。

○卅八世華嚴院秀照法印

寛延三年庚午六月十一日化

○卅九世同院秀秋

天明四年甲辰七月二十日化

明和三年

諸社諸寺院縁起、古記録等

御糺の時、當社神寶什物並古文書殘リなく書寫シさし上候處、本書にて差上候旨仰渡れ候條かしこまり奉

り、さし出し御上覽に備候品々○熊野三社權現御縁起、本書一卷○宮開基書、本書一卷○將軍尊氏公御

願書、本書一卷○秋田城介公御筆京證文

本紙一卷

○獅子祭文、本紙一卷○祭禮御寄進寶物帳、本書一卷○當

院卅代年記、本書一卷○右七卷、同年九月寺社御奉行土屋彌五左衛門殿御月番にて、其節さし上候、戸村

義命様御添心を以テ相納候由。其後安永九年澁江十兵衛殿御月番之砌當寺代僧を以テ寛文十二年出府い



たし、先年御上様へさし上候古記録七卷御返し之事願上候得共、その古記ども今に御返しも無之候得共、  
聞傳云傳へ候通り記録仕候得ば定而相違の處も可有之候半か。又郡御奉行今泉三右衛門殿御勤中に、舊  
跡鳴見澤本<sup>ト</sup>社地に熊野神社引遷申度奉願候處、御沙汰の上へ御檢地役大和田忠藏殿、中嶋兵助殿、小泉  
新右衛門殿御見分相濟、此禮として八月中出府いたし、その節も古記録御返し<sup>シ</sup>の願<sup>ヒ</sup>又候申上候也。同九  
月十三日宮本翁助殿、石川八左衛門殿御足輕御林守二人立合にて鳴見澤<sup>廣サ廿五軒  
長五十軒</sup>社堂引移<sup>シ</sup>、舊社<sup>舊</sup>兩傍<sup>傍</sup>  
に杉<sup>ツ</sup>うゑ生<sup>つげ</sup>や、再建にこりかゝり、文化元年甲子四月十九日造作成ぬ。かくて遷宮なりかねし處、あや  
つり芝居など仰付られ其助力を以て御遷式いたし候。をりしも雨天つゞきて八月十七日あやつり芝居  
興行し、八月廿一日御遷宮。其式行列<sup>さきんりひ</sup>○譯麻上下二人、御神輿○舞獅子社人○花振二人○洒水光明院○  
警固二人○高張持二人○鷄幢持二人○幢六人○警固二人○旗二本○大旗持上下○龍頭持二人<sup>次<sup>支</sup>武  
朱雀</sup>  
<sup>青龍  
白虎</sup>○次棟札持○日像○月像○大旗二本大衆○<sup>善明院  
小僧</sup>多門院○清光院○喜寶院○行正院○鑊隨院○千  
手院○祖門日光院○常明院○導師兩學寺○華嚴院○次獅子○次旗○御神輿○御供。○廿一日の晚景  
になりて鳴見澤<sup>つぎ</sup>に至着、廿一日大般若轉讀あり、華嚴院、光明院、導師兩學寺、元弘寺、○日光院○鉞行正  
院○太鼓多門院○鉞鑊隨院○太鼓祖門○清光院○喜寶院○經師善明院○常明院。御城より御代參とし  
て今村榮殿御奉行二人也。

神殿棟札<sup>ニ</sup>曰、奉祈念寶祚長久天下泰平大檀那國主城主御武運長久諸參詣輩子孫繁榮家内安全息災延命



五穀成就萬民豐樂悉皆成就敬白 當寺四十代華嚴院秀理謹言

文化五年戊辰八月二十三日。

○一、坂の新宮、事

見八野新田村勘左衛門先祖土中より掘り出し奉る熊野權現、三體、本地佛彌陀佛

觀世音也。此二尊を安置<sup>シ</sup>御立林の内に社建せし處、今泉三右衛門殿御勤中にて御立林に新宮あるまじきよしにて、勘左衛門肝煎<sup>ニ</sup>もに不届<sup>キ</sup>仰られていそぎ引こり、二尊の眞體を平塚良助方へゆゑありてわたし、良助堂社建立してかの二尊、佛を一坂に安置し奉る也。熊野三山の神體にて今一體の佛は、久保野村の産神と成り給ふ也。これみないにしへの兵火にて堂社諸院焼亡のとき、處々眞體ならひに神寶灰燼となりしとき<sup>ノ</sup>事也。唯ねがはくは、三體の御正體本社に返し奉らまく祈り奉るなりといへり。○考に、華嚴院家には明江山<sup>みやうさん</sup>と湯桶よみにせり、また正平寺の古記、こゝ書にも、野原の名にも字地にも明永と云ひ明永山とのみいふ。こは古名江<sup>こみなづ</sup>、湯桶よみならんか、名江は湯桶ながら南江<sup>みなへ</sup>が嶽あり、それを南江、南郷、南高、南幸な<sup>し</sup>ごさま<sup>く</sup>に作り、また明江<sup>みやうえ</sup>なごも書<sup>き</sup>なしつ。美濃に南宮あり、そのよしもあらんか、山内筏邑の處につはらかに記<sup>ル</sup>したり。また、こなみがなごは、うはなりがなごはな<sup>し</sup>ごはみな女をさしてなごといへば、名兒<sup>ひめ</sup>は女神山のよしならんか。名兒山は筑前國也、なほ人の考やまたむ。

○横手熊野三所權現之緣起

○夫尋神明由來、建本成來務意彰筆、爰羽笏之巷陌有<sup>ニ</sup>高峙琥珀山巒之峯、重<sup>ニ</sup>珊瑚磐石之巖、完々而攀<sup>ニ</sup>

數百里、碩々而及三千餘丈也、上極云天、下繞萬里、遠離鄉里、近親仙境、狀人隣之不淨、證聖界之玉床、將余當神武九十代後宇多院御宇、一遍上人奉熊野神勅、立時宗已來、造次不離、意樂難沛、不絕端、遊行和易山海畢然至此洞泉、幽嶽谷深不分、草森荆棘、爰亦當東嶺、煙氣幽立、臻梵王宮、雲漢上人成奇異之思、深遠遙分下尋見之、瀧水從洞流出成五種之味、殊更美々而含內成甘露、沐外除諸苦、誠謝甘露法雨、滅除煩惱之煩、故求役小角之仙跡、奉移熊野三所權現、且又羽易衛秋田之姓成綱卿、守仁義、拜神佛、故合啐喙奉建立本堂七間四面、拜殿堂十二間、仙北西接而奇鳥居有也、本地阿彌陀如來、內含上求菩提之大慈悲樂、化衆生之大悲無始無終之御神、誰不知奉建立哉、抑此權現者無量壽覺之無邊、娑婆世界安養淨土之其中過去七佛之惣名也、或修第四十八願、救濁世之衆生、誓或交闡提二世之塵、放彌陀利劍、加光之有華藏世界、現本來滿佛之妙相、故定三十六院坊司、號明江山神宮寺遍照院也、云彼云此、大悲擁護無絕和光同塵、結緣始八相成道利物終、誰不仰神體直教之金言哉。

于時弘安九丙戌年八月十五日

日本遊行一遍開蓮社上人圓覺

朱押花

と見えたり。此記に鳴見澤を成網郷と見え、明永山を明江山とぞ書ける也。

## ○法泉寺

一向東派

柳町

○東本願寺直末寺一雲山法泉寺の創は、陸奥國和賀郡の領主多田薩摩守義晴の次男多田義遠也と古記に見えたり。永慶軍記、和賀山北藤倉合戰、事に、奥州和賀、領主多田薩摩守義忠、山北と相戰ふ事度々なりといへども山北は大勢也、此鬱憤を散せんとや大勢を催し寄來ると聞ゆ。山北、方よりは兼て和賀、押へとして小田嶋大和、黒澤長門守南郷雄勝川を切廻し藤倉に楯籠りしが、此由を聞、横手に以て飛檄乞ニ加勢。小野寺遠江守景道是を聞て、旗本の武者大將、足輕大將を始め急に催し指向へらる。其士卒まづ一番に渡邊民部左衛門、泉伊豫、大御堂三左衛門、金、外記、庄司勝三郎、石山右馬、丞、岩屋甚九郎、鶯野加賀、宇佐見源介、粟田市助、安部備五郎、仁平治右衛門、狼橋彌八、笹森囚獄、同六郎、猪岡市右衛門、島海彌八郎、照井彌八郎、佐藤監物、久米右近、平瀬左衛門次郎等を究竟の兵として三百餘騎、足輕二百人加勢として藤倉にぞ馳付にける云々とぞ見え、また後に和賀と仙北は音物書札を贈り和睦と見えたり。此薩摩守義晴は義忠の子にや、また義忠を謬りて義晴と書か。法泉寺の古記には、和賀義遠佛道にふかく心ざし、剃髮して和賀郡岩崎といふ處に一佛刹を建立す。かくて和賀、城おちて後は、一門の小原縫殿介吉實此平鹿郡増田邑に住居は、二世の專勝小原吉實を慕ひ出羽の山北に來て増田に至り、東伊織ノ館のかたはらに住職ニとせばかり三とせにも及るか。しかして後横手に出て、今の一雲山法泉寺を造營せり。さりけれど此間の年號委曲ならず、○開基、本尊、御裡書は、本山ノ十世證如上人眞筆にて天文五年とあり。また開祖より傳來遺物重寶といふは、○慧心僧都ノ作の阿彌陀一軀○洞石、名號、祖

師聖人の御眞翰也○六字ノ名號は達如上人の御眞筆なり○三條宗近がうちたる一刀○了戒が作の一刀  
なごは、開祖の俗姓多田薩摩守より代々傳來の重寶云ひ傳ふ。

○開創ノ祖行專俗姓多田義遠、天文十一年辛丑八月九日遷化○二世專勝遷化年不詳當代に至りて寺號佛御免、文祿元年三月下旬記して

本山十二世教如上人の御印書あり。○三世願誓、此代より達如上人の御影御免、寛永十年西暮春廿一日

宣如上人十三世御印書あり願誓、遷化年不詳○四世傳誓延寶三年十月五日化當代より本尊木像御免、明暦五年申五月十四日琢

如上人十四世御印書あり。○五世忍誓住職年間及遷化年月不知○六世閑了、當代前卓御免、元祿十二年四月十二日常如

上人十五世御印書あり閑了、遷化年月不知○七世永傳元祿十六年八月二十日化此代祖師聖人御影御免、天和三年八月五日一如上人

十六世御印書也。○八世正往正徳四年午十月二日化○九世智門寶曆十三年十月十四日化○十世惠旭、當代より聖德太子、七高僧御影

御免、正徳四年九月廿三日眞如上人十七世御印書也惠旭、明和二年西十二月十七日化○十一世慈全天明五年六月十九日化○十二世惠照文化三年六月

二十二年此代洪鐘建立本堂修復の備の爲として、御城代戸村十太夫殿より本田高五石永代御寄附あり。

○十三世惠日、現住也。文化四年卯四月入院、同十四年丑三月從達如上人飛檐之間出仕御免御印頂戴。

○境内御免地東西十五間、南北三十間也。

## ○西 誓 寺

横手  
寺町



○梧桐山西誓寺は東本願寺御門跡直末也。古此寺は高祖聖人の御弟子西念房の間基にして加賀國に在りしを、出羽國平鹿郡山川莊横手郷階邑、梧樹第といふ處に遷して梧桐山の號はありけるなり。其由來は、今井四郎兼平、後胤にて今井兼知（かねとも）應永十八年辛卯秋八月十九日加州にて誕生。長祿元年丁丑八月十五日薙髮して、八世蓮如上人の御弟子となる、上人すなはち祐可と法名賜りぬ。しかして後上人、祐可房をこもなひ陸奥に下向ありける。奥羽化導の爲とて祐可を奥州に残し置たまひ、かくて上人上洛のとき品々の寶物を祐可房に記念とて賜る。祐可みちのくに住居事三とせ、其後此いではの國に來りて、平鹿郡なる上境村の梧木屋敷といふ處に一佛刹を建立して西誓寺といふ、此寺後に横手に遷り、今の梧桐山西誓寺是なり。

○當山鼻祖釋祐可房兼知

延徳三年辛亥  
七月六日遷化

○二祖釋善正

文安四年三月五日於加州誕生、  
永正十三年丙子八月六日遷化

善正軍功の賞に依て小野

寺中務、太夫晴道公より寺領七拾石を賜ひ、また武具、馬具等もあまた寄附ありしよしを傳ふ。さりけれど此寺回祿の禍に會ひて、たゞ其世の器とては鞍、鎧のみぞ今残りたる。按に、小野寺中務太夫善治郎晴道朝臣は藤原景道朝臣の舍弟也、有故繼其家後入道號松月齋。永正十一年甲戌十二月廿一日卒行年六十六歲、道號翰林院。と小野寺氏の家系譜に見えたり。○此寺に蓮如上人の御分骨を祕藏。

そのゆゑよしは本願寺第八世法印權大僧都蓮如上人兼壽大德、明應八年己未三月廿五日遷化し給ふ、かくて後祐可兼知の子善正加賀國より其遺骨を持、出羽國に下りて父祐可房の後を繼ぎて此寺の二世

と成れる事しかり。○三世釋願入天文三年甲午八月二十六日遷化當代大永元年辛巳春のころ、上駱村 梧ノ木苑つぎきより横手、

郷本ノ町といふ處に遷り住ぬ。此時親善正の法名は實如上人御諱ハ光策、法印權大の御眞筆也、今安置せり。

住職年月不詳なり。○四世釋祐天遷化年月不詳此代證如上人本山十世、御諱光教、直叙法眼法印權僧正、天文十三年八月廿三日遷化御染筆にて親願入の

法號を賜ふ、今に安置せり。住職年月不詳。○五世釋誓超住職年月、遷化年月共不詳六世釋祐超住職年月不詳、天和三年癸亥五月八日遷化○

七世釋祐賢正保三年丙戌八月二十六日化當代宣如上人本山十三世、御諱光從、直叙法眼權大僧より、祖師聖人の御影、並蓮如上人の

御影御免、また宣如上人の御眞筆にて十字ノ名號を拜領なほよりぬ寛永十三年丙子仲秋五日祐賢或年御調御用にて淺舞村に至

るの日、横手羽黒町御足輕彦右衛門といふ家より出火、此時の焼亡にて小野寺家より寄附の御判紙、武

器、諸記録焼失す。○八世釋祐正寛文三年癸卯遷化、延寶七年己未六月二十七日化當代琢如上人本山十四世、御諱光英、直叙法眼法印權

大僧部、大僧正、寛文十一年辛亥四月十四日化、四十七歳也より聖德太子、御影並三朝高僧、御影御免寛文二年壬寅二月廿二日また御當代に塔中、一字善明

寺の寺號御免寛文十年庚戌三月二十日善明寺の創めは明暦、萬治の頃ならむか、此平鹿郡八丁村ノ天神宮ノ神主松林

多門藤原善明といふもの、祐西の弟子となり法名を祐頓といふ。また八丁村の天神宮の起元由緒等あり。

其略縁起云ク、吾先祖、義者、人皇八十二代ノ帝後鳥羽院之近臣民部介藤原朝臣善房、號シメ、帝隱岐國

遷幸ノ供奉ス。帝御寶算六十歳於配所崩御、其節紫磨金ノ菅神之像テ一寸義房ニ賜之。其後隱岐ノ國發足シ諸

國行脚シテ、後出羽ノ國平鹿郡八丁村ニ來テ居住ス地名。或時一人、僧坐像阿彌陀ノ木佛ヲ持來テ暫ク可託由

ヲ願フ、其後僧不來。義房或夜奇特ノ靈夢ヲ得タリ、夢中ニ菅神告テ曰ク、吾ヲ彌陀ノ體內ニ安置スベシ、神勅

ニ感テ夢覺タリ。依之今亦モ神勅ニ任ス、其故彌陀屋敷ト云フ。其地境内堅横十五間亦菅神社地堅横十五間。祭日八月二十五日。云々。此由緒申立、善明寺、寺號被免候赴奉願上候也。寛文十年戊二月日藤

原多門善明（花押）とぞ見えたる。かくて年毎の八月廿四日の祭には、かの阿彌陀佛の軀内の神像を出し奉りて一日一夜神酒奉幣、神官いたゞきまつれり。かくて祭りをへぬれば、またあみだほごけのみはら

こもりとしひめ奉る也。小野寺落城の後松林、善明佛道に志シ深く、かの天神の神像を里正に託おき神田五百刈、並舊宅、地面をもよかせて善明薙髮、西誓寺の弟子と成り淨土眞宗修行せり。しかして後に、

西誓寺の地内に一字を建立して善明寺といふ。かくて寶曆年中善明寺、七世にあたる松樹軒惠亮、善明寺の由縁廢退事を歎き菅大臣の神像を善明寺にうつし安置奉りたりしを、其村より此御神形を、一晝夜

八丁邑の神殿に遷し奉らまくこひねぐ事せちに聞ゆれば、うべなる事とて、其願のまに／＼神像をかの邑にうつし奉りて、其後はゆめ／＼善明寺に返し奉らずして唯うせ奉りたるよしをいへり、いかなるよ

しにや。むかしにかへさまほしき事になもありける、云々といへり。○十世釋祐廓元祿十三年庚辰九月十二日化當代に常如上人御諱光機、直叙法眼法印權大僧都、前大僧正、元祿七年五月廿二日遷化より飛檐、間出仕御免寛文四年辰三月廿六日此代塔中長德寺御免享保三年四月十五日○前

卓並四本柱御免元祿四年四月廿四日○御繪傳並御傳鈔御免、住職年月不詳。○十一世釋祐岸享保三年正月十日化實、祐廓、養子能登國見崎本龍寺八本山十七世、御諱光性、大僧正より飛檐出仕御免寶永元年七月八日御門跡御家免寶永元年七月二十日○德云院左近衛世惠慶ノ二男也様少將佐

竹義處朝臣を申奉る御目見御免、御紋付、御蓋組、拜領○壹岐守様より御紋付の御手鏡拜領當寺御止宿ノ時御紋付ノ拜領ノ御蓋入御覽也、年月不詳



祐岸閑居<sub>シ</sub>號<sub>ニ</sub>法滿院<sub>ニ</sub>年月不詳。○十二世釋義空<sub>寬延二年八月五日化</sub>○湯澤左衛門殿御寄附、高二十五石<sub>寬保二年戊戌十月廿四日</sub>

○祖師聖人の御分骨並祖師、御眞翰<sub>三十九字</sub>、此二品は越后、國なる高田、鳥羽院淨興寺、十九世一周より附屬

也<sub>享保八年癸卯九月九日也</sub>○教如上人御分骨<sub>從本念寺一誓附屬</sub>○正德四年午四月十七日閑居號<sub>ニ</sub>法滿院<sub>ニ</sub>、住職年月不詳。○十三

世釋義僊、閑居號<sub>ニ</sub>法音院<sub>ニ</sub><sub>寶曆二年五月十三日化</sub>○十四世釋兼隆<sub>寬政五年九月廿日化</sub>閑居號<sub>ニ</sub>威德院<sub>ニ</sub>、住職年月不詳。○十五世釋

兼靈、住院御屆<sub>寬政三年九月</sub>○乘如上人御影御免<sub>文化九年四月六日</sub>閑居號<sub>ニ</sub>教音院<sub>ニ</sub>、住三十五年也。○十六世釋兼了現住、

住院御屆<sub>文政八年酉八月十四日</sub>年廿八歲。

○寶物。

○本尊阿彌陀佛木像

春日作

○祖師聖人、眞影

一幅

○上宮太子眞影

一幅

○三朝高祖傳

一幅

○蓮如上人眞影

一幅

○一如上人眞影

一幅

○乘如上人眞影

一幅

○宗祖御繪傳

四幅

○名體不離名號

祖師上人御筆

○十字御名號

祖師上人御筆

○古書太子傳切<sub>レ</sub>

祖師上人御筆

○六字名號

祖師上人御筆

○馬乘聖德太子御影

一幅

○祖師上人御分骨

淨興寺<sub>附屬</sub>

○祖師聖人、御箸竹

一箇

○御石經

祖師聖人眞筆



○圓光大師木像

御自作

○六字名號

圓光大師眞筆

○南無佛太子

聖德太子御作

○蓮如上人御分骨

善正持參

○教如上人御分骨

本念寺附屬

○如信上人御分骨

○六字名號

蓮如上人眞筆

○正信偈文八句

蓮如上人筆

○二代法名

實如上人眞筆

○三代法名

證如上人御筆

○画像彌陀小幅

惠信僧都眞筆

○御文切

證如上人御筆

○和讃切

證如上人眞筆

○六字名號

實如上人眞筆

○執持鈔

覺如上人眞筆

○十字名號

宣如上人眞筆

○兩面蓮花はなびら瓣歌

宣如上人眞筆

○假名文御書

常如上人眞筆

○御かな文掛物

後水尾帝御眞翰一幅

○鶴龜二字

天祥院殿源次郎様と奉稱候時の御染筆也、久保田天徳寺より到來の由裏書に見えたり

○歳旦詩

常如上人眞筆

○經文切

光明皇后御眞翰

○經文片紙

傳教大師眞筆

○經文片切

高楚大師眞筆

○經文片紙

菅家御筆

○經文切

武藏坊辨慶眞筆

○香火一爐燈一盞白頭夜禮佛名經

元文世尊寺定成卿筆  
元辰

○稱名出現彌陀

熊谷次郎直實眞筆

○御紋付二ッ組御盃

○從德雲院様御拜領

○御手鏡一面

○從壹岐守御紋付拜領

○鞍鐙 年月不知

○小野寺晴道寄附。

# ○圓淨寺

東一向宗

寺町

○金洗山圓淨寺、本山は皇都東本願寺、中山奥州南部森岡、石森山本誓寺也。當寺開祖ハ○良通天正十九年五月二日俗姓不知。傳曰、天文年中證如上人司阿彌陀佛、眞影を賜り安置して寺號を願成寺と賜る。其後北越

の兩國に經廻して數字を建立、後に故ありて本國を出て當國に至る。其阿彌陀佛の画像は、寺號佛と稱

して今に安置し奉る。○二世願祐慶長十一年午七月八日化慶長十一年横手郷於明永村一字建立○三世了西慶長十五年戊七月五日

化○四世專了寛永十年酉七月廿一日化

○五世祐玄遷化年不知

○六世專玄延寶八年二月十五日化

○七世了哲元禄十四年五月廿九日化

其節思召を以て圓淨寺と寺號を改め給る。御免狀所持す。○八世了誓享保十六年三月廿九日化

年二月十二日化此代ゆゑありて新町大鳥井山ノ麓に移り住す。○九世了秀元文元年十一月二日化

年寅六月廿四日新町の大鳥井山より寺町に移住す、現在の地是也。○十一世了海文化五年十一月二日化

世現住文化六年ノ春入院住職。

○寶物

○本尊彌陀木像、佛工不知。○繪像彌陀一幅、證如上人御裏御筆。○六名號、達如上人御筆。○同名號、實如上人御筆。○教如上人眞影、宜如上人御筆。○上宮太子眞影、乘如上人御筆。○三朝高祖眞影同上。○古筆画像彌陀、筆者不知。○觀音繪像同上。

已上

一向宗圓淨寺主。

○大乘院寺町

○三井寺山大乘院は湯殿山大日坊、門末にて行人派也。此寺は横手一郷の祈願所、本尊は如意輪觀世音也。過去帳什物等残り無く回祿に會て、由緒、歷代、僧名すら傳らず、唯残りては正元元年の大錫丈の冠首一頭、貞享三年、洪鐘のみ存りてその世を知れり。○大鐘、銘ニ「爲代々先師六親眷屬也 本願主、定音房宥秀、治鳳、玄智房看照也 勸行人光房、結主新助、同甚太郎、冶工與右衛門 奉始法印宥元上人有無二緣勸進貴賤奉加上下云々 貞享丙天十一月十一日」云々と見ゆ。○大般若經六百卷、本尊佛画一軸等先住活道師寄附也。○神社三社あり、此左、丁ひらにしるし奉る也。

○牛頭天王、社 境内の土藏の内に齋奉る。元三日より神供を獻り同廿七日に至るまで祈念、五節とにもおなじ。本祭禮は六月十四日十五日獻供如恒例、また諸願報祭の人とら胡瓜を奉る事横山のごと

し、參詣群集おして知るべし。

○末社正一位稻荷大明神  
秋葉山大權現 毎年壬辰ノ日町内鎮火祭祈禱ある也。

○三月十七日は大般若經轉讀、導師は觀音寺法師並衆僧を請待し國家安全御武運長久の祈禱あり。

○十二月七日八日は柴燈護摩執行、神供如恒例也。

○湯殿山講、羽黒山講 正月より十二月まで毎月八日十二日行ヒあり。

○當時住僧湯殿山大  
日坊末也 大乘院秀傳。

○大乘院境内 表口廿一間一尺五寸、裏行三拾間也。

類派二ヶ寺あり、いづれも今は廢寺たり。

### ○同 門 葉

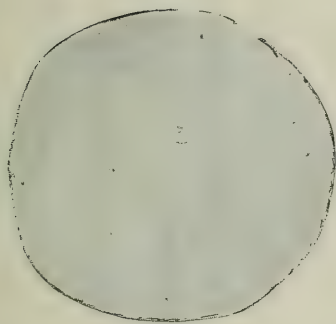
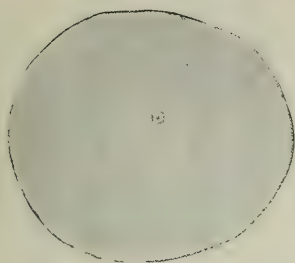
○東善寺 下寺町モに在り、其地廢寺也。境内表口十間  
裏行十三間也。

○寶性院 羽黒新町士町に在り、廢寺也。境内表口六間半  
裏行十九間也。

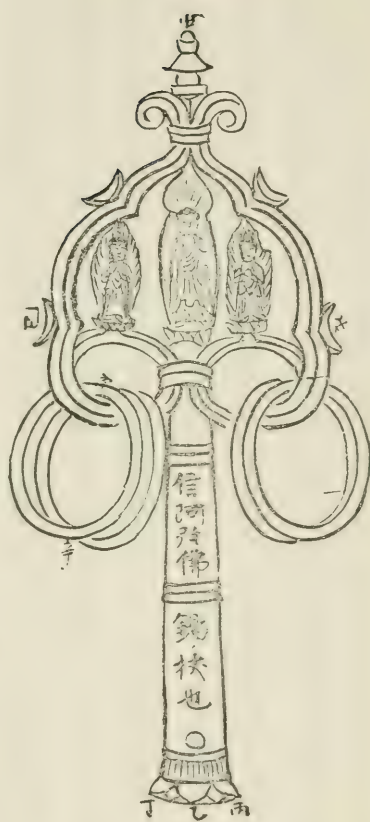
大乘院ノ重寶あり、此左葉ひらにしるしたり。



○圓石大小あり、凡圖の如し。いづれも色はうす黒し、(甲)小なるは貝石にして中に貝を孕たらむさいへり。(乙)大なるは其象 鮮答にひさし、むかし此寺にて祈雨なシゴせし其行ひの法具にや。慘訓菜に、「武州雨降山雨降明神に鮮答あり、大さ瓠子の如し。旱魃の時に此を山上に持ゆきて術法を行へば雨ふらざる事なしさいへり。或は本名は「へいさらたばさらだ」にして翻して雨金剛雪金剛也さいへば、雨を祈るに唱ふる辭を名させる也さいへり。」云々見えたり。



而面大錫杖長一尺 錫杖口長兩寸 地豆九分 戊巳地豆五寸七分  
 六輪一轆 轆長一尺 金轆長二寸三分



素信阿彌佛錫杖也 刻之程々  
 正元元年八月十五日

# ○正平寺

曹洞宗

○「白瀧觀音靈場緣起」並「正平禪寺古記録」

○出羽ノ國平鹿ノ郡横手ノ城外明永山般若寺遍照院は往昔白鳳の創めにして、其寺廢れてまたいくそはくぞや明永山熊野ノ社の奥に古への般若寺の跡あり、むかし六郡巡禮三番に當る。教圓阿闍梨順禮歌に「春は花夏は林の鐘のこゑ常に教の絶ぬ般若寺。」東の方に熊野ノ嶽あるなり。四十代ノ帝天武天皇御宇小野

寺朝臣大德冠中納言毛人公當國に下向ありて、國司となりて山北せんぼくの大鳥山に居城を築き、また伽藍を造營して秀俊上人を開祖として明永山般若寺遍照院其頃三論始也といふ、佛法最初の靈刹也。其世の寺領は三千

石といへり。清原吉柯朝臣の家累祖より連綿して大鳥山城主たりしが、誰ぞ其事跡いづことたづねもどめざる事久し。また小野寺家興廢は親まのあたりのやうなれど、それさへ定かにはしらざる人多し。白瀧本

記云、御嶽の堂社、古般若寺とも兵火にて灰燼となり、其後當御領主佐竹侯の御世となりて、正保の頃ならむ御嶽の社廢すたれたるを興し給ふ。また古般若寺兵火の時、藥師佛の像を坊中の僧よりさりて塚堀邑の

大清水の本もとに安置して、そこを今般若寺といふ、云々と見ゆ。○七十三代ノ帝堀河院の御宇、當國金澤ノ城主清原武衡、家衡籠城す、鎮守府將軍源義家朝臣、御館權太郎清衡朝臣征伐三年ノ合戰に滅亡す。大鳥

山の城主、清原ノ祖家大鳥太郎頼遠も金澤同時に落城といへり。寛治五年奥羽二州の領主藤原清衡ノ三男正衡、大鳥山の城主の子孫は此時に滅亡せしが、源頼朝朝臣奥羽の押領使藤泰衡を伐亡し給ふ、久治五

年のころか。また九十五代後醍醐天皇の御世よりも世の亂れやむ時なく、元亨のころより五十餘年は太平を唱へ、また九十六代光嚴院の御代ならむ相模治郎遠光般若寺の坊中と所領をあらそひ、其時の兵火にて般若寺廢亡せり。正慶元年壬申、八月二日の事のよし、白瀧本記に見えたり。

小野寺泰道と戦ひ此時平城敗亡せり。長祿年中の事さいへり。

○日本三十三番始順禮記、六十五代花山上帝、寛和二年丙午六月十九歲遁位、入

花山寺出家除髮奉稱入覺法皇、得度師教圓阿闍梨、幸于紀國熊野那智寺三歲皇居、修誦大悲神咒、

練行之時、神龍降獻如意珠水精念珠九穴貝、念珠地壇有今海見瀧返故告神夢、長徳元年三月十七日、那智山第一番

始諸州巡幸、禮拜三十三所、爲齋生定置、先達佛眼上人其外供奉、同六月朔日美濃國谷汲寺札納花山

寺還御、寛弘五年二月八日御壽四十一歲崩御、と見ゆ。○三熊野社別華嚴院古記華嚴院のくだりにもしるしたれど、此一條大同小異の所多

ければなり。○人皇五十九代宇多天皇御宇寛平三年辛亥年、出羽國平鹿郡詔鹽湯彦神社、賜勅額、出羽副郡司小

野良實子四品良房、蒙敕使下向御嶽山御勅願所、御勅使後稱御嶽殿、古國見山ト云袖山道國見峰鹽湯彦權現、明永長者弟御實號明

保長者、其元祖奥陸鹽竈大明神御末葉後胤、兩長者自奥陸國來此地、人皇十三代成務天皇御宇五年春、詔分諸州郡境定長吏神代其村首人號長者、始見于本朝通記

云々。此鳥海の湖水御一見の處御不例にて谷澤の柴屋に止宿ある、其家の娘御看病御宮仕、やがて御快

氣におもむく。かくて主人其湖水に舟を浮て魚を捕る、風景御遊覽あり北方の水戸に至る處、今水戸村在川邊郡長

者謂谷屋曰、此湖水下口堀切大海流落、彼湖水可作平地、田畠開發せんとして、御飯とき谷屋の娘に

長者小袖を給ふ、此地今云袖山村也。明永長者舍弟明保長者、御兄弟御同伴して水上浦北浦まで二百里、古徑程にて六丁一里也の



處を兩長者此地に到り、湖水の邊に於て作<sub>レ</sub>檀七日齋忌して天神地祇山神龍神を祭り云々。於<sub>二</sub>高尾山<sub>一</sub>作<sub>二</sub>宮殿<sub>一</sub>長久祭<sub>二</sub>龍王神社<sub>一</sub>、謹上再拜して障<sub>レ</sub>なし云々。小屋<sub>ノ</sub>老女來て明永長者に酒を奉る、長者大に歡喜満足して酒飲<sub>レ</sub>給ふに盡る事なし。かくて尋ね給ふといへども老女の至る處をしらず、こは龍神變化の人などやあらんかといへり。其地を名<sub>二</sub>女造酒村<sub>一</sub>在川邊郡、今云女米木村是也西北谷<sub>ノ</sub>間堀<sub>リ</sub>切<sub>レ</sub>落<sub>シ</sub>、猿手<sub>サ</sub>を持て土を運びし人夫の小屋跡を佐手子村<sub>今在于□□郡</sub>明保長者<sub>さての義なり</sub>住居<sub>ノ</sub>舊地今明保村といふ。一は烏海湖堀<sub>リ</sub>切<sub>レ</sub>洪水落<sub>テ</sub>泥土斗にして成就しかたし。明保長者按思曰、泥土分<sub>レ</sub>水副川通時<sub>二</sub>泥土自然<sub>一</sub>地に成<sub>ル</sub>べし。諸方相回<sub>リ</sub>、副川<sub>ノ</sub>役人明保事右土形成就して田畠を開きぬ、人皆賞<sub>シテ</sub>副河長者ト常と名<sub>フ</sub>。上浦、北浦河通<sub>リ</sub>海邊の山根堀<sub>リ</sub>切<sub>レ</sub>西海入<sub>ル</sub>、副河長者<sub>住所添川村今字所あり</sub>作<sub>二</sub>窪地<sub>一</sub>今ノ久保田大久保村是也此時糧<sub>百三駄</sub>連送<sub>ノ</sub>處<sub>今新屋村是也</sub>糧運來<sub>ル</sub>處西馬音内村是也。副川長者、北角方到<sub>二</sub>八倉山<sub>一</sub>依<sub>二</sub>神力<sub>一</sub>一倉堀<sub>リ</sub>切<sub>レ</sub>流落<sub>ル</sub>、即川通<sub>リ</sub>成<sub>二</sub>七倉山<sub>一</sub>、祀<sub>二</sub>天神七代<sub>一</sub>、地神五代神<sub>二</sub>副河神社建立<sub>一</sub>、今に古書あり。切石<sub>ノ</sub>渡川通<sub>リ</sub>海に入<sub>ル</sub>鶴潟に田畠を作<sub>ル</sub><sub>今在村名</sub>開國神妙仁深く萬民をあはれみ耕作の道を教給ふ、阿仁長者、比内長者<sub>ノ</sub>名は其地の字處に在り、森山副川大權現在ス。明永長者向<sub>二</sub>諸長者<sub>一</sub>曰、湖水干<sub>テ</sub>地田畠を成す、我開<sub>ク</sub>國地を山北邦<sub>マキ</sub>と名<sub>ク</sub>、幾久<sub>ク</sub>民家を資<sub>ケ</sub>農民に道を教へ給ひ、また山頂に登<sub>リ</sub>四方を見渡し給ふ故そこを國見山<sub>御嶽麓袖山道に國見峠あり</sub>。我壽命時過なば、吾神體此山嶺に在べし、吾すなはち長く久く萬民諸長者を守らむとあれば、萬民諸長者再拜して神酒を進め、手を拍てうたひ神樂を奏し、千秋萬歳を唱ふ。開國の御神の御連枝滿德長者、地福長者、耕作始に四十八の小屋

を置<sup>今に至りて</sup>村々に小<sup>今横手に</sup>高臺長者森、糠塚森など、此あたり長者といふ處いご多し。子々孫々其後胤社家ト部大連氏致<sup>ト部氏致ノ家長</sup>筏の仙人より明永長者に駒を獻す、其駒死て埋<sup>き</sup>しといふ、その駒塚とて今なほある也。

寛平三年辛亥五月吉日

御嶽山社家ト部大連氏致 謹誌。

石町村に神樂男、八乙女、神女屋敷、隱坐ノ林、又久保ノ日村ニモ在ニ字所ニ云々と見ゆ。

### ○華嚴院古記

○六十九代後朱雀院御宇御嶽山社家ト部致行<sup>大連氏致ノ男なるか</sup>出家、諱秀安、字保昌<sup>古順禮記文大同小異也</sup>住<sup>住</sup>般若寺、秀安上

洛始入<sup>入</sup>叡山<sup>登ニ</sup>戒壇<sup>爲ニ</sup>阿闍梨<sup>眞澄按。勝寶五年四月敕唐鑑眞律師於三東大寺建戒壇といへり、これ日本に戒壇の創なるべし。後朱雀帝長久元年五月奏於三井建戒壇敷問ニ于諸宗立不<sup>な</sup>さも見えたり。</sup>

其後紀國那智山參籠百日修法、終西國卅三所觀世音像佛工令<sup>レ</sup>作<sup>ニ</sup>定朝、憑<sup>ニ</sup>教圓阿闍梨開眼供養云々。

此事山内<sup>ノ</sup>條<sup>リ</sup>、また修驗家華嚴院の件<sup>ノ</sup>にも委曲<sup>のせ</sup>に記錄たれば、此處には精<sup>くは</sup>しからじ。長久元年四月十七

日教圓阿闍梨白瀧一番ノ詠歌 補陀洛<sup>ふたらく</sup>や御嶽の瀧の白糸にはる<sup>く</sup>來てはあらふ欲垢<sup>垢離する泉あり、その垢離をいふ、赤澤村あり。</sup>

澤に作り末に<sup>澤に作り末に</sup>教圓阿闍梨、松嶋一覽飯京<sup>いへり</sup>。應安元年戊申六月十七日明永山般若院秀源法印<sup>二十世謹</sup>

記、ご見えたり。秀字累世連綿たり。按<sup>ニ</sup>十禪師より起るか、十禪師ノ頭名を秀南<sup>いへり</sup>。

○白瀧本記ニ云、役行者御嶽垂<sup>ニ</sup>跡于白瀧<sup>在ニ</sup>岩上<sup>ニ</sup>仙術神通飛行云々。神變大菩薩の事は前にも輯錄<sup>しるし</sup>た

ればこれを省ぬ。

○佛工定朝は佛師の綱位に登るの創め也。伽藍開基記志源菴釋道  
溫編輯也十卷云、後一條帝治安二年佛工定朝得ニ法橋上人位、佛工綱位自朝始、朝造ニ法成寺佛像、好故登ニ綱位、と見えたり。定朝の作ル觀音像、六郡にむかしは卅三體ありつらむ、今はなき寺多しといへり。

○大僧都教圓の事元亨釋書ニ云、釋教圓勢州太守藤原孝忠第二子也、花山帝避位入レ道、圓師事受業遊ニ諸師門、得ニ通貫、圓師能誦ニ唯識論、一日誦自ニ第一終ニ于十、時房側松樹有レ異人作レ舞、或問奚爲レ舞、對曰、喜ニ圓師誦ニ徹唯識論、何樂如レ之、故舞耳、問者曰汝何人、對曰、春日大神也言已不見、長曆二年成ニ大僧都、永承二年六月十日滅、歲七十云々と見えたり。また教圓阿闍梨の事長物語ながら、其世の形見すがたぬ人の爲にこゝに記ぬ。風の落葉眞澄し  
るす五卷に、出羽國秋田六郡に、西の寺巡りに準ラへて卅三所觀音の靈刹あり、其詠哥は叡山の教圓あざりなりといへり。今昔物語十卷世俗傳、近江國矢馳ヤチ郡司堂供養田樂ノ物語のくだりに云、今はむかし比叡ノ山の西塔に、教圓座主といふ學生有り證經教化をなしける。其ころ近江國野洲ノ郡矢馳に住ける郡司、年ごろ此人にこゝろあり、あるとき此郡司わざと西塔に行キぬ。供奉、何事に來りつるぞと問へば郡司がいはく、としごろ願によつて佛堂を作り侍るをねんごろに供養し奉らんとおもひ侍り、老の身なれば、ひとへに後世のいとなみの外他事なく候。程遠く侍れども日頃御睦なれば、おはしまして給リ候へと申す。教圓、いかにもゆかむことはいとやすく侍り、其日未明に三津の邊りに迎ミの船をつかはし、矢馳の津に鞍置馬二三疋をひかせまたるべし。およそ功德の大なる



は舞樂を供養するにすぐべからず、舞樂は極樂天上のまなひ也。されども樂人など呼くだす事たやすかるまじといへば郡司、某が家人よく覺え侍れば、樂仕らん事いとやすしと答ふ。教圓供奉、しかとあらば極めたる功德なるべし、とくくかへりて前に申つるごとく用意有べしといふ。郡司よろこびて、いとまこひして飯りぬ。約諾の目になりて、教圓はいまだほのぐらきこの弟子二人召具して西塔より下りて、三津の邊にいたれば夜もすでに明にけり。かねてまうけ置たる船に乗りて已、時ばかりに矢馳の津に渡りつきて見れば、鞍置馬十餘疋引たてたり。そのかたはらに白襷束したる男十餘人立ならび、下衆どころくゝにひかへ居たり。供奉おもひけるは、此ものごもは何を見るやらむ、いぶかしさよと東西を見めぐらすに見つべきものなし。あやしくおもひながらむけたる馬に乗り、供の法師二人もせて相具したり。其時白襷束したる男共も件々の馬をひきよせくちのりて、ひた黒なる田樂を腹にゆひ付け、左右の手に桴<sup>ぶち</sup>をもち笛をふき、高拍子を突<sup>つ</sup>机をさして、さま／＼の田樂二物三物にまうけて、吹たてくるふことかぎりなし。供奉これを見て、いかなる事にかあるらんとあやしけれども問もせず、田樂ごもは教圓が馬の前に立ち後にありて、拍子とつてしきりにうつ。教圓おもひけるは、今日はさだめて此郷の御靈會<sup>おまつり</sup>なるべし。あしき折りに來りあひて、此奴原に中に具してゆけば、外目にはものぐるはしきやうにや見えむ。若<sup>し</sup>知たる人にあはむかとおもへば面なきこちすれば、袖を以て顔をかくしてゆきけり。既に郡司が家に近ぶるとき門前を見れば、百千に及ぶ人立こぞりてこれを見る。



供奉いそぎゆかむとするに、此田樂の奴原供奉にむかひて鼓をうち、笠の上へつきかけ、机をさへけて頭の上へにまねきてたやすくゆかず、腹立事かぎりなし。漸郡司が門につきて馬よりおりむとすれば、郡司親子出て馬の口を左右より取て、乗せながら家の内へひき入る。供奉、かくなせと、爰にておろせといへど耳にも聞き入ず、田樂の奴原は馬の左右につらなりつゝ、たゞきたてて舞て入る。郡司よろこびて、よく仕れおのれ等といへば、鼓うつ者三人いよ／＼いさみてうちけり。供奉わびて、よくおろしなばよかるべきに、かく田樂等がくるひゆけば馬おどろきて歩みかねたり。郡司親子廊に馬をよせて、いだしおろして座にするたり。供奉郡司にむかひて、此田樂は何の料にせさせ給ふぞとこへば郡司がいはく、西塔にまゐりたりしとき、念頃にする功德には樂に過たるものなしと仰られしかばまうけて候なり。講師をも樂をしてむかへ奉るべしと人の申せば、まゐらせて候つる也としたりがほに申せば、供奉其時こそ、さては此奴は田樂を樂と心得たりと知りておかしたえがたれども、かくといふべき人もなかりければ形のごとく供養しをはりて、山に飯りて小僧ごもの中にて田樂の事かたれば、ごよみをつくつてわらひけり。賤の田舎人もかばかりの事は知らざるものなきに、いかなれば此郡司は無下なる奴かなと、聞人ごとにそしり笑ひけるとなん語り傳へたる也。」と見えたり。此うち物語の敎圓座主は順禮歌の作者、敎圓阿闍梨と同一人にや、いかゞ。この宇治物語編集の作者は宇治大納言隆國卿にて、醍醐天皇の皇子西宮左大臣高明公、孫にて、權大納言俊賢卿の次男也。後冷泉帝に仕へ奉りて

寵遇せられたまひし也、其世は康平、治暦、あるは延久の頃にもあらむか。元享釋書の説によらば教圓長暦二年に大僧都と成り、永承二年六月十日に逝る。教圓没後より康平元年まで十二三年を経たり、さりければいづれもおなじ教圓大僧都なるべし。

### ○大義山正平寺緣起並大義寺來由

○夫藤原朝臣小館三郎正衡草創明永山大義寺

奥州中尊寺末天古宗也

星霜幾深、考古遺、當利根元雖述、斯本記、時

原事之不亟、客歲使下或人寫武則清原系圖、略舉、由緒、曰、清原朝臣真人武則

出羽平鹿郡增田住人、追伐古城今之眞人山是也

陸奥亂、依軍功、康平卯六年任鎮守府將軍、出羽官領所、而眞衡

武則ノ孫微弱而未堪兵革、家衡

武則ノ子眞ノ子孫微弱而未堪兵革、家衡分地ノ人

任意作暴、當此時鎮守府將軍源朝臣八幡太郎義家卿、承詔征之、藤原朝臣御館權太郎清衡

武則養子、實父互理

權太夫長子而亦屬義家、攻于金澤城、力戰三年伐賊滅焉、寬治未五年振旅上洛、而於朝廷賞清衡、奥羽

權太夫長子而亦屬義家

攻于金澤城、力戰三年伐賊滅焉、寬治未五年振旅上洛、而於朝廷賞清衡、奥羽

兩國之任鎮守府將軍、奥州邑御館、正衡

清衡三男出羽邑横手

今關村ノ古城跡是也

三郡太守賢室子孫、及文治西五年奥羽九族亡

秀衡逝去、義經伐亡故鎌倉將軍頼朝下向奥州御對治、高館落城未城亡

遂成鳥有之跡矣

文治五年奥州亂後押領當所有横手佐渡守云者、其後小野寺氏打破律一族亡此時也

開祖宗篤禪會春參秋族、當邦關根之宿、埜片畝里、梵僧呼宗篤師應諾、歲月侍汝久、東方燈明出時尋吾來、漸住忽雨寤靈夢

畢、晨巡山林幽谷終日止迷路攸、空宵降天燈近走輝、大木上、夜明有杉下小精舍、未審三彈指作圓

相、則無人前告導乎、唯今在救世觀世音尊像、恭敬禮讚寓居、聞說大義寺正平立地道場之廢頽也

明永野有廢古

大義寺大伽藍前門於此藤原朝臣小野寺中務泰道、狩日相見宗篤、公云、和尙從何處來、師云、吾自來、公云地

獄極樂如何、師以<sub>二</sub>如意打<sub>三</sub>公肩、公嘆欲<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>刀、師云其地獄、公云阿和大笑、師云其極樂、公感謝招<sub>レ</sub>師

慧<sub>レ</sub>檀信、公卜曰指<sub>二</sub>城南地

當山開基公自沼館移平城居住、家中大御堂三左衛門屋敷成田地大御堂字所是也、其後小野寺景道令橫手御城造作居城

造<sub>二</sub>營伽藍、教<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>師晉山開堂

演法、奉<sub>レ</sub>選<sub>二</sub>彼大悲薩埵<sub>レ</sub>鎮座<sub>上</sub>爲<sub>二</sub>本尊、偈曰

救世大悲窮

去來示<sub>二</sub>圓通

除<sub>レ</sub>邪歸<sub>二</sub>正國

王令德

陪<sub>レ</sub>風。奉<sub>レ</sub>祝<sub>二</sub>延大檀君福壽無量、誠不可思議而免<sub>二</sub>因緣、是故改號<sub>二</sub>大義山正平禪寺

開傳世取口碑移正衛廟當山鎮守正衛大明神

其費給<sub>二</sub>二百斛、雖<sub>レ</sub>然故遠江守義道

江州關原戰不出陣

慶長子五年除<sub>二</sub>國流<sub>レ</sub>刑于石州、自<sub>二</sub>左居<sub>レ</sub>贈<sub>二</sub>賜手書金若干、

且先君神祇祠堂嚴然至<sub>レ</sub>今、昔應<sub>レ</sub>變隨<sub>レ</sub>時有<sub>二</sub>快牛

當寺中興

扶<sub>二</sub>起當門傾頽<sub>レ</sub>伏冀補<sub>二</sub>復舊製<sub>レ</sub>、予亦招<sub>二</sub>撫素鑑

注附之、如<sub>二</sub>其訛<sub>レ</sub>以俟<sub>二</sub>來哲<sub>レ</sub>云々。慶安三寅林鐘日

正平現住

秀存撰之。」

### ○小野寺御傳記並當山歷世傳記

○小野寺中務大夫泰道公。雄勝郡稻庭城主、從沼館亦移住橫手平城、長祿年中建立正平寺、開基公逝葬

正平寺、法號幽山道源大禪定門

小野寺泰道公

文龜元年辛酉三月二日。

○小野寺中書植道公。泰道嫡男、上洛於八幡鄉逝去葬于神應寺、法號德濟秀公大禪定門

小野寺植道公

天文十九

年庚戌九月十三日。

○小野寺善治郎晴道公。泰道次男、天文年植道上洛中以善次郎爲城代、山崎隱居跡有庵、天仙寺六世閑

居世俗言傳、今春光寺是也。智應常鑑大禪定門

同氏晴道

永祿五年壬戌二月二十一日。

○小野寺中宮亮輝道公。植道嫡男、有故誕生于八幡鄉、成長後將軍義輝公奉仕、公御諱賜輝一字、永祿年



中入部從晴道請取所領、大寶寺出羽守義氏直書有之。法號天巖道性大禪定門同氏。天正元年癸酉七月六日。

○小野寺四郎丸景道公。輝道四男、今造于龍崎城、法號孝高道英大禪定門同氏。慶長二年丁酉四月廿日。

○小野寺遠江守義道公。景道嫡男、背公命配流于石見國、法號江山見性大禪定門同氏。正保二年乙酉

十一月二十二日。眞澄按に、義道幼名孫太郎、遠江守、慶長五年關ヶ原合戦之時上杉景勝逆意ニ組シ、罪故同六年流入云々。小野寺正系譜に見えたり。

右小野寺系圖有之、先慶安年中當寺類焼過去帳焼失、小野寺女儀法號年月不相知云々見ゆ。天註——眞澄小野寺系

諸考ニ、泰道、長祿二年秋田泰頼ト兩人南部三郎ニ屬幕下也、其後家臣佐藤式部少輔忠經以智謀、寛正六年四月ヨリ應仁二年六月マテ四年ノ間南部合戦、終打勝再仙北城。文明九年十二月六日卒七十五、號大教院。女子田村庄司室。同書云、惟道、父景道ニ若シテ離京都ニ上リ將軍家ニ奉公ス、其内暗通小野寺ノ代官也、惟道下國ノ後仙北横手ニ居住ス。天文十五年午五月廿七日生害。女子遠藤盛康室、道秀孫三郎金澤城主也。同書云、景道孫次郎支番頭、明應四年常州小田合戦爲加勢討死、四十七歳。晴道善次郎中務太夫、景道弟有故繼其家、後入道號松月齋、永正十一年十二月廿一日卒六十六歳、法號翰林院。長男鍋倉石見守道周、次男大森長門守道高也。小野寺正系圖と正平寺古記と大ニ異也。なほ此事考ふべし。

### ○上野介正純朝臣配流ノ事

○下野國宇津宮城主本多上野介殿、男出羽守殿共に出羽秋田横手へ遠流あり、寛永元年四月廿八日六郷の旅館御出立御代領ノ大澤千石たまはりし處今矢島領といふに御入り、五月朔日大曲御止宿にて翌二日には横手の根岸町の新御殿御兩館有に御入り、御附添御家老ごりく也。御嫡男本多出羽守殿御病氣ありて寛永七年庚午五月十日逝去、法名慧光院殿鐵顔宗智大居士、正平寺ニ葬ス。本多上野介正純公寛永十四年丁丑二月廿九日逝去、法名傑叟院殿雄山英公大居士、共正平寺葬スといへり。近來本多上野殿の家其血累を以て、本多彌八郎殿とて三四石（マ）にて御旗本に立たまふといへり。御遺物もありつべけれどみな焼亡せり。





一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

遠江

十月

正平寺

中



子  
4  
2

保  
民

性平

己丑

小  
聖  
子  
子  
子





江中入一連五曜極之極也利中  
義非之習多幼之善在江都中  
尸頃以之生習玩之安令之わく胆大  
其く刻く向後之保以之入累々機之保  
江視練之方所折く為二堂路、自中  
下は常法極極之極也極之極也  
二堂路之極之極也極之極也



正平寺祕佛十一面觀音、紫銅ノ鑄佛也。其高蓮臺より佛頂まで〔甲乙〕の亘六寸七分、佛形背ノ方衣、襜褕に〔丙〕清衡守と二字を彫たり。



考に、前九年合戦の後源頼義朝臣武則真人に、安部貞任が妹なる巨理權太夫が妻に二歳の男子を副て、簪幕の姿とし給へさて武則に賜ひける。此男子成長して、寛治の戦のとき義家將軍の幕下にて召れける、藤原清衡是也。後に清將軍武則朝臣に二子あり、武衡、家衡といふ。山本郡金澤ノ城にて義家朝臣に武衡、家衡うたれぬといへり。

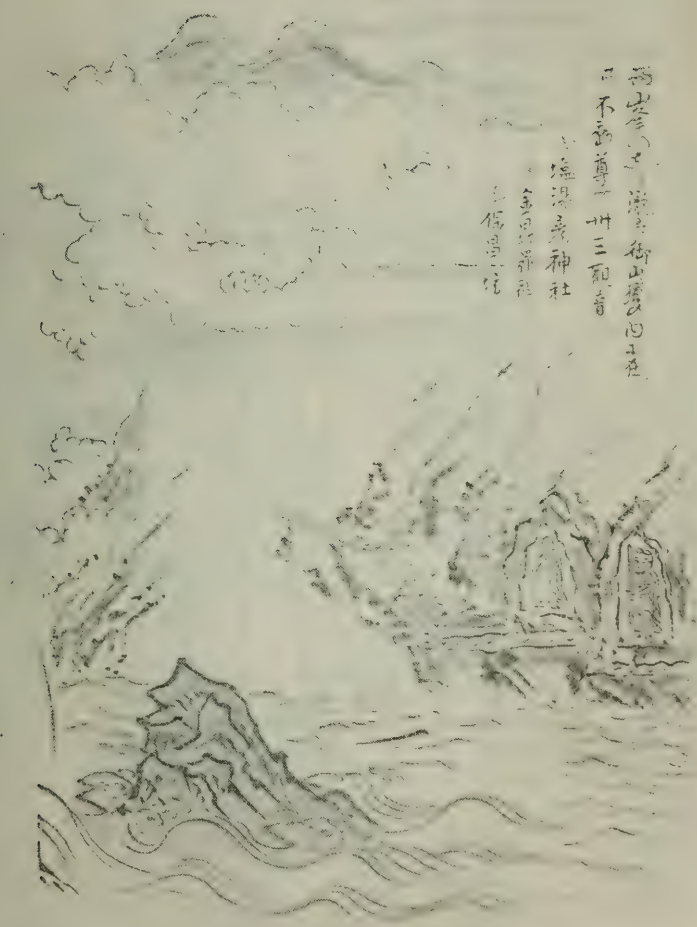
○

正平寺二十世法運海壽和尚保昌のあとをたづね、峯のしら瀧の片岨に卅三體の觀世音の石菩薩安置し、また金毘羅の石形、保昌の石形を作りて安置<sup>す</sup>。此和尚文政戌三月某日遷化せり。



兩山(一) 瀨戶山麓以田子  
口不 瀨戶一 卅三 觀音

瀨戶神社  
金田神社  
金田神社



雪出羽道(平鹿郡十三)



○正平寺累代

○大儀山正平寺ノ鼻祖敬巖宗篤禪師、永正二年乙酉五月十六日遷化○三世珊瑚月永鷲和尚、大永七年丁亥四月十八日化○三世賀翁文覺和尚、天文廿年辛亥六月三日化○四世智山永達和尚、元龜三年壬申五月五日化○五世耕田快孫和尚、元和三年丁巳七月五日化○六世德雄良積和尚、寛永二十年癸未十一月十一日化。「此代遠江守義道公流刑石州津和野一門滅亡ス」○七世鐵心快牛和尚、延寶七年正月二日化。此代當山扶起傾頽稱中興、角館蘆名主計頭義勝公使者及再三、應請移住天寧寺十世中興也。義勝公引導師會津天寧寺關東大中寺移轉、其頃於江府口事不可宜依而從公儀脫衣被仰付、生國御尋故紀州ト申立京大坂江戶生國御塞仰渡。元來當寺先住故半月斗居於赤坂村ニ幽、此時三住捨去、身分故號三外造安養庵、三外老人九十一歲示寂、其後庵主ヲ即元ト云フ。水里村門右衛門ト云者ト爭論シ三外老人於牌前ニ落髮シ即元坊ヲ拂出、即チ當寺ノ爲弟子而號鐵眼庵主、諸人皈依之ヲ。三外老人俗姓藤朝臣瀧口兵衛尉基親ノ次男、北面ノ士也、母、武者所行盛女也。三外老人新天流ノ奥旨編ス、眞蹟書今上遠野氏祕藏也。○八世骨外秀存和尚、承應三年甲午八月廿五日化、俗姓掛札嘉右衛門ノ三男也。此代類燒古書寶物燒亡ス。○九世來屋策傳和尚、元祿十五年癸午五月十六日化、此代藏經半備四天王建立。佐藤氏。○十世一峰大淳和尚、元祿十二年己卯五月廿九日化○十一世通外義融和尚、享保十二年己午五月廿九日化、此代諸堂燒亡ス。○十二世德思來翁和尚、寛保二年壬戌十月廿七日化、此代藏經全部結制、鑄洪鐘。○十三世即應代山和尚、享保十八年

癸丑三月十五日化○十四世溫秀靈恭和尚、元文四年己未三月廿四日化○十五世大船癡丈和尚、寛延二年己巳二月十四日化、諸堂焼失、庫裡建立。○十六世微山括州和尚、明和二年乙酉五月晦日化、此代殿堂建立也。○十七世俊嶺微童和尚、寛政元年己酉十一月廿五日化、此代輪藏新造立。○十八世靈嶽瑞苗和尚、寛政四年壬子正月廿八日化。此代後席他法ニシテ太平村昌泉院明全長老ナル者入院、前後六年住職中藏經並什物無殘相失シ出奔ス、故ニ上リ寺ト成ル。○關代有之當二十世法運海壽和尚、天德寺卅一世慈嚴嗣屬云々。享和三亥春質入ノ藏經輪ニ納云々、慈眼寺、寶田寺兩寺住ス。五十三佛曼荼羅新造リ亦衆寮禪堂再建、亦六郡準西國一番札所並御嶽ノ白瀧再興、臘八會參詣始ル。云々と見えたり。

## ○春光寺

禪林曹洞

○蟠龍山春光寺、開祖は小野寺宮内大輔時道

應安五年仙北杉宮建小荒神、康暦二年正月八日卒、道號道葛

の男玄番頭春光也。至徳三年矢嶋

光時と戦ひ玉米

今云至米

郡をきりこり、其後薙髮して春光房とて、此横手の山崎といふ處に閑居して應永十

四年五月廿五日壽五十八歳にて卒、法號春光院殿といへり。さりけれど此ゆるよし知れるまれなり。

かくて中頃春光庵を前郷にうつしぬ、其とき須田主膳殿久保田に移居うつれしかば菩提所天仙寺もごもに寺

うつしの事ありて、天仙寺の檀越の諸士をはじめ、おのもおのもごころ／＼におのが菩提寺を求む。ま

た須ヶ川うつりの諸士は天仙寺の義貞和尚に語和かたらひ、かくちり／＼に菩提寺を頼んよりは、岩瀬御前の御



追善の一字建立せんといへり。義貞和尚、うべなる事から新寺一字の建立事むつかしからむ。幸に前郷村に春光庵あり、春光は小野寺氏にてもとも系圖正しき事世に知れ、よば、此春光庵を法地佛刹となして一寺となさば事もなかるべしといへり。人々是におちて、昌壽院殿を開祖こはなし奉るは此春光寺也。昌壽院殿の御事をたづね奉るに、もとは會津ノ城主輩名修理大夫盛氏朝臣ノ次女也、また須ヶ川の城主二階堂氏の嫡女となり給ふ。しかるに天正年中落城のとき姫君後室ともに落たまひ、佐竹に入給ふほごにまた慶長七年御國がへあり、御後室は道中にて逝去かくれ給へば須ヶ川の長祿寺に葬奉りし也云々。

角館の小杉山におましましける御臺は岩瀬ノ方の御姉君なれば、小杉山にて御逝去の後輩名家の門紋付し御手鏡を御遺物御記念として、岩瀬御前のおほん本に其鏡圓鏡にて四寸斗、裏に鵲龜松竹、また輩名家の二引龍の文ありを贈り給ひしこいへり。岩瀬ノ方御逝去あり春光寺に葬り奉る、御法名は昌壽院殿光圓祥瑞大姊淨光院天英公義宣朝臣御妻也。大澤邑は御

知行にて別業なりごころありて、布晒なりごころなごいふあたりにはしげ／＼おほむなりあり。また御愛樹の櫻ありける事なご大澤邑のくだり委曲にしるして、此蟠龍山春光寺の處には省たり。

○春光寺は天仙寺の門末、開基昌壽院殿光圓祥瑞大姊。○祖ハ物盤鑑逸和尚。○二世一雄鑑察和尚○三世中興松岩義貞和尚○四世天曉義運和尚○五世滿月宜周和尚○六世大考宜鑑和尚○七世密山即門和尚○八世龍徑泰門和尚○九世寶山吾朴和尚○十世宗圓藏鋒和尚○十一世秋山愚幢和尚○十二世後海文龍和尚○十三世活道觀堂和尚○十四世玄鉾萬崖和尚○十五世光山宗峯和尚○十六世德壽雲峯和尚○十七

世現住祖教不傳和尚也。

○小杉山御姉君ノ記念、岩瀬御前の御遺物の明鏡は、文化二年、十四世萬崖和尚ノ代に失て今なしといへり。

## ○光 專 寺

横手  
寺町

一向西派

○西本願寺直末關根山光專寺は古關根邑に在りしを、延徳四壬午年に横手に移したる寺也、此寺の創めは鼻祖親鸞聖人の直弟乗信房也。乗信、俗姓は清和源氏の支流將軍八幡太郎義家朝臣の末胤、式部太夫源義道、平氏の亂を避て常陸國に至りて霞が浦に閑居す。その頃親鸞聖人、同國稻田におはして世俗に教化し給ふをりから、かの佛刹にまうでて式部太夫義道隨喜のあまり聖人の御弟子となり、聖人義道が法號を乗信と賜りぬ。乗信としを經て出羽國秋田に至り、平鹿ノ郡關根村に來りて、光專寺とて天台宗の僧房の破壊かゝりたる有りしを乗信再興して、淨土眞宗門の佛刹となして關根山光專寺といふ。此寺天台の開祖よりはいくばくの星霜ふりたらむかし。延徳のむかし横手に遷りて東本願寺末流たりしが、當院十八世淨惠住職の時、天明八年申十月四日よりゆるゑありて西本願寺の末流と改り。

○開祖乗信房生國遷化  
年月不詳

○二世乗徳天文八年己亥三月化

○三世弘明天文十八年正月遷化

○四世等向天正元年三月化

○五世徳乗文祿元年九月化

○六

世乗眞寛文十二年二月遷化

○七世乗圓慶安二年五月遷化

○八世乗將享保六年五月化

○九世乗榮延寶七年六月遷化

○十世乗專永祿八年七月化

○十一世明空

寛保三年七月化 ○十一世より七世ノ間世代不知 ○十八世淨惠文化九年九月化 天明八年より西本願寺の末たり。○十九世

大乗享和三年八月化 ○現住二十世宗乘文化十一年正月住職

關根山光專寺二十世當住宗乘代也。

塔中 大澤山正圓寺

圓覺寺。

○西光院

横手馬口勞町

淨土宗

○横堅山九品寺西光院、本寺は下野ノ國芳賀郡大澤山圓通寺にして善導流也。そも／＼西光院は文安元年の創といへども、伽藍回祿して古記録さらに傳らねばしるすによしなし。○本尊三尊ノ彌陀佛、作不知、古佛也。

○鼻祖順達社日同和尚、何レの國の人といふ事をしらず、明應四年乙卯九月十六日示寂セリ ○二世本達社源譽上人大永年中遷化 ○三世廓辨上人遷化年月不知 ○四世了心上人遷化年月不知 ○五世西往上人年號不知六月十一日化 ○六世轉阿上人九月二日化 ○

七世下阿上人十月晦日化 ○八世衍達社祝譽上人三月五日化 ○九世貞達社松譽上人八月九日化 ○十世正達社覺譽上人十二月廿二

日 ○十一世十達社念譽上人慶長六年七月十五日化 ○十二世德達社讀譽上人慶長十四年六月九日化 ○十三世甘達社法譽上人寛永元年十一月七

日 ○十四世大達社廣譽上人寛永十五年八月廿日化 ○十五世法達社良本上人萬治元年三月十九日化 ○十六世覺達社本譽上人寛文八年四月十五

日 ○十七世閑達社良空上人元祿十四年五月十五日化 ○十八世大達社良善上人正徳四年二月十四日化 ○十九世法達社萬譽上人享保十年四月十五

月十五  
日化 ○二十世念蓮社良現上人 享保三年正月十三日化 ○廿一世光蓮社良闌上人 延享四年九月十八日化 ○廿二世喚蓮社良遺上人 寬延元年九月十日化  
○廿三世當蓮社良心上人 六郷本覺寺轉住也 ○廿四世顯蓮社良赫上人 當時光明寺轉住也 ○廿五世命蓮社良飯上人 明和二年九月十日化  
化 ○廿六世聲蓮社良微上人 安永六年四月廿五日入院行年三十二歲、四年佳職安永九年三月下旬西國修行ニ出 ○當時二十七世候蓮社良廓和尚代也。

九品寺西光院良廓達同代。

# ○光明寺 淨土宗

○護念山光明寺攝取院、本寺は下野國芳賀郡大澤山圓通寺にして淨土宗門也。○開基不知。○開祖順蓮社良和上人 天河日岡和尚遷化年不知 ○中興開山源譽上人 永祿二年癸三月十日遷化 ○二世信譽上人 天正十年八月十日化 ○三世空譽上人 年號不知某月廿九日化 ○四世良要上人 慶長二年三月廿九日化 ○五世 (マ) 元和十年月不知二日化 ○六世良嚴上人 寬永二年七月廿七日化 ○七世傳譽上人 寬永二年十月十三日化 ○八世良念上人 寬永十六年六月三日化 ○九世良心上人 慶安四年十月廿三日化 ○十世良笛上人 承應四年正月十六日化 ○十一世良正上人 遷化年不知 ○十二世良闌上人 寬文四年三月廿六日化 ○十三世報譽上人 天和二年二月廿三日化 ○十四世良遣上人 寶永二年七月廿日化 ○十五世闌上人 (マ) 同年八月三日化 ○十六世良覺上人 年號不知九月廿一日化 ○十七世良愚上人 享保十二年七月廿八日化 ○十八世良槃上人 同十九年四月十八日化 ○十九世良顚上人 年不知八月廿八日化 ○二十世良眞上人 寶曆八年正月廿三日化 ○廿一世良赫上人 天明四年九月朔日化 ○廿二世良乘上人 寬政九年八月朔日化 ○廿三世良綜上人 寬政十年七月廿一日化 ○廿四世良功上人 文化十三年閏居 ○廿五世良蒙上人現住 文化十四年四月廿九日入院。



○桃雲寺

淨土

羽黒町

○傑作山桃雲寺、本山は下野國眞壁ノ郡大澤山圓通寺寺領ハ。そもく關東にて永祿二年に向家にて建立

ありし寺也、かくて御遷邦の後横手にうつりぬ。大檀那、法號傑山淨英居士、桃雲道見菴主兩君の法名

を山號とし寺號とせし也、元和巳前の住僧の名不詳也。本尊阿彌陀佛、立像御長二尺五寸、春日ノ作也。

當寺○開山然蓮社法譽上人元和十年正月二日化○二世厭蓮社欣譽上人寶永六年三月廿四日化○三世心蓮社深譽上人年不知二月十日化○四

世船蓮社良乘上人同上某月六日化○五世厭蓮社良緣上人並同五月十六日化○六世往蓮社良法上人並同三月廿二日化○七世覺蓮社良

生上人元祿四年十二月廿六日化○八世光蓮社良融上人正德三年十一月廿六日化○九世願蓮社良本上人年不知七月四日化○十世雷順和尚久保田小杉山

本念寺ニ移轉○十一世順察和尚久保田馬喰町拾信寺ニ移轉○十二世交蓮社良感上人延享四年八月十日化○十三世念蓮社良稱上人寶曆二年三月十日化

○十四世洗悅和尚寶曆八年四月八日横手光明寺移轉也○十五世諦蓮社良觀上人明和二年五月廿三日化○十六世宗譽上人年不知十月十日化○十七世光

蓮社良明上人文化九年十月十六日化○十八世得蓮社良福上人文化七年七月廿八日化○十九世現住良誠上人存隆和尚也。

○正法寺

横手  
寺町

日蓮宗

○佛眼山正法寺は京都廣布山本滿寺の末流也。○開祖は正徳院日意聖人萬治元年戊戌四月十三日遷化○二世唯性院日

相大德江戸淺草妙音寺ニ移轉○三世慈眼院日珠大德貞享二年正月十七日化○四世唯性院日相大德江戸淺草妙音寺ヨリ再住元祿九年五月廿三日化○五世一反院

日如大德正德元年七月二十四日化 ○六世體了院日真大德寶永三年六月廿六日化 ○七世寂住院日立大德羽州崇澤妙圓寺ニ秘傳、遷化年月不知 ○八世智境院

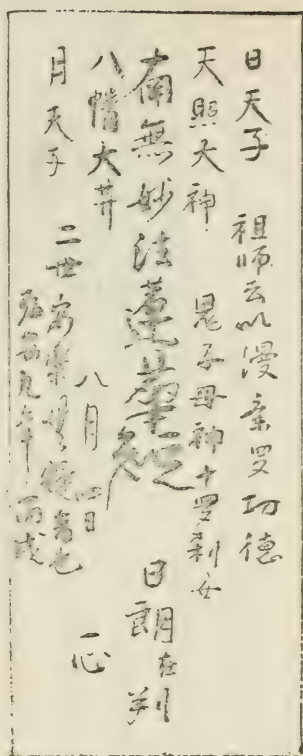
日乘大德延享二年六月廿六日化 ○九世智詮院日遙大德寶曆五年三月廿六日化 ○十世妙光院日圓聖人天明元年廣法興寺ニ移轉、文化十二年八月二日於同寺化 ○十一

世智應院日能聖人文化九年九月十八日化 ○十二世現住貞善院日宣文化八年三月廿八日入院也

### ○寶物數品

○大黑尊天 高祖日蓮大菩薩直作也、開基日意上人ヨリ代々傳來也。

○高祖直弟六老僧第二日朗菩薩御眞筆本尊寫。

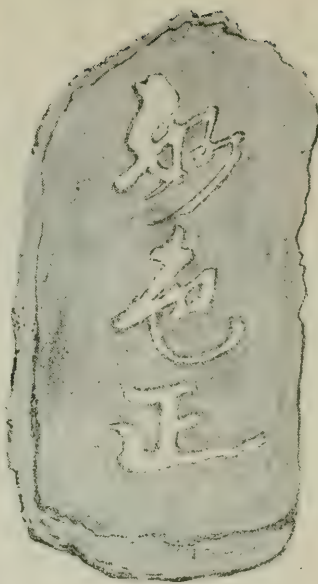


同極○日朗尊者弘安九年丙戌八月四日御眞翰無疑慮者也。

○御教化石一箇 大凡如圖、石ノ色青褐色。此石石和河にて得るよしをいへり、文字の墨色年を経て

眞白に化して窪かにおち入て、さながら彫たるがごこし。石輪川はそも／＼殺生禁制の河ながら年魚

の多かる事を聞、ある男夜更ふかく忍びて鵜をはなちて鮎を捕る、此事あらはれて、その鵜飼の翁此川にし  
つめられたるよし。かくて後日蓮聖人これをあ  
はれみて、石にはくる經を書て此川にしづめ給  
ひたること、鵜飼のうたひ物語にも、「ひまなく  
魚を喰ふとき、罪もむくひも後の世も、わすれは  
てておもしろや。」云々と見えたり。またふるき  
和讃に、「つくりしつみはいさわ川うかひの翁  
も妙法を得奉りて浮みこそすれ。」此和讃は口持六老僧の内也  
もいへり。



此石の極札ニ云 「高祖大士御教化石

甲州東郡石和村鵜飼川御經石妙色正之三字無疑者也。」

石和川教化之砌は

御伴僧者六老僧日朗、日向御兩聖也。經石者御三人之筆跡也。

甲州東河内大嶋村 光長山十九世 日近在判「云々」。

○此柱鈴は旅商人のもどより買ひ得て、横手の檀越齋藤與市郎が妙見神前に寄附文政八年十月十五日せり。表に

鎮它靈符神の四字あり、裡に文祿二癸巳二月日肥後守藤原清正と彫たり。此神靈の形は、官庫に在る楠正成が靈符、神鈴にやゝ似たり。考に、肥後、國八代、郡神宮寺靈符神、日本、始也。肥後、國八代、郡白木

鎮它靈符神



山神宮寺にまします靈符、尊像、妙見菩薩也。昔漢、孝文皇帝弘農縣ノ堺に至り、三思、宅の豪富なるを見給ひてあやしみ、其主を呼て是を問給ふ。彼者答へて、姓は劉、名は進平といふものなり。往昔我家禍災甚しかりしに、何方とも知らぬ書生二人來りて七十二符を傳へ授く。即敬ひ受て此法を修する事十年にして大富貴、二十年にして子孫繁昌、三十年にして必白衣天子宅に入る事あらむと云て、門を去る事五十歩にして失ぬ、只白氣一道天に升る而已也。其しるし一々是を見るといへども、白衣の天子を見ずといふ。孝文皇帝信敬して靈符を傳へ天下に施す云々。吾朝に靈符ノ板を彫くことは、人皇四十五代聖武天皇、御宇天平十二辰年、肥後、國八代、郡白木山神宮寺に於て是を梓にちりばむ。其時の板は滅



す。今の板は南朝正平年中に、後醍醐天皇第六御子征西將軍良懷親王八代郡高田郷に御住居時、梓を御建立神宮寺に納給ふ、今出靈符の曼荼羅是也云々。八代上宮妙見は本地大日如來也。妙見ノ託云、釋迦、阿彌陀、觀音、地藏、金剛藏王、虛空藏、大威德我身也、種々に現する故に七體妙見と號す、云々と縁起に見えたり。

○荒化佛あらはさけ

大日如來の佛像なるよし。大鳥居山より西北へ行事廿町ばかり、朝倉川に舍梨堂また舍利塔の淵

また、しやりぶち淵とてむかしは寺ありし處といふ、そこにいさふかき淵あり。野中邑の松之介、これかれ

三人ばかり朝草刈るに、みなどこに光あり。松之介あやしみ水に飛入り、潜もて此佛を、此事かくれな

ければ人々こひもとめて其家にするまつるに、いと

くあやしき事あり。さりければ此佛を松之助が家に

に飯しぬ。また人のもとにつかはしかば家鳴りひ

なきなどしければ、人みな是を恐みてあらけ佛とい

ふ。

文政五年壬午十月檀越家梅澤儀兵衛當寺に此佛を納

む。毎年四月八日香花燈明法味を備へてこれを祭れ

ば、此佛も、さるあらふることろもおましまさるよ

(甲 高四寸八分  
鑑ノ鑄佛也乙)



し。

○三夕、色紙形 寂蓮、歌、西園寺大納言致季卿御筆。○西行歌、日野中納言輝光卿御筆。○家家歌、

万里小路宰相尙房卿御筆。

○天徳二年右大臣五十賀屏風 御詠歌池尻前宰相暉房卿御筆。其外色紙多し、省之。

○當寺

開基大檀那 齋藤與市郎

永聖開基 同苗 文藏

○根本庵室、開基 深井邑伊藤彌治兵衛。

寶暦十二年壬午、六月十二日此寺回祿にあひて、縁記、古記録等傳らず、檀家古老ものに聞つる事記したるのみ也。

## ○淨光寺

西一向宗 派

○羽場山淨光寺は西本願寺末、中本寺は仙北、郡六鄉村なる吉水山善證寺也。淨光寺は本ト、みちのくの南部羽場村よりうつしたるよしをもて羽場山の號はあれど、委曲なる事は傳らず。

○開基西念○二世淨心○三世了圓○四世教誓○五世教正○六世教乘○七世道順、慶長年中顯如上人画像御免也。○八世玄正○九世善正、此代延寶年中開山親鸞聖人画像及良如上人、太子、七高僧、正徳年中

開山之緣起御免。○十世惠願○十一世紹正、此代塔中常源寺建立。○十二世祖閑○十三世永觀○十四世祖丹、此代洪鐘建立。○十五世祖靈、此代法如上人眞筆六字名號拜領。天明年中舊記燒亡、遷化年月不知。○十六世牝鳳、文化十二年亥二月十日化。此代聖德太子木像福嶋康善寺より授與正身八寸、座トモ一尺一寸也。○十七世祖苗、文化七年午十月六日化○十八世現住有宗。

洪鐘

享保六辛丑年五月十一日 羽場山淨光寺十四世願主釋祖丹 奉寄進藤朝臣家續。

○淨光寺塔中 常源寺。

○無量壽院

澤ノ寺といふ、なめては澤といふ、千手澤といへる事といへり

眞言宗

○此寺は山城國醍醐ノ松橋殿の御門末にして、新義ノ眞言宗派清水山吠戸羅寺無量壽院といふ。此無量壽院京都に出ては千手院といふ、無量壽院、千手院、兩院兼帶ノ寺也。そのいにしへ京師の清水寺の僧、此平鹿ノ郡に閑居して草創すゐより清水山の號はある也。そもく無量壽院は舊沼館もとに在りし寺也、其地は雄勝山菩提寺藏光院の在る地也。そのころは藏光院はおくまれる處に在りしかば、藏光院は奥の坊と云ひしとなむ。雄勝郡杉宮ノ舊記ニ云々、清水山吠戸羅寺無量壽院は小野寺秀道公より代々の祈願所也、白月十五日は無量壽院に在りて國家安全の祈禱をし、また黒月十五日には雄勝郡杉宮に在りて天下泰

平五穀成就萬民豐樂國司武運長久を禱りしよし、吉祥院の看主有圓しるせりと見えたり。小野寺家系を考<sup>ル</sup>に、秀道の父は重道小野寺雄勝殿と云ひ、母は結城朝茂女也。下總守大泉六郎秀道、仁治三年八月二十日卒、法名定學院。云々と見えたり。

○本尊不動明王<sup>木像</sup> 根來ノ開山覺鑲上人御作。

此本尊は京都智積院運徹僧正ノ持念佛なりしが、春山房義堂、彼僧正に身を委れて多年一宗一派の一事を學び得て一乘院へ入院の時、僧正、記念として此不動尊を義堂に與へ給ふ。かくて後、義堂秋田ノ郡濁川村の別院に於て遷化の時、當山の住僧慶照に遺物として贈り給ふ尊像也。

○不動尊、矜羯羅童子、制多伽童子三幅對 画像。

此不動明王、二童子、繪佛師は妙澤也。妙澤また龍湫と號。龍湫は夢窓國師の弟子也。佛画尤不動に名高し。

○千手觀世音木像 慈覺大師御作。

多田滿仲御男美女御前ノ開基、御領内廿三所願拜札處也。

○錦ノ戸帳<sup>丸ノ内ニ扇形  
日ノ丸金色也</sup> 千手觀音ノ戸張也、一乘院ノ十世義堂師ノ奉納也。考、古本秋田頼禮記ニ云ク、四番

無量壽寺千手院、中頃より寺號あり。占部致尙長久年中建立也。

○千手觀音は大佛師定長ノ作

夏山の梢に蟬の

から衣澤の御寺の

○鎮守毘沙門天王、毘首羯摩ノ作

御法なるもの。



云々と見えたる。願拜數本あり、みな大同小異せり。

○毘沙門天 毘首羯摩作。

○紺紙金泥、心經一卷 高野大師ノ筆。

○紺紙金泥大般若經片紙きれ 菅公ノ御眞翰。

○古笈 一負 武藏房鞍馬山より負ル來ルといへり。

○千手觀音ノ末社 ○稻荷明神○毘沙門天○歡喜天。

○開基、開祖、住古ノ世代不詳故ニ○二世尊雅天正年間○尊祐三○尊長四○尊意五○弘長六○弘天七

元祿三年十二八月廿九日化 ○覺禪僧名春能。元祿十九年中興ノ祖覺寶僧名元祿十四年辛巳三月廿八日入院、正徳六年丙申二月

三日遷化 ○慶照僧名密忍。享保廿年十一快山元文元年丙辰五月入院寺造夢、同○慶意僧名密山。元文二年己九月十三慶壽延享

卯二月廿十四日化 ○慈正寶曆二年申二月十六日化 ○慶傳天明元年庄三十六慶養遷化年○義門遷化年○眞乘遷化年○淨延寛政七年卯八○尊純二十

僧名仙北郡刈和野邑清光院ニ移轉 ○尊貞僧名卓諱文政元年秋田郡今戸邑實相院ニ移轉 ○宥應僧名當住僧也、文政

元年戊寅六月仙北郡神宮寺邑華藏院より當寺に入院せり。天正年中より前キ往古の歷代絶て傳らず。

○祭 禮

○千手觀音祭日は四月十六日、十七日也、御城代より御目附役兩人、御足輕兩人警固たり。また對の御燈籠御奉納あり。また正月より十二月まで月々國家安全御武運長久の祈禱ある也。

（法流）

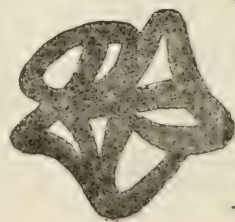
松橋流末之子因第身授與之今齡者以此正  
義豐為河國梨代合傳法訓可所註印托大僧都賀齋也

元禄十七年正月十二日

松橋法至持僧正

押

（苑文）



羽州秋田領仙山平麻郡横手千手院事自今以後可為  
醍醐松橋無量壽院末子之方依院務僧正御清見之  
所執達如件

孫勒院法平

元禄十七年八月廿日

信榮

押

千手院山房

○院号内免条是、東覺院別寺

院号



山号

東覺院

右板前寺舊慣不

口号仍出升

寛永十八年三月廿日

高祖高祖大師遍照金剛尊

并代目清浄心院

法印山宣雅  
押花



信榮



○添秋

上寺院之事圖ありて後告事量も新院より上付千島  
院にも新修殿あり想に法中より法慶寺より元來に  
千島院より成りたる國寺なりと西寺東新の儀なる  
此寺も新院昔より別儀なりといふ

新院僧司

元禄十四年 己丑月廿日

辻大威法橋宗五

秋田

千島院 宗賞所存



面

○古緯札再募

大檀聖賴朝云

舍

觀應元

元

歲次

巳未 閏七月廿五日

子時集 享年 巳 拾月廿九日

既月

自是

先造

營建

久

願

八月

庚寅

日

甲寅見喜元

壬子

代

二月

廿三日

乙正應三

壬子

庚寅

六月

廿八日

之政九年

甲寅見喜元

乙正應三

五月

十八日

乙正應三

丙辰

五月

廿七日

丙辰

四月

十七日

## ○堂社境内

○千手觀音末社毘沙門天、聖天、稻荷三社也。堂林共ニ東ハ御立林境、澤ノ上堀切、西ハ墓所、古社ノ下マデ、堅百十間餘リ。○當寺境内東ハ寺墓所、西ハ千手澤川切門前屋敷マデ、堅百八間餘、南ハ澤向山道切、北千手澤川切、横七十九間ヨリ十七間マデ廣狹不同アリ。残りナク御除地也。

## ○山崎念佛堂

○此堂、本寺は當地護念山光明寺也、開基不知、横手草創の庵室なる由を申傳ふ也。古來一境無緣供養の道場といへり。元和九<sup>癸亥</sup>年本山ノ法譽上人此山崎に閑居して、國家安全のため、また牛ノ頸戸<sup>地名なり</sup>に於てむかし罪刑行はれし亡魂菩提の爲に、常念佛堂一宇建立ありしが、元祿の頃より此念佛の靈刹退轉に及て、それより、とし毎に七月の別時念佛回向執行の事こは成りぬ。かくて當時本山光明寺廿四世秀任和尚隱居して、行ッ／＼常念佛堂再興のため千日念佛執行あり。

（天註）牛の首戸ハ小野寺義道の時世までの死罪に在りて桃の名處、一村みな桃林なり。

## ○寶物並來由

○此念佛寺に、九郎判官義經朝臣自作給ふ千軀の彌陀の木像<sup>みただけ</sup>四五寸一柱あり、こは松前ノ光善寺<sup>淨土宗也</sup>の末院、義經山欣求院より授與の佛なるよし。由來左に委曲也。

○羽州横手光明寺阿彌陀如來緣起

○本寺所安置尊像者、松前島義經山欣求院千佛之一而、源義經所自作也、蓋義經高館之後佯死逃者、晦跡于海嶋、潛逞武威、以服嶋夷、厚奉佛教、以示恩信、建立一寺、作爲千佛、而敬事之、見有其所崇尊也、是故嶋夷之於義經也、畏而敬之、愛而親之、至今飲食飲酒必先祭之云、己卯七月、本寺老上人秀任漫遊、航海至松前嶋、留錫于義經山、會山中新鑄大鐘、上人爲是說法七日、住持善岡和尚出謝儀若干、上人無一所受、歸時乞尊像二而渡海、至中流、大風波濤洶湧船殆覆矣、船人大懼、於是上人高唱尊號、伏祈冥助、須臾風止波收竟得上岸、實十一月二十四日之事也、從是到處說法教化、季冬寓我府下、應法侶圓中和尚之需、安置尊像一于誓願寺、捧此一像而歸于本寺、夫阿彌陀佛者、諸佛中之至尊而其德無量也、今大千世界一草一木有不被其恩者乎、曰無有矣、義經者一代中之英傑而其用兵如神也、今六十餘州嬰兒孩童有不知其名者乎、曰無有矣、以一代中之英傑自作其德無量之尊像、事之如此者、其意欲必濟一度一切衆生至于彼岸也、一切衆生亦對此尊像一心信仰、必得其冥助、已於上人渡海之日可見焉、辛巳仲春、上人告予以此事、請文以記、時予可憂而不敢辭、有欲爲先人作追福也、故若阿彌陀佛等及尊像、尊號諸字、則一字百拜而書。于時文政四年涅槃前一日 雪齋居士。」とあり。

祐天上人かたべら袈衣けあひノ名號臨書。

南無阿彌陀佛

祐天印

此一軸の裡書ニ云、

「表六字御名號者増上寺三十六世當寺開山明顯(てん)譽大僧正通阿愚心祐天大和尚染筆無疑者也。

明顯山祐天寺九世主

文化九壬申天十月十五日

南西北阿愚學 祐

東(花押)

此南西北阿祐東は、南蓮社西譽上人北阿彌陀佛祐東は、東西南北を名にいへるなるべし。

○布帷子六字名號並百萬遍念珠ノ緣起

○そもく此御名號並念珠の由來を尋ね奉るに、三緣山増上寺三十六世明蓮社顯譽通阿愚心祐天大僧正の御眞筆にして、念珠共に利衣りえといふ女に授與の品也。其故いかんとなれば、常陸國新治郡片野村高濱屋武右衛門さて富豪の農民有り、一女二男の子ありて姉をりえと云ひ、二男を長治郎、三男を徳治と

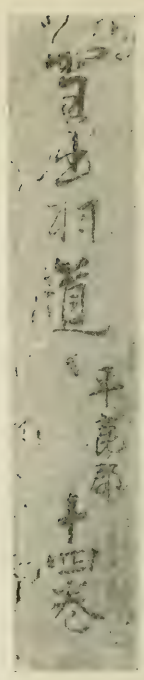


いふ云々。姉里衣は同國土浦の城下岩見屋某に嫁しぬ、かくて十二年を経るに夫三十一歳にして病死せり。妻りえ懷妊の身にて八月難産になやみくるしむ。弟徳治産の案否を尋ぬるに、幸なるかな近きに祐天上人御行脚の序同所高翁寺に御寄宿あり、頃は元文二年也。扱又徳治事は、祐天上人の御師範圍通上人にしばらく仕へ奉りし者也、此縁をたよりて祐天上人の御宿寺に罷上り云々。姉りえ難産にて三日三夜、もはや露命あやうし、何卒御慈悲を以て安産の眉を開せ給へと懇ろに願奉れば、上人、然らば祈禱は當寺の佛前に於て修行すべし。外に修法の矩則あり、りえが着用の衣類持參あるべしと仰あれば、上人の仰せにまかせて、則りえが白帷子一衣持來る。夫より上人本尊前に香花燈明の獻供心を盡し、有合僧俗連衆として、光明遍照と開口ありて、百万返修行初めらる云々。徳治持參の布の白帷子に南無阿彌陀佛と身頃二幅に書せ給ひ、直に須彌壇前に掛置<sup>キ</sup>又々百万返修行、上人始め面々、何卒りえが安産の大悲たれ給へと至誠の信心を起し云々。一心不亂に唱へければ、不思議なるかな、本尊前に掛<sup>テ</sup>置たりし白帷子たちまち動搖する事しきりなり。人々、風もなきに此道場の帷子の動く事みなく奇異の思ひをなしける處に、門外より走り來るものあり云々。上人へ申上るやう、私事岩見屋よりの使也、りえ事只今安産いたし候也、子は子體<sup>コタマ</sup>にさふらへと御しらせ申上る云々。上人はじめ、誠に佛智の不思議を感じ云々。後代に及て、身頃二布の帷布を裁切り表粧を補ひぬ、御名號の眞中に二布のぬひめあり、心を付て拜信あるべし云々。予羽州に赴く日、錢別のしるしとて、此一軸の御名號並に念珠ともに附屬

を得る。靈寶なれば本志に基き、今爰に自信教人信の道場をさふけ弘通せしむる也云々。御名號德治  
か劔難を救ひ給ふ證據のため、祐天寺一代祐東和尚きんめ驗の一幅也。是尙心を留て拜禮あるべし云々。

護念山光明寺廿四世主 良 功 秀 任 焚香拜書。





山川莊山内郷

やむけ山	土淵 邑一	あしくら山	平野澤 邑二
やなぎ橋	筏 邑三	山のはたなご	南郷 邑四
ゆなぎやま	三ッ野又 邑五	いしこ澤	黒澤 邑六
しらき山	小松川 邑七	大ゐのふる江	大松川 邑八
そでのうら	丹波開 邑九止		

○山内惣中 橋員

板橋、圪橋、箴橋合 六十五橋、内小橋卅七 大橋二橋

雪出羽道(平鹿郡十四)



○家員

五百四拾戸

○人數

三千六百十九人、外三人座當坊

○馬

五百九十五疋

○牛

四十六疋三十疋ハ武道邑ニ在リ、外餘村也。

やふけ山

○土淵 邑（一）

○横手山内郷

九箇村鑿

里長

平勘

重

吉郎

○山内さむないは出羽、陸奥にいと多き名也。書紀に寒苗さむなひとあるをしか訛傳ふにや。また奥羽の俚俗辭さぶさぶことばをもて

山内さむないといへるを雅言に聞きなし給ひて、皇都人の寒苗さむなひと紀しるに作し給ひしかとおもはれたり、そをこれかれ

と、吾われかむがへおける書記しきごもあり。また山内と字音あひおひに稱なづなす村々も多し、そは秋田ノ郡に五十ノ目山

内、河ノ邊ノ郡に岩見山内、また近き雄勝郡には吉野、湯ノ澤、田子内、岩井川、手倉川、椿臺、檜山臺、また猿

ヶ半内さげはんないなごみながら山内邑。そをまた山内やまうちと稱なづふ處あり、中國ちゆうごくにて山家やまがともはら云へるがごとし。此

平鹿ノ郡つちに土淵つち、平野澤、筏邑なむごう、南江みなゐ、三叉みつ、黒澤、小松川、大松川、丹波開、しかこの九村をさして横手山内

とはいへる也。雄勝ノ郡の山内の村々も此平鹿ノ郡山内の村々も、南にあたりてみな背會せなかはせたり、なほまた

此奥山内に極らば、そは陸奥國にして南部ノ領地近からむかし。享保郡邑記云ク、山内村總名唱也、御  
黒印九ヶ村ニ九本給、土淵肝煎一人立テ預置ニ云々見えたり。其頃の保長は小田嶋市郎兵衛といへり。  
此小田嶋は小野寺遠江守義道の時世より里正の職をか、ふりし家にて、其世里長は縣令も兼ねたるはご  
の風俗にて、吾家は、横手の桐廓造營の時の良材の餘材を給りていこ、大やかに作りなし、家富繁  
昌たるこなもいへる。さるよしある人の後ながら今は末絶え、に、ひむぐうになりて土垣の住居せ  
り、古宅家は今官舎と成りて、此官舎には時の保正住て公の事を勤ぬ。此家の柱、壁代の板などは鎗  
鉋をもて創作たるいこ、古きものから、また近世に制作する突鉋、眞鉋以て、しらげたるこころ、  
も見えたり。此官舎なる砌の隅なる孫廂近う、大なる伐根一本苦むしてあり、某の木にかあらむと問  
へば、こは片柏にて、こしは三四百年も経たらむものか。いこ、大なる木にてあたたら古木なりしが、  
貧家なれば、むかし小田嶋が住つころ售て、そは今横手の蛇野崎の橋桁と成りしこ、古老の悔の八千  
度、今し世かけて語り傳ふといへり。

### ○ 皿 木 邑

家員 古十三軒  
今

○大澤村<sup>横手寄郷</sup>の大柳の本より、山内の大橋<sup>長豆廿一間横豆九尺、水際より高廿餘丈といへり</sup>まで、山内皿木の高岸に生る金鉋梨の大木  
周囲の根に掛て亘したる板橋也、此橋は山内九ヶ村に入る山口の境也。さて皿てふ號つきし地は、美作や  
久米の皿山さら／＼になご名所にも聞え、また此出羽の雄勝郡に皿小屋あり、秋田郡に皿見内あり。

なほこゝ處にも多かるべし。皿木はいかなる木を方言て村名とは成りし事か、是を考へおもふに、此あたりの人みな皿木をさら木とはいはで、もはらさはらぎと呼びぬ。こは秋田ノ郡の太平をおえだひらごのみ云ひて、大平とはいふ人さらになし。そは古應永のむかしより、大江家の領にして大江平と云ひ訓來つる其口癖にて、蛇峯を太平山と字音に稱て郷を太平と作かはれど、今の世かけて老平といふが如に聞ゆる也。此皿木邑に在りし古木を、あすならふと云ひしは弱檜木にてやありけむ。しか此さわらぎの生ひて、としふるをもて地名とは稱來たるを皿木と作りて村の名とはすれど、村民みな弱柏木とはいへるにこそあらめ。さわらど、あすならふは、つきと、けやきとのけちめならむ、みなもご片柏の品類ならむか。童の諺に、檜には今日成らふか明日ならふか、あすならふくと云ひつゝ身は老木となりたごへあり。此皿木邑の東南に中て古城跡あり、其城主はいかなる人の、いつの世居住ともさらに知れる人なし。なほ考ふべし。

○熊野ノ社　祭日四月十五日、八月十五日。そのむかしはやくも市郎兵衛が齋奉りたり、今その後の平右衛門が齋主たり。

○稻荷明神　祭日前きに同じ。是も小田嶋市郎兵衛がいつきまつりし御神ながら、としごろこぼれて社もあらねば、三熊野ノ社の内に難居とまをす。

○此村は本郷なれば山内の筆ノ創め書べかりしが、皿木邑は大澤よりの山口なれば、村始めに皿木をば書つる也。さて土淵もところ／＼に在る名也、そは河邊ノ郡の三内古山内なりつるにも土淵村あり。また陸奥ノ津輕に土淵川といふ小川あり、此川溝の如き小流ながら玉石を産す、墨内すゑいりなごわきて明玉絶品あり、是を世に津輕石といふ。また今別濱いまべつちんの寶石は、土淵川の産より其品もごも劣り。此土淵邑には玉こそ産ね、野菜を作るを業として蘿蔔、牛房、胡蘿蔔、丹百合、蔓菁、蕪、ひごもじ、いもじ、紫芋いものこ子こ里りなまた藍、煙草を作りぬ。あるに柳葉いちじく椿つばき葉は晩ばん、たばこはあしくら、かたいかりなご、いごなくぞ見えたる。しか、なにくれかにくれご佃つくだり産して横手の市にひさぐ事、久保田にたつ朝市にもいやますばかり也。

○茂竹邑

家員古九軒  
今八戸

○茂竹は雅言也、本ト人の實名にて重武なご云ひしを茂竹にや作りたらむか。阿仁ノ莊ありのぶに寄延よりのぶといふ村あり、頼信よりたけといふ人のいにしへ住つる處といへり。此茂竹に寺ノ跡あり、そこを古寺山といふ、そはいかなる寺ごも古老の傳へもなしといふ。

○山神社 茂竹山に座まはり、祭日四月十二日  
十一月十二日 齋主五郎右衛門。

○根子邑

家員古二軒  
今七戸

○此村の道のかたはら小溝の端はたに、いご大おほにこしふる赤松あり、近きころならむ此松三ごせがほど枯かわれたりしかば、今は伐りて樵木たきぎごもしてむと思ふごに、青葉あおはとして、もごのごにいや茂り榮ふ。あ



やしき事とおもふに、平鹿郡山内、根子村松子がもこへて伊勢より文通ふみ、はらひぐしなしど贈り來る事あり。そは此松の靈魂、いせまうでして三こせばかり旅に在りしにや、まここにゆゑよしありし松ならむこて、童も小枝一だに折こる人なしといへり。また南北内の十狐村むつこにも、いせまうでせし赤松あり、それも十狐のお松子こてはらひ贈り來るよし、おなじさまの物語り也。そのむかし南部の根子郷に、照井大筑前某こてよしある家のりしが、ゆゑありて此山内に來て、住なれし南部の郷號をうつして村を根子こと呼び、おのが名を小筑前ことよびて家のめぐりに堀を廻まわして家富やふ、照井小筑前こて人に知られたる家ながら、その末は乏すくしう照井六之尉むつとて、むかし持たりし武具、調度もみなうせて、たゞ雪村がかけし山水を傳ふのみ。

○小 田 邑

家員古九軒  
今九戸

○小田山の麓に住めば村の名に呼ぶ。また此あたりに石動山いすくさといふ處ありといへり、そは、はたふく山のあたりをいふか。

○機福神社はたふく 此御神にねきこすれば腰機織はたおに工こに上手てあがるとて、織女のかぎりうち群れてまゐる神社也。さて此はたふくといふ處いこゝ多し、古福、幡吹はたふなしども作り、また旗吹清水もいと多し。

此社の祭日四月十五日、十二月十五日。齋主長太郎。

○愛宕社 祭日十二月廿四日。齋主勘左衛門。

○ 下 邑

家員古十七軒  
今十八戸

○此下<sup>タ</sup>邑より虫内村にいこ近し。村中なる銀杏の大木一周間一丈は神木なるよしをいへり。

○棚戸明神社 梶の下<sup>タ</sup>にませり。木戸明神も多かる神號也、沼館には木戸五郎兵衛とて狐の社あり、

またこ處にも木戸<sup>ノ</sup>神ませり。此下<sup>タ</sup>村に座す木戸<sup>ノ</sup>明神は大黒天にて大汝<sup>ノ</sup>御神也。祭日十二月五日  
齋主作右衛門。

此村に餅田といふ處に家一戸あり、もち田の小右衛門といふ、もち田は比内にも聞<sup>キ</sup>つる地名也。舟場<sup>ふなばた</sup>

の彦八とて一戸あり、古此川<sup>もこ</sup>廣<sup>ワ</sup>て矢向峠<sup>やむこう</sup>の山脚<sup>ふもと</sup>わたりに舟渡したる處にて、船場の字今残りてありけ

るものかとおもはれたり。こは世々<sup>よよ</sup>舊<sup>ふる</sup>りし彦八が家ながら、洪水に川岸崩れて彦八が宿もいさゝか引

退たり、その彦八は舟渡守にてやありつらむといへり。また梶の下<sup>タ</sup>の七右衛門とてこしふる家あり、

其梶は、うつほにて大蛇すみつる、もとも神木たりしが近きころ倒れたるよし。その大蛇は今もその邊

りにすみ、さま／＼に身を化<sup>かわ</sup>て大小<sup>すうた</sup>はさだかならず。小蛇一尾川をよこぎれてわたれば、かならず洪水<sup>ひんみづ</sup>

事あるためしありこかたる。此下<sup>タ</sup>邑は梶下村の省語にや、また地の底<sup>ひき</sup>きを以て云る處か。

○ 虫 内 邑

家員古九軒  
今十戸

○虫内<sup>むじない</sup>は古<sup>もと</sup>、蝦夷辭<sup>ムシリナキ</sup>の牟斯理奈草<sup>ムシリナキ</sup>とふ事のうつりなるべし、某ムシリ某ムシリとて蝦夷國に多かる名  
也。斯理は岬を云ひ、奈草は澤をいへる夷人が言語也、いにしへ此地に蝦夷や住居<sup>すみ</sup>たらむかし。岩瀬邑

に通ふ箴橋あり。

○板井澤 邑

家員古十七軒  
今十戸

○蝦夷洲にイタンギ澤ナギといへる處あり、また、こなたにも板井澤、板井田、名處にも板井の清水あり。此板井澤に箴橋ありて下タ邑へ往來せり。

○水神社 山際にませり。祭日四月十二日、十二月十二日。齋主吉右衛門。

○山神社 山の比良にませり。祭日四月十二日、十二月十二日。齋主郷中諸家。

○岩 瀬 邑

家員古十軒  
今九戸

○此岩瀬てふ地名もところ／＼に多し、こゝにも箴橋かゝりたり。

○稻荷明神ノ社 萱野の内に座り。祭日十二月十日、齋主第三郎。

○鶴ヶ池 此池岩瀬邑より東南に在り。鳥打長根といふあり、此下は鳥打坂また要害坂なンど、みな

此池の邊の往復みちに在り。鶴の池の、またの名を和田城しろ、沼ぬともいへり、むかし和田某とかいふ城主あり

つるよし、うべも坂に要害の名ぞ聞えたる。此池の廣サ東西五百間南北三百間斗にして、めぐりは小松

ひし／＼と生ひたちて岸影くらく、遠近は山また山とうちかさなりて春は櫻多く、秋は紅葉の色をひた

すといへり。今は冬枯の稍しげう春秋のながめに及ぶうもあらねど、またなき處也。きしべなる松

のみごりを影さして千代もすむらし鶴の池水と、かたはらのくち木に書付たり。魚はもろ／＼の雜魚ザイゴ、

また、もふしつか、鮎もすめりといふ。

○平 石 邑

家員古八軒  
今

○此平石邑より内淵邑に行に筏橋を渡る、此あたり、みなさかしき山路あり。

○山神社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主治左衛門。

○矢向峠やまけといふさかしき高き山路あり、箭向峠やふけ、薊峠あざ、白木峠しらきさて此山内に三ツの峠ある、そが中の一ツの峠也。矢向は手酬たはひにおなじうして矢祭やふけならむか、松前矢向まて、また箭越し峠といふ峯に神座り、蝦夷人此山を踰こるときは、おのれくが負たる鞆いかわの矢一筋ぬいて此神に箭祭やふけし奉る也。舟にて此山の麓あたりを通る蝦夷人等は、此峯にうちむかひ弓をひきまかなひ、矢射はなちて手酬たはひる事也。また常人も蝦夷の嶋わたりして、その舟人蝦夷の弓矢を得て此山の下通るときは、磯にてまれ沖中にてまれ此神に遠なげして奉る也。さりければ箭向山と云ひ、並ては矢越が嵩といへれど、此處に矢向やま峠てふ事こそ雅言よみれ。さる處あるをもて蝦夷人栖居すみしむかしぞ偲おもはれたる。またわが國ぶりのいにしへ今蝦夷に残りたれば、矢祭やふけもいにしへのさまならむ。是をおもへば、越後えちごに矢吹といふ神の鎮座も、矢葺やふけの山來ありとくさへにいへれど、本もと矢向やまの轉語ならむかし。此山内土淵の矢向に登りてうち見やれば、(やま)の方に雪のしろく、と雪ふゆは五枚といふ黄金山也、むかし大判五枚の料の黄金を、一日に掘り産うしよりしかいふ山見ゆ。



○内淵うちぶち 邑

家員古三軒  
今

○内淵といふ處近江ノ國片田ノ浦わたりにも在りて、内介が淵なるを内淵と省もていへる也。むかし内助といふわかし漁人あり、いと大なる鯉魚を得たり。此鯉の背の鱗の一枚落て、その形巴に似たれば一ッ巴と名づけておのが家に養ふ、をりとして水をはなれても出ありきぬ。此鯉、女とくゑして内助が妻となりて三とせをかたらひ、此妻行方知れねばまたよき妻を得しほごに、片田の浦に大濤たち、かの一ッ巴七尺斗の魚となりて其鯉の口より人形の如きもの吐出しぬ、内介も浪に引れて湖に入しかば、そこを内介が淵といふと浦の古老の物語にせり。此事は西鶴が物語本にも見えたり、ありし事にや。此内淵邑に箴橋あり、近隣の村二瀬に通ふ也。

○二に 瀬ぜ 邑

○越後ノ國には三瀬といふ處ありて、そこには義經、辨慶の笈なりとて、旅人此處に至れば此笈二ツを示す、三瀬は古き處なるよしをいへり。享保郡邑記に家員三軒とあり、今は一戸也。此二瀬にして土淵ノ一郷は極たり。

○物家員(い、こ)

○人員五百七十四人    ○馬員(い、こ)

大澤郷

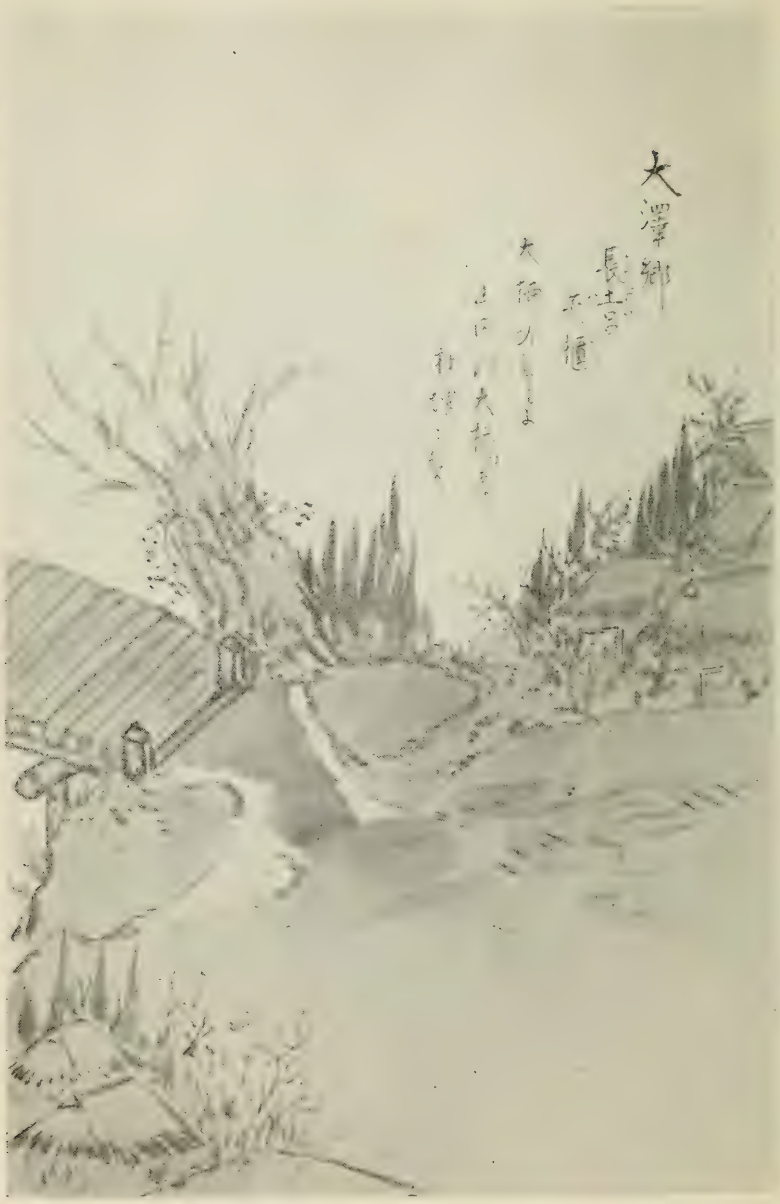
長土呂

不櫃

大澤小

大澤小

大澤小



山内郷古土湍邑

巨大橋あり

巨柱一間横

九尺水際

高二丈半

大湍、し極

深四九尺

金鉤科木

周四八尺

四木山

成五木村坂御

四木山をこき

ありけり

あふ冊あり

山寺、大観音堂

あり、小兒もあ

きすて大兒もあ

九盆、四つのせ

この山をこき

小湍、し極

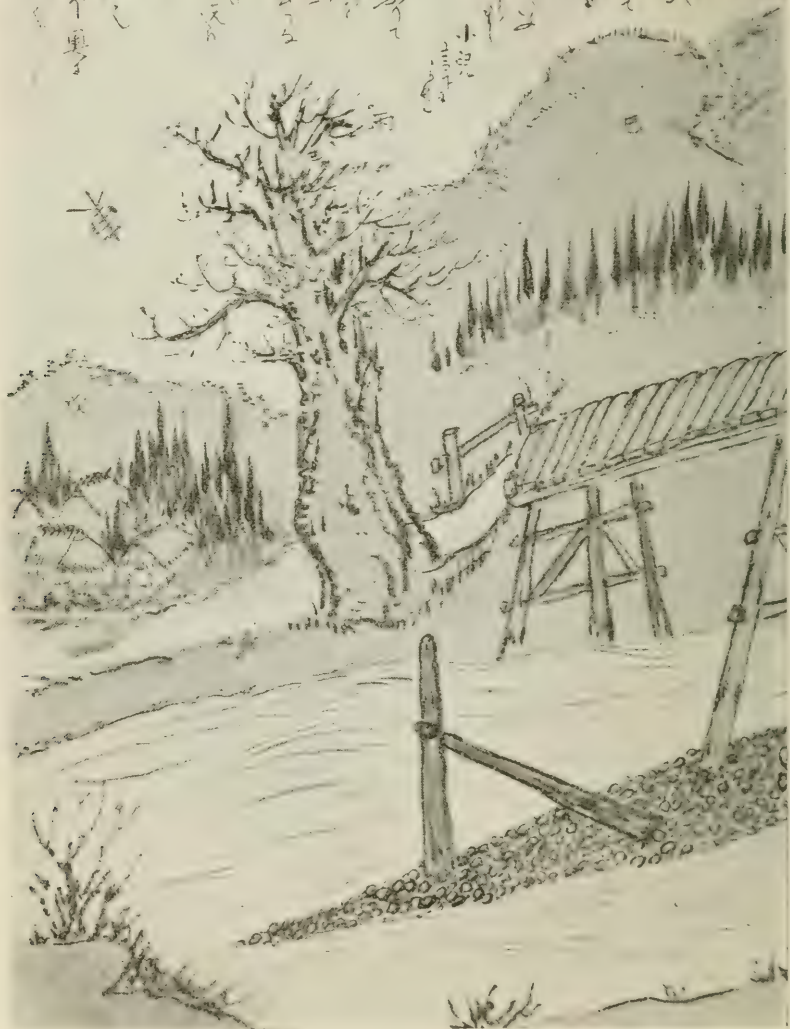
水もあふ

り、あり



世事如夢

雪出羽道(平鹿郡十四)





卷七

土淵郷

甲矢向峠

眺望

平野原郷

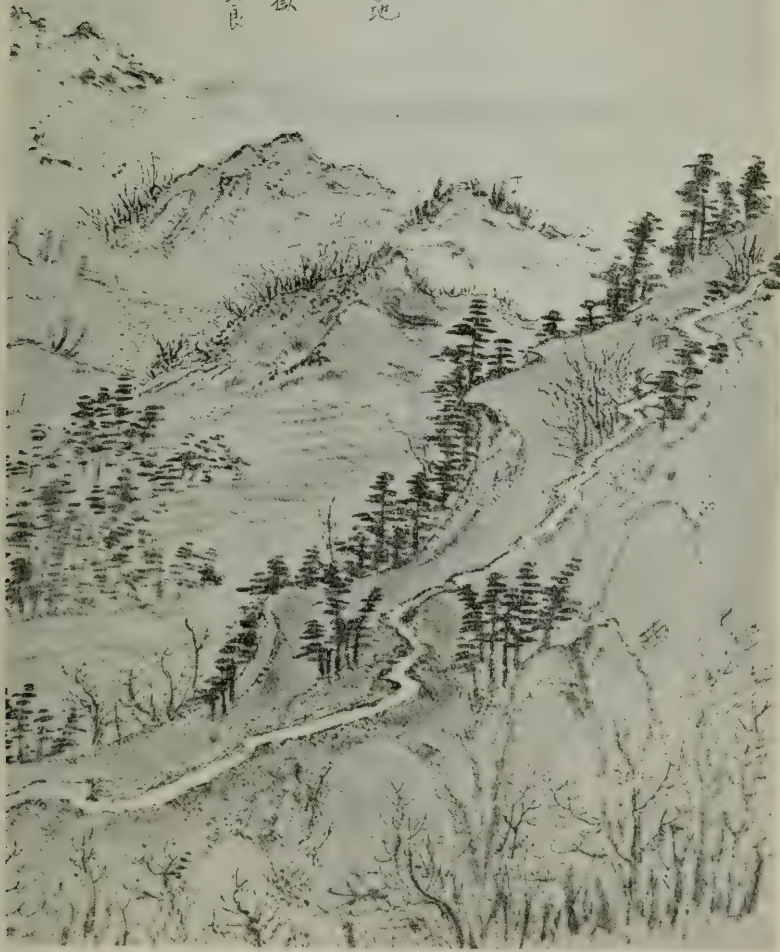
乙岩野目津

丙菅生谷地

丁藍瀬山

戊大日向嶽

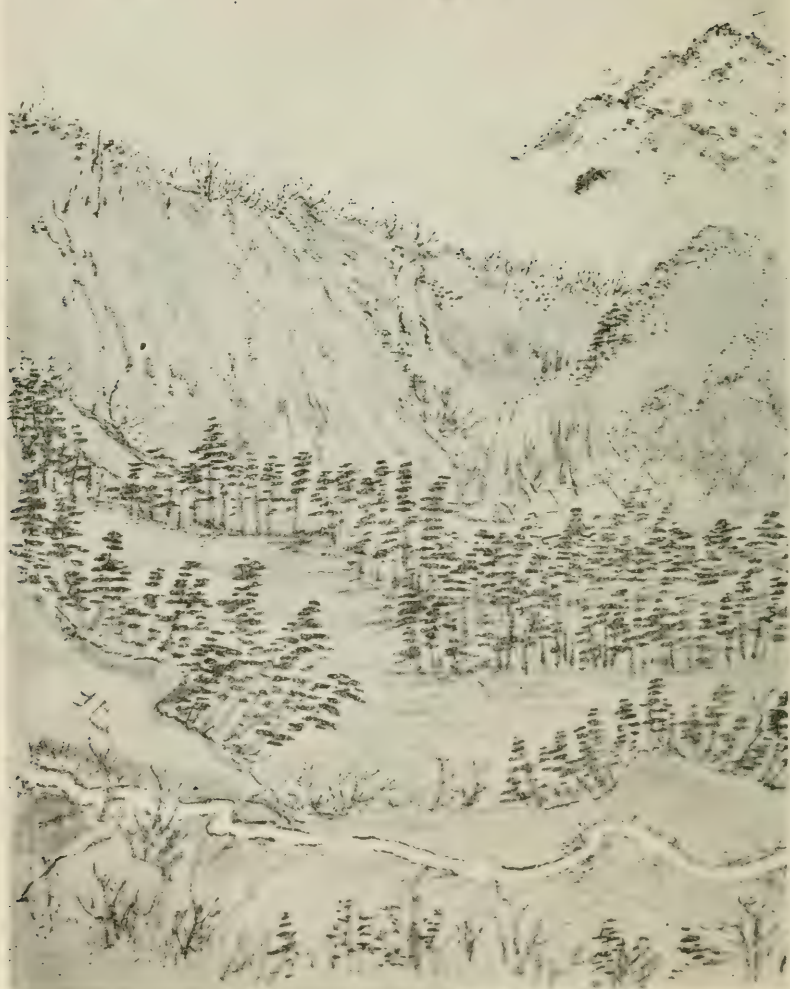
己五枝峠

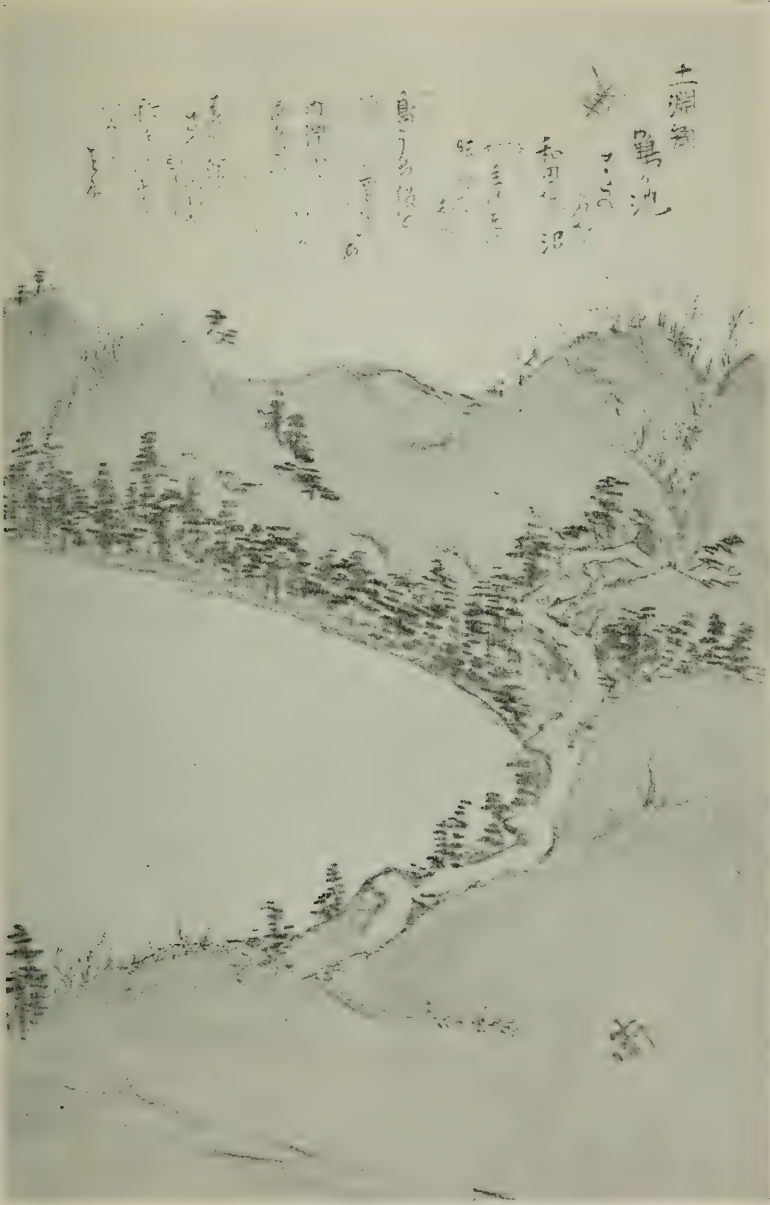


竹園祭時を  
考へて  
行々

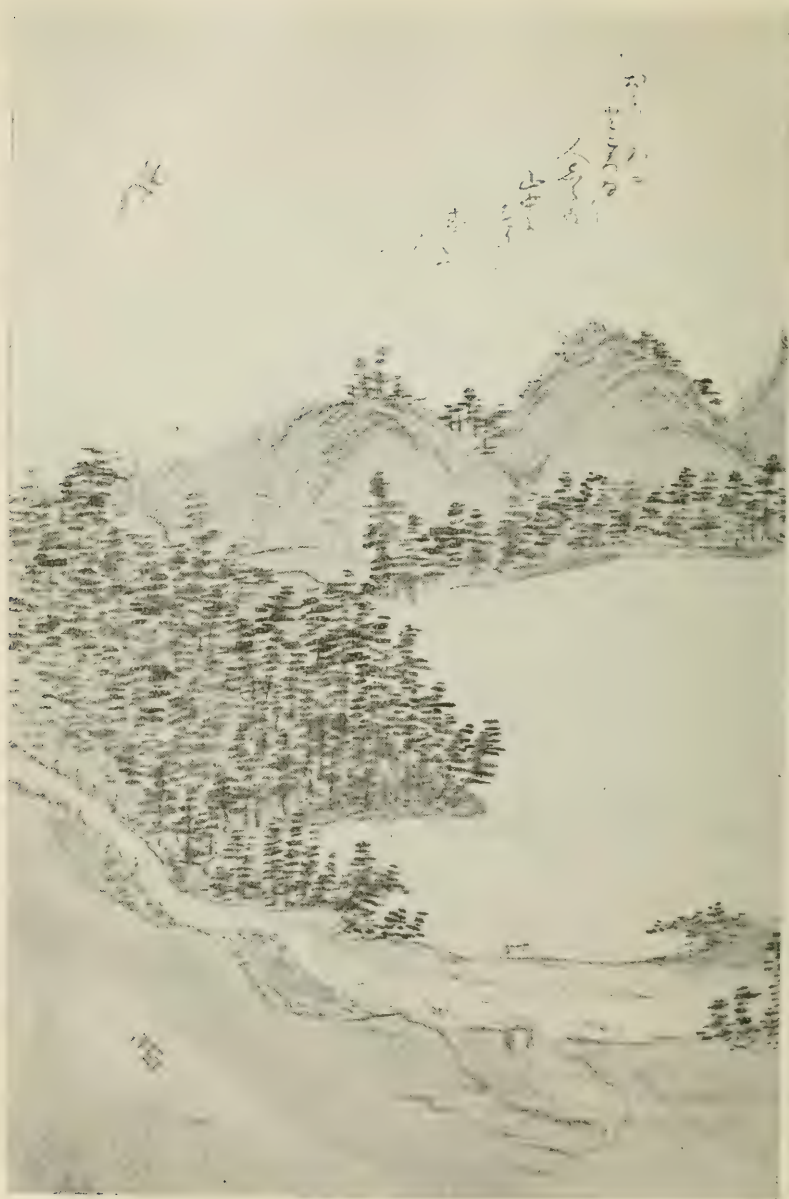
雪

雪出羽道(平鹿郡 十四)





雪出羽道(平鹿郡 十四)

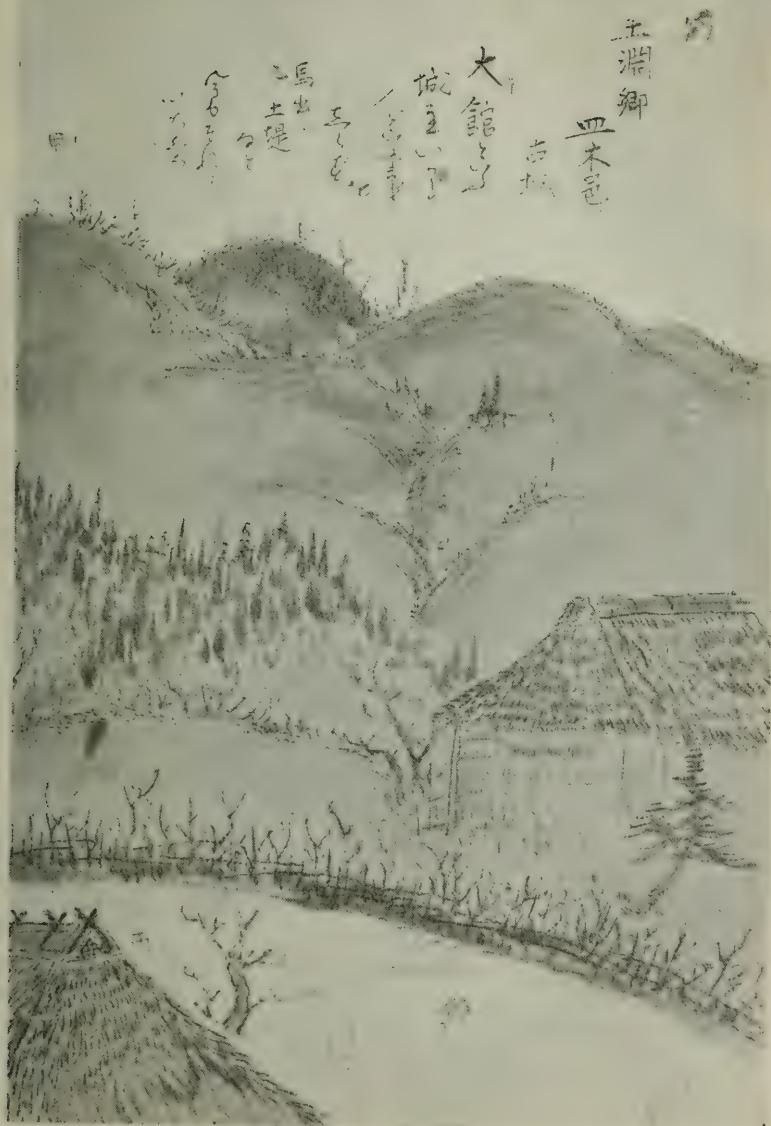






雪出羽道(平鹿郡十四)





此古松、四木也  
 古里正小田嶋  
 市兵衛忠全  
 雨龍寺  
 金一  
 後わろ  
 といふり  
 瑞山





小田嶋市面作爲の古宅  
庭の藤は根  
此木を寺に移天ミル  
云々云々  
古宅のつゞき  
あふりて  
村の名を地なり  
四もふ家作也  
人々云々  
ソア



あしくらやま

## ○平野澤郷 (二)

里正並

同

○平野澤、平野比良などはいづこにもく多かる名也。此平野澤に枝郷八箇村あり、八ヶ村並て一郷にして、みながら比良能澤とはいへる也。

## ○相野邑

家員 古十三軒  
今廿三戸

○山間の野良といへる事か、會の野、相の山もまたどころ／＼に聞えたり。北澤目川の流に板橋あり、土淵と平野澤との境をわかつてり。

## ○岩野目邑

家員 古十軒  
今モ十戸

○相野邑より岩野目邑に通ふ土橋あり、此流を岩野目川といへる也。

○田ノ神社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主郷中諸家。

此あたりの諸民は、某神にも山に座ぶ山ノ神ともはらとなふ、かならず大山祇の神のみを申すにあらず。また諏訪明神にまれ春日明神、稻荷明神、みな明神と唱へ奉るが多し。山に鎮座御神を山の神とまをし奉るも、いにしへさなるべし。

## ○檜澤邑

家員 古二十二軒  
今二十五戸

○檜澤は檜澤と誦べき事也、早魃また火災に聞えてくる禁ず。檜木も火の字聞ゆれど、檜木は火避の

義をもて良材の最上たり。秋田郡馬場野目澤の内に檜澤といふ村ありしが、聞きこ不祥ふしやうからぬとて水澤と改名、また大事おほいといふ邑ありしを事のみありとて大澤と改めしかば、さらに事なしといへり。此檜木澤の内に村あり○上三明岡三戸○下三明岡三戸○中嶋九戸。

○藍婆らひや神社 三明岡に在り、祭日(イ) 齋王與五右衛門。

藍婆は十羅刹ノ一神の名也、はくゑきやう陀羅尼品に委曲に見えたり。此神は八澤木ノ莊上溝ノ郷中野の内末野といふ處にもませり、その外も多し。陸奥の山、目に配志羽はしの神在あ梅森山も、らむばといへり。

○葦倉あしくら戸、あしくらも多かる名ながら、古名の齊座わしくの轉語ならむかと考合せたる處、雄勝郡ノ山内にもありき。此半鹿の足倉に、あしくら蓑とて名葉を産せり。

○山神ノ社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主勸兵衛。

○藥師如來ノ社 平野澤川、武道川落合ノ川上に座り。祭日四月八日、齋主治左衛門。

○正念寺 村寺

○此寺あるを以て此處を寺邑しや戸とといへり。綱取山正念寺は西派本願寺宗也、開基を釋了忍といふ。本ト此寺草庵の如たりしが、長祿元年九月十五日に本山より寺號たまはりて正念寺といふ。了忍南部の綱取てふ處より出しかば、その地名を以て山號とせり。開祖了忍、長享二年戊申四月十日遷化○二世辨祐

○三世了善○四世辨覺○五世辨教○六世了惠○七世辨道○八世了覺○九世善覺○十世辨成○十一世祐

善○十二世祖祐○十三世祖丹○十四世月觀○十五世辨應○十六世現住辨隨○僧名見えたり。

○何 盃 邑 家員古四軒  
今一戸

○某を斗たになしてか某盃たにてふ村名あるか、その義さだかならず。八澤木莊猿田村の枝郷には六盃といふ村あり、そは八位山の神供米を六盃を獻る式あるより云ひし事といへり。○小屋掛澤に戸あり、近ごなりの中野又邑に通ふ箴橋あり。

○中 野 又 邑 家員古三軒  
今二戸

○中野又邑の出口に、吉谷地よしやち邑に渡る武道川の流に箴橋かゝれり。臍淵へそといふあり、經麻淵をにやさだかならず。へそぶちより吉谷地村にいたる也。

○吉 谷 地 邑 家員古十一軒  
今二十戸

○吉谷地は本もとは葭谷地よしやちにてやあらむか。村口を雪車そりめ目といふ、山本、郡の二井田、枝郷に輦野目そりあり、同名なるべし。からむし峠といふ山也。村通路の箴橋あり。

○稻荷ノ社 祭日四月十日、齋主郷中諸家。

○狼 坂 邑 家員古四軒  
今三戸

○狼坂おむさかは吉谷地に踰る小坂をいへる坂の名也、狼坂、狼澤てふ名も多し。ふた仙臺には狼河原おむかわらとて葭の名産もありき。武道村に行かふ路に箴橋かゝりぬ。



○武 道 邑

家員古三十一軒  
今三十五戸

○村口に姨石うばとてゆゑよしある石ひとつあり、信濃の姨捨山にも姨石おば、姪石、小袋石とてあり、うば、おば、ところ／＼に方言いひたがへり。村に箴橋いひかゝりぬ。武道は本ト葡萄多かりし處の名ならむ、武道は假字なるべし。上溝に武道臺村あり、越後に武道峠あり、多かる名也。

○山神ノ社 祭日四月十一日、十二月十一日。齋主郷中諸民。

○御免靈方水蠟樹膏藥い は たあり、與吉といふものは是を煉制ねりて處々に售うる也。そぞ、是は山ノ神様の御夢想といふべきを與吉したゞみてゴミサウといへば、人みなわらへぞ能うれり。かの沙石集に、油桶そわかと唱へて咒ヒする姨ありしにひとし。

○郡邑記云ク、雄勝ノ郡湯野澤ト武道村ノ内小安澤ノ奥助九郎澤山ニテ境ヲ也云々と見えたり。考に、此武道村の源は東に中リていと高き嶽あり、そは大日向山おほひなたといふ黄金山也。むかし此山の竅しきより、一日に大判五枚の料なるあらかねを堀りえしとて、今ここに五枚山の名ぞ残りたる。

○ 人員六百五十三人 ○

北澤目川の板橋を中じり  
 上端の郷を平野の郷と  
 界を分ちて

雪出羽道(平鹿郡十四)



平野澤郷

四相野村

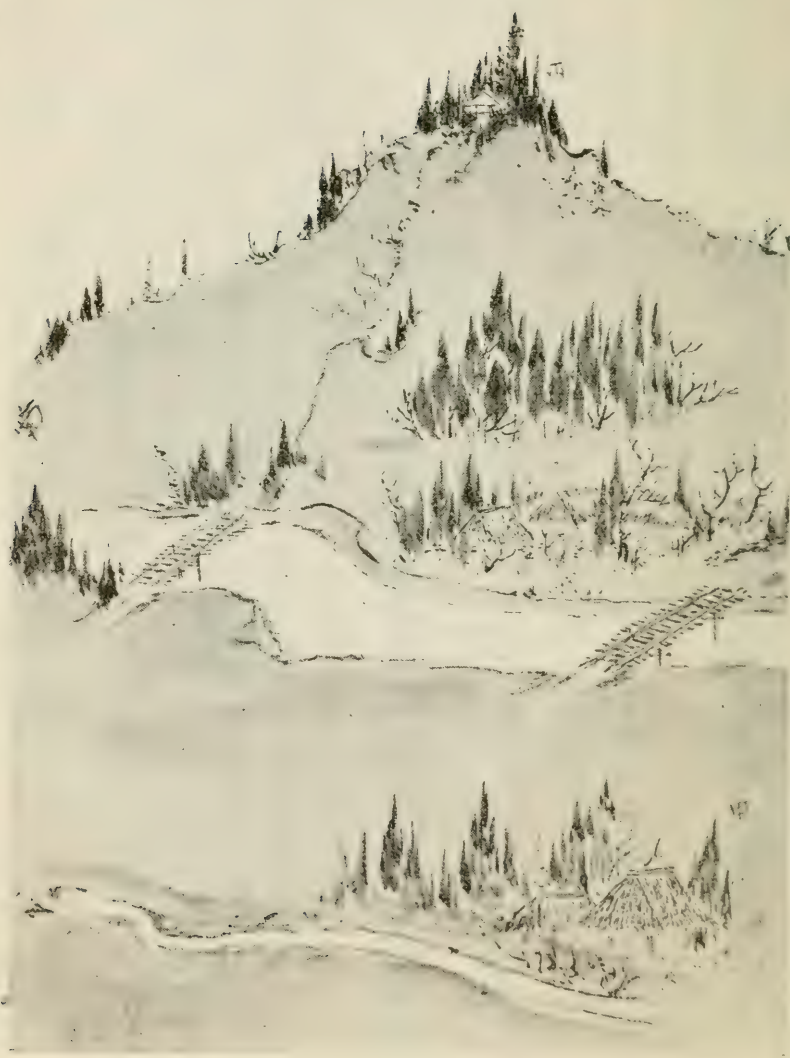
三田園村

北

藍邊神山高

藍邊は十羅刹の一神く  
そのより小野寺家の  
庭を田村の山より  
うつまつきとそ







柳 ば し

○筏 村 (三)

里 正 並 同

○筏は桴、舢、艫なども作<sup>み</sup>ケリ、萬葉集に、眞木のかみでをもつたらす五十太につくり云々と見えたり。仙北ノ郡<sup>こゝろ</sup>像村の枝郷に筏場邑あり。いつの世ならむか立澤目川に穴淵とていと大<sup>おほ</sup>やかなる淵ありて、此處に筏を組<sup>くみ</sup>てさしくだし、土を運びて水田を新墾<sup>ひん</sup>たるより筏村の名ありといへり。此筏は總名にして、外に九箇村の少郷<sup>こむら</sup>ぞありける。

○大 場 澤 邑

○大場澤を大畑と唱ふ人あり、立澤目川とて源は三ノ又より落來て西南に流したり。村に入るに柳橋といふ板橋を掛<sup>か</sup>たり、そは柳澤てふ處なれば橋の名に稱<sup>なづ</sup>ぶといへり。續紀に、經<sup>わ</sup>略鷺座、楯座、楯石ノ澤、大苔ノ屋、柳澤等五道云々と見えたり。此考とこゝろに記したりしが、此柳澤はうべしき地也。○平水權現とて本地には十一面菩薩の佛像を齋<sup>い</sup>り。此御神はもと、田井の水上大場澤山の界なる平水山に鎮座<sup>ちんざ</sup>ば、しか山の字を稱もて神號とはなれりといふ、そを恐<sup>かしこ</sup>も、なまさかしに字音に稱へ奉るなり。祭日四月八日、五月八日、十二月八日。齋主藤四郎。

○山下稻荷明神 此神社、平水山の麓に座<sup>ま</sup>ばしか神號をまをし奉る也。祭日齋主どもにおなじ。家員古十八軒、今十四戸。

○新<sup>あら</sup>所<sup>ところ</sup> 邑

○新處も多かる村名也、おなじ流に板橋かゝりて通ふ山里なり。

○山神、社 川向の水上澤といふ處にませり、齋主長吉。

此邑家貞古十二軒、今十四戸。

○伯耆澤 邑

○むかし伯耆某とかいふ人の住つる處にや、また其人の墾創めたる村にてしかいへるにや。南部の毛馬内には伯耆畑とて村あり。よき瀧ある處あり。

○阿羅羅仙人、社 近世は仙人權現とまをす、本社<sup>三間</sup>向東也。こは正中二<sup>乙丑</sup>年、山北三郡の領主小野

寺前伊豆守藤道宣公、草創也。そも、此仙人權現は陸奥國和賀郡の仙人峠に座し御神形を、後醍醐

天皇の御代に此平鹿郡梶邑に遷し奉るならむ。その仙人峠、近邊には不灰木石<sup>わた</sup>てふ品産て、いこゝさ

かしく麓にあら川流たり。そこに大輪、淵、小輪、淵とて兩灣あり、此大輪小輪までは鮭魚のほり來れど、

此上にはさらに<sup>のふりく</sup>浜洞事なし。そのゆゑは、むかし仙人權現<sup>かりにあらはれ</sup>給ひて賤しき童<sup>なり</sup>と化て漁人に、多かる鮭一

尾たうびてよ、親にまゐらせたしといへれば、孝子とにとらせよといへば、あら雄ども蔓を伐りてその童

に鮭を負せて、八重に蔓をくりかけ纏ひ身じろきもならざれば、童うちなきつゝかへりぬこなむ。され

ば神の御うらみにて、そのあたりへは鮭のおほにへ來ず、御贄にも獻らずといへり。其由來をもて此筏

にても鮭魚を村民禁て、飲食に用る事なし、ゆめくといへり。石階はるく三町ばかり升る坂中に二ノ神門ごりみあり、此鳥栖ごりみの西方みぎに稻荷明神もど社あり、古下居大明神と申す御社也。此石階の石材は南江山なんごうより切り運たる石也といふ。古縁起もありしが元祿のなから失たるよし、正徳四年に高橋仙ノ太夫のぶよし寅吉の記録に見えたり。祭日はとしごとに九月九日、同十九日、同廿九日、此三九日ぞ神事なる。

○下居大明神社三尺四面

祭日、本社と共に賑る也。十二月廿八日のあしたより潔齋あり、本社に夜籠りして正月五日まで、村民ども、しかとしごとにこの神事につかへまつる式あり。別當高橋太仲藤原清尙まさ。

○上祖仙ノ太夫某、延寶七年五月廿八日故○二代仙ノ太夫某、寶永二年二月廿四日○三代仙ノ太夫某、寶曆五年五月四日○文化十二年三月廿日火災あり、古記録焼亡して傳らず、四代目より三代の間累代實名知れず。○七代大隅守清行、寛政十年二月十一日○八代丹後正清房、文政八年五月廿八日○九代多門清成、同年六月四日○十代當司官高橋兵部清尙也。

# ○一野渡 邑

家員古十軒  
今六戸

○此一ノ渡といふ名どころく、に多かれど、二ノ渡といへる處はいとくまれ也。伊勢ノ國には三渡みわたといふ名處あり、そは海近くして、其小川の潮汐によつて渡瀬も定らず、一日に三たびかはるよりしかいへり。此一ノ渡りに寺あり。

# ○頓信寺 一向宗

○當知山頓信寺は本山東本願寺、中山仙北郡六江邑大悲山眞光寺。○開基淨誓、天正二年甲戌二月十日遷化○二世淨賢、承應二年癸巳正月二日化○文化八年三月十一日回祿にあひて重寶、過去牒亡て、三世より七八世歷代法名知れず。○十二世了賢、文化二年十一月九日化○當時十二世現住寛了也。

## ○大堤 邑

家員古八軒  
今十三戸

○大堤、小堤、某塘、某塘なご云ひ、堤といふ名多し、秋田城下、賊地十二村内にも堤といふ名有る事、三代實錄にも見えたり。

## ○三十番神ノ社

○末社春日大明神、本社、西ノ山に在り。祭日本末社並四月八日、九月八日。別當佐

藤伊預ノ太夫。そもノ此神社は大同三年の草創といへり。うべならむ神木のふたまた兩ノ大杉は、人尺の中に斗とは周回八尋に餘れり、雄勝ノ郡ノ常法寺ノ古杉、同郡役内ノたけ嵩下ノ古杉にもをさノ劣るまじきか。

常法寺の杉は切口にいたなちくめ蕤八枚をしき、嵩の下の杉は伐口の中廣處は一丈五尺亘しを、此兩本は千五六百年に及しと雲文ノ重りをかぞへてそれと知りて、あたらし古木を空く伐りたふしける事かなと、老人のよと哭たりしといへり。その二本の杉伐りし者には祟をうけしといひ傳ふ。此三十番神の齋杉もいくばくの年を歴たらむものか、小田嶋忠朝が元和八年ノ夏四月に書記し三十番神の縁起に、當國の郡代小野寺景道朝臣、天正三年の夏深山獵して日暮レ幽谷に道をふみ迷ひ、いこくらきにしるべなく人々うちつごひに、すべなう景道東ノ方にむかひ咒文を唱へて空をふりあふぎ給ふに、三十の龍燈ぐだり



て晝の明さにもいやまさりて、やをら道を得てわが城に皈り、かくて後に善つくし美つくして一字を建立し、龍燈三十降の神靈を三十番神と號奉りて今<sup>マ</sup>座<sup>マ</sup>御神是也。そは天正四年四月朔日ぞ始なる、云々と見えたり。しかまちゝにいへれど、此二跨の杉は天正三四年のものならず、大同のいにしへ卅番神を齋奉りし社にねきこととして、龍灯のしるしを得たるにや、また天正のとしの草創にや。天正のはじめと云はゞまた此山に地主の御神やおはしけむ、かしこき事からこれをおもふに、その地主ノ神は春日ノ御神な<sup>ン</sup>ごにて今は末社となりおましませるものか。なほしらまほしきこと也。○南江が嶽は此三十番神ノ山ごうちむかひて祭日九月の三九日、こなたの卅番神にひとし。その峯は芳野になすらへて藏王權現をまつる、別當佐藤伊預ノ太夫也。○司官佐藤氏代々伊預ノ太夫にて歷世さだかならず、その祖は伊預のくにうごならむといへり。つばらかに知れるは當時五代伊預ノ太夫常正也。

○正一位田中ノ森稻荷大明神

祭日(マ)

齋主助右衛門。三森山の麓田中ノ杜リにませり、ゆゑよし

あるみやしろ也。蘿園文集

大友吉言家藏也

云ク、稻荷大明神社記、出羽國平鹿郡横手山内之内筏村鎮座稻荷大明

神。社地は三森のふもと田面の中なる小森にして、四至<sup>よものさかひ</sup>堺内は田を限りて木立茂れる森の内に、ごしふりたる白狐の住るは此社宇志播玖神の御使者にして、山城ノ國藤ノ森よりうつり來しなりといふ。つねに形をあらはすことなけれど、社守のもの一世の間に一<sup>ト</sup>度<sup>ビ</sup>は、かならず形を現はして見えけるとなり。また社に供<sup>そなへ</sup>たるくさ<sup>ハ</sup>ノ物など一ツもごる事なしといふ。凡て此邊<sup>リ</sup>の田地の字をば稻荷と云ふは、

いにしへ御戸代田にてありしゆゑなりと、それに次て鷹林といふ字のあるは、天正のころ横手の城主鷹狩の節、白狐の奇瑞ありしより名におへると云ひ傳へたるなり。○此御社の由緒は、いづれの御世何奈る人の齋き祭り始けるにかありけむ、石上ふりにし世の事は、濱千鳥の跡憶に傳へたる事しなければ委曲に知べきにあらねど、里俗の云ひ繼語り繼たるには、山城國藤森に齋奉る神靈を此三森の南の森なる峯に移祭りて、宮柱太敷立鎮いましけるを、刈薦の亂れたり一世間にいたく衰廢て、社の跡もなく絶果てをさし知人もなくて過來しが、天正五年四月十一日、横手の城主小野寺遠江守義道朝臣役郷に鷹狩し給ふに、自ら御手にする鷹の不意く手放れて、雲隱飛び翔りて招寄術なければ、義道朝臣、我こそ鷹をもらせしと、もの云ひさがなき山賤のころしく云ひなさむ事もはしたなければ、あしびきのをてもこのもに烏羅張、守部をすゑてなりとも捕獲てむものをと、いみじく怒れる御勢ひにて宜ひけるを、とかくするうちに漸々入方になり行々夕日のはなやかにさしければ、木立も繁にさへて小闇こちする山際も顯になりたるに、免つる鷹は三森の南の森なる小楢の梢にぞとまりける。かくて、かやすくをちかへりぬる悦びはも、たゞなほやあるべきと云ひけるに、甚もの舊たる白狐の森の木蔭に蹲踞て鷹の方をぞ守ける。さて、もらせし鷹の、かやすくをちかへりしは此白狐の幸ひ給へるならむと云へば、其狐ははかなく消え失にけり。然に三森山の景體は山城の藤森に似合てなもありければ、深き由緒もありやと里俗に尋問せ給ふに、八十餘歳の翁の云るには、むかし天智天皇の大御世に、山城

國藤ノ森に鎮坐神靈を此三森に移祭りたりと云へり。其時供奉せし白狐なりとて住るは、白鳳二年とか云ふに優婆塞役ノ小角、南郷の嶽の嶮岨荒山中を開きし時も、先驅せしなりと語り傳へたるなりと云ふ。義道朝臣聞し食驚かせ賜ひて、小縁の事にあらず、かゝる靈異なる御社の跡絶ぬること甚も畏れれて、御舍奉仕べき事を何くれと事量りして飯らせたまひける。其夜の曉に高橋兵部といふ者の夢に、甚高貴人の枕の許にたゞすみ寄りて、我は昨日形を現はせる白狐なり、稻荷の御舍を修造て齋祭らむには我もまた殿の行末榮座む事常磐堅磐に幸ふべし。然るに三森の景體は藤ノ森に障る事あれば、社をば田中の森に建べしと云ひ畢て夢覺めけるに、夜はほの／＼と明にければ、急ぎ横手に往きて夢の諭ありし事を申けるに、義道朝臣、神の恵の思かならざりし事喜び奉りうれしみ奉りて、其としの九月九日に自田中の森に發向せ給ひて廢したる神所を起し、美頭御舍稱辭竟奉らして崇給ひ齋き給ふ事なのみならず、かくて御戸代田當高十石を寄附られて絶にし神事をも繼てしかば、祭日も九月九日を生日の足日と齋定て毎年の祭典も怠惰なかりしを、慶安の御竿に御戸代田なりし所も公田となれば、正徳の神社堺内の御調にも洩れて、さばかりの舊き社の名残りも自然消失なむ事をなも、此社の事執る高橋兵部が後胤今うたつの助右衛門がいごも／＼慷慨思ひて、いかで言繼語り繼し古事を書留て、溢れず失ず、いや遠永に後の世にも傳へむ事をなもこひねぐ心の眞實なれば、えしも默止がたくて、渠が家に傳へし古事のまに／＼記しつ。文化十四年夏五月十七日、大友對馬藤原吉言と見えたり。

○ 穴 淵 邑

家員古一戸

○河邊ノ郡岩見山内ノ枝郷にも穴淵邑あり。むかし此立澤目川の流に穴淵とて大なる淵ありて、その淵に木を伐り筏を組み、土をもて運び水田を墾きたるよし、さる由緒にて自然筏てふ村の名に負り。さうければ此穴淵ぞ筏村の創なる。むかしは七之助とて一戸ありしといふ、今もまた五郎右衛門とて家一戸あり。

○ 大 穴 邑

家員古七軒  
今

○同流に箴橋あり。此邑の西南に中りて、瀧の澤山とて高サ二丈あまりの瀧南に向ひて落つ、見るべき處也。また古館の蹟あり、古寺の跡あり、由來をしらず。

○伊藤稻荷大明神

齋主與右衛門。

此與右衛門が上祖は下野ノ國人にて伊藤ノ三郎宣道と云ひし武士

也。そのむかし下野ノ國大倉山にて猪鹿獵しのとき、あまたの獸追ひやられ逃迷ふ中に、こしふる白狐三郎宣道を目がけて走せ寄り、せくごまり身を縮めて居たり。宣道、窮鳥懷に入るおもひをなしその狐をいだき家に販り、おのが栖む後の山にはなちぬ。此曉の夢に髪白き翁の枕上に立て、われはきのふあやうかりし命を君に助られさふらひて、うれしとも嬉し。そもく吾はもと吉野山に在りしが此國に來て、こしは八百四歳になりぬ。かくて此酬ひには君にしたがひ奉りて、君が行末を守らむとかならふほごに夢おごろきぬ。こは義宗、義治なごの末流にや、新田家其臣として文永五年より陸奥和賀ノ郡



にとしを経て、新田氏出羽ノ國平鹿郡大谷村にいたり、薙髮して一向宗門の寺を建てそが開祖たり、今の光徳寺是也。伊藤宣道が末胤も土民となりて天正五年ノ八月五日同郡山内ノ筏邑に來て、おのが家居の後なる山の、古木いや茂りたる中に稻荷ノ社を建て、かの八百餘歳の白狐の神靈を齋きまつる。そこに、いと／＼大<sup>キ</sup>やかなる檜の一樹生ひたる下に洞のありけるを、人ごとに大穴とよびしが自然<sup>いしし</sup>村名とはなりつるよしをいへり。おのが家も主人の命によて一向宗派の流を汲て、としこ住つれば、わが祖の齋し白狐の社はうちあはれはてて、あまたにそれと知る人もなければ、こたびさ／＼やかなる神祠にてもいとなみ建て上祖のこゝろざしをつがまく欲すといへり。

○熊野ノ社

瀧澤山の瀧の上に座り、祭日

四月十九日  
九月十九日 齋主平右衛門。

○植田野邑

家員古五軒  
今六戸

○植田村あり、こゝを植田野といふ、うゑ田は氏にも村にも多くある名也。

○菅神ノ社

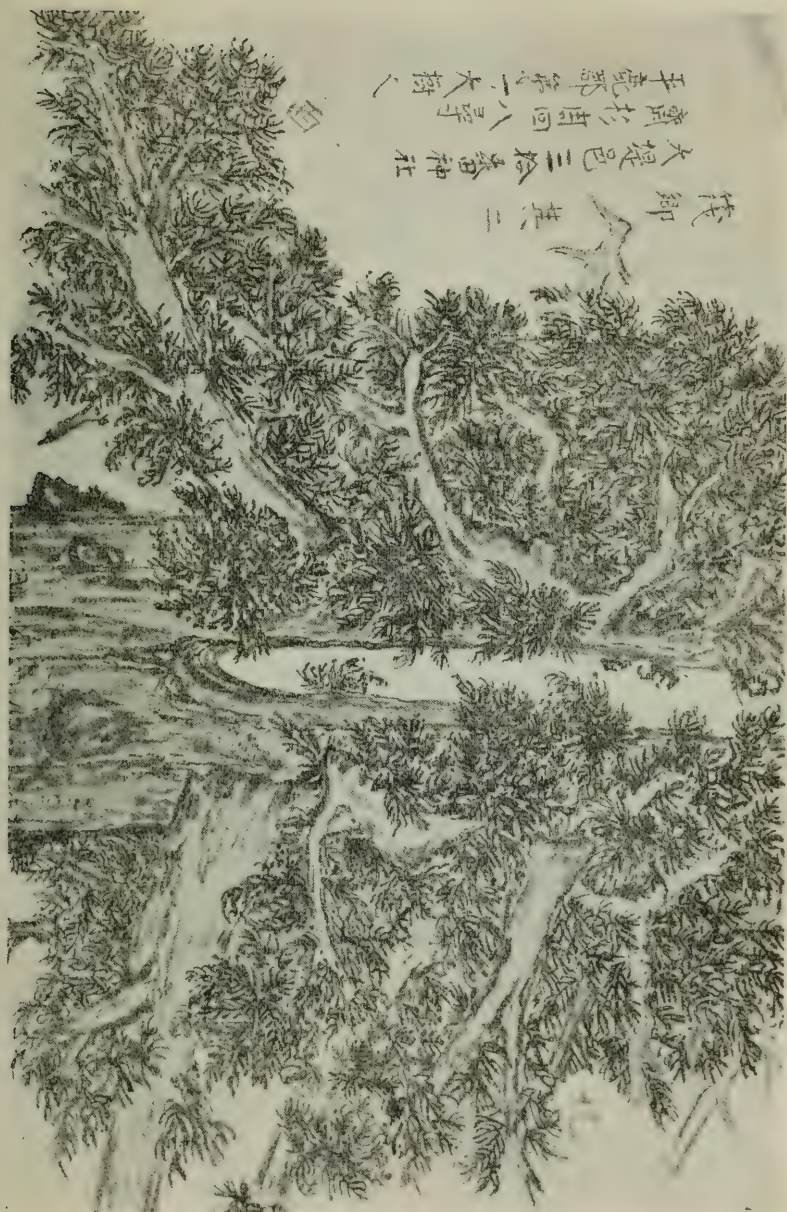
川のあなたの山岨に座り、祭日

(ヤ)

齋主善十郎。此植田野に對馬某とて浮浪人ありて其男子に善藏といふ小童ありしが、人々にまじりて手習ふにいつもこ童に劣りぬれば、清書のた

びに童心に恥て、善藏十四歳になりし春正月廿五日の旦、菅神の画像に神酒する奉りて神像にむかひ、われいつも清書つたなうして、親もさで世にたゝぬものとしおぼしさふらはむ。我、つとめても／＼筆跡つたなし。筆は心にも力にも及ぬ事と、なみだながし、あはれ、われ、人並にもの書<sup>キ</sup>、ものまなびの道

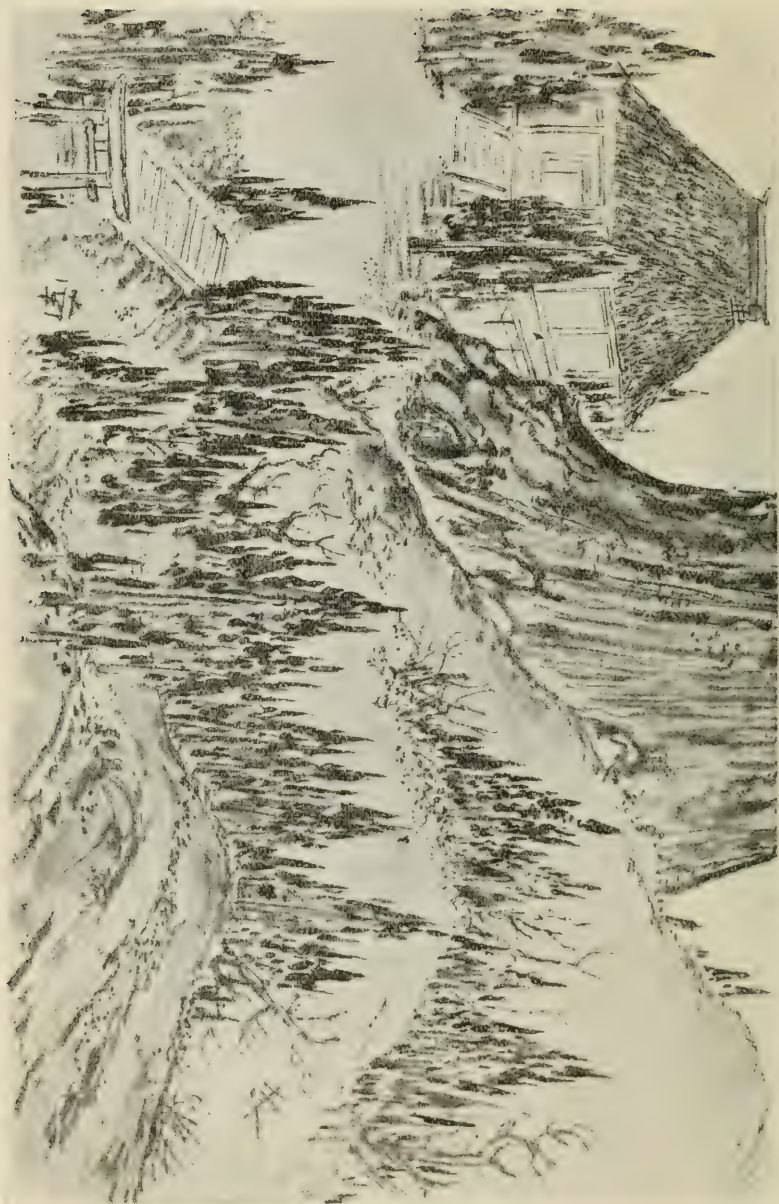




大埴邑三輪番神社  
齊河村同八尋  
千虎野第一大樹之

伐卸 其二







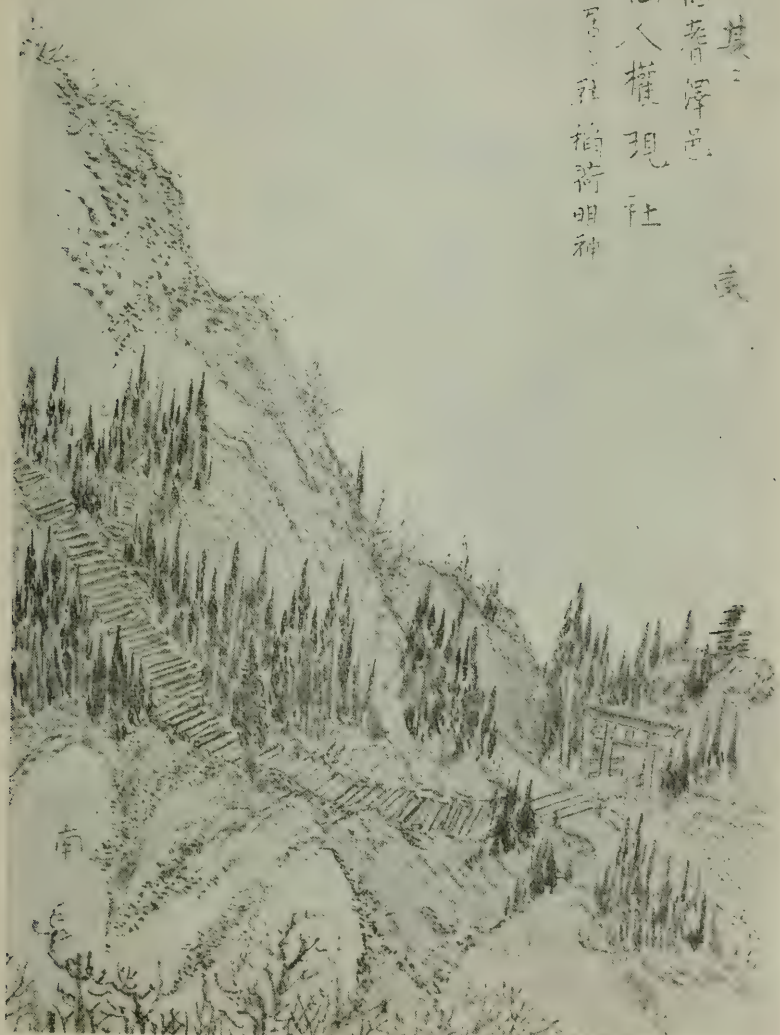
錢鄉其二

伯耆澤邑

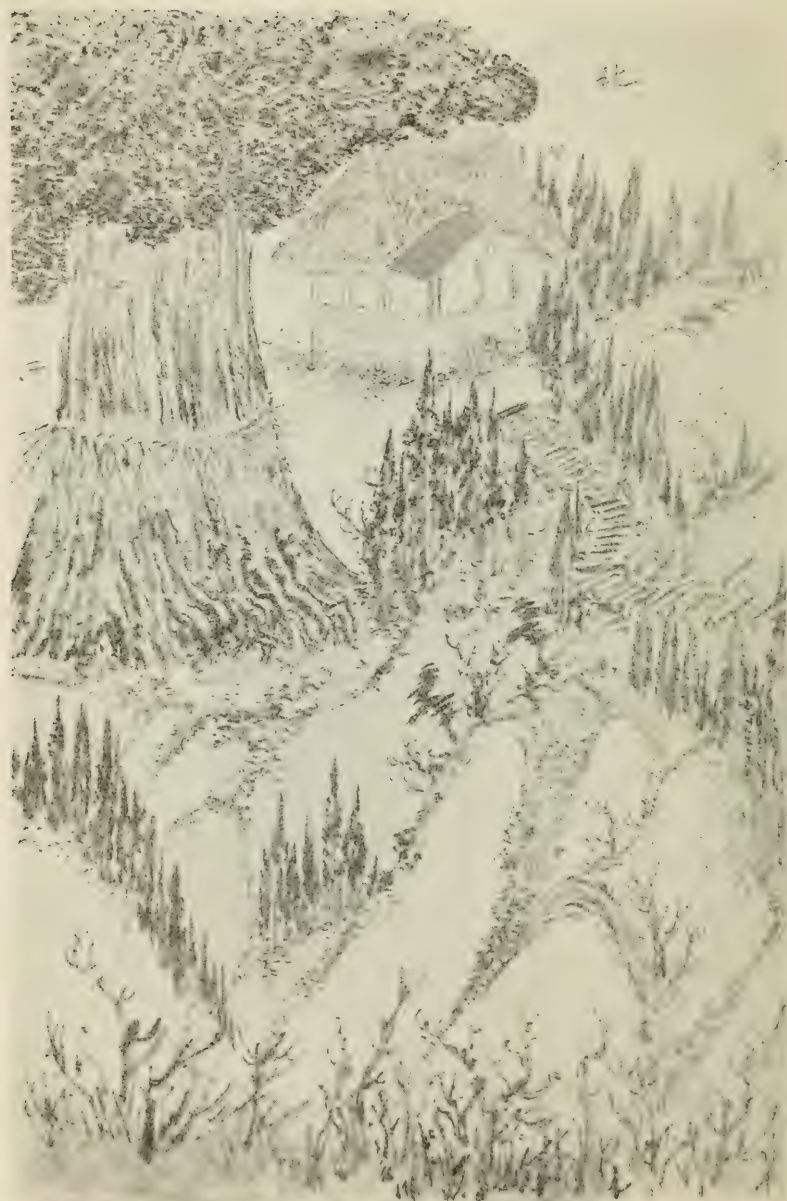
仙人權現社

下宮 社 柏荷明神

庚



雪出羽道(平鹿郡十四)



秋

後郷其四

澤田邑

熊野社

南郷嶽 南江村北岸

山風二重 神樂太鼓所

開創の地といふ

後郷より、聖の宮に

十重社 向來 藤三権現

藤座林鹿邑と

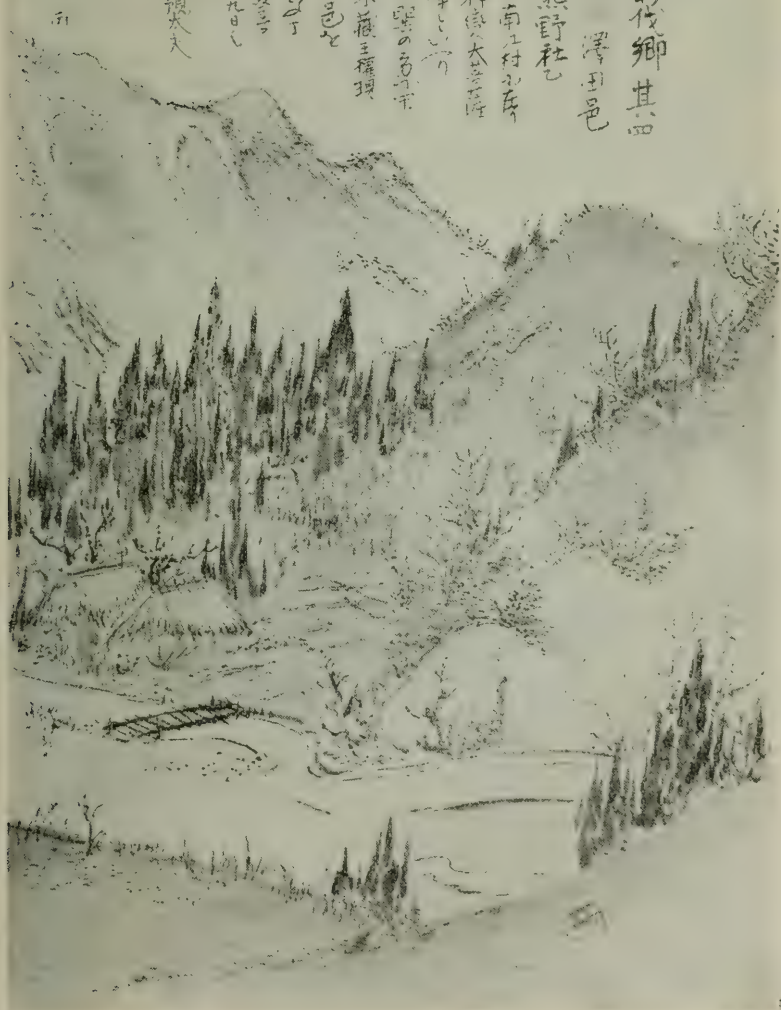
旗南郷といふ

州山脚より云々

冬月九月三九日

司馬代三三

仇時伯頭大



東





に入らせ給へどぬかづきてねざことし、われ二十歳にも成りさふらはゞ神祠を建て御神を齋奉らむと、それより山田のひたに明くれいのり奉るに、ある夜の夢に一ノ字を書きて見よとあれば、夢のうちながら、あなうれしと見つゝ墨すり筆されば菅神あらはれ給ひて、をしへのまに／＼書きたりと見て夢覺ぬ。やをら起出て手あらひ神像に禮拜ぬかづき、夢のみさこしのごとく一ノ字書試るにおのが筆意ならす。をさな心に、あなうれし、神のみさこしならむと日々にいのり手習ふほごに、いつとなく能書の名をえて、廿歳の春のころ菅大臣ノ神社を建しといふ。此照井對馬は土淵の根子なる照井小筑前、また云雅樂ノ介が家より出しと語れど、小筑前の方にはゆめ／＼さる證はあらじかし。仙北ノ郡の安本村の照井治部之介の家は、小筑前の家よりの分流たるまさしき證はありといへり。

## ○澤田邑

家員古七軒

○南澤田山の麓に家居、川を隔てかなたこなたに在り、南江が嶽の麓幡南郷といふ邑にもいと近し。此あたりの人澤田を澤田さだとよぶ也。

山のはたなこ

○南郷邑(四)

里正並

同

○南郷、南江とも作り、美濃ノ國に南宮ノ嶽あり、陸奥國に鳴咋なぐひ嶺あり、みな似たる名ともなり。此南江の

嶽はいと高<sup>キ</sup>大嶽にして、吉野山を慕<sup>シテ</sup>て藏王權現鎮座。金峯山<sup>こんぷせうざん</sup>になすらふれば白鳳の草創といへれど、  
後の三十番神ノ社よりは開闢<sup>ひらけ</sup>たる事後なるべし。さうりけれど大和の芳野の創めを以て、人みな白鳳年中  
ひらけし御山なりともはらいへり。

○大<sup>おほ</sup>平<sup>ひら</sup>邑

家員<sup>古十六軒  
今十五戸</sup>

○太平<sup>おほひら  
おほだか</sup>、多かる名也。此邑の甘池と云ふ處に一戸あり、甘池は本<sup>ト</sup>雨池にして是もところ／＼に聞  
えし字也。甘池に行に筏橋あり、下南郷に行に板橋あり。

○下<sup>しも</sup>南江邑

家員<sup>古十二軒  
今十二戸</sup>

○下南江より筏橋を渡りて中嶋邑に通ふみちあり。

○中嶋邑

家員<sup>古五軒  
今二戸</sup>

○中嶋邑より三<sup>ツ</sup>屋村に行に平地にして、いと近く路つゞきたり。

○杉邑

家員<sup>古八軒  
今十一戸</sup>

○杉邑より雄勝川邑に行也、是<sup>ニ</sup>平坦にして小流一筋あり。

○觀世音ノ社 祭日四月十七日、十二月十七日。齋主五右衛門。

○雄勝川邑

家員<sup>古十軒  
今九戸</sup>

○此雄勝川といふ處、山川の字處にところ／＼に聞え、また雄勝田といふ村仙北ノ郡、秋田ノ郡にもあり。

雄勝ノ郡も古は雄勝ノ村にて、男勝、少勝、小勝などとも作れり。雄勝は郡考へ雄勝ノ宮の處に委曲に記したり。

○旗南江邑

家員古十一軒  
今七戸

○ふたゝび中嶋邑にくだりて、また浜さへつりて此畑南郷邑に入るなり。

○黄金峯藏王權現

南郷ヶ嶽に座り、祭日四月八日、九月八日。こは椗邑の三十番神の奥院にして卅

番神祭禮同日、別當佐藤伊預太夫也。此幡南郷邑より登る神階あり。

此邑に寒澤さむといふ處あり、石材を産て、よろづのものに作也。石品堅實からうすにて雲碓すびつ、石櫃、石階に良材也。

○鹽匙邑

家員古二軒  
今八戸

○是本鹽匙しほしやくしより出たる名也。世に栗としやくして、實なし栗以てしほがひを作のむり朝茶飲あさぢこき鹽しほをすくふ、此あたりの方言に是シヨツカヒコといふ。實なし栗は蛤かひにも似たり。また匙かひは飯匙はんぢなどとも云ひて雅言也。此村に高九尺斗、廣四尺斗の石柱に庚申さゝりたり、もとも自然石にして珍らしき卒都婆也。

○丸志太邑

家員古十軒  
今二戸

○丸志太はいかなる字なにや、丸莖まるしだ齒はは好事家、茶人のもてあそべり、さうけれど寒國には裡白草うしろくさなし、そは丸級まるしなを訛しなれるならむ。級の木あづきばに小豆葉、椿葉あり、小豆葉を丸級しなといふ。こゝに級またといへど雄勝郡

にて級くわいも科しなもいへり。品池しんちといふ處あり、科池しなちをしか作れり。山城の山科、信濃の埴級、更級さらきとぞ。級くわいてふ村名多きは、本もと坂をいへる古語とぞ。

○粕かす子こ瀬せ 邑 家員古今並二戸

○九志太邑より箴橋しんきょうをわたりて此邑に入り、粕子瀬かすこせよりたゞちに三野又村にうつる也。

○南郷邑に橋數、板橋一、箴橋六、合七喬あり。

○家員（こゝ） ○人員四百六十人 ○

弓 投 嵩

○三 又 村 （五）

里正 並 同

○三野又、享保の頃か三又と改られしが、云ひ馴し事とて三ツ又と呼ふたまたぶ也、二跨みつまた、三岐、世に多かる名也。此邑の東南に桂溪さば、またおなし中なかつにも兜森たふきといふ嵩あり、その溪水を兜澤たふきといふ。東北の方に中あたて松澤あり、此松澤は母溪むきにして兜杜たふきはそが中なか也。此三ツの山河ひとつに落會おちあひ、その水曲まがなれは三ツの派またの名流ながたる村にこそあなれ。四ヶ村の枝郷あり、三ツ又は總郷名也。兜森に近うつららぎて弓投ゆみ森といふ高嶽あり、兜森、弓投ゆみ森は似にかはしき名也。兜森は兜の形せし高岳也、弓投ゆみはいかなる武士の



何ゆゑ弓や投<sup>ア</sup>たりけむ、兜森、兜山、兜岩など多<sup>キ</sup>名也。考おもふに弓投<sup>ア</sup>森は弓薙森にやあらむ、そのよしは後三年の軍の時、源義家朝臣みちのくのかたよりいではに至り給ふに、あないの武士さきばらひして、眉<sup>まゆ</sup>尖<sup>な</sup>刀<sup>た</sup>を持て本草を打靡かせきりはらひ、また弓を以て本草をおしわけ、あるは横<sup>た</sup>刀<sup>ち</sup>をぬいて御前をはらひ、右手に太刀、弓手には弓にて薙はらひしを大將見給ひて、あないさまし、今より姓草薙ごすべし。そは長<sup>くさな</sup>刀<sup>さ</sup>氏<sup>し</sup>、薙<sup>くさな</sup>氏<sup>し</sup>にて、今仙北<sup>せんぺく</sup>郡<sup>ぐん</sup>の率<sup>さう</sup>田<sup>でん</sup>の小太郎が祖は眉<sup>まゆ</sup>尖<sup>な</sup>刀<sup>た</sup>して草薙<sup>くさな</sup>しかば長<sup>くさな</sup>刀<sup>さ</sup>ご書<sup>キ</sup>、また同郡白岩に在る利右衛門が祖は弓と刀にてくさなぎ路ひらきしにて、此草薙<sup>くさな</sup>は薙<sup>くさな</sup>といふ字を君作りもて給はる、今は草薙<sup>くさな</sup>なごも書<sup>ケ</sup>り。なきば三合の文字にて擽てふ字の形すれど、弓<sup>ト</sup>前<sup>ト</sup>刀<sup>ト</sup>を一<sup>ト</sup>文字によめり。此語あるによく似たり。

## ○二

## 瀬 邑

家員<sup>古六軒  
今三戸</sup>

○土淵邑には二瀬<sup>にぜ</sup>と唱へ此處には二瀬<sup>ふたぜ</sup>と呼ぶ也、箴橋かゝりぬ。東北の方に貝澤あり、此貝澤邑に行<sup>ク</sup>に箴橋三ツを渡る。

## ○貝 澤 邑

家員<sup>古七軒  
今十四戸</sup>

○貝澤、雄勝郡に同名、村あり、また多かる字也。古本六郡觀音三十三所順禮記云、地福長者、實父者光賴真人男、大鳥賴遠四男也、其子保昌<sup>やすまさ</sup>、實父者貝澤三郎武道次男也、出家而號<sup>はつしやう</sup>保昌房<sup>ほう</sup>、諸國修行、紀州熊野那智山參籠、依觀音利生、卅三所巡禮觀音、大佛師定朝爲<sup>レ</sup>造、阿闍梨敎圓開眼供養而本國飯、云々

と見えたり。其、貝澤三郎武道は此地にや居館<sup>すみ</sup>たらむか。保昌坊が住つる處は、大松川の奥なる福萬山に在りて、字を保昌<sup>さき</sup>寺とて山阜なりしが今は田とひらけたる。此事は福萬邑の條に委曲に記したる也。享保郡邑記に、慶長九年<sup>ニ</sup>本<sup>ム</sup>田と申處より仁右衛門と申者初<sup>ニ</sup>移<sup>ル</sup>云々と見えたり。此あたりはみながら、いにしへは人住し處ならむとおもはれたり。獨木<sup>ひさつ</sup>橋ありて通ふ村也。

○稻荷明神社 祭日四月十日、十二月十日、齋主茂左衛門。

開 邑

家員<sup>古三十三軒  
今四十五戸</sup>

○郡邑記<sup>ニ</sup>家卅三軒、寛永年中和泉、申者南鄉村<sup>ニ</sup>移<sup>リ</sup>、須田美濃守、忠進<sup>シ</sup>開<sup>ル</sup>至<sup>ル</sup>付開<sup>キ</sup>村<sup>ト</sup>云、と見えたり。開村を下<sup>ク</sup>邑ともいへり、下<sup>ク</sup>邑十五戸、また大野邑<sup>廿四戸</sup>堤邑<sup>六戸</sup>小村多く、箴橋前後にふた橋かゝりぬ。

○山神ノ社 祭日四月十二日、十二月十二日、齋主太治兵衛。

○本<sup>ホ</sup>田<sup>デ</sup>邑

家員<sup>古廿三軒  
今十二戸</sup>

○郡邑記<sup>ニ</sup>云、雄勝郡岩井川村ノ内馬場<sup>ト</sup>申處<sup>ヨリ</sup>、尾張<sup>ト</sup>云者引越<sup>シ</sup>夫<sup>ノ</sup>本田村<sup>ト</sup>云。雄勝郡岩井川村ノ内上野村ノ山<sup>ニ</sup>境、但<sup>シ</sup>冷水澤、甲澤<sup>マナ</sup>峯限<sup>リ</sup>、と見えたり。箴橋かゝりぬ。

○惣家員<sup>(マ、)</sup>

○人員四百十二人 ○

いしこ澤

○黑澤村(六)

里正並同

○此黑澤邑の事、享保郡邑記とはいさゝかここにぞ見えたる也。

○上黒澤邑 家員古今並十八戸

○上黒澤の石子澤てふ處に箴橋ありて往復せり。郡邑記、北、方南部領湯田、内營生村、山<sup>ニテ</sup>境<sup>ツ</sup>と見えたり。

○熊野、社 村の東南に座り、祭日四月十五日、十二月十五日。齋主長左衛門。

○中黒澤邑 家員今二十二戸

○田代澤、天狗森は中黒澤の字處なり。○田代澤村、郡邑記家員六軒、東、方南部領湯田邑、内營生村、山<sup>ニテ</sup>境<sup>ツ</sup>と見ゆ。○天狗森村、同一軒とあり。○天狗森今三戸○田代澤今七戸あり。

○觀世音、社 祭日四月十七日、十二月十七日。齋主長左衛門。

○下黒澤邑 家員<sup>古廿五軒</sup><sub>今廿二戸</sub>

○郡邑記<sup>ニテ</sup>下黒澤村、東、方南部領和賀郡湯田村、内營生村、御領水境山<sup>ニテ</sup>境<sup>ツ</sup>と見えたり。南江村に越るに杉木の角<sup>つまて</sup>をしきわたしたる橋あり。

○白山姫、社 村の山東に座り、祭日<sup>(イ)</sup>

齋主八兵衛。

小松川邑にわたるに筏橋二ヶわたりせり。

しらきやま

○小松川邑（七）

里正並

同

○此邑の東北に中<sup>リ</sup>て白木峠あり、此峠の麓なる村なり、黒澤川を一里下<sup>リ</sup>りて小松川に至る也。郡邑記に、東ノ方南部領和賀ノ郡越中畑ノ内七曲云山<sup>ニア</sup>境、南部街道有<sup>リ</sup>、御領白木峠關番所有<sup>リ</sup>と見えたり。

○山神ノ社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主十郎左衛門。

枝郷あり李原といふ、李原に行に板橋をわたる。

○李原邑

家員<sup>古</sup>二十軒

○李原、李臺、李澤、ごころ<sup>ノ</sup>に在る村名也。

○山神ノ社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主佐平治。此社地に大なる七葉樹<sup>さちのき</sup>あり、外山<sup>あつで</sup>の社の

橡<sup>さち</sup>にいやまごりぬべし。

大井のふるえ

○大松川郷（八）  
一郷二里の邑也

里長並

同



○郡邑記ニ云ッ、山内村支郷、別ニ御黒印しり、惣名唱ナリ云々と見えたり。此大松川の枝邑あり(高根子)霜焼○落合しも○下村○向松河○上松川かみ○田代○福萬○赤水○外山そで○赤倉○祖父おぢ簡臺がだい○一野坂○板谷や平へい○しか此十四村たりしが祖父ヶ臺、一野坂、板屋比良、此三村は今廢村、その有りし跡の字のみを傳ふといへり。

### ○高根子邑

○高根子村、享保郡邑記に家員二軒と見ゆ、今は三平とて家一戸のみ也。萬治のむかしまでは三郎右衛門といふが家あり、また九郎兵衛野とてここにも人栖家すみたりし跡あり。こはみな高嶺子たかねこと云へる山の山脚ふもとに住居なしたる地なれば、此山を以て村の名に呼ぶ也。

### ○落合邑

○此村は黒澤河、北澤目川の兩瀬落會の流れゆる村の名とは成なりり。落合村に箴橋あり、また薊峠に踰るに箴橋を渡る、此兩瀬に二の箴橋掛りぬ。此薊峠は矢向峠、白木峠とて此山内に三ツ峠あり、其一ツの峠也。落合ノ家員新古十二戸也。

### ○霜燒野邑

○此山里は地惡よからず白種ものみ不毛むけぬざる處ゆる、ここ村より初霜いさ早く置わたり、ここによそよりも霜深ければ不熟むけぬ。さる意もて霜燒の名あり。家新古二戸。

## ○向松川邑

○向松川を下松川ともほら呼びぬ、此邑家員古は廿二軒、今十八戸也。

○春日明神ノ社あり、齋王五郎左衛門也。此神社の前より薊峠に登る道あり、あざみたふげは横手へ出る近路なれば、人みな此山踰えをして、大澤の内なる沼山村に出て一里行々は横手に至るといふ。

## ○下邑

○下村は上松川に内也、村口に土橋ありて下村より上松川邑へ渡る也。

○不動明王堂 北澤目川の高岸に西北に向きて建り、仁右衛門是を齋主る。

村の家員古九軒、今十一戸あり。

## ○上松川邑

○山ノ神社 下村の山岨なる地に座り、齋主重右衛門也。此上松河と田代邑の間の巽の隅に中て火炙峠といふ高山あり、をりとして此山の嶺に鬼火粘る事あり。こは、むかし鬼を捕らへて火を焚て焙りしその靈火、今もしか燃るごあやしくもいふ物語あり。五六年さきつとせならむ、雪のいやつもありたる中より火の高う烘揚りたるは、さながら焚火の神山にことならずと、見し人の語るは、硫黄、明礬などのありける山にや、あやしきことにこそ。

## ○田代邑

○田代は山の名、村の名、また田代氏あり。羽田<sup>はた</sup>ノ澤の瀧さて土橋の本に落瀧つ、北澤<sup>きたさめ</sup>目川の岸にかゝりぬ。

○山ノ神座り、郷中民是を祭れり。

○橋打澤といふ處に瀧あり、○錢神坂といふ處に錢神石といふあり、ゆるよしさだかに知れる人なし。

錢神といふ名はこころ／＼に在り、松前のひむがしに、小安<sup>をやす</sup>といふ處へ行に錢神澤てふ浦あり、また雄

鹿の浦、此平鹿ノ郡にもしかいへる處ある也。また神と龜とを通<sup>ひこつ</sup>にもはらいへる也。此田代よりこなた

は並て福萬邑に屬<sup>たぐふ</sup>といへり。

○さへの神といへる處あり。としごろ神社もあらねば神おはしげもなければ、往復人の、本草の枝を折さして奉るといふ、こはそも手祭<sup>たふけ</sup>の神にこそおはしませめ。雄勝ノ郡の奥山にもこころ／＼にかゝる手酬<sup>たむけ</sup>あり。此あたりの名をふる沼といふ。

○黒沼とていと大なる池あり、沼長根といふ處より見おろしたる眺望ことにおもしろし。なかむかしの事にやありけむ、身は食乏にて、いせまうでせまくおもひ立て、野にふし山に明して行はぐに、みちのくの赤沼といふ處に來てしばし休らふほごに、うらわか女のみめことがらよきが出來<sup>いで</sup>て此男にむかひて、やよ旅人よ、出羽ノ國にいたり給はゞ平鹿ノ郡ノ福萬といふ處に黒沼あり、此書をもて、みちのくの赤沼に住む姉がもとよりとて其黒沼に傳へさふらへてよ。かまへて／＼人など見せ給ひそ、ゆめ／＼と

てわたして、是はいさゝかのものながら葉に似たる露のこゝろざしこて、餉かゐひむすびたらむやうなるいさゝ／＼重きものをつゝみくれたり。かくていではぢにおもむいて平鹿郡になれば、福萬に在る黒沼をたづねどひてやをらそこにいたりて、吾、みちのくの赤沼より文通ふみここづてられしといへば、いまだふり袖のきぬ着たる、その容端麗かほきはらしきが出アむかひて其書しよとき見て、おほあねの事なきをよろこばひて此男に禮れいびて、こはかろらかの品ながら、ふみ傳つて給ひー酬くぐしきふらはむこて、おなじさまの一包をくれたり。かくて肆いちに出て是を錢に代かへなむといへば、その代獨歩身しろひどりのいかでか持去なむ、金にしていきねこてこの黄金に代たり。旅人はひんぐうの身ながら、たちまち福萬長者の身となれりといへり。此ものがたりなごより此處を福萬ともいへるか、なほたづぬべし。その二包は山排やまはきの金銀などにてやありけむかし。また一とせ、南部の歩人行暮て福萬に來て泊りなんと、沼後にちりの橋こてさゝやかなる橋ある黒沼の邊りに松明ふりて至れば、よき衣着る姝妙女かほよくきの腰機はたおりをるを松の火明りに見つゝ、まつ火投捨て魂の身にそはぬこゝちして、身の毛いやだち足をそらに逃歸り、ふたゝび田代に來て宿こひ泊りて、此事話きこなむ。なにゝまれ、よしある沼にこそあらめ。

○夜蚊居坂よがといふ小坂を下れば○竹ノ子澤しなといふあり、ざくづれなごいふ處を経て、○清水ヶ臺しみづといへる處にいこよき寒泉しみづあり。

福 萬 邑



○福萬村に入るに土橋あり、また大橋とて土橋あり。家はあなたこなたに河を隔て人栖居わたり、水田たけある山館やまど也。舊家あり、黒澤勘十郎とて此山境を守ぬ。國つものを、こゝ國へ踰えやらむ事を、め置れたる高札たて立り。

○大山祇ノ社あり。此みやごころに、いくばくのごし經たらんか大藤の、三本の桂木を蔓に曳纏たてひ生り、五月のころは咲盛也。古木ゆゑにや葉少、花のみごを、に咲て、たぐふかたなき見もの也といへり。うべも増田のいなりの大藤、久保田の推古山の聖德太子殿の大藤にも、いやまさりたる大藤也。此神社ちり前を右ナ方東北に分れば、みちのくの南部路にして湯田の郷左草村ささうに出、左リは北方こたへにて外山村に行キ御嶽の神山に登る道あり。おし並て此あたりの字を大城林だいじょうはやしといふ、むかしの桐戸きりの跡ならむといへり。

○はうしやうまきといふ處、福萬村よりは東に中ちてあり、そは村の北なる大城林だいじょうはやしといへる高山の九曲をよぢいたる。そこに水飲みづとてよき寒泉あり、此清水を以て黒澤勘重郎、文化元甲子年を創はじめに百刈斗水田を新墾ひらきぬ。はうしやうまきてふ事は牧なしごのありつる地かとおもふに、さる處ごも思はれず、こは蒔てふ字にこそあらめ。そは南部、松前なしごの山畑に粟、蕎麥、麥蒔處まくを谷卷やち、燒卷、某卷、某卷といふ名ごも多し、みな蒔といふ事を卷に作り、また牧ならぬ處も牧てふ字にいへるは、本は蒔キより云る也。

此はうしやう卷の小高處きにごんげむといふ名あり。はうしやうまきの荒岳は保昌坊はうしやうや住たらむ、古本の出羽六郡三十三所順禮記に、地福長者の先祖卜部大連氏致者鹽湯彦命しん臣也、氏致、男氏尙より七代、

苗裔滿德長者致尙、雄勝、平鹿、山北をひらき作らしめ、平鹿、山北兩郡の堺吉澤、杉澤の流を用水として田畠を作りて大家を造り、寶藏棟をならべ牛馬鶏犬多養ひ、富貴繁榮の家たりし。○地福長者の實父者光頼眞人の男大鳥頼遠が四男也、其子保昌のすまの實父は貝澤三郎武道が次男也。此保昌出家して保昌房はうちやうと號て諸國を修行し、紀州にいたり熊野の那智山に參籠し、觀音の示現に依て巡禮して三十三所の觀世音を大佛師定朝に造らせ、阿闍梨教圓を開眼、供養の師として本國に皈り、雄勝、平鹿、仙北、河邊、秋田、山本六郡の山々嶽々の寺院に此體を安置して、三十三所の順禮記を書め是を奉納す。其後都より教圓阿闍梨此國に尋ね來りて、保昌房、教圓もろともに巡拜して、御嶽山鹽湯彦、御神鎮座の御山の内湯、峯、白瀧の觀世音を第一番と定めて、秋田、郡比内、根、井岩本山にて三十三番まで札うち納めて、教圓阿闍梨は皈京あり。○此教圓阿闍梨は伊勢國、太守藤原、孝思第二子、六十五代花山院、御宇、寛和元年乙酉歲八歳のとき慈惠大僧正の弟子と成り、長曆二戊寅年大僧都と成り、七十代後冷泉院、永承二丁未年六月十日七十歳にして入寂せり。教圓、唯識論を誦て春日明神の加護を蒙れる名師なり。といへり。眞澄考ルに、教圓阿闍梨の事は今昔物語及元亨釋書等に見えたり。○承暦二戊午年地福長者致尙、かの跡を追て巡禮せり。七十三代堀川院、寛治三年己巳三月十七日、致昌天狗に誘引て行方を知らず。其舍弟正致、翌年庚午、春當國、將軍三郎清原、武衡、同四郎家衡亂を起して兵戰の時滅亡也。保昌房、系圖如是。云々と見えたり。此保昌卷は保昌家出の後庵むすびし地ならむ、その權現といへる地は熊野權現や齋奉り

しその舊地ならんかし。また此處を福萬といふも福満にして、地福長者、滿德長者の古跡なれば地福の福と、滿德の滿を二合て福滿といふなるべし。今いふ福萬は、時を卷に作るたぐひにて假字ならむ。さうければ此福滿はいこゝふるき地にこそあなれ。

○保昌畑産　石弩、霹靂石、雷斧石、あるは素陶のくだけたるなご出る事、陶卒備はまれなるよしをいへり。

○此福萬村よりは東北に中りて、大倉澤の内に下嶽屋鋪、上嶽やしき、向ッ屋鋪、上やしきなどいふ村の、いにしへは山の奥がおくまでありつるよし。また高長根といふ處を風寒ければ夏はいこよき處とて、南部路の人は六月長根といへり。郡邑記云、南部領和賀、郡湯田村、内左草村と山にて境ッ、但御領四本ぶなといふ處也。」と見えたり。

○藥師ノ窟あり、里人は藥師穴といふ。またいこゝ高き處を藥師倉といふ、此藥師倉の上へに經塚といふ處あり、石經なご埋し處にや。また板石、柱石てふものありといふは、阿仁の二の股の留木石、南部、左井の材木石の類品にて津輕にもあり、こころに産ものにこそ。

○大澤の瀧　村より眞西の方に中りて、西南の方より祖父ヶ澤水ちひとつに、三桶長峯といふ處より高サ二丈ばかり落る、黒澤氏の田のみなかなるよしをいへり。此黒澤勘重郎が家はいこゝ、問廣門廣斗り作りなしたり。古家は享保のむかしに作りて、其時世は材木此山にあらで、みちのくの澤内、長松の眞

任の大倉山より伐りもて運び作りて、すでに百こせを経てあやうげなれば、文政四年にあらたに作りぬ。此材木は、今七十四歳になる祖父が二十歳斗のこしうゑたりし杉の、五十年斗にはや大材となりしをもて作れりといふ。黒澤氏に家譜あり、また古器あり、小野寺遠江守義道より給りし太刀あり、なほ此記は末卷に誌す。

享保郡邑記 福萬村家員十四軒、今廿一戸あり。

### ○ 赤 水 邑

○御嶽神泉の末の流なれば、まうでし人ごら手あらひ口洒きよめて水かき汚したるこて、垢水澤のあるを赤水とは作て村名とも成りぬ。山奥に在るおちが臺の西なる板臺の清水、沼尻の水、木のめ澤より流る水もみな赤川に落て、また北澤目河落合ぬ。箴橋あり。家むかしは八軒、今九戸あり。○上志戸かみしや、下志戸しもしや、ごいふ處あり、大志戸おほの内也。此志戸てふ事はなにゝよれる名にや、山本ノ郡に志度橋といふ村あり、ごころゝに志戸あり、志戸の浦もよしある名にや。○沼長根といふ處あり、此西なる處に

○大井といふ字あり、またそれより西ノ方を翁おきなか臺といふ。享保日記には祖父おじいが臺と作たれど、俚俗はおちが臺ともはらいふ。大井は大泉ありて、いにしへは家とも多かりし里也。翁おきなが臺も人あまた住みつる所から、近き元文、寛保の年まで家二戸ありつるよし古老の山賤の語る。こは倭名鈔に平鹿ノ郡山川、大井、邑知おちとならび記かきり。大井は其流レ大キにして今しか沼長根の名あり、其祖父おぢいか臺こそ邑知てふ



吉跡ならめ、いにしへの郷は眞木たつあら山になりぬ。續紀、出羽ノ國大室ノ驛おほむろもあるも、雄勝ノ郡雄醜おしこほね骨山今雄勝ノ命ヲ齋奉るの大室長峯の、名のみ傳ふをもていにしへを偲ぶべし。此大井も祖父おぢ簡臺がも地動なみにゆり崩

れて、いにしへさまにはあらぬ野山となりぬ。大井も邑知も同名にて、みちのくの江刺ノ郡に大井あり、此いではの河ノ邊ノ郡に邑知あり、また石見ノ國に邑知ノ郡、その外にもある名なれど、是こゝ平鹿郡の古跡也。その邑知が臺の奥なる古沼のわたりには蛭蛇おほはづみすみぬ、その蟒蛇まうぢの體周回は遠目に見やれば三尺斗ななしろとは見ゆる也、長さおもひやるべし。また二三尋の巨蛇はいと多かるよし、去年、去々年も見し人ありしと人の語れり。また大井に上沼うは下沼したとて大なる水沼ありしが、下沼はみな田と作りて、谷地眼やちまなことていとおほゐ茂りあへり。

○館たてが澤といふ處に古館の蹟あり、そは誰が住りともしらねど、外堀の跡とおぼしきは澤やちとなれり。かくところくゝに小城の跡あるをもて按おもば、黒沼くろわたりに在る夜蚊居坂よがみてふ處は、要害の地にこそあらめ。此古沼の水と外山の流と、外山村の南なる烏屋森さやの邊りにて落會なり。

### ○ 外 山 邑

○溪底に家居まばらに、そむきくゝ立て、谷水流れて神々さびたる山里也。此奥も赤倉といふ一村あり、赤水澤より並てみな外山村と稱ふ也。○三梨左膳とて神樂男あり、また仙北ノ郡金澤ノ圓徳寺の末庵に

て一向宗西派の徳山といふ僧侶住居り。外山村家員三十三戸、赤倉村、家六戸あり。外山、赤倉の村は鳥谷森、雀倉なごの下ッ方を西とし、南に中りては四本鉤栗山、岩倉權現の溪、大瀧溪、高落溪なごのこなた、鷹ノ澤山の麓あたりに在り。

○大山祇ノ社あり。此社地に周圍四尋ばかりの大七葉樹ありて神社のかくろふ斗也。此橡ノ木大枝ながら朽折れたる空樹也、此うつほの内に蛇すみて、夏は頭さし出ぬなど人の語る。こは御嶽に登る麓の山口也、御嶽の山路は○鉢森○綱捕山さかしくて、むかしは綱引はえたるといふ○比良槻岐（ひら）の崩れたるを、此左の方々に湯の岬峠あり。むかしは此真下に温泉ありて、その湯の鹹ありつるよし。○十二曲の九折をのぼればやをら神嶺の杉群也。また横手ノ路は本道にして○石町○八少女やしき、神樂男の居所也。○久保野目、神女第、隱座の林あり。○古瀬渡、板戸ノ渡といふ。○大鷄居山○丸山○平等道○明澤野○鳴見澤○下居三社○古真木長根○綱取越エ○瀧山道○地獄谷○滑ヶ澤○行者第なごをよち登るといへり。また地動にふり崩て山々嶽々、岨山道もいにしへのさまならず、いくたびも蹈かはりたりとおもはれたり。絶巖にいたりて四方八方を眺望みわたは東は○大臺山東北○土堤森○安が臺○赤倉山○二ッ森○遠弦とほづる○高落山○岩倉權現山マゝにしへは神のませし山といふ。東南の方は○笹峠○四本鉤栗山○大倉山○小倉山○小松川山○白木峠○田代山○七曲山○水堺○間垣峠○管臺○鳴神ミナト八方○三ッ森○弓投森。眞南の方に○茂竹山○柴倉山大谷新町の界なり○大森山○虫内山御運上山也、大屋村より鈍役出せり○てんやば山、雄勝平鹿両郡境山也○遠輪長根雄勝郡の吉野村さかひ○小安山平鹿郡也

黒瀧山〇二段〇五枚比良、金山也

昔一日に大判五枚を此山より出し名也

〇桂峠〇高平山

〇切止峠〇黒森

雄勝郡界也、外に同名あり

〇凍氷山

東南正中

西の方には〇黒盛山

赤坂外山より金澤へ越る平鹿仙北の界也

〇谷地長根

平鹿の杉澤山界なり

〇萱森山〇落し山

〇薊峠

大澤の界、横手へ踰る

〇輕イ

峠〇小楯森。北の方に雄鹿のうら〇〇袴腰山、そは新山本山に踰る花折山の境也〇寒風山、またの名

は妻戀山〇琴の湖

うみ八龍湖をいふ也

〇琴川のうら。東に神宮ヶ岳〇保呂羽の御嶽〇月山〇烏海嶽。遠からぬ境は

〇雄醜骨山、また黄蘗嶽、北に遠きは〇みちのくの岩手山、また〇姫箇嶽、近きは秋田の杜良ヶ岳〇蛇

峯

ね太平山をいふ也

うべも連山如波濤といへるは、かゝるながめをこそいふならめ。

しら雲かなみかあらぬか

遠方を四方にみたけのいや高くして。かくてひろ前近く笹ざりといふ事をして、なほ身もきよまはり

御幣手祭ぬ。おほむ神垣は杉群の中に棟高くいちじろし、白松よこたへなびき神さびたる御嶽也。恐

くも此おほむ山は、平鹿郡に二柱たゞせ給ふ式内のおほむ神鹽湯彦命とまをし奉る也、鹽湯比古は氣化

の御神にして鹽土翁を齋奉るといへり。また御嶽は三岳にして三の峯あり、其一峯には天八衢大神、

一峯には大汝貴命、一ノ峯には小彦名命ませり、さるゆるよしをもて三嶽ともまをすとも説り。また此

神山に七釜とて鹹温泉涌出し地あり、今は山崩埋れて湯濤の有り處ともおもはへねど、まさしくも七竈

と云ひ湯岬といふ處あり。此あたりを温泉嶺ともいふとか、うべも白瀧の觀世音を湯峯といへり。み

ちのく鹽竈明神にもそのいにしへの鹽竈七ツありしが、一ツは釜火手の浦に沉み一ツは金浦に在り、今

一ツも某地に在りといふ。残りて四ツあり、そが中に乾の隅なる釜を御臺の釜といふ、そのゆるをしら

す。此しほがまの浦田うゝる浦少女がうたふ田唄に、「鹽釜は古は七口釜ながら三口ひかれて四口のしほがま。」と三十一言をうたふ也。此神山にも今は温泉釜てふものこそあらね、湯峯、田のはな、七ツ釜の名は残しり。海遠くして鹹湯泉の生處いと／＼多し、近くは秋田、郡切石郷の七折山の麓、嫁が澤の邊りに鹹井あり。遠くは美濃、國、月吉、日吉の近りは源三位賴政卿の知行所にて、猪ノ早太も出産し地也、そこに賴政建立の神社あり、此杜の前に鹽の干満ある井あり。甲斐、國、夢山近く、しほの山さしでの磯にすむちごりとよめる處あり、今、からごゑに鹽山といへり。下野、國鹽谷、郡にも鹽湯あり、遠江、國掛、驛近き處にも湯ありて鹹氣あるよし。式の御神の内にも淡海國の淺井、郡に鹽津、神社、尼張、國中嶋郡に鹽江、神、同國丹羽、郡に鹽道、神、出雲、國神門、郡に鹽沼、神、鹽沼比古、神、鹽治比古、麻由、鄉能神、また鹽治日子命、御子、焼大刀、大穗日子命、神など、しか鹽てふ神號はいと多し。倭訓栞に、鹽云々、神代纂疏には鹽土、翁始て造れるといひ、西土には宿沙氏より始るといへり。出雲、國、古老の傳には大己貴、神より始るといふ。神詠に　しほ汲むあふこのうらのたわむまで月をぞ荷ふ素鵲の里人。あふこのうらは柄の末をいふ、此神詠より五十田狭、小汀をあふこの浦と稱すといへり、と見えたり。またみちのく、伊北、郡、月、輪、庄に、大鹽、里にしほの井あり、鹽を此泉より汲て焼ぬ。西行法師　海士もなく浦ならすしてみちのくの山かつのくむ大しほの里、とよめり。さるためし多ければ、むかしは七ツの泉に鹽の涌出るをもて、鹽湯彦の神號ありし事ぞしられたる。夏の神事は六月二十日、秋祭は七月二十



日、八澤木の太友氏、守屋氏の行事あり、また兩度の社日の神事ありて人群れて登るこいへり。麓の駒  
 繋より此嶺まではすでに道の一里ならんか、いこ／＼さかしき神山也、御洗寒泉、七ツ釜なごはうち臨  
 むもあやうげなる處也。此麓外山邑の社家は本ト八澤木村の木ノ根坂に在りつるが、享保十六<sup>辛</sup>年此山脚  
 に三梨道満うつり來て神樂男を創てつこめたり。三梨は雄勝ノ郡ノ在名也。三梨氏は小野寺家の支流に  
 して小野寺道實を上祖とし、善四郎道實又號攝津守三梨村に居館せり。永正十三年丙子四月十二日  
 卒、法名道勤、行年四十二。○道親、藤兵衛、天文十五年丙午七月七日卒、法名道順、行年七十。○道乘、善  
 四郎又攝津守、天文十三年二月廿七日卒、法名道秋、行年三十八。○道嗣、藤兵衛、道乘ノ實子也、元和二  
 年三月十二日卒、法名道肅、行年七十八。○道實、川連道度ノ次男三梨ノ尊、名代藤兵衛。○道興、茂齋、舍  
 弟、三梨藤馬又兵衛三梨家斷絶ノ間繼其家也。○道滿、十名齋、爲社家三梨主水。○道政、大和、八澤木村  
 宮川宅兵衛<sup>ヨリ</sup>養子。○道信、三梨遠江。○道滋、左膳、當代司官。吉光ノ小太刀、其外上祖より傳ふ古物  
 あり。<sup>(天註)</sup>——鹽湯彦神社は延喜式に載る所の御社なれども、中古兵亂の紛れに宮舎もいつさなく荒廢はてて宮跡もそれぞ知れ  
 りて御家老今宮大學殿に命ぜられて、茂木頼母、太友大隅守父子と共に平鹿郡を經歷して舊跡を搜索せられ、古老に問ひたづねて實地  
 を得て、正徳五年にや、宮社再建成りて御遷宮式を仰下されしかば、かくて太友治部少輔福命に命ぜられたり。御再興若干の勤勞あり  
 しかば世々守護すへき旨太友の家に命ぜられ、享保の頃より三拾石の御社領御寄附ありて太友家所務  
 なりしを、いかなる故ありてか安永六年より守屋を加へられて、今にては兩神主と號せりといへり。<sup>(一)</sup>

# ○瀧の名あるは

○瀑布もいど／＼多かれど○赤倉の八<sup>ヤ</sup>入<sup>ス</sup>安<sup>サ</sup>さもが瀧いど／＼大<sup>キ</sup>にして、瀧の向山を白<sup>シラ</sup>元<sup>ハ</sup>といふ、そこは

天狗すめりといふ。御嶽の東に中<sup>レ</sup>り。○大倉澤のさうごが瀧、○猿倉瀧、南に向ひて四五丈落る飛泉也。○黒瀧○赤瀧は小倉の枝澤に在り、○大澤の飛泉なごいづれもよき瀧ながら、みな奥山に在りて、山賤ならでは蹈見る事やすからぬよしをいへり。

### ○石の名あるは

○祖父石○祖母石、此二石は福萬邑の東北に中<sup>レ</sup>りて久多石といへる澤に在り、祖父石、高二丈四五尺斗、石周回廿五尋斗也、いそめでたき石也。また祖母石はいそ／＼少<sup>サ</sup>き石也。○唐櫃石、是もおなじ方角の會洞といふに在り、高八尺、周回四尋斗也、其さまからひつに似たり。○錢神石、田代と福萬との間に在り、高四尺斗、めぐり三尋斗の石也。

### ○名あるきつねは

○鳥屋森のおなつ子○松なかねのさん子○土堤杜のあぐり子、此安具利子は雄勝郡の杉宮の元道田稻荷社のつかはしめの外にも、あぐりこといふ牝狐はいと／＼多し。

### ○黒澤氏家譜

○出羽ノ國平鹿ノ郡大谷莊横手郷、淺倉城主小野寺遠江守義道公ノ家臣黒澤和泉、文祿四年乙未、正月元旦、御慶賀ニ息甚八郎を召シ連れ登城し、式禮終りて甚八郎を近く招<sup>マ</sup>て君に言上して云、此小童は愚臣が子にてさふらふ。しかはあれば、亂世にてさふらふ也臣が存命も旦暮はかりがたくさふらひき。臣

もし討死にもさふらはず、此子成長の後似合しき御奉公をも仰たまひて、臣が代とも思し給ひて召しかひたまはらむ事をと申上れば、君近くめし寄せられ、歳いくつ、名は某なにかかいふことたづね給ふときかしこまりて和泉申上る。此童子事は天正十六年子成に出生うまれて童名は甚八郎と申上れば、君仰給ふは、始ての對面也。稚子も能く聞ケ、臣としては忠を盡し父母には孝を盡すべし。忠孝の道を守り、また弓馬の家に生る身は幼稚のときより手習學問に怠る事なく、成長の後は武道をもはらとし、文武兩道は轍のごとく翼に似たり。文徳内に存して武威外に備はらざるもの、いかでか良臣の名を得んや、愚昧にして父祖の名を穢す事なかれ。汝が父は一方の將として數度の血戰に軍忠を顯はし、家名を擧たる也、汝も成人して左京亮に忠を勵め。忠臣の兵に成長せむ壽を賀して名を改め忠兵衛と號して、名乗は義道、道を給はり道家と名乗り御蓋下し給はる。甚八郎御盃を頂戴す。時に黒鞘の小太刀一腰取よせ給ひて、是、初て見參の引出物を得さすべし、近く來れこのたまふとき甚八郎席近く進み伺候す。君仰に、此太刀は備前、祐定が作にて近來の討物也、是を汝に與ふべし。此太刀にて高名をあらはし父が面を悦ばせよとて、甚八郎に給はる。甚八郎謹て拜受し奉り、高恩を父子とも身に餘り喜び下城し一家酒宴を催し、甚八郎名を改て忠兵衛道家と唱て父子ともに萬歳の壽を祈りしに、死命限りありや、同年、十月十日雄勝郡岩崎、合戰に父和泉討死し、母も悲歎の積りにやほごなく病に臥して、慶長二年酉丁五月七日に死す。忠兵衛道家孤子となり、同苗甚兵衛の許に住ぬ。然るに太閤秀吉公薨じ給ひて天下の政道家康公に飯し、御政

務として慶長四年大谷形部少輔吉繼を羽州へ下し、吉繼先達て代官を遣はして義道の領内を巡見せしめ、法令を正く行ふべき處却て無禮不儀を成すを惡で、義道の家臣ども吉繼の代官を誅す。是全以て義道公の知り給ふ所にあらざれども、悲哉御家の廢亡すべき端相か吉繼大に憤り、義道を討むと諸國軍を催し來て、義道の一族油利の押たる大森の康道が居城を攻め戰ふといへども、軍牛角にして雌雄を決せず。康道情思惟し和を乞ふため敵陣へ書を贈て云、抑此亂發、ハッ非他、代官を誅せし依過也。政罰給ふ之條陳に無由といへども、家臣どもの仕業に依て義道が心にあらず、全對内府公逆意を不存所天の照覽にあらむ。過を被<sub>レ</sub>免於御解陣、何時か旁恩を謝むとさまゝ申送ければ、吉繼いかゞ思ひけむ十月下旬に飯陣す。依<sub>レ</sub>之慶長六年まで無異也し處に、家康公より條々の御不審にて、義道公遠流の罪を蒙り石見國に配流せらる。御一族諸從は改易也、御嫡子道光公は戸澤政盛の許に介抱を得給ふ。偕同苗甚兵衛、君に隨ひ配所に赴きぬ。依<sub>レ</sub>之道家無<sub>二</sub>立寄所<sub>一</sub>十四歳にて浪人となり、知行所の因に寄て平鹿郡大谷村に隱居し名を改て惣左衛門と號す。しかるに佐竹義重公秋田の御領主と成らせ給ひて、御嫡子義宣公慶長七<sub>壬寅</sub>年九月九日御入國あり、かくて道家大谷村に忍び居たりといへども住居意に任せず、慶長十一年<sub>兩</sub>年奥州へ立越へ、同國和賀郡多老といふ處に農士と成て住す。道家力業を好て常に石を以て力を鍛す。一時道家鹿獵の處に行當れり、獵人熊を追ひ來て、手負の熊也疾、逃給へといふ。道家是を見るに、かの熊飛が如く來て道家に咀付とす。道家、熊の手を取て數丈高き川岸より



一ふり振<sup>リ</sup>て投落す、熊は四足折て死す、此強勢を感じて、時の人異名を呼で熊惣左衛門と號す。扱又主君義道公の御行方を尋るに、程なく配所に於て逝去し給ふ。甚兵衛御遺骨を捨て高野山に納め出羽に下<sup>リ</sup>て徘徊せしを、義重公甚兵衛をめし出され臣とし給ふ。此由を聞傳へ、幸なり羽州に立皈り、時節をうか<sup>ゞ</sup>ひ甚兵衛に附て義重公に奉公を願<sup>シ</sup>と思ひ、慶長十一年より元和六<sup>庚申</sup>年まで十五年間居住せし多老を出去り、羽州平鹿郡大松川村、内福萬といふ所に移住す。黑澤道家三十歳、子息美濃九歳のとし也。同<sup>ジ</sup>九<sup>亥癸</sup>年居宅火災にて記録、家財等悉<sup>ク</sup>焼亡し、父子ともに帶刀を出せしのみ也、道家卅六<sup>マ、</sup>歳美濃十二歳の時也。此火災に依て日暮の經營不如意にして光陰を送るほごに、寛永三<sup>丙寅</sup>年道家四十二歳にして中風ノ症にて行歩不自由の身と成りぬ。嗚呼時なるかな、此故に奉公願ふべきよすがなく民間に落て、美濃ノ名を勘十郎道弘と改めぬ。しかれば元和年中<sup>ノ</sup>の火災に焼亡して先祖の姓名解がたしといへども、唯予<sup>レ</sup>幼少より行狀、古老の物語を聞て書<sup>キ</sup>集めて子孫に傳ふ。道弘年十九歳、于時寛永七年庚午初秋吉旦、道弘奉<sup>ニ</sup>父<sup>ノ</sup>命<sup>ニ</sup>記<sup>レ</sup>之。後代是莫<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>亡<sup>一</sup>失。

○黑澤氏系圖

○黑澤和泉

○和泉、小野寺義道公ノ家臣<sup>也</sup>。

文祿四年岩崎合戰討死ス、子息道家八歳之年<sup>也</sup>。

如<sup>ニ</sup>記録<sup>ノ</sup>

先祖之姓名ヲ失ス、故ニ和泉<sup>ヨリ</sup>系圖ヲ記<sup>セリ</sup>。

○惣左衛門尉道家

○天正十六年生<sup>ル</sup>、童名號ニ甚八郎<sup>ト</sup>。

○勘十郎道弘 慶長十七年生、童名號「美濃」。元和六年九歳にて父と共に福萬村に來。後改名號「勘

十郎」。

○惣左衛門尉道政○惣左衛門道景○武右衛門道定○勘十郎道信○七郎兵衛道晴○久米五郎道明○當代及九代勘重郎道頼。委曲省略シテ記レ之。

○家藏

○小野寺義道、黑澤甚八郎八歳の時の賜なり、横刀二尺四寸。銘

○永祿十年八月 日 備州長船祐定作。

袖のうら

○丹波開邑（九止）

里正並

同

○むかし丹波といふ浮浪人開きたる處にや、今は丹波邑といふ、古名は古間木ふるまぎといひし地也。牧かひなり。ありしよりいへるか、さだかならず。東に落し山とて大嶽あり。横手より丹波に至り、丹波村より大松川邑に入る道あり。

○山神社 祭日四月十二日、十二月十二日。齋主助八。

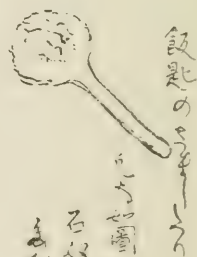
此神社のあたりを堂ヶ澤おほさわといひ、○大尺澤、大森山あり、杉澤境也。○大臺澤○太郎坂○るむだら澤○

水山澤○袖ノ浦<sub>西</sub>北○深澤なごうち續たる山里也。

大志川郷 福萬邑  
保昌藤より保昌藤  
舊刹の蹟より出  
とふ一品



此龍丸  
高二寸五分



飯匙の  
とふ一品

石  
とふ一品



黑澤勘十郎家

藏

平鹿郡大森

城主

小野寺孫五郎

康道詠歌

真筆摹之

色紙金雲

菊流形心

雨後

因蟬

康道

而  
上  
了  
庭  
乃

蟬  
乃

捐  
志  
乃  
風

能

如  
魚

知  
乃  
乃

乃

大壺川郷 其一

霜燒野邑

家二戸あり

こゝからいそぐ

秋田なり

いそぐ

いそぐ

秋田なり

いそぐ

秋田なり

いそぐ





雪出羽道(平鹿郡十四)





大曲川郷 其三

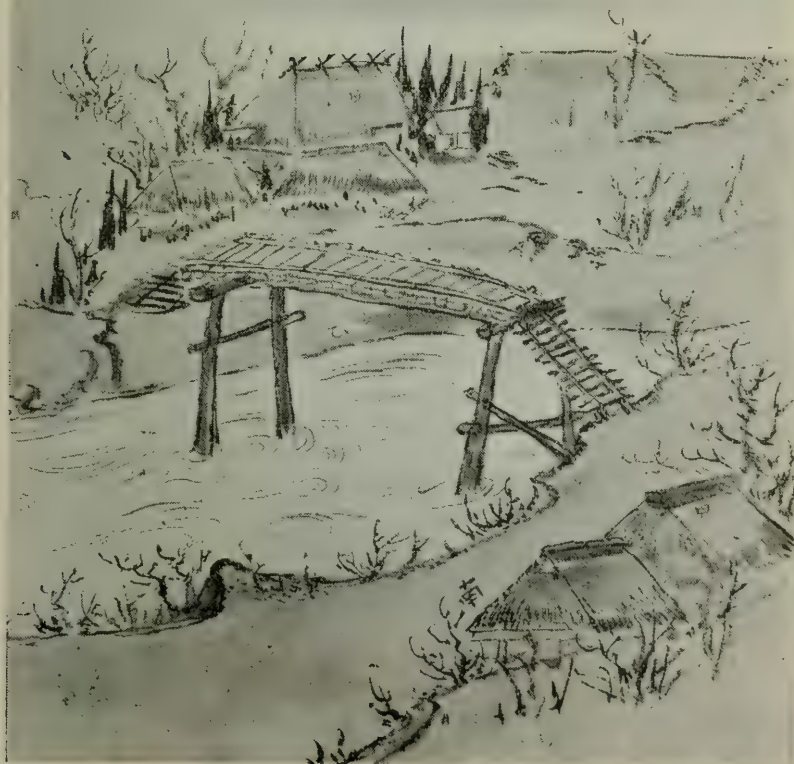
甲落合邑

黒澤川

北津目川

二の淵

新峠





大玄川郷其四

御嶽

塩瀨

乙

湯

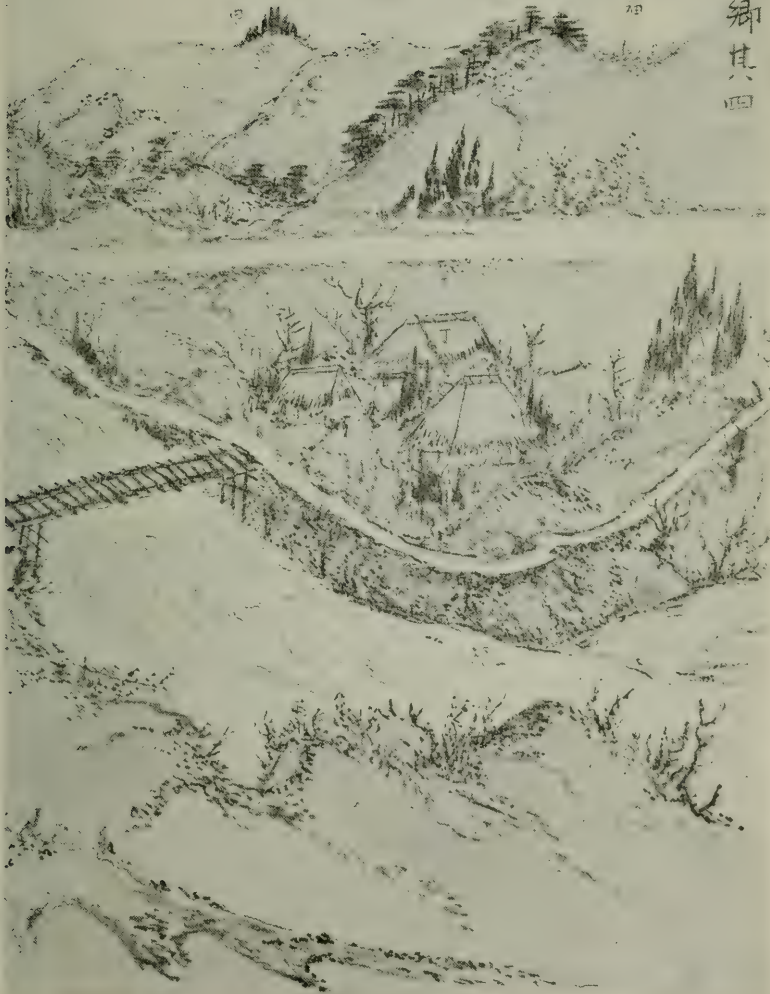
温

山

丁

白

北







大和川郷其五

小倉澤

甲經坂本郷上尉

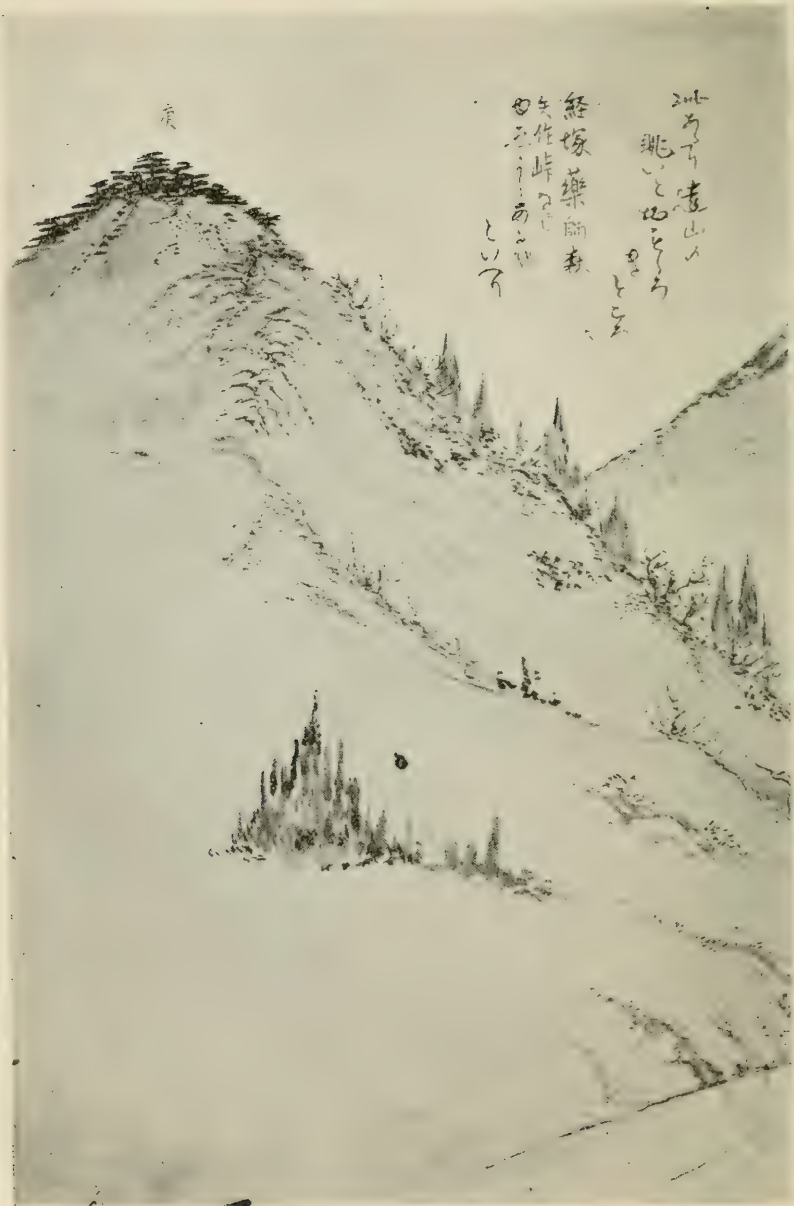
丙新郷丁藥師本林

戊下郷馬山神

庚前郷峠

北



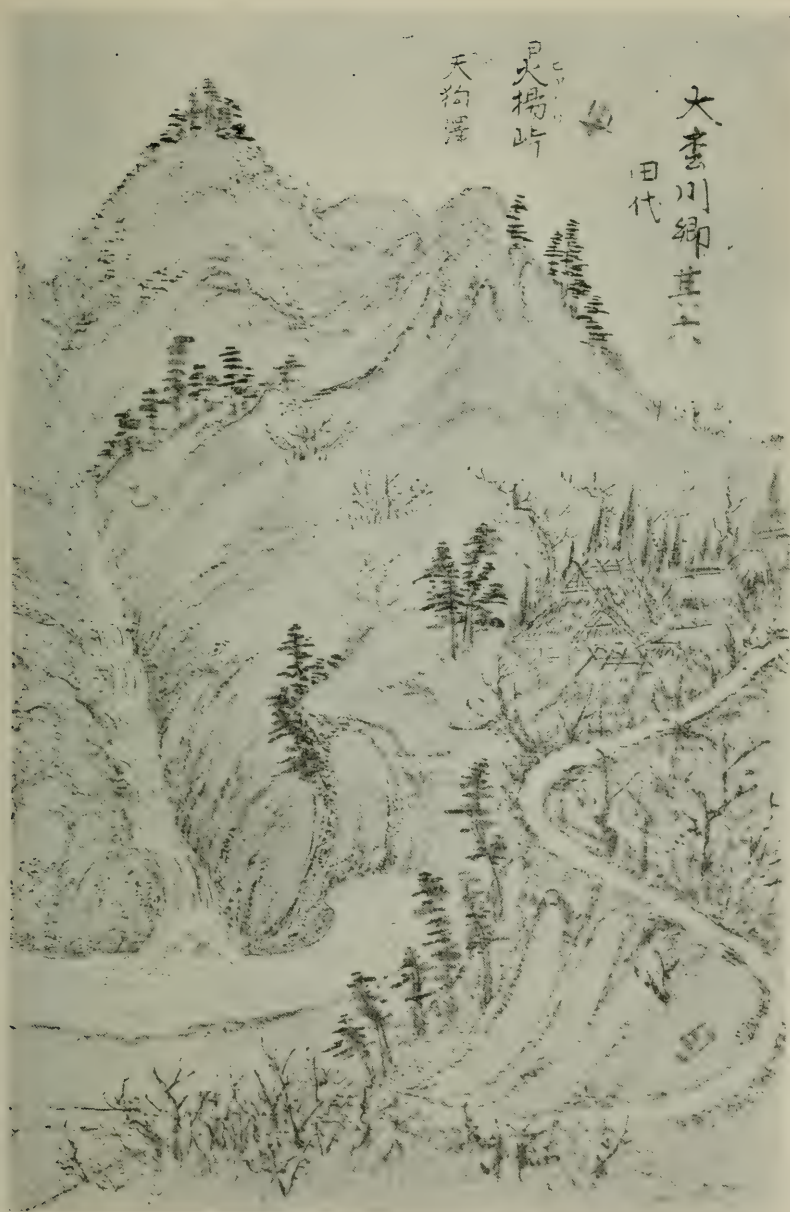


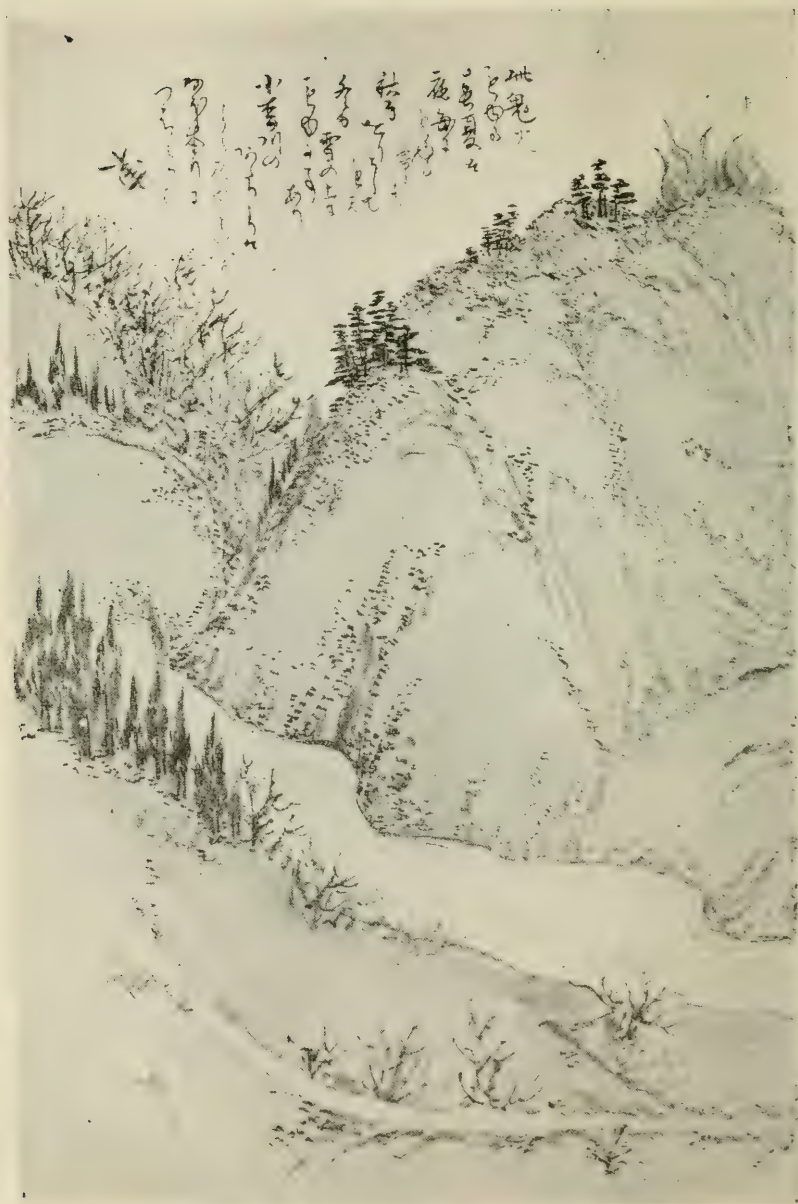
大書川郷重六

田代

火揚峠

天狗澤







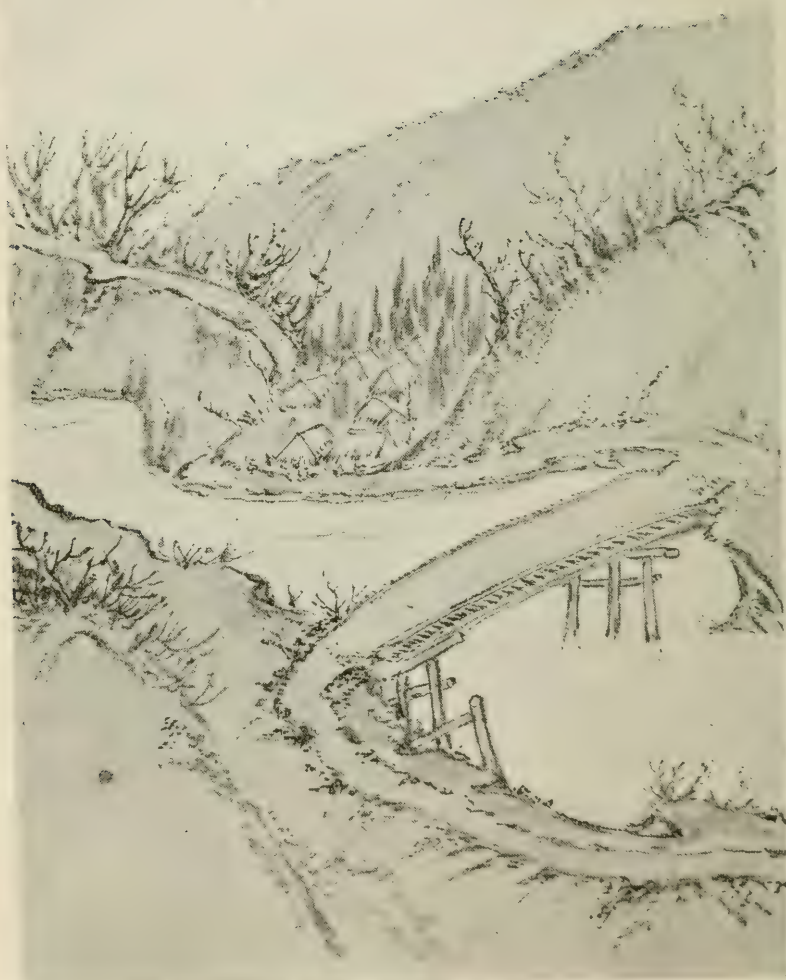
大聖川郷

其七

田代邑これり

毫萬とて





大曲川郷 其八

福高

湯の橋

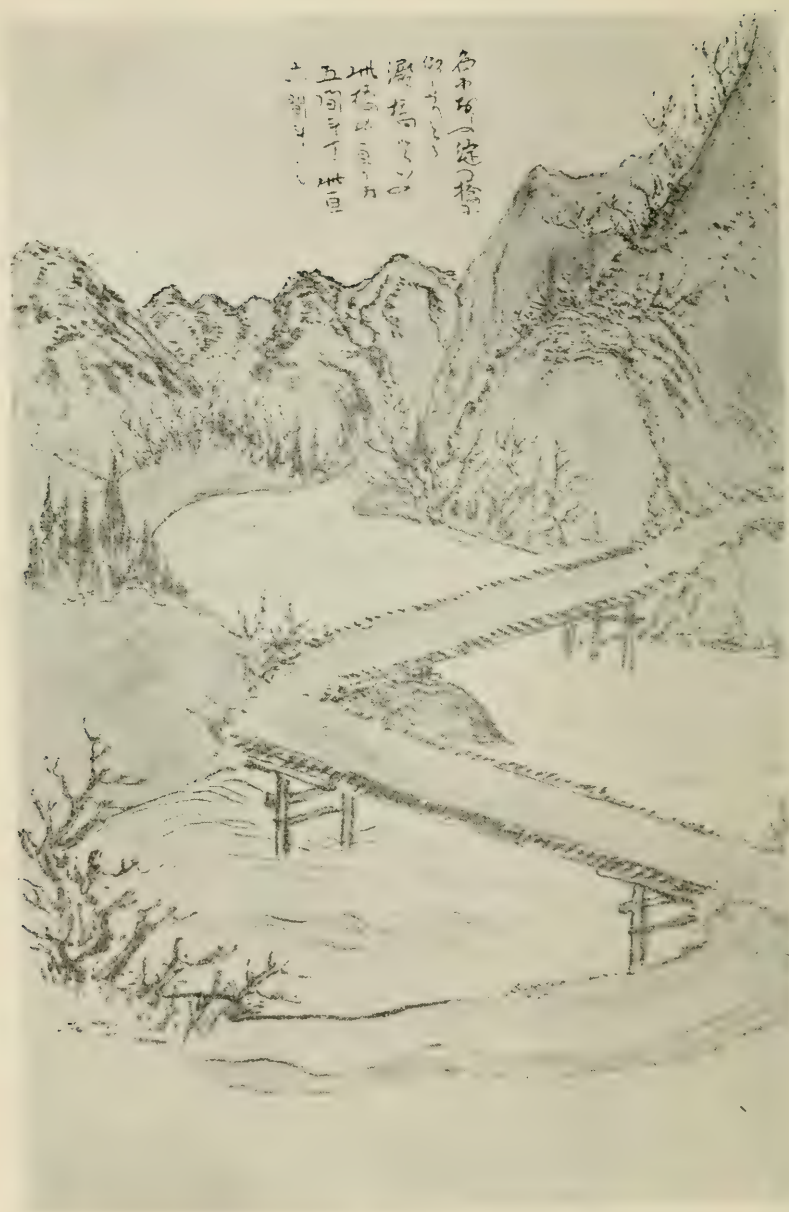
甲小倉澤

甘藷師山

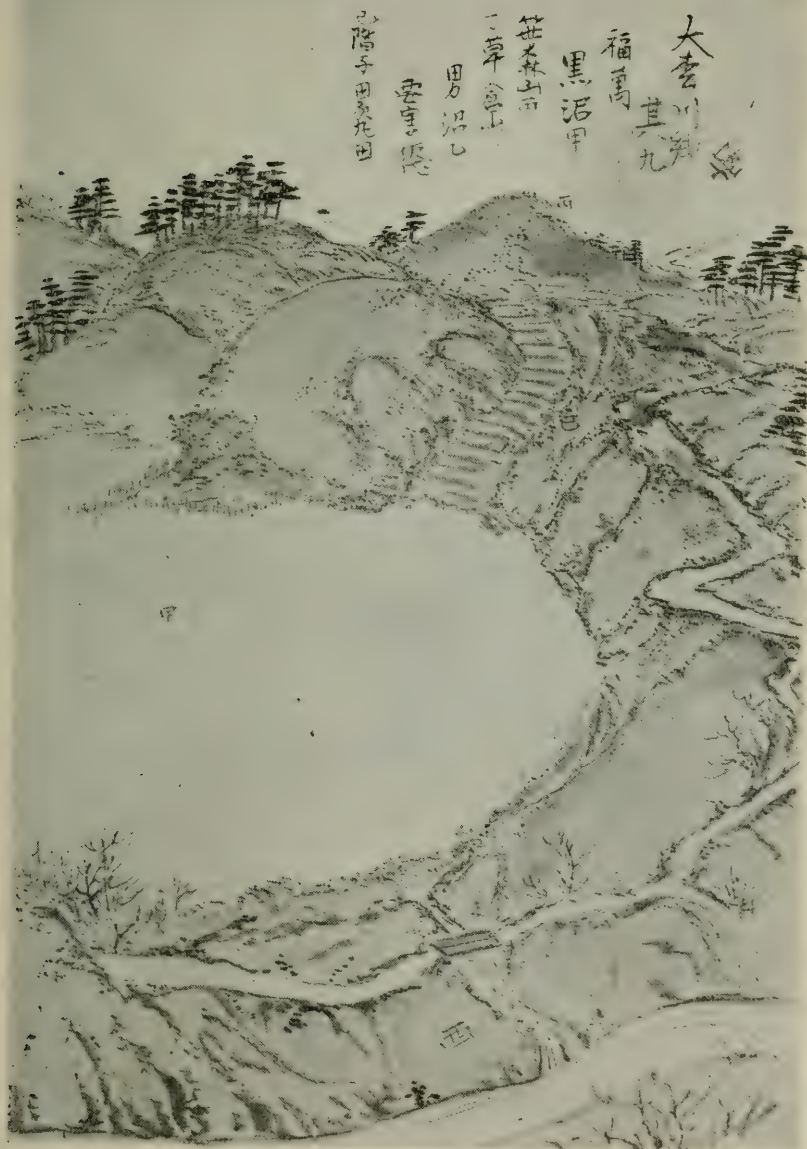


雪出羽道(平鹿郡 十四)

名木村(定)橋  
 五(同)下 世  
 地 橋 以 下 力  
 五(同)下 世  
 上 湖 山







同治元年  
 三月  
 庚子百五十五號  
 九月  
 黒田  
 松田  
 如法  
 出  
 里  
 つ

大松川御

福萬其十

福萬清

之要言

怪人説  
て

夜蚊居頃

卷之四

矢

多  
少  
の  
人  
が  
入  
る



黒田藩主  
豊前侯 赤松  
過 静 臥  
法 米 塩 糠  
く し ち を 煮  
く し ち を 煮  
此 福 乃 清 水  
味 甜 々 大 津 子  
丹 島 を 煮 じ 甘 味  
あ じ っ ぽ  
り っ ぽ  
り っ ぽ  
山 上 の  
室 法 師  
あ じ っ ぽ  
あ じ っ ぽ  
あ じ っ ぽ  
あ じ っ ぽ  
あ じ っ ぽ

四九



大壺河知其一土

福萬邑

地福長者

其書

萬  
世  
長  
存

人其地福の福

万徳の徳を以て

福  
万  
三  
五  
七  
九

長者保身之法

保昌居

此蕉山志今錄焉

光緒二十九年

石をよめるを  
 石をよめるを

てちり曲々

九曲

卷之五

志

卷之五

10



長山鎮  
 木ノ籠  
 本居  
 七神山  
 仙北郡  
 南郷  
 在り

雪出羽道(平鹿郡十四)



大玄河郷 其十二

稻<sup>田</sup>万邑

山神社

丙  
大富又藤

地藤 古木ありて 祭  
少きも花こころ多  
くありて 村三木よ  
けひ 鍾の多き 村  
大なる 花のす 抱あり 地桂  
山神と 祭ありて  
桂 倒れし 後日  
今の 神社と  
建しと ン









大森河郷其十二

袖山 外山に城跡あり  
奥羽三年より

和名抄

平鹿郡

山川 大井 邑知

と見えたり

福万邑より路

一里半ありて

大井とよみあり

そとより河を越

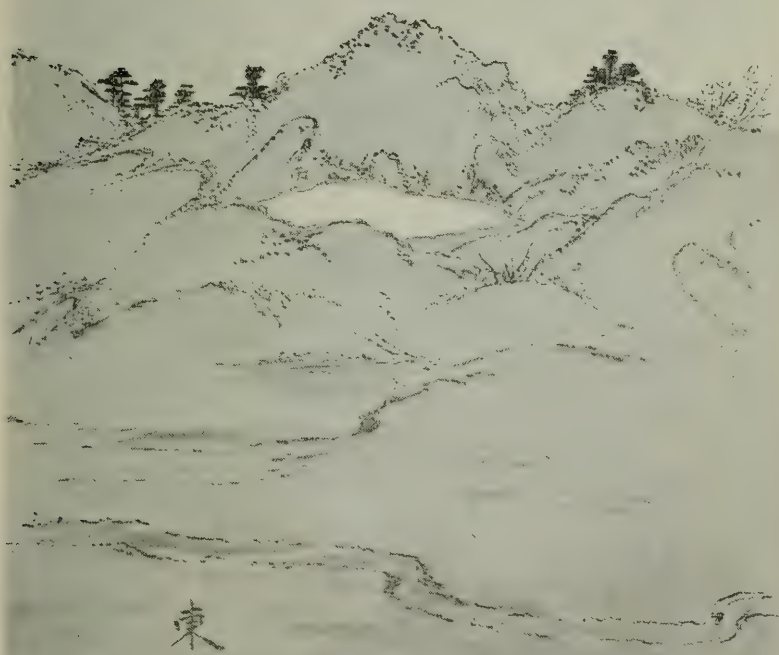
祖父ヶ基といふ所あり

いふと家多し

地動小川に埋れ

と云ふに怪くあり

穴ありと云



田

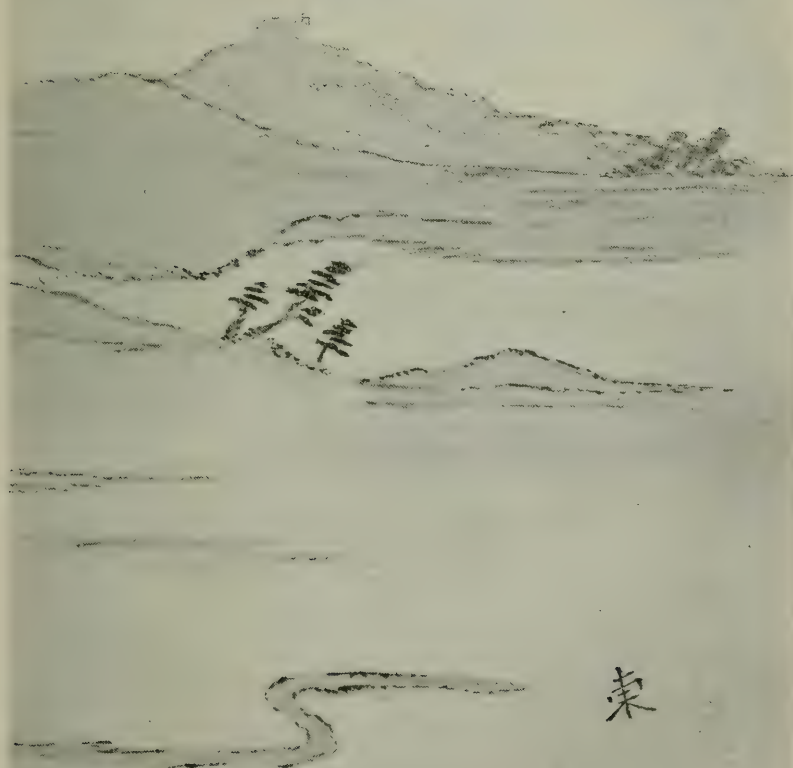
郡邑記云租父今甚至  
家負二軒とあり  
字子保元文宣元年の頃  
ニニ戸とあり  
字子保日記云租父基  
りる人とも世ありの  
租父々基と唱是和名  
邑名と地名ありと  
大井 西今上沼と湖の  
ありありと大井の塔蛇  
とありとありとありと  
谷地眼とありとありと  
蛇の尾も大井の里あり  
山川を分こしとありと  
地山の山河ありとあり  
とありとありとありと  
とありとありとありと  
山川を分こしとありと



大森川郷其志

箱山

甲 古柵跡  
乙 外堀跡  
丙 遠強分



東

某<sup>いふ</sup>人の居城<sup>いふ</sup>  
 此れ古館の跡  
 血木福万と名<sup>いふ</sup>  
 夜殿居<sup>いふ</sup>海の名<sup>いふ</sup>  
 多<sup>いふ</sup>いふと安<sup>いふ</sup>宮<sup>いふ</sup>坂  
 夕<sup>いふ</sup>れき<sup>いふ</sup>らふ<sup>いふ</sup>し

田



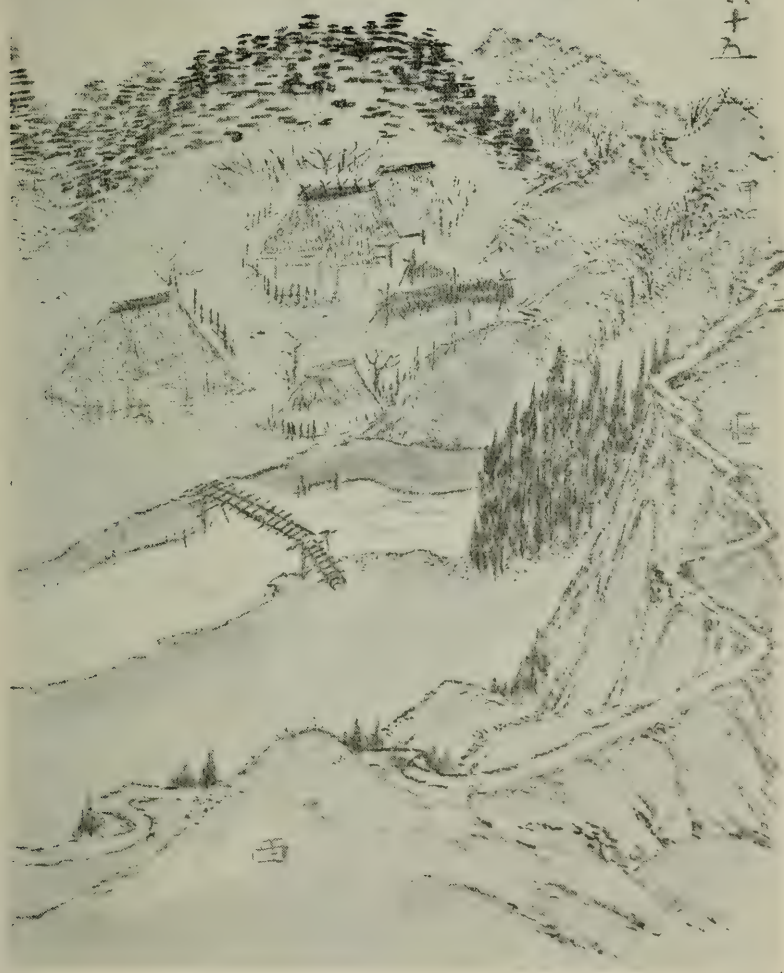
山



大松川郷其十五

袖山邑

甲  
鳥屋土倉  
乙  
雀合



雪出羽道(平鹿郡十四)



大森川郷

其十六

袖山邑

甲山石倉權現山

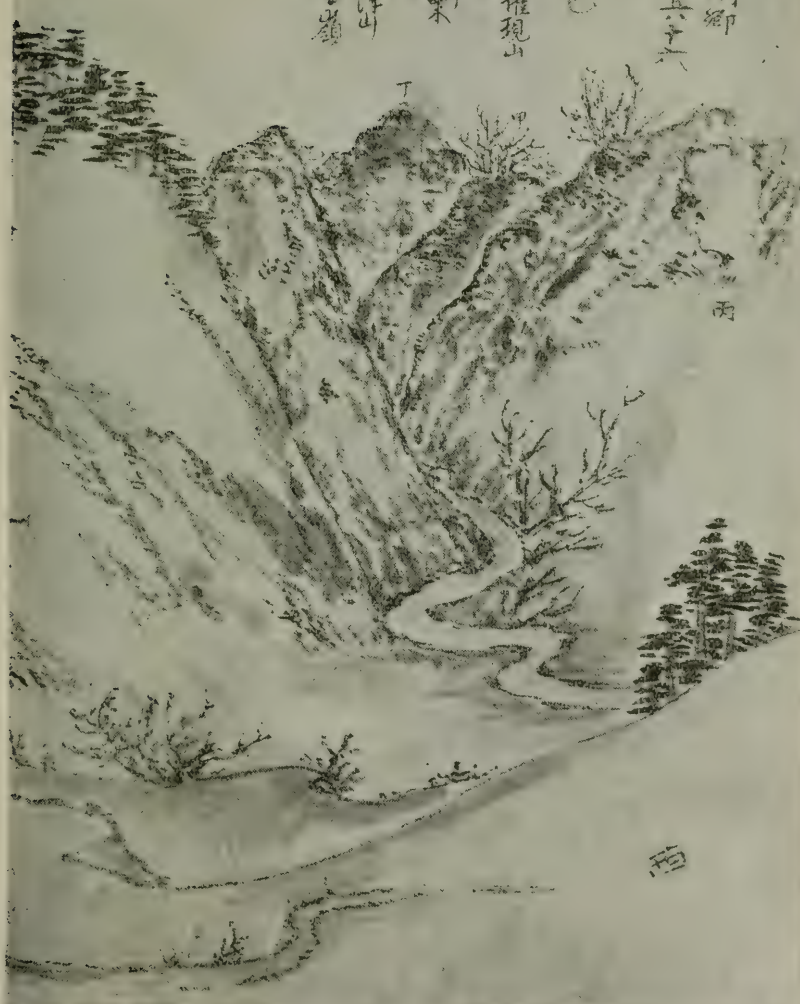
乙大龍潭

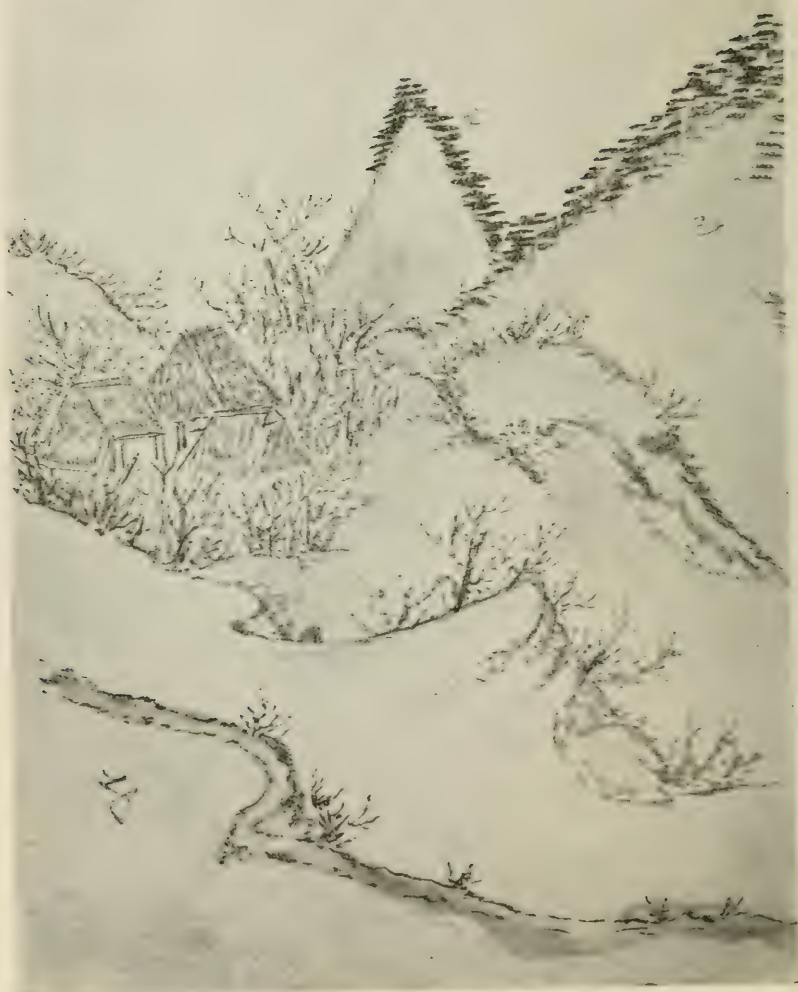
丙四本 鉤栗

丁高岩

戊下 鷹場山

己遠 長嶺







大倉川郷 其十七

袖山邑

七

至全谷地眼如

而知大場基の谷地

其温清なる園とて

涌臺と云き全とて

多き岩嶺藤太と云

岩富と云岩西と云

あゝかきと云と云

此事本行と云と云

乙湯の岬岬と云

見れ

丙と云山

丁地ある木林の

後板屋と云

半と云

天明三四年人

今もあつむうと

大田と云世の中



天のつりや  
 雲の五戸ら  
 神の赤倉  
 神の赤倉

戊如神嶽

本嶽山

仙水郡新部郷

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

乙南大書

雪出羽道(平鹿郡十四)



大松川郷

御山

其大

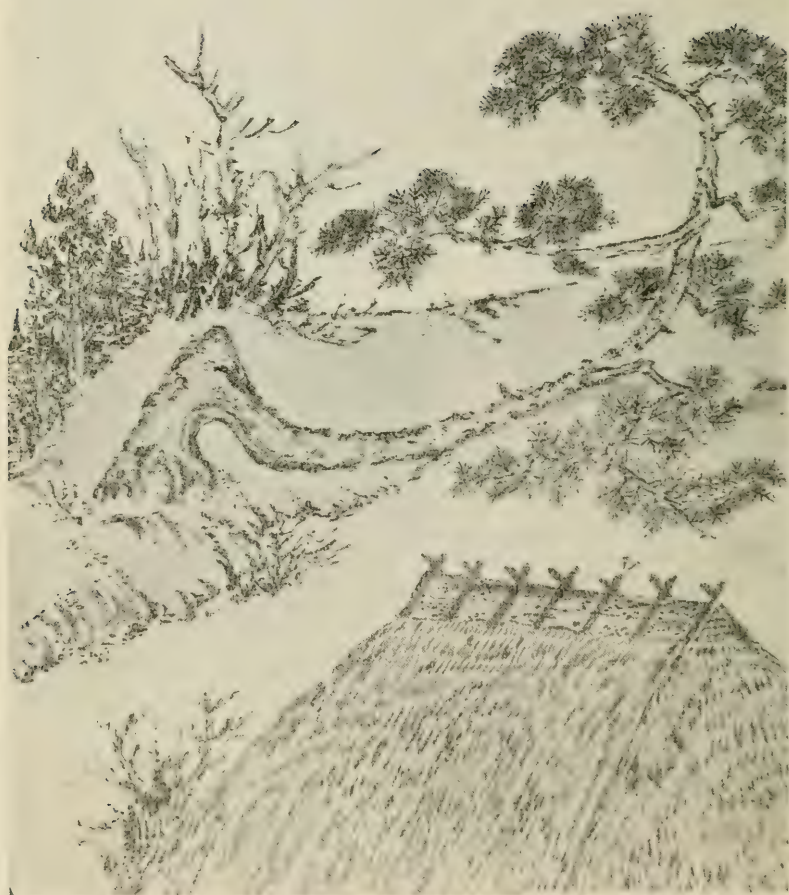
臨湯子神社

火焚舎

長末

西橋手道  
丁山内







大森川郷其十九

征嶽の

御手洗

甲寅

乙卯

丙辰

丁巳

戊午

己未

黒森山

八千長峯

長庚庚

副川神社

羽字志別

神社 臨湯房神社

一目小宮





大松川郷 直二十上

御山北麓

福山邑

山神社

七葉松

地蔵木



字神  
巨神  
すむ

## ○山内脱漏

○山内の後邑、また小松川邑など、山の山溪に在る卵の如<sup>キ</sup>石、或ハ手毬のごく、あるは蹴鞠の如<sup>キ</sup>石を打碎て見れば、其内に蛤、いたや貝など、のあらはれ出る也。こは雄勝郡若畑村の山奥、秋田郡勝手<sup>ノ</sup>社の奥金壺山にも貝石あり、また其外にも産<sup>じ</sup>る也。また海なき國から、甲斐のくに鶴<sup>ノ</sup>郡の黒地山は富士の麓也、ここにも貝石あり。近くは南部の浪打峠にもくさく<sup>ノ</sup>の貝出る也、いにしへ海の變地ならむといへり。

○黒澤村の與右衛門が家に大幅の曼荼羅を家藏<sup>カサジ</sup>、長六尺、幅四尺五寸。二月十五日、七月七日、十二月十五日、一とせに三度掛て是を拜禮<sup>ウガマシ</sup>む。七月七日は南部の澤内を始め、隣國の人こらもをろがみ奉るこて、うち群れてはるくごまゐり來て賑はへり。さばかり絹の全<sup>マタキ</sup>、繼<sup>ついで</sup>たてしものならず。いくばくの年經たらん黒くすづきてそれと見わくべうもあらねど、彌陀經の曼荼羅にや、佛菩薩の面想、七重欄楯、七重羅網、七重行樹など、の筆さび世のつねならず。こはもろこし人曼徴<sup>マンテウ</sup>など、の画るものにや、また明兆<sup>アキヲ</sup>など、の筆にやその眞をしらず。古來此曼荼羅は、雄勝郡岩井川村の奥山三<sup>ノ</sup>森峠とて、仙臺、南部、秋田の三領の地境なるを以三森の名はある也、此嶺高山にして四時雪のしろく見ゆる。そこに慈舟<sup>ジシフ</sup>



寺とてむかへ佛刹ありしといふ。いつのころならむ、その寺に山賊の入りて住僧、小法師どもさしころし、財寶を捕り去<sub>レ</sub>といへり。其寺の閑居和尚此平鹿郡黒澤邑に在れば、しか寺の曼陀羅をはじめ、寺に残りたる佛具等をこゝに取納め置たりしが今此家に傳ふ。兵亂のころにて閑庵<sub>いはい</sub>も焼亡、峯の古寺もやけたりといふ、今その佛具、經典、位牌等を此民家に傳ふ。法華經の卷末に「奉寄進大乘妙典　元龜五年甲戌四月四日　心陽坊正覺寺東策代」とあり。元龜は五年に至らず元龜四年に天正と改元<sub>てんしのかはり</sub>てけれど、里はなれたる深山にて、其寺にては年號改たるも知らざりしなるべし。今はた一卷の末には、「天正七年卯月八日　今司東齋」とあり。その有りし慈舟寺は自然<sub>おのづから</sub>こぼれしにや、また野火<sub>や</sub>なごにやかれしにや、しらすともいへり。今も礎はその世のまゝに苔むしたりとか。そこに在りし慈舟寺は陸奥<sub>むつ</sub>江刺<sub>えさ</sub>郡黒石<sub>くろいし</sub>郷念花山正法寺の僧侶すみつるよし、そは此平鹿郡増田村の満福寺の開祖、梅榮元香なるよしをいへり。ゆるよしありげなる事から、さだかにはえしらざりけり。

寺の記見  
えたり。）

（天註——梅榮元香和尚は松原村補陀寺ノ鼻祖月泉良印和尚嗣法なるよし。かの

○田代村に代々嶋田源助といふ舊家あり、此民家に猿酒<sub>さる</sub>てふものを造<sub>かみ</sub>して沾<sub>うる</sub>る也、こは腹の病にしるしありといへり。此島田が上祖は伊勢ノ國より來る人にて、創は山北金澤<sub>すみ</sub>に居住<sub>すみ</sub>て家衡に仕ふ。ある人の云、猿酒は金澤の城主家衡の家方にて、實父清原武則、代獼猴三頭を捕りて皮と筋肉とを去り、膽と背肉を寒水にひたす事三十日、かくて日に乾し美酒<sub>さけ</sub>に漬、また六月の炎天に乾、かくて後鹽水にひてて甕に

内て、蓋をふんして三年を経て、一盞飲ばまた鹽と水とを一坏入レ、一合汲ばまた前の如に鹽と水とを入也。しかして後は千歳を経とも、つゆかはる事なし。病愈る事、またなき藥也といへり。後三年の落城のとき、此獼猴酒の甕を持去りて山内の田代邑に身をまったく避れて、其代は家に鞍、鐙なども持しが、菩提寺なれば金澤の祇園寺禪林に寄附せしよしをいへり。

○筏村の三十番神の前なる畑の雪の上に、除夜更て大松明の式あり。それは麻柄をいたくつかね、其形笄の如く大に作りて十二節の結目あり。こを二本作り立て上筏、下筏に準て、それに火のかゝるを見て一とせのなりはひ、また、なにくれとてそのためしあり。夜明れば、去年來ける初賀集り、卅番神廣前の雪蹈ならして相撲あり。これも筏の上下と方わかちこる、此勝負を見て一とせのよしあしを知れるためし也。神官神前にて、油餅とて大なる備餅に吳桃の油をぬりて、それに火を附てもやし、是を此元三日、村の家毎に分くばるは疫病を避まじなひなりといふ。こは雄鹿の本山の、正月の油餅の神事にやゝ似て異ものなり。



後酒醸

一尺二寸五分 八寸五分 高四寸七分 竹筒リ

此は酒の瓶子で、  
人からめかくして一箇の  
く、そのまゝに置く

此は酒の

人からめ

名を

おくれ

とる

うしろ

清酒造の

世に伝

るこゝろ





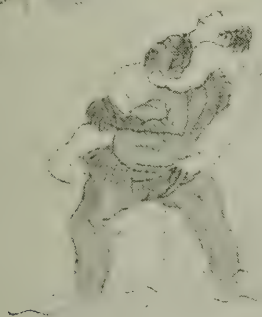
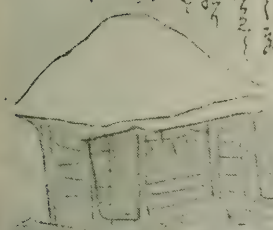
山内御後村鎮守  
三々香神社あり  
元三日吳桃油  
銃火を以て  
饒新の背に  
胡麻の油を  
九雄鷹のつと  
樹を以て





歳旦は元日の世に  
大抵の前日初詣集り  
雪の跡もまだおぼ  
る

田舎の上の花  
金もみもみ  
くもみもみ  
みもみもみ  
みもみもみ  
みもみもみ



雪能出羽路

平鹿郡(追加)





# 雪能出羽路

彌澤木莊 ○四卷止

弓 懸ノ松

## 守屋氏家錄

摩利支天山緣起

守屋氏家譜

## ○守屋氏系譜

○守太夫

養老七癸亥出生。延暦二十年辛巳三月十八日行年七十九歲卒ス。木像今ニ有之。

守屋大連苗裔ニシテ和州吉野郡ノ産也。保呂羽ノ神像ヲ守護シ當領ニ下降シ、八澤木ノ地ニ居住ス。天平寶字元丁酉年、郷民十人意ヲ同合シテ宮殿一宇建立シ、神像ヲ安置シ奉ル。其子孫今ニ連綿シテ殿原

ト號ス。（天註）考「末卷ノ一葉には權現ノ守にて候間守屋と申候とあり、また此處には守屋大連ノ苗裔なり」と見えたりいづれか眞言ならむ。また下居ノ社記には神樂男守太夫守神樂殿と見えたり。

○祭 事

○正月三日、殿原拾人打揃テ神酒ヲ献ス。○三月三日○四月八日○五月五日○六月十五日○八月十五日。五ヶ度ノ祭事ニハ殿原二人宛組合神酒ヲ献ス。應永元甲戌八月、神ノ告アリテ神形ヲ寫シテ保呂羽山ヘ引移ス、金ノ神像ハ本宮ニ在ス。故ニ祭事如前於本宮營之、殿原モ本宮ヘ斗神酒ヲ献ス。

○四月八日大祭○御神輿渡御アリ。神主某御神幣ヲ持神輿ニ副、神樂役、社人、並神子、殿原、末社守護人、某ヘ供奉ス。大友氏御鉾ヲ持御獅子ニ副、先拂ノ行列トナル。

○八月廿七日、保呂羽山舞獅子守屋ヘ入ル。翌廿八日大友氏ヘ入ル。

○十一月六日年中祭事ノ終ナリ。○六日守屋氏ニテ營之、ヲハリテ神樂役大友氏ヘ引移、七日同家ニテ營之。舞獅子、並十一月年中ノ終ノ神事大友氏ヨリ前日ニ營スル譯ハ、私家ハ舊本ノ故ナリ。

○守治郎 天平神護元乙巳歳出生。仁壽三癸酉歲五月七日、行年八十九歳ニテ卒ス。

神事式法定之。

○守太夫 天長七庚戌歳出生。延長元年癸未三月六日、行年九十四歳ニテ卒ス。

○守次郎 貞觀十八丙申歳生。康保四年丁卯歲六月十六日、行年九十歳ニテ卒ス。

○守太夫 延長二甲申歲生。永延元年丁亥八月七日、行年六十四歲ニテ卒ス。

○守次郎 康保四丁卯歲生。天喜五年丁酉四月十一日、行年九十歲ニテ卒ス。

○守次郎 嘉保元年甲戌三月十日、行年八十歲ニテ卒ス。

○守次郎 保安三年壬寅正月廿五日、行年六十九歲ニテ卒。

○守太夫 建久二年辛亥十一月三日、行年九十歲ニテ卒。

○守治郎 元久元年甲子十一月十日、七十六歲ニテ卒ス。

○守太夫 承和四年庚午二月五日、七十一歲ニテ卒ス。

○守太夫 文永十年癸酉二月八日、行年八十四歲ニテ卒ス。

○守次郎 弘安十年丁亥正月廿一日、行年五十八歲ニテ卒。

○守次郎 貞和元年乙酉二月朔日、行年七十九歲ニテ卒。

○守太夫 文和三年甲午十一月九日、行年五十九歲ニテ卒。

○守太夫 應永元甲戌秋八月神ノ告アリテ、靈山ヲ觀ルニ、守護ノ本宮ヨリ峯通り、西山ノ嶺ニ鷲飛來

テ留ル。其地ヲ尋スルニ、ホロハ一羽落テアルヲ社地ニ定メ、清祝シテ保呂羽山ト號ス。○同二年○三

間四面ノ社堂ヲ造立ス。○同三年丙子四月八日、本宮ヨリ神影ヲ寫シ遷座ス。其日大祭日ト定ム。本尊

釋迦牟尼如來ナル故ニ四月八日祭日ノ由庶人唱ケレバ、全相違ナリ。遷宮ノ日ナル故ニ大祭日ト定ル



由申傳ナリ。祭神大己貴命ナリ。

(天註) 一守屋家傳來縁起云、ふもの末に見えたり。其一葉に、當山鎮座之事天平寶字元年丁酉云云、華金峯山而建立堂社、號保呂羽山天國寺とあり。抑、保呂羽山御創立の

事は世々に流布する諸書に詳なり、さりけれとその書をも、守屋の姓名見えざるなり。また、應永元年に本宮より保呂羽山に移し奉れりとは縁起の説と違ふ也。一社の來由、一家の傳説に齟齬せる事いかゞ。

○保呂羽山ノ御正體、某守護ノ本宮ニアリ。家嗣シテ一七日隔座潔齋シテ、七日メノ夜丑刻一生一度尊拜ナリ。其姿不言不語、萬一言語ミダリニスル時ハ其縁類族ヲ絶トノ社傳ナリ。其節遷座ノ道筋古跡、

今ニ、元宮ノ後ヨリ保呂羽マデ僅ニ在リ。○吉野ヨリ守護ノ末社元宮ニ勸請シケレバ、數社ナル故、一社ギリニ社堂ヲ造立シテ遷座ス。暫ク守護シテ後守護人ヲ附置タ。神主名號ニテ、往古ヨリ俗別當誰ト書上ス。

○守太夫 延文五庚子歲生。應永十二年己酉十二月十二日、行年四十六歲ニテ卒ス。

○守次郎 應永五戊寅歲生。文龜三甲亥七月九日、行年九十四歲ニテ卒ス。

年齡八歲ニシテ家督トナル。依テ平鹿郡日井明神ノ社司、右衛門太郎ヲ賴テ後見トス。故ニ守次郎姉ヲ太郎ガ妻トス。今ノ大友氏ノ先祖ナリ。守次郎成長ノ上、田地七百刈ヲアタヘ門前ニ分地ス。困窮ニヨツテ、保呂羽山ノ初尾年季廿年ト相定自由ヲサセシム。年季スギテカヘサズ、專自由ヲナス。彌カヘサザレバ門前ヲ追拂ベキ由ヲ守太夫怒テ申ケレバ、神像ヒソカニスミ出シテ、由理郡法内村ノ内荒澤ト申處ノ諏訪堂ヘ持行、保呂羽權現此所ニ飛來、申觸ケレバ、其近村參詣群集ス。依テ、大膽不屈者也ト守次郎怒テ多勢ヲ引供シ向ケレバ、矢嶋領極樂寺ノ先祖吉右衛門、龜田領佐々木、並大友、右三人意ヲ

合、仙北郡、内小友嶋嶽ト云山へ持行、權現コ、ニ飛來ルト如前申シフラス。故ニ參詣又群集ス。イヨ  
ノ、大膽モノト思ヒ、甲冑對シ多勢ヲ引供シ向ケレバ、八澤木ノ郷民跡ヨリ大勢追來リ、三人ノ者ヨリ  
神像ヲ取カヘシ、中分ノサトシニヨリテ和睦。コレヨリ兩禰宜トナル。大友氏、極樂寺ヨリ縁起ヲ借  
書ス。因テ初尾配分ノ事ヲ約ス。權現ヲ諸方持行往來ノ内、食籠ハ大友氏角重、極樂寺先祖吉右衛門ハ  
丸重、是故ニ初穂箱、角丸ト差別アル此子細ナリ。○大友氏、下社家同様、社内掃除等イタサセシナリ。  
○守次郎傳書末ニ出ス。又當家所傳ノ掠處、八澤木ノ内木根坂家數五軒ホト、上溝ノ内蛭川四五軒ホド、  
右兩處大友ニコレヲアタフ。處配ノ田地當家ノ門前田ノ内ニアリ。其後木根坂へ引移ル時屋敷引上テ  
當家ノ畑トナル。○大友家ヨリ田地配當ノ謝禮トシテ、正月三日白米一升宛今ニ連綿シテ當家へ贈ル。  
(天註——伽藍開基記、地藏鼓吹記、また近き永祿、天正、慶長時代を記したる永慶軍記等にも、守居氏と  
いふ人見えず。然るに文龜に、大友の祖を守治郎か後見とせしといひ、かゝらんか。尙たつねへし。)

矢嶋極樂寺守護社諏方堂ヲ保呂羽山ノ元ト唱フルハ、保呂羽山ノ神像大友氏ヒソカニスミイタシテ、  
右諏方堂へ暫時勸請ノ由緒ヲモチテ元宮ト唱フ。龜田領佐々木ガ守護ノ文殊堂ヲ保呂羽山ノ元宮ト  
唱ル事モ、同由緒ナリ。

○守太夫 永祿三年庚申五月九日、行年八十九歳ニナシ卒。

文明五年五月七日、某門前ヨリ二代目ノ大友木根坂へ引移ル時ニ、右衛門太郎夫婦ノ葬身モ堀起シテ其  
夜引取ケル。○守屋同輩相廢シテ大友ト改ム。大友ト改ムルハ、臼井明神ノ祠官ノ時ノ名字ナリ。往

古、大友氏先祖右衛門太郎守護シタル曰井明神ハ、當時龍神堂ト唱ヘテ同處修驗ノ守護社ナリ。

○勝助 初名守次郎、守太夫。慶長三戊戌正月六日、行年九十一歳ニテ卒。

○勝久 初名守次郎、守太夫。○寛永元甲子年叙從五位下、任伊豆守。慶長七年義重公仙北六郷ニ閑居シ給フ。同年七月三日御不例ニ入セラレ、御平愈ノ祈念イタスベキノ旨田中越中守ヨリ書翰到來ス。元宮於神前一七日抽丹精執行イタシ、守札卷數ヲ献ス。御平愈アリテ御初尾判金壹兩、爲御歡御羽織御時服ヲ賜フ。○田中越中守書翰末ニ出ス。○慶長十一年、八澤木村肝煎役御頼ニヨツテ勤之、御黒印今ニ所持ス。末ニ出ス。

明暦四年戊戌六月廿五日、行年九十二歳ニテ卒ス。

○勝言 守次郎、守太夫。○寛文六丙午年叙從五位下、任伊豆守。承應元壬辰十一月保呂羽山爭論アリテ、幕府ノ命ニヨツテ東武ニ到ル。寺社奉行ニ謁ス。同二年癸巳三月、公案分明利ヲ得テカヘル。

願書、日記末ニ出ス。寛永二十年三月八日、義隆公、義處公御兩君御不例ニツキ、御平愈ノ御祈禱威徳院ヨリ來通アリテ勤行ス。御守卷數ヲ献ス。御兩君御平愈アリテ、爲御願賽元宮ヘ白絹、御紋附御戸張<sup>但</sup>ニツ神馬一疋、銀子五匁御奉納、爲御歡御上下一具賜之。威徳院ヨリノ書翰末ニ出ス。○明暦四戊年、大友志摩、保呂羽山初穂一人ニテ自由ノ志有テ不得止爭論ニ及ビ、双方ヨリ公訴ニ及ブ。

上使清水八兵衛、沼井四郎兵衛。上意ノ旨。

其方ハ元宮初穂ヲ所務シ、南部、津輕ヲ掠トシテ、參詣ノ宿料モ多分所務イタス上ハ不足モアルマ  
ジク、大友志摩ハ外ニ餘勢モナク困窮ノ事ユエ、當分志摩一人ニ所務イタサスベシ。志摩、成ヘクモ  
成行クトキハ其方兩人ニテ所務スベシ。依テ志摩ヨリ一札ヲ相渡サスベシ。恐怖ス。

大友ヨリノ印證末ニ出ス。

延寶四年丙辰十一月六日、行年七十二歳ニテ卒ス。

○勝 重 初名新之丞、守太夫、丹後守。

承應元年、父守太夫勝言ニ代テ東武ヘ趣ク。寛文十二壬子八月六日初テ公ヘ拜謁ス。家嗣ヲ襲領スル

ノ恩ヲ賜テ奉謝ス。此時守太夫ト改名。○國社神主社人大頭可相勤命ヲ蒙ル。其節箱入ノ扇子ヲ献ス。

其故ヲ以テ、御入部拜謁ノ時扇子ヲ献ス。○延寶四丙辰年○任官從五位下丹後守。元祿七年六月十日、

本宮○御懸額、壽、御大字、竹ノ御画<sup>高二尺五寸  
幅五尺</sup>金薄朱ノ日丸御紋壹ツ、御實名御居判、朱、御印。御拵ノ地

ハ白羽二重、縁ハ緋純子、紺錦。○御燈籠二、白張御紋付、今ニ神前ニ備ヘオク。○万治元戊十二月、保

呂羽山御宮殿御普請ニ付六郡勸化ノ命ヲ蒙ル。○命令ハ是マデ當家一人ナリシヲ、大友ト兩家ヘ命令

アルハ此度初テナリ。○同二年亥九月○前年勸化出料ニテ保呂羽山御宮殿御普請成ル。

御普請奉行

八 柳 奎 兵 衛  
山 方 五 郎 兵 衛



勸化帳今ニ所持ス。

元祿十二年己卯正月六日、行年七十二歳ニテ卒ス。豐魂神靈ト諡ス。是ヨリ神職ノ式ヲ以テ葬ル。

○勝信 守太夫、丹後守。

元祿十二己卯年任官○從五位下丹後ノ守。

龜田境論地ノタメ京都ヨリ飯途ノ節江府へ留オカル。○同十三年庚辰十二月十二日○龜田境論地御利

運御賀ノタメ盃酒ヲ賜フ。○同十四年辛巳正月、公ニ拜謁シテ白銀二枚賜ル。○同十五年四月○佐竹

義長公御不例ニテ御平愈ノ祈念勝信ニ申來リ、抽丹精執行イタシ、守札献ス。同年七月○義長公御平愈

アリテ○保呂羽山へ鰐口一面、御初尾銀一枚御奉納アリ、爲御歡御帷子賜之。(天註——大友氏家藏鰐口鐙銘に、

下源義長敬白とあり。元祿十五年七月とは大に違へり。)

元祿十六年癸未正月十日、四十五歳ニテ卒ス。○彦尼神靈ト諡ス。生涯社人大頭勤之。

○勝當 孫太郎、遠江守。

寶永六己丑年○任官從五位下遠江守。

元祿十六癸未年四月十二日、社人大頭引繼命ヲ蒙ル。

正徳三巳年○御嶽、高岳、兩國社御再建。三國社御神號上ヨリ吉田殿へ窺レテ○保呂羽山羽宇志別神社

○御嶽山鹽湯彦神社○高岳山副川神社。右ノ逆御附屬アリ。

御普請料貳百貫目、御上ヨリ當家、大友兩家へ相ワタサル。不足分六郡勸化ノ命ヲ蒙ル。御普請成ル。  
御普請中苦辛ノタメ重病トナリ大頭役ヲ辭ス。御普請中諸帳面、諸書物今ニ所持ス。享保六年丑六月

三國社祈年御祈禱年々執行スヘキノ命ヲ蒙ル。(天誥——御兩社御再興の事に中祖大隅守永貞父子命を奉てこれを勤るに曾祖永歲病死の時ム々、安永六年より兩神主となる。正徳四年高岳山御宮殿成、同五年御嶽山御宮殿成。右兩社我家代々守護すべき旨命ぜられしは正徳五年一月也と、大友の家記と守護すべき旨命ぜらるゝ處也。然るに曾祖永歲病死の時ム々、安永六年より兩神主となる。正徳四年高岳山御宮殿成、同五年御嶽山御宮殿成。右兩社我家代々守護すべき旨命ぜられしは正徳五年一月也と、大友の家記と守護すべき旨命ぜらるゝ處也。多し。)

享保九年、御嶽山、高岳山兩社へ、御藏出三拾石宛六拾石御寄附アリ。同九年辰九月二日、行年七十歳ニテ卒ス。○勝魂神靈ト諡。此節、嫡子西松未熟ヲハカラヒ大友氏願申立、御嶽、高岳、兩國社一人して守護す。

○勝直 西松、藏人。

享保九年辰十二月、社人大頭勤ムヘキノ命ヲ蒙ル。

寛延二年己巳七月七日、行年四十五歳ニテ卒ス。○勝直神靈ト諡ス。

○勝定 久米五郎、丹後守。

寛延二己巳年社人大頭勤ムヘキノ命ヲ蒙ル。○明和二乙酉ノ年任官、從五位下丹後守。

保呂羽山御宮殿、寶曆十三年未三月野火ニテ御焼失。安永七戌年、保呂羽山御宮殿新規御普請成ル。同六年丁酉十二月十四日、祖父遠江守、御嶽、高岳御兩社御再興ノ節格別勤勞、思召、當家大友兩神主タルベキノ命ヲ蒙ル。

同七年戊戌年七月九日○御嶽、高岳御兩國社御神領。

高六拾石  
拾二石五斗  
守屋丹後守

四十七石五斗  
大友小太郎

御判紙高百五十石  
丹後守

同  
百十五石  
小太郎

依之、兩神主へ平均御割合ニテ賜ハラレシトナリ。

○保呂羽山御社領、慶安三年御本田五拾石御寄附アリ、守屋、大友兩家へ廿五石宛分ケ賜フ。外ハ御指紙ニテ頂戴シテ、自分物入ニテ開發ス。延寶三年六ツ成高百五十石ノ御青印頂戴ス。

(天註——御本田五十石  
御寄附あり、守屋、大友

へ廿五石宛分賜ふさいかど。五十石ノ内廿六石は大友、廿四石は守屋、又餘地にて、祭料として拾六石一斗四升五合の田共を寄附し、内拾石九斗四升八合大友同五石一斗九升七合守屋。此事は御判紙ノ面に明白也。

○保呂羽山ノ御社

領不同ノ儀、其節銘々ノ辛勞不足ノタメナリ。○御兩社六十石、不同ノ御配頂ニテ祭事勤行異事ナク同

勤ナリ。○御兩社下社人兩人へ大友ヨリ二人扶持宛配當ス。當家ヨリ一人扶持宛配當ス。只是而已ノ違ナリ。大友ト同勤ニシテ拾二石五斗ノ御配頂ノタメ年々尻打アリ。

○勝重  
捨五郎、飛彈守。

明和二年乙酉八月、於京都吉田御殿受領飛彈守ト號ス。○天明元年丑十月、社人大頭役勤ヘキノ命ヲ蒙ル。

○寛政元酉年○三國社へ御燈籠二ツ宛御奉納。○同二戌年○本宮へ御燈籠二ツ御奉納。○文化二年丑二月○三國社

御戸儀御奉納一社一張宛。御紋附金襴庫裏。

御清料一社分金一粒宛三粒。○同三年寅正月○三國社へ御懸額御山號、御清料前年ニ

同シ。御下書於御膳番相ワタサレ、當家、大友兩家ニ預ル。○同八年未八月九日○義和公御領内上三部

御巡村ノ節、當家へ被爲入拜謁ス。時ニ命ヲ奉テ古書、古物品々入上覽、松茸百本ヲ獻ス。○貞明院様

御服中ニテ御社參御延引ナレトモ、本宮社内御通路ノ事ユエ、御縁通マデ被爲入由緒品々御尋アリ。御

初尾金三粒、外ニ御茶代金一粒拜領之。

同十一戌年、老人ノタメ閑居ヲ願ヒ大頭役ヲ辭ス。

文政五年午閏正月十九日、行年七十八歳ニシテ卒ス。○勝重神靈ト謚ス。

○勝 彭 (原註)本ノマ、  
永吉、卡、肇。

文化八未ノ九月○親飛彈守勝重晚年ニテ社人大頭役相勤ガタク、依之假役相勤ヘキノ命ヲ蒙ル。同十一

戌年四月、父勝重閑居ス。同年五月、舊古ノコトク○三國社神主、社人大頭勤ヘキ命ヲ奉ス。同七月朔

日公ニ拜謁ノ時、去年中親飛彈守引繼○三國社神主社人大頭役○上命ヲ奉テ難有旨、時ノ支配和田殿言

上アリ。

同月五日公御病ニテ、夜五ツ時寺社御奉行處へ被召、御平愈ノ御祈禱執行スベキノ命ヲ蒙ル。御急變ノ

事故、詰處神前へ三國社勸請シテ抽丹誠勤行シ、同六日守札ヲ獻。御老中御對顔アリ、御初穂白銀一枚。

此一條上條ノ處ニ出(朱々マ)  
○同十一戌年九月、某一人ノ守護社保呂羽山本宮ノ正號、御當領ト龜田郡境御繪圖面ニ御障アリトテ、



彌勒堂ト改號スベキノ上命アリテ恐怖ス。宮柄ノ事ユエ、御造營ヲハジメ諸事往古ノ如クタルベクノ印證、支配和田殿、澁江殿連名ニテ賜ル。此砌、開基ヨリノ由緒并古書ヲ、御遷藩以後ノ御留捺ノ書翰數拾枚於御奉行火中ニ成ル。今寫而已所持ベ。

文政五年午四月木山方吟味役片岡敬助、保呂羽山本宮陰林、勝軍山社林兩處へ杉大小七萬八千本余植立見分ノ上、辛勞ヲ思食、爲御賞同九月十六日御書附ヲ副、金三粒賜之。某マテ廿九代、他ヨリ養子トナク連綿家嗣ス。

（）保呂羽山神樂役 佐々木出雲

○出雲先祖ハ、某先祖守太夫當國へ下降ノ節召供ス。故ニ當家ノ家内ニ屬シテ數代連綿ス。田地二百刈與之。又某掠處ノ内八澤木、上溝、外小友、右三ヶ村四季配札、並諸神事はヲ勤メサセシム。（）御嶽、高岳兩社神樂役ハ、享保年中某高祖父遠江守死去、曾祖父藏人未熟ヲハカラヒ大友氏自己ニ立置ク、因テ同人家内ニ屬ス。委クハ遠江守歷代ノ部ニ行リ。

○保呂羽山緣起之寫

○南膽部州大日本國東山道、出羽國平鹿郡八澤本郷保呂羽山大權現奉申、大和國金峯山金剛藏王權現之分身也、藏王權現者人王廿八代安閑天皇奉崇、本地釋迦牟尼如來之應化也、同御宇乙卯十二月十七日崩御、宣化天皇御宇戊午、大和國吉野金峯山金剛藏王權現與顯給、其後百八十余年之後、役行者御身影奉祈

出、百日碎肝膽祈給現地藏菩薩之形、行者怒而曰、如是以柔和之相好末世之衆生化度給事難成云々、故像光飛去河上、猶百日抽丹誠、于時大地震動而涌出二丈餘之大像、其可怖畏、行者大悅爲於涌出之像造二軀、爲三體當山鎮座之事、天平寶字元年丁酉藏王託曰、吾分身諸國欲結衆生緣現鷲之形、可告靈地云々、神主守治郎黎明見之、鷲飛向東、慕跡追行、當國當山之峯鷲落保呂羽一枚、則知爲靈地而遂奏聞（以下、眞澄翁原本十三丁缺）

○承應元年辰十一月 大公儀ヨリ御達ノ御書翰一通。

法内大宮與羽廣村之遠藤和泉、保呂羽山之牛王札之儀ニ付出入有之双方令參府候。其ニ付而、保呂羽別當者大宮と志摩と兩人ニ而、保呂羽山之牛王札之儀は、保呂山ニ參詣之者ニ大宮、志摩兩人ニ而配リ、山下へ持下リ余人配リ候事は無之由大宮申候。其通候哉。遠藤和泉申候者、保呂羽山之儀女人不參所ニ候故、麓之前立迄女人參候。大宮前立は諏訪、志摩、伊豆兩人仕配之前立者普賢、遠藤和泉仕配之前立は文殊にて有之、保呂羽山之儀は右四人ニ而祈禱仕來候故、金峯山寶印と有之牛王札之儀、和泉前代々旦那ニ配來候由ニ而、其方志摩儀も保呂羽山別當と申間、右相論之所正直ニ書付可指越候。若書面ニ而不被申儀ニ候は、一山の儀ニ候間、令參府度候通可申達者也。

十一月九日

右京

出雲 志摩

伊豆。

〔天註——寺社奉行御召狀にも、法内大宮と羽廣村の遠藤和泉と牛王札の事に付双方參府とあり、是は兩別當の公事にはあらざるにかゝあらん。此條なほたつねべし。〕

○承應元年 ○別當公事ノ節先祖守太夫大公儀<sup>五</sup>指上ル願書ニ通。其節御評定所ニテ御尋御答、守太夫覺書共ニ。

乍恐書付を以申上候條々

保呂羽山別當

守屋伊豆守

一 私儀保呂羽山別當ニ無御座候由今度大宮申上候段、無節目僞に御座候事。

一 先祖守屋ニ申者保呂羽山開基仕候次第、并其節之祝言、保呂羽權現乃御本地等之證文、手前ニ御座候事。

一 佐竹右京太夫秋田拜領下國之節、如先例保呂羽ニ神領寄を被致候。私、志摩兩人拜受仕候。證文手前ニ御座候事。

一 毎年正月七日伊豆在所ニ而牛王押仕候。其節氏子共數多寄合牛王いたゞき、七日の夜は氏子どもいづれも本堂ニ參籠仕、同八日、しゆしやうの護摩私相勤申候。其時分志摩も本宮ニ參籠仕、領主ニ指上候牛王此護摩にあはせ申候。拙者と同前ニ毎年領主ニ相納候。此段所々其かくれ無御座候事。

一 保呂羽恒例之祭事に、六度本宮ニ而相勤候前代より祭禮之次第、別紙にさしあけ申候。

一 先年佐竹義重爲祈禱度々神馬寄進被致候時分も、私手ニ而祈念仕候事。

一 秋田諸侍之祈禱數年私相勤候。書狀數通手前ニ御座候付、牛王札毎年侍中に配申候。

一 今度大宮申上候は、金峯山之牛王札大宮、志摩兩人之外余人に配申もの無御座候由申通、大ニ成僞に御座候。四人別當共家々ニ而牛王押仕諸人に配申候儀、秋田、仙北に其かくれ無御座候事。

一 任前代例秋田口は伊豆、横手口は志摩と定り、于今至る迄其通に仕配仕候也。修理太夫家中に



其かくれ無御座候。

一 慶長十一年保呂羽御造營之時（或）志摩と私兩人仕配仕、材木以下相調建立仕候。注文拙者手前御座候。

一 神道に傳り申重代の刀、于今私持申候事。

一 私先祖守太夫保呂羽神體守下し申就、其先祖を守屋守太夫と申候事。

一 保呂羽山卷敷之面、寺號山號之年號、以下御尋に於ては可申上事。

一 寛永元年私と志摩京都（江）被登、吉田様より裁許狀頂戴仕候。右之段々於御尋は、私保呂羽山別當證據共、子共守太夫可申上事。

以上。

出羽國仙北平鹿郡保呂羽山別當

承應元年極月朔日

守 屋 伊 豆 守（花押）

○恒例の御まつりの次第

○正月元日於本宮寅の刻若水、佛供を備へ、卯の刻に伊豆守祝言を讀誦し奉拜神前を、同二日佛供、同三日の佛供伊豆守指上申候。同三日の戌刻太夫たくせん、氏子とも伊豆所へ參於本宮御湯立、志摩守も三日の晩に佛米を持參致本宮に籠、四日の朝に伊豆を頼佛供を上申候。同四日に伊豆、守太夫共迄召連御上へのほり、御洒指上宮籠申候。同五日伊豆守、志摩守、和泉守三人列座仕神前奉拜、

其時志摩、和泉御酒を持參仕神前にそなへ、相別當、其外氏子參詣之者其御酒をいたゞき、而々の御坂下向仕候。同六日に佛供、本宮にて伊豆守指上申候。同七日牛王押。其時一澤の氏子共、伊豆所ニ而牛王をいたゞき本宮に參籠致候。志摩も七日之晩參本宮に籠申候。同八日寅刻、伊豆、本宮にて宮出之卷數、しゆしやうの護摩相つこめ申候。

○三月三日の的行伊豆加持致、其後志摩、伊豆兩人にて的仕候。

○四月七日戌刻御湯立、同八日大まつり。伊豆御幣を持、のつこを讀誦、御輿本宮の御堂を御くねり。其時の役者志摩は御鉢を持御先に立、伊豆は御へいを持御輿に添申候。

○五月五日御まつり本宮に於て伊豆相つこめ、志摩列座仕候。

○六月十五日右同○八月十五日右同 以上、年六度の御祭。

○霜月御神樂六日は伊豆所、七日は志摩所、廿五日は和泉所に而相勤申候。以上。

承應元年極月朔日

保昌羽山別當  
守 屋 伊 豆 守。

和泉守と大宮と公事仕江戸御沙汰相成、拙者

小太郎も御召狀ニ而罷登御沙汰相濟申候覺

○承應元年極月四日國を立、江戸へ極月七日八ツ時參着申候而、則十八日安藤右京様、松平出雲様立罷出御帳、付申候。

○同二年正月十九日御寄合御座候而羽方罷出、右京様、出雲様御意之通、又手前々申上候段々覺。

○守太夫申上候は、此度大宮、私を別當ニ無御座と言上申候事大<sub>キ</sub>成僞に御座候と申、則手前々書付指上申候得者、とうわんと申御侍御覽被成候。又小太郎も書付指上候。小太郎申上候は、大宮申候も僞に無御座候。前代より秋田、仙北<sub>ニ</sub>志摩壹人ニ而金峯山牛王配り申候。由利之内は大宮ニ而牛王くはり申候。一山別當兩人之外無御座と申上候。

○右京様被仰候者、大宮目安、和泉目安、とうわん<sub>ニ</sub>よめと被仰、即とうわん御覽被成。又右京様被仰候者、和泉事は別當ニ御座候かと被仰候。守太夫申上候は、和泉事元來より保呂羽山別當ニ御座候。金峯山牛王持仕候而但馬様へ指上申候事、無其かくれ候。

○右京様被仰候は、山之繪圖はなきかと被仰候時、小太郎繪圖上<sub>テ</sub>申候。御覽被成、羽方の繪圖はなきかと被仰候時新之丞申上候、羽方の繪圖手前に御座候と申上候。即繪圖指上申候、とうわん様繪圖御前へ御上被成候。右京様被仰候は、此繪圖之さはき覺たるものなきかと被仰候時新之丞申上候、私か覺申候と申上候。とうわん様被仰候は、あなたへ參と被仰候。即とうわん様と兩人右京様之御前へ參、即御ひさもとへ繪圖を廣げ、とうわん様被仰候は、扇かすへきこて、とうわん扇御かし被成候。御前に而段々くとき申候。

○右京様被仰は、其元らは兩人別當<sub>□</sub>、誠伊豆は本宮之脇に居かと被仰候。小太郎申上候は、以前

私か上候繪圖にもかき申候、本宮之脇に居申候と申上候。重而右京様被仰候は、本宮の脇に居り恒例の祭をもつとめるなれば、伊豆か別當の大將と云ものぢやと被仰候。小太郎も大宮も、なにも不申候。即新之丞申上候、伊豆、手前がこそ、あれら兩方別當に無御座と申上度筋目候得共、あれらも、いつころより別當罷成、唯今迄四人いたし保呂羽山守護申なれば、伊豆、手前よりは、あれら別當無御座とは不申候。却而保呂羽山開基仕候伊豆を、別當無御座とは大い成偽に御座候。出雲様被仰候は、一段之義を申候、いつ頃よりあれらも別當いたす。依而手前が、別當も御座候とは不申候と云義申上候。

○右京様被仰候は、伊豆手前が別當も御座候と申義も、左様有へきはらの義ぢやと被仰候。重而手前が、義重様が御祈念被仰付候御狀、方々侍衆が之狀上候。即右京様出雲様御覽被成、さて慥の證據持候。別當を別當に無御座とは偽に御座候と御立腹被遊候。右京様被仰候は、此繪圖を兩人、別當か前に面、今之こくくとき申様と被仰候。即新之丞御前を罷立、どうわん様繪圖を持、大宮、小太郎前ひろけられ申候。どうわん様被仰候は、夫程偽なきを、なにさて別當無御座と申候やと御意、さん／＼兩人のものこまり申候。また右京様被仰候は、此狀羽黒よりの使僧に見せ候へと被仰候。ひみつのものこまりとは無御座候へと御意、どうわん様、右狀を羽黒より之使僧に御見せ被成候得は、偽に無御座候と申候。小太郎申は、拙者も家指置こなたへ持參不申候間、上不申と申上候。



新之丞申上候は、小太郎僞申上候。義重様を御祈念被仰付候は伊豆にこそ被仰付候、志摩<sub>ニ</sub>被仰付候義無御座候。證據家に置候とは僞に御座候。元來々之別當を別當<sub>ニ</sub>無御座とけつる程のものが、證據家に置候とは大い成僞に御座候と申上候。

○右京様被仰付候は、別當取聞濟候。大宮、志摩千人に而云共云はせる義には無御座候と被仰候に、和泉所へ又御尋御座候。

○正月廿二日、御評定場へ羽方罷出候。和泉、大宮<sub>ニ</sub>斗御尋<sub>ニ</sub>候。權之丞に被仰候而、しやうこ之狀上申やう<sub>ニ</sub>と權之丞申上候。拙者狀を上申候。どうわん様御前へ指上被成候跡は、阿部豊後守様御覽被成、別當<sub>ニ</sub>隠<sub>レ</sub>なきと斗御意候。其日別に御尋無御座候。

○三月四日御評定場へ罷出候。跡は田中助左衛門殿被仰候者、豊後守様御聞あけ被成候沙汰に御座候へは、今日は豊後守様御出不被成間、十四日に罷出候様と大平伊豆様御意御座候とて、助左衛門様に被仰候間其日は罷歸り申候。

○三月十四日羽方御評定場へ罷出候。和泉弟權之丞を□かけ座被仰付候と御意之時新之丞申上候は、大宮大なる僞者に御座候。和泉別當<sub>ニ</sub>無御座候と申さへ僞<sub>ニ</sub>御座候。保呂羽山開基仕候別當伊豆を、別當<sub>ニ</sub>無御座とは大い成僞<sub>ニ</sub>御座候。御聞濟おかれ被仰可被下と申上候得は右京様被仰候は、先度いひつけのことく、おのしか沙汰はたんできちや。先規のことく別當仕候へと被仰付候。

○三月十九日安藤右京様、松平出雲様、守太夫、和泉守兩人罷出、今度大宮、小太郎、それがしを別當、無御座と御前へ申上候得共、證據一入御聞濟被仰付忝奉存候。尙子孫末代のため、御座候間御すみつけ被下度候と申上候得者、

○右京様被仰候は、おのしか沙汰は理々たんた<sup>ニ</sup>仍<sup>テ</sup>、天下之御帳<sup>ニ</sup>被付置候。御老中御判おし天下之御藏<sup>ニ</sup>納め置れた義に候へは、御世の有かきり天下の有かきり、少しも一山之義<sup>ニ</sup>付おそろしき義有義者無御座候間、罷歸候様と御意<sup>ニ</sup>御坐候。

○又追々申上候得は、天下の前<sup>ニ</sup>而濟候沙汰には、なに墨付迄<sup>ニ</sup>及義には無之候。おのし斗<sup>ニ</sup>は無御座候と御意候。又被仰候者、山は仙北之山<sup>ニ</sup>而まつりを仙北にて勤候へは、さやうに心得候へと被仰候而、御帳へ書付置候。

○書申事多御座候得共、左様<sup>ニ</sup>はか、れ不申候。如此。

承應二年三月十九日

保呂羽山別當

守 屋 守 太 夫  
同 新 之 丞

沙汰御濟被下候御大名衆覺。

正月十九日には内寄合と申、此は兩人ノ衆寺社奉行<sup>ニ</sup>而御座候。

寺社奉行

守 藤 右 京樣

松 平 出 雲 守 樣

正月廿二日御評定場ニ而御聞被成候は、

天下之御奉行

安 部 豐 後 守 樣。

○明曆四年 保呂羽山初穗義ニ付上使ノ時大友志摩ヨリ受取候書附。

○保呂羽山本堂造營之儀兩人其相談可仕候。其外堂塔は其役々之者ニ申付、猶御鉢之義銘々のごとく可仕由、此度清水八兵衛殿、沼井四郎兵衛殿を以被仰付候。右之通以來違背仕ましく候。爲其一筆如此ニ候以上。

明曆四年戊三月八日

伊 豆 守 殿。

志 摩 守 居判

○寛文十二年子八月六日中祖新之丞家督拜謁ノ時、於公新之丞ヲ守太夫ト改名被成下候覺書。

○屋形樣御前江出仕致候時指上申物之覺

一 銀子五匁

扇子五本 扇子箱上々

一 同一匁五分

上々焼杉箱五本入。

○御老中様へ指上物之覺

一銀九匁

扇子十八本

一同六匁三分

燒杉箱二本入九ツ

一同四匁

扇子二本右ハ御役人衆へ

一同三匁

桐二本入十箱

ハ二十九匁一分

子ノ八月朔日

扇

よつや瀬兵衛。

○上り臺之覺

一銀一匁二分

上<sub>リ</sub>臺杉ニ而五本入臺一ツ

一四分

小臺一ツ

一二匁七分

二本入臺九ツ

一八分

へぎ十枚

一五分

狀箱一ツ

ハ五匁六分

八月二日

ひものや半左衛門。



○寛文十二<sup>壬子</sup>歲八月六日之九ツ時分梅津圖書殿御取次ニ而御前ニ被召出候。御前ニ而則守太夫ニ被成シ下候。梅津與左衛門様、多賀谷左兵衛様、梅津半右衛門殿、右之御衆御次間ニ而御意には、幾久別當致珍重目出度と御意御坐候。圖書殿被仰候は、守太夫ためには有難仕合奉存候と御あいさつ御禮ニ仰被下候。しぶえ宇右衛門殿御意ニは、伊豆隱居之義も相濟家督も無異儀拜領、彌守太夫ニ御前ニ而或被下候段珍重目出度有難儀ニ御座候と被仰、佐竹山城守様ニ而も左様御意御座候。彌爲祝儀銀子十匁被下候。

○寶曆十一年巳三月

保呂羽座席之義被仰渡之御書附一通。

覺

保呂羽山神式座席之義ニ付同役大友大藏介與爭論之儀、舊臘大藏介及訴候。仍而、右座席之儀的證に相成候書付等有之候は、可指出與申渡候所指而書附茂無之由、仍而遂吟咏候處、座席之儀的證無之候。依之此末、正月五日御祈禱之節先<sup>キ</sup>江致登山候者先<sup>キ</sup>ニ御祈禱相勤、跡ニ罷出候は扣居候而、最初罷出候者御祈禱勤行畢候は、可相勤候。且又自分故障有之名代を以相勤候迎茂、先<sup>キ</sup>江罷出候者は不及爭論可致勤行候。名代之者大友自然ニ致登山候は、大友勤行畢而上可致勤行候。自分共義者兩神主之義、猶同役を茂相勤候事、諸事相愼爭論無之様ニ可被心得候。以上。

寶曆十一年巳三月廿一日。

○寶曆十三年 保呂羽山御神器一件付御指揮、御書附。

覺

保呂羽山御宮殿神器之類自分擔候故、雪中相成候得者自分方下置候由。此度神器之類燒失不致候故右之段先頃相届候所、兩神主之事故、久米五郎申談兩人可申立候旨申合候付、久米五郎連判之儀申談候得者、自分擔與申事而者連判不相成候。預置候神器燒不致趣候得者連判可致旨久米五郎申談候付、預與致候而は甚相障候儀有之候間、擔之次第を以久米五郎連判致候様被仰付被下度候と申出候。仍而此度御吟味之上被仰渡候。保呂羽山之儀者自分、久米五郎兩神主之事故、神器之類自分擔與申に者無御座候。神器之類者兩人擔候へとも、自分方番人等付置、雪中相成候得者番人を引置候事故、右神器者自分預り下置候事而、全擔と申而は無之候間此段左様相心得、都而保呂羽山之義付申立候義者兩人より可申立候。右之趣久米五郎も被仰渡候間左様可相心得候。自分共義者古來數代大頭役同役も相勤候家柄而、何角同役間爭論致候而者配下之指揮にも相障候事候間、能々勘辨致一和可相勤候。右之趣被仰渡候。以上。

未四月廿五日。

○安永六年 御嶽、高岳兩御國社神主職被仰付候御書附二通。

覺

社人大頭  
守屋丹後守

大友小太郎

從先年御嶽山、高岳御兩社之儀大友家<sup>元</sup>當分取擔被仰付被差置候所、此度御吟味之上自分共兩家<sup>元</sup>神主職被仰付候間、此旨可相心得候。

一 保呂羽山御神式是迄家格を以勤來候儀、并御嶽山、高岳山御神式共<sup>二</sup>申合諸事無異別一統<sup>二</sup>可相勤候。以上。

十二月。

○同七年戊七月 兩國社御神領高御配當被成下候御書附一通。

覺

守屋丹後守

大友小太郎

去酉十二月中御嶽、高岳兩國社神主自分共<sup>元</sup>被仰付候。其砌御神料高六十石御配當之儀不被仰渡候。仍此度御吟味之上左之通御配當被成下候。

一高六十石

御藏出

內三十五石

大友小太郎

但御判紙高百五十石<sup>江</sup>御償百五十石都合<sup>二</sup>被成下候。尤小役銀共。

殘高貳拾五石

内拾貳石五斗

守屋丹後守

同拾貳石五斗

大友小太郎

右之通可致所務候。

一 右御兩社小破之節者小太郎方<sup>二</sup>而修覆可致候。及大破候者右入目三步壹丹後守指出、三步貳者小太郎指出修覆可致候。

一 社式<sup>二</sup>付諸事入目并下社家共宛行等右<sup>二</sup>准、丹後守三步壹、小太郎三步貳可差出候。

戊七月。

○安永六年丁酉十一月廿四日

座席儀被仰渡候御書附。

覺

自分共御目見被召出候座列之義延享三寅年申出候<sup>二</sup>付、御吟味之上自分共兩方<sup>江</sup>も其砌被相尋候得共、双方共<sup>二</sup>爲差其證<sup>義</sup>無之旨申出候。然者、寶永年中天祥院樣御入部之節被改置候御目見座列之義者先官後官、同官位之節者年老次第被召出候。御格式帳御吟味上<sup>二</sup>而、元祿年中之通大友家上座致候樣<sup>二</sup>先年被仰渡候。依而御目見之節座列之義者、寶永八卯年御格式牒之通先官次第可被召出候得



共、此度格段之御吟味を以、以來座席之義大頭先後次第被召出候間、此旨可相心得候。以上。

十一月。

○大友大藏之介<sup>ト</sup>矢嶋領極樂寺初穂箱<sup>ノ</sup>義<sup>ニ</sup>付、内濟<sup>ニ</sup>可致取扱丹後守へ被仰合<sup>ノ</sup>書附。

演 說

○此度矢嶋領保内村極樂寺<sup>ト</sup>、大友大藏之介増答之趣大藏之介方<sup>ヲ</sup>訴出候。然は、御宮御普請之節極樂寺方<sup>ヲ</sup>茂柱致寄進候舊例在之事に候。内々御棟上之節相應之供物捧候而茂、此方御神式<sup>ニ</sup>相障候義茂無之事<sup>ト</sup>相見得候。且又、平生角鉢丸鉢を鉢<sup>ニ</sup>ツ共に神前備置候事に候得は、不限極樂寺致所務候て不苦事<sup>ト</sup>相見得候。他所へ相拘候義者御裁許之節不容易事<sup>ニ</sup>候、別而上意等茂在之事故諸事可相慎事<sup>ニ</sup>候。右一件對、御神式御當領御障之儀茂在之間敷儀<sup>ニ</sup>相見得候。自分儀者神主職之事<sup>ト</sup>申、大藏之介は同役の事故、自分孰斗意之筋在之間敷儀にも無之候間、宜敷思慮、内事<sup>ニ</sup>相濟候様<sup>ニ</sup>大藏之介<sup>ニ</sup>可申談候。以上。

八月十日。

○保呂羽山棟札<sup>ノ</sup>寫、本宮ノ分寫數枚、書載不仕候。御用<sup>ノ</sup>義候得者本紙御高覽入可申候。

○拜 領<sup>ノ</sup>御 品

○御上下 一具 ○御重鉢 一 ○御茶臺 一 ○御鹽入 一 ○御掛物 一 軸<sup>馬ノ御画、御名乗御居印有り</sup>

○大砂鉢京 一枚 ○御水吞スベ 一 ○御皿 二枚。

右七品

○義格様仙北筋御渡野之節極密々之御忍ニ而本宮ミヤ御社參、私宅ミヤ御止宿被遊候節拜領仕候由、今、所持仕候。乍去御器物は左而已結構之御品ニ相見得不申候。

○保呂羽山山繪圖正保年中被渡置ノ由、今、所持ス。

○三 國 社

保呂羽山 ○波宇志別神社 祭神 大己貴命 少彥名命

神主 守 屋

御嶽山 ○鹽湯彥神社 祭神 鹽土翁

神主 守 屋

高岳山 ○副川神社 祭神 姫大神

神主 守 屋

保呂羽山 本宮

神主 守 屋

文化十一戌年御當領ト龜田ノ御境御繪圖面ニ御障有之、上命アリテ彌勒堂ト改號ス。

祭神 保呂羽山ト御同躰。

保呂羽山末社

保呂羽山 ○下 居 神社

神主 守屋 祠官 遠藤數馬

守太夫吉野ヨリ保呂羽山御神像守護シ罷下リ、右御神像ト御同殿ニ本宮ニ安置シ、應永三年保

雪能出羽路（追加）

呂羽山開起シテ御遷座ノ時、高山故ニ老若男女ノ參詣不叶故、坂ノ内女人堂ト號シ開起シテ、稍シハラク直ニ守護ス。

○正保年中

遠藤數馬先祖、津輕青森より參候か、屋太郎兵衛と申者に而、寛永五年、當所助左衛門と申者舊來御百姓に而保呂羽山御殿原ニ御座候。此者太郎兵衛借宅致候。七八年立而、右太郎兵衛貯も多分有之付、田畑山林買立一軒之百姓となり、家藏張立物不足も無之事故伊豆守娘吳置申候。甚惡女之事故、同人生涯中保呂羽御神領高之内、草高ニ而四石付置下居社守護爲致申候。緣者之事故百姓と致指置候も氣之毒に而、社家ニ取立下居之祠官と致候。其後、右四石下居社に上より御寄附之由謀書等持、下居社は彼先祖開起ノ由不法之事申聞候。よつて御訴申上祠官職度々召放、又家督斷絶之事も御坐候。

○寛政八年

系圖由緒書上被仰付候砌茂御苦柄相成候。其節寺社方取次役衆之中分、尙又亡父飛彈、同役大友大藏之介訴訟より本形祠官職申付、四石之内二石引上相殘二石之事故、新規立替等之節某名目に而願申立罷有候。數馬事祠官と申名目而已御座候。

御宮 前殿 二間  
三間 板葺 社地 四間  
六間

山四方下り五十間宛、普請之節御材木拜領。

○出羽國平賀郡勝軍山

### ○摩利支天緣起

○夫神とは天地の神道にして、日月夜白を不違四時不忒、其時は是神道也。上古の聖人、以神道教を天下に設く。鬼神の功用一貫通達する故に人事離れて無天道、天道の外に人事なし。人能天理の公を守り萬法を明に見て、就其事不曲、其事六根清淨なる則、一念未生の本來に皈する則、萬法張一の元初に皈す。是則一氣未分の元神なるか故に、天地の神も納受して利生方便の光を顯給、一念纔に亂則萬法ともに晦して、一氣未分の神立隠ましめて己身則大魔の棟梁となりて、外魔幽便を得へし。故劫初より以來は、人を得て盛に人を失て衰る事不遑勝計。抑モ勝軍山嶺雲寺衛弓院摩利支尊天の開起を奉尋に、地神五代の御末神武天皇十二代の帝景行天皇と申奉るは、御長人に勝れ御力得拔山、敢他備り御智恵甚深、威四夷萬邦を撫育す。故日域跨明君の化、萬民鎖事を忘たり。雖然皇帝猶遠鄙之安危を疑い、賢才の臣諸州に遣し見せしめ給。武内宿禰其第一撰れ、東山、北陸の嚴命を含て察之。到羽陽平賀郡にて奇峯突兀として高聳、其嶺頭に有雲氣。宿禰是を見まく欲して駿馬に驅て洞口に入、或攝衣踞虎豹登虬龍、或履巉岩羊腸を樹攀る處に、童子二人石上に立て忿怒して曰、汝不知哉、是則大聖摩



利々尊天の所居也。何以不淨の身可到此處哉云々。宿禰解衣冠入瀑布、身を清着、甲冑、童子怡然而去畢。宿禰坂を登て伴の嶺を仰き見るに、雲中頻に光を放故此山上を御光が嶽と名付。宿禰甲を脱て拜之、其所を名付て號<sub>二</sub>甲か臺<sub>一</sub>。又遙深谷入に、瀧水蕩々と落て炎雲天に滿て、從其中大聖不動明王有出現て告曰、吾二童子遣して脱外清淨をなさしむ。爰にて内清淨をなさすんは爭尊天を拜せんや。宿禰瀧水に口を雪き洗手、以稜令成四拾八度之禮拜、令誦三洛刃。尊天忽童子と現し石上に立て曰、善哉宿禰、吾未得如斯人徒に送星霜、汝此山を開て衆生に縁を結はん事をこふと云々。宿禰感心して拱手奉拜之、今の影向石是也。其より山上にいたりて尊天現黑雲中、尊像柔和にして秋月の圓なるかここく、三面六臂金猪の背上に立て瑞光八方に輝き、諸の眷屬異なる異形にして左右前後を圍遶し奉る。宿禰弓を掛松枝て結秘印誦秘明、今の弓掛松是也。尊天宿禰に告て曰、摩利支尊天とは本地日天子十一面之垂跡にして、常飛菩薩東方日月星宿前破惡業惡法、拂一切衆生之七難、即授七福。吾に有十種大願故又有十種之名號。信我輩は必可授福壽故號福壽天、必可愛敬故號衆人愛敬、必可得神通自在故號神力自在天、必可遁矢難刀杖難故號矢難告除女、必可除疾病故號無病延命德天、必可到後生善所故號後生善修天、必可得大智惠故智自在天、爲度衆生普照四天下、無不到處故號日天子、威勢普照四天下得光故號月天子。帝釋、修羅之罰誨の時於摩守梵宮兵杖を用る故、末世衆生信吾輩軍陣刀、盜賊、失道横難、毒藥、讒言、惡人、猛獸、飢饉、惡病、水火難、即時に悉除、日輪大聖摩利支尊天と號し、三千大千世界の惡神、八大天狗、

金剛童子、九萬八千の軍神、二千八百の軍天悉皆吾眷屬也。常に正直勇猛の頭に宿て、件之眷屬をして令守護云々。託終て後黒雲一天に覆ひ飛龍風を起し、雷鳴地を響す。宿禰銘肝膽、飯洛の後經奏聞て、景行三十七年丁未六月祠を立て尊天を勸請せしむ。仁王十五代神功皇后元年、欲責三韓先棟梁、臣武内宿禰令詣此山、勝負の吉凶を祈らしむるに寶殿震動して託宣曰、吾皇帝の軍上に翔て以無量之軍神忽異國の凶族を亡、勝軍疑有へからずと云々、是故號勝軍山。五畿七道の勇士傾首、六十餘州之人民步運。宿禰景行十六年丙戌誕生にして六朝の天子につかへ、武威三國を輝く三百餘歳の壽算を保、仁德天皇七十八年□刀に薨逝なり。武内大明神是なり。同御宇五十九年、武内の子木兔宿禰修覆加、用明天皇二年秦河勝奉威聖德太子に守屋大臣を亡し、依立願造營美を盡し祭禮古かこし。威は必衰の理まぬかれかたきによりて、堂社傾破遠鄙の奏聞心に任せず、神主等含鬱訴。折節金峯藏王權現平賀郡保呂羽山に飛來し給ひて、天平寶字元年丁酉開山の序を以、神護慶雲元年丁未紀古佐美詔を受て營之、其後冷泉院御宇永承年中安部賴時、子厨川次郎貞任、鳥海三郎宗任背勅命、奥州羽州の間軍立して、數萬の軍士を催し朝家を傾奉らんと欲るによりて、源朝臣賴義嫡子八幡太郎義家を具足して將軍の號を給り、謀を帷幕の内に廻し雖競爭、羽州仙北舉の里にて官軍却而凶徒の爲に敗北して、當子の郎等藤原景通、大宅光任、清原貞廣、藤原範季、同則明主從七騎漸引舉勝軍山甲ヶ臺に屯し給ふ。其所をあげ村と號する事其故を以てなり。其後源齊賴等を以國中の兵を召といへとも、貞任か威勢に恐れて一人も不參、將軍父子尊天

の寶前に於て、無二の丹精を抽て勝軍の祈禱をなさしめ給ふに、寶殿大に鳴動して鐺の聲更に止ことなし。未結願詞不吐に、出羽國仙北の住人清原武則一萬の兵を卒し來て幕下に屬し、其後軍士不招に雲の如くに集り、不召して霞のこゝくに群り、小松、磐井川、衣川、烏海、厨川處々の軍に勝給ふ。貞任か一族悉討亡し名を天下に舉、威勢一天に振て賴義は正四位下伊豫守、義家は從五位下出羽守任せらる。因茲治暦三年丁未再營、美を盡し奇羅天に輝けり。一年九郎冠者義經奥州秀衡かもとにおはせしとき、賴朝の義兵を聞て既に發向せんと欲し、勝軍山參籠有て軍の勝利を祈給ふ。異鳩群飛奇瑞一にあらす、喜悅の眉を開て禮拜の折節、御扇を取り忘れ神前に殘し給ふ。時の別當勝成、今度の軍に御利運にて名をあけ給ふ、後二度奥州御下向有へき事を知れり。御扇子當山に残りて今に有。其後遙に修覆時を失して伊達入道營之。其より以來、仙北住人小野寺遠江守藤原道貞より代々修理を加へ、天文十年辛丑八月大風の爲に堂社こゝく轉倒して、郷民かすかの堂を營み祭禮なきがこゝくにて、慶長年中にはむなしく礎石を殘し、本尊をは保呂羽山本宮の屋上に安置せしとなり。

○白山社

宮七尺四面葺葺

社地四間

保呂羽山ノ麓ニ在り

神主 守屋

堂守 七郎兵衛

○天神宮

宮一間四面葺葺

社地六間

神主 守屋

堂守 助之丞

○熊野社

宮二間四面葺葺

社地十二間

神主 守屋

堂守 作兵衛

右末社、手許普請之節御材木拜領、尤私擔社御座候。

○保呂羽山神領高御指紙寫

太ひら野長坂下之内新ひらきの事相心得候。但今まで作り來候田畠、居屋敷などにかまひ候はぬ様可仕候。休之儀仙北中なみたるへきもの也。

慶長十六年

二月二日

澁江内膳判。

仙北八澤木之内上八澤木、同熊野堂

右兩所之野谷地新開之事相心得候。本田の障ニ成候は、可相止候。田畑に不成以前銘々かり付候野谷地のよし、かや被押問敷候。地形様子より鑑先次第たるへし。以上。

寛永拾四年

二月廿五日

須田主膳  
梅津外記  
居判 居判

保呂羽山別當 伊豆殿 參。

仙北八澤木之内太ひら野、長坂之内

右之ニヶ所新開之儀心得候。開次第急度披露可仕候。少も本田さわりなかり候は、無用に候。以上。

元和四年

二月三日

向 右 近



八澤 木別當。

○御社領御青印寫

一百五拾石 六ッ成

保呂羽山別當  
守屋丹後守

内貳拾七石貳斗

神領

八澤木之内

同六拾五石八斗七升八合

開

同村之内

同四拾石八斗五升二合

同

外大友村之内

同拾六石七斗

同

角間川村之内

延寶六年二月三日 御青印。

一當高拾貳石五斗

守屋肇

御嶽、高岳兩社御神領 御藏出

一五人御扶持

同人

社人大頭御役料。

掠職之事

一平鹿郡 八澤木村 上溝村 板井田村 袴形村 松田新田村

一仙北郡 外小友村

都合六ヶ村代々上下之掠職御證文所持仕候。

一 平鹿郡八澤木之内中房、木根坂、上溝村之内蛭川。

右三ヶ所、今之大友氏先祖私門前に罷在候砌吳置候由申傳候。根本舊本たるの私家之事故、八澤木一村は無殘私掠處之證文拜領罷有候。

三國社<sup>江</sup>御代參并御初尾御遷宮料先年々左之通被相渡候

一 享保六丑年二月、三國社<sup>江</sup>祈年御祈禱御發駕<sup>ニ</sup>付御旅行御安全之祈念初而被仰付勤行仕候節は、同年<sup>ハ</sup>明和二酉年<sup>まで</sup>一社<sup>江</sup>白銀百五拾匁ツ、都合四百六拾五匁。同三戌年より天明午年<sup>まで</sup>一社<sup>江</sup>七拾匁ツ、都合貳百拾匁。翌末年より一社<sup>江</sup>三拾五匁ツ、百五拾匁、段々此節迄<sup>ニ</sup>相減候。

寛政元酉年天樹院様御入部<sup>ニ</sup>付御旅行御安全并祈年御祈禱勤行仕候<sup>ニ</sup>付、往古之通一社<sup>江</sup>銀三枚宛都合九枚<sup>江</sup>御割増被加置、四百六拾五匁御奉納被成下度奉願上候處、一社<sup>江</sup>銀壹枚<sup>江</sup>三割半之御割増被加置、都合百七拾四匁<sup>江</sup>壹分四厘被相渡候。其節<sup>ハ</sup>引繼可被相渡候得共、御指支之事故明年<sup>ハ</sup>百五匁宛當分可被相渡大塚九郎兵衛殿被仰渡候。

一 例年春社日祈年、并御上下御旅行御安全之御祈禱執行仕御守札を献上仕候。

一 三國社秋社日新嘗御神事は、往古より寛政十年迄自分物入<sup>ニ</sup>而勤行仕候處、翌末年九月中より新嘗御祈禱料として白銀壹枚宛被渡置候事<sup>ニ</sup>相成候。

一 御代參被立置并御祈禱被仰付候節は、一社<sup>江</sup>銀三枚宛<sup>ニ</sup>御座候所、安永六酉年小野岡四郎殿御代參之節<sup>ハ</sup>銀貳枚宛被相減候。

一 三國社御修覆被成置候節、一社分銀五枚宛之御仕切<sup>ヲ</sup>以略御遷宮御祈禱被仰付候所、寶曆六子年<sup>ハ</sup>三枚宛<sup>ニ</sup>相減候。小破御繕等御清料臨時種々之御例有之候。

一 三國社<sup>江</sup>平士<sup>ヲ</sup>以御代參被立置候者、文化二丑年旱魃<sup>ニ</sup>付長瀬左司馬<sup>江</sup>被仰付候、後平士<sup>ニ</sup>相成候。其以前は御定式御相手番衆へ被仰付被指遣候。

一 三國社御本社、拜殿共<sup>ニ</sup>御葺替之時は、往古は上下御遷宮料銀五枚、寶曆六子年御嶽御葺替之時より略御遷宮と申て三枚宛<sup>ニ</sup>居置候。固より御指支之時分は被相渡候事も有之候、其節は兩家<sup>ニ</sup>而不足分相償勤行候事も有候。且御葺替前簾御假殿於上御しつらひ被成置候得共、安永四年保呂羽山、高岳山銀貳枚宛之御清料、御嶽山は銀壹枚。

一 御入部<sup>ニ</sup>付三國社<sup>江</sup>御代參、御吉凶、雨乞、雨晴、五穀豐饒臨時御代參被立置、猶御祈禱被仰付候時は、御初尾一社<sup>江</sup>銀三枚宛之所、御八山支之時<sup>ハ</sup>二枚宛被減置候。且寶曆三昆虫加持御祈禱被仰付候砌は、献上之外御領中村々被下置候御守札、御初尾共<sup>ニ</sup>銀拾枚。天明四辰六月豐饒御祈禱被仰付候節、献上之外村々<sup>江</sup>被下置候分御初尾共<sup>ニ</sup>九枚。文化七年九月男鹿村地震<sup>ニ</sup>付、御祈禱被仰付候時は銀八枚。猶御入部<sup>ニ</sup>付御代參御初穂は格別臨時御奉納之事。

一 彌勒堂「三國社」御代參之時往古に銀貳枚宛御奉納之處、安永年中石塚源一郎殿御代參に被指遣候時御同人「大友家」方障を申上、其節に御奉納無之候。其後往古之通被成下度段再々願上候得共、于今不復置候。

一 御同社御葺替に付略御遷宮料銀二枚、御假殿御しつらひ料錢三貫文、三寸釘貳拾八本、大板付釘百五十本、御手入之時御清料銀拾五匁、右之分は被下置候。

右件々之通系譜拔書並古書寫取書上仕候。以上。

文政六年未十月

三國社神主

社人大頭 守屋 肇。

### ○外に一葉古記録

○年來之儀、申<sup>ニ</sup>緒守太夫<sup>ト</sup>申候禰宜之子孫<sup>ニ</sup>候間守太夫と申候。彼守太夫此山<sup>ヲ</sup>見立申て彼のつこ<sup>ヲ</sup>作候。この禰宜とくに顯<sup>シ</sup>候て權現<sup>ノ</sup>前立<sup>ニ</sup>御座候。守屋と申は、本來權現<sup>ノ</sup>守にて候間守屋と申候。本地此山に一人<sup>ノ</sup>禰宜<sup>ニ</sup>候間、守屋<sup>ノ</sup>子孫八歳之時親に<sup>ハ</sup>なれて湯釜御祈念之儀一切之儀式無之、一澤<sup>ハ</sup>可頼禰宜無之て臼井之大明神之禰宜<sup>ヲ</sup>師<sup>ニ</sup>頼申候時、大明神之禰宜申様は、廿年之間彼山<sup>ヲ</sup>かせと申<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>、廿年之年紀<sup>ヲ</sup>致かし申候。廿年過候而山<sup>ノ</sup>儀返し申せと申せは、此權現をぬすみ取、油利之内はふ内澤三年、



間立申候。三年と申時仙北西根之郷小友之内なる嶋と申山に立可申と、大明神之禰宜、一澤の者共申分、山々□と相なるへきと申てあかひに致兩禰宜と定置、かすみをもわけ申候。かすみ分の事、仙北と八澤木村、板井澤村、角間川村、東は金澤々下、於隣郡にハ秋田、南部、津輕大明神之禰宜、最前と守屋に屋敷に居申候處に、其刻木根坂に新屋敷取移申に付て木根坂之禰宜と申候。木根坂之かすみ之事、仙北にテ油河々上、東横手々上、於隣郡者最上、伊達、關東に御願かすみ、如此わかり候へとも、一切山之儀式は守屋に納り申候。正月三日之御祈念始、正月七日中之御佛供、七日之牛王オシ、八口之しゆしやう宮出之卷敷、三月三日之的、四月八日、五月五日、六月十五日、八月十五日之祭始、本宮にて一切之儀式守屋にて納候者也。

守屋之由緒書

壹通

右の一葉表包しかり。

國本善治校字

昭和七年七月二十五日印刷  
昭和七年七月三十一日發行

秋田叢書第七卷

不許複製（非賣品）

編輯兼  
發行人

秋田叢書刊行會

代表者 深澤多市

印刷者

甲田藤太郎

東京市牛込區市谷臺町二十二番地

印刷所

成武堂印刷所

東京市牛込區市谷臺町二十二番地



發行所

秋田縣横手町

秋田叢書刊行會

代表者 深澤多市

振替仙臺八、二五二番



秋田叢書  
刊行會  
會  
報

昭和七年七月

綱領三則

一 縣内各地に於て郷土史編纂に必要なものを先とし漸次他の稀覯の珍籍に及ぶものとす。  
一 校訂を嚴にするため同種の異本を極力探求して之を參照し其の正確を期す。  
一 一般商品に非ず、從て價格も至廉を期し實費を以て同好の方々にのみ頒つの方法を採れり。

秋田叢書刊行會役員

編輯顧問

文學博士

菅江眞澄集監修

編輯及校訂

本會代表者  
印刷監督

喜田貞吉 石井忠利 柳田國男 沼田平治 細谷順造 大澤多市 深澤多市 國本善治

秋田叢書  
第二輯豫定書目

◇第七卷 (第三回配本濟)

秋田治亂記 鷹の爪 長野先生夜話集  
雪之出羽路(平鹿郡下及追加)

◇第八卷 (第一回配本濟)

三十三觀音巡禮記 鹿角緣記 月出羽道(仙北郡二)

◇第九卷 (第二回配本濟)

秋田昔物語 秋田千年瓦 月出羽道(仙北郡二)

◇第十卷 (次回十一月配本)

月出羽道(仙北郡三) 勝地臨毫

花の出羽路 別本花の出羽路

◇第十一卷

秋田藩田法叢書

△訂正御格式△俗田法論辨△田法歩尺精辨△田法四六精術  
△田法欠借精術△檢地秘傳集△御金藏御定法書△黒印御定  
書△六郡生米考△黒澤道家覺書附斗代名義考△秋田湯東野  
田村御檢地野帳△門間氏古文書△指上高定△指上高條例

◇第十二卷

羽陰史略後篇 秋藩紀年 以上

大體右の如く假りに定むるも或は多少の異動あるやも計り難い。特に御諒恕を望む。





○隨筆雜著の部

椎の葉。筆の桐  
風の塵泥。道の夏くさ

栗盛教育團藏

新古遊品類之圖

同

萬元紀行。かたい袋

同

風のおちり。百日圖

同

布傳能麻遊萬里(五)

同

國書解題(原名難抄)

同

久寶田の落穂

同

鉢位山神社縁起

同

于支六方柱考

同

凡國風土器

同

想華及消息集

同

△尙ほ所在不明の書目を左に掲げて置く。會員各位の御助力によりて本集に編輯するを得ば此上ない幸福である。御發見の場合は何卒御一報を願ひます。

▲千枝の櫻(新城邊)▲杜の下蔭(十二所邊)▲櫻簀(安彦山、十二所)▲花の家土産▲巡る山川(横手山内)▲世々の古塚(古碑)▲瀧の松蔭(十狐村の松、木葉石)▲麻裳の浦風(土崎港)▲花の塵塚(歌書)▲鄙の文車(歌集)▲手酬草(母の三年忌の歌)▲駒形日記(仙臺邊)▲小田の山本(金華山)▲月の松島(松島)▲牧の下草(南部)▲小引の石(同)▲牧の夏草(同)▲蝦夷の窟(松前)▲千島の名残(同)▲清水記(能代清水家の故事)▲比内物語(北秋)▲六郡考▲山分衣▲久保田のおしれ▲水の面影(寺内)▲浦の梅園▲花の眞坂路▲小町の寒泉(山本郡下岩川)▲霧の高松(高松村)▲あさまのけふり▲雄湖のつこ▲筆の山口▲椎の葉日記▲鶴考(陸奥善知鳥神社)▲浪岡物語(陸奥浪岡)▲廻是迴落葉(廿五冊さある)▲あさ日川(旭川村附近)以上。

○會費整理につき謹告

規定の會費が豫定通り集まらないので經營に困難して居ります。何卒御同情を願ひます。第一期、第二期、別集と區分して集金郵便で請求して居りますから御含み願ひます。○集金郵便を待たずに御送金御願ひ申します。

弔 意

其 後 故 物  
の 會 員

南秋田郡上新城村 佐藤三左衛門氏  
仙北郡高梨村 後藤三郎氏  
平鹿郡川西村 太田甲午氏  
千田市 樋口九藏氏  
秋田縣 榑松周氏  
同市 熊谷東治氏  
仙北郡六郷町 菊地三郎氏  
由利郡上川大内村 氏

菅江眞澄集既刊目録

第一 鹿の鈴風 ○十曲湖 ○恩荷奴金風 ○恩荷能春風 ○小  
第二 阿仁酒澤水 ○雪能龍田寝 ○錦木 ○辭夏岐野莽望  
第三 美香弊乃雪乃道與雪能龍田寝 ○秀酒企乃溫壽  
霞むつきはし乃道與雪能龍田寝 ○宇良乃山昔物語  
比遠能牟良君 ○答賀良能多奇 ○夷舍奴安裝婢 ○花  
のしぬめ ○梅の花湯の記 ○雪のやま踰え ○花  
第四 記の形 ○濃田良寝 ○小野のふるさと ○高松日  
下雪能駒 ○比良加の美多可 ○月過遠呂智泥  
いほの春 ○寧智泥 ○比良加の美多可 ○月過遠呂智泥  
下雪能駒 ○比良加の美多可 ○月過遠呂智泥  
いほの春 ○寧智泥 ○比良加の美多可 ○月過遠呂智泥



# 秋田叢書第一輯既刊書目

- ◆第一卷 △羽陰史略前篇△柞山峯の嵐
- ◆第二卷 △六郡郡邑記△絹飾△由利十二頭記△蘆名記
- ◆第三卷 △六郡祭事記△雪の出羽路(雄勝郡)△鹿角郡根元記△古四王神社考
- ◆第四卷 △戊辰秋田藩戰記△本莊隊出兵聞見誌△龜田藩戊辰戰記△戊辰矢島戰記△鹿角口戰爭實記△仁賀保領出兵實效錄
- ◆第五卷 △秋田紀麗△淺利軍記△代呂見聞錄△雪出羽道(平鹿郡上)
- ◆第六卷 △秋田風俗問答△六野燭談△鳥麓奇談△由伎能伊傳波遲(平鹿郡中)

## 會員各位に御願

▲本集第七卷も豫告より遅れたのは全く相濟まない事であるが、畢竟會費が集らない事に因るもので、此點乞御宥恕。

▲會費は本書受領の上は直ちに振替にて御送金を願ひたい。御送金なき方には止むを得ず**集金郵便**にて會費取立をなします。若し集金拒絶になれば、會費に加算して此手數料も頂く事になりますからお含み願ひます。

▲會費御送金のかきは振替用紙の裏面に第何卷分會費と必ず御明記を願ひます。

▲會費御送付のとき受領證或は請求書を要するとか、其の他返信を要するものは返信料を添付せられたい。

▲本叢書第一卷から第六卷までを第一期會員とし七卷より十二卷までを第二期會員とし、御入會の方々は其期間

退會せずに願ひたい。又別集丈けの御入會も差支ない。

▲本叢書は以上の如く會員組織の頒布本であるから分冊の需求には遺憾ながら應じ兼ねます。

▲本會への通信及問合せは凡て横手町の本會宛願ひます

▲會員の住所變更は即時御一報願ひます。

## 定 規

●第一輯	●第二輯	●刊行	●頒布	●會費	●別集
全六冊配本濟。	全六冊。分冊の需には應じない。	菊版天色總布製 每卷五百數十頁	第一回配本 昭和六年十月濟	第一回配本 昭和七年七月濟	第一回配本 昭和七年七月濟
		第二回配本 昭和七年七月濟	第三回配本 昭和七年七月濟	第二回配本 昭和六年十二月濟	第二回配本 昭和六年十二月濟
		第四回配本 同年十一月の豫定	豫約申込者に限る(但申込金不要)	第三回配本 昭和七年三月濟	第三回配本 昭和七年三月濟
			一冊參圓五拾錢(送料實費を申受)	第四回配本 昭和九年九月の豫定	第四回配本 昭和九年九月の豫定
				第五回配本	第五回配本

秋田縣横手町

發行及 秋田叢書刊行會

代表者 深澤多市

振替仙臺八二二番

(東京事務所) 東京・芝公園十四ノ九國本善治方



UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

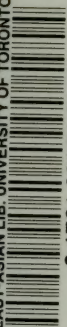
WILLIAM H. DONNER  
COLLECTION

*purchased from  
a gift by*

THE DONNER CANADIAN  
FOUNDATION



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03074 9048